カルチャーショックD×D

赤城九朗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

好きなことを、好きなだけしたい。
楽しいことだけを、楽しみたい。
気に入らない奴は殺したい。
気に入った女はものにしたい。
誰の都合も考えず、自分のやりたいようにやりたい。
義務なんて馬鹿馬鹿しい。貢献なんて知ったことではない。
望むすべてを手に入れて、欲するものをうばっていたい。

これは少年の、青春と呼ぶには余りにも度を超えた所業の物語。
この物語は以下の拙作と設定を共有しております。
モンスターズＤ×Ｄ　Ｒ
ブレイブハートＤ×Ｄ
ドロップアウトＤ×Ｄ
ソフトクリームＤ×Ｄ
カオスラヴァーズＤ×Ｄ

目次

迷宮のプリズナー 1 …… 1
迷宮のプリズナー 2 …… 6
迷宮のプリズナー 3 …… 13
迷宮のプリズナー 4 …… 21
迷宮のプリズナー 5 …… 29
迷宮のプリズナー 6 …… 40
迷宮のプリズナー 7 …… 49
明日もし君が壊れても 1 …… 58
明日もし君が壊れても 2 …… 65
明日もし君が壊れても 3 …… 74
明日もし君が壊れても 4 …… 84
紅蓮の弓矢 1 …… 91
紅蓮の弓矢 2 …… 98
紅蓮の弓矢 3 …… 108
紅蓮の弓矢 4 …… 115
紅蓮の弓矢 5 …… 123
DRAGON 1 …… 132
DRAGON 2 …… 142
DRAGON 3 …… 151
DRAGON 4 …… 161
DRAGON 5 …… 172
夢のつづき …… 184
あとがきと、設定 …… 194
乾いた叫び …… 198

コネクト　1　213
コネクト　2　224
コネクト　3　239
もう一度TENDERNESS　1　248
もう一度TENDERNESS　2　258
もう一度TENDERNESS　3　269
Reckless fire　1　281
Reckless fire　2　292
Reckless fire　3　307
GONG　319
WILD CHALLENGER　334
ハートを磨くつきゃない　345
幸せ　356
愛しさとせつなさと心強さと　374
ムーンライト伝説　389
謎　1　400
謎　2　413
謎　3　425
謎　4　436
Genesis of Aquarion　1　447
Genesis of Aquarion　2　462
Genesis of Aquarion　3　476
Genesis of Aquarion　4　489
Genesis of Aquarion　5　501
輝きは君の中に　1　516

輝きは君の中に　2 …… 528
輝きは君の中に　3 …… 541
輝きは君の中に　4 …… 554
輝きは君の中に　5 …… 565
BLOODY STREAM …… 576
ジョジョ ～その血の運命～ …… 587
STAND PROUD 1 …… 600
STAND PROUD 2 …… 616
ジョジョ その血の記憶～end of THE WORLD～ 633
君の知らない物語　1 …… 646
君の知らない物語　2 …… 659
君の知らない物語　3 …… 671
君の知らない物語　4 …… 686
君の知らない物語　5 …… 699
勇者王誕生！―完璧絶叫ヴァージョン―　1 …… 711
勇者王誕生！―完璧絶叫ヴァージョン―　2 …… 723
勇者王誕生！―完璧絶叫ヴァージョン―　3 …… 734
勇者王誕生！―完璧絶叫ヴァージョン―　4 …… 747
勇者王誕生！―完璧絶叫ヴァージョン―　5 …… 759
Glorious Break Clattanoia …… 769
Glorious Break タイプ：ワイルド …… 782
Glorious Break 撃槍・ガングニール …… 797
Glorious Break 烈槍・ガングニール …… 809
Glorious Break 獄鎌・イガリマ …… 822

迷宮のプリズナー　1

「ふむ、なかなか興味深いデータだな」
「ですね、これで神滅具の研究は更に進みますよ。やはり現物があると違いますね」

肉食獣と草食獣。語るまでもなく、彼等は食物連鎖の一部であり、直接的に繋がっている。
草食獣は肉食獣に捕食されないように進化し、肉食獣は彼等を捕食するために進化した。
基本的に互いの利害の不一致から、彼等は常に争っている。
だが別に、どちらか一方が悪だとか、善だとか、そういうことは一切ない。
草食獣には草食獣の、肉食獣には肉食獣の正当性が存在し、生存という最重要な点で相容れることはありえない。

「ふふふ……」
「機嫌がよいですが、なにかあったのですか？」
「娘が妊娠してね。数百年待ったよ、孫が産まれるんだ」
「それは、おめでとうございます。やはり、跡継ぎということで、男の子がいいですね」
「いやいや、健康であれば、魔力が扱えればそれでかまわないよ」

そもそも善も悪も、人間という種族の生み出した言葉であり、おそらく他の生命体には理解できないだろう。
飢えや渇き、生や死、繁栄や衰退に比べて、なんとも抽象的で曖昧だ。
動物も植物も喋るという機能を持たないが、持っていたとしても善悪という概念を持たない以上、その単語が発生することはないだろう。

「私も、今度結婚するんです。親が持ってきてくれた縁談で、とても素晴らしい方でした」
「そうかね、それは素晴らしい。結婚式には呼んでくれたまえよ」
「みなさん、プライベートが明るくて羨ましい。私は駄目ですね、息子は日本のアニメに夢中でして……娯楽ならば、上級悪魔らしくもう少し高尚なものを好きになってくれればいいのですが」
「悪魔が人間に娯楽を提供されるなど、本末転倒です。数百年前まではありえなかったことだ」

社会規範、というものがある。
それは社会性動物のなかにも存在する「組織」を維持するための掟。
窃盗、暴行、殺人。どれも、言葉が通じる社会性の動物ならば理解できるであろう。
群の仲間から餌を奪い合えば、結果的に群全体が損をする。
群の仲間で度を超えた暴力が横行すれば、結果的に群全体が損をする。
だが、それとは又別に、倫理的なものも存在する。
他の種族どころか、同じ人間であっても笑ってしまうような、どうでもいいルールさえ存在している。

「魔王様たちは、聞けば堕天使や天界と和平の道を模索していらっしゃるとか」
「噂ですよね？」
「ああ、単なる噂だ。だが、信憑性があるのも事実だ」
「悪魔という種の弱体化。それによるものなのでしょうが……」
「弱気になっているのだ。誰も彼もが、未来に希望を抱けずにいる」

例えば、海産物を生け作りで提供するという立派な料理を、動物虐待とすることもある。
家畜を『しめる』際、正しい手順で苦しまず、血を流さずに殺す手順も存在する。

肉料理全般が野蛮で、野菜ばかり食べるという主義者も存在する。
逆に、人間を食べるという風習が現存し、それが原因で病気になる、ということもある。

「政治にかんしてもそうだが、我々研究者は、研究という形で冥界に貢献し、未来を造らなければならない」
「上級悪魔として、当然ですね」
「ああ、我等は生まれ来る子供のために、我々に奉仕している中級悪魔や下級悪魔のために、そして魔王様方のためにも、優れた研究成果を出さなければならないのだ」
「失敗は許されませんね」

増えすぎた野生動物を間引くとか。
ペットに服を着せるとか、着せないとか。
家畜を運動させるとか、ストレスを与えないようにするとか。
全く異なる生き物と、どう向き合うのか。それも、知的動物にとっては文化の一端であろう。
そして、悲しいことだが彼我の差は、論理感と非常に強く結びついている。
寿命が短く、醜いと思われている虫を子供が殺すのは良くあることであり、とがめられることが無いように。

「そういえば、新しい神滅具が見つかったそうだ」
「本当ですか？　それは素晴らしい」
「これで、天界にも堕天使にも大きな顔をさせずにすみますね」
「ああ。講和を結ぶにしても、有利な条件で結べるだろう」

１００年も生きないような人間の少女を、１万年生きる悪魔達が利用するのも。
極めて有用な実験のために、彼女の体を拘束して切り裂くのも。
その過程で、彼女の生まれた町を滅ぼし、家族や友人が死んだとし

ても。
　それは、彼等にとってはちっとも悪辣ではなく、むしろ善良なことだった。

「魔獣創造と、赤龍帝の籠手だそうだ」

　彼等は物語のための都合のいい悪党ではない。彼等は極めて社会的に高い地位を持ち、家族がいて、政治に不満があって、職場の人間関係に気を使う、普通の貴族達だった。
　実験動物を性的に虐待するような、あるいは弱者を蹂躙することに興奮するような、或いは知的好奇心を満たすためならばあらゆる行為を正当化するような、そんな『ワルモノ』ではなかった。

　それでも、『彼女』にとっては……

　殺してやる
実験動物として扱われている彼女にとっては。

　殺してやる
神滅具という、破格の武器のおまけあつかいの彼女にとっては。

　殺してやる
人間を人間たらしめている全てを奪われた彼女にとっては。

　殺してやる
生まれ育った故郷という過去を。

　殺してやる
今この場での自由という現在を、

　殺してやる

平凡でも明るい希望という未来を。

殺してやる

全部台無しにされて、心も体も奪われた彼女にとっては。悪魔以外の、何者でもないだろう。

復讐するは我にあり。彼女の憤怒はあまりにも正当すぎた。

迷宮のプリズナー　2

冥界悪魔領に存在する、違法神器研究所。

彼等の行いは、四大魔王が定めた法律には著しく反するが、現場で作業している彼等はそれでも悪魔社会全体のための研究と信じて疑っていなかった。

それは、ある意味では正しいことであった。医学の発展に人体実験が欠かせないように、さらにその前に動物実験を行う必要があり、それらは尊い犠牲でしかない。

人体実験はおろか動物実験さえもしていない薬品を市販する方が、論理的に大いに間違っているだろう。

その理屈で言えば、彼等の行いは後世では意味があったのかもしれない。

神器という危険物を、簡単に運用できるようになったり、或いは堕天使のように模倣することができるようになったかもしれない。

それらが泡沫の如く消されるのだとすれば、学問全体の否定であるのかもしれない。

だとしても、当人達が意識していないにしても、そんな人間の尊厳を冒涜する実験を破棄することは、決して倫理的に責められることではあるまい。

それは、襲撃と呼ぶには余りにも穏やかで、しかし余りにも一方的な蹂躙だった。

研究所の職員は、一人一人がうつろな表情で一列に並べられ、棒立ちしていた。

その眼には、勾玉が浮かんでいる。

「な、言っただろレオナルド。こっちから探すよりも向こうに見つけてもらったほうが早いって」

「そうですね、見事な手際だと思います」

ひゃっはっは、と愉快そうに笑う声が、仮面に隠された口から漏れ

た。

金髪の幼い少年と、仮面をかぶって顔を完全に隠した若い男。二人はそろって、研究所の職員達の前に立っていた。

「悪魔の中でも後ろ暗い連中は、こういうことをしているからな。つまりだ、悪魔に情報を流せば見つけてくれるって寸法だ」

ひたすら上機嫌に、仮面の少年は自分の策略を自慢していた。当人に高い実力が備わっていなければ、成立しない危うい賭け。

だが、若くして既に神滅具の力を充分に扱える少年たちは、まさに万全を期して自分達を捕らえに来た悪魔達を迎え撃った。

そして、仮面の男には神滅具以外に特筆すべきものがあった。その、三つの眼である。

「さて、と……レオナルド。お前、レグルス持ってる奴も他の神器所持者連中も、とりあえず解放しな。どうせ暴れる気力もねーだろ」

「開放して、どうするんですか？」

この研究所に捉えられているであろう、神滅具の所持者。彼か彼女か知らないが、当人の他にも、多くの実験体がいることは確実だろう。彼等がどの程度の『有用な人体実験』を受けているのかは想像するだけでも恐ろしく、確認することさえためらわれる。

だが、まさか放置するわけにもいかない。とはいえ、嫌な役であることは確かだった。レオナルドと呼ばれた少年は、恨めしそうに仮面の男へ尋ねる。

なにやら楽しそうなことを始めようとしていることは、声色からして明らかだ。

「決まってんだろ、風呂に放り込んで洗って、メシ食わせるんだよ。可哀相な連中なんだ、優しくしてやれ」

「三つ目さんはなにをするんですか？」

「分かりきったこと聞くなよ、男は殺して、女は犯すんだよ」

およそ、悪魔という種を憎むに足るであろう蹂躙を受けたであろう彼等。その面々を解放して、自分は『お楽しむ』という算段は余りにも下種が過ぎる。

まるで、単に殺すための男と犯すための女を、殺す理由と犯す理由

が必要だったといわんばかりだ。
いや、性質の悪いことに、この男にはそんなお為ごまかしをしようという発想がまずない。
それこそ、好き勝手するための戦力を欲していた。それだけのことだろう。自分の『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』同様に。
「で、メシくわせてる最中暇だったら、日記とか履歴書とか探しとけ。後で読むから」
「いいですけど、なんでまた？」
仮面の男は既に上着を脱いでおり、これからズボンを脱ごうとしていた。
いきり立った一物が、すでに下着の上からでも確認できている。
だが、レオナルドの質問に、首をこれでもかと曲げて答える。
それには、目の前の悪魔達にさえ存在していない、飛びっきりの邪悪が確かにあった。嘲笑と、哄笑。それら決して前向きではない攻撃的な笑みが感じ取れる。
「レオナルド、お前娯楽作品では何が好きだ？　やっぱり高尚な演劇とかか？　まあ、そういうカネがたくさんいる奴に縁は無かったが、自分もそういうのが結構好きでね。特に、ストーリー性の高い奴が」
忘我のまま並んでいる女性職員の、その体を服の上からとはいえ無造作にもてあそぶ。彼女の皮膚をなでるだけではなく、肉をもみ、骨を確かめる。
まるで、新しいおもちゃを手に入れたかのように、仮面の男は下品な行為を継続している。その口調は明らかに興奮状態で、正気ではない。
「でさ、ストーリーの中で笑ったり泣いたりするキャラクター一人一人の、設定というかバックボーンが重厚な方が、より楽しめるだろう？　これから無抵抗に犯したり殺したりする連中が、どんな奴なのか知った方が面白いとは思わないか？」
「……思いませんよ」
「そりゃあつまらない話だ。レオナルド、他人に興味を持たないのは詰まんないぜ？　考えてもみろよ、ラノベの主人公がモブキャラだと

思って、単なる敵として処理していくキャラクターのなんと多いことか！　仕方が無いとか、敵だからだとか、助けたいやつがいるとかで、ネームドキャラクターに比べて適当に見せ場もなく、主人公や主人公の味方の新しい技の実験台になっている彼等。そんな連中一人一人を、こうやって直接的に知る機会があるんだ。無駄にするのは、限定版を買い逃すのと一緒でもったいないぜ？」

さながら、ロールプレイングゲームのレベル上げの如く、大量に消費される名も無き敵たち。一人一人の主義主張、過去や背景を一切顧みることなく、主人公やそのとりまきは始末していく。

うわー、とか。

ぎゃー、とか。

こんなはずでは?!　とか。

アクションゲームの、無限に湧き出るお邪魔キャラクターの如く、彼等は定型文のような台詞を断末魔として、読者にも視聴者にも登場人物にさえも、なんの印象を残すこともなく消えていく。

「例えば、この男。幻術を使う前に聞いたんだが、今度待望の孫が生まれるらしい。自分が主人公だったら、単に『この外道め！』とか言って適当にぶっ殺してそれでおしまいだっただろうぜ。主人公のタイプにもよるけどよ、掴まってた連中だけに感情移入して、自分が殺した連中に家族がいるとか考えもしないんだろうよ」

この男一人で、それなりの短編がかけそうである。年配の悪魔の娘が懐妊し、自分の血を継ぐ赤ん坊が生まれる。

そんな祖父になる悪魔を、主人公は特になにも思うことなく殺す。

殺した後でこの悪魔にも家族がいたなんて、など知る気もないし想像もしない。知らされたところで、思考を放棄するのが関の山だ。

そんなモブキャラのバックボーンは、主人公には必要ないといわんばかりに。

「娯楽作品なんですから、そんな細かいことを描写しないでしょう。誰が喜ぶんですか、そんなことで悩む話を」

「いやいや、そういう話もあるのさ。たった一人の命の価値を、命の軽い世界を舞台にして描いた作品がな。カッコイイナーとは思ったが、

まあ実践する気はないぜ。所詮は漫画の話だしよ」

子供がいないやつがいるかもしれないし、恋人がいない奴もいるだろう。だが、母親と父親は必ずいる。死別しているのかもしれないし、あるいはあまりよい親ではなかったのかもしれない。だが、どんなものにも家族は絶対にいる。

友人がいるのかもしれないし、職場の同僚だっているのかもしれない。無価値の人間など、そうそういない。

結局のところ、敵味方を問わずモブキャラクターの命が軽ければ、それは主人公の価値さえも軽くするだろう。

「ただずらーっと、殺したり犯したり集めたりした連中を数字で並べたってコレクションの価値がねーだろ。一人一人のバックボーンがあって、それでようやく意味が生まれるんだぜ。意味が無いもん集めてどーするんだ。説明書とか箱がついてないと、売るときとか保管するときに面倒だろ」

余りにも勝手が過ぎる自己中心的な発言だった。

悪魔から見れば多くの貴重物を研究している重要施設であり、人間から見れば人類の尊厳を蹂躙する非道な実験施設である。

そこを襲撃したというのに、それこそ単なるイベントをこなしアイテムを手に入れた程度の認識でしかない。

レオナルドは、もはや返事をしなかった。既にたのしみ始めた仮面の男に背を向けて、歩き出す。

当初は、自分を此処に連れてきた仮面の男に嫌悪していた。無理もない、この状況で憤るどころか戦利品を味見するばかりの非道に、少年の中の純粋な『人間性への信頼』が大いに揺らいでいる。

一体、なにをどうすればあんなに現実におきている物事を、作家が考えた架空の物語のように捉えることができるのだろうか。

ここは現実であり、虚構ではない。殴れば痛いし、血もでてしまう。そして、人間は簡単に死ぬ。

そんなことを、レオナルドは知ってしまっている。そして、そんな義憤も凄まじい勢いで風化していく。

レオナルドが眼にするのは仮面の男の行い『男は殺せ、女は犯せ』

が、まるで子供の悪戯に見えるような、無機質な無関心からくる徹底的な蹂躙だった。

風呂に入れて、メシを食わせろ。そういわれたことがかろうじて救いだった。レオナルドには、分からなかった。自分を見てガタガタと震える少女や、みっともなく泣き叫ぶ男性、無表情でこちらを見ている女性、彼等に自分が何をできるのか、想像さえできなかった。

ただ、自分の生み出した魔獣で職員用の大きい風呂へ運び、外傷が無いのを確認したうえで風呂に入れるだけでよかったのだから。

幸いにも、風呂は大きかった。おそらく、職員への福利厚生が行き届いていたのだろう。職員が上級悪魔ということで、施設はかなり整っていた。たった、それだけのことにさえ憤慨してしまう。

また、実験台となっていた神器所持者も、サンプルゆえに清潔で健康だった。いったいどのように栄養を補給させられ、肉体の衛生を保たれていたのか想像もできない。彼等の意志を完全に無視したものであったことは確かだろう。

ただ淡々と作業をこなすだけのレオナルドの胸中を、前向きさの欠片もない一つの想いが満たしていく。

それは、目当てだった『獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）』の所持者の、どれだけの治療を施しても社会に復帰できないであろう、人間の原形をとどめていない姿を見て、つい口に出しそうになってしまった。

それは、主人公のように助けにきたぞ、ではない。

もっと早く助けられなくてごめん、という謝罪でもない。

ああ、こうならなくてよかった。という安堵の感情だった。

だが、だれもレオナルドを責めることは出来まい。上級神滅具をもつ少年も、あるいはここにいたのかもしれないのだから。

主人公のライバルの、魔力を扱えない上級悪魔サイラオーグ・バアルの眷属になるはずだった、あるいはその設定の生贄になるはずだった所持者は、結果的に間に合った。

死んでいないという意味では、彼女は助けられたのだ。

迷宮のプリズナー　3

おそらく、きっと何処にでもある風景がそこに存在した。
世の中の誰かは、辛い目にあった人はその分他人に優しくできるという。確かにそうかもしれない。
レオナルドも、ついさっきまではそう思っていた。だが、彼女を見てそんな考えは吹き飛んだ。こうなったら、他人に優しくしようなんて絶対思えない。
彼女に非があるとか、そんなレベルの話ではない。此処まで人権を無視されて、人心を無視されて、人体をいじくられて、それでどうして他人に優しくなれる。
彼女が昔、雨の降る中子犬を見捨てられなかった優しい少女でも、蝶よ花よと愛でられていた幸せな少女でも、貧困層でも明るく振舞う健気な少女でも。
ここまでされて、正気を保てるわけが無い。以前と以後では、完全に別の人間になっているに違いない。
そうなって当然で、そうならない方が異常だ。彼女が異常なのではなく、この状況が異常なのだ。
こみ上げる吐き気。血の引いた顔。レオナルドは、極めて『衛生的』に保たれた『清潔』な部屋で、あろうことか嘔吐した。
朝食べたもの、昼食べたもの、胃液。それらがひっくり返って、口から噴出した。
逃げようとして、体を動かそうとする。それでも、彼の体は全く正常に動かず、この地獄から逃れることは出来なかった。遂に、意識が飛んで、彼の精神はどこかに消えた。
それを、仮面の男が見つけるまで数時間を要したが、自分の吐しゃ物にまみれている少年は、まったく意識を取り戻さなかった。

「よう、起きたかレオナルド」
「……三つ目さん」
そこには、運動を終えて一汗を流してきたであろう、半裸の仮面の

男がいた。
　レオナルドは職員の休憩所に運び込まれて、清潔な新品の、最高級のシャツに着替えていた。
「駄目じゃないか、実験室で戻すなんざ。洗脳済ませた職員の連中、血相を変えて掃除してたぜ」
　ひゃっはっは、と笑う仮面の男。彼は、アレを見たのだろうか。彼女の、その凄惨な光景を。
「あの、三つ目さん、あの人を見ましたか？」
「ん？　ああ、知ってるぜ。お前、あんなにグロいモンスター造れるのに、グロ耐性ないんだなぁ……そのあたりはギャップ萌だぜ」
　相変わらず、顔さえ見えないのに楽しそうだった。そうと分かるほどに、彼は相変わらず上機嫌だった。
　彼の精神は、一体どうなっているのか。レオナルドは嫌悪を覚えてしまう。
　アレをみても、こんなに陽気だなんて絶対に間違っている。
「……レオナルド。お前、アレを見て最初にどう思った？」
「……どうって、なんですか？」
「感想だよ。そういうのって大事だぜ、そう思わないか？」
　それは、ある意味では酷薄な質問だった。それは、世間一般の良識に半する者ではないが、正義には反する発想だった。
　レオナルドは、単なる少年であるレオナルドは、正義と善性と常識に挟まれて苦悩しつつ、それでも感想を口にした。
「ああならなくて、よかった、です」
「そうか、自分もそう思ったぜ」
　残酷だが、そう思っても仕方が無い。それほどに、あの空間は無味無臭の悪意に満ちていた。
　日常に馴染む例えなら、調理場だろうか。『食材』を切って裂いて、バラバラにして焼いて揚げて、晒して叩いて。
　その理屈で言えば、人間は彼等を糾弾できない。できないが、そう思っても問題はないだろう。
「でなぁ、レオナルド。笑えるんだ、聞いてくれ」

おそらく、仮面の男が幻術で操って聞き出したか、魂を引きずり出して確認したのだろう。彼は『彼女』の悲劇を、本当に笑いながら語りだした。

「あの女は、どうやら欧州の出身らしい。で、村で普通に暮らしていたんだが、ある日悪魔に襲われて捕まったらしい。で、そのときにエクソシストと戦闘したらしいんだが……ひゃははは！　笑えるだろう？　その周辺がぶっ飛んだらしい！　あげく悪魔に神滅具盗られるし……何しにきたんだよエクソシスト!!」

おそらく、捕獲した悪魔にしてみれば世界を揺るがすほどの「検体」の確保であり、その際の苦労話程度のことだろう。少なくとも、無駄に手間取った以上の感想は抱いていないはずだ。

エクソシストにしても、それは必要な犠牲だった。悪魔が神滅具を確保すれば、それはより多くの惨劇を産む。それは確かだろう。第一、侵入した悪魔を迎え撃ったのだから、彼等に非はない。だが、結局神滅具は奪われ、『彼女』の悲劇性がより助長される形になってしまっただけだ。

「それでな、悪魔の連中、誰もこの『女』の名前をシラネーの。完全に無関心で、なんの興味も抱いてねーの。あー、かわいそう……!!　ははは！」

「な、なにがそんなに笑えるんですか？」

それは、さながら宇宙人にでも出会ったかのような錯覚だった。この男が、今の話を聞いてなにが笑えるのか、本心から分からないのだ。

「……え？　……ん～～～、まるでギャグを説明するみたいだな……ジョジョネタを知らない奴にいって、なんの話だと聞かれたら逆切れ気味になんで知らないんだ、と怒ってるみたいだ……。やっぱりこういう時寂しいぜ、こんな面白いネタを共有できねーなんて」

心の底から、本当に寂しそうに仮面の男は椅子に座った。

数度、呼吸してテンションを整えている。

そして、やや白けた調子で自分がこの話題のどこが面白いのか、説明を始めた。

「……お前さ、主人公にも流行があるって知ってるか？　まあ、もちろ

んフィクションの話だが、基本的にハヤリスタリがある。一定水準に達していれば、なんでも面白いんだが……それでも時勢ってのはあるな」

やや穏やかな調子で、仮面の男は語り始める。

それは、まるで興味のない相手に作品の面白さを伝えるような、意味のない親切さと必要のない誠意に満ちている。

それを、レオナルドは黙って聞くことにした。どうせこの男の考えを完全に理解できるとは思えないのだ。

「とにかく明るくてスケベで馬鹿な熱血なやつ、複雑な環境で苦悩する面倒なやつ、小心者だけどいざってときは大胆になるやつ、子供っぽいけど芯が強い頑固なやつ、とにかく完璧でなんでもこなせるやつ、いつも冷静だけど困っているやつを見捨てないやつ、自分の都合を最優先でかんがえるがラッキースケベなチャンスを不意にするやつ、カネにがめつくて行動力のあるやつ……色々だ」

「随分悪意を感じますが……」

「悪意はあるさ、どうにも世の中には劣化品ばかりが横行しているからな。いっちゃあ悪いが、魅力ある主人公ってのはどんなタイプかってのは実際のところ関係が無い」

「関係ないんですか？」

「ないさ、実際のところ主人公がどんな性格をしていたところで、シナリオの力でどうとでもできる。実際のところ、大事なのは主人公の苦悩とかそんなことじゃない。シナリオ、筋書き、ストーリーなんだよ。だってのに、さっき言ったみたいにテンプレートな「カッコイイ主人公」を書けばそれでいい、みたいな作者がいるから劣化が横行する。流行と横行を混同すると、まあ、そうなるわけだ」

「それとこれと、なんの関係が？」

「さっき言った主人公の例の中に、『酷い目にあったから何をしてもいい』という思考法の主人公がいるんだよ。さっきも言ったが、それはそれで結構楽しいもんだ。面白い話はいくらでもあるし、そういう性格がストーリーに意味をもたせることがしょっちゅうだ。でもなぁ……作者の自己投影のような、モテモテ主人公だっているわけさ」

なにか、遠くを見るように仮面の男はレオナルドから、穴の開いていない仮面を動かして、『視線』を明後日の方に向けた。
「考えてもみろよ、自分が酷い目にあったから性格が歪む、そんなのは当たり前だ。極めて真っ当でありふれた思考の変化さ。誰だって一度騙されたら、人間不信なり疑心暗鬼にだってなるさ。何度も騙されて、それでも他人を信じるなんてのは要するに学習能力が無いってだけだからな」
世の中には、信頼というものを貴いと説く考えがある。間違ってはいないだろう、信頼がなければ、社会は決して機能しない。誰もが自分の都合で生きる社会は、逆に生きにくくなるだろう。
だが、社会の正義に皆が殉じているわけではあるまい。所詮約束事であり、自分のためならば手段を選ばない愚か者が多い。相手を信頼することも大事だが、確認したり自分の身を守るのは尚大事だ。
「けどなぁ……いっちゃあ悪いが、そんなの当たり前で、誰もが経験するもんだろう？　なんでその「主人公」だけが正当化されるんだ？　そんなのおかしいだろう、昔酷い目にあいました、なんてのは外道行為の免罪符にはならねーとは思わないか？」
例えるなら、詐欺師に騙された人間が詐欺師になるようなものだ。そういう例は珍しくないだろうが、それでもその昔騙された詐欺師が正当化されたわけではあるまい。
自覚があろうがなかろうが、同じことを他人にしているだけのことだ。それを正義のように語るのは、正義を蔑ろにしているだけだろう。
誰がどう考えたところで、世間一般における正義を貫くものを貶めることは決して許されない。彼等が信じている道徳は、例え単なる建前だったとしても、それが失われれば結果的に多くの者が堕ちるだけだ。
宗教じみているかもしれないが、社会には正義は絶対に必要なのだ。なくても機能する社会は理想かもしれないが、まったく存在しない社会も病んでいるだろう。
「オレは現実を知っている、あいつ等が信じている理想なんて嘘っぱ

ちだ！　そう恥も知らずに叫んでいる主人公の存在！　ああ、馬鹿馬鹿しい！　そんな誰でも知っていることを叫んで、えらそうに振舞うな。そんな作品を書いている奴らは……」

　仮面の男は、『彼女』が置かれている部屋を親指で指差した。

「ああなりたいってのかね？　あれがカッコイイとでも、羨ましいとでも思っているのかね。アレのようになんの非もない生活をしていたやつが、なんの非もなく酷い目にあうのが「主人公」に必要とでも思っているのかね？」

　ああなりたくない、そう思って当然の結果を、さも主人公に必要なように描く。

　そんな作家を笑ったのだろう。

「被害者になったのは仕方が無い。だけどな、それは加害者になっていいってことじゃないそれはいいよな？」

「ええ、それはそうだと思います」

「だけどな、そんな論理が彼女に通じると思うか？　フィクションでもなんでもない世界で、作者の都合を押し付けられた自己投影型の主人公でもなんでもない、ただのかわいそうな女の子にそんな理屈を押し付けられるか？」

「思いません」

　あんな酷い目にあって、全てを根こそぎ奪われて、体を破壊しつくされて……。

　それで、正常な思考ができるわけが無い。

「でなぁ……さっきの話の続きなんだが、あれはあくまでも主人公の例でな、攻略対象の『ハーレム要員』の場合は又別なのさ……助けてくれてありがとう！　私、貴方に人生を奉げるわ！　ってやつ。これも女をバカにしている話だよな。つり橋効果ってのはあるにしても、限度があるだろう？　助けられた女は好きにならなきゃいけないのか？　って話になる。第一、あんなに虐待というか、酷い目にあって他人を信用できると思うか？」

　レオナルドの脳裏によぎったのは、先ほど助けた……いや、身柄を確保した検体の面々だ。彼等に他人を好きになるという前向きな感

情が残っているとは、到底思えない。
女性たちもいたが、自分にほれたということはないだろう。暖かい風呂に入れて暖かい食事を振舞ったが、それで彼女達が自分にぞっこん、ということはありえない。
それは彼女達が悪いわけでも、自分達が悪いわけでもない。強いて言えば、拘束期間が長かったというだけのことだろう。
「とはいえ、だ。実際のところ今まで自分もそうやって想像するばかりだった。まさかそういう目にあって、自分で検証するわけにもいかないしな」
それは、単純に社会への利益を考えていた、或いは知的探究心を満たそうとしていた悪魔の職員達と比べても尚醜悪な、野次馬根性にも似た好奇心だった。
誰からも批難されないほどに可哀相な女の子は、果たして主人公のように「加害者へと回る主人公」になるのか、それとも「救ってくれた主人公に献身するヒロイン」になるのか。
それとも、既に精神が壊れているのか？
あるいは、極めて真っ当に復讐鬼になるのか？

「なあ、レオナルド。あの『ものすごく可哀相な可哀想な女の子』を助けてやろうぜ？」

「二度と動かない四肢を元通りにして、自分の意志で指で触れる喜びを、自分の好きなところに歩いていける楽しさを取り戻してやろうぜ？」

「栄養補給しているチューブを引きちぎって呼吸を補助している機械をぶっ壊して、自分の食べたいものを食べさせて、思うままに呼吸させてやろうぜ？」

「アイマスクを外して耳栓をとって口かせを外して拘束服を脱がせて、小説やマンガを読む目や、音楽や噺を聴く耳を、歌いたい歌や詩

を吟じる口を、好きな服を着て温泉だろうが砂風呂だろうが包まれる肌を取り戻してやろうぜ？」

「家族を皆殺しにされて、故郷を焼かれて、不当に拘束されて、尊厳を奪いつくされた彼女に、世界を滅茶苦茶に出来る力を持った少女に……」

「男女平等、機会均等、職業選択、機会選択の自由を与えてやろうじゃないか!!」

顔が見えない仮面の男は、間違いなく笑っていた。

迷宮のプリズナー　4

レオナルドは、仮面の男についていく。なぜこんな邪悪な男についていくのか、それは未だに良く分かっていない。

逃げられないと分かっているからかもしれないし、この男が自分を傷つけないと知っているからかもしれない。

だが、最大の理由はこの男がどれだけ邪悪であったとしても、この世界に満ち足りた過酷さに比べれば微々たる脅威でしかないということだろう。

結局のところ、この男に利用されているだけだったとしても、他の誰かに絞りつくされるよりは億倍マシだった。それこそ、自分が協力することで、この男がどれだけの災害を世界にもたらそうとも。

ああはなるまい。

そう思うほどに、この男の行くところには悲劇が余りにも満ちていた。

「なあ、レオナルド。あらゆる娯楽の創作物には『お約束』って展開がいくつもある。それこそ、紀元前からいくらでも存在している。それも、例によって面白いか面白くないかにはまったく影響しない。物語を面白くするのは作家の腕であって、判子を押したような顔のキャラクターや、使い古されたネタをふんだんに使っても、結局ストーリーでいくらでも面白くできる。つまりはセンスだ」

「そのくだり、なんども聞いてますよ?」

「ああ、そうだな。でもまあ、言わずにはいられないのさ。そういうの好きなんだ、知ってるだろう? 今歩いているだけで暇なんだし。こういう議論って、答えが出なくても楽しいよな。人それぞれ考えがあってさ。あの女の子とも語り合いたいな……今頃何を考えてるんだかね～」

「歩こう、って言ったのは三つ目さんじゃないですか」

「いきなりワープじゃ風情が無いだろ。そんなんじゃあつまんないとは思わないか? レオナルド、楽しめよ。どうせ人生なんて浮世の夢だ、どうせならいい夢にしたいだろ? 人生は手間隙一つ、気持ち一

つでいくらでも楽しくなるんだからさ」
深く暗い森をひたすら奥へと歩く、仮面の男とレオナルド。
夜の森がどれだけ危険か、それが動物の一頭さえいなくても単に足を滑らせるだけで死に直結する。
舗装されている道でさえそうであり、まして道なき道であれば尚のことであろう。
視野を確保するための穴さえ開いていないというのに、仮面の男の歩みは何処までも軽快だ。昼でもこうは行かないであろう、というほどに迷いがなく進んでいる。
それについていくレオナルドは、どこまでも必死だというのに。
自分のペースを崩さない仮面の男は、レオナルドが遅れると脚を止める程度だった。
「というかですね、なんで夜なんですか？　夜の森をひたすら歩くなんてどう考えてもおかしいと思いませんか？　舗装された道とまでは言いませんが、せめて昼に歩きましょうよ」
「バッカだなー、レオナルド。自分達がこれから何処に行くのか覚えていないのか？」
「……吸血鬼の領地です」
「そう、そのとおり。吸血鬼に逢いに行くってのに、昼行ってどうする」
夜行性の人食い鮫を見に行くのに、夜の海に裸で飛び込んで、ブタの血を撒き散らすような話である。
そりゃあ、鮫には会えるかも知れないが、それが成功した場合夜明けが拝めないだろう。
よほど上級であったり、あるいは特殊でなければ、吸血鬼は太陽光に弱いというのが世界のお約束だ。
実際に存在してる吸血鬼もその例外ではなく、夜の貴族を自称している彼等は、実際のところ昼は動けないというだけだったりする。
にんにくを弱点とし、十字架、聖餅、聖水に身を焼かれる。流水を渡れず、招かれなければ家に入れず、聖書の言葉に耳をかせない。
彼等ほど弱点が多い種族も、なかなか稀だろう。だが、それでも彼

等が恐れられるのは、人間を超越した多くの能力と、人間を食べるという特性だろう。

彼等は人間を食べなければ生きていけないが、人間にしてみれば人間しか食べない怪物など脅威以外の何物でもない。

悪魔は契約によって人間の魂を奪うが、彼等は極めて単純に捕食する。細かく知っていようがいなかろうが、人間を食べる相手ほど人間にとって脅威のモンスターもいないだろう。

まあ、それでもこの男にとっては、或いは自分にとっても全く脅威ではないのだが。

肉食獣に大型や小型がいるように、草食獣にも小型と大型がいる。食物連鎖の頂点に君臨するのは肉食獣かもしれないが、別に全ての草食獣を捕食できているわけではない。

そこらのイタチも肉食だろうが、こっちはブラキオサウルス並みの巨大草食獣だ。食われると思うほうが間違っている。

およそ、肉食獣にとって自分の暴力を自覚している巨大草食獣ほど面倒なものはあるまい。とはいえ、それでも肉食獣の巣穴は危険なのだが。

「さてと、このあたりだな」

突如として脚を止めた仮面の男は、おもむろにその仮面を脱いだ。頭部のすべてをすっぽりと隠すヘルメットめいた仮面は、外すと当然男の素顔が明らかになる。

それは、言い方は悪いが夜見ると驚く顔であり、元の顔が判別できないほどに火傷でただれていた。その原因が火なのか薬品なのかは定かではないが、少なくとも大衆娯楽作品における主人公やその仲間の、顔のアクセントになるような傷ではなかった。

その表情も読み取れるものではなく……しかし、それに次いでおかしな特徴があった。左右の一つずつの眼に加えて、縦にきれた瞳が額に存在していた。

それは、人間であるはずの仮面の男の、ありえざる第三の眼だった。

「よし、ここからはこれだな」

新しく付けられた仮面は、その三つある眼が内外から見える仕様と

なっており、眼以外のすべてが相変わらず隠れていた。
食事の際にはいつも外しているので驚くことはないが、それでも面食らってしまう。
それでも、一切悲壮に見えないあたりが、この男の人柄を悪い意味で物語っていた。
「よし、行くか」
心底楽しそうに笑う声は、仮面に隠れてやや篭っている。
三つの穴の開いた仮面はどうやら自分の手製らしく、その頭部にしっかりとフィットしていた。どういう意味があるのか分からないが、白一色の仮面にはウサギの耳のような角がついていた。お気に入りらしく、戦うときは何時もこれをつけていた。
「レオナルド、モンスター頼むぜ」
「はい」
とはいえ、レオナルドもそんな仮面を見るためにこんな山奥の森深くに連れてこられたわけではない。
上位神滅具。つまり数多の神器の中でも、13しかない神滅具。そのなかでも上位4つに入る最強クラスの神器、それがレオナルドの持つ『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』だった。
端的にいえば、自分の影から巨大なモンスターを生み出すという創造系最強の神器であり、強力なモンスターを無尽蔵に生み出すことができる。
加えて、レオナルドの個人的な特性として、モンスターの攻撃に特別な属性を付与したり、あるいはモンスターの肉体に耐性を与えることができる。
単純に言えば特定の相手に対してメタを張ることができるアンチモンスターであり、その質はきわめて高い。
レオナルドの影から沸き立ち、現れる100m級のアンチモンスター。それは森の木々をなぎ倒しながら顕現した。その威容は、正に醜悪のひとこと。およそ、地上の生命の理屈に反する奇抜さは、まるで深海に生きる奇怪な生命を根こそぎかき集めて一塊にしたようで、その存在だけで森を異界に変えているようだった。

だが、それを見る仮面の男はらしくもなく、非常に冷めた目でそれを眺めていた。
表情の伺えぬ顔、感情の現れぬ仮面ながら、この男の喜怒哀楽はどういうわけだかわかりやすい。
「レオナルド……作り直せ」
「またですか?!」
また、というのは、以前もこの巨大モンスターを生み出した折、なんども作り直しを要求されたのだ。
酷いときなど、昼ごろから日が沈むまでリテイクを繰り返し、挙句今日はもうやめ、とまるでこちらに非があるかのように叫んで帰ってしまった。
「あのな……いつも言ってるだろ？　モノを作るんなら手を抜くんじゃねー!!」
今回は相手が吸血鬼とあって、銀に近い体表や、日光に近い光線を撃てるように調整している。自分の命もかかっているので、当然だが手は全く抜いていない。
「ですが、能力は完璧ですよ」
「そんなことを言ってるんじゃない。いいか、なんだこの適当な「デザイン」は?!」
星明りを遮る巨体も、彼の目には昼のように明快らしく、その全景を真下からでも把握していた。
その上で、デザインが悪いので作り直せ、そういっているのだ。
「いいか、別にカネが取れるようなグレードを要求してるんじゃない。お前にできる精一杯を要求しているだけだ!!　お前は、こんなもので吸血鬼の総本山を攻め落として、それで満足なのか?!」
「別に、デザインなんて……」
「モノを造る奴が、手を抜くところを探してどうする!!」
これだ、この男はワケの分からないところで情熱を発揮し、そのパッションをこちらにも要求してくる。
もちろんレオナルドは、別にモノを造るのが好きでこの神器を得たわけではなく、偶々偶然先天的に得ただけだ。そんな自分にむかっ

て、モンスターのデザインをこの男は熱く語るのだ。
「いいか、どんな怪獣も全体をパッと見て、その時点で相手に狙った印象を与えないといけないんだ!!　それには、それこそ爪の形や皮膚の質感、肌のたるみやしわの数まで、できる限り推敲に推敲を加えないと、いいものは出来ないんだよ!!」
　どうせ用がすんだら消す命なのだが、どうにもこの男はそんなモンスターにさえ花火の如き精緻さを要求してくる。
　その熱い魂を、検体となった彼女達への義憤に回せないものか、と少し思ってしまう。
「ということで、作り直しだ！　いいか、バイオハザードのゾンビのような、生々しさと恐ろしさを、そして生きている造形物という不自然さを形にするんだ!!」
「……はい」
「返事はちゃんとしろ!!　お前はやればできる奴だ!!」

　一体化面の男の中の何がそうさせるのか。仮面の男は夜もふける中、森のど真ん中で幾度と無くモンスターを作り直させ……。

「よし、いいぞ」
　ようやく及第点に達したらしき、アンチモンスターに合格点を与えていた。
　そのモンスターは４足歩行であり、ところどころに骨が表皮に浮かび上がり、しかし肥満の如き肉が重量感を持っていた。脚の一本一本が不ぞろいで、その表面だけではなく長さや関節の数も異なっている。
　どうやら、そんな不恰好さが気に入ったらしい。
「……じゃあ早く行きましょうよ、聖杯の所持者に逢いに」
「ああ、楽しみだ」
　仮面の男はレオナルドの肩を掴むと、その右目から生じた空間の渦に自らとレオナルドを吸い込ませる。
　まるで、穴の開いた鍋の水が抜けるように、彼等は仮面の男の右目

のあった空間に消えた。そして、次に現れたときにはモンスターの背に乗っていた。

夜の森とはいえ、１００ｍ級の木などそうはなく、その視界は極めて広々としていた。

星明りの照らす夜の森は何処までも静かで、モンスターの鼻息と鼓動の音だけが直下から伝わってくる。

単に高いところにいるだけで、足元は怪獣の背中ということで不安定。しかし、それでも、レオナルドと仮面の男は暫くその光景を無言で眺めていた。

だれでも味わえる数瞬しか持続しない万能感の残滓を振り払い、仮面の男はその両目に勾玉を浮かび上がらせて力を込める。

「須佐能乎（スサノオ）！」

海原を治めるよう命じられた、イザナギの鼻から生まれた日本神話の神。

その名を冠する術ながら、しかしその威容は巨大な大天狗。巨大なエネルギーの塊であるそれを、まるで服のようにアンチモンスターへと着せていく。

ただそれだけで、散々デザインを変更したアンチモンスターは姿も見えなくなり、その装甲を増した。

それだけでも、同等の上位神滅具を凌ぐ威力を感じさせるが、更に仮面の男はその左手に赤い籠手を生み出す。

「赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）！」

中堅ながらも、レオナルド同様の神滅具。赤龍帝ドライグの魂を宿したその籠手は、更に眩く輝いてその姿を変える。

「赤龍帝の籠手、禁手（バランスブレイカー）……」

籠手が消えると同時に現れたそれは、さながら蠍の尾のようだった。

仮面の男の背後の腰から現れたそれは、赤い装甲がいくつもの関節によってつながってできていた。

「赤龍帝の罿（ブーステッド・ギア・テイル・フォート）！」

さながら生き物のように蠢くそれは、最初仮面の男の身の丈程度

だった。しかし、爆発するように膨張し、須佐能乎の外部に飛び出てまきついていく。

神滅具によって生み出されたモンスターを高エネルギーによって武装し、更に他の神滅具によって重ね着を行う。

「定まれ！」

仮面の男が拳を握るや否や、須佐能乎の表面は完全に固形化した装甲で更に覆われていた。

術者二人を完全に防御したその形態は、不死性に優れるも攻撃力に欠ける吸血鬼では突破できるものではなく……。

「さてと……そこだ！」

『神威手裏剣（カムイしゅりけん）！』

仮面の男の両目から血が流れ、それに反応するように黒い渦が巨大な二つの手裏剣を形成する。

巨大モンスターの顔ほどもあるそれは正面にむけて射出され、空間に亀裂を造って消滅した。

「いくぜ、可哀相な女の子の体を治すために、聖杯をゲットしにな！」

大義名分を掲げて、夜の吸血鬼の居城へ突入する。

二人を乗せた巨大モンスターは、空間の裂け目へと消えた。

迷宮のプリズナー　5

なんというか、一種のいじめとしか言い様がなかった。

レオナルド自身も、自分の持っている神滅具の危険度を良く知っていたが、それでもここまで圧倒できるとは思っていなかった。

三つ目の白兎の仮面をかぶった男が、事前にあれだけモンスターの外観にこだわったのか、今更ながら良く分かる。他にすべきことがなかったのだ。

大怪獣の進撃を阻む、神滅具によって強化された、あるいは改造された吸血鬼の軍勢。

彼等は以前とは比べ物にならないほど強化され、もしくは多くの弱点を改善されて自分達に立ち向かったらしい。

らしいというのは、レオナルドにとって吸血鬼との戦闘はこれが初めてであり、比較のしようが無いということだ。加えて、彼等はこちらに比べて相対的に弱かった。

いや、相対的に弱いというと彼等への侮辱になるだろう。正しく言えば比較にならないほど弱かった。

一説によるとカブトムシやゴキブリは自重の５０倍、蟻は１００倍の重さを牽引できるというが、それが１００倍どころか２００倍だったとしても虫は虫。要するにそういうことだった。

勇敢かつ自信満々で接近してきた、優雅なドレスと怪しい雰囲気をたたえた吸血鬼の貴族達を、こちらはぺちぺちと叩き落したのである。

幽世の聖杯（セフィロト・グラール）。聖遺物の一つであるそれではあるが、上位神滅具である魔獣創造のモンスターと激突すれば、当り負けするのは当然だ。

幽世の聖杯で強化されても、魔獣創造の太陽光線の方が優先される。それは進化した吸血鬼を目指す彼等にとって、無常な真実だった。

加えて、こちらは楽してズルして無敵モード。仮面の男が神滅具とユニーク技能で構築した装甲を、彼等は一層たりとも突破できなかっ

た。

透明な装甲から眺めていた自分は彼等を哀れみ、逆に相手も哀れむ自分を見て打ちひしがれていた。

吸血鬼の上位陣は、そのまま仮面の男の生み出した黒い棒を差し込まれ、強化された不死性を発揮することも出来ず、拘束されていった。

自分が太陽光で弱らせてしまったものも、わざわざ備蓄されていた血を飲ませて回復させてやったほどである。

彼等は自決さえも許されず、ガチガチに封印されて、雛人形のように並べられて、仮面の男のデジタルカメラで写真を取られていた。全体写真と一人一人の写真をそれぞれ記録して、その上で首だけ残して土に埋めていた。

その穴は鼻歌を歌いながら、仮面の男がわざわざ一人で掘っていた。とても楽しそうだった。

赤龍帝の力で強化されていたとはいえ、流石に手作業。全員を埋め終える頃には既に昼だった。霧で太陽光は遮断されているが、それでもやや明るくなっている。

なにげに徹夜で貴族全員分の穴を一人で掘って、更に彼等全員を埋めたにも関わらず仮面の男は元気だった。

家庭用ビデオで撮影を任されていたレオナルドは眠くて辛くて大変なのだが。

ともあれ、ようやくお目当ての聖杯を手にすることになった。

「やあ、はじめまして」

「……どうも、はじめまして」

一晩中穴を掘って埋めていたとは思えないほどに元気はつらつで、仮面を外した三つ目の男はそのただれた顔で笑顔を作り、吸血鬼の居城で捕らわれていたハーフヴァンパイアの少女に挨拶をした。

彼女は幽閉に適した外から鍵をかける部屋に閉じ込められていたのだが、蹴破ればいいものを、わざわざ鍵を探して空けて開放し、応接室に三人で机を囲んだ。

一晩続いた異常に彼女も察しているものがあるらしく、品のいい顔

は何かを覚悟して緊張していた。
　それにしても、レオナルドは自分を少年なりに美形だと思っているが、生物が違うだけあって彼女は「この世のものとは思えない」美しさだった。
　金色の髪は何処までも整っており、声は鈴のようだった。肌は青白く、儚げな印象を受ける。薄幸であろう彼女は、むしゃぶりつきたくなるような色気ではなく戦慄する美貌があった。それでいて、包容力という母性を感じさせている。
「悪いが、名前は明かせない。まあ、顔を晒したのがその代わりだと思ってくれ。それで君の名前は？」
「ヴァレリー・ツェペシュです」
「そうか……それで、君が神滅具幽世の聖杯（セフィロト・グラール）の所持者でいいのかな？」
「はい。そのとおりです」
　まるで、オペラ座の怪人だった。美しい少女と顔を失った男の対面は。
　それが肉欲や性欲ではないにしても、好奇の眼で彼女を見る三つの目は何処までも野卑だった。それを受け止めている彼女の気高さが、更にそれを貶めている。
「まあ、いろいろ言いたいことはあるんだろうが、楽にしてくれ。別に君を殺したり、傷つけたりするつもりは無い。ただ、少し話がしたくてね」
「話、ですか？」
　目の前の彼女が暴力で物事を解決したがっているようには見えないし、応接室で他にすることはないだろう。だが、それでもこの男の語る「話」が常のそれとは違うように見えなかった。
「君は、なにがしかの娯楽に触れたことはあるか？　演劇とか映画とか。なんでもいいんだけど」
「すみません……ないんです」
「……え？」
　聞いておいて、心底びっくりしたらしき三つ目の男。彼は、出生が

理由で拘束されていたとはいえ、およそこの世にそんな人間がいたとは思いもよらなかったようだ。

「そうか……それは人生を損しているな。ああ、絶対損している。君が何歳だか知らないが……何でも良いからそういう娯楽に触れないと駄目だ。ずっとなんにも楽しまないまま生きてたって、死んでるとの同じだろう」

本心から同情し、かつ義憤さえ感じているようだ。顔からはともかく、所作からは明らかに本心が見て取れた。

それに、レオナルドもヴァレリーもあっけにとられる。こんな辺鄙なところまで押しかけて、貴族連中を根こそぎ拘束して、それで目の前の少女が娯楽を知らないというと怒り出すなんて。

「……ああ、でも昔は弟みたいに可愛がっていた子に、着せ替えを……」

「そうか……でも、本当にまた何か新しい楽しみを見つけろよ？」

「はい……」

どうやら、根っからの悪人ではないと思われたようだ。ややヴァレリーの緊張がほぐれている。

実際、根っからの悪人ではないのかもしれないが、現在間違いなく悪人であろう。レオナルドはあまり信用しないほうが良いと、届かないと知って心の中で忠告した。

「さて、まあ……御話ってのにはいかのパターンがある。いつでも語られるテーマとかな。で……率直に聞くけど、君は聖杯で吸血鬼を強化していたね」

「……はい。求められるままに、太陽や十字架への耐性を施しました」

厳粛に、ヴァレリーは頷いた。

「良く語られるテーマに、「医者が助けた人が犯罪者で、助けられた後に人を殺したら医者が悪いのか？」というものがある。君は、それについてどう思う？」

非常に、意地の悪い質問だった。

目の前にいる少女の内面が如何なるものであろうとも、吸血鬼という捕食者に強化を施したのは事実だった。たとえ、今回の襲撃者の前

には無意味だったとしても。
　今の例に対してレオナルドは、単なる考えすぎだ、と思う。だが、彼女の行為はそういうレベルではない。太陽の下で日光浴をしたいとか、そんな理由ではないことは彼女だって想像ができていただろう。
　どんな理由があったにしても、彼女の術はそれを助長しただけだ。
「悲しい、悲しいと思います」
「そうか……確かに悲しいよな。でもまあ、自分だって気に病むなとしか言えない。確かに医者が助けてなかったら犯罪者は死んでただろうし、犠牲者は生きてただろう。だが、そんなことを言い出したらキリが無いし、第一医者が悪いんじゃなくて犯罪者が悪いんだ。自分の職務を果たした医者がとがめられることじゃない。しいて言えば、犯罪者を取り締まれなかった警察が悪いんだろうよ」
「それでも、悲しいです」
「ああ、悲しいな。だが、君の行為と混同することは出来ない。なぜなら君の行為は確実に「吸血鬼の利益」のためのものだからだ」
　その表情は相変わらず伺えない。だが、それでも理解することはできる。彼は彼女をいじめていた。
　選択肢を与えられていなかった彼女を、どうしようもなかった彼女をいじめていた。
　あの「可哀想な彼女」と同様に、いやそれ以上に哀れむべき彼女をいじめている。その性根は明らかに腐りきっていた。
「君の行為は、吸血鬼の内部でどのように機能していたのかは分からない。後でのんびり聞いて回るさ。だが、対外的には明らかに軍事力強化として写るだろう。それが、吸血鬼にとって利益でなくてなんだと思うんだ」
「それでも、悲しいです」
「悲しむなよ吸血鬼のお嬢さん、君は実に立派な吸血鬼だ。きっと君が施した強化によって、施された者以外の誰かは被害を被っただろうが、それは施してあげたやつには利益だったんだ。きっと、君に感謝しているに違いない」
　くっくっく……と、娯楽に触れる機会さえなかった彼女を、上から

目線で糾弾している。
　悪意以外のなにものも含まない凶悪な言葉責めは、それでも続いていく。
「でだ、こんなテーマもある。悪人と取引をした連中の物語だ。幾つかバリエーションはあるが、赤ん坊の頃から育ててもらったり、或いは病気の両親の為に援助をしてくれたとか……悪人に恩義を感じて、忠義を誓う連中の話だ。大体の場合、赤ん坊だったそいつを親から奪ったのが恩義を感じていた悪人そのひとだったり、あるいは援助は一時的で適当なタイミングでやめていたとか……まあ、悪人を信用したり取引したりするなって話なんだが、おかしいと思わないか？」
「なにが、ですか？」
「悪人に忠義を誓っていた「そいつ」は、騙されていて「悪人が全部悪かった」ってことになるわけだ。けどな、それって論理のすり替えだろう？　悪人に忠義を誓っていた「そいつ」は悪人なのか善人なのか、その結論は結局煙に巻かれているじゃないか。もしも悪人が本当に捨て子を養育していたり、約束を守って援助していた場合はどうなるんだ？「イイ奴」が悪いことと知って悪いことしたら、どんな理由があったって悪い奴なんじゃないか？　少なくとも被害者からすれば」
　レオナルドは、思わず顔をそむけた。
　相変わらず、言っていることは極めて真っ当だった。
　善人だろうが悪人だろうが、罪と知って罪を犯せば罪人でしかない。
　目の前の彼女がどんな理由であれ、吸血鬼を強化していたことは事実であり、それが吸血鬼という国家なり民族なり一族なり動物に利益を与えていたことは事実だ。
　だが、今後は違う。吸血鬼を守る為に彼女は仮面の男に身柄を差し出し、その能力を犯罪行為に使うようになると宣言しているのだ。
　そして、それを選べばお前も犯罪者だといっているのだ。善人ぶるな、この悪人め、といっているのだ。
「それを踏まえた上で提案だ。吸血鬼を見逃してやるから、自分のモノになれ」

今日から君は何の言い訳も出来ない犯罪者だ。そう言う醜い顔の男は、その顔と比べてもなお醜かった。

「私に……何をさせるつもりですか？」

頷くしか選択できないと知っても、ヴァレリーはかろうじて質問が出来た。

それは、どうかマシな目的のためであってくれという願いがあった。

「人助け。君と同様に神滅具を宿し、君と同様に実験され利用され……君と違っていじくりまくられて、故郷や家族さえ失った、何の罪もないのに身動きさえ出来ない少女を助けてもらう」

赤龍帝の籠手が、対を成す白龍皇の光翼とあわせて龍系神器の最上位であるように、魔獣創造が創造系最強であるように、幽世の聖杯は治療系の頂点に位置する神器である。

おそらく、失われた感覚器官の復活や、人体の欠損さえも容易く治療できるであろう。そういう意味では、正しい使用方法だった。

「そういうことでしたら……」

よろこんで、という言葉にかぶせるように、醜い男は言葉を続ける。

「時に、飢えている者には魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えろという言葉があるのは知ってるか？　魚を与えても一度食べたら魚はなくなるが、魚の釣り方を教えればずっと食べられる、という意味だ。いい言葉だとは思うが、これって、足りないとは思わないか？」

その言葉も、言葉の意味だけは完全に善意だった。少なくとも、この男が言っているのでなければ、そのまますんなりと受け入れることができるだろう。

だが、この男が持っていこうとしている結論と、この男が求めていることを思えば、到底納得することは出来なかった。

「人にものを教えるって、そんなに簡単じゃないだろう？　人を飢えさせないのってとっても大変だろう？　人が困っているのを助けるのは苦痛が伴うものだろう？」

「……それは、そうだと思います」

「人が飢えていたら、それを助けるには魚の釣り方を教える程度じゃ

足りない。魚を釣るには釣竿だけじゃなくて船や網が要るかもしれないし、その使い方は簡単に教えられるもんじゃない。言っちゃあ悪いが、飢えているやつを助けてやろうと思ったら１０年単位で生活の全てをまかなってやらないと駄目なんだよ」

確かに、そうだろう。貧困を救済するのは言葉ほど簡単ではなく、その人のために人生をささげるほどの覚悟を求められる。

人を支える献身とは、優越感を得られるだけの行為ではない。それは正しい。善性にも正義にも矛盾しない。

何から何まで正しいのに、ヴァレリーは冷や汗が止まらなかった。

男の三つある眼が、全て自分を見ている。恐怖している自分を見て笑っている。とても楽しそうに輝いている。

「酷い目にあった女の子、非道な目にあった女の子、可哀想な女の子、可哀相な女の子。体を治してはいさようなら、とはいかないさ。かといって催眠術で操るなんて論外だ。彼女の面倒はちゃんと最後まで見るさ、それこそ最期まで」

そのとき、ヴァレリーとレオナルドの脳裏に浮かんだのは、先ほどのパターンだ。

『医者が助けた人が犯罪者で、助けられた後に人を殺したら医者が悪いのか？』

それは、ものの例えでもなんでもなく目の前に現れてしまった。

「体に管で栄養補給されていた彼女だ、きっと何か食べたいに違いない。なんでもは難しいが、それでも色々食べさせてあげたいね」

「……は、はい、そうですね」

「ベッドの上から動けなかった彼女だ、きっとどこかへ行きたいと思っているに違いない。何処でもは難しいが、できる限りいろんなところへ連れて回ってやりたいね」

「わ、わたしも……い、いろんなところに、行ってみたい、です」

それは、善行だった。ただ肉体を治療してそれで投げ出すのではなく、そのあとも面倒を見るという、責任感と慈愛に満ちた『言葉』だった。

だが、何故だろうか。その言葉には献身の欠片も感じられない。た

だ好奇と喜悦がにじむどころか溢れるばかりだ。
「故郷も焼かれて家族もみんな死んじゃったらしい。きっと、心が壊れているに違いない。自分も頑張るけれども、君もよかったら協力してくれ。だってほら、女の人にしかできないことってあるだろ？　男の人に乱暴されてるかもしれないから……ね？」
「は、い！　もちろんケアは手伝います！」
「そうか、ありがとう。でも……もしもそれでも復讐したいと思ったのならば……」

「止めるんですよね?!」

「まさか?!」

それは紛れもなく狂気だった。だが、善性のヴァレリーをして、決して否定できない行為だった。
帰る場所を、迎えてくれる肉親を、自分の肉体を失った少女。その肉体を癒すことにためらいはなく、心をいじらないことにも賛同する。だが、それは彼女の自由意志を尊重するということであり、報復という悲劇を発生させる行為以外の何物でもない。
だが、ズタズタにされた体を癒さないことも、全てを奪われた彼女に残った唯一の心をいじらないことも、ヴァレリーにもレオナルドにもできないことだ。少なくとも、その算段が整っているのであれば。
だが、心をいじらず体を癒して、それで彼女に復讐を思い直させるなど不可能だろう。まだ出会ってさえいないが、ヴァレリーには全てを奪われたであろう「彼女」を押し留める言葉が思いつかない。
おそらく、正当な復讐を望む彼女を止めるには、殺すしかあるまい。
「復讐したいっていうんなら、それも全力でサポートするに決まっているじゃないか！　自分の利益のために利用するわけでもなく、間違った情報で誘導することもなく、極めて正しい情報を供給して復讐を果たさせてあげるに決まっているじゃないか！」
「復讐させるために治療しろと仰るんですか?!」

「それを決めるのは彼女だ。その点だけはそうでなければ意味が無い。そうじゃないと面白くない」

無邪気に笑う、顔を失っている男。

彼は、三つの目で自分を見ている。嘲っている。

お前一人が聖人君子でもしょうがないと。

お前一人が献身的でも、世界はちっとも変わらないと笑っている。

「確かにその人は全てを失ったかもしれません……ですが、それで死んだ人が帰ってくるわけでは……私の聖杯なら……」

「それでまたぶっ飛ばされるのか。復讐させるために治療するのが嫌でも、また死なせるために蘇生するのはいいってのか」

悲劇は連なる。正当なる報復は何処までも連鎖する。

だが、少なくとも彼女にはその権利がある。まったく何の非もない彼女には極めて正しい復讐の権利がある。

混血吸血鬼の信じる善性は聖杯を掌中に収めていても、現実の前にまったくの無力だった。

「それでも……それでも……」

「復讐は悲しいか？　そうかもしれない。君が説得したければすればいい。案外、それで彼女が復讐をあきらめるかもしれない。それはそれで別にいい。だが、多分そうはならないぞ？」

「なぜ、そう思うのですか」

「自分でもそうなると思っているのに、無理矢理否定しようとするなよ」

興奮しているのか、やや地が出ている。言葉遣いが段々乱暴になっていく。

「そうだな……じゃあ一言で納得させてやる。好きだったマンガの名台詞を引用してな」

もう我慢できないとばかりに、両手を広げて、舞台役者が愛を謳うように叫んだ。

「【君が幸せだと俺が可哀相だ】！」

その言葉の持つ圧倒的な言霊に、もう誰もなにもいえなかった。この世界に存在しないマンガゆえに、引用元を彼女達に提示することは出来ないが、それでも絶対的な説得力を持っていた。

その台詞がどのようなタイミングで、どのようなシチュエーションで、どのようなキャラクターが、どのように用いたのかは分からない。だが、それでも『彼女』の抱えているであろう心境、境遇、行動原理を完全に一言で言い表していた。

迷宮のプリズナー　6

はるか悠久の昔より、ただの一度も満たされたことのない、しかし存在し続けているものがある。マンパワー、つまり人間の労働力である。

人間にとって、人間ほど便利な労働力は今のところ存在していない。かつては機械の登場により、その意味を早々に失うと思われていた。だが、それは間違いだった。

皮肉にも、人間を模したロボット技術が発達すればするほどに、人間という生き物の高性能さが明らかになっていったのである。

人のように考え人のように振舞うなど夢のまた夢、走ることはおろか歩くことさえ難しく、ものを掴む強さはともかく繊細さや融通の効きやすさではいまだ遠く及ばない。

そう、人間の労働力こそ有史以前から人間が得てきたあらゆる力の中でも最も秀でているものだった。

しかし、その労働力とはつまりは人類の総体としての話である。人間の労働力、つまり労働しない立場の人間からすれば現場作業者、過去に紐解けば奴隷。彼等の犠牲なくして今日の繁栄はありえなかった。

言うまでもなく、多くの時代や地域での彼等の暮らしはあまり良い物ではなく、その日々が満たされていたとは言いがたい。

そして、食事などの経済的問題だけではなく、職業病なども当然頻発していた。

例の一つでしかないが、塵肺という恐ろしい病気もある。この病気は極めて大雑把に言うと肺に細かい塵が詰まることで肺の機能が低下する、ガンさえも併発する不治の病である。

これを治そうと思えば、それこそ新しい肺を造って取り替えるしかない。当然、現在の技術ではまだ不可能である。

炭鉱夫や溶接工などがわずらい、病に倒れてきた。文明の発達によって生じてしまった、科学の被害者であり、犠牲者であろう。

とはいえ、彼等の仕事なくして今日の発展はありえず、つまり必要

な犠牲だった。考え方によっては、彼等を犠牲にしなければ文明は維持できなかった。

最初は仕方あるまい。全く新しい職業の誕生によって生まれ、医学の進歩と患者を調べてようやく明らかになった病である。予測して対応するのは難しいであろう。

だが、そのあとはどうか。原因が明らかになった今も、彼等を犠牲にし続けて良いのか。全体の繁栄のために、ごく一部の職業の人間には犠牲になってもらわなければならないのか。

結論だけ先に言うと、その必要性は全くない。

科学の進歩とは素晴らしいもので、流石に肺を新しくする技術はまだだが、そうした塵を吸い込まないようにする技術は存在している。つまり、高性能のマスクである。

高性能というだけあって、花粉などよりも遥かに小さい、電子顕微鏡で確認するような代物も遮断できる。当然使い捨てだが、肺を交換するよりも遥かに安上がりだ。

また、肺だけではなく多くの臓器も、新技術によって新しく「生産」できるようになりつつあるという。

現実では臓器移植の順番待ちや、臓器の売買が問題となっている。ＳＦ作品ではクローン人間を生み出して臓器移植に使うという、生命の尊厳を扱うことがあった。

実際にはクローン人間を造るまでもなく臓器を直接造れるようになりつつあるということだ。もちろん、実用化は当分先の話になるがそれでも原理そのものは存在しているので、遠い未来の話ではあるまい。

文明の発達は確かに新しい倫理的問題を生み出すが、人間の知恵はそうした問題を極めて技術的に解決してしまう。

今回も似ているといえば似ている。「彼女」を癒したいという思いは、レオナルドもヴァレリーも確かにある。だが、ここまで破壊された人体を神滅具の力なしでどうにか出来たとは思えない。それほどに彼女の容態は深刻だった。

ヴァレリーをして、思わず眼を背けるほどに。
加えて、あらゆる勢力から狙われる神滅具保持者４人が、どれだけ強大であっても個人でしかない仮面の男の下に集って無事なわけは無い。
彼の眼の力の一つ、天之御中（アメノミナカ）による余人で入り込めない空間がなければ、流石にここまで好き勝手には動けなかったであろう。
始球空間と呼ばれるなにもない地平は、しかし「彼女」と一緒に保護した検体と、ヴァレリーの希望で連れ込んだ混血吸血鬼たちの安住の常世となっていた。
このなにもない白の荒野は、迫害者のいない安然の大地か、或いは枯渇の大地か。
そんな思考を割く余裕もなく、彼等はただへたり込んでいる。
救われたという実感もなく、運命に翻弄され続けた彼等には、あるいは飼い主が変わっただけなのかもしれない。
「……よくある話だと、こうして救出した場合、何人かは無駄に元気に政治力を発揮して叛乱を先導したり、自主的に独立独歩の姿勢を取ろうとするもんだったりするんだよ。こう、助けてくれたことには感謝するが、もう誰も信用できない。自分達だけでやっていくから放っておいてくれっていって。こうして途方にくれている面々を見ていると、そういうバイタリティのある奴は真っ先に始末されてるよなぁ、て思う。まあ、拘束されて労働を強いられて搾取されていただけならまだしも、検体として実験されていたんなら、まあそんな気力はねえよなぁ」
そもそも、独力で脱出さえ出来なかった面々が、何の後ろ盾もない状態で自由になったところで、いいところ盗賊団だろう。
ある一定水準を越えたところで、世界には縄張りが張り巡らされる。つまり「土地の所有権」という概念である。つまり、自由になった彼らというのはつまり何処にも所属していない難民である。
特別な能力を持っていなければ共同体に入ることは難しく、持っていたとしても利用されるだけである。そもそも彼等は特別な能力が

あるからこそ迫害されていたのだからそれは断るだろう。
　仮に、誰のものにもなっていない土地があったとしても、そこは単に誰もすみたいとは思わない土地である。都合よく野生動物が多くて狩猟に適していたり、あるいは食べられる植物が大量に実っているということはありえない。そんな土地は、とっくに誰かのものになっているはずである。
　加えて、農業というものも一種の文明である。土地の改良や、栽培の技術など、多くの知識やノウハウをその場所で育てる必要があり……そもそも収穫まで時間がかかる。数年を要する場合、彼等は何を食べるのだろうか。
「こういうのって秘密基地作りみたいでわくわくするな。でも、秘密基地って良く考えたら破綻してるんだよなぁ。よく悪の科学者が独力で秘密基地を造ったりするけれども、資金や資材はどうやって用意しているんだろうな。魔法じゃあるまいし、まったくのゼロからじゃあネジの一本だって造れやしない。動力も燃料はどうするんだか……こうしてバカみたいに広大な空間があっても、生活に必要な資材は買うのは一番簡単だし、買ったものを運ぶ必要がある時点で、ワープできるならともかく絶対ばれるよな」
「まさか、ノープランじゃないですよね?!」
　レオナルドが慌てて訪ねる。実際、この状況で今更一から考えるとしたら、どう考えても間に合わない。
　呆然としている彼等のケアも大事だが、そもそも衣食住を整えなければ、彼等を救うどころかより悪化させただけになってしまう。もはや無責任、無計画どころの話ではない。
　この男は行き当たりばったりではあっても、考え無しではないとは知っている。だが、それでも彼の言動は不吉が過ぎる。このまま衰弱死していくさまを眺めて楽しむという可能性もあった。
「もちろん、策ぐらいあるさ。それにしても、こんなこともあろうかと、って言葉があるが、あれも大概おかしいよな。あらゆる状況を先読みして対策を練っておくのは良いが、未完成ならともかく完成しているもんをどうして指揮官や上司にあらかじめ伝えておかないんだ

？　有用な手段なら作戦の幅も広がるってのに……正直、そういう安易な展開に頼りすぎると話から緊張感が失われるところだな。古式ゆかしく、一つずつ情報を集めて弱点を探してという展開も燃えると思うんだが……ダイガードとかクウガとかな」

　またベラベラと意味の分からないことを話し始めた。かぶっている面は、戦闘中もつかう顔をすっぽりと覆う真っ白なフルフェイスの仮面。三つの眼だけが露出しており、飾りは額の辺りから伸びている、ウサギの耳のような角だけ。

　その不気味さとは裏腹に、男は何処までも愉快そうに無駄な言葉を並べていく。

　おそらく彼の好むサブカルチャーを語っているのだろうが、レオナルドもヴァレリーも当然知らない。なので意味も分からない。

「で、クウガと言えばヒーローと警察の連携だ。単独で怪人を打ち倒せる仮面ライダーと、広い情報網と装備、検死や捜査力をもつ警察の長所と短所の補いあいが実に面白かった。フットワークが軽いヒーローと、世間の眼を気にしないといけない警察の対比も昔は鬱陶しく思えたが、世間体も気にしない警察の方がまずいよなぁ。隠蔽もある程度はしていたし……子供にアレを見せてよかったのやら……。まあ、それでも名作だったけどな」

　そういって、掌から黒い棒を生み出す。両手から生えてきたそれを、無造作に二人の体に突き刺した。

「いだっ?!」

「な、何を?!」

　困惑する二人の眼、その両目が仮面の男同様の薄紫色の、波紋模様に切り替わった。

「自分の眼を分けた。これで二人とリンクさせる……魔獣創造も幽世の聖杯も、どっちも使い手に負担がかかるが、自分の瞳術の力で負担を軽減できるはずだ」

　本来死体をチャクラで操る術だが、それをやや弱める形で仮面の男は二人に使用した。これによって、二人は輪廻眼の恩恵を受け取ることができる。

生命の改造と生命の創造。どちらも人間個人の能力を大きく逸脱している力だ。レオナルドには優れた資質があり、ヴァレリーは混血の吸血鬼。それでも、神さえも滅ぼす力は強大ということだろう。

「……それは嬉しいですけど、今更何で？　というか、痛いんですけど」

「そこは聖杯で何とかしてもらえ。体の一部として融合させればいい。できるな？」

「……はい。できると思いますが……出来たところで、問題は解決しないような気がします」

「……お前等、本当に発想が貧困だな。この場には世界を覆せる神滅具の使い手が３人も、いや４人か。まあ、そんだけいるんだ、なんでもできるだろ」

心底、失望さえ覚えているらしく、仮面の男の言葉は辛らつだった。

「具体的には？」

「すみませんが、なにをすれば……」

レオナルドもヴァレリーも、仮面の男と同じ波紋模様となった眼で仮面の男を見る。どうやら、本当に何の見当もついていないらしい。

「レオナルドが魔獣創造でモンスター造って、それをヴァレリーが聖杯で改造して労働力を造ればいいんだよ。自分が赤龍帝の籠手で譲渡して輪廻眼でサポートすれば一発だろうが」

おお、と二人は納得したらしい。確かに理屈は通っている。

上位神滅具、それも禁手となっているレオナルドのモンスターは、通常の神滅具の干渉を受けにくい。だが、使い手同士で協力していれば又別の話だ。双方を輪廻眼で繋げて、さらに赤龍帝で強化していれば更に効果は上がるだろう。

「炊事に洗濯、掃除に風呂。当分百人ぐらいを相手に介護するんだ、頭数は千人単位で必要だろうよ」

「というか、それをするのであれば、創造する段階から協力してもらったほうが良いですね。禁手クラス同士３人でやればかなり上質なのができると思いますよ」

「分かりました……確かに、何をするにも人数は必要ですね」

既存の生命を戦闘目的で改造するのは流石にいただけないが、介護目的に新しい命を生み出すのであれば、それは決して悪ではあるまい。

レオナルドもヴァレリーも俄然乗り気となって、仮面の男の案にのった。

特にヴァレリーはいまだ放心している彼等をできる限り介助したいが、それには余りにも人数が多すぎる。出所不明の資金と食料で物質的に問題はないので、労働力を確保できればそれが一番だろう。

「それで、『彼女』はまだいいんですか？」

いまだ名も知れぬ、４人目の神滅具保持者。とりあえず眠られているが、できる限り早く治療してあげたい。

建物ごとこの空間に移動させた研究所で、今も彼女は身動き一つできずにいる。

「知っているかヴァレリー、衛生兵という戦場で他の兵士の傷を手当てする専門の兵士がいるらしい。まあ、軍医とは違うらしいが、専門じゃないんで詳しくは知らん。だが、皇国の守護者で知ったんだが、衛生兵ってのは怪我をして暴れる負傷兵を抑えるために腕力がいるらしい。実際のところ、介助には筋力が必要で、それ専門のパワードスーツも研究されているらしいぞ？」

「それとこれとなんの関係が……」

「戦闘型の神滅具の保持者が暴れるんだぞ」

仮面から覗けるその三つの波紋模様の眼は、どれもが真剣だった。そう、今『彼女』を治療した場合、下手をしなくても3対1で戦闘になる可能性さえあった。

神器は精神に深く繋がっているが、彼女の精神の鬱屈はもはや想像さえ出来ない。

「悪いが、この問題を先に片付けないと、こっちの元気がもたない」

「……ですね、では先に済ませましょう」

「それでは、３人で息をあわせましょうか」

何の予告もなく3人の視界が、突如として共有される。レオナルドは二人の視点から自分が映り、ヴァレリーも同様に自分を二人の視点

から見た。
やや戸惑うものの、それでもリンクは順調である。
どのような結果に繋がるか分からないが、とりあえず人助けのための能力行使であることは間違いない。
仮面の男は腰から生えた尾で3人をまとめてつつみ、レオナルドは影を沸き立たせ、ヴァレリーは自分の内から三つの聖杯を取り出した。
3人の神滅具保持者達は繊細に能力を行使し、そして試作品となる新しい生命がゆっくりと沸き立つ。
レオナルドもヴァレリーも、人間を想像していた。人間の形をしてるものほど、人間に役立つ形はない。故に、人の形をしたモンスターを求めた。
しかし……できあがったそれは、およそヒトとは呼べない姿をしていた。
「……これで、いいんでしょうか」
「すみません、もっと上手くできたらよかったんですけど」
人の形をしている、肉感的なマネキン。眼も鼻もないそれは、一言で言えばそれだけだった。だが、体には間接があり、指も適正な数がある。物は試しと、仮面の男が簡単に指示をしたところ、その通りに動いた。どうやら、高い知性と従順さ、そして必要な筋力を持っているようだった。
直接制作した二人はもっと人間らしく作りたかったらしいが、それでも補佐に徹し、デザインには関わらなかった仮面の男は嬉しそうだった。
「3人の共同作業ということで感慨深いなぁ……よく、知性を得た被創造物の悲哀を描く物語は多いが、少なくとも介護ロボットがその存在を疑問に持つことはなかったな。ロボット3原則に最も忠実な、人間を傷つけることのない人間のための労働力（ロボット）。戦争のための兵器として生み出された悲哀がない、シンプルな原理で動く人間の理想像か……。悪くない、悪くないねぇ。この無個性さ、没個性さ具合がいい。付き合ってみれば愛嬌もいいし、人間らしくないことが

逆に安心できるだろう……悪魔も見た目は人間みたいな感じだったし、趣味性の高いメイド風よりもこっちのほうがいいな」

出来上がってみれば、実に仮面の男の好みだった。

この媚びない機能的なデザインと、無個性さと機能性の高さ、やわらかさと有機性を備えているのが、よかったのだろう。

「名前、そう名前だ。なんにでも名前は必要だ。最初はゼツとでも呼ぶつもりだったが、このデザインではそうとは呼べないな。量産されるわけではあるが、量産機の名前をつけるのは寂しいな。アイボやアシモのような、やわらかい名前を……そうだな。よし、お前の名前は……」

三つの眼を持つ男は、その存在に名前をつける。

ただ人のために生み出された幸福な知性に、或いは生き方を定められた奴隷に。

彼は人間らしさを求められて、しかし未完成なそれに最初の贈り物を贈った。

「お前達の名前は、アクエリアだ」

迷宮のプリズナー　7

「お願いがあります」

ヴァレリーは真摯な眼で仮面の男に懇願した。いや、その眼差しからは既に覚悟を感じる。

仮面の男の脇に立つレオナルドをして、その眼光に思わず怯んだ。確固たる意思と、揺るがぬ決意。それを隠さずに不退転の混血吸血鬼は、不敵な仮面の男に宣戦した。

「『彼女』の治療の際、肉体だけではなく精神の治療も希望します」

その言葉は、ある意味ではヴァレリーを此処に連れてきた理由と、『彼女』を復活させる理由の全てを無駄にするものだった。

おそらくでしかないが、『彼女』の精神は壊れている。心の壊れている相手の、体だけ取り戻せばどうなるか。はっきりとは分からないが、おそらくまともなことにはならないだろう。

怪我をすれば心がすさむ、それは仕方の無いことだ。まして、『彼女』を『彼女』たら占めていた全てを破壊された今、何があっても仕方が無い。

その仕方が無いを見たい仮面の男としては、絶対に許可しないであろうことは確実だった。

断られると知っても、彼女の眼には撤退の文字を感じられない。

「……その返事をする前に聞きたい。なんでそう思った？　その理由次第では、精神の治療も許可する。何故だ、どうしてだ？　その覚悟は一体誰のための覚悟だ。この女の子のためのものか、それとも自分のためか」

断ることなく、仮面の男はその意味を問う。

法律などよりも道理を、あるいは享楽を優先する男は、その心のあり方を問う。

その三つの眼で、虚偽を許さず問いただす。その妖しい圧力に、ヴァレリーは吸血鬼の能力ではなく胆力で持ちこたえていた。

「彼女のためであり、私のためです。私はいままで流されてきました。決断したことと言えば「彼」を逃がしたことぐらい。そして、仕方が

無い、仕方が無いで「吸血鬼」を強化してきました。その結果、吸血鬼同士の争いで片方に利してしまいました」

「別に、君が原因で内戦になったわけではあるまい。君は単に戦力強化をしただけだ」

「そうです、私も戦争に参加しました。私は間違いなく戦っていたんです」

純血主義の吸血鬼の中で、懸絶した力を持つとはいえ混血でしかない彼女に、選択肢があったかと言えばないとしかいいようがあるまい。

だが、それでもヴァレリーは戦争に加担した。それを悪とは思わないだろう、責められないだろう、とがめられないだろう。

「だから、他でもない私が自分を責めています。こんな素晴らしい力を、争いを優位に進めるためにしか使わなかった。岩にかじりついてでも拒絶するべきだった私が、こうしてようやく「正しいこと」に使える機会が与えられました。ですから、正しく助けたいんです。ほかでもない自分のために」

決然たる彼女の赤い眼は、母性の決意で凝固していた。

さて、この善性からくる返事は彼のおめがねにかなうものなのか。

レオナルドは、仮面の男の反応をうかがう。

「……精神の治療とは、どういうものだ?」

「……ズタズタになっている彼女の心に触れて、判断力を取り戻させます。記憶は消せませんが、それでも話ができるようにはなるはずです」

「そうか……じゃあ好きにすればいい」

何が彼の心を動かしたのか、仮面の男はあっさりと了解した。

生命維持装置につながれた、荒野に運ばれた『彼女』を手で示した。

やや拍子抜けしつつも、表情を再び固めてヴァレリーは『彼女』に近づいていく。

その決意は、自分の意志で『彼女』を正しく救うと言う意思そのものだった。

「レオナルド、知ってのとおり自分には他人の精神を操る技を持って

いる。まあ自分以外では実際に操られているかなんて分からないだろうが、とりあえず操ってはいない。それは保障する。でだ、どうして操っていないか分かるか？」

「……話し相手が欲しいからですか」

「そう、そのとおりだ。自分はおしゃべりでな、話し相手が欲しかったのさ。でだ、お前はまだ子供で「自分の信念」がない。だが、どうやらヴァレリーには「善性」というものがあるらしい。悪を討つと言う正義のような攻撃思考ではなく、悪事を積極的には行わないという良識でもない。困っている人を見捨てられないという、実行原理だ。好ましいとは思わないか？　丸く治めることが不可能であると知っていても、できる限りのことをしてあげたいと思うのは」

復讐者になると分かっていても、それでも治療する。誰かに命じられたからではなく、非もなく傷つけられた『彼女』をまず癒す。

正義であれば苦悩の末『彼女』を殺していただろう。それはそれで、苦痛と怨嗟にまみれた『彼女』にとって終わりだろう。少なくとも、悪い判断ではない。

良識であれば救わず殺しもしなかっただろう。犯罪を犯すと分かっている相手を行動できるようになどせず、かといって殺して呵責を背負うこともできず。

あるいは慈愛とも呼ぶべき感情で、『彼女』を救おうとしている。

「丸く……何事もなくは終わりませんか」

「どちらかと言えば、あのまま体だけ治療した方が復讐はおきなかっただろうよ。心が壊れて暴れることを、復讐とは言わない。単に暴走しているだけだ。そんなのちっとも面白くない。だが判断力を取り戻させるといったが、冷静に考えられるようになったって許せるもんじゃないだろう」

ヴァレリーの体から聖杯が三つ浮かび上がり、それらが眩く輝いていく。

その光で二人の姿は見えなくなってしまった。

「というかだな、冷静な判断力を取り戻したらやめるような復讐なんて大した復讐じゃないだろう。そんな程度の覚悟なら、途中でどうで

もよくなるさ。大体、冷静になって何を考えるんだ。自分がされたことと失ったもの。その両方を客観的に考えて、それでどう結論が覆るんだ。良く考えたら家族はそんなに好きじゃなかったとか、お母さんは殴られても殴り返すなって言ってたとか、そんなことを思い出して思いとどまるなら、世界から復讐はなくなってるよ」

その眩い輝きにひるむことなく、仮面の男は白兎の面をつけたまま、腕を組んで悠然と立っている。

「某漫画で母親が自分を殺した犯人を恨むなと言い残した。それに子供は従った。それは正しいことだったのかもしれない。だが、果たしてそんな「理想」を「善性」の彼女は押し付けられるか。それは違うだろう、もし百歩譲ってヴァレリーが記憶を操作できたとしても、どのみちいじらなかっただろうぜ」

「……そうですね。一方的に記憶をいじるのは、きっと他のどんなことよりも罪深いです」

「ああ、傲慢ここに極まれり。家族を殺された少女から家族の記憶さえも奪うなんざな。だが、それが原因で復讐は始まる。それでもヴァレリーは彼女を癒す。涙ぐましいことだ……」

仮面から見える眼に、喜びだけではない何かが浮かんでいる。それがなんなのか、付き合いの長くないレオナルドは察することが出来ない。

もちろん、直後にはそれははかなく消えてしまったのだけれども。

「正しくなくても、良くなくても、善い事なんだろう。……それに、だ。先ほどのマンガの母親の話だが、娘の行動は少しずれている。彼女は真犯人を知りながら、それを誰にも話さなかった。罪を憎んで人を憎まずというだろう。結局のところ罪を犯したものを恨むのと、罪を犯した人間を捕まえるのは又別の話だ。第一、その理屈だと犯罪者は野放しだぞ。心情と法律を一緒くたに考えるからワケのわからない事になる。実際、そのせいで漫画の中ではクーデターがおきたしな。今回だってそうだ、神滅具を「便利な武器」程度の認識にしておくからワケのわからない事になっている。レオナルド、お前のは特にそうだが、これは国を滅ぼせる力だ」

例えるなら、国の貴族程度が核兵器を保有しているようなものだ。そういう意味でも、あの研究所はおかしかった。

結局のところ、だれも本心から神滅具は危険だという認識が浅いのだろう。

賢者は過去の、他人の失敗という歴史に学ぶ。

愚者は自らの痛みによって、体験によって学ぶ。

そして、真の愚か者はなにも学ばない。自分だけは特別だと信じようとして、今度こそ成功すると疑わずに。

死ぬまで、それを繰り返す。

「ハッキリしていることは一回誰かが痛い目を見ないと、未来永劫誰も学習しない。そうじゃないか？」

「……何をするつもりですか？」

「面白いことさ、きっと大騒ぎになる。国が滅びるかもな」

「……国が滅びなかったら、その分国は神滅具をより強く監視するのでは。後世に悪影響を及ぼすと思います」

「それはそれで国の結論さ。それはそれで別にいい。それはそれで面白い」

その眼は、何を見ているのか。ろくでもない未来であることは確かだろう。

「面白くないと、楽しまないと損だぜ。レオナルド、なにもしなかったらあの女の子のように、力を誰かに利用されて絞りつくされてそれで終わりだ。人間を超えた力ってのはそういうものだ」

寂しさ。そうとしか言いようのない感情を、仮面に隠されたただれた顔が発していた。口調こそ普段どおりだが、それでも余りにも寂しそうだった。

「人間賛歌の物語で、語られていた失ったもの。人間を超えた力、人間以上の寿命、人間を喰らう上位種としての力。それを振るう戦場。……それを得るに差し出したものと言えば、太陽の下でのんびり野鳥に餌をやることが出来なくなったことぐらい。でも、とんでもなく大きいだろう。春のような朗らかさも、夏のような暑さもない。秋や冬の日の下、老い朽ちる中なにをするではなく暇を潰す。それさえでき

ないならば、人間を超える事にどれだけの意味がある。炊飯ジャーで炊いた米を、湯を入れただけのレトルト味噌汁を、チンしただけの冷凍食品を、一人でのんびり食べることも出来やしない」

ただ、なんとなく日々を生きるという満ち足りた生活。

それは、手放してしまったかけがえのないものだった。

悔いているわけではなく、ただ寂しそうだった。

「なあ、レオナルド。お前は神滅具を宿して幸せか」

「幸せではありません」

「そうか……なあ、あの女の子は本当に可哀想だろう？　それだけは本当のはずだ」

笑っていた。その眼は喜悦で笑っていた。寂しさは、再びどこかにいっていた。

「何処でも一緒だ。程度が違うだけで、生まれに見合わない力を持っていれば力しか見られない。力だけを利用されて、力を使いこなすための努力を強要されて、力に見合った働きを強制され、力に見合ったモラルを強いられる。それが力を生まれ持ったものの人生だ。それを楽しいと思えるか？　思えるなら今からでもどっかに連れて行ってやる。おすすめはしないがな」

この世界を笑っていた。嗤っていた。哂っていた。

「自分のために使うか、他人のために使うか。楽しいのは、楽しいことだけを追求できる前者だけだ。結局のところ、この世界でもたった一つの原理があるだけだ。どう足掻いても権力者には利用されるだけ、利用されていれば許されるってな」

仮面の男は、余りにも何かを見抜きすぎているようだった。

「素敵だよな、国家転覆を企てたテロリストに加担しても許されるんだぜ。若気の至りで許されるんだぜ。じゃあ自分も許してもらえるよなぁ。国を滅ぼすような真似をしてもな。まあ、許して欲しいとは思わないが」

ある種の呆れさえ感じさせる、言葉の捨て鉢さ。それは心情を分かりやすいようで分かりにくくしている。

どうにも、本心から何かをバカにしているように思えない。やは

り、口で言っているだけだ。本心ではないようで、しかし本心でもあるようだった。

「結構なことじゃないか、平等を美徳とするこの世界で、能力があれば何をしても許される世界で、平等に能力を行使させてやろう。そうでなければ、あの女の子は余りにも不憫というものだ。それを助けてやる自分は、なんていい奴なんだろうな」

「……悪いことだとは思わないんですか？」

確かに、理屈は通っている。彼女には報復する権利があり、しかしその報復が成功する確率は極めて低い。それを援助するのは極めて正しいだろう。

だが、それで応報する相手はおそらく何も知らないであろう「職員の家族」、いや「犠牲者の遺族」だ。直接加担した面々は、既に肉体的に殺されているか、精神的に壊されている。つまり、『彼女』は『彼女の家族』同様に直接関係のない面々を殺すことになる。

それは、果たしていいことなのか。

【正しいこと、悪いことなんて、人間が勝手にでっち上げたもんで、そんなもん実際にはないんだ】という台詞がある。なかなかメジャーな作者の作品だ。この本を解説した本によると、究極の正当化とは、正当化の放棄らしい。自分は悪だからなにをしてもいい、という開き直りだ。それが正しいかと言えば全く間違っていると思う。ルールの放棄はつまりルールを守っている全員を敵に回す行為だ。ましてやモラルを捨てればそれは、身の破滅だ。正しく生きて、正しく暮らす。社会の歯車となって社会に貢献し社会を回す。これに勝るものはない。それが一番いきやすい。社会の掲げる正義に従い、社会の良識を守り、社会の善性を信じる。それが人間のあるべき姿だ、違うか？」

「そこまで分かっているなら、なぜ？」

「悪魔は、人間を殺したんだぜ？」

それは、社会の正義にも社会の良識にも社会の善性にも、一切反さない決定的なものだった。

今日の人間社会では絶対に許してはいけないことだった。いや、何時の時代でも絶対に許すべきではないことだった。

「何の罪もない人間を沢山殺したんだぜ？　害獣にもほどがあるだろうが。きっちりと巣を駆除しないと、危なくて仕方が無いと思わないか？」

『彼女』は戦わなくてはならない。相手が誰だろうと、何処にいようと。そうしなければならない。

光が収まり、その復活した体で、『彼女』は無言で立っていた。

「……」

その手には、力を大きく使って消耗したであろう、気絶しているヴァレリーを抱えている。

ヴァレリーを見る、彼女の眼は何処までも静かで、狂気は漂っていなかった。

その所作には敬意があり、ヴァレリーと【彼女】が治療の折、なにかで通じ合っていたことが見て取れる。

「レディーが裸でいるもんじゃない。気が効かなくて悪かったな」

つい先ほどまで『彼女』が寝ていたベッドのシーツを剥ぎ取り、それを羽織らせた。

およそ、人間としての機能を取り戻した彼女は、それを無言で受け入れ、自分ごとヴァレリーを隠した。まるで、仮面の男から守るように。

「……」

「礼をいえとは言わない。助けたのはご存知の通り、ヴァレリーだからな。後で本人に直接言え。だから、とりあえず名前だけは教えてくれ」

仮面の男が、どのような形であれ彼女を利用しようとしていることは確かだろう。

だが、それはあくまでも人間として利用しようとしていた。故に、彼は彼女に問う。

人間の証明、名前を。

「……ルネ」

「そうか、ルネ、よろしくな」

それは、彼女の初めて発した声だった。

明日もし君が壊れても　1

仮面の男とレオナルドは、移設した研究施設の一室でくつろいでいた。部屋の中では、仮面の男に眼で操られている女性の上級悪魔たちが、各々楽器を弾いていた。

こういうものを教養があるというのだろう。彼女達は悪魔的な技術で、人間のクラッシックを演奏している。案外、その楽曲が作曲されていた時代から、ずっと練習していたのかもしれない。長寿の悪魔だけあって、そのあたりは一考の余地がある。

とはいえ、今の彼等はメトロノームのように、人形として演奏しているだけなのだが。

「こうやって、インスタントのコーヒーを飲みながら、美人の女どもに演奏させて、一流の調度品が用意された部屋でくつろぐ……コーヒーが少し残念な感じもするが、正直に言って自分はコーヒーの味が分からない人だから問題ない。こうやって嗜好品を飲んで休めるのは、なんとも贅沢な時間の使い方だな。これは程度の差はあれども、貧富を問わずあるべき、人間の文化的な時間だ。それに、コーヒーの味が分からなくても、別に人生で損はしないと思ってしまうあたり、舌が貧しいというべきか。以前芸能人がそうやって最高級と一般の見分けができるのかという番組があってな、まあ当時は笑いながら見ていたんだが、よくよく考えると、一つ一つならともかく同時に並べて、それでも差が分からないって、価値の差は一体何処にあるんだろうな」

壁か電柱にでも話しかけているが如く、仮面の男はのんびりしながらもひたすら饒舌だった。

彼に言わせれば、無駄な時間があること自体が贅沢の証であり、それを楽しむことこそが最高の贅沢だという。

確かに、そうかもしれない。上機嫌な仮面の男の無駄話を延々聞かされる事は一種の苦痛だが、それでも、こうやって腰を落ち着けてまったりできることはたしかにいい。

死ぬかもしれない、捕えられるかもしれない、傷つけられるかもしれない。それは戦場では常に付いて回る恐怖であり、そしてその結果

である「彼女」、いやルネを知っているからこそ怖気が走る。

ああはなるまい。アレは、死ぬよりも恐ろしい永劫の苦痛だった。

アレに比べれば、こんな面倒な時間はむしろ極楽だろう。

比較対象が悪すぎるが、自分は幸運だ。この男に拾われたことは、決して不運ではない。

「ある長寿格闘マンガで、最高級品質のワインは１０ドルのワインの２２倍程度の喜びしかないといっていた。それは確かにそうだと思うし、一部の好事家が値段を吊り上げているだけなのかもしれない。ただ、じゃあ１０ドルのワインだけあればいいのかって、それは少し寂しいと思う。もちろん不味ければ売れないし、ブランドにばかりこだわっていてもつぶれると思う。だけど、努力を惜しまず、一流にしかわからない最高級を追求していることは、とても好ましいと思う」

「彼女」が名乗るまで、誰も名前を知らなかった。ルネ、と名乗った彼女は、それこそ今まで名前を聞かれることも、興味をもたれることもなかったのだ。

名前は、人間の証明でもあると思う。

ただ識別するため、所属を表すため、それだけが名前ではないと思う。

第一、同姓同名なぞ沢山いるはずであり、であれば他人と分けるという意味ではあまり優秀とは言いがたい。

であれば、名前で呼ぶと言うことは、一種の敬意であることは確かだろう。「お前」でも「そこの」でもない、ルネ。それが彼女を彼女たらしめている最初の場所だ。

ようやく、彼女は人として扱われたのである。

「真逆も又然りで、インスタントコーヒーでも缶コーヒーでも、どちらもメーカーがその技術の粋を凝らして、日々進歩している。自分達が日常でお手軽に楽しんでいる味は、企業の方のたゆまぬ努力の結果だ。カップラーメンはどんなバカでも、３分で調理できるが、それを製造する工場では保存食として衛生面に最大の注意を払っている。なかなかバカにできたもんじゃない。中華料理屋に行ってチャーハンセットを楽しんでもいい。ラーメン屋に行ってマンガ読みながら

食べてもいい。家でのんびりネットをしながらカップめんを食べてもいい。選択肢が多いのは、本当に幸福なことだ。大事なのは、好きなときに好きなことができることだと自分は考えるよ」

今ルネは、自分に与えられた部屋ではなく、ヴァレリーの部屋でヴァレリーを看ている。ルネの治療で気絶した彼女は、まだ意識を取り戻していない。その看護を、仮面の男はルネに真っ先に頼んだ。

男性にはできないことというよりは、するべきではないことだと判断したのだろう。もちろん、状況によってはそんなことを気にする暇もないだろうが、今回はそこまで問題ではなかったようだ。

それに、ルネはなにかを聞かされていたのか、或いは検体とし扱われていたことで疑心暗鬼になっているのか。こちらを警戒していた。ヴァレリーはその限りではなく、というか恩人であるという認識があるのだろう。むしろ、仮面の男から守ろうとさえしていた。

「最高級の品質を追求することと、大量生産品の中で品質を追求することはまったくの別ジャンルだ。同じ食品や製品、サービスでも別の存在だと考えたほうがいい。それぞれの枠の中でベストを追求するのが理想だ。それぞれの畑の、それぞれの好敵手と切磋琢磨することで、消費者はよりよい商品を得ることが出来る。買う側として大事なのは、商品の値段だけではなく多くのものを見ることというわけだ。値段だけを追求し続けると、企業が得る利益や、子会社孫会社への負担が増大するばかりで何も良いことが無い。安いものを買って我慢するんじゃなくて、好きなものを買えるように、経済的にも精神的にも余裕を持ちたいものだ」

まあ、これだけ延々ずっと喋り続けている、顔のただれた男を信用しろというほうが無理だと思うのだが。

それにしても、この男本当に電柱に話しかけていればいいと思うのだが。

こちらはなんの反応もしていないのに、それでもずっと上機嫌で喋っている。

自分が案山子と入れ替わっても、そのまましゃべり続けていそうだ。

この男はこちらに対して有害ではない。それだけは確実だ。正しく言えばそれだけが確実だ。この男は極めて真っ当な価値観を持ち、しかし実際の行動原理は著しく破綻している。その性格は全く理解できないが、しかしどこかで一貫していることだけは分かる。

今現在彼が自分達を酷使していないと言うことは、今後も非人道的な扱いをしないということだろう。おそらく、非人道的な犯罪に加担させられることはあるだろうが。

そう、そこが悩みどころだ。この男は基本的に話を聞くしある程度尊重もする。そして行動の結果、側面から見れば助けもしているのだ。それも、偶々偶然の結果ではなく、狙っての行動だった。

『悪い奴』をぶちのめしていい気分に浸りたい、と思っているわけでもない。もしそうだったら男を殺して女を犯せ、などとは言わないし、実行にも移さないだろう。

困っている人を助けて、悪い奴に酷いことをする。それが彼の今までしてきたことだ。なにがそうさせるのか、全くわからない。

利益を求めているわけでもなさそうで、優越感を欲してるわけでもなさそうで、自滅願望があるわけでもなさそうで、欲望を満たしたいわけでもなさそうで。

そう、ワケがわからない。何もかもを明らかに、過剰なほどに言葉を尽くして己を説明しているのに、それでも一切考えが分からない。

この男の言葉は、何もかもを過剰に並べていて混沌としている。

虚飾も、真実も、心情も、常識も、正義も、邪悪も、誠実も、真意も、倫理も、自侭も。

この男にとってどれもが等価であるように、空虚な様でいて熱意に満ちている。

ルネという少女は、一度死んだ。そして蘇った。強大な力を得て。言ってしまえば、それはある種の神様転生にも似ていた。

まだ独立していない彼女にとって、自分の住む共同体こそすべてであり、自分の家族が財産だったはずだ。それが、全て悉く地上から失われてしまった。

死ぬほどの苦痛、人体の破壊。人格の破綻、根こそぎの救済。
ここは彼女の知っている星ではあるが、誰も彼女を知らない。彼女が見聞きしていた全てが消失し、ＴＶや新聞で知っていたことしか残っていない。
それが、果たして得た力とつりあうのか。それは否であろう。ルネは世界に１３人しかいない神滅具の保持者となったが、そんな意味のない特別を、ルネが求めていたとは考えがたい。
いや、考えていたとしても、実際にそうなってしまえばこれほど笑えない話もないだろう。
余りにも身勝手な世界の都合で神滅具を宿し、誰かのパワーアップアイテムの意味づけ程度で退場するはずだった彼女は、今ここに自分の意志で、自分を助けてくれたヴァレリーの手を握っていた。
「……」
その眼には戸惑いと困惑、敬意と感謝が見て取れる。
吊り眼で勝気な印象を受ける彼女だが、それが果たして元の人格なのか、元の顔なのか誰にも分からない。自分でも判別がつかないであろうし、知人は皆死んでいる。
だが、少なくともルネには名前があり、自意識がある。
誰かに恩義を感じても、恩人を全面的に感謝することもないであろうし、まして恋に落ちることなどありえない。
嘗てのありふれた幸せな記憶はあろうが、しかし責め苦の記憶も残っている。
いっそ、黄金の獅子として暴走し、バアルの跡継ぎにでも使われていた方が楽だったのかもしれない。
「……」
それは思考の放棄であり、人間性の売却に他ならない。
たとえ悪意で舗装されていても、彼女には生きる道が用意されている。それも、選択肢を与えられて。
ルネが復讐を放棄すれば、間違いなく仮面の男はそれを許すだろう。それはそれであり、とばかりに。
だが、間違いなくルネは復讐を選ぶ。それ以外にはありえないと。

「……目、覚めた？」
ヴァレリーの手を握っていたルネは、ヴァレリーのまぶたが開いたのを確認して声をかけた。
少なくとも、ルネはヴァレリーに怒りや不条理の嘆きをぶつけるつもりはないようである。苛酷な環境にいた彼女がそれをしても正常ではあるが、判断力があるルネはそれを選ばなかった。
「……ルネ、ありがとう。ずっと、手を握っていてくれたのね」
「ああ、それぐらい大したことじゃない」
ベッドから起き上がったヴァレリーと、椅子に座るルネは目線を合わせた。
それは彼我が対等な存在であることを明示しており、精神世界での彼女達の濃密なやり取りを確信させる。
「こうやって、直接会えて嬉しいわ」
「やめろよ……」
快復した事を喜び朗らかに笑うヴァレリーに、照れているルネは思わず眼を背けた。
今のすさんだ心には、その所作がたまらなくむずがゆい。
自分の目的意識が良識を逸脱しているという自覚もあって、そのまっすぐさが苦痛だった。
「ねえ、ルネ。三つ目さまとはお話しをした？」
「まだだ……アイツは正直信用できない」
名前の交換が礼儀ならば、あの男は最初からそれを放棄している。誰にも名乗らず、ただ名前を問うだけの男は、傍観者を気取っているようで気に入らない。
それは、極めてまっとうな認識だった。
「ただ、ヴァレリーの看護をしてくれって、それだけは受けた」
「そうだったの……ありがとう」
「やめろって、何もしてないからさ」
本当に何もしてない。ルネは、ただ意識のないヴァレリーを部屋に運んで、手を握っていただけだ。
だが、そんな人間らしいふれあいが、たまらなく嬉しいこともある。

こんな、全く新しい環境で戸惑っていれば、殊更であろう。
「……本当に、何もしてないって」
ただ感謝されること、真っ当な人間と真っ当に触れ合うこと。それが、救いになることも確かにある。
境遇の違いはあれども、出会った二人は過酷な運命の中で繋がりあえたことを、分かち合っていた。
「でも、ありがとう。嬉しかった……それでね、ルネ」
「な、なんだよ」
照れるルネの手をとって、ヴァレリーは顔を近づけた。
「私と、友達になってくれる？」
「……うん」

それは、全く新しい人生を踏み出した二人の、初めての真っ当な対人関係だった。

明日もし君が壊れても　2

「眼が覚めてよかったな、ヴァレリー。その神滅具は心身への負担が大きいから、こっちのサポートもなしに乱用しないことだ。できる対処法を怠って、無駄に寿命を縮めるのは陶酔でしかないな」

食堂の机には、暖かい料理が並んでいた。そして、レオナルドと顔の焼けた男が座っている。ただ、まだ食事に手はつけていないようだ。

まさか、とは思うがヴァレリーとルネを待っていたようだ。

「テーブルマナーの類はあんまりしらねーが、とりあえず座りな。食事は暖かいものを、全員で食べるもんだ。他の連中はまだ駄目だが、そのうち全員で食べられるようになりたいもんだ。ああ、混血吸血鬼たちには輸血用パックを渡しておいた。そのうち、好みを聞いて一緒に食べたいね。違うものを同じ席で食べるのはそれはそれで良い。宗教とか体質とかあるからな。でもまあ、できるのならおんなじものを食べたいもんだ。そっちのほうが、きっと楽しい。食事が楽しいのはいいことだ、皆で分かち合うのは本当に素晴らしいからな」

ヴァレリー用であろう、輸血パックも並んでいる。紅茶やコーヒーもあるし、さほど問題はないだろう。とりあえず、焼けた男の勧めどおり座ることにした。

現状、この男に不信感を抱いてはいても、恩はあり、仇はない。であれば、食事の勧めを断るほど礼儀知らずではない。

「では、各々のやり方で……いただきます」

挨拶をすると、顔のない男は嬉しそうに食べ始めた。それに習う形で、３人も恐る恐る食べはじめる。

ルネは、スプーンを手に不信感を抱いたままスープを口に運んだ。暖かいスープは、適温で口内を焼くことなく、芳醇な味と香りをルネの感覚に伝えた。

毒は入っていないだろうか、そう疑いながらも飲み込んだ。

飲み込むと、胃の中に異物が入り込んだ錯覚を覚える。いや、暖かい食事によって胃の中が少し膨れただけなのだが。

それだけだった。おいしいといえばおいしいが、別に最高級のものが並んでいたわけではなく、過剰な反応をするほどではなかった。

だが、手が止まらなかった。次はパンをちぎって噛む、噛む、噛む。原型を留めなくなっても、口の中でひたすら噛む。

手にしていたスプーンを、思わず強く握っていた。

何がそうさせるのか。彼女は口の中が空になってもずっと噛んでいた。

「ルネ……大丈夫、まだ沢山あるから」

ヴァレリーに気遣われて、自分が泣いていたことに気付く。

嗚咽することもなく、静かに涙を垂れ流しにしていた。空だった胃に、生まれ変わって始めての食事が流し込まれる。

人間として食卓で椅子に座り、並んだ暖かい料理を選んで食べる。自分の手で食べる料理をスプーンや手で掴み、口へ運んで咀嚼する。体につながれた管から栄養を補給されることに比べて、なんとも無駄の多い行為。それが、涙が溢れるほどに嬉しかった。

それを見てもレオナルドは感動するというよりは、ああならなくてよかったと思ってしまい、そんな自分に嫌悪を抱く。逆に、顔のない男は三つの眼を細めて笑っていた。

「……ヴァレリー、慌てさせなくて良いぞ。食事はのんびり楽しむものだ。【食事は人の心を豊かにし、エネルギーと明日への活力を生み出してくれます、ここに速さは必要ありません、味を堪能するために歯で噛み砕いて食べ物を胃へと流し込むゥ……そして……】生きることは食べることだ。生まれ変わって早々に生き急いでどうする。空腹は最高のスパイスだというが、度を越えた飢えや渇きはただの苦痛だ。食事中ぐらいいろんなことを忘れて、まったりすればいい」

その眼には、何が映っているのか。

今現在、ルネは緊張が途切れて涙腺が壊れるばかりに涙を流している。泣きながら、食事を食べている。味が分からないかもしれないが、それでも食事に没頭している。今までは意識もしていなかった、たわいもない日常の行為。それを剥奪されて、何かの気まぐれでそれを再び与えられた。

だが、ずっと泣いているとは思えない。食事は終わる、睡眠も終わる、情事も終わる。

人間は欲求を満たしているうちは、基本的に機嫌がいいものだ。だが、度を越えた刺激を受けると、それさえできなくなる。

食事をとることさえできないほどに疲弊した精神は、ある意味では人間が食べていれば良いだけの生き物ではないという証明であり、悲哀だった。

ヴァレリーに支えられながら、ルネは嗚咽しながら食べる。だが、食べ終わって冷静になれば何を思うのだろうか。それが興味深くもあり……同時に、冷静にさせるものがある。

結局、食事のペースをあわせたからか、４人が食事を終えたのは2時間も経過した後だった。

その頃には泣きはらして眼を赤くしているが、ルネは冷静になり、泣いていたところを見られてやや照れていた。

ただ、そんな純朴な反応が嬉しくて微笑むヴァレリーと、これから始まるであろう、仮面の男主催の復讐計画に不安を抱いているレオナルド。

彼等は食事を終えたテーブルで、皿を給仕役の上級悪魔が下げたところで、食後の茶を飲んでいた。

「ご馳走様でした。いやあ、みんなで食べる食事は美味しいな。特に、こうして暖かいものを落ち着いて食べられると尚のことだ。横取りされるのではないかとおびえることもなく、時間制限に追われることもない。幸せとはこういうものだと思うよ。皆も同意のようだな」

「……」

ルネは今更ながら警戒心を取り戻して、細心の注意を払っていた。目の前の男は、善意など全くない。少なくとも、自分を助けたのはそんな理由ではない。

自意識を取り戻しているからこそ、この男の思うがままに動くつもりはなかった。

しかし、そんな思考などとうにお見通しとばかりに、顔のない男は

あっさりと適当なことを言った。
「ルネ、今の気持ちを自分に明かす必要は無い。とりあえず今日のところは寝たほうがいいぞ。薬だってあるんだ、無理やりでも眠れ。寝れば多少楽になるし、緊張もほぐれるさ」
両手を広げて、そんなことを言い出した。
その言葉に、3人は戦慄する。どんな意図があって結論を先延ばしにするのか、この男は基本的にルネの結論を聞きたがっていたはずだが。
「ヴァレリーも、今日は疲れただろう。風呂に入ったらもう寝な。アクエリアも間に合ってるし、当分は療養したほうがいい。レオナルドも、暫くはこの始球空間の改善を手伝ってくれ。露天風呂とか作りたいし」
「……なにを考えていやがる」
「何を？　そんなの、君に考える時間をあげているに決まっているじゃないか」
悪意に満ちた観察者の顔で、ルネに酷薄に告げる焼けた顔の男。彼は満面の笑みを浮かべて復讐者の候補に肩透かしな方針を伝えた。
「君は今冷静な判断力を取り戻している。だが、感情や気持ちとは容易く移ろうものだ。ここで君が復讐すると決めても、それがやっている最中で冷めてしまうかもしれないし、或いは後悔してしまうかもしれないし、直前でしり込みしてしまうかもしれない。当たり前だが、君はまだ人間を殺したことがないだろう？　ちなみに、自分もレオナルドも人間を殺したことはない。多分、ヴァレリーも直接には。まあ、とにかくだ、今の君の気持ちを聞いても、それが移ろうことなき決意なのか。それともはしかのように過ぎ去るものなのか」
「やるなら最後までやれってことか」
「そうだ。後でどうして止めてくれなかったんだ、って言われるのは不愉快でね。君が自分で考えた結論だったら、いくらでも手伝うが、途中でやめられると本当に面白くない。それなら最初からするな。復讐を終えた後で被害者ぶるな。安心しろ、どっちの結論を出しても、極力手助けしてやる」

「手助け、してやる？　バカにしているのか?!　なんで私の復讐を、アンタに手伝ってもらわないといけないんだ!!」
「馬鹿なのはそっちだ。まさか君は、復讐がなんの滞ることもなく、順調に始まって円満に終わるとでも思っているのか？　君の怒りは正当だし、復讐する資格がある。だが、悪魔の連中がおとなしく首を差し出すような連中だと思っているのか？　悪魔がすむ冥界に単独で殴り込みをかけて、悪魔を一人どころじゃなく、大量に殺して回れると思っているのか?!　君がたった一人で?!　何処に仇がいるのかさえ知らないのに?!」
「……だけど、なんでアンタに!!」
「少なくとも、君の隣にいるヴァレリーは、君に野垂れ死にさせるために蘇生させたわけじゃないぞ。まず復讐を選ぶにしても、復讐せずに安寧を選ぶにしても、君に幸福な人生を送って欲しいと思っているはずだ!!　大恩人の意向を無視することができるのかな？」
　この男が、自分の復讐を手助けしようとしているのは、善意ではなく一種の悪意だろう。だが、そこに裏がないのは明らかだ。少なくとも、自分を利用しようとは思っていないはずだ。
　だとしても、この男を楽しませるために復讐するのも、こんな男に手助けされて復讐するのもごめんだった。
　だが、単独で復讐ができるほどにルネに計画性や、戦闘以外の能力が備わっているわけではない。おそらく、彼女の手にあるものは復讐心と多少強いだけの神滅具だけだろう。無駄死にすることは確かだった。
「う、うるさい!!　私の復讐は私の復讐だ！　やるにしても、やらないにしてもお前に何時やるとか言うつもりも、するしないを伝える気もない!!」
「それはつまらないな……まあ、どの道この世界から出ることさえ出来ねーよ。ここは自分の世界だし、君の神滅具は防御的ではあっても、移動には適さない。悪魔がすんでいる冥界にも、人間の住む地球にも帰れない。それが今の状況だ。もちろん、行きたければ言ってくれ。いつでも何処にでも連れて行ってやる。ただし、それは明日から

だ。今日はもうねろ。そんで何日かすごして、故郷を見たり、復讐する相手を知れ。そんで出た結論を聞かせてくれ。そのうえなら、いくらでも協力してやるし、傍観も決め込んでやる。ただ、忘れるなよ？　このまま無策で突っ込めば元通りだ。殺されるか、懐柔されるか、または同じ目に遭う。それでもいいとは、助けた身としてはさすが言えない。無責任極まるからな」

結局のところ、生まれ変わった彼女はこの世界のことを何も知らない。

戦うことさえおぼつかない彼女は、復讐をあきらめるにしてもあきらめないにしても、この男の庇護から離れることができない。庇護を離れれば、どの程度時間がかかるにしても、結論は出ている。

それこそグレモリーやシトリーのような善良な保護者を得て、転生悪魔として生きるか、あるいは他の勢力に戦士として扱われるか。どちらも権力者の利益のために生きることになるだろう。

「飼われる人生も悪くはないだろうさ。だがな、それは自分に観察されるよりもよほど狡猾に使われる人生だぜ？　世の中の権力者は全体の利益であれ個人の利益であれ、自分ほどには個人の意見を尊重できない。守るべきものがあるからな。君が可哀想なのは全員の共通認識だろう。だが、可哀想だからと言ってその復讐を完遂させてやろうとは思えない。だってほら、そんなことしたら悪魔と戦争になるからな。悪魔と敵対しているエクソシストにしても同じだ。おそらく、悪魔に襲われて可哀想に。私達と一緒に悪魔と戦いましょう！　とかそんな感じだ」

想像するだに、怖気が走る。ルネ個人の抱えている憎悪を、全体の利益のために利用されて、すりかえられる。

冷静に判断できるからこそそうなると想像できるし、それが社会の利益だと納得できてしまう。

「ちなみに、エクソシストになったら、きっと楽しい日々だぜ？　君が復讐したい相手とはなんの関係もない、この世で悪行をしている無関係な悪魔と戦う日々だ。君と同じ境遇のだれかを生み出さないためにとか言って、正義の味方に仕立て上げられるぞ。その上、上層部の

意向で悪魔と戦うことを禁止させられたり、悪魔を救う任務を課せられたりする。きっと不満を感じても、君よりも強くて、君と違って辛い目に遭っていないだれかや、或いは君の痛みを分かってくれる誰かに諭されて、丸め込まれて、憎悪を悪だとされて、間違っているとされて、捨てさせられるぞ。一生もやもやしたまま、平和で争いのない世界を生きることになる。それを君が許容するなら、それもありだ」

未来地図を広げる。きっと、素晴らしい未来なのだろう。正しい選択なのだろう。

誰かのために戦い、悲劇を防ぐ。その先に、敵と分かり合う結末があり、世界は愛で満ちていく。

痛みを乗り越えて、先へ進むことができる世界があるのだろう。

「君は正しい理由で怒っている。それを飲み込めと言われる。君だけが怒っているわけじゃないと、正論を振りかざしてな。

君は正しい理由で憎んでいる。それを捨てろといわれる。怨敵だって憎んでいるといわれてな。

君は正しい理由で憤っている。それを許せといわれる。世界を平和にするためにはそれが必要だといわれてな。

実に素晴らしい！　実に感動的だ、実に文化的で、実に理想的だ。争いは無益で、復讐は不毛で、戦いは血を吐き続けるマラソンで、パワーアップしていくだけの殺し合いはもう沢山だ。

そんな何もかもが丸く収まるエンディングが……きっと待っている。それでもいいんなら。『ストーリーの都合』だか『世界の未来』だか『政治の落しどころ』だか、見たこともあったこともない『子供達の未来』とやらのために、飲み込めるなら、それでもいいさ」

ヴァレリーは、その言葉を否定できなかった。きっと、自分も同じことを言うだろう。同じことを言って止めただろう。それを先回りしている、という自覚はなくても、この男はそう宣言する。

「君の復讐は、もうぶっちゃけ君だけのこだわりだ。だって、君しか生きていないんだから。というかきっと、君の村に他の生き残りがいたり、あるいは他に親戚がいたって、別に君ほどは熱意を持っていないだろう。多分エクソシスト辺りがごまかしているだろうし、真実を

知ってももやもやするだけで、なにもできないだろうしな」

ルネが飲み込めば、多少は丸く収まるだろう。それは一面では事実だ。少なくとも彼女に被害は及ばない。

「自分はルネ、君に被害は及ぼさないし、個人の意思も尊重する。それだけは約束する。だって、君が何をしたいとおもっても、何をしても、それは間違ってなんかいない。正義じゃなくても、善良ではなくても、良識さえなくても、それでも君には資格がある。過去ただの一度も途切れたことのない、報復という行為の正当な権利が君にはある。だから、その資格を成し遂げさせる。それが自分と君との最初の約束だ」

「……何が言いたいんだ」

「言い訳を言うな。君があきらめるにしても、あきらめないにしても、他人を理由にするな。したければすればいい、やめたきゃやめればいい。ただし、それを誰かに言われたからとか、ヴァレリーに罪を負わせたくないとか、自分の思うがままにしたくないとか、そんな理由は駄目だ。ルネ、君で考えて自分で決めろ。それが人間というものだ。足があれば何処へもいけるし、手さえあれば何でもつかめる。自分のことは利用する程度のつもりでいろ。意地なんか気にするな。君が決めるべきことはやるかやらないか。それだけだ。それだけを決めればいい」

「ぺらぺらと……好き勝手言ってくれて……」

「性分でね。昔は西尾信者だった。……まあ、なんのことでもないから聞き流してくれ。とにかく、行き違いがあったとか、話せば避けられたとか、良く考えたらおかしかったとか、そんなありふれた悲劇はどうでもいいんだ。他の誰でもない君が考え抜いた、君の決断にだけ興味がある。今まで散々他人の都合を押し付けられてきたんだ！人生の決断ぐらい、他人を気にせずに済ませろ！」

焼けた顔の男は、言葉を尽くして逃げ道を塞ぐ。

美しい言葉をバーゲンセールのように並べて、その一つ一つの価値を貶める。

社会の正義を陳列して、その曖昧さを整理する。

自分の好きに生きろ、と自分を見ている男は告げる。
良く考えて決断して、それに従って行動しろと男は告げる。

自由とはそういうことだ。男は、少女の全てを肯定していた。

それを聞いて、ルネは黙り、ヴァレリーは胸を痛め、レオナルドはただ息を飲んでいた。

明日もし君が壊れても　3

社会の中で生きるのが人間である。人間は極めて生物学的に、単独では出産さえもまともにできない。

しかし、同じ社会性の動物でもある程度の個性は存在している。社会を重んじるもの。つまりは秩序。これは、個人単位で物を見るのではなく、自分の所属している社会の規範に従うべきだという考え方である。

悪法もまた法である。そういった考え方の人間は、ルールが間違っていると感じても、それに従うことをよしとする。おそらく、それを問題視しても政治家になって合法的に法を変えようとするか、あるいはそう働きかけるであろう。

社会の正義、社会の論理、社会の秩序。

それらを重んじることは、決して悪ではない。むしろよいことだといえるだろう。

法令とは原則中立の存在であるし、多くの人間が知恵を出し合って構築し続け、更新し続けている。

それを信じ遵守しようとしていることが悪であるはずがない。

では、自由とはなにか？

それも基本的に悪となるものではない。

自分の良識、自分の善性、自分の責任。

どれもが、軽いものではありえない。軽いものではない以上、それらが本当に自由であるのならば、悪になるようなものではない。

自由とは、自分のルールに従うことである。

法によらず、他人に縛られず、己を貫く生き方。それも、悪ではない。

だが、好き勝手にその場の勢いで生きることではありえない。自由とは断じて考えなしに動くことではない。

だからこそ、基本的に社会の秩序を重んじようが個人の自由を重んじようが、両者が善性であればぶつかり合うことはほとんどない。

法令で禁じられているから傷害をしてはならないと思う人間もい

るし、人を傷つけることを良くない、と思うものもいる。
もちろん、警察に引き渡してしかるべき法的措置を取るべきだと考えるか、その場で気が済むまで殴ってから警察に引き渡すかで、衝突することはありえる。
だとしても、善性であれ中立であれ、悪でなければ双方あえてぶつかり合うことはまずない。
つまり、善性同士ないし中立の人間が衝突するのはある種の異常事態か、あるいはそもそも社会自体が異なる場合である。
教義であれ利益であれ、資源であれ土地であれ。
とにもかくにも、所属している共同体そのものが違えば、どのような考え方、スタンスだろうと戦うしかない。これはどちらが正しいとか間違っているとかそんな問題ではない。しいて言えばどちらが強いか弱いか、という問題である。善悪で問うのは逆に論理のすり替えでしかない。

ルネという少女の所属していた共同体よりも、悪魔という集団のほうが強く、またエクソシストという組織も悪魔を殲滅できるほどではなかった。
単に、肉食動物の群が草食動物を食い散らかした。
種族が違うということも考えれば、その程度の理屈である。
「……本当に、なんにも残ってないんだ」
４人は、ルネの故郷跡地に訪れていた。それは、レオナルドをしてルネが「彼女」と呼ばれていた時期ほどではないにしても、こうでなくてよかったと思えるものだった。
強いて言えば、遠くに見える山だとか、或いは空の空気だとか、そんな大規模なものは流石に変わっていない。
だが、周囲一体には破壊の後が残っているばかり。複数の上級悪魔と、それの眷属。それに対抗するだけのエクソシスト。それらが戦えば、こうなって当然だった。
誰かがわざとやろうとしたとか、そんなことは一切ない。単に強大すぎる勢力がぶつかり合えば、こうなって当たり前だった。

だが、その結果に彼女が納得できるかと言えば、それは否であろう。

「ルネ……大丈夫？」

ルネに寄り添い、ヴァレリーはその体に触れる。混血吸血鬼である彼女の体温は決して高くない。だが、それでも善良な誰かが隣にいれば、それはとても心が温かい。

数日療養し、多少持ち直したルネではあるが、この惨状をみて気丈で入られなかったようだ。

もちろん、今この場で何を言っても、仮面の男はただ笑うだけで取り合わなかっただろう。

今、仮面の男は真っ黒のバイク用ヘルメットに、なぜか猫耳のついたものをかぶっているが、その体の震えから笑っていることだけは伝わってくる。

「村か……流石に、数十人しかいない過疎な村というわけではないか。これは悲惨だ。全く悲惨だ。ああ、なんて可哀想なんだ」

建物の残骸さえ残っておらず、道などの地面さえも大きく抉られている。

ここまで破壊されていれば、流石にどれだけの修復家がいても、復元は不可能だろう。例えるなら、豆腐の上に描いた絵を、こそぎとってから復元するようなものだ。

もちろん、ルネは村の全員の顔と名前を知っているわけではないだろう。仲がいい奴もいただろうし、悪い奴もいただろう。全く無関係なものもいた筈だ。

だが、それでもこの結果は彼等を等しく犠牲者としていた。それほどまでに、この結果は眼を覆うものがあった。

「時に、レオナルド。創作では良くあることだが、戦闘能力のインフレではなく戦闘描写のインフレというものがある。一番顕著だったのが天元突破グレンラガンというロボットアニメだった。要するに、強い、もっと強い、もっともっと強いをずっと続けたところ、その破壊描写が際限なく大きくなるというものだ。言ってしまえば視聴者や読者に戦闘能力を分かりやすく伝えるための手法なんだが、これも都合というものが有る。つまりはストーリーの都合上、どう考えても破

壊の範囲がおかしかったりすることがあるのさ。ビルの中で使ったら間違いなく建物ごと吹き飛ぶはずの火力が、普通にキャラクターへの攻撃だけとして処理されたりな。ゲームならともかく、アニメやマンガでそれをすると、流石にちょっと緊張感が欠けるから、悲しいぜ。特に、室内戦闘で建物を壊さないことがルールに組み込まれた試合で、自分の寿命を削って大火力の攻撃をけん制もせずにぶっ放す教師志望とかがいてあきらかにおかしかったな」

ここでも、相変わらず仮面の男は絶好調だった。

この結果を目視して、上機嫌に拍車がかかっている。

彼女がなんの非もなく被害者であることが、たまらなく嬉しいのだろう。

良く調べたら、実は彼女はド悪党で、この村の住人が全員グルでした、とかそんなことは一切ない。この村はただの農村で、本当になんの関係もなかった。

ああよかった。これで本質を問うことができる。軸がぶれずに済む。

即ち、完全に被害者である彼女の復讐は、彼女自身が肯定するか否定するか。それがぶれずに済む。

「いっそ今日はここに泊まるか？　夜の星が綺麗そうだ。人工の明かりがないし、今日は雲もなさそうだ。きっと天体観測だってできるぜ。いいよなあ天体観測。古代からあらゆる地方でずっと行われてきたことだ。そう考えるとロマンが溢れてくるな。情緒があっていいとは思わないか？」

テントや天体望遠鏡を買いに行く勢いで、なにやら準備をはじめようとしていた。

しかし、それを否定するようにルネは首を振った。自分の口を押さえて、小刻みに震えてる。

ぶつける相手のいない怒りは一旦静まり、寂しさと悲しさがこみ上げてきたのだろう。

もう、誰も嘗ての彼女を知る者はなく、彼女がみた光景は一つも残っていないのだ。

それを、頭で理解していたのだろう。だが、心で納得してしまったのだ。

それが、辛くて苦しいのだ。

「今日のところは、もう……帰りましょう」

帰る、という言葉をヴァレリーは使った。戻るでも退くでもない、帰る。

始球空間というなにもない空間に、持ってきただけの建物が建っている。それがこの場の4人の帰る家だった。それを豪華と見るべきか、或いは貧相と見るべきか。

少なくとも今此処ではっきりとしていることは、仮面の男を例外として、誰もが余裕を失っているということだ。

帰った先には、この場の面々よりも尚深刻な、救われきっていない面々が揃っている。

誰もが若く、誰もが子供で、誰もが無力だった。

人間の精神は、眠りを浅くすることがある。おそらく、夜の襲撃を避けるための本能であろうが、今のルネには辛かった。彼女は、薬の助けがなければ、眠ることさえできなかった。もっと言えば、薬だって飲みたくなかった。

怖いのだ。何もかもが夢だったのではないかと。自分はまだあのベッドの上で身動きもできないままなのではないかと。

あの男は笑うだろう。それは当然だ、でも寝ないと死ぬぞ、と笑うだろう。だが、それでも……。眠るのが怖かった。

「ルネ？　まだ起きてるかしら」

「……まだおきてるよ」

ゆっくり、ゆったりと扉が開いて、ヴァレリーが顔を出してきた。暗い部屋でも、混血吸血鬼のヴァレリーにはきちんと把握できている。

ゆっくりと、一人で寝るには広いベッドに潜り込んだ。

「……眠れないの？」

「ああ……やっぱり怖いし、それに色々考えてね」
良く考えて、誰のせいにもせずに、自分の答えを出せ。
その場の勢いで暴走するのではなく、かといって綺麗ごとでごまかすわけでもなく。
自分の眼で多くのことを確認して、後々のことも想像して、その上で決断しろ。
彼の意見は極めて真っ当だった。
彼自身はともかく、彼の発言は極めて正しくて、感謝さえ覚えそうになってしまう。
一人で突っ走って、それでどうなっていただろうか。檻から逃げ出した実験動物程度の扱いしかされないのではないだろうか。
復讐者としてさえ扱われることさえなく、ただ暴れた人間として終わるだろう。
それだけならまだいい。同じ目にあったら、それはもうどうしようもない。
【いいことをいうやつがいいやつとはかぎらない】
奴にしてみれば、まったくの悪意だったとしても、それでも自分を蔑ろにしているわけではないのだ。
彼がどう思って自分を支援しているのかはともかく、考えなしに自分を支援しているわけではない。
おそらく、彼は自分自身の利益のために、他人に虚言を弄することを死ぬほど嫌悪している。
「アイツは、あのクソ三つ目は、誰かのせいにするのも嫌いだし、何かのせいにするのも嫌いなんだ。で、それを他人が言うのも嫌なんだろうさ」
自己責任。その四字熟語があの男の全てを構築している。
「そうでしょうね。三つ目さまは言葉が巧みで行動力も溢れています。おそらく、私達を騙そうと思えば、或いは傀儡にしようと思えばなんとでもできるでしょう。それをしないのは、誤解さえもさせたくないからでしょうね」
彼は真実しかかたらない。常識も語るし所感も語るが、嘘や曲解さ

えるようなことは絶対に言わない。出来ないことも口にしない。
「こうなってしまったのは仕方が無い。だけど、その後どうするかぐらいは自分で決めろ。そういうこった」
己を偽らないという意味で裏表がなく、しかし名前も顔も隠している彼は、自分自身というものをどこかにやっている。
だが、それでも誠意は示している。
決断すれば、本気の全力でサポートするだろう。
そういう意味では信用している。信頼は出来ないが。
「ですが、考える時間はいくらでもあります。まあ、一年も先延ばしにはしないでしょうが、それでも、もっと落ち着いてからでもいいと思うんだけれど……」
「……明日の朝だ。明日の朝、出した結論をあいつに言うよ」
それでも、ルネはヴァレリーの提案を蹴った。
確かに、いくらでも考える時間はある。考えているうちに、今の生活がなんだかんだと気に入って、風化するのかもしれない。
だとしても、こんな宙ぶらりんのまま、寝る前に悩む生活なんて真っ平ごめんだった。ルネという少女は、ようするにそういう少女だった。
「クソ三つ目ほど饒舌じゃないけど、ちゃんと言葉にして言うよ。それがアタシの答えだって、胸をはってね」
「分かったわ、ルネ。私はどっちを選んでも手伝うわ。私たち、友達じゃない」
「……うん、ありがと」

そんな女二人の会話はさておいて、夜更かしをしている男二人は、風呂で体をマッサージしてもらっていた。もちろん、上級悪魔にである。
「……時にレオナルド、お前やヴァレリーの能力は中々業が深い、そうは思わないか？」

「まあ、貴方に言わせればなんでも業が深いんでしょうけどね」
横になって指圧を受けている二人は、そんな世間話に興じていた。
相変わらず、レオナルドは聴き手に徹している。
「生命の創造、生命の改造、どちらも人間個人の限界を大きく超えているだろう。強いとか弱いとかじゃなくてな。正直あんまり好きじゃない。まあ、使えるから使うがな。というか、究極的にはどっちも似たような能力で、どっちも人間が良くやっていることだ。サラブレッドしかり、植物の品種改良然り。遺伝子操作なんざするまでもなく、人間はずっと昔から生命を利己的に扱ってきた。いや、生態系そのものさえも、完全に己が物としていた。この時代に、どれだけの原生林が残っている？　環境破壊だ植林だとか言っても、結局もう自然の姿をとどめた森林なんて、よほどの僻地にしか残っていない。まあ、天地の全てを欲するは人の業、ということだろう。問題はな、レオナルド。こういうのは個人が思いつきでしていいことじゃないってことさ」
その言葉には、確かにうなづくものがある。
便利だから、という理由でモンスターを生み出してきた。成功作や失敗作、試験作など大量に生み出してきた。
レオナルドにとっては、それが戦うこととイコールであり、つまり論理的に考えていたら死ぬしかないわけだ。
だが、今後はどうだろうか。ゆっくりと考える時間があるのであれば、それの是非を考える時間もあるということだろうか。
「空が飛べればそりゃたのしいだろうさ。海で呼吸できればそれは面白いだろうさ。太陽の光を浴びるのは気持ち良いだろうし、日常生活に不自由があれば改善したくなるさ。だけどな、今生きている自分を改造しだしたらキリが無いんだよ。分かるだろう？　吸血鬼の純血主義は、つまりは選民思想でもあるが、能力の優劣を意味してもいる。聖杯の力を研究し尽くせば、貴族連中は何処までも強く慣れた可能性があった。まあ、上位神滅具にはどの道無意味だろうが……」
「……いきなり問題がしょぼくさくなりましたね」
「そうでもないさ。おそらく、何代にも渡って聖杯での品種改良を重

ねれば、それだけでかなりの者が生まれていたはずだ。まあ、寿命が長い吸血鬼には難しいが。ただ、それはおそらく吸血鬼という種族ではないだろう。それはそれでいいのかもしれないが、吸血鬼の成れの果て、肥大化したエゴの塊になるだろうよ。そこまで行くと、吸血鬼だった意味が無い。まあ、それは自分が人間だから思えることかもしれないがな」

例えるなら、太古の魚が現代の魚になるか、爬虫類になったか、人類になったか。それほどの原型を留めぬ進化になるだろう。

もっとも、神の創造した聖杯に頼った進化など、聖杯の上限を超えられるものではないと思うのだが。

「自分の嫌いなところを減らして、自分の好きなところを増やして……まさに魔改造だ。自分がいえたことではないが、単なる整形手術をしている整形美人に過ぎん。それは元がどうであれ関係なく、整形外科医が凄いというだけの話だ。他人にリスクを押し付けて、何のデメリットもなく強くなり続ける。傷はすぐ治るし、弱点もない。永久に強くなり続けることができる。そう思い違えるだろう」

「違うんですか？」

「違うさ。自分自身の想像力の限界は超えられない」

彼らしくもなく、焼けた顔の男は暫く黙った。

本当に、饒舌な彼らしくもなく黙った。

「……そんなやつが、他人から嫌われないわけが無いだろう？　きっと、四方八方を敵に回して、それでも自分の勝利を過信する。阿呆臭い、結局のところ吸血鬼が貴族主義である限り、数の暴力には対抗しきれない。弱点が改善されて真の不死身になっても、結局不死身のままルネのようになるのだろうさ。想像力の欠如は悲しいもんだ、誰も自分を見つめず、着飾った自分だけを見るとはな」

「僕も、同じですか」

「自分が造ったモンスターに囲まれて、それで一生を終えて楽しいんなら、それで良いんじゃないか？　一方通行という男が、世界が滅びても生きているだろうけれども、滅びた世界で泥をすする日々、そんなのはごめんだといっていた。まあ、その通りだと思うぜ、結局人間

が人間らしく生きるなら、それは社会との折り合いをつけるべきだ。人間を超えたいんなら、力がどうとか寿命がどうとかじゃなくて、それこそ何も求めず欲さずの境地に起つべきだ。どれだけ力があっても、争ったりしているうちは人間だよ。そんな人間が自分は大好きだがな」

三つあるその眼は、何処までも遠くを見ていた。

明日もし君が壊れても　4

人間は地球で生きている。人間の理屈など、所詮人間にしか通じず、故に人間の思うがままに動くわけではない。

物理法則も自然災害も、結局のところ人間の都合を一切無視しておきている。それは人間を嫌いとかそういう問題ではなく、単にそういうものなのだ。

それに限らず、不慮の事故や事件は必ずおきる。保険や装備を整えても、結局それが活かせるかどうかははっきりとしていない。

ただ、それは備えることを放棄しろという意味ではなく、それでもできる限り備えろという意味だ。

結局人類も上位種に飼育されていないという意味では野生動物であり、生命球に閉じ込められているわけではない以上、自分の命が一秒後存在している保証はないのである。

人間は不慮の事故を予め知ることはできずとも、予め備えることはできる。そして、不慮の事故の後、自分がどう生きるのかを決断することもできる。

そしてそれは、ありきたりのものであれ突拍子もないものであれ、個人に委ねられている。

人間は失ったものを取り戻すことは出来ない。だが、新しいものを得ることはできるし、新しく道を選ぶこともできる。

だが、それは過去を捨てるという意味ではない。どのような形であれ、今までの人生と離れる必要がある。清算であれ、決別であれ。

「そうか、それが結論か。ルネ、それで良いんだな?」

故郷の跡地を訪れた翌朝、ルネは意志を秘めた眼で仮面の男の前に立っていた。

ヴァレリーもレオナルドも、二人の会話に口を挟むことなく、ただ聞き役に徹している。

仮面の男は、白い布に手と眼の描かれた覆面で顔を隠している男は、饒舌さを押さえて、その結論に至った経緯が語られるのを待って

いた。
「ああ、アンタに世話になる」
　怨恨を捨てたわけではないだろう。だが、ルネは静かに吊り眼で仮面の男に己の心中をかたる。
　決して理論的ではなくとも、自分の素直な気持ちと、その決断を伝える。
「ここでの穏やかな暮らし、それができる。まあ、アンタに間借りしているのは不愉快だけど、まあ我慢すればいい。私はここ以外だと、悪魔だかなんだかに狙われるんだろう？　私だけならまだいい、ってことはない。捕まってあんな目にあうのはごめんだし、四六時中おびえるのも真っ平だ」
　そういう生活をしている人はいるのだろう。そういう生活が基本の生物もいるのだろう。だが、ルネは嫌だった。別に戦士としての家系に生まれたわけでも、使命を帯びた勇者でもない彼女は、そんな修羅の道を拒んだ。
　朝はのんびりとおきて、暖かくて簡単な食事を食べ、昼は運動して仕事をして、夜はのんびりと音楽を聴きながら本を読む。そんな真っ当な暮らしを彼女は望んでいる。
「激しい喜びも、激しい怒りもいらない、か」
「そうだ。私にはそんなものはいらない。この神器も、正直迷惑なぐらいだ。だから、今後の人生にこれまでの続きを望んでる。……もう、誰も私を知らないけど、私には新しい友達と新しい体と、新しい土地がある。だから、又やり直したい」
　強い意志を込めた目で、彼女はそう宣言する。あの研究所で、いや今自分達が暮らしている研究所で、誰よりも過酷な実験を受け、それでも意思を失わなかった彼女は、強い意志でそう宣言した。
　それほどに強い意志がなければ、そう生きることは出来ない。過去を捨てずにやり直すことは出来ない。
　前向きな気持ちには、絶対になれない。
「そうだ、やり直す。また勉強して、家事をして、愚痴を言って、メシ食って、寝て、起きて……できれば、恋もしたいし、結婚もしたいし、

せっ……しゅ……子供だって作りたい」
やや年頃らしく恥らって、それでもルネは未来地図を広げる。
特別でもなんでもない、ありふれた、あって当然だと思っていた夢を口で語る。

「そのためにも、私は研究所職員の遺族、全員を『ぶっ殺す』」

それまで語った言葉と同じ程度の、力の入り方の口調で、そう宣言した。
物騒でいて、当然の言葉を。彼女は当然のように語った。
当事者ではなく、ただ加害者の家族だというだけの、一般の悪魔を殺すと宣言した。
「私は、上手い飯を食ってすやすや寝て、おびえずにのんびり今までどおりに生きていたい。それには、きっちりとしなきゃいけない」
吊りあがったその眼には、熱量があるというよりは、狂気があるというよりは、ただ決断したものの持つ硬質さがあった。
「私の家族が全員死んで、私の知り合いが全員死んで、私の故郷が全部吹き飛んで。それであの研究所のクソ職員どもの家族が生きていることに、私は納得できない」
自分は今までのすべてを失った。だというのに、その原因になって連中、その家族はまだ生きている。まだ失われていない。
八つ当たりだということは、分かっている。女子供、老人がいることだって分かっている。彼等にはなんの非もないことだって分かっている。
「だから……ぶっ殺す」
それでも、彼女は自分で考えて、自分で決めていた。
それでも『ぶっ殺す』と。
「良いぞ、素晴らしい。【だから私は……殺しに来た】【『納得』は全てに優先するぜッ!!】今正に、君は決断したんだ。おめでとう、復讐者の誕生だ。ハッピーバースデー!」
正に、望んだとおりの返事だったのだろう。仮面の男は布越しに少

女の大人への第一歩を祝福した。流石に、クラッカーを使っての無駄な演出は自重している。

誰に決められたわけでもなく、今此処にある事実から自分の結論を導き出す。それが大人のあるべき姿だった。

「ヴァレリー、君はどうする？」

「もちろん、手伝います」

仮面の男の問いに、迷いなくヴァレリーは頷いた。そんな決断は、彼女を救うときに既に済ませている。

聖女や聖母のように、博愛をかたることはもう出来まい。ヴァレリーは順位を造ってしまった。少なくとも、救うべき誰かを、ルネとしてしまった。

復讐を円満に終え、また普通に生きていくために。その復讐を手伝う。それが彼女の決断だった。

「レオナルド、君はどうする？」

「もちろん手伝いますよ、三つ目さん」

「ほう、どうして？」

「貴方達が死ぬと、僕が困るからです。だから全力でぶっ殺します」

極めて、実際的な話だった。誰かを言い訳にするのではなく、自分が安全に生きるための判断だった。

この世界を造っている仮面の男、その死もさることながら、残る二人だって死んだら困る。仮面の男と、二人っきりというのは辛そうだからだ。

自分の利益のために、レオナルドは自分の手を改めて汚す決断をしていた。

「いいねえ、ルネは決別のために、ヴァレリーは慈愛のために、レオナルドは利益のために、そして自分は欲求のために。素晴らしい、実に面白くなってきた。自分達は正に運命共同体というわけだ。……これはもはや、桃園の誓いに等しい……よし、そうと決まれば話は早い……刎頸の契りを交わすとしよう。何事も形から入るものだ。正式な形は知らんが、こういうのは気分だ、気分」

仮面の男は自分の顔を隠していた布を剥ぎ取ると、ドン、とミネラ

ルウォーターのペットボトルと、杯を四つ机に並べた。
「【ボートが離れたのなら、おまえたちは裏切り者となるッ！】これから自分達は悪魔の貴族連中を相手に、思想は違えども団結して復讐を行う。それは悪魔社会全体に喧嘩を売る行為だ。故に、失敗すれば全員死刑……ないし、実験体となるだろう。少なくとも、ろくなことにはならないはずだ。【僕だって……お前達の為なら死んでやるよ】その上で、自分達はここに誓おう。それでも何の罪もない研究所職員の遺族を、老若男女を問わず全員『ぶっ殺す』と！」
まだ生まれてもいない胎児を、生まれ手間もない幼子を、青春を謳歌している少年少女を、働き盛りの若人を、穏やかな秋を過ごすご老体を。
悪平等ここに極まれり。貴賤や出生、年齢や性別。いずれの命をも価値が等しいとして、ただ加害者の関係者というだけで根こそぎ全員『ぶっ殺す』。それがこの場の４人の決断だった。
「……ああ、分かってる」
「覚悟は出来ています」
「絶対成功させましょう」
その行為にどれだけの意味があるというのか。
ヴァレリーとルネはともかく、レオナルドと仮面の男は他の面々と強いつながりがあるわけではない。
この固めの杯の意味を４人がどれだけ詳しく知っているのやら。
だとしても、４人は各々が決断したことを疑わない。全員真剣に、命を懸けて何の罪もない犠牲者遺族を『ぶっ殺す』と決めていたし、それを互いに疑っていない。
だとしても、この行為には決起としての意味があった。
「【お前はオレの子だ。だがお前はお前だ。好きに生きろ。一つだけ誓え、絶対に仲間を裏切るな】全員で同時に飲むとしよう。いくぞ、せーの……」
「待て」
水杯を手に、ルネは全員を止めた。
飲むこと自体を思いとどまったわけではない。

単にその前にするべきことがあるというだけのことだった。
「おい、クソ三つ目、いい加減名乗れ」
その眼には、先ほど以上の決意、あるいは先ほどさえ毛ほどにもこもっていなかった殺気が込められていた。
焼けた顔の男は、ぴたりと動きを止めた。
なにが何でも名乗らなかった男は、焼けた顔を晒すことをためらわなかった男は。
ここで、動揺を隠せなかった。
「……別に、名前なんてどうでもいい。アンタなんてクソ三つ目で十分だ。だけど、私達に名乗らせて、それで未だに名乗らないってのはどういう了見だ。名前も名乗らない奴と約束なんてできるか」
その言葉は、確かに正当だった。今更、この男の出自や能力の詳細、それらを知っても、この場の三人はなんとも思わないだろう。だが、名乗らないということh、こちらを信用していないということだ。そんな相手と、約束なんてできるわけが無い。
「ルネ……君は」
「ああ、そうだ。私の名前はルネだ。クソ三つ目、アンタの名前はなんだ?!」
名乗る。たったそれだけのことに、焼けた顔の男は暫く口を開け閉めしていた。
何もかもを煙にまいていた男はここで、ようやく地を晒していた。
ルネだからこその、不要で必要な質問。ヴァレリーもレオナルドも、仮面の男を恐れて、畏れていた。故に聞けなかった。聞こうとさえ思わなかった。
だが、ルネだからこそ、仮面の男に問いただしていた。
「……だ」
「え?」
やや小さい声で、らしくもなく篭るように名乗った。
「〇〇〇×だ。もう、誰も覚えていないし、誰もそう呼ぶことはないがな。だから×、今までどおり三つ目で頼む」
時折見せる寂しさが、最前面に押し出されていた。

日本人、の名前ではあるようだった。だが、それを知っても、３人としては特に反応が出来ない。特に聞き覚えのある名前ではなかった以上、なんとも形容しがたかった。

だが、この男の抱えている何かが、この男の万能性をもってしても解決しようとさえ思えぬ、無理難題であることは察しがついた。

「分かりました、三つ目さん」

「ええ、名前は覚えておくだけにします、三つ目さま」

「……ああ、クソ三つ目、でいいんだろう？」

三人は、それ以上なにも聞かなかった。そして、改めて杯を口の高さに持っていく。

焼けた顔の男もまた、無言で杯を構え、他の面々と同時に口につけ、一気に飲み干した。

「……さあて、じゃあ復讐するか」

飲み干して、ようやく口を開いた名もなき男。彼は再び顔を布で覆うと、勢いを失いながらも、それでも話を前に進める。

自らの取り返しのつかない後悔を振り払うように。

紅蓮の弓矢　1

「さて……ルネ、君はぶっ殺すといったな？　ぶっ殺すという言葉には雄雄しさがある。君はただ殺すんじゃなくて、納得するためにぶっ殺すといったな？　なるほど、それは過酷だが、それもありだろう。ぶっ殺す……【『ブッ殺す』と心の中で思ったならッ！　その時スデに行動は終わっているんだッ！】という言葉はあるが、それはこの状況にはそぐわない。遺族が死ねば満足なのではなく、殺すのか。そうか、いい言葉だな」

水杯を飲み干した焼けた顔の男は、布で再び頭部を隠した。

そして、椅子を起ちその場の3人に陽気な調子を取り戻しつつ、できるだけ楽しそうに語り始めた。

「復讐というものには色々種類がある。もちろん、殺害はその際たるものの一つだが、手段の一つでしかない。経済的に抹殺する、つまりは資産を根こそぎ奪い、仕事さえも奪い、借金を背負わせるというものがある。もちろん、それなりに手間はかかるが、それなりに屈辱的だろうし、スカッともするだろう。それは当然嫌なんだよな？」

「ああ、なんでそんなことを」

「ああ、安心しろ。別にそうしろって話じゃない。これは君の復讐だ、君が納得しないと意味が無い。君が納得しない方法で陥れても、全く意味がない。まあ、それはそれで面白そうだが、それは又の機会に取っておくとしよう。それで、社会的に抹殺するのではなく、極めて生物学的に抹殺するわけだ。だが、それだけでは足りないな。ぶっ殺すとは言わないな」

「……どういう意味だよ」

やや慎重になりつつ、ルネは問い返す。

実際のところ、これはルネの復讐だ。それは全くぶれていない。だからこそ、この男に私物化させてはならない。

あくまでも自分が自らの意志で復讐するのであって、この男の遊びではない。

無計画な自分に代わってこの男が色々考えているが、それでも自分

の意に沿わぬ提案であれば、それは拒絶しなければならない。
「わら人形に釘刺して、デスノートに名前かいて、それで殺せて納得できるのかって話さ。極端な話、地球全体絶対破壊ミサイルやら地球破壊爆弾やらジャスタウェイやら明神タケルやらボルガ博士を冥界に放り込んで、冥界という世界そのものをぶっ飛ばしても、犠牲者の遺族は死ぬだろう。だが君は納得しないだろうし、そもそも関係ない連中が死にすぎる。坊主憎けりゃ袈裟まで憎いとは言うが、そんな無駄に壮大な八つ当たりは復讐ともなんともいわん。ただの子供の癇癪だ。ルネ、その場合は流石に止めるぞ」
「誰がするか！」
なにやら意味不明な単語を並べたが、つまりは特定の個人を殺すのではなく、その所属している国を強力な爆弾で吹っ飛ばすか、という話のようだ。
もちろん、そんな誇大妄想は真に受けない。ただ、レオナルドあたりがその気になれば、単独でも可能らしいが。
確かに、悪魔という存在はあまり快くは思っていない。あれだけの事をした相手が悪魔であり、同時にそんな職員しか知らないのだから当然だ。
とはいえ、人間の生血を主食とするヴァレリーはイイ奴だし、恩人だ。
悪魔社会そのものが加担していたならばいざ知らず、一部の犯罪者でしかないらしい研究所の職員とその親族を恨んでも、種族そのものを敵視するほどルネは血迷っていない。
「そうか、それはよかった。少なくとも大量破壊兵器の使用は望んでいないわけだ。つまり、不特定多数の悪魔を巻き込む気はない。そう判断していいか。それはいい、本質は見失っていないようで結構だ。だが、それでもまだ　殺し方は沢山あるぞ、例えば毒だ。毒蛇を仕込むとか、ダムに流すとか、ガス爆弾とか、食事に混ぜるとか、酒に混ぜるとか。金田一少年とかコナン君とかが大好きそうな展開だな。悪魔に青酸カリとか効くか分からんが、調べればいいだろう。こっちの身柄も捕捉されないだろうしな。どうだ、そうするか？」

「……それは、駄目だ」
ルネはとりあえず否定した。
饒舌な仮面の男に比べて、なんとももどかしい。だが、それでも駄目だった。
なんというか、それはぶっ殺した、ではないと思う。
「なんだか、嫌なんだ」
「そうかそうか、まあ嫌なら嫌でべつにいい。確かに殺したという感覚も薄いだろうしな。じゃあ狙撃はどうだ、超一流のテロリストに、金を払って仕留めてもらうか？　きっとどんな無茶な願いでもきっちり無理矢理叶えてくれるぞ。というか、自分がしようか。焼き殺すも刺し殺すも思いのままだ、安心しろ、目の前できっちりと殺してやる」
「それは、もっと駄目だ」
「そうか、自分の手で殺すか。いいぞ、そうこなくっちゃな。じゃあとっ捕まえて拘束して、一人一人を拷問してから殺すか。なに、気にするな。君がされたことをそのまますればいい。簡単だろう？」
「それは、違う……」
ぶっ殺す、という言葉がじっくりと分析されて解体されて浮き彫りになっていく。
ヴァレリーもレオナルドも、その光景に息を飲んでいた。
ルネという少女の、その望みがゆっくりあらわになっていく。勝気な彼女の、そのすべき復讐が、言葉を尽くすことで本当の姿になっていく。
「つまりだ……どっかのバカみたいに終末思想に取り付かれて、無関係な連中を巻き込んで壮大な自殺をするわけじゃない。
どっかの推理小説の犯人のように、即効性や遅効性を問わず、ただ苦しんで死ぬのを眺めるのでも足りない。
なんだかんだと理由をつけて、金を払って自分の復讐を人任せにして、スナイパーやら始末屋やら仕置き人やらに丸投げするわけでもない。
自分がされたのだからと、されたことをそのまま返していじり倒す

わけでもない」
　調子を取り戻した、顔の見えない男。
　彼は大胆不敵にして豪快極まる計画を口にしていく。
　それこそ、彼女の望みであることを明らかにして。
「生きていることが許せない犠牲者の遺族とその関係者だけを、自分の素性と目的を明かした上で、君自身の手で凶器を握り締めて、一撃で頭をかち割ってやればいい」
　３人は体を硬直させる。
　それは、犯罪ではなかった。
　それは、殺人ではなかった。
　それは、修羅場ではなかった。
　しかし、容易く想像ができた。
　それは断罪であり、処刑であり、土壇場だった。
　罪人を捕らえ、拘束し、罪を数え、正義の元に道理を通す。
　無法者とは程遠い、ある種の完成された暴力の形だった。
「事前に教えれば、逃げるかもしれない。誰かに助けを求めるかもしれない。だが、それはそれで、連中の正当な権利だ。逃げれば追いかければいい、守られているんなら引きずり出せばいい。【警察や軍隊が出ようが絶対に退くな】。悪魔には悪魔の都合があるだろうが一切聞き耳を持つな。こっちはこっちの都合で動けばいい。これは何一つ疚しいことのない、報復攻撃だ。どうせ連中はこっちがどんな理屈を振りかざしたって、連中の利益に関わることでは絶対に妥協しないからな。不当なら憤って敵対し、正当だったとしても、なんやかんやとこっちを否定する。犯罪者の家族に罪はない、許してくれというだろう。バカにしているとは思わないか？」
　想像できる、当然の反論。彼等には実際罪はない。彼等はただ犯罪者の家族だったというだけのことで。
「じゃあその連中から何かを奪うことができるのか。こっちが納得するまで徹底的に叩いて叩いて打ちのめせるのか。法の裁きを受けたなどと抜かして、それでこっちが納得するとでも思っているのか。なんで地球で罪を犯した連中を、冥界の法律で裁く。バカにしているだ

ろう？　そっちがその気なら、こっちもその気だ。無理が通れば道理は引っ込む、道理に勝る刃なし。仮面ライダー2号のごとく高々と目的を掲げて名乗りを上げればいい。目的は「復讐」、名前は「ルネ」とな」

ふむ、とルネは想像する。その行いは決して正義ではないだろう。だが、それが一番しっくり来るのも事実だった。

自分が目的を告げれば、逃げるかもしれないし、抗議するかもしれない。遺族ということで殺しに来るかもしれないし、どこかの『善意の誰か』がかばうかもしれない。

逃げれば取り押さえ、抗議を聞き流し、返り討ちを返り討ちに、善意の誰かを押しのけて。

泣く子供を、罵る女を、孫だけはと叫ぶ老人を、愛する夫を呼ぶ妊婦を。誰も彼もを押さえつけて叩き割る。

スカッとするわけではない。だが、想像すればそれは納得できる光景だった。

そう、それが自分にはふさわしい。納得するためだけに殺すのだから。

「……私は、何をすればいい」

「とりあえず、神器を鍛えることだ。安心しろ、ちゃんとお膳立てはしてやるし、仇を殺すのは君だけ。遺族に報復の意図を伝えるのも、逃げた相手を見つけるのも、抵抗する相手をねじ伏せるのも、邪魔を蹴散らすのも、全部全部、自分達がなんとかしてやる。だが、殺すのは君だ、君がその手で、君の神器で一つ残らず頭蓋を叩き割れ」

「……」

「そんなことで納得できるか、と思っているな？　確かに復讐は簡単すぎるとすっきりしない。だが安心しろ、簡単じゃないぞ、神器を使いこなすのは」

ルネの不安を先回りして、仮面の男はその無意味な危惧を嘲る。

「それなりの努力と、それなりの実感。それなりの満足と、それなりの達成感があるさ。なにせ神滅具ってのは君と同じように、特別な生まれを持たず、何の才能もなくて、それまで何の努力もしなかった、ス

ケベがとりえの高校生が、一年もたたずに世界最強レベルにまで至れるんだからな。運よく美人に拾われて、運よく仲間に恵まれて、運よく知り合う女の子は可愛い子ぞろいで、運よく勝てる程度の相手とぶつかって、どんな目にあっても助けは間に合って、試合には勝てるんだからな。全く馬鹿馬鹿しい代物だ。そんなものが人生について回るなんざ、君も全く運が無い」

とても捨て鉢に自嘲をしているのか、仮面の男はおどけながら笑う。

それは一種の自傷行為にも見えて、哀れだった。

「才能が無いってのは、どんなに努力しても結果が出せないやつのことを言う。子供の頃から一つのことに打ち込んで、膨大な時間を奉げて、他に一切眼を向けなくて、それでも眼が出ない奴を言うんだ。何もかもを捨てて、我慢して、孤独にさいなまれて、怪我に泣いて、伸び悩みに焦って、超えられない壁にぶつかって……。たかだか数ヶ月、死ぬような思いをした程度で最強に近づけるんだ、大した話だと思わないか？　まあ、そんなことは些細なことだ。きっと社会のために、子供のために戦っているんだろうさ。それが正しくて、善くて、良いんだろうさ。社会と個人のために戦える、ナチュラルボーンヒーローなんだろうさ。自分は御免だがな」

……ふぅ。

一息に憤りを噴出させややのんびりと、硬直しているルネとレオナルドに声をかけた。

「ルネ、とりあえずレオナルドのモンスターを相手に戦ってみろ。上位神滅具だから、一人倒すのだって大変なはずだ。レオナルド、相手をさせてやれ」

「分かった」

「はい」

二人が頷くと同時に、仮面の男はヴァレリーに顔を向けた。

「ヴァレリー、後日宣戦布告する。そのときまでは、混血吸血鬼や神器持ちの相手を頼む……自分も色々準備があるしな」

「宣戦布告には、私も同席ということですか？」

「ああ、相手はギャスパー・ヴラディの保護者にして魔王の妹、リアス・グレモリーだからな」

犯罪者になる前に、逢える内に逢っておけ。そのささやかな嫌がらせか、或いは気づかいか。

いよいよ、神滅具を持った四人が世に名前を出そうとしていた。

紅蓮の弓矢　2

リアス・グレモリーという悪魔がいる。若く才能に溢れており、家柄もあるのだろうが、上級悪魔には珍しく情に篤かった。

多くの、過酷な環境にあったものを好んで眷族に引き入れ、手厚く保護していた。

そんな中に、ギャスパー・ヴラディという元混血吸血鬼がいた。

視界に入った物の時間を停止できるという強力な神器「停止世界の邪眼（フォービトゥン・バロール・ビュー）」の所有者であり、強大な潜在能力を秘めていた。

だからなのか、彼は自分の能力を一端であれ制御できず、無意識に他人の時間を止めてしまっていた。若いということもあって上級悪魔であるリアスであっても完全な制御ができず、彼女の通学している駒王学園の旧校舎に封印、幽閉されていた。

とはいえ、当人の消極的な性格からその状況を善しとして、ネットで悪魔の仕事を行い、リアスに貢献していた。

人とつきあうことを恐れている彼が、幸福かどうか。食事を与えられ、迫害されることもなく、仕事を与えられているギャスパー。不運ではないが、幸福ではあるまい。

だが、そんな彼の幽閉されている一室の扉を、静かにノックする音と、懐かしい声が聞こえた。

「ギャスパー、いるの？」

一瞬耳を疑い、それでも起き上がっていた。

嘘でもよかった。自分を救ってくれた彼女の、その声が聞こえたのであれば、それで……。

「このたびは、真にありがとうございます。彼女は彼のことを気にかけていましたから。こうして逢わせることが出来て、本当に感謝しております。名前も名乗らない男が封印されている吸血鬼に逢わせて欲しいといって、警戒しながらも面会を許してくださった。その寛大なお心に敬意を」

包帯でグルグル巻きにされた顔の上から、サングラス。いかにも怪しい風体の男は、慇懃無礼ささえ感じさせながら、ギャスパーとヴァレリーの面会している部屋の前で、眷属に守られたリアスに礼をした。

不審人物であることを全身全霊をとしてアピールしてくるこの男は、しかし本当にギャスパーの恩人を連れてきて、あわせていた。

「……正直、あの子にはもっと活発になってほしいと思っているの。だから、疑わしかったけど、とりあえず信用してみることにしたわ。ありがとう、あの子は喜んでいるみたい」

警戒を崩さず、しかし素直な気持ちを伝えるリアス。

そして、やや引け目を感じているのか、覆面の男に対して饒舌だった。

無理もない、こんな人気のないところに幽閉しているのだから、ヴァレリーの保護者に好印象を与えているとは思えない。

「私の実力不足で、こんなところに押し込めてしまっているわ……」

「何を仰います！　聞けば貴女はヴァンパイアハンターに殺されたギャスパー君に変異駒を使用して転生、救命したそうではありませんか。そんな貴女をどうして呪えと？　彼の境遇はヴァレリーから聞いております。それを思えば、こうして地位と徳のある方に眷属としていただいたことは幸運でしょう。世の多くのヒサンな転生悪魔に比べれば破格の待遇でしょうね」

やや悪魔全体の批判をしつつも、リアス個人はベタ褒めである。それは、吸血鬼ほどではないにしても純血主義の悪魔であるリアスには、否定できないことだった。

「彼は好戦的ではなく、他人を傷つけるぐらいなら引きこもるような性格と聞いています。それを思えば、いっそこのまま幽閉していただきたいぐらいです。まあそれは行き過ぎですか。彼にも分かち合う喜びを感じて欲しいものですね。一人で悶々を抱え、他人との接触をおびえるなど、この世に生を受けた甲斐が無い。そのあたり、リアス様ならばできると信じております」

「……ええ、もちろんよ。私の可愛い眷属ですもの」

「眷属を可愛いと仰りますか、それは素晴らしい。彼は何かと面倒なものを抱え込んでいます。それをどうか受け止めてやってください。自分にとってもヴァレリーは可愛いですからね。彼女の弟分は自分にとっても可愛いのです。ギャスパーの笑顔はヴァレリーの笑顔、彼の健やかな生活を祈っているのですよ」

良く喋る男だ。それがこの男と対峙しているリアスと、その眷属の印象だった。

並べられている言葉が嘘であるかののように、やたらめったら大げさな振る舞いをしているが、それでも言葉そのものは嘘ではないと思ってしまう。

いや、そうであって欲しいと思っている。そうでなければ、この行動の意味が分からない。

「……それで、貴方は今どこかの組織に所属しているの？」

「いいえ？　自分は気楽な独り者です。しいて言えば、自分が自身の主であり、その保護下にヴァレリーがいる状況でしょうか。スポンサーもいないので、生活費やらはもっぱら盗品と盗んだあぶく銭でまかなっております。何分、自分は強盗ですので。ほしいものがあれば金など払わず、持っている奴の家に押し込んで盗む。そういう意味では、ヴァレリーも戦利品ですね。彼女は吸血鬼の領地に殴りこんで、分捕ってきたものですから」

「……え？」

余りにもあっけらかんと、自らを犯罪者であると名乗った男。

その顔を隠している風貌、名乗りもしないのに事前に手紙で連絡するなど。

確かに、犯罪者であることは明白だった。もしもそうでなかったらなんだというのだろうか。嘘つきは泥棒の始まりというが、正直な泥棒もいたものである。

「下がってください！」

剣士の少年がリアスを守るように、魔剣を生み出して一歩前に出た。

小柄な少女もそれに続き、黒髪の女性も雷を迸らせる。

「……何が目的なの!!」
「ご安心ください。本日貴女から奪うものなど、何もありません。というか、貴女から何かを奪うなど恐れ多いですね。そのようなことがあろうはずがございません。そんなことをしたらギャスパー君に迷惑がかかって、ヴァレリーが悲しむじゃないですか。そんな残酷なこと、自分にできるはずがありません。野暮なことはいいっこなしですよ、今日のところはこうして感動の対面に水を差さずに終わらせましょう。貴女にはただ、この手紙を兄上に渡して欲しいだけなのです」
そういって、豪華な装丁のされた葉書をリアスたちの前に出した。
しかし警戒している面々は、手紙など受け取るはずもない。まして宛名が魔王であれば、尚のこと受け取るわけが無い。
そんな当たり前の反応を、やはり想像していた覆面の男。彼は道化師のようにあからさまに驚くと、顔も見えないのに表情が豊かであるように、感情を込めて悲しげに指を額に当てた。
「警戒させてしまいましたか、残念です。残念ですが当然です。では、この手紙を受け取りたくなるような話をいたしましょう。聞くも涙、語るも涙、見るも涙、触るも涙の物語でございます。なにも悪くないのに、まるで誰かが仕組んだが如き哀れな少女の物語です。まるでどこぞのヘイト小説の如き、種族差から来るいわれもない不当な暴力を受けた彼女のバッドエンドな物語……」
「……聞く気はないわ！　ヴァレリーを連れて、いえ置いて一人で帰りなさい！」
「泥棒風情と話をするわけにはいかないと？　ははは、全く仰るとおりだ。ですが、貴女は聞きますよ。聞かないと後悔する。なぜかって？　貴女は優しい女性ですからね。この手紙が貴女に送ったような面会希望ではなく、犯行予告であれば、それは被害者である一般の上級悪魔への裏切りです。ま、良いでしょう。そう仰るのであれば、後日ニュースで大量殺人の報道を受けて、一人でショックを受けてください」
「どういうことよ！」

わざとらしく、拗ねたように背をむける覆面の男。
ギャスパーやヴァレリーに聞こえるかもしれない。そうと知りながら、リアスは声を上げた。
「簡単な話です。この手紙には我々が殺害する予定の上級悪魔の、リストが載せてあるのですよ。これを貴女が受け取らなくても、魔王様が読まなくても、真に受けなくても、どの道我々は皆殺しにしますから。ゲームなら手紙を受け取らなければイベントが進まず、そのまま犯行はおきません。ですが、これは現実ですので、犯行声明が受け取られなくても、『はい』と『いいえ』の選択肢がずっと現れるわけではありませんし、いっそここで破り捨てましょうか？」
「聞くだけ、聞くわ」
「賢明な判断です。どうせ聞くだけ無料ですからね」
「ヴァレリー！　……よかった、僕と一緒で親切な人に助けてもらったんだね!?」
「ええ、親切な人？　……親切、親切、しん、せ、つ？」
慈母の如き包容力を持った彼女は、しがみついてきたギャスパーを受け止めつつも、しかしギャスパーの言葉に歯切れが悪かった。
親切、という言葉の定義を自分の中で定義しなおしていた。
彼は自分だけではなく、同じ境遇の混血吸血鬼を根こそぎ救出してくれた。今のところ、彼等はそれなりに幸せである。
それを思えば、親切とも言いたくなる。彼にとってヴァレリー個人は有益だが、ヴァレリーの要望を聞くことは利益にならない。しいて言えば、ヴァレリーを縛る鎖が増える程度だろうか。
当人が全力で悪をアピールしているので、そう思えない。そのあたりも、彼が虚偽を嫌っていることの現われだろう。
「あの！　僕と一緒に、また暮らそう！　僕、こう見えても結構稼いでいるんだよ！　それにリアス様だって優しい人だし」
どうやら、強すぎる力によって封印はされているようだが、不満はないようだ。
正直に言ってルネのことがあったので、ギャスパーのことは心配

だった。だが、どうやら『親切』な悪魔に保護されていたようだ。一安心である。

「……ギャスパー、聞いて」

「え？」

「今日は、お別れを言いにきたの」

復讐者になると知って、治療してしまった。その責任を果たすために、自らも犯罪に、殺人に手を染める。その覚悟を伝えるために。もう、逢えないことを告げるために。

「貴方が違法研究所の職員を、全員殺した。そして、ルネという少女はそれだけでは我慢できず、遺族も殺そうとしていて、そしてヴァレリーもそれに協力を?!」

「ええ、全て彼女達自身の意志です。まあ、信じる理由はないでしょうが、それでも結論は同じ。あなた方悪魔は、このリストにある上級悪魔を全員保護しなければなりません。なにせほら、純粋な悪魔は絶滅危惧種ですから。伝説ポケモンと一緒で、一回死んだら沸きませんからね。女子供も結構いますし、全力でかくまってあげてください」

違法研究、あるいは悪魔による故郷の破壊、そして強力で稀有な素質。

どれもが、リアスの眷属にとって他人事ではないキーワードだった。

この男自身がどうであれ、その少女に共感を抱かざるを得ない。

「……止めなかったの？」

「止めませんでしたよ、そのかわり教唆もしませんでした。どちらを選んでも協力するとだけ伝えてね。彼女自身苦悩していました。なにせ恩人であるヴァレリーも巻き込むことになりますからね。気にするな、とは言いましたが、それでも気になるのが人情でしょう。これも良くあるテーマですよね、全てを失ったあとに、新しく友人を得て迷うというシチュエーションも。家族の仇を討つべきか、今の生活を守るべきか。大抵、新しい生活も踏みにじられて復讐の炎が巻き上

がるんですが、これって論理のすり替えですよね。復讐は肯定されるのか、されないのか。一度はやめたけど、また被害を受けたから許さなくなるとか。結局その復讐は一度目のつづきなのか、二度目のものか、それとも両方か。一度は許しても二度目は許さないということなのか、咽元を過ぎれば熱さを忘れたというだけなのか」

「……いまからでも、止めなさい！」

「どうして？　彼女の選択を尊重しただけだ。誓って正しい情報を隠したり、間違った情報を与えたりはしていませんよ？」

「だとしても……そんなことをすればどうなるか……ヴァレリーもルネという子も、犯罪者として裁かれてしまうわ！」

それは本心からの説得だった。陶酔から来る悲劇的な演技ではなく、冥界の利益を損ねるという損得勘定でもなく。ただ一重に、可哀相な少女への気遣いだった。

同時に、嘆願でもある。彼女達を止められる男への、無益な争いを治めて欲しいという願いから来るものだった。

「報復だというのなら、既に職員の遺族は傷ついているわ！　何がなんだか分からないうちに家族が帰ってこなくなって、それで悲しんでいるはずよ！」

「ふむ……」

「上級悪魔を殺害するなんて、お兄様も全力で阻止せざるを得ない。貴方達が神滅具を四つも持っていても、それでも国を相手に勝てるわけが無い！　それに、成功してもずっと狙われるわ！」

「そうですね」

「上級悪魔には家族以外につながりがあるわ。国が動かなくても、家の誇りを汚されたとして、親戚が動いて……きっと、捕まればもっと酷い目に」

「間違いありません」

うんうん、と大きく首を縦に振る。頷くを超えて、遥かに大きくゆすっていた。

真面目に聞いているようには見えないが、それでもリアスの言葉を一つたりとも否定しなかった。

「今なら、まだ間に合うはずよ！」
「そうかもしれません。自分が泥をかぶれば、案外3人はすくえるかもしれません。それも選択肢としてはありだったでしょう」
ここで、ようやくオーバーリアクションはなりを潜めた。
しかし、真面目に語り始めた彼は、それでもリアスの意向を否定した。
「想像しないわけではありません。貴方の眷属やそれに順ずる形に彼女達が納まり、それなりの幸福を得ていた可能性も。それはきっと、本当は素晴らしいことなのでしょう。自分は、それを否定できません。信じてはもらえないとは思いますが、自分も昔はそう信じていました。誠実に努力し、社会に貢献し、その対価として名誉や資産、地位や職務を得ると。世のため人のために生きる、そんな善良な市民としての人生を疑うことなく信じていました」
やや懐かしげに、リアスを、その眷属を見て語る。
それは、決して戻らない過去を写した写真を見るようで……不退転の何かを感じさせた。
「ですが、それでも退きません。自分で知って自分で考えて自分で決めること。それが人間の証明だと信じています。貴女の眷属も、強制されたり社会の常識にのっとって、主を慕っているわけではないはずだ。貴女の眷属が自分の意志で自分の主の命と名誉を守ろうとしているように、彼女達も情報を整理して熟考を重ねた結果覚悟を固めただけの話。それを否定することは自分にはできません。ゲームやマンガじゃあるまいし、主人公にだけ選択肢が与えられているわけじゃありません。正しいことを正しい人から言われて、それでも間違っていることを選んでも良いでしょう」
「でもそれじゃあ、誰も救われないわ！」
「確かにそうでしょう。ですが、既に言葉は尽くしました。言葉とは、情報や意志を相手に伝えるためにあります。情報という情報を既に受け取り、熟考を重ねた彼女達を言葉で、他人の意志や既に知っている情報で止められるとでも思っているんですか。だとしたら彼女達のことを軽んじてるとしか思えない。他人から情報や意思を伝えら

れて、それで行動を変えるのは、単に考えが浅かっただけでしょう」
「だったら、力づくでも止めないと！」
「なるほど、確かにその通りだ。復讐計画を実行に移せば彼女達は間違いなく不幸になる。ですが、しなかったらどうなるというんですか？　まさか、彼女達が我慢すれば全てが丸く納まるとでも？」
「……それは」
「貴女が自分で言ったことだ、既に遺族は傷を負っていると。傷を負った遺族が、まさかルネを許すとでも仰るんですか？」
小柄な少女が、びくりと硬直した。
自分の姉が、自らの主を殺したことを思い出したのだ。
自分の姉が何故そんなことをしたのか、妖怪の血ゆえか。どうであれ、彼の遺族は自分も恨んでいるに違いない。
「両手両脚を切断されて、拘束されて、人権と人体を蹂躙されて家族を殺されて、それで誰かが助けてくれてよかったね、で済むとでも？」
剣を構えた少年が迷いを見せた。
自分達が受けた実験を思い出したのだ。
聖剣を使えるようにするための、非道な人体実験。それによって、関係ないはずの聖剣さえも恨んでいる。
「故郷を失った少女が、直接は関係ないとはいえ、誰かを恨むのは正常でしょう。憎くて当然でしょう」
雷を帯びていた少女が、顔をゆがめた。
自分の母が殺されたことを思い出したのだ。
そのとき留守にしていた、ただそれだけの父を、未だに彼女は許せずにいる。
「家族を命がけで守るのは当然でしょう。相手が誰だろうと、するべきことは変わらない。であれば、家族の仇をとるのも相手を選びはしません。第一、彼女に復讐をあきらめさせるということは、彼女に我慢を強いることでしょう。彼女がどうして我慢しなければならないんですか。ただ強力な武器を宿していただけで、その利益を一切受けていなかった、全てを失った彼女がこれ以上耐えてなんになるのですか。何かをもとめて攻め込んだわけでもなく、対立していた組織によ

るものではなく、単に一方的な被害者になった故郷を焼かれて、それで何を飲み込めと。不幸がどうのというのであれば、とっくに関係者は不幸だ。第一、死んだ人間の数で言えば、このリストの全員を殺したって１０分の一にさえに満たない。同数を殺さないだけ、慈悲深いとは思いませんか？」

この男が本当はどう思っているのか。それは定かではない。

だが、この男の言葉は圧倒的に正しかった。

結局のところ、悪魔から見れば裁判もせずに他所の『ニンゲン』が、権利もないのに犯罪者を殺害したに過ぎない。これを討つのは法的に正しい。

だが、人間から見れば己の故郷を焼いた、憎い相手、その親族に過ぎない。やられたならば、やり返すのが当然であろう。

もう既に悲劇はおきている。

時間を巻き戻せない以上、リアス・グレモリーの善性は無力だ。

悪魔が被害者であり、加害者でもあり。

人間も被害者であり、加害者でもある以上。

言葉で解決できる段階はとっくに終了していたのだ。

紅蓮の弓矢　3

人間社会から見ればあだ討ちであり、悪魔社会から見れば犯行予告となった、仮面の男とリアス・グレモリーの邂逅。それはヴァレリーにとってギャスパーとの決別を意味していた。

独立した混血吸血鬼の一団の筆頭となった彼女は、もはや仮面の男の庇護から離れることは出来ない。故に、転生悪魔となったギャスパーとは完全に離れるしかなくなった。

無事を願って逃がした弟と、結果的に敵対することになった運命の皮肉。それによってこみ上げてくる涙を振り払いつつ、ヴァレリーはルネたちの待つ世界に帰ってきた。

対するに、どこかで晴れやかな、しかし懐かしそうな顔をしているのが包帯を解いた男だった。彼は顔もないのに、何故だか感情が露骨に目に表れる。

感慨にふけっているのか、彼らしくもなく暫く黙っていた。

とはいえ、その数瞬後にはペラペラとかたりだすのだが。

「ギャスパーって子は、元気そうだった？」

「ええ、力の強大さを持て余していたけど、私を誘うぐらいには気に入っていたみたい」

「そっか、よかったね」

「本当に、ね」

ルネはヴァレリーの覚悟を知っている。ここで不用意に向こうに残らなくてよかったか、などとは言わない。いえないのだ。

それは、自分へ復讐を思い直せといっているようなものだった。

だから、ただ喜ぶ。自分達のように利用されていなかった彼の安息を、とりあえず喜ぶ。親しい人の無事は、彼女達には望外のことなのだから。

「……一つだけ、確認できた。ああ、いい子だったよ。リアス・グレモリーは本当にいい子だったよ。それだけでも、自分があそこに行った意味があった」

一瞬だけ感傷を口に出し、そのままそれを振り切ってテンションを

上げる。
「いやあ、確かにいい子だった！　何もかもが都合よく解決してくれることを祈っている、決定的な現実の前に無力な少女だった！　あの子は助ける救うことも導くこともできるが、怒ることも憎むことも割り切ることも出来なかったな。体制の敵の抹殺を行うか、善良な敵との和解を求めるか、不幸な行き違いであるか、そんな簡単に丸く収まる話を望んでいる。馬鹿馬鹿しい、世の中には『許しがたい被害者』や『当然の犠牲者』、『切実な加害者』もいるというのに。平和など望んでいないものがいるというのに。理不尽な暴力で押さえつけられた敗者や、無自覚に迫害している勝者もいるというのに」
　相変わらず、真実ではあるが本心ではないことが明らかな言葉の羅列だった。
　彼女の全盛を喜びながら、それでも現実の前に無力な彼女を笑っていた。
「社会には絶対的な正義があると信じている。この平和が正しいと疑っていない。世界には悪い犯罪者がいて、自分の所属している組織の正義が世の中を導いていると思い込んでいる。傲慢な少女だ、自分がどれだけの犠牲の上に立っているのかまるで知ろうとしていない。歴史の授業を単なる昔話だとしか認識していない、悪魔や聖書の勢力がどれだけ脆弱で怨嗟を受けているのか分かっていない。公園で笑顔の親子連れを、殺さずにはいられないほど憎む誰かを、単なる悪としか思っていない。なんともおめでたい少女だ。日本に住んでいるというのに、何も学べていないな」
　やや捨て鉢に、善良な少女の限界を謳う。
「自分の国は磐石で、親とカネは何時までもあって、未来は明るくて、自分達は秩序側で、だからずっと幸福だ。そう思っている。だから、上から目線で心配ができる。個人と国が相手なら、個人が負けると思い込んでいる。国が勝つのが正しいと思い込んでいる。そうはいくか、ここが現実の世界だと教えてやろうじゃないか。勝つのは正しいのではなく強いほうだと、救われるのは善良なものではなく幸運なものだと、正義は不変ではなく時勢によって移ろうと、庶民は貴族を

慕っているのではなく掌をひっくり返すのだと」

三つの眼が、怪しく輝いていた。三つすべてが勾玉の浮かんだ目になっていた。

彼の目には何が見えているのか。この復讐の成功か失敗か。或いはその更に先か、その更に更に先か。

たった四人の神滅具所持者が国を相手に完勝し、法律によって動いた精鋭悪魔を私怨で動いていた犯罪者が蹴散らす姿が。

最強だと信じられていた軍勢が打ち破られ、失望し糾弾する民衆。弱体化を確信し強硬な態度を加速させる諸外国。

……復讐の完了という勝利、犯罪を防げなかったことによる権威の失墜、その先を。

「バランスをブレイクしてやろう、ロンギヌスで安全神話をぶっ殺そう。いかにこの世界が脆いのか、儚いのか、弱いのか、軟らかいのか、大したことが無いのか。何一つ守るもののないものの恐ろしさを、何もかもを守らなければならない連中に教えてやろう」

「……完全に犯罪者の発想ですね」

「犯罪者だからな。少なくとも連中の立場からはそうだろうよ。だが勝てば別だ、真っ向からなぎ倒して踏みにじってぶっ叩いてねじ切ってやれば、それで勇者様さ。きっと誰も彼もが擦り寄ってくるぞ。４人で衰えたとはいえ国を相手に復讐を完遂したんだ、その戦力を敵に回すまいと、味方に引きずり込んで利用しようと躍起になるぞ。楽しみだな、そいつらとの交渉が決裂するのが！　何もかもが上手く行くと疑わず、自分達を立身出世が望みの阿呆だと、英雄志望だと思い込んでな！　レオナルド、英雄になりたいか？　なりたいならさっさとどっかに行け。曹丕だか曹彰だか曹植だか曹熊だか曹昂だか曹鑠だか曹沖だか曹據だか曹宇だか曹林だか曹袞だか曹☒だか曹峻だか曹矩だか曹幹だか曹上だか曹彪だか曹勤だか曹乗だか曹整だか曹京だか曹均だか曹棘だか曹徽だか曹茂だかの子孫が、神器の所持者を集めて軍勢作ろうとしているらしいぞ。どうしてだか正規軍じゃなくて、犯罪者の一団に入って、使い潰される気満々だがな」

はっきりと分かっているだけの息子が２５人もいて、そこから更に

大量に孫が生まれて、挙句中国史で大量に現れた自称子孫達。そんなちっともありがたくない英雄の血筋を誇る、最強の聖槍を持った英雄候補。

彼の元に行けば、それなりに信用されて彼ごと使い潰されるだろう。それなり熱狂できて楽しめるかもしれない。

「御免です。僕は貴方がそんなに嫌いではないので」

「そうだ、英雄なんざろくでもないぞ。どっかにいる誰かのために、どっかにいる誰かに使い潰されるだけだ。それならいっそ犯罪者として好き勝手にやったほうが面白おかしいだろうさ」

「……よくそれだけ一息で喋れるな、お前」

まったく別のところで、ルネは今更ながら自分達の首魁の饒舌さに呆れていた。

「お詳しいのですね」

ヴァレリーは自分が無学なもので、素直に博識であることに感心していた。

「……まあ、いい。とにかくやるといったからには2ヵ月後の襲撃に備えて特訓だ。世の中には、2ヶ月特訓したら世界を相手にだって戦える人間がいるってことを教えてやろう！」

「……でかい口はいいけど、それで復讐は果たせるのかい？」

「もちろんだ、ルネ。万事上手くいく」

焼けた顔の男は、ウサギの仮面をかぶって三つの眼だけを露出させた。その目には、底なしの確信が漂っている。

「ぶっちゃけヌルゲーもいいところだ、こっちにはレオナルドがいるからな。向こうには神滅具所持者が4人いるとは伝えたが、その内容は伝えていないしな。魔獣創造一つで冥界なんざいくらでもひっくり返せるし、聖杯が一つでもあれば伝説のモンスターだって蘇生できる。おまけにそれの働きを強化できる輪廻眼と赤龍帝の籠手がある。これだけあって、負けるほうが難しいだろうよ。なにせストーリーの機軸となる便利神器が三つも揃っているんだからな」

「私は要らないってこと」

やや拗ねて、ルネがそのつり眼で睨んだ。もちろん自分の持ってい

る神器がどれだけ強力だろうが、どれだけでかいことができようが、正直興味もない。

しかし、これは自分の復讐だ。国を相手にケンカを売る行為かもしれないが、それでも本質は私怨からの復讐でしかない。

つまらない、小さな理由だとは思っている。だが、それをずらされるのは不快だった。

「あーーー、すまん」

仮面の男は小さく、短く謝った。どうやら盛り上がりすぎていたようだ。

素直に、乱暴に、しかし真面目に謝っていた。

「もちろんしてもらうことはいくらでもある。これはあくまでも君の復讐だからな。とりあえずは神器を使いこなすことに集中してくれ。まずはそれだけで十分だ。自分もいろいろ手伝うよ、なにせ君の神器は自分と近い性質の神器だからな」

「じゃあ、まずは何をすればいい。さっきまではレオナルドのモンスターの相手をしていたけど」

「まず、基礎体力の向上。つまり持久走だ」

「時にルネ、ダイエットというものがどんなものか考えたことはあるか？　贅肉を落して体型や体調を整えるものだが、これにかんしては多くの運動法や食事法の研究が組まれている。健康も美容も人類の普遍的な願望だからな。だが、これも考えてみればそこまで難しくない。薬や病気などで太ってしまうことはあるし、生活習慣が不規則になってしまう職業は多い。だが、基本的に食事をある程度制限して、運動をすれば痩せるんだよ。もちろん、筋肉をつけるのが目的じゃないから持久走がいいんだが、これができない人が多くてな。単に面倒だからだ。世の中には腕立てふせを一日に１００回やったり、腹筋を１００回やれば筋肉が増えて基礎代謝が向上するのに、それさえ面倒がって持続できない連中がいる。それさえできない連中が、努力や修

行や真面目を語るんだ。こんなにおかしい話もないだろう？　もちろん、貧困層ゆえの肥満という悩みもある。野菜を買うよりもジャンクフードの方が安上がりで、時間もかからない。健康的な食生活を身につける授業もない、という層も確実に存在しているんだ。これは食生活というよりももっと深刻な教育レベルや経済格差の問題だとおもう。これを重大だと思うか思わないかで、その国の文化があらわになるとは思わないか？　……ルネ？」

ウサギのお面をかぶっても、呼吸がしにくくなるだけで足が早くなるということはない。しかし、現に白兎の仮面をかぶった男はルネと一緒にマラソンを始めて、その間ずっといつものように饒舌だったのだが、それでも息切れ一つしていない。

対するルネは、もう走るというペースを維持できていない。

長い間の拘束も聖杯で完治しているため、単にルネの体力がそこまでないというだけの話だった。

対するに、仮面の男である。体は細いが、それは贅肉が無いというだけで、長距離走向けの肉体をしていた。

短距離走の場合は筋肉の量が重要だが、長距離走の場合はありすぎると体が重くなるので、かえって不利となる。流石に一流選手の如く細くはないが、それでも生活のなかに長距離走が入り込んでいることは明らかだった。

「なんだ、もうばてたのか。レオナルドとの試合で疲れたか。まあ、神器を使っていると身体能力も向上するし、それが原因で現在の体力を見誤ったな。素の体力は何をするにも大事だぞ、時間はかかるが決して無駄にならないはずだ。まさか、この程度走ったくらいであきらめるほどの復讐だったのか？　違うだろう、だったら歩いても良いから前に進め。帰りはワープだから、あんまり気にしなくて良いぞ」

呼吸がまともに出来ない。肺は引きつっていて、顔は紅潮していて、発汗が溢れている。

喋り捲っている男を黙らせたいが、まずしゃべることが出来ない。

とりあえず、なんとか歩き始める。それにあわせて、小刻みに足踏みしながら併走する仮面の男。もちろんずっと喋っている。

「こうやって持久走をしていると、世間一般の精神は肉体を凌駕するという妄想を鼻で笑う気分になるな。精神力が物を言うのは本番じゃなくて、そこに至るまでの過酷な練習に耐えることだ。人間には精神があるが、一定水準以上を求めれば、気合と根性だけでどうにかできるものではなくなる。頑張ればどうにかなるとか簡単にいう連中は、頑張るという言葉をバカにしていると思うんだ。本当に頑張る気があるなら、本番で頑張る必要が無いほどに練習をすると思うんだよ。継続は力なりというが、結局継続するために力が要るんだよな」

鬱陶しいが、それでもその苛立ちさえ力に変えてルネは前に進む。

確かに苦しいし、辛い。だが、それでもあのときほどではない。

四肢をもがれて、押さえつけられて、身動きできなかったあの頃に比べれば。

ああ、自分の足が動く喜び、自分の意志で前に進む楽しさ。

誰かに頼りきって、据え膳上げ膳で復讐をなすのではなく、血と汗を流して達成する。それがぶっ殺すということだった。

だから、ルネは前に進む。

「肉体が精神を凌駕するといえば、骨格の損壊や神経の断裂を筋肉で補う描写は正直いただけないな。骨格と神経と筋肉はまったく別の機能を持った人体の要素で、それを補うことなんて出来ない。車でいえば骨格はフレーム、筋肉はエンジン、神経は電子部品などだ。どれが壊れてもまともに動くわけが無い。だというのに、それを全部精神論でどうにかできると思うのは、間違っていると思う。間違っているといえば……」

「だ、ま、れ……！」

「ひゃははは、悪い悪い」

鬼気迫る表情で、ルネは仮面の男を黙らせた。

かくて、聖杯を用いた蘇生とはちがう、時間をかけた鍛錬が始まる。

人間らしい、再起への道を彼女は歩き始めていた。

紅蓮の弓矢　4

「ん～～」

ファルビウム・アスモデウス。四大魔王の一角であり、現アスモデウス。冥界の軍事を統括している。

そんな彼は、リアス・グレモリーとその眷属の同席している四大魔王の会議で、仮面の男から渡された手紙を熟読していた。

内容は極めて形式的であり、事務的でもあり、一方的だった。

ルネという少女の拘束されていた研究所での、実験による虐待の内容。これに対する報復として、研究所職員の男性は殺害し、女性は精神を破壊した。さらにその家族まで殺害する、と書かれている。

おそらく、精神を破壊されたらしい女性職員に書かせたのであろう。丁寧な悪魔文字で書かれていた。

「痛ましいことだ」

サーゼクスは、沈痛な面持ちでそうつぶやいた。自らの定めた法を、上級悪魔が違反し、更にその被害者であるルネという少女が加害者に回ろうとは。

いや、ルネだけではない。多くの神器を持っている人間が、この研究所で非道な行いを受けていた。

定めた法を守っていないのだから、自分達に非はない、というほどサーゼクスは無責任ではない。法を定めた上で、それを守らせるのも王の務めだ。

やや大雑把だが、管理不行き届きといったところだろう。彼等の受けた痛みの責任は、大本までたどれば自分達ということになる。

とはいえ、犯罪者を自称する男の発言を鵜呑みにするほど阿呆なことは無い。まず、実際にその研究所が存在したのか、加えてその職員は本当に行方不明になっているのか。それらを確認し、事実を明らかにしなければならない。

いや、その前にこのリストに載っている標的を、一刻も早く保護しなければ。事実はどうあれ、狙われていることは確かなのだから。

「あのさ～～、リアスちゃん。この手紙を持ってきてた人はどんな感

じだった?」
「……なんといいますか、ものすごくよく喋ってました。一言帰したら、十は返ってくるようで……」
「支離滅裂だったり、自己陶酔をしてた~~?」
「自己陶酔はしていたかもしれません。ですが、発言はそれなりに適合性が取れていました」
分析をしているのだろう。ファルビウムはいくつか想像を行い、そのたびに訂正を行っていた。
もしも、仮面の男に計算違いがあったとすれば、それはつまり冥界屈指の戦術戦略の専門家、ファルビウムを甘く見ていたということだろう。
既に彼は、仮面の男の脳内で組み立てられている計画のその一端さえも視野に入れていた。
普段はやる気をみせることのない彼ではあるが、伊達や酔狂で魔王の座を暖めていない。仮面の男、その人柄を把握さえしていた。
「アジュカ、どう思う~~?」
「お前の思う通りだろう」
「そっか、やっぱりか~~。駄目だこりゃ。サーゼクス、これはもうこっちの負けだね」
読みきれたからこそ、出せる答えもある。
技術を担当しているアジュカの意見を取り入れた上で、ファルビウムは既に詰んでいる盤面を見通していた。
「……どういう意味だ?」
「負けだよ、負け。リストの上級悪魔が死ぬことだけは、もう決まりきっているってことさ~~」
やや慎重に尋ねるサーゼクスを、ファルビウムはあっさり振り払った。
「彼の行動を見るに、刹那的だが計画性が無いわけじゃあないよ~~。彼は悲観的だが楽観的でもない。彼の口にしたことは、おそらくすべて本当だね~~」
神滅具四つが揃っていることも、研究所が実際にあったことも、職

員の家族全員を殺すと決めていることも。
　冥界にとって、何一つよい情報ではないすべてが、根こそぎ真実だという。
　もちろんそれは単なる推理に過ぎず、実際に検証する余地はあるのだろう。だが少なくとも、冥界屈指の戦術家はそれを肯定していた。
「おそらく、この一件に限定すれば僕らは既に負けている。何をしてももう手遅れだ」
「……なぜそう思う？」
「僕らには時間がある。二ヶ月という時間がね～～。それだけあれば、このリストがあれば、実際にその研究所があったのか、それぐらいは確認できるよ～～。加えて、リストの面々を保護し、警護することも十分に可能だよね～～」
　二ヶ月で、彼等が何を準備しているのか。それは全く分からない。だが、こちらも準備の余地がある。
　十三ある神滅具のうち、どれを保有しているのかは明かされていない。だが、四大魔王を含めて、多くの悪魔が護衛に参加することができるだろう。
　相手が四人でも、あるいはそれより多くても対処は可能だと思われていた。少なくともサーゼクスもリアスも。
「でもね、結局それを込みで向こうは復讐を決めたんだよ？　なんにもないわけが無いじゃん」
「そのヴァレリーという混血吸血鬼の神滅具は、間違いなく治療系の最上級、幽世の聖杯だろう。これだけ破壊された人体を元通りにできるのはそれだけだ。おそらく、これがあれば死亡したモンスターを復活させることもできるだろう。コントロール度外視で放り込んでくることもできるはずだ」
　アジュカは、技術的に可能であろうと思われる範囲で、端的に神滅具の危険性を捕捉する。
　おそらく、正面から戦えば、サーゼクスやアジュカが負けることはほぼない。
　だが、滅びているモンスターを復活できるとなれば、その戦いの規

模は著しいことになる。少なくとも、相手が明確に標的を認識して空間転移で襲い掛かってくれれば、それらから遺族達を保護することは不可能だ。なにせ、数百人単位でいるのだから。

「煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）はもう持っている人がハッキリしているけど、他の上位神滅具はどれも所持者が判明していない。もしもどれか一つでも彼等が保有していたら、それだけでこちらは本当にどうしようもないね」

「空間系最上位の『絶霧（ディメンション・ロスト）』、創造系最強『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』、最強の神滅具『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』どれもが、戦略級に広範囲を攻撃可能で、私やサーゼクスでも持て余すだろう」

「勝算もなく攻め込むと思えないし、少なくとも一つは持っているだろうね～～」

その、絶望的な未来にサーゼクスは顔を緊張させ、リアスとその眷属は青ざめていた。

実際、どうにかできると思っていたのだ。神器である魔剣創造を持つ木場を眷族にしている彼女は、神器の最上級のその存在を軽く見ていた面がある。

だが、そこは戦術家と技術者。サーゼクスたちの甘い予測を振り払っていた。

「それに、当人の実力も気になるところだね～～。神器を抜きにしても人間の能力がバカにできないことは君も知っているだろう？　一番心配なのはそこだよ、神滅具の補助もあればその危険性は計り知れない。初見で対応できるものじゃないよ～～」

もし仮に、仮にだが。

英雄と呼ばれる者が、転生者と呼ばれる魂の持ち主が、神滅具を必要としないほどの実力者がそれを得ていれば。

はっきり言って単独でサーゼクスやアジュカをも打ち破りえるだろう。

「まいったな～～、これはもう完全にお手上げだよ。少なくとも一度彼等と接触して戦闘なり何かして、情報を集めないと処置無しだ」

「ああ、戦力の過小評価は危険だ。少なくとも彼等との初戦は大敗を覚悟するべきだろう」

敵が神滅具を四つ持っている。それはおそらく本当だろう。

だが、最強の聖槍に選ばれているのか、空間を操る霧を持っているのか、無尽蔵のモンスターを生産できるのか。

或いは三勢力に挑んだ二天竜の魂を宿した武具か、ヘラクレスに討たれた獅子の斧か、神の名を持つ狗か、はたまた……。

そんな状況で、戦術の見通しなど起つわけが無い。

神滅具は戦闘用か否かを問わず、戦略級の兵器なのだから当然だが。

「この一戦に限ればということは、つまり遺族の命はあきらめるしかないということでしょうか」

「その通りだね～～」

現実を受け入れかねているリアスは、明かされた酷薄な現実に打ちのめされる。

「我々全員が、眷属を含めて護衛についてもか？」

「それはやめたほうがいいよ～～。担い手の無茶苦茶さにもよるけど、最悪アジュカと君以外全員死ぬね～～」

当たり前だが、魔王とその眷属は全員悪魔だ。加えて神滅具の中には悪魔に対して効果的な武器も多い。聖書の神が作ったのだから当然だが、誘蛾灯に誘われる羽虫のように落されるだろう。

もし仮に彼等をしとめることが出来たとしても、四大魔王の半分が落ち、その眷属が全滅すれば、たとえ遺族が全員無事だったとしても勝利とはいえまい。

「そこまで、警戒に値するのか？」

「するね～～。現に彼は二人で吸血鬼社会に戦いを挑んで聖杯を奪っている。それを思えば、君の考えは過小評価が過ぎるよ～～」

「吸血鬼さんに聞いてみよっか？」

「身内の恥だ、秘匿主義の吸血鬼が我らに利する情報をくれるとは思えないな」

外交担当のセラフォルーから、外交センスの欠片もない発言が飛び

出したが、それは今更である。とりあえずアジュカが訂正した。
「……一度目は負けを覚悟しろ、か。だとしたら相手は強かだな」
負け、という言葉はつまり相手が敵であることを認めてのことである。
テロリストに襲撃されて上級悪魔が殺害されても、それは敗北とはならない。
しかし一方的であれ標的を指定し、期限を取り決め、ある程度自陣の情報を明かした上で、目的を達成されては敗北としかいえない。
少なくとも、国民も貴族も誰も、政府が勝ったとは思わないだろう。無能のそしりを受けるにちがいない。
「この一度で、ある程度被害が限定されていると開き直って、分析に力を入れるのが上策だね～。でも一番簡単な解決策があるよ。このリストの悪魔を、彼等が殺すより先に処刑することだよ～」
ありえないと分かっていても、とりあえずファルビウムは発言する。
実際のところ、後ろ暗いところのない貴族などいないし、そもそも魔王の定めた法を犯していれば、それだけで問題行動である。
強権を発動して家捜しし、証拠をかき集め、でっち上げ、彼等をつるし上げて処刑する。
そうすれば遺族の名誉は地に落ちるし、仇が正当に法の裁きを納得行く形で受けるのだから、仮面の男もルネも流石にそれ以上はなにもしないだろう。
問題は、現役四大魔王はそれを許容できないということだろうが。
「……それは問題の先送りだ。彼がそのうち我々悪魔に戦いを挑むこともあるだろう。それを思えば、逃げることは許されない」
サーゼクスは敗戦濃厚でも、遺族を見捨てない。
「まずは事実関係の確認とリストにある悪魔の保護だ。ことは死者の名誉にも関わる。この二ヶ月、気を抜かないようにしなければ」
こうなると、悪魔は決定的に弱かった。
敵が精兵であることは分かっていても、しかし対応できるのは魔王などの権力者ばかりで、信頼できて強力で動かしやすい戦力が存在し

ない。
神滅具を一つたりとも保有していないため、それへの情報も不足している。
そんな、当たり前すぎる現実を知って、リアスは今更気付いた。
彼はこの復讐の完遂に限定すれば、絶対的な成功を確信しており、それは客観的な事実なのだと。
「会って色々お話できればいいのにね」
せめて背後に組織があれば、自分の出番があったと、セラフォルーは悲観する。
相手は自らを強盗だと名乗った。彼等には守るべきものなどろくにない。故に交渉をする意味もない。
個人であるが故の強みが、この状況では生かされている。
もちろんそれは、長期的には組織に敗北するということでもあるのだが。
個人の技能に頼った犯罪など、そう長続きするものではない。
どれほど強大でも、どれほど特異でも、手管が限られていれば対応されて当然だ。
それこそ、手出しできないほどに強大であればまた別なのだが。
「保護するなら早いほうが良いね～。多分、今頃リストの遺族にも同じような内容の手紙が届いているよ～」
彼等は、勘違いをしていた。
ギャスパーを保護しているリアス、一歩劣るものの仲間と認めているヴァレリー。
彼女やその関係者に敬意をもって接することはやぶさかではない。
だが、研究所の職員、その遺族や親族に悪癖が現れるのは当然だった。
遺族に送られた資料は、全て手紙ではなく映像の記録された魔方陣だった。
その映像は、一度起動した場合決して途中で止めることができず、そのまま最後まで再生されてしまう。それも、最大の音量で。
記録されていた映像。それは犠牲者と連絡が取れなくなっていた

家族たちに、衝撃の、そして取り返しのつかない現実を教えていた。

生きたまま黒い炎で足元から焼かれている男性。

両手首を切り落とされて止血されず、出血多量でじわじわ死んでいく老人。

愛する人の名前を呼びながら全身の生命力を奪われて枯れていく青年。

殺してくれと叫ぶ、全身を金槌でたたきつぶされていく中年。

体の自由を奪われ、絶叫しながら自傷していく少年。

そして、心を破壊されて、愛する人の名前を呼びながら、まったく違う、目だし帽をかぶった男に犯されている女性たちだった。

そして、最後には目だし帽の男がこういって〆られていた。

「次は、お前達だ」

紅蓮の弓矢　5

「原作では聖杯を使って赤龍帝の籠手を複製していた。もちろんそれなりにコストがかかっていたが、聖杯の三分の一でもその程度のことはできるということだ。必要なのは担い手の肉片と、生きている名だたる龍の魂。うむむ、ぐろいねぇ。単なる同キャラ対決のためとはいえ、そんなことをしたら神滅具のバーゲンセールになると思うんだよ。第一、魔王クラスの実力者が赤龍帝の鎧を劣化しているとはいえ着ていたら、それじゃあ主人公が勝てるとは思えないんだよな。同キャラ対決が燃えるのは、主人公の人間力が強い場合で、あのおっぱいドラゴンにはあんまりむいてない気がするんだよな。同キャラ対決ってんなら、少し違うけどアーチャーと衛宮士郎も、あれ衛宮士郎が勝ったら駄目だと思うんだよな、無粋を承知で言うけど。あのルートの衛宮士郎の主人公力は高すぎると思うんだよな～～だって、ギルってあの世界観では英雄の中の英雄王なんだし。とはいえ、あの熱は特筆に価するよな。なんだかんだいって、クライマックスで一番重要なのはその熱量を読者やプレイヤー、視聴者にぶつけられるかどうかが問題なんであって、ステータスや設定なんてフレーバーだよなぁ」

「おい、わけのわからないことを何時までも喋ってるんじゃねー」

宣戦布告してから一月ほど経過し、調度半ばに差し掛かっていた。ルネも、さすがは神滅具の所持者。起きている時間のおよそ全てをささげているだけあって、その成長は順調だった。鬱屈していたこともあってか、あるいは周囲には禁手に至った神滅具所持者ばかりだからか。既に禁手をも会得していた。

とはいえ、残る一月はそれを使いこなすことに奉げねばならず、それでも十分とは言いがたかったのだが。

だというのに、四人で揃って集っていた。もちろんそれを要請したのは仮面の男である。

「此処からは、本番に向けて準備をする。具体的には、さっき言った神滅具の量産だな。なにせ人類の有史以来、少数精鋭の軍隊が勝ったこ

とは無い。マネーイズパワー！　世界は金持ちが勝つように出来ている。量産品と言えばコピーだが、理屈で言えばさっき話た同キャラ対決の理屈だと……」

「いいから、話を、進めろ」

ルネが、饒舌な仮面の男を遮った。

今日は、顔の輪郭が隠れる程度の小さめの、白い布の仮面だった。中心に一本黒い線が走っているのが印象的である。

「分かった、分かったって。とにかく、自分の赤龍帝の籠手と輪廻眼、それからヴァレリーの聖杯は他の神滅具との同調に効果的だ。特にレオナルドの魔獣創造とは相性がいい。今回はこれにルネを組み込む。分かりやすく言うと、レオナルドがベースになるモンスターを造って、それにルネの獅子の装甲を、ヴァレリーの聖杯で組み込む。で、自分がそれをサポートする。つまり、敵からの攻撃に耐性があるアンチモンスターに、獅子王の装甲を上乗せして生み出すわけだ」

「強そうですけど、でもそんなに沢山は作れないと思いますよ」

その発想はたしかにレオナルドにもあった。だが、数を造るとなると難色を示す。

介護用ではなく、戦闘用となるとその強度や難易度は比較にならない。

赤龍帝の籠手による譲渡は、確かに破格の性能だろう。禁手ともなれば、まして他に三つの神滅具との共同であれば、その規模は尋常を超える。

しかし、それは担い手の能力を超え過ぎる。例えるなら、走っている人間が突然ジェット機並みに加速するようなものだと思えばいい。どれだけ能力が拡大しても、使い手自身の技量はどうにもならない。

まして、生命の創造と改造。外科医の手の速度が数十倍になっても、手術の速度は向上しない道理だ。

「ですね、私達が協力すればそれを造ることも難しくはないと思います。ですが、数をそろえるとなると……」

「数を造れないなら、質で補う。モンスターを大量生産するためのモンスターを造ればいい。女王アリのように巨大なのをな」

悪魔を襲撃するというのに、その眼は悪魔的な嘲弄を多分に含んでいた。
「アルティメットガンダムの如く、巨大な芋虫みたいなのを造って数をそろえる。もちろん全部陽動だ。名付けて……」
「はい、そこで話を切れ。で、私が事前にするのはそれだけか？」
「それだけだ、君に頼むのはそれだけでいい。それだって、今の君になら難なくこなせる。実際に運用するのはヴァレリーとレオナルドだし、共鳴させるのは自分だしな」
「共鳴ってのが良くわからないんだが」
「この眼で操るチャクラは、人と人を繋げるためのエネルギーだ。棒も差し込めば、意識レベルの同調なんざ軽いもんさ」
白い布の内側に見える、波紋模様の眼。それにはなにやら他者に力を与え、精神的に繋げる力があるようだ。
まあ、そういうものもあるのだろう。実際、神滅具のようなものだと思って、問題はないはずだ。
「まったく、ご大層な能力も悪用しかしなければ何の意味もないね」
「そうか？　随分良心的な使い方をしているつもりだが」
やや軽口を挟みつつ、それでも笑っている。仮面の男は、穏やかに笑っている。
「やっぱりルネがいてよかった。レオナルドは頷くばかりだし、ヴァレリーも結構自重しているからな。君が突っ込んでくれると楽しいよ」
「ああそうですか。そりゃよかった」
「つれないねぇ、そこがいいんだけど」
ぶっきらぼうなルネと楽しそうな仮面の男を見て、レオナルドとヴァレリーは考える。結局のところこの男はおしゃべりだが、他人の意志を無下にはしない。約束は守るし、虚言も弄さない。約束が守られている範囲なら融通も効くし、事前に説明も怠らない。
悪意に満ちてはいるが、敵対している相手以外に危害はくわえない。よかれ悪しかれ相手を望むものを示しもする。
なにもかも先回りして話す癖があるが、それは結局議論の余地が残

らない話だからだろう。少なくとも彼の思惑はともかく、確かに言葉でどうにかできることではないことばかりだった。

根は寂しがりや。他人を意のままに操る力を持ちながら、それを使ってこの場の三人を好き勝手にしないのは、己自身を持っている人間との会話が好きだからなのだろう。

「まあ、とにかく概要だけ伝えるぞ。おそらく遺族は多くの護衛に守られているだろう。それをまず排除する、極力殺さずにな。これにはさっき言ったでっかいのを大量投入する。まず上手くいくさ、そいつらは何処まで行っても所詮は上級悪魔だからな。そいつ等を排除しても、多分施設は何がしかの結界で守られているだろう。これはまた別の方法で打ち破る。そっちはヴァレリーと自分だけで準備しておく。その上で、孤立した丸裸の遺族を神威空間にご案内、ルネがぶっ殺す、自分達三人でサポートという算段だ」

「そこまでお膳立てしてもらえば、私一人でも何とかできるって」

「ルネ、無茶は駄目よ」

やや拗ねながら、ルネは不満を口にする。

それを、ヴァレリーが諫めた。ルネが罪を犯すこと、それに加担することに迷いは無い。だがそれは、彼女に幸せになってほしいということが、心の中にあるからだ。

「そうですね、相手は数百人の上級悪魔。いかに神滅具の禁手、それも接近戦仕様とはいえ、経験のないルネさんでは梃子摺ると思いますが」

「……でも、さ」

「吸血鬼の能力でかく乱して、聖杯であなたの傷を癒すだけだから。ね？　貴女の力になりたいのよ」

「僕も、まあ壁を造るだけです。上位とはいえ創造系ですから、あんまり当にされても困りますしね」

「自分も写輪眼と輪廻眼を貸すだけだ。そんなに期待するなよ」

結局のところ、そこが一番肝心だった。

この戦いで一番大事なのは、ルネが自分の手でなんの罪もない、少なくともルネに何かをしたわけではない遺族を殺害すること。それ

だけだ。他のことなど微塵も重要ではない。
遺族が全員死んでも、護衛を無傷で退けて、自分達が全員生還しても。結局ルネが彼等を己の手で殺すこと。それだけに意義がある。
仮面の男が語ったように、これは殺害の結果ではなく行為にこそ意味がある。
そう、護衛を退けることも結界を壊すことも、微塵も重要ではないからこそ、仮面の男の悪癖が芽を出すわけでもあるのだが。
「ところで……ヴァレリー。君は自分の神器に関してどういう印象を抱いている？　自分にとっては己の身を守る殻だ。一方的に攻撃するのが好きでも、自分が傷つくのが嫌な性分でね。だからまあ、こんなひねくれた、伸び縮みする形態になったんだろう。他の能力との親和性も良いから気に入っているがね。でだ、君の印象を素直に教えてくれ。他人の弱点を改善する、或いは欠点を補う。もしくは耐性を与える能力を持ったそれをどう思っている？」
「……私は、平等な社会を望んでいました。だからでしょうね、私のような特異な存在でなければ、吸血鬼は太陽の下を歩けませんから」
皆で、太陽のした、のんびりと散歩ができるようになりたい。
言ってしまえば、吸血鬼という種族の根幹を覆す甘い考えだった。
「ですが、やはり考えが浅かったと思い知りました。この能力もまた神滅具、使い方を誤れば争いを助長することにしかなりません。できることなら……使わずに済ませるのが一番でしょう」
おそらく、彼女の中で自問自答を繰り返していたのだろう。
一旦語り始めれば、実に仮面の男のように、饒舌に語りだす。
「貴方と話をしていて、よく考えるようになりました。私が平等を望んでも、結局平等のために上級吸血鬼の方は動きませんでした。ただ、対立する派閥を殲滅し、バンパイアハンターを討ち、人に代わって世界を支配するために使おうとしていました」
言葉を尽くし、現実を解体する。それが仮面の男の手法だ。
それにのっとって、ヴァレリーはルネを救う前から、救った後も考え続けていた。
そもそも、自分は自分の理想のために何をしたのかと。

「私は、楽なほうに逃げていただけでした。私に貴方ほどの行動力と計画性があれば、自分の手を汚す覚悟があれば、少なくとも吸血鬼の中での争いをある程度抑えることは出来たと思います。もしくは、逃げ出すべきだったのかもしれません。そうして、無責任に逃がしてしまったギャスパーを探すべきでした。聞けば、リアス様が彼を助けたとき、バンパイアハンターに討たれていたそうですし」

この男は、特異な能力を持っている。それによって、助けた命への責任を果たす能力があったのは確かだろう。だが、裏を帰せば責任が取れることをしている、そこを逸脱するような行為はしていないということになる。

ギャスパーは、自分以上に特異だった。それを思えば、あの場に残すことは出来なかった。だが、それは結果から見れば無責任だった。自分は、責任も取れないくせにギャスパーを、あんなに小さかった弟分を世界に放り出してしまったのだ。

「私は、貴方が許す限りの範囲で、自分で決めたことに使いたいです。それが正義に反しても、良識から外れていても、善性でなくても。もう誰にも言い訳はしません。すべては自分で考えて決めたことだと、誰に聞かれても言い切ります」

仮面の男ヘルネの心を治すと告げたとき、ヴァレリーはルネを救うと決めていた。

便利な道具に頼って体と心を救うだけではなく、その決断を支えると決めていた。

救いたい人がいて、その人がたった一人でも、その人が数百人を犠牲にしないと幸せなれなくても。それでもたった一人を救うと決めていた。

自分で良く考えて、そう決めたのだから。

「考える暇もなく、とっさの判断をすることもあるでしょう。ですが、それは自由ではない。自由とは自分で良く考えて、誰かのせいにしないこと。そうですよね」

どこか、口にしたことで清清しさを感じさせるほどに、彼女は吹っ切れていた。

そんなヴァレリーの姿を見て、救われたルネはわずかに頬を染めていた。

ただし、レオナルドは仮面の穴からのぞける両目が、大きな勾玉が浮かんでいる状態の仮面の男を見て血相を変えていたが。

まるで、脈動しているかのようにめまぐるしく勾玉の文様が変わっている。それはまるで、この男の心境を明確に示しているようだった。

「そうか、その通りだな、ヴァレリー。君は他の二人と違って能力の全てを自分にささげると決めている。故に自分に縛られた中で最善を探すのが正しい。君は熟考の上でそれを決断したのだからね。それを反故にするのは自由ではない。それは我侭というものだ。特に、混血吸血鬼の住処と食料を、盗品とはいえ都合しているこっちとしては、君の能力がないと「困る」んだよ。お互いに嫌だろう？　いまさら決別するなんてさ」

顔も見えないのに、満面の笑みを浮かべている。

悪意に満ちた救済者は、言霊の限りを、言弾に変えて装てんしていた。

「でだ、君はまだ娯楽にあまり触れていないだろう？　いや、無理もないよ。娯楽とはそもそも休息の際にするもの。今みたいに忙しい時期にそれをやるのは間違っているさ。それでも食事や休憩中の雑談で、欲求はある程度満たせるからね。自分なんかは忙しいときは、一段楽するまで我慢する口なんだよ。我慢して我慢して、それで溜め込んだストレスを、やることが終わった後に開放すると、本当に楽しいんだ。君にも、色々教えてあげよう。もちろん、そのときには検体被害者や混血吸血鬼もつれていこう。まあ、いきなりマンガだとハードル高いから、葛飾北斎展とかに連れて行こうじゃないか。アレは諸外国でも人気だし、日本でも有名だからどこかでやってるだろ、多分。いいぞ、あれは素人にも分かるダイナミックさがあるからな。それに、ああやって静かなところで好きな絵を探すのも、こんな殺風景な景色で介護されるより楽しいだろうしな。なんだったら、レプリカでも用意しよう。絵が一枚あるだけでも、きっと華やかになるさ」

「え、ええ、そうですね」
「話は戻すが、娯楽というものを楽しんでいくと、そのうち自分でも挑戦したくなるもんさ。漫画が好きで漫画家を目指したり同人誌を書くとか、料理が好きで料理人を目指すとか、アイドルが好きでアイドルを目指すとか、そうやって文化は継承されていくもんなのさ。自分も昔は良く歌っていたしな。もちろん、大半がプロを目指す前に挫折する。それでも十分楽しいしね。さっきも言ったが娯楽ってのは合間合間に楽しむもんだ。それこそ、アイドルの振り付けを真似するとか、アニソンを熱唱するとか、正義のヒーローの技を真似するとか、その程度でも良いんだよ。それが大衆文化ってもんだ。でさ、自分も漫画家を目指したことはないが、漫画の技は大好きだった。でだ、調度誰も知らないわけだし、無人島に来て全裸で走り回ったり、かめはめ波の練習したり、海に向かって熱唱したり、雲を見てラピュタがあるとか言ってみたり、砂に絵を描いてみたりしたくなるだろう？　完全に自分ひとりだと思ってさ、地球上にもう自分ひとりだと思ってさ、フルスロットルで全てをさらけ出そうと思うんだ！」
「え、ええ……?!」
「でだ、幽世の聖杯って、原作ではろくな使用方法をされてなかったんだよ。三分の一しかないのにやりたい放題でな、邪龍が復活するわエクソシストが復活するわで、何でもアリだったぜ。ギャスパーの中の意識を起こすぐらいしか、まともな運用されてなかったんじゃないかな。自分が思うに、幽世の聖杯って、本当はルネのように欠損した体を治すとか、死んでしまった人とほんの少しでも話をするためにあると思ってるんだ。さすがに死者蘇生は行きすぎだと思うんだよ。命が軽く扱われすぎるからな。やっぱり取り返しがつかないからこそ、命は貴いと思うんだ。で、さっきの話に戻るんだが、正しい運用法をしたうえで、結界を打ち破り、かつ漫画の再現ができて自分が大満足という、一石三鳥の素晴らしい作戦があるんだ。そう、名付けて……」

「二代目火影作戦！」

作戦の全貌を聞いて、ヴァレリーは早まったかと後悔することになる。

DRAGON 1

遂に、その朝が来てしまった。仮面の男がリアス・グレモリーを介して告げた復讐という名の殺人予告の当日が。

施設で保護されていた上級悪魔達も、あるいは彼等を保護するために集っていた強者達も、その緊張を高めていた。

その空気を少しでも和らげることができればと、サーゼクスはこまめに施設内を歩いていた。

最強の魔王、サーゼクスルシファー。彼がそこにいるだけで、そのカリスマによって周囲は安心感が満ちていく。

本来は上級悪魔といえどもそうそう逢うことの叶わない相手だが、この度は彼が全力をかけていたこともあって、比較的頻繁に顔を見ることが出来た。

当人が気さくということもあって、一家にあてがわれた部屋を訪問したり、あるいは集会場で説明なども行っていた。

「陛下、お会いできて光栄です」

ある少年は緊張しながらも、サーゼクスと握手をしていた。顔を赤らめている少年と、朗らかに笑う王。

それはとても微笑ましく、しかし……。

「あの、お父様の仇をとってください！」

「ああ、もちろんだ」

既に、その少年は親を失っていた。

職員の家族が収容されている以上、全員が家族を失い、あの凄惨な映像を見ていた。

あまり嬉しくないことだったが、この2ヶ月で幾つかの出来事が明らかになった。

つまり、魔王の法に反する研究所は本当に存在し、今は地盤ごと消滅していること。

職員は確かに行方知れずとなり、その家族達もそのリストどおりだということ。

遺族への報復という手段が正当かどうかはともかく、彼等の行為そのものに矛盾はないということだ。

やられたからやり返す。当然の行動が行われていようとしているだけだった。

ただ、これで遺族がすんなりと自分の首を差し出すわけもない。まして彼等は、自分の親族が無残に手管を尽くして殺されるか、あるいは心を壊されて犯されているか。その映像を直接送られている。

これを見て、殊勝な気分になるほうが無理だ。彼等にとって、仮面の男はただ仇でしかない。

保護のため、人気のない場所に用意された施設に収容された彼等は、慰問に訪れる魔王やその眷属たちへ懇願していた。

なるほど、確かに自分の家族は犯罪者だった。魔王の定めた法を犯していた、それは認めざるを得ないようだ。

だが、だからと言ってあんな惨たらしい死を、尊厳を侵されていいのだろうか。

いや、いいわけが無い。法を侵したのであれば、法で裁かれるべきなのだ。

正当な手順で捜査し、確実な証拠を集め、逮捕状などの法的手続きによって身柄を拘束し、弁護人を立てた上で裁判を行い、その罰を下されるべきなのだ。

少なくとも、まったくの余所者が上がりこんで、勝手に殺して、じつはこうでした。

そんなものが正義であるわけが無い。そんな個人の一方的で不当な暴力であっていい訳が無い。

彼等遺族は当然の理屈で懇願する。

「どうか、その四人に死を!」

彼等遺族は常識にのっとって嘆願する。

「私の主人はそこまで罪深かったのですか?!」

彼等遺族は認識を疑うことなく真実を口にする。
「違法だったとしても、息子は冥界のために働いていたのです！」

上級悪魔は、矛盾なく己の中の哲学を口にする。
「たかが神滅具の実験をしたぐらいで!!」
「無許可で人間界でエクソシストと交戦したぐらいで！」
「人間が死んだだけじゃないですか！」

彼等が悪魔だからではない。被害者が人間だからでもない。単に違うというだけのことだった。
種族が違うから、国家が違うから、文化が違うから。たったそれだけで、知的生物はいくらでも『蛮行』を行う。
世の中には魚を食べることが出来ても、感情として魚を捌く事ができない人間は多い。魚を調理できても、家畜をしめることの出来ない人間は大多数であろう。
だが、自分と違うところのあるものに、共感することの出来ない、自己投影しないことは、誰にでもできる。まして、文化が宗教が社会が国家が生態がそうであれば。
１００年程度の寿命しかなく、下級悪魔ほどの能力を持たないものが殆どで、数が増えやすいのが取り柄。そんな人間に、一万年を生きる悪魔が、なかでも貴族とされる上級悪魔が、どうして対等な存在だと思えるのか。
そんな自分達の家族が、人間を使って実験をして何が悪い。法を犯したことは悪でも、人間に殺されるなどあってはならない。
そんなことは絶対に間違っている。彼等がそう思うのは当然であった。
そんなことは絶対に許されない。彼等がそう思うのは当然であった。
そんなことは絶対に不条理だ。彼等がそう思うのは当然であった。
だから、仮面の男達がそう思うのも、無理のない話である。

神滅具などという物のために実験をされたことも、故郷を灰にされたことも、家族が全員殺されたことも。
間違っているし、許さないし、不条理なことだった。

悪魔の中でさえ非合法とされた人体実験を行った研究所職員と、人間の論理感から外れた処刑と女犯をおこなった仮面の男。
どちらが悪いといえば、どちらも悪である。ただ、先に行ったのは研究所の職員であり、国家が守るべきは職員の遺族であった。
少なくとも上級悪魔の殺害予告をされて、遺族の元に犯罪の行為を記録した資料を送りつけられれば、それで動かないことは国家としての敗北でもある。
「分かったことと言えば、研究所で実験されていたのは獅子王の戦斧だということぐらいか」
自らを最強と知っているサーゼクスは、眷族を率いて陣頭指揮に当っていた。
彼の胸中やいかに。自分とその周囲は人間を含めた多くの勢力との融和を肯定してくれている。だが、こうして明らかになったのは差別意識か選民思想か。彼等は被害者であり、家族を失って怒りに震えているだけだ。そう思おうとしている。地金が晒されただけだとは、思いたくない。
同時に、仮面の男はともかく、他の協力者3人は取り押さえるに留めたかった。
仮面の男は駄目だ。完全に敵対せざるを得ない。たとえ無傷で確保しても、結局殺すしかないだろう。
だが、ヴァレリーとルネ、それからもう一人に関しては洗脳されていた、ということで何とか収めたい。
別に、悲劇を人数で語ることは出来ない。だが、これ以上増えることだけは絶対に避けねばならない。
それが、前政権から政権を奪い、魔王の座に座っているものの務めだと信じている。故に、彼は情に厚くとも、その判断に迷いは無い。

ただ、それでもファルビウムは無駄だといっていたが。それで見捨てていいことにはならないだろう。

「やや無理を言って、レーティングゲームの上位陣も集めた。これで守りは万全だろう」

もちろん、大火力で一気に薙ぎ払いに来る可能性は捨てきれない。だが、それには自分が対処する所存だ。

史上最強の悪魔として、相手が最強の神滅具を持っていようとも、必ず守ってみせる。

というよりも、これで敵の狙いを達成されては、国家としての威信に関わる。

神がどのような意図か分からぬまでも、造って残した神滅具。それが四つ揃っただけで、国を相手に宣戦布告した挙句国民を殺されるなど、あってはならない。

ただ、それを危惧するほどに神滅具は強大だということだった。

「とはいえ、今日実際に来なければ、ずっと遺族を拘束し、かつプレイヤーたちも動けなくなる。こんなことは言うべきではないが、今日来て欲しいものだが……」

確信がこみ上げてくる。敗北の空気が肺を満たしていく。

負けるわけにはいかないのに、どうして負けるかもしれないと思っている？

「陛下、大変です！」

それを確信させる一報が、駆け込んできた妻からもたらされた。

創造系の最たる長所は、数をそろえられるところであろう。

それも、必要に応じた性能を自ら作り上げることができるとなれば、その脅威は語るまでもない。

複数の神滅具の使い手が、協力して生み出した黄金のモンスター。

その装甲は神滅具の「覇獣（ブレイクダウン・ザ・ビースト）」にさえ匹敵し、その生命力は邪龍にさえ匹敵する。

とかく殺しにくいことに特化したこのモンスターは、実際のところ攻撃能力など一切持っていなかった。それが真実である。

ミスリードでもなんでもなく、ただ浮かび、気球のような速度で動くだけの木偶であった。

『非想天則（アドバルーン）』と名付けられた見掛け倒しの巨大モンスターは、全部で数百体。

それらはすべて、研究所職員の遺族の保護されている施設……とは全く関係のない所でゆったりとした速度でグルグルうろうろとしていた。

当然、これらに他を害する機能や命令は与えられてない。一定の高度を維持しているため、建造物にぶつかることもなく、ただそのまま通り過ぎるだろう。

『どうも冥界の皆さん、おはようございます！』

このモンスターが、いかに無害なのかを全力でアピールしながら、大音量で仮面の男の声が流れていた。

『このモンスターは安全です！』

『このモンスターは皆様に危害を加えません！』

『このモンスターは攻撃能力を持たず頑丈なだけです！』

『このモンスターは、一定の高度と一定の速度を維持して、所定のコースを飛行するだけです！』

全てのモンスターは、おそらく録音されているであろう仮面の男の声を、千里先まで届く勢いで放送していた。

もちろん、すべてが真実であり、誤情報も隠匿さえている情報もなかった。

ただ、それを信じることができるかどうかは、まったく別の話だったのだが。

『このモンスターは時折緑色の液体を撒き散らします。ご安心ください、ただの色水です。飲んでも危害はありません！』

『このモンスターは時折発光しますが、ただまぶしいだけで健康上の被害はありません！』

『このモンスターは常時煙を背中から吐いていますが、ただの湯気です。どうか気になさらず、そのまま日常生活を送ってください！』

『このモンスターはおぞましい声を出すこともありますが、なんの効

果もないので避難する必要はありません！』
『このモンスターは現政権とはなんの関係もない、犯罪者の造った単なる広告塔です！』
すべてが真実であり、すべてが事実であり、すべてが正解だった。
何一つ隠しておらず、巨大モンスターは騒音を撒き散らしつつ、冥界の空を回遊している。
ただし、レーティングゲームのトッププレイヤーと、魔王の領地周辺をうろうろしているというのが問題だった。
一方的に与えられている情報のすべてが真実であり、しかしすべてが疑わしかった。
単にでかくて頑丈なだけの、いかにも疑ってくださいとしか言いようのない、怪しさ爆発のアドバルーン。これは、見るからに陽動だった。いかにも怪しく、その安全性を宣伝する代物。
もちろん、これにはある程度の戦力を割き、本命である遺族を保護した施設を警備するべきであろう。
彼等がただ強いだけの悪魔であり、国家の安全を守る為の兵士であったなら、おそらくそうしていたはずだ。
だが、プレイヤー達はその情報を聞くや否や、魔王に一礼しそのまま眷属を率いて自らの領地にとんぼ返りした。
「陛下、申し訳ありませんが領地に戻らせていただきます」
「反逆者として裁いていただいても結構です。ですが、我々は領民を守る義務がある」
「我々は義によって此処に集いましたが、領地が脅かされているとなれば、話は別です」
当然である。この一件に関しては戒厳令がしかれており、秘密の作戦となっている。これをすっぽかしたからと言って、魔王もとがめることは出来ない。
そもそも、彼等はプロである以前に領主や、それに連なるものである。
たかが人間に殺される程度の犯罪者の遺族を守るために、侵略を受けている領地を空にするわけにも、領民から非難されるわけにも行か

なかった。
非情だとか薄情だとか、そういう問題ではない。ただ単純に彼等は貴族としての義務があり、優先順位がある。それだけのことだった。
どのみち、犯罪の明らかになった遺族の、その家名は地に落ちる。彼等を守る為に命をかけたところで、政治的には旨みはない。
魔王サーゼクスも、首都近辺で百を超えるモンスターがウロウロしていると聞かされて、何もしないわけにはいかなかった。
遺族を見捨てることは悲しい。だが、一応施設には結界を施してあるし、遺族自身の眷属が護衛として多少はいる。
後ろ髪を引かれながらも、拳を握り締めながらも、歯を食いしばりつつも、サーゼクスはモンスター撃退のために、眷族を率いて首都に戻らざるを得なかった。
そのモンスターから発される言葉が正しかろうが間違っていようが、国民がパニックにならないわけが無いのだから。
ファルビウムの想定した可能性の中で、最も恐れていた冥界全土への飽和攻撃。

悪意と嘲弄に満ちた挑発行為は、たったそれだけで遺族達を丸裸にしていた。

「……おかしいぞ、どうして陛下がいらっしゃらない?!」
「他のプレイヤーの方もだ……まさか、既に攻撃を受けているのか?!」
「そのわりには外が静かだ。ということは、会議でもされているのか?」
「眷属の一人も残さずにか?!」
みな、困惑し混乱し、現状を認識することに必死だった。
まさか、一度も戦闘をせずに護衛が全滅するはずが無い。
故にこの状況を理解できず、ただ訳もわからず声を荒げるばかり。
さすがに、すぐにでも魔王が戻ってくるとも分からぬ状況で、暴動を起こすほど上級悪魔は愚かではない。
また、上級悪魔は原則として戦闘能力も下級を懸絶している。相手

がどれだけご大層な神器を持っているとしても、所詮人間。数百人もの上級悪魔がいる以上、数人は倒されても、最後には自分達が勝つ。そう認識しているものも多かった。

それはリアスが抱いていた、一般的な認識でもある。第一、神滅具とは言っても実際に神滅具の所持者が神仏を殺した例などない。もちろん、赤龍帝と白龍皇の覇龍同士の激突など良くある話だが、それでも所詮人間だろう、というのが悪魔の考えである。

ある種の平和ボケと言ってもいいだろう。この時点で彼等は、赤龍帝と白龍皇が生前、三大勢力のすべてと戦ったことを知識として知っていても、体験していない。災害をカタログスペックで知っていても、その脅威を肌で感じたことが無いように。

それも、ある種の文化である。間違った認識も、社会全体が共有していれば、宗教めいた根拠のない価値観を生む。なにせ、全員がわざわざ日常で話題にするようなことでもなく、加えて間違ったまま過ごしていても日常に支障はない。であれば、それがそのまま常識になるのは当然だった。

「全く……貴い血である純血の上級悪魔の身を危ぶむのも理解できるが、そもそも我等とて無力ではない。たかが人間四人如き、自衛できぬわけはないのだ」

「左様、なにかアクシデントはあったのであろうが、取り乱しては品位が疑われるというもの」

「これはむしろ好機であろう、聖書の神の遺産を偶々得ただけで図に乗っている輩など、この手で裁いてやろうではないか」

「違いない、息子の仇を討てるのであれば、少々の危険など……」

ただし、間違っているといっても、そこまで大げさな間違いでもなかった。

上級神滅具や聖遺物を例外とすれば、神滅具といえども使い手は人間である。その生命力に限りがあり、覇龍だろうがなんだろうが、一時暴走してもすぐに力尽きる。

一人は吸血鬼の混血であろうが、たかが血を吸う鬼の混血ごときに純血の悪魔が遅れを取るわけもない。その思想が、彼等に優位を疑わ

せていなかった。
そう、そこまで間違ってはいなかった。だが、魔王サーゼクスに決死の覚悟をさせるほどに、ファルビウムとアジュカは警鐘を発していたのだ。彼等は確信していた、正真正銘の神話殺しが生まれつつあると。
そして、遺族は体感する。自らを狙っている人間の、底すらない悪意を。
爆音と暴風と、悲鳴と嗚咽で。

遺族に罪はない。正真正銘、彼等自身には連帯責任以上のものはない。それは貴族社会から見れば悪いことではあったが、現在それをとがめるべきではなかった。

ただし、彼等の抱えている事情が冥界全体に不利益をもたらすものであり、同時に周囲に被害をもたらすものだった。

故に、彼等を保護するための施設は人気のない、余った土地に急遽建設された。

そもそも、神滅具使いと魔王の激突に耐えうるとなると容易ではない。堅牢に堅牢を重ね、かつ数百人を収容し短期間とはいえ生活させるとなると、ある程度の居住性は犠牲にせざるを得なかった。

建設時間があればまだ話は別だったが、それでもかなりの速度で設計、着工、完成した。だが、それが貴族である上級悪魔たちを満足させられるかと言えば、それは否であろう。

もちろん、できる限りのことはしたのだ。だが、上級悪魔を実際に殺害、強姦した犯罪者が二カ月後に攻め込むと宣言したところで、実際にそれを遺族が信じるわけもない。また、魔王もそれを理由に二ヶ月かけて工事をするわけにもいかない。

仮設の避難所を作り、そこから正式に施工した場所に避難させるという案もあったが、移動中が一番危険なのは明白であり、結局貴族観から言えば狭苦しい空間に押し込めることになってしまった。

上流階級の面々が、自分の親族が惨たらしく殺害され、その上己たちも狙われているこの状況で、更に狭いところに拘束されれば不満が出て当然である。

その不満は、極めて正当に仮面の男に向けられ、その攻撃性を護衛や指揮を担当している面々にぶつけるのは当然だった。

奴を殺せ、捕らえて惨たらしく責めろ、苦しみを味あわせ続けてやってくれ。

遺族は、それを当然だと思っていた。実際のところ、当然だった。彼等の長い人生で、それはずっと当然だったのだから。

仮面の男が捕らえられるのも、自分達の無事が約束されているのも、魔王やレーティングゲームのトッププレイヤーが全力で自分達を守るのも。

それは当然だった。ただし、それよりも優先すべきことが生じなければ、である。

『帰ってきな～～、もちろん全員連れて』

黄金の巨大モンスターが、首都を包囲してそのままうろついている。もちろん首都直上ではなく首都近辺であって、そこそこの距離はある。だが、間合いを詰めようと思えば一瞬で接近できる距離なのも事実である。

その情報を妻から聞いたサーゼクスは、首都で警戒していたファルビウムに連絡を取った。そして、この事態を予想していたらしい彼からあっさりと遺族を見捨てるように指示される。

「……私だけでも残るか、或いは私だけ戻るというのはどうだ？」

『だ～め。君は誰よりも慕われている最強の魔王だ、帰ってこないと首都は混乱するよ。たとえあのでかいのが何もしなくてもね。そして、実際に何かしたら君はどうするつもり？　犯罪者の言葉を信じて、首都に戻りませんでしたって言うつもり？』

戒厳令をしいたこともあって、この事件は一般には知られていない。

その甲斐もあって、最悪この施設を放棄して遺族を全員見殺しにしても、世論は魔王が見捨てたとは知らずに済む。

そして、そもそも社会の秩序とはできる限りの人数を救うための制度であり、つまり確実に命を狙われている数百人と命の危険があるかもしれない数万人。これを天秤にかければ、魔王には前者を選ぶ権利はない。

たとえサーゼクスがどれだけ強かろうと、或いはどれだけ善良だったとしても、魔王として首都に向かわなければならない。

ファルビウムの言うとおり、首都で実際に暴れられれば、それこそ数万人単位の死者が、そして何もなくてもパニックによって死者が生

まれてしまう。
それは、避けねばならない。
ならないと分かっていても、サーゼクスには辛い決断だった。
『君が抜ければ、その施設の戦力はがた落ちだ。トッププレイヤーだって、領地が心配だろうし、君が抜けたことを口実にして自分達も戻るよ。実際、そっちを優先させるべきだしね。ぶっちゃけ、そこは予定通りに見捨てるべきだ。眷族を引き連れて、全員に帰還命令を出すべきだ』
「だが……だが！」
『君はさ～～、魔王でしょう？　国民全ては救えないよ～～』
やや軽い口調ではあるが、それでもファルビウムとてどうでもいいと思っているわけではない。
だが、この深刻な戦況ゆえに、それ以外の選択肢が一切ないのだ。ただ、それだけのことであり、こうして議論している時間が無駄でしかない。
『……ルシファー、君は集ってもらったプレイヤーを、領地を心配している貴族を反逆者にするつもりかい？』
「……分かった」
苦渋の決断。たったそれだけの言葉が、これほど重い。
分かった、という返事は、数百人を捨てて、数万人を選ぶ言葉だったとしても。
今この場にいる多くの被害者を見捨てることは、彼には辛すぎた。
『適切なダメージコントロールだ。そう思って、さっさと逃げることだね』
サーゼクスは、自分の手を見た。ついさっき、不安げに自分の手を握ってくれた、職員の息子を思い出す。
まだ幼かった。ミリキャスと比べても、尚幼かった。
彼は父を失い、あげく全てを失おうとしている。自分の命さえも。
激情で、身が焼かれそうになる。だが、それでも彼は判断を誤らなかった。
撤収は速やかに行われ、程なくして保護施設を守っていた精兵は、

本当に自分達が守るべき場所へ散っていった。
それに庇護者達が気付いたのは、何もかもが終わり、つまり自分達を死守してくれるはずだったヒーローが、『逃げ出した』後のことだった。
なんともご丁寧なことに、逃走妨害を兼ねた、侵入妨害の結界を残して。
堅牢な建造物は、出たいと思えば檻に成り、出たくないと思えば城になる。
そして、今の保護施設はただの餌箱となっていた。

「本当に、みんな見捨てやがった」
ルネは当然のように調べられていた、荒野に建設された保護施設を、遠くから監視していた。
巧妙に偽装されてはいたが、それでも資材が動けば人も動く。仮面の男には見切るなど容易かった。
そう、この男の三つある眼の視界から、この状況は少しも漏れていない。
何もかも予定通りである。というよりも、数と質に物を言わせたこの作戦は、現在の悪魔には対応できない作戦だった。
精兵の強みは、つまり突破力である。だが、防衛にはどうあっても人数が必要になる。
少数精鋭を謳い、多くの実力者を抱えている悪魔ではある。だが、自由に動かせる国軍の質と量は、決して満たされているとはいえない。
単純な作戦ほど、状況は深刻になるのは当然だ。悪魔はまさしく地金を晒していた。
「ヒーローか。かっこいいねえ。魔王の真の姿は前魔王の十倍の魔力で、世界だって滅ぼせるんだって？　レーティングゲームのチャンピオンは四大魔王に匹敵して、皇帝と呼ばれているんだって？　凄いなあ、そう思わないか。トップは本当に強くて、眷属だって半端じゃないらしい。羨ましいね、駒が沢山あって。でもまあ、ほら、結局冥界

をアンチモンスターから守りきれなかったじゃないか。外法で強化されている程度の、神滅具の禁手一つにだって対応できなかったじゃないか。凄いねぇ、そんな程度で自信満々なんだから。国難のときに、アスリートを引っ張ってこないと戦えないんだから、他に仕事のある貴族様に召集をかけないといけないんだから」

ルネは標的の護衛が本当に一戦さえ交えずに撤退したことを見て、愕然としている。

それゆえ遮られることもなく仮面の男は、戦うということでウサギの面をかぶった男は饒舌に語り始める。

「スーパーロボットとリアルロボットを分けるのは、単独の凄い機体でなんでもできるか、出来ないかだ。どんなエネルギーで動こうが、すげーロボット一体でなんでもかんでも解決できなかったらリアルロボットだし、どんなに地味でも一体で物語が丸く収まるならスーパーロボットだ。これはどっちかというと味方のロボットよりも敵に依存している。毎週ご丁寧に一体ずつ投入してくれるなら、敵と同程度の性能でもスーパーロボットとして成立するさ。だが、相手よりどんなに強いロボットでも、カバーできないほどの広範囲を攻撃されれば、当然単独で問題が解決できなくなりリアルロボットになってしまう。つまりだ、リアルではチョー強いのが数体いるよりも、そこそこ使えるのが大量にいる方がよほど適しているわけだ。アレだけのモンスターも、一箇所に集中させれば、案外倒せたのかもしれない。でもまあ、そうと知って無人の量産モンスターを集中させる必要はない。こっちはあくまでも遺族をぶっ殺すのが目的なんだからな」

やや歪曲した形ではあったが、仮面の男と魔王の利害は一致した。あるいはそうなってしまった。

仮面の男は遺族さえ殺せれば他はどうでも良く、魔王たちも遺族よりも冥界全体の危機を優先せざるを得ない。

故に、彼等とは交戦する必要さえなく、穏便に退いていただけたわけだ。

流血なく決着するとは、なんとも文化的である。

ただ、それはつまり彼等は政府から見捨てられた、ということだっ

た。
　世間から捨てられる。その悲しさを知っている三人は、一様に沈んでいた。
　だが、それでもルネは顔を上げていた。
　とにかく、実際のところ他に被害を与えることなく、護衛は排除できたのだ。
　あとは結界を破壊するだけだ。であれば、さっさと終わらせよう。モンスターを排除して、戻ってこないとも限らないのだから。
　そして、罪悪感を感じているヴァレリーには悪いが、ルネはこれから行われる行為に、やや高揚を感じてさえいた。
　結局、恨んでいる相手に直接ダメージを与えられることが、一番爽快だ。
「さて……やろうか」
　仮面の男の両目が、波紋模様を描いた。眉間の目は白く染まり、血管が浮かんでいる。
　輪廻眼、畜生道、口寄せの術。
　両手を地面に触れさせると、同時に数十の煙が巻き上がった。それが晴れた頃、そこにはあらかじめ蘇生と改造を施していた研究所の男性職員が現れていた。
　体のいたるところにうずめられた黒い棒が痛々しく見えるのは、彼等の体が傷つけられている以上に肉体が操作されているからであろう。
「聖杯で蘇生させつつ肉片からでも再生できる機能を与え、更にそれ以外の能力は剥奪済み、修羅道で自爆機能を増設、写輪眼の幻術で行動を抑制、自分の能力の容量は赤龍帝で増幅、チャクラ問題はアンチモンスターから餓鬼道で吸収しているから問題なし。さあ、頑張れボルガ博士たちよ！　お前達があの施設の結界を破壊するのだ！」
「三つ目さんを敵に回してはいけないと、僕は強く思うようになりました」
「うっうっう……どうしてこんな非道な作戦が思いつくんでしょうか……」

「非道、違うな。これは卑劣というのだ！」

邪悪の化身としての顔を前面にだして、仮面の男は操っている男性職員へ指示をだした。腰から生えている多関節の尾が揺らめいている。

おそらく想像しうる限り、いや想像の限界を突破した境地であった。

単に遺族の前で死者を辱めたいという最悪の理由で決行された、この二代目火影作戦。

端的に言って、遺族の前で自爆するために自爆能力と再生能力を与えられた彼等は、体を操られていると一目でわかるほどにおぼつかない足取りで、荒野を歩き始めた。

本来、穢土転生という術で行われるべきこの作戦で、相違点があるとすれば、それは死者たちの一体一体が苦痛を感じる能力を取り戻しているということだろう。

「痛い、痛い……」

「やめろ、やめろ」

「ああ、体が勝手に……」

「もう、くそ、おのれ……」

その両目は波紋模様を描き、服は薄汚れた白衣。口から出るのは苦悶の声、表情は悲劇に染まっている。

彼等が研究所で与えていた苦痛、それと同等の苦しみが心身をさいなんでいた。

彼等は死別した家族の下へその苦しむ姿を見せ付けるため、彼等を守る最後の砦である結界を破壊するため、ゆっくりと歩みを進めていく。

「安心してくれたまえ、君達は死ぬ間際に頭をよぎった家族に会うために黄泉返ったんだ。あの施設には、君達の大切な人が集っている。きっと、君達の死を悼んでいるだろう、悲しんでいるだろう、後悔しているだろう、或いは罪を犯したことに心を痛めているかもしれない。死者と会話を交わしたいと思うのは生者として当然であり、生者に言葉を残したいと思うのは死者として当然のことだ。なに、気にす

る必要はないさ、自分達にも利のあることだからな。君達は遺族と逢える、自分達も遺族に逢える、実に理想的な展開だろう。なに、結界の前で君達は永延自爆し続けることになるが、そんなものは大した問題じゃないさ。君達が本当に家族に、両親に、恋人に、伴侶に、婚約者に、子供に会いたいと思っているのなら！　体が爆発しても、臓腑を撒き散らして頭蓋が大地に転がっても、肉片が同僚と混じって血液が蒸発しようとも、耐えられるはず！　いや、耐えてほしい！　君達が上級悪魔で、人間の上位種であるのなら、きっと耐えられるはず！

戦え、負けるな！　結界なんてぶっ壊せ！　死ぬ気で頑張れ！　このままだと死んでも死に切れないだろう！　そして家族と分かち合ってくれ、その苦しみを！　この世の万物は分かち合ってこそ価値があるのだから！　健やかなる時もやめるときも苦楽を共にする、それが本当の家族というものだ。そう……今日は死ぬにはいい日だ！　死ぬにはいい日など、死ぬまでないんだからね！」

「絶好調ですね……三つ目さん」

「どうしてでしょうか……言うまいとは思っていましたけど、これは、まさか、こんなことになるなんて……」

ある意味仮面の男が最も嫌うであろう禁句を、実際に蘇生と改造を施したヴァレリーは涙しながら口にした。

それほどに、この所業は生命の価値と死者の尊厳を踏みにじる行為だった。

騎士道も武士道も、国際協定も倫理観も存在しない戦争が、どれほど凄惨なのか三人は身をもって体験していた。知りたくなかった、そんな情報。

ただし、ルネはその顔をつめたい狂気ににじませていた。

彼女が復讐の狂気をある程度抑えていたのは、結局のところ自分の治療が済むよりも先に男性職員を手管を尽くして皆殺しにし、女性職員の精神を蹂躙し尽くしていたからであろう。

既に、自分を直接辱めた連中は死んでいる。それが彼女の狂気を抑えていた。

だが、復讐者当人以上に狂気を燃え上がらせていた男が、その鬱屈

していた魂を燃え上がらせていた。
燃え上がった結果、死者は舞い戻った。遺族を地獄へ引きずり込むために。
「ルネ、なかなかいい顔をしているな。いいぞ、くすぶるハートに火をつけろ！　人間に出来ないことなんてない！　これが正義かどうかなんて些細な問題だ！　そんなもんは後世の歴史家にでも考えさせろ！　大事なのは今自分が何をしたいのか、それだけだ！　被害者ぶっている被害者を、被害者として加害者に回れ！」
「言われるまでもねえよ」
そっけないようでいて、しかしルネは賛同している。
もしかしたら、一時の熱狂で、冷めれば後悔するのかも知れない。
我に帰れば、もう立ち直れないのかもしれない。
だとしても、今は心を焦がす炎に身を委ねよう。
幻痛が体を焦がす。既に再生した四肢が、喪失した際の断裂の痛みが走った。
本来幻痛とは、喪失した部位の痛みを感じることだが、彼女の場合は又別だった。
奪われた体、喪失した部位。それらが再生しても、記憶をいじられていない以上、魂に傷が刻まれている。あるはずの体が失われたかのように、激しく燃え上がっている。
その痛みが思い出させるのだ。あの、終わりの見えない地獄を。
殺してやる。殺してやる。殺してやる。殺してやる。殺してやる。
人間という生き物の、最も原始的な苦痛への報復の意思が、眼前の仇を前に燃え盛る。
「……ぶっ殺してやる」
引き返せるギリギリのラインに立つ彼女に、『迷い』はない。

DRAGON 3

あからさまな誘導で、あからさまな陽動で、あからさまな示威行為で、あからさまな挑発行為だった。

『どうも冥界の皆さん、おはようございます！』

『このモンスターは安全です！』

『このモンスターは皆様に危害を加えません！』

『このモンスターは攻撃能力を持たず頑丈なだけです！』

『このモンスターは、一定の高度と一定の速度を維持して、所定のコースを飛行するだけです！』

『このモンスターは時折緑色の液体を撒き散らします。ご安心ください、ただの色水です。飲んでも危害はありません！』

『このモンスターは時折発光しますが、ただまぶしいだけで健康上の被害はありません！』

『このモンスターは常時煙を背中から吐いていますが、ただの湯気です。どうか気になさらず、そのまま日常生活を送ってください！』

『このモンスターはおぞましい声を出すこともありますが、なんの効果もないので避難する必要はありません！』

『このモンスターは現政権とはなんの関係もない、犯罪者の造った単なる広告塔です！』

一応念の為、というべきか。撒き散らされている体液や煙、発光や雄叫び。それらを解析したところ、実際にまったくの無害だった。アジュカがわざわざ真っ先に調べたのでまず間違いない。

いっそ腹立たしいほどに、宣言どおりにモンスターは無害だった。騒音被害は激しいが、それだけだ。都市部に大きな防音結界を構築することで、速やかに被害は収束する。

数百は下らないモンスターは、都市部や居住区、あるいは田畑に近づくことなく空中を入道雲の如く浮遊している。

だが、それでもそれを全て撃墜することが出来なかった。魔王とその眷属が総がかりで、一方的に攻撃しているにもかかわらず時間をかけて一機落せる。それほどの規格外さだった。

最強の魔王であるサーゼクスをして、本来の姿になって装甲を穿ち、内部に侵入してから滅ぼしつくしてようやく死ぬ。そんな堅牢極まる広告塔だった。

サーゼクスをして数十分を要するそのモンスターは、当然並の悪魔では装甲を穿つことがまず無理だった。

エンペラー・ベリアルの『無意味』をもってしても、与えられた格ゆえか、撃墜することは不可能だった。精々回遊コースを力づくで変更させ、居住区域から話すのがやっとであり、苛立ちを隠せなかった。

というよりも、レーティングゲームはあくまでも悪魔同士、貴族同士のスポーツである。彼等が一級の戦闘者であることは事実だが、それでもこのような規格外に頑丈な怪物を殺しきるほどの火力を持っていない。その必要がなかったからだ。

このモンスターを殺しきるには、パワータイプやウィザードタイプの、世界をも滅ぼすほどの超火力が必要だった。そんな魔力を単独で持っている悪魔なぞ、サーゼクス以外にはいなかった。

報道では、実際に無害であることが民衆へ説明され、すべてのモンスターが都市部から離れつつあることを全地図によって証明し、安心するように伝えていた。

もちろん、上級中級下級を問わず、最も悪魔達を安心させたのはサーゼクスの勇姿であることは確かだった。

だが、当のサーゼクスは冷や汗が止まらなかった。

もしも、このモンスターがもっと生産されていれば。もしも、このモンスターが都市部直上を回遊していれば。もしも、このモンスターが大地をこするように飛べば。もしも、このモンスターの撒き散らしているものが本当に有害であったら。

この冥界に住む悪魔という種は絶滅している。自分や自分が集めた上位陣は生き残るだろうが、それ以外の多くが死に絶える。そんな想像が脳内を止まらない。

いつでも、悪魔なんざ根絶やしにできる。それを実際に証明しているかのような、そんなデモンストレーション。それがこれだった。

神滅具四つ、それを戦略的に組み合わせて運用する、悪魔めいた人

間の悪意。

奇しくも、サーゼクスが望んでいた絆の力、輪の力の顕現だった。

『おそらく、聖杯と魔獣創造、それから獅子王の合わせ技だろう。聖杯をつなぎにして、魔獣一体一体に獅子王の装甲を上乗せしている。これだけの数を用意したとなると、赤龍帝の力で全員を強化しているな』

アジュカの、冷静で酷薄な分析は先ほど教えられた。

対抗術式を構築しているらしいが、あくまでもこの場限りの代物らしい。

魔獣創造も幽世の聖杯も、創造と改造を司る神器だ。アジュカがこの場のモンスターを撃墜する術式を造っても、それに対処することができるそうだ。

『空間転移そのものは、難しいけど珍しくはないね～～。おそらくだけど～～、冥界中にモンスターを召喚したのは赤龍帝の使い手の、その当人の力だね～～。そいつの本拠地を探し出さないと、どうにもならないよ。まあ、冥界悪魔領にも地球にもないだろうし、見つけるのは絶対に無理だけどね～～』

五体目の黄金モンスターを滅ぼしながら、最強の魔王は自責の念に捕らわれていた。

すべてが手遅れだった。悪魔を含めた聖書の勢力は、西暦以降敵を作りすぎた。おそらくこの『避難訓練』を見て、その弱体化の著しさを鼻で笑っているだろう。加えて、仮面の男の所在を知っていても、だれも教えてくれない、それどころか支援さえするだろう。

戯れで冥界の全てを手玉にとり、その気になればいつでも神話を滅ぼせる一味。その被害を真っ先に受けたのは、おそらく最も恨まれている悪魔だ。絶対に、誰も助けてくれない。

せめて、聖書の勢力の同盟を結んだ後であれば、ここまで酷いことにはならなかったはずだ。二千年単位での手遅れ、後手だった。

亡国の王は、虚しささえ覚えながらそれでも全力を尽くしていた。

アジュカ・ベルゼブブという天才がいる。天は二物を与えずという

が、サーゼクスに異能と王の器を与えたように、アジュカという男は異能と異才を併せ持っていた。

そんな彼が、無駄と知って作り出した強固な結界は、外側からの物理的な力にはめっぽう強かった。それこそ、主神クラスの攻撃をもってしなければ、破壊が困難なほどに。

神滅具の使い手であっても、破壊に集中しなければ突破できない代物である。たとえ空間に特化した『絶霧』であっても、抜け出るなど不可能であった。

サーゼクスやレーティングゲームのトッププレイヤー、及びその眷属が背後を気にせず戦えるように準備していたものではある。だが、如何に硬かろうと反撃できなければ、落ちるのは当然である。

まして、結界は基点の存在している『内側』からは、容易く破壊できるのだから。それこそ、普通の上級悪魔であったとしても。

アジュカは知っている。人間は新しいものを生み出すことができる生き物であり、その能力は加速度的に向上し続けている。それこそ、悪魔との契約を必要としなくなるほどに。

故に、戦士として優れているのではなく、創造的な人間が複数の神滅具を、それも改造と創造の最上級を得てしまえば。それは自分達のような突然変異では、どうにもならない流れを造ってしまうと。

ファルビウムは知っている。今回の一件は単に氷山の一角でしかないことを。悪魔という種族は内側にも外側にも敵を作りすぎていた。最善に最善を重ねても、結局延命にしかならないと。

上級悪魔に根付いている『悪魔こそ至上』という幻想は、もはや拭いがたい。そんな時代は西暦が始まる前に、とっくの昔に終わっている。だというのに、誰も彼もが内部での勢力争いに終始し、かつ他人を無遠慮に侵害することにためらわない。

仕方が無いといえば仕方が無いのだ。新政権に移り変わってから、悪魔の政治はある程度表面上は落ち着いており、戦乱はない。他の神話との交流も絶えて久しく、人間との契約以外では、天使やエクソシスト、堕天使とその信者の小競り合いしか起きていない。

これで、思い上がるなというほうが無理だ。トップが現状を正しく

認識していても、それが末端、或いは一般の貴族に浸透していなければ意味が無い。

新しい風が吹けば、あるいは多少変化していたのかもしれない。だが、新しい風は最悪の形で吹いて来た。少なくとも、悪魔にとっては。

「……どうやら、攻撃が始まったか」

強固な結界に守られつつも、流石に音や振動は防ぎきれるものではない。

建物の内側で警戒しつつも、それでもやはり攻撃が始まれば緊張する。

不敵に笑うものもいれば、怒りに拳を震わせるもの、無残に殺された息子を思い決意を新たにする者、恋人を犯されたシーンを想い殺意で魔力を逆らせるもの。

卑劣な手段で心を破壊され、そのまま抵抗することも出来ずに殺され、犯された。

それが彼等の、仮面の男の所業への認識だった。それは正しい。実際のところ、彼の眼の力によって職員は抵抗も出来ずに、不意を打たれて全滅した。彼等の憤りは全く正しい。

だが、不意さえ撃たれなければ、数で上回れば、或いはこちらが怒りに燃えていれば必ず勝てる。そう思うことは、間違っていた。

四人いるうちの一人、仮面の男。彼がその気になれば、この場の面々を根こそぎ殺すなど容易いという事実を、彼等は想像さえしなかった。

行き過ぎた自尊心が、長い年月で裏打ちされた経験が、社会全体の風潮が、その幻想を支えていた。もちろん、触れば消えるはかない代物だったのだが。

「ふん、どうやら敵は無意味な攻撃を繰り返しているようだ」

「さすがは現ベルゼブブ、その結界は堅牢ですな」

「これでは我等の出番もないまま、捕縛されてしまうやも知れません」

「そうですか、それは口惜しい。娘の純潔を奪ったあの身の程知らずの野蛮人を、この手で引き裂きたかったのだが……」

攻撃が始まって、数分が経過した。

それでも、結界は相変わらず堅牢で、突破される見込みはない。
外からは絶えず爆音が響き、子供達はおびえているが、それだけだった。
皆、自分達の安全を信じて疑っていない。
「……どうですか、皆さん。このまま待っていても退屈だ、結界の外を見にいこうではありませんか」
そう、誰かが口にした。単にうるさくなって鬱陶しいと思ったのか、或いは怨敵の無様な姿を見ようと思ったのか。誰かに操られたわけでもないのに、誰かが無責任にそう言った。
その行為自体に、良くも悪くも意味はなかった。結界越しに幻術を使うことは可能でも、仮面の男が実際にそれをすることはありえなかったし、堅牢な結界に守られている以上、その外側に出なければ悪魔達は安全だった。
「……ふむ、なるほど。それは面白そうだ」
「憎い仇の、その顔を拝むとしよう」
「きっと、顔を赤くして躍起になっているに違いない」
「ふん、どれだけご大層な武器を持っていても、所詮は人間ということだ」
「我等悪魔の、その英知には及ばないということだな」
男衆を主として、特に苛烈な悪魔達は表へ向かう。それこそ、檻に閉じ込められた猛獣を見に行く、絶対的な安全圏を確信しての行為だった。
だれもが意気揚々と、或いは憤慨して。仮面の男達の無駄な行為を見ようとしていた。
だが、そこにあったのは、無様は無様でも死んだはずの男性職員の、その死に続ける無残な姿だった。
「うう……ああ……」
それは、見知った顔の男だった。彼は血まみれで、息も絶え絶えだった。

衣服はとっくに燃え尽きて、首さえも破裂しているのに、頭部は確かに意思を宿していた。
結界の内側の、己を見て硬直している遺族へ、なにやら改造を受けているらしき波紋模様の眼で視線をあわせ、確かに口をパクパクと動かしている。
少なくとも、明らかに血肉をもって蘇り、幻想ではなく実体でこの地に蘇っていた。
見れば明らかなほどに、死んだはずの彼等はこの世界で肉片になっていた。

「……す……」

一人二人ではない。数十人の男達が、数千ものパーツに分離し、大地にその五体を撒き散らしている。
それが、まるで逆再生の早回しの如く、磁石が砂鉄を引き寄せるように、彼らの体は元に戻っていく。
瞬く間に、という表現が適切なほどに、死んだはずの悪魔達はもとの健常な姿に戻っていた。

「たす、けーーーーーー!」

誰が言ったのか、全員が言おうとしたのか。明らかに情けない顔で、溺れているように泣きそうな顔で、復活した彼等は助けを求めて、そして……。
ピンと、栓かなにかが抜けるような音がして、轟音が施設を揺らし、結界の向こうでは先ほど見たばかりの光景が広がっていた。
撒き散らされている臓腑、焼け焦げた肉片、粉々になって混ざり合った四肢、意思があることが分かる頭部。
それが、再び復活するために修復していく。
彼等は敵から攻撃を受けているのではない。彼等は後天的に施された機能で、自ら爆発している。

爆発するために修復し、強固な結界に阻まれて無駄に終わり、また修復していく。

それを、彼等が理解したのは、それが数度繰り返されてのこと。余りにも想像を絶する状況に、脳が処理し切れなかったからだ。

死んだはずの親族が生き返っていることも、その彼等が爆発と復活を繰り返していることも。どれもが彼等の常識を明らかに超えていた。

「たす、けて！」

「い、いやあああああああ！」

そう悲鳴を上げたのは、誰だったのか。助けを求めたのは、誰だったか。

餌箱の中の上級悪魔達は、ようやく自分達の敵が比類なき悪意に満ちた存在であり、その彼が己等を玩具としていることに、今更気付いたのだった。

「あなた、あなた！　待っていて、すぐにそっちへ！」

結界は堅牢だった。おそらく単なる花火程度の爆発では、終末まで続けてもヒビ一つ入るまい。だが、内部からであれば話は別だ。結界の基点は内側にあり、停止させるのではなく破壊するだけであれば、並の上級悪魔でも十分に可能だ。

とにかく、結界の向こう側に行く。そのためにこの施設の最後の防衛機能である、結界を破壊しようとする若い女性の悪魔がいた。

それに協力しようとする悪魔、それを妨害しようとする悪魔。施設の中はようやく混乱した。

結界を破壊しようとする悪魔にも結界を破壊するだけの理由があり、結界を維持しようとする悪魔にも結界を維持するだけの理由がある。

そして、どちらを選んでも仮面の男にとっては喜ばしい選択だった。

少なくともこの混乱そのものさえ、彼にとっては肴だった。

「お願いします、彼と話をしたいのです！」

「馬鹿な、あれは明らかに敵に操られているぞ。結界を壊せばあれが

なだれ込んでくるのだぞ！」
「薄情な、貴殿に死別した息子へ駆け寄るだけの情もないと？」
「そもそもいい迷惑だったのだ、あの婿が違法研究などしていたせいで、いらぬ面倒に巻き込まれた。我が家の家名も地に落ちたのだぞ！」
「だが、どの道屍を操り我等を愚弄している男を討つには、表に出なければならぬのだぞ！」
「陛下の構築してくださった結界を、勝手な事情で壊すとは、不敬極まるぞ！」
「サーゼクス様がいらっしゃらぬこの状況で、子供の使いでもあるまいに、顔色を伺ってどうする！」
「貴殿らはまだよい、しかしこちらには幼子や妊婦がいるのだぞ?!
戦闘等すれば世継ぎが死ぬのだ!!」
「舐められたままでいられるか、人間風情が我等を嘲弄したことを後悔させてやる！」
「落ち着け、これは仮面の男の卑劣な罠だ。理性的に考えれば分かるであろう、これは結界を壊させるための挑発に過ぎぬ」
「人間如きを恐れてなんとする?! これを許すということは、我等の尊厳に関わるぞ!!」

「自分のターン！ 手札から魔法カード『死者蘇生』発動！ 相手の墓地からモンスターカードを場に召喚！ さらに永続罠カード『互乗起爆札』発動！ このターン中に墓地から召喚されたモンスターカードを墓地に送り、その本来の攻撃力の半分のダメージを相手のライフに与える、このカードはセットしなおすことができる！ 更に永続罠カード『穢土転生の本来の使い方』を発動！ このターン中に墓地から特殊召喚され、同じターン中に他のカードの効果で墓地へ送られたモンスターカードを、攻撃力をゼロにして再びフィールドに特殊召喚することができる。このカードはセットしなおすことができる！
みたか、これが『二代目火影作戦』だ！ ずっと自分のターン！」

外では爆弾となった男性職員が血肉を撒き散らし、中では遺族達が喧々囂々の混乱を引き起こしている。
その気になれば、結界をこじ開けることも不可能ではあるまいに。
仮面の男はわざわざ死者を冒涜し、わざわざ内側で混乱を引き起こして己の手で結界を壊させようとしていた。
狂騒が、狂気が、邪悪が、無秩序が、不道徳が、死者の嘆きと生者の混沌がそこにあった。
現世と彼岸を隔てる結界は、おそらく程なくして壊されるだろう。
餌箱を、餌達は己の手で破壊する。
悪意に満ちた眼は、そのときを待っていた。

狂騒のなかで、結局結界は破壊された。それは民主的に多数決で破壊することが決定されたわけではなく、代表が意見をまとめて正しいと思われる結論に到達したわけでもなく、誰かが妙案を思いつきそれに皆が賛同したわけでもない。

止める側はある程度落ち着いており、しかし壊す側は頭に血が上っていたからだ。双方貴族ゆえにあまり軽率な真似はできず、必然止めるほうよりも壊す方が熱狂していたゆえ、結界の基点は壊された。

結界は解除され、当然男性職員達は施設の中へ入っていく。なんの嫌がらせか、既に修羅道による自爆も解除され、彼等は泣きじゃくりながら、安堵しつつ遺族と邂逅していた。

むろん、すべてが暖かい再会だったわけではない。だが、それでも想いは確かに交差されていた。

「あなた、あなたですか?!」

「す、すまない……不始末で、迷惑を……」

「まったくだ！　陛下の手を煩わせおって！」

「も、申し訳ありません、義父さま……」

「ほざけ、もはや貴様など息子でも婿でもない！」

「父様?!」

「黙っていろ、これはもはや家名の問題だ」

「うう、それでも……君に会いたかった……」

「私も、私も……!!」

爆発を繰り返していた生ける屍へ近づくことに躊躇したのは、ごくごく一瞬。

伝え損ねたこと、伝えたかったこと、伝えたかったこと。

死者と生者は確かに、ありえなかった出会いを、確かに交わしていた。

この二ヶ月、肉親を失い狭いところへ押し込まれ、擦り切れていたさえいた遺族は、タガが外れたかのように感情を爆発させていた。

正に、鮮度を取り戻していたというべきだろう。風化していた、或

いは複雑になっていた感情は、この衝撃で単純化されていた。
一目逢えるなら。それをかなえた彼等は、ぴちぴちに感情を取り戻している。まさに、収穫に適していた。

「皆様を、神威（カムイ）の時空間にご案内……！」
仮面の男の両目が、波紋模様から複雑な形の輪を描く。腰から生えた尾が伸びて、赤く輝きその眼の力を増大させていく。
その周囲に巨大な天狗の像が現れ、その両手に巨大な黒い渦が生み出された。天狗の手によって投擲されたそれは、結界の解除された施設と、その中の遺族と死者をまとめて飲み込んでいた。
空間転移の衝撃か、或いは地盤が崩れたからか。施設は激震し、床から天井から、大きく亀裂が走り崩れ落ちた。
もとより、腰から生えた翼で飛行さえ可能な悪魔である。施設の中ゆえに周囲の変化は理解できずとも、とりあえず外へ向かう。
そして、出て愕然としていた。そこは周囲に人気のない荒野だが、それでも冥界だったはずだ。
それは、黒い天蓋の異空間だった。底なしの闇からは白い柱が屹立して、施設を歪に支える足場となっている。一本一本がそこそこの大きさだったが、それでも広大な施設を支えるには不十分で、数本の高さの異なる柱に、折れ曲がるようにのっかっていた。
「……『絶霧』の空間か？」
上位神滅具の一つであり、空間を操る神器。それが彼等の脳裏に浮かんだのは当然だった。自分達を、建物ごと転移させたのだ。そう考えても当然である。
だが、そんな想像が正しいかどうかは置いておいて、彼等の状況判断は間違っていない。つまり、遺族と死者は隔離空間に拉致されたのだ。こうなっては、魔王やプレイヤーの救援は絶対に見込めない。
この場の、足手まといや自爆する死体を抱えた状況で、神滅具所持者四人を相手にしなければならないのだ。それでも、人数の理は失われていない、そう判断しているものが多数だった。
「もしや、陛下はこの結界で隔離されたのであろうか？」

「いや、それはありえぬと思うが……」
「いずれにせよ、ここが敵の罠であろう」
「鬱憤が溜まっていたのだ、この憤りを身の程知らずにぶつけてくれよう！」
聖水に満ちた、清らかな空間。悪魔にとって致命的な環境を造ることも可能であろう、結界の神器による隔離空間。だというのに、単に暗く、足場が少ないだけの世界。
隔離さえすれば、魔王と分断すれば、上級悪魔の数百人如き、容易く殺せる。そう相手が思っているのであれば、それを訂正してやろう。
悠久の時を生きる悪魔に、人間ごときが神器を得たところで勝てるものではないと。

「レディース、エンド、ジェントルメン！」

広大な空間全体が震えているような出所のつかめない声が、ありとあらゆる方向から聞こえてきた。
大きいわけでもないのに耳に残り、姿は見えないというのに悪意が伝わってくる。
「さてこのように薄暗い空間に、品格高い上級悪魔の皆様をお呼びして申し訳ありません」
その声を聞いて、死者達は体を振るわせた。思い出したくないほどに知っている声だった。それはつまり、彼等をじっくりといたぶって殺し、更によみがえらせて爆弾に変えた仮面の男の声だった。
「自分は皆様がご周知されている通りの、そこにいらっしゃいます職員の皆様を殺害した、張本人でございます。実は私は誰かに依頼されていたとか、誰かに操作されているとか、実行犯は別にいるとか、呪われた武器によって発狂していたとか、やむにやまれぬ事情があったとか、そんなことは一切ありません。ご存知の通り、自分が計画し自分が演出し自分が実行いたしました。自分が卑劣な手段で職員の不意を突き、催眠術によって職員を拘束し、男性職員の方は殺害し、女

性職員の方は犯させていただきました。さすがは上級悪魔の女性ですね、皆様が美人でびっくりいたしました。ご結婚されていらっしゃる方も、ご婚約されている方も、ご懐妊されている方も、女性であれば例外なく、楽しく、おもしろく、喜んで、美味しくいただきました。それは既に郵送させていただいた資料をご確認していただいたと存じております。もちろん、男性職員の方は屈強でした。聖水を一気飲みさせても、十字架を外科的に埋め込んでも、聖書を朗読させても、施設に実験用として設置されていた聖剣の欠片を粉砕して血管に直接流しても、中々死なないので大変ようございました。こちらも記録の上、各ご家庭に郵送しておりますので、まだ確認なさっていない方は、どうぞ、再び配布いたします。今回は全員分を編集して収録したものもございます。他の職員の乱暴にされているところをごらんになりたいという方は、どうぞ自分に申し出てください。全員分用意しておりますので！」

本当に全員分用意しているであろう、無駄に律儀で過剰な悪意を込めて、放送は滞りなく行われた。

当然、その資料を受け取るつもりなどない。この声の主を捕まえ、彼等が受けた以上の苦痛を与えなければならない。

遺族の殺意が、敵意が、怒りが、憎しみが。沸騰して爆発していた。しかし、当の死者達はただ、遺族にしがみついて震えるばかりだ。もとより抵抗するだけの力を残されているわけもなく、また溺れるように爆発し続けたことで心など折れている。

奇しくも彼等が実験した検体のように、反骨心や自尊心がへし折れていた。

「はっはっは！　いやあ、会場の熱気が伝わってくるようです。ですが、事前に通達したとおり、皆様にご用件があるのは自分ではありません。さあ、メインヒロインの入場です！」

崩れた施設のその正面にある柱の上に、渦と共に女性が二人、少年が一人、男が一人現れた。およそ、間違えること等あるまい。かれらこそ神滅具の所持者達だった。

彼等の視線は、当然ウサギを模した仮面の男に注がれる。それを面

白がって、おどけつつも仮面の男は一歩も二歩も大きく下がった。
それに変わって、釣り眼の、覚悟を決めた少女が前に出る。
その目には、遺族と職員が写っていた。事前に仮面の男から教えられていたが、職員は家庭関係でトラブルを抱えているものはなく、皆悪魔として貴族として、良好な生活をしていたらしい。
そこには、種族が本当に違うのか疑わしいほどに、感動の再会をしている家族がいた。
皆が職員の罪を知りながらも、それでもこちらを睨んでいる。少なくとも、自分の家族のしでかしたことを、死んで当然の行為とは思っていなかったようだ。
それでも、それでもルネは自分を此処まで連れてきてくれた、お膳立てをしてくれた男に習って高らかに宣言する。
「私は、ルネ。神滅具所持者だ。そこで無様を晒している連中に捕まって、色々と実験を受けていた。そいつ等が苦しんで死んでいたことも、あんた達がその実験を知らなかったことも、全部知っている。それでも、それでも……」
ようやく分かった。ルネは、この状況でようやく自分が何故彼等を憎んでいたのか、ようやく理解した。
まるで、被害者面をしている。こいつ等は、自分の家族が死んだことを悲しんで、或いは家名が傷ついたことを嘆いている。自分が無罪だと思い込んでいる。
自分が受けた実験の内容を知っても、それでも自己を正当化している。
加害者の家族が、被害者の様に振舞っている。
それが、断じて許せない。

「お前達を、ぶっ殺す」

『獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）・禁手（バランスブレイカー）』
ルネの手には、黄金の斧が握られていた。ただそれだけで、暗黒の空間を塗りつぶすほどの輝きを放っている。それは正に、神さえも滅

ぼすだけの威容を魅せている。
だが、その斧が膨張する。それは嘗てヘラクレスに討たれたネメアの大獅子の魂を宿しているというが、当のヘラクレスはその獅子の毛皮を防具として身に纏っていたという。
それの再現のように、斧は獅子の形を取り戻していく。黄金の獅子は、ルネ本人よりも大きくなり、そして彼女を隠すように覆いかぶさった。
『獅子王の剛皮（レグルス・レイ・レザー・レックス）！』
黄金の装甲を身に纏い、二足歩行の黄金の獅子そのものとなった彼女は、雄雄しくも咆哮した。
「ぶっ殺す！　ぶっ殺す！　一人残らずぶっ殺す！」
吹き上がった気炎は、遺族達の総量に勝るとも劣らない。
片目は写輪眼、もう片目は輪廻眼。彼女自身の眼ではなく借り物だが、それでも彼女の意志を確実に示していた。
「男も、女も、年寄も、子供も、全員私が、この手で、ぶっ殺す！」
怒りと、憎しみ。過去を清算するために、報復を欲した彼女は獅子と同化して咆哮していた。
「叩き割って、引きちぎって、ぶん殴って、蹴っ飛ばして、握りつぶして、力任せにぶっ殺す！　ぶっ殺してやる！」
外道の棒を介して、ルネの深く激しい感情が他の3人にも伝わってくる。
遺族達同様の、あって当然だったものを喪失したことによる、痛みと悲しみ。
ルネをいつくしむヴァレリーは悲しみ、レオナルドは自分がそうでなかったことを安堵し、迷いが無いことを仮面の男は喜んでいた。
「おおおおおおあああああああああ！」
もはや、言葉にさえならない。野生の獣もかくや、という凶暴な貌でルネは跳躍して踊りかかった。黄金の弾丸となった彼女は、空を裂いて悪魔達の立っている足場に着弾した。
さすがに、着弾の余波で死ぬほどに上級悪魔はやわではない。彼女の鍛えた二ヶ月を笑うほどに、彼等は勝利の日々を重ねていた。

防御結界を構築し、彼女を囲んで拘束していた。そして、そのまま内側へ一方的に攻撃を叩き込む。上級悪魔の、その魔力弾の威力は人間などかるく蒸発させる。それが無数に殺到したのだ、密閉された空間であれば神滅具を身に纏っていても無傷ですむはずが無い。

そう、着弾したのであれば、そうなるはずだった。だが、神滅具の本来の能力から外れている、明らかに不自然な事象が発生した。

彼女の周囲で魔力弾は消滅し、そのまま彼女に飲み込まれていったのである。

餓鬼道と呼ばれる能力は、神滅具との併せ技もあって、上級悪魔如きの能力は餌でしかなかった。

飢えた狼の如く攻撃を貪って、手負いの虎の如く憤怒に燃えて、黄金の獅子は檻を食い破った。

格闘技の型もなにもあったものではない。神滅具によって強化された腕力と装甲で、体術の理合もなにもない、腕をぶん回しただけの単純な打撃。

獣と比べても尚稚拙な、人間らしさのかけらもない一撃は、しかし獅子の爪のように最も近くにいた上級悪魔を、婿に家名を傷つけられたことを嘆いていた初老の男性の頭部を破砕した。

中身をぶちまけながら、悪魔は明らかに致命傷であろう体を柱の上に晒そうとした。だが、それさえもルネの怒りは許さない。引き裂いた手の、もう片方の手でその死体を掴むと、自分に向けて死角から襲い掛かろうとしていた背後の悪魔に向けて振り回した。

単純な鈍器による、単純な攻撃。それは長い年月を生きた、そして永遠に近い時間を生きるであろう、妻を失った復讐に燃える貴族に全くふさわしくない、極めて原始的で凄惨な死を与えていた。

怒り狂っていて、なお彼女の視界は多かった。その体を吸血鬼の能力で多くの蝙蝠にかえたヴァレリーが、その無数の眼で悪魔達を監視し、輪廻眼の視界共有によってルネの死角を消していた。

争いを好まぬ彼女には、余りにも刺激が強すぎる、死体が生まれていく光景。

こうなるとは分かっていた、こうなるとは思っていた、こうなると

は知っていた。
　それでも、実際に目視し体験するとなると、眼を背けたくなる。この手で殺すわけではなくとも、殺人の手伝いをしていることは事実だった。
　だが、そんなことは覚悟していた。こうなると分かっていても、ルネを救うと決めていた。故に、どれだけ心が悲鳴を上げても、眼を閉じない。眼を閉じれば、ルネの視界が狭まって彼女が死んでしまう。
　それだけはできない。彼女を救うと決めている。故に、彼女が誰を何人殺すとしても、それをサポートする。それが救うということならば、自分は絶対に眼を背けない。
「こいつ、魔力を喰うのか?!　おのれ、ならば剣だ、確か施設の中に魔剣の類が?!」
　悪魔にとって、魔力こそが最大の武器である。武器や体術を主体としてつかうなど、上級悪魔としてはあまり奨励されない、品のない行為だった。
　だが、それでも彼等は長く生きているだけあって、少なくともルネよりは幅がある。
　魔力弾が効かないならばやむをえない。まさか神滅具の鎧を素手で叩くわけにもいくまいし、事前に確認していた施設の武器庫へ走ろうとする若い悪魔がいた。彼は婚約者を仮面の男に犯されていた、憤っている悪魔だった。
　その彼の前に煙と共に黄金に輝くモンスターが壁となって立ちふさがった。
「レオナルド、遠隔で口寄せできるのか」
「この眼の性能が良いんですよ」
　畜生道、口寄せの術。それを与えられたレオナルドは、施設の中に残りがいないかモンスターを使って調査し、かつ逃げるものを阻んでいた。
　当然、大きさは小さいがいずれも冥界の各地に送り込んだモンスターと同様に、複数の神滅具のあわせ技によって生み出された強固なモンスターである。

小さい故に堅牢さもそこまでではないが、それでも数が過剰なことと、相手が一線級ではないこともあって、十分に壁となっていた。

脚を止めた彼を、背後からルネが腕を体に貫通させる。さらにそのまま乱暴に地面に叩きつけて、染みにしていた。

「だ、駄目だ！　逃げろ！」

「馬鹿なことを言うな！　あのような人間の小娘一人に、背中を向けて逃げ出せだと?!」

ここで、彼等はようやく、自分達に勝ち目が無いことを悟った。

しかし、既に遅い。そもそも此処は隔離空間であり、彼等に逃げ場はない。仮にルネを振り切って隠れることが出来ても、脱出することが出来ない。

誇りと怒りゆえに、また周囲に他の上級悪魔もいることもあって逃げることも出来ず、しかし無駄に命を散らすことを善しともできず。

また一人、男性職員の前で、妊娠しているその妻が中身をぶちまけて即死していた。

心をへし折られて愕然としながらも、彼は指一本さえ動かせない。

彼等の体に埋め込まれた外道の棒が、動きを完全に縛っていた。

身重の妻をぶちまけられても、それでも死者である彼は涙を流すことしか出来なかった。

そんな中、孫を目の前でルネに殺された、年若く見える悪魔の女性。

彼女は、その憎悪の眼でルネではなく、仮面の男を睨んでいた。尤もにくむべき、彼女にとっての諸悪の根源を。

息子を殺したうえに無用な罪を暴いた男に彼女は、翼を生やして飛び上がり、襲い掛かった。

「神羅天征」

それを、あっさりと男は跳ね返す。不可視の斥力によって、老女は弾丸のように跳ね返され、孫と同様にルネの手によって切断された。

だが、それに続けと、他の悪魔達も他の柱でレオナルドの隣に立つ仮面の男に殺到する。

目の前で夫を爆弾にされていた女性が、母親を犯された青年が、父親を燃やされていた少女が、仇を討つべく仮面の男に殺到していく。

天道・神羅天征は強力で攻防を兼ねる能力だが、一旦使用するとインターバルを必要とする。故に、彼はこの一瞬だけ斥力で跳ね除けることが出来なかった。

「天手力（アメノテジカラ）」

だが、その額の輪廻写輪眼がその権能を開放する。

距離をとられていたルネと、仮面の男は位置を代えていた。

つまり、仮面の男と刺し違える覚悟さえ決めていた三人にとっては、目の前の仇が突然黄金の獅子に代わっていたのだ。

当然、ルネにとっても彼等は獲物であり……一瞬で引き裂いていた。

そして、この能力も一度使うと時間を置かなければ使用できない、という制限がある。

「黄泉比良坂（よもつひらさか）」

しかし、目の前の猛獣が仇に変わったことに困惑している悪魔へ、手を振って挑発しながら仮面の男は空間の裂け目に姿を隠した。といっても、ルネのいる場所へ戻っただけだが。

そして、ルネは先ほどの焼き直しのように、再び悪魔の群に突っ込んでいく。

「……一人で逃げるなんて、酷いですよ」

「ルネがいただろ」

ルネの粉砕した悪魔の返り血を浴びて、不満そうなレオナルドを仮面の男は笑ってごまかした。

「それにしても……ああ、実に素晴らしい」

感嘆しながら、仮面の男は視界共有によってもたらされる、凄惨な死体製造を眺めていた。

そこには、混じりけのない復讐だけがあった。

死んでいく遺族と、見ていることしか出来ない死者、雄叫びをあげる復讐鬼。

「グロリアの分か、クリリンの分か、ないし地球温暖化で苦しむ動物達の分か、それとも切られた髪の分か、タバコを押し付けられたボールと、折れたモップの分か。ああ、やっぱりこうだよな。やられたら、や

り返さずにはいられないよなぁ！　昔の楽しかった思い出を思い出したりしても、全然納得も許容もできねーよな！　死んだと思っていたやつが実は生きていたわけでもないし、悪気の有無なんて些細だよな！　助けてもらっても、その人に人生をささげるなんてありえないよな！　自分の手で、仇の親戚だってぶっ殺さずにはいられないよな！　それが人間だよな、物語の都合で生きているわけじゃないんだもんな！　相手が老若男女だろうと、人の形をしていようがいなかろうが、もうやるしかないよな！」

どこか自虐さえ感じさせて……男は目の前の凄惨な復讐を、仇討ちを、殺人現場を眺めていた。

見たかったものと、見たくなかったもの。双方の感想を入り混じらせていた。

そんな心中とはなんの関係もなく……ここに、ルネの復讐は完遂され、悪魔達の復讐は果たされずに終わった。

「助けて」

周囲にいた大人は全員死んでしまった。誰もが上級悪魔で、誰もが尊敬にたる貴族達で、彼等は皆勇敢に戦った。

悪魔達には大儀があった。己の親族の罪を暴き、女の体を貪り男の体を破壊した、憎き仮面の男。その怨敵が目の前に現れていた。

彼を討つ事に、いったい何のためらいがあろうか。しかし、その尖兵に過ぎぬ黄金の獣に、意気高揚の悪魔達は刈り取られていく。

野卑で粗野な蛮人は、身の程も弁えず前魔王から続く血統を残す貴族達を、知性を感じさせぬ暴力で噛み千切っていく。

神の敵対者である悪魔とはいえ、運命を否定することはない。もしもこれが戯曲であれば、仮面の男の尖兵が我等誇り高き悪魔をその手にかける前に、魔王やその血縁が救援に参上するであろう。

或いは、既に息も絶え絶え、もはやこれまでか、と誰もが諦めを脳裏によぎらせたとき、颯爽と魔剣を携えた剣士が現れ白刃を一閃させていただろう。

「たすけて、おとうさま……」

少なくとも、この最後に残った幼子を守る為、一足遅れたことを悔やみつつも、若き英雄が立ちはだかったかもしれない。

それでなくともいまだ外法の棒で縛られたままの、仮初とはいえ蘇った上級悪魔達がその暴挙を許さぬと奮起して、戒めを打ち破り獅子の前に立ちふさがっていたかもしれない。

「たすけて、魔王様！」

だが、しかし。

黄金の獅子を宿した少女の故郷が焼かれたのと同様に、この少年は必然の結末を迎える。

ぐちゃり、と。最後の一人は、最初の一人と同様に無残な死を迎えた。

それを、ただ見ていることしか出来なかった死者達は、それを見届けると同時に塵へと返って行った。

かくて、物言わぬ数百の死体と生きている四人を残して暗黒の空間は、静寂に再び包まれた。

しばし、まるで静物画のごとき静止した時間があった。

いたたまれないものを見るレオナルド、哀れむヴァレリー、そして興奮を抑えている仮面の男。

その三人に見守られる中、黄金の猛獣となっていたルネは、理性を取り戻して静止していた。

ただ棒立ちして、鮮血に染まり、臓物を浴び、骨や歯の破片にまみれた装甲を解除し、膝から崩れた。自らの生み出した死体の上にへたり込み、嘔吐し、泣きじゃくった。

体から汗が噴出し、顔は青ざめ、明らかに平常な精神状態ではなかった。

それは、達成感を味わっているようには見えない。どちらかと言えば、復讐という熱狂から冷めて、『殺人』を犯した己を真っ当な価値観から見つめなおしているようだった。

ヴァレリーは駆け寄った。自分の体がどうなろうとも気にすることなく、ただルネに抱きついて、その体を支えていた。

便利な神滅具になど頼ることなく、ただ友人と罪を分かち合っていた。

「レオナルド、二人を頼んだぞ。自分は最後の用を済ませてくる」

そんな二人を眺めつつも、ウサギの面をかぶった男は空間に穴をあけた。

その行き先が何処だか、既にレオナルドは聞く気がなかった。ただ、輪廻眼と写輪眼の加護を失い、元に戻った視界に酔いつつ、ただ二人の少女を眺めていた。

サーゼクスの女王、グレイフィア・ルキフグスが魔王に匹敵する魔力の弾丸で黄金の装甲を殴打する。ヒビが入った表皮をサーゼクスの騎士、沖田総司が切り裂いて穴を作り出す。サーゼクスの戦車、ス

ルト・セカンドがその穴に突入し、最大火力を放出し、内側から焼き尽くしにかかる。

それでも、それでも黄金の巨大モンスターはまだ健在だった。スルト・セカンドが力尽きると、それに代わって他の眷属たちも内側に突入して内部から破壊していく。核らしきものが一切なく、ただ全身を消失させるしかないこの無駄に頑丈なモンスターを、魔王の眷属は魔王と別行動で破壊していた。

フェニックスの涙などを用いて補給しつつも、それでも彼等精兵をして数時間を要するこの魔獣の征伐。まだ彼等は数体しか討伐できておらず、終わりは一行に見えなかった。

だが、攻撃している彼等を置き去りにして、無抵抗なモンスターは巨大な煙を一瞬だけ巻き起こして、そのまま掻き消えた。

「ご覧ください！　遂にモンスターが消えました！　各地でも、同様の報告が上がっています！」

報道していたヘリから、明るいニュースが聞こえてくる。悪い報せではない、少なくとも冥界はこれで安全だ。それは確かだろう。

だが、事情を知っている面々は気が気ではない。まさか、報道ヘリの前で醜態を晒すわけには行かない。さながら冥界を守りきった勇者の如く、惨めな思いを隠しつつ彼等は凱旋していく。

そう、彼等は本当に守りきったのだ。冥界の民たちは。ただし、切り捨てた者達がいたという事は、彼等だけが知っていた。

滅びの魔力そのもの、という本来の姿から悪魔としての姿を取り戻したサーゼクス。その表情は浮かないものだった。

無理もない、彼は超越者として獅子奮迅の働きをした。彼は単独で、他の討伐隊の打倒した黄金のモンスターと同数を撃墜していた。

正に最強、正に無敵。ルシファーを名乗る最強の悪魔は、それでも敗北感に打ちひしがれていた。

何もかもが、予定通りだった。ファルビウムの語ったとおり、遺族を差し出して何もかもが丸く収まってしまった。

既に、報道ヘリは周囲にいない。彼は誰もいない僻地で呆然とする自由を、己自身に許していた。

そんな彼の背後に、気配が現れた。ねっとりとしているような、害意はなくとも殺意はなくとも、それでも悪意に満ちた視線が体に絡み付いてくる。

「……君が、『三つ目』か」

「ええ、近しいものからはそう呼ばれております」

にやりと笑う、それが視線だけで伝わってくる。白いウサギの面をかぶっている男は、露出している三つの眼だけで感情を表していた。

目的を完遂した勝者は、無謀にも敗者の前に現れていた。

「この度は冥界をお騒がせして申し訳ありませんでした。ですが、確かに目的は達成させていただきました。これは『ツケ』の領収書です」

そういってサーゼクスへ、正式な書式にのっとって証文を渡した。その紙には、以前殺害をすると予告した遺族。その名前が再び羅列され、殺害したと記入されている。

「『ツケ』、か。私への、でいいのかな?」

満面の笑み、と言っても顔は見えないが男は笑っていた。

それが、ただ悔しい。憎いでも、怒っているでもない。守りきれなかったことが悔しかった。

「……なぜ、ここまでする必要があった?」

聞くべきではない、と思いながらも最強の魔王は尋ねた。目の前の、最悪の犯罪者に。

「ここまで? ここまでとは一体なんですか? これでもかなり気を使ったつもりですがね。もっと大々的にやってもよかったんですよ、全神話世界へこの一件をあらかじめ通達しておいて、さらに遺族を殺すところも報道しても。そうすればもっと楽しかったでしょうね、きっとこれ幸いとばかりに攻め込んでくる輩も沢山いたでしょうに。自分達と同じように恨みを抱えながらも、それでも我慢するしかなかった方が、それはもう大量に。いえいえ、それとも魔獣に戦闘能力を与えた方がよかったですか? 都市部の真上に召喚した方がよかったですか? もっと沢山作って投入したほうがよかったですか

？　いいですね、それでもいいというのなら、今からでもやりましょう。そして、自分と貴方が戦う、いいですね、絵になりますよ。滅び行く冥界、阿鼻叫喚の地獄絵図。観客が大興奮することうけあいですね、いっそ映画化しましょうか、歴代興行収入ナンバー1を塗り替えますよ！」

　実際のところ、サーゼクスは痛感している。この男は悪意で動いているが、それでもできる限りこちらに気を使っていた。

　少なくとも、彼は一工夫するだけで冥界に大打撃を与えることが出来た。いや、今からでも十分に可能だった。白い三つの眼は、それを物語っている。

「そうか、それもそうだ。では何故そうしなかった？」

「そうですね、言ってしまえばルネに気を使っただけですよ。彼女は自分の手で、直接遺族を殴り殺すと宣言していました。加えて、無関係なものも巻き込まないとも。であれば、こっちも配慮すべきでしょう。自分達の行動が原因で戦争が勃発するとか、国が一つ滅ぶとか、民間人に大量の死傷者が出るとか、それは復讐の罪悪感を摩り替えることになってしまいますしね。彼女にはきっちりと、自分が殺した相手のことだけを考えて欲しいものです。数百人の悪魔が死んだ、その事実だけを受け止めて次に生かしてほしいものです」

　なるほど、確かにその通りだ。ルネという少女は、復讐すると決断した。だが、それが必ずしも達成した後の幸福を約束するものではない。

　まして、自分の手で直接殺したとすれば、その行為による罪悪感は甚だしいだろう。これに戦争の原因になったことなどが加われば、彼女は立ち直れないかもしれない。

　仮面の男は、彼なりに思うところがあって行動しているようだった。

「……君の目的はなんだ」

　静かに、最も重要なことを聴く。

　やろうと思えば、いつでも悪魔を根絶やしにできる男の、その真意を問う。

自分という超越者が、冥界で全力で暴れる等論外だ。まして、目の前の相手は魔獣創造ないし赤龍帝の籠手を所持している。

彼と自分が真っ向からぶつかれば、それだけで冥界が揺らぐだろう。

だからこそ、ただ言葉を交わして情報を引き出そうとしている。

「……？　何を言っているんですか？　あれだけあっさり見限ったのですから、こちらの心のうちは既に見切っていると思っていたのですが。ひょっとして、貴方は自分のことを理解しているのではなく、ただ単に他の魔王から忠告なり指示を受けて、それで動いていただけなんですか？　そうですか、他の魔王の方もやるものですね。貴方とアジュカ様以外は正直印象になかったんですが……まあいいでしょう。ぶっちゃけ、目的なんてありませんよ。少なくとも、貴方が聞きたがっている大望とか理想とか、そんなものは持ち合わせがありません」

若い男の声が、聞こえてくる。しかし、声などいくらでもごまかせる。目の前の男の真意は、言葉を尽くして語られても良く理解できなかった。

「もしも目的なんてものがあるのだとしたら、わざわざ犯行予告を魔王様や遺族にだけ送ったりはせず、もっと大々的にやるか、あるいは予告せずに殺しに行ったでしょうね。辻褄が合わないじゃないですか、もしも宣伝したいなら大義を大衆に語りますし、秘密裏に進めるなら静かに殺して回っていたでしょうね。それをしなかったのは、つまり最終目的やら理想なんてないからですよ」

「……君に良く似ている男を、一人知っているよ」

脳裏によぎったのは、先代ルシファーの遺児だった。三人目の超越者である彼がいれば、と何度頭をよぎったことか。

彼がいれば、この状況を劇的に解決できていたかもしれない。無力にさいなまれながら、彼を始めて羨んでいた。

「そうですか、ルシファーの息子さんですね。……まあいいでしょう。彼に似ているとは自分も中々高評価をいただいたものです」

「だが、その上で聞こう。なぜ彼女の復讐を手伝おうと思ったのかを。

彼女を助けるのは分かる。だが、どうして目的のない君がここまで積極的に彼女の復讐を手伝った」

虚無的な印象を受ける、仮面の男の言動。投げやりで、捨て鉢で、自暴自棄。なぜこうも活発に動くのかが分からない。

少なくともあの男は、未だに隠居を決め込んでいるはずだった。

「彼女が可哀想でしたからね。それに、確認したいこともありました」

その、三つの白い眼がサーゼクスを射抜いていた。凡俗ならば、その眼力に腰を抜かして尻餅をついていたであろう、射すくめられる視線だった。

「妹さんから聞いているかは分かりませんが、自分も昔は思い描きました。貴方のような素晴らしい指導者に忠誠を誓い、英雄としてその能力を社会のために活かして、地位と名誉を得たいと。そう思っていました。夢に描き、空想を膨らませていました。我ながら、愚か極まりませんでしたがね。この世界がもしも物語なら、小説なら、映画なら、漫画なら、アニメなら、二次元の商品ならそれもよかった。夢を売ることを生業とする、良識のある社会人が、良識ある一般人を相手に販売する商業作品の世界ならそれも良かった。主人公が少女に出会って恋をして、敵と出会って戦って、ライバルと出会って共闘して、なにもかもが上手くいってまとまる、そんな世界ならよかった。正義が存在し、筋書きが存在し、作者が存在する世界ならそれも良かった！」

体が震えている。道化師の体が、怒りに震えている。

それはサーゼクス同様の、自責から来る行き場のない激情だった。

「ここは現実だ、現実の世界だ。助けが間に合うとは限らないし、正義が常に通るわけではない。恋が実らないかもしれないし、敵とも分かり合えないかもしれない。だとしても、だとしても自分が「そういう人間」なら、英雄として生きる道もありえました。違いましたがね、自分はどうやらそういう「正義を行う者」でも「火を守る者」でも「牙なき人の剣」でも「主人公」でもなかった！　ただの何処にでもいる、普通の「人間」だった！　妄想の世界ならいざ知らず、現実の世界でそれができる人間じゃなかった！　自分のことを、自分は全く分かっ

ていなかった！」
　仮面の男は、その指をサーゼクスに向けた。
　その指には、サーゼクスを糾弾する意思が込められている。
「貴方は、良い王なんでしょう。ですが、たった二人しかいない超越者の片方でしかない。先代魔王の十倍の魔力、バアルの滅びの魔力、真紅の魔王、じつに格好が良い！　そういう設定は実に燃えますよね！　ロマンがある、頼もしい味方であり保護者だ！　ですが、貴方はただの王でしかない！　目の前の数百人とここにはいない数万人を秤にかけて、数万人を選ぶだけの覚悟がある。自分の妻を戦場に送り出すだけの平等さがあり、同時に自らが危険な場所に赴くだけの信念がある。実に素晴らしい、だが、それだけだ。敵がバカ正直に名乗りを上げて目の前に現れたのならばともかく、こうやって国中にばら撒けば対処できるものではない。大変ですよね、貴方の眷属も貴方の同僚も、一人の例外を除いて貴方の十分の一程度の実力しかない。それだけならまだ良いほうだ、数百分の一しかないような連中だって多いのでは？　死ぬわけには行かない立場の貴方が突出して強くたって、何の意味もないんですよ！　この現実の世界ではね、敵は味方キャラの演出だのストーリー展開の都合だのを考えないんですよ。貴方が強くて有名なら、それに対応する戦略を取るのは当たり前じゃないですか。最強の『魔王』様、貴方はこの程度の存在でしかない！」
　サーゼクスに正義があることを認めている。
　サーゼクスに良識があることを知っている。
　サーゼクスに善性があることを分かっている。
　サーゼクスが友好を望んでいることも、対話で世界を結ぼうとしていることも、人間に良い感情を持っていることも理解している。
　だが、冥界を統治し切れていないことも、悪魔にまともに動かせる戦力が無いことも、聖書の陣営には敵が多いということも、描写された原作を読んでいる。
「自分やルネが、他の二人が、もしも貴方の望むように冥界や悪魔に保護されていれば、貴方は温かく迎えるでしょうね。状況によっては、家族として認めてくれていたかもしれません。多くの機会を与えら

れて、出世への道を用意してくれたかもしれません。それは我々にとって、神滅具などの特殊で強力な能力者にとっては破格の待遇だということも知っています。そうしているうちに、冥界が好きになるでしょう、名誉を求めて積極的に精力的に戦うでしょう。そして、貴方は遺族を切り捨てたように、我々を危険な戦地に送り込んだはずだ！

貴方は死ぬわけには行かないし、絶滅寸前の上級悪魔のプレイヤーが死ぬのも許されない。だから、死んでも支障のない転生悪魔を、神滅具所持者をぶつけるでしょうね。『今回』のようなことがあれば！

この、現実で！　都合よくチュートリアルの敵が出てきて戦い方を教えてくれるわけでもない、自キャラと同等の適正なレベルの敵キャラが出てくるわけでも、負けるイベントがあっても主人公やヒロインが死なないわけでも、どれだけ頑張っても成果が伴うとは限らないこの現実で！」

冥界の次代を担う若手悪魔をテロリストとの戦いに巻き込むことを、

未熟な悪魔が神話に語られる猛獣と戦うことも、

汚い政治に希望を持った若者を落さざるを得ないことも、

全てこの男は良心を痛めながら、それでもそうせざるを得ない。

なぜなら、この男は最強だろうがなんだろうが、魔王だからだ。

「ルネが望んだ平穏が、誰にでもあるはずの日常が、そこいらにあるはずの人生が。恋愛が、結婚が、妊娠が、出産が、子育てが、貴方には絶対に用意できない！　負い目につけこんで、恩やら借りやらで縛って、子供と会わせて情に訴えて、関係ないはずの大義を語って心酔させて！　本当の意味で『洗脳』して、冥界のために戦わせていたはずだ！」

「確かに、そうだろう。私はそうしていたかもしれない。だが、それは君も同じだ。まさか、彼女の人生が今後平穏だとでも？」

今回の一件で、悪魔は彼女を敵と認識した。もはや、彼女の生涯は長寿の悪魔からの怨恨を受け続けるものになる。

それが、どうして平穏な日常を送れるものか。只人としての人生などありえない。

彼女のことを思うのであれば、どう言いくるめてでも止めるべきだったのだ。

「まさか、手遅れだとでも思っているんですか？　面白い冗談だ。冥界だけが、悪魔だけが政府じゃないでしょう。今回の一件を手土産に、アースガルズだか須弥山だかにでも身売りしましょうか？　それだけで問題解決するじゃないんですか。彼等が後ろ盾になってくれますよ。英雄として扱ってくれますよ、貴方に庇護されなくてもね」

「だが、君はそれを選ばないだろう」

悪魔という種族にとって、滅亡を意味している言葉だった。暗黒の未来をもたらす言葉を、しかしサーゼクスは真っ向から否定する。

この男が、誰かに自分の人生を預けるとはとてもではないが思えない。

この男にとって、自分こそが王であり、神であり、指針だ。

「誰かに忠義を誓う気もない君が、心にもないことを言うんじゃない」

「そうですか？　だとしても、なんの問題もないでしょう。悪魔に忠誠を誓ったって、神滅具の所持者である以上、悪魔の敵対者から恨まれるでしょうね。転生悪魔として、悠久の時を、その恨みが返ってこないかをおびえながら生きていく。悪魔にだけ怯えるか、悪魔以外に怯えるか。貴方が言っていることはその程度のことですよ。まさか、敵からも尊敬される人間になれとか言いませんよね？」

「それでも、君を守る仲間が沢山出来ただろう。全ては君次第だったはずだ」

「その分、敵が増えたでしょうね。味方が増えるとはそういうことだ。第一、心にもないことを言うなとは笑わせる。そもそも、この一件の根幹は貴方の管理不行き届きでしょう？　貴方方が法律で禁止しようが何をしようが、違法研究所が現実に存在して外国の一地方を吹き飛ばして、あげく少女を監禁して実験を繰り返していた！　貴方がちゃんと法律を守らせていれば、少なくとも今回の一件でルネが悪魔を恨む事はなかった！　貴族各々の権利が強くて、中々捜査やらが難しいんでしょう。ですがね、守らせることも出来ない法律を布いておいて、その被害者をその国のために働かせようとしているとは、自ら

の無能を棚に上げて、笑止の至りですよ！」
サーゼクスは、確かに優しい王なのだろう。
サーゼクスは、確かに強い王なのだろう。
サーゼクスは、確かに気高い王なのだろう。
だが、そんな彼の治世が、若者にとって優しいものではないと仮面の男は知っている。
虚構の世界ならば、それも許せた。若手である主人公に手柄を立てさせるために、あえてそういう状況を造っているのだと、理解できる。
だが、この現実世界でそれをされれば、それは決して許容できない。
「それは、確かにそうだろう。だが、それでも私は彼女に誠意を尽くすことは出来た」
「処刑、しなかったでしょう。貴方は、それが出来たのにしなかった。殺されていれば納得したかもしれませんが、他じゃあアイツは納得しませんでしたよ。悪魔が悪魔の都合で故郷を焼いた、悪魔は悪魔の法律で裁いて、それで死ななかった。貴方は王としてそうするしかなかったでしょうが、結局同じことでしたよ」
「だが、それで、彼女は幸せになれたのか。このリストにある名前の遺族を、妊婦や幼子を殺して、気は晴れたのか。達成感を得て、なにもかもに決着をつけることが出来たのか」
「いいえ、嘔吐してました。多分、今でも罪悪感でつぶれているでしょうね」
やや大仰に、仮面の男は天を仰いだ。
まるで、何も生み出さなかったこの復讐劇の結末を嘆いているようだった。
「実際にさせてみて、良く分かりました。復讐は何も生みません。遺族を故人にしましたが、その故人にだって親族はいらっしゃるでしょう。その親族はきっと我等を憎み、報復を狙っているに違いません。彼等が我等を狙えば、我等も自己を防衛するために反撃をせざるをえず……永遠に終わらない円舞のように、憎しみの鎖は連鎖していくでしょうね」
そんな、復讐する前から分かりきっていたであろう、現実を仮面の

男は口にする。
そして、再びサーゼクスと眼を合わせたとき、その眼は勾玉の浮かぶ禍々しいものになっていた。

「ですから、貴方達が我慢してその憎しみの連鎖を断ち切ってください」

余りにも、厚顔無恥な発言にサーゼクスは遂に言葉を失っていた。
同時に、それは自分が諸神話に求めていたことでもあると自覚して、体も失調していた。奇しくも、ルネに近い症状だった。
「まあ、自分は強盗ですし、今後もずっとご迷惑をおかけするでしょうね。貴方達が何度花壇に花を植えても、そのたびに吹き飛ばすでしょうね。ですが、それでも我慢してください。だって復讐は何も生まず、ただ虚しいだけなんですから。【優しさを失わないでくれ。弱い者をいたわり、互いに助け合い、どこの国の人達とも友達になろうとする気持ちを失わないでくれ。例えその気持ちが何百回裏切られようと。それが私の最後の願いだ】貴方が、たった一度の挫折で趣旨換えしない、強い意思の持ち主であることを願いますよ」
金縛りにあった王へ、深々と頭を下げて。
無数の言葉で聞くものを幻惑する、仮面の道化師は黒い窓に自らの姿を隠した。

夢のつづき

神滅具の危険性が改めて認識された、『黄金風船事件』。
この余りにも剛毅な嫌がらせの影で数百人もの上級悪魔が死亡したことは、上層部でもみ消されることとなった。
甚だ遺憾だが仮面の男、三つ目の『好意』に甘えることになった。
「で、どうだった。その首魁との会話は」
三勢力の和平を目前に控え、連絡を取り合っていたアザゼルとサーゼクス。どちらも互いの執務室に座して、相手の姿を見ながらの通信で仮面の男のことについて語り合っていた。
襲撃され論破されたサーゼクスは曇っており、普段の温厚な雰囲気は消え、余裕のない顔をしている。
『……正直、妹は随分手心をくわえられていたようだ。痛いところを突かれたよ』
「そうか、まあ聖書の勢力は随分やりたい放題だったからな」
正直に言って、聖書の勢力は地球での信者の数に反して、それにふさわしいだけの戦力を持っていない。勢力内での争いで疲弊したからだ。神を頂点とする天界はその神が死亡し、四大魔王を頂点とする悪魔も魔王全員が死亡し、あげくその後の権力争いで大いに疲弊してしまった。
トップのほぼ全員が生き残っている堕天使が一番マシというのは、一種の皮肉であろう。
そして、問題なのは各陣営のトップ以外には、その認識が共有されていないということだ。庶民やら貴族やら、そう言った面々は未だに世界の覇権を握り、それが永遠に続くと錯覚している。
もちろん、現状を正確に把握して絶望されてもそれはそれで困る。とはいえミカエルの元一枚岩に近い天界はともかく、上級悪魔や堕天使の幹部は未だに戦争ができると思い込んでいる。自分達こそが至上だと疑っていない。
だが、それも悪魔に限れば掻き消えた。少なくとも、今回の真相を知る面々や、あるいは冷静に物を考えられるものは頭を冷やした。

少なくとも初代バアルは、この一件を特に重く見ていた。複数の神滅具を使いこなし戦略級の一手を戯れめいて打ってくる相手の出現。それはサーゼクスやアジュカ、そのほかの精鋭で対抗できるものではなく……同時に、それを他の勢力にも知らしめてしまった。

つまるところ、超越者の魔王による二枚看板の権威が、失墜してしまったのである。これを政治的に利用するほど、バアルは老害ではない。はっきり言って、この状況に対応できるだけの戦力を悪魔は用意できていないということだ。

悪魔を『原初の貴族』とその末裔であるとする彼は、貴族の義務を軽んじることはないものの、これ以上元７２柱の生き残りが減ることを恐れている。正直に言って、和平を一刻も早く結ばなければならない。条件が多少不利であっても堕天使と天界、彼等の保有している神滅具を戦力として共有できるようにしなければならない。

さもなくば、いよいよ悪魔は滅びるであろう。

「……とはいえ、だ。最強のエクソシストを勘定に入れても、その四人を相手にするのは難しいだろうよ」

彼の保有している神滅具は天候を操作し、広範囲を攻撃できる。おまけに上位神滅具の中でも聖槍に次ぐ二番目に強力な神滅具だ。

だが、冥界全体にわたって攻撃できるほどでも、まして一体一体が神滅具である黄金のモンスターを打倒できるとは思えない。まして、それに伴う周辺被害はどれほどのものか想像さえ出来ない。

『なにが必要だ。できる限りのことはしたい』

もしも、あの道化がなにかの気まぐれを起こして、よし悪魔を滅ぼそうと思ったとする。数ヵ月後には、実際に悪魔の九割以上が死滅しているだろう。

創造系、治癒系、増幅譲渡のコンボは極めて悪質だ。おそらく人間としての上限を無視して、リスクなく強力なモンスターを大量生産できるだろう。

「……とりあえず、相手の本拠地を探る必要があるな。出来れば『絶霧』が欲しい、あれならソイツの空間転移に干渉して追跡もできるはずだ。それでなくても……リゼヴィムを探せ。やつがいれば多少は

マシになる」

『……寝た子を起こせというころとか』

リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。ルシファーの息子にして、『神器無効化』という極めてピンポイントの能力を持っている。

相手がどれだけ強力な神滅具をそろえようとも、複数を組み合わせて強力なモンスターを生み出そうとも、触れるだけで消滅させることができるだろう。

もちろん、その場合は彼単独では対処できない数量を投入してくるだろうが、それでもいないよりは大分マシだった。

『しかし、見つけたとして動かすことができると思うか？　彼は戦争の途中で姿をくらました。私の地位を譲ると言っても、それでも彼は動かないぞ』

「動かすんだ。でなきゃ、いよいよ全てがご破算だぞ」

毒をもって毒を制する。あるいは獅子身中の虫となるか。

道化とリゼヴィム。どちらも内側から外側から、容易く冥界を揺さぶることができる、危険な男達だった。

サーゼクスはややため息をつき、そのまま力なく頷いた。

『バアルのご老体は、我々やトッププレイヤーが動くことを恐れている。歴戦の雄をして、彼は危険らしい。やはり、転生悪魔に頼ることになりそうだ』

おそらく、王をも恐れぬ道化からも言われたであろう、悪魔社会の矛盾。

それを解消できぬ心優しき悪魔の頂点は、自身の無力を嘆くと共に通信を終えた。

「あの最低のクズを引っ張り出すだと？」

通信を終えたアザゼルに、険しい眼で問うのはヴァーリ・ルシファー。先ほど話題に上がったリゼヴィムの孫であり、人間との混血であり、赤龍帝の籠手と対をなす白龍皇の光翼の所持者だった。

ここまでの情報であれば、彼がここにいることに何の問題もない。

だが、彼は両親とリゼヴィムに幼児期虐待された過去を持っている。そんな彼にとって、自分を軽く見ることも、リゼヴィムに助けを求めることも許容しがたかった。

「そうだ、出来れば協力して欲しい。お前としては心中複雑だろうがな」

「……相手は赤龍帝で、しかも強力な使い手なんだろう。だったら俺がこの手でぶっ殺してやるさ」

「無理だ。おそらくお前と戦うことになったら、奴は尻尾を巻いて逃げる」

アザゼルは人間を良く知っている。そして、サーゼクスから聞くに、そして今回の手口から考えるに、かの仮面の男はおそらく神器とは何の関係もない固有の能力をもち、かつ美意識を持っている。

何の予告もなく悪魔を襲撃して根こそぎ滅ぼすことも出来たであろう。わざわざ予告して準備させ、さらに冥界に解き放ったモンスターは堅牢なだけで無害であり、実際街にも集落にも近づきもしなかった。

力づくではなく、手管を尽くし、余計な被害を出さずに敗北感を与える。

単なる戦闘狂でも、理想のある革命家でも、あるいは誇大妄想に取り付かれた英雄でもない。

ある種の美意識のある、気高い犯罪者だ。

「逃げる、だと？」

「ああ、そうだ。奴は戦うことに毛ほども興味が無い。自己顕示欲は強いが、それでもそれは個人の武勇を誇るものではない。むしろ、屈辱と苦痛を与えるのが好みと見た。お前のように戦闘を好むなら……鮮やかに逃げて悔しがらせるだろうよ」

そういう意味でも、空間系最強の神器がどうしても必要だった。彼自身の空間操作能力がどの程度であれ、赤龍帝を得ている時点でどうしても神滅具、或いは主神クラスの手助けがなければならない。

そうしなければ、彼はあっさりと逃げて鼻で笑うだろう。

「逃げる前に叩けば……」

「まずどうやって見つけるんだ。話はそこからだな」
拳を握り締めて、苦悶の表情を浮かべるヴァーリ。
戦って負けるなら、まだ許容できる。だが、リゼヴィムに頼らざるを得ない状況も、あるいは戦うことさえ出来ない戦況も、決して理解できるものではない。
「大人になれとは言わねーよ。だがな、良く考えて動け。もしも奴がお前と戦うと決めたとき、それはつまり……お前を絶対に殺せると判断したときだ」
魔王の血を継ぐヴァーリは最強の白龍皇だ。それは今でもアザゼルは疑っていない。
だが、今の彼よりも強いサーゼクスでさえ道化師には嘲笑われるだけだった。強いとか弱いとか、そういうベクトルでは彼の尻尾を捕まえることは出来ない。
「……アザゼル、お前の言いたいことはわかった。だが、正直失望した」
背を向けて、ヴァーリは保護者の部屋を去った。
今のヴァーリは、いやヴァーリにとってこの状況は面白くないだろう。だが、それでも彼だけを尊重することは出来ない。
それほどまでに、彼等は危険極まりないのだ。ままならぬ現実に、アザゼルは深くため息をついた。

そこには、人間だけがいた。
英雄の血を継ぐもの、あるいはその魂を宿すもの。神器を持つもの、魔法使い、エクソシスト。多種多様ながらも、誰もが皆人間だった。
その中でも、トップであろうと見られるメンバーが、冥界で暴れたモンスターの性能を見て会議を行っていた。
それを、他の面々はただ見守っている。
「聖杯と魔獣創造、それに赤龍帝と獅子王のコンボか。正直彼等だけ

でも悪魔を滅ぼせると証明されてしまったね。どうする、曹操」
超越者の二枚看板、その権威は消失した。それは他勢力への牽制にならなくなったこともそうだが、逆に彼等を倒しても名声を得られないということでもある。
ありえない話だが、もしもこの場にいる彼等が総力を結集して悪魔を滅ぼしたとしても、仮面の男達であればあっさりと滅ぼせた、そんな印象を神話世界に与えるだけになってしまう。
加えて、この場には3人の神滅具の使い手がいたが、それでもあの黄金のモンスターを鮮やかに討ち取れるか、と言えば嘘になる。
「どうもこうもないさ。まずは戦力を集めないと。普通の神器所持者だけじゃなく、白龍皇にも声をかけないとね。神滅具の総数ではこちらが負けているんだから。出来れば他に名前が売れているメンバーにも来て欲しいけれども……」
上位神滅具『魔獣創造』をベースに、三つの神滅具で強化されたモンスター。最上位の聖槍の禁手をもってしても、容易く破壊できるとはとてもではないが思えない。
魔王サーゼクスのように、醜態を晒すのは断じて嫌だった。苦労して時間をかけて、それで量産されているモンスターを落すのがやっとでは、余りにも惨めだ。
「彼等を取り込むにしても、こちらが上でなければならない。初代曹操と違って、俺は他人に従うつもりはないよ」
方向性は違えども、最強の神滅具を所持している曹操にも美意識はある。仮面の道化の美意識が犯罪者のそれならば、曹操の美意識は英雄の誇りだ。
少なくとも、悪魔を滅ぼすのではなく小ばかにして笑っている男を、自分の主とするつもりはなかった。
「つまり、必要ならば彼等を倒して神滅具を奪う、ということか？」
「そうさ。伝説の武器は、伝説の英雄にこそふさわしいのだから」
そういって、曹操は周囲を見る。そこには神器を宿すものの神滅具を持たぬ、英雄の卵達が控えていた。
己はここにあり、と三千世界に吼えんとする若き戦士、魔法使い達

はそのときを待っていた。

ルネという少女の復讐するか、せざるかという選択はつまり、憤怒を抱えるか罪悪感を抱えるかの選択だった。

多くの命を散らした結果憤怒は収まりをみせ、しかし罪悪感を受けてしまったルネ。彼女の心中は、決して晴れやかではなかった。

人の形をしている誰かを、自分は装甲越しに五体で破壊してしまった。

自分は極めて計画的に殺人を犯してしまった。その嫌悪は、体にねっとりと絡み付いてはなれない。

これを、ヴァレリーの聖杯の力や仮面の男の瞳でごまかすことは可能だった。だが、それをルネ本人も術者二人も嫌がっていた。

この苦しみを、ルネは選択した。それをご大層な代物で消すのは、選択の意味を曖昧にしてしまう。

得をしたわけではない。利益があったわけではない。おそらく仮面の男以外の誰も得をしなかった、この結末を選択したのはほかでもないルネ自身だ。

だからこそ、彼女はその苦しみと戦っていた。

これればかりは、決して誰とも分かち合うべきではないと、ヴァレリーさえも拒絶して。

時間が全てを解決することはない。だが、時間は全てを流していく。彼女が選択したことも、実行したことも、決して消えることはない。だが、それでも彼女は再起できるだろう。

彼女にはまだ未来があるのだから。未来をより良く生きるために、彼女は復讐を選んだのだから。

「ＮＡＲＵＴＯというニンジャマンガがあってな。それでは天涯孤独の主人公ナルトと、幸福な幼少期を過ごしたもののある日全てを失ったサスケという少年が主題と名っているんだ。で、最初から孤独だっ

たものと、暖かい家庭がありながらそれを喪失したもの。この二人が互いにぶつかり合いながら分かり合っていく物語だ。もちろん少々境遇は違うが、ルネとヴァレリーに似ているとは思わないか？　最初から迫害されていて、神滅具を所持していると分かってからはより辛い境遇に陥ったヴァレリー。何も知らず平凡な暮らしを送っていたが、ある日根こそぎ全てを失ったルネ。初めての出会いは異なるが、それでも二人は最初から分かり合えていたな。そのあたりは、そもそも復讐の対象が全面的に敵だったからかもしれないし、男女の差かもしれない。あるいは、自分がヴァレリーをあらかじめ言葉で攻めていたからかもしれないな。そう考えると、自分も彼女達に影響を与えていたのか。蓋を開けてみれば、ルネの復讐の根幹もサスケのそれと似ていたか。仇の家族は仇が帰ってこずに泣いている。まるで、ルネという少女や他の面々が受けた痛みを想像もせずに被害者面をしている。それが許せなかったんだからな。ただまあ、復讐云々もそうだが、許すという行為をもっと重く描写して欲しかったもんだ。ペインで里が壊滅したんなら、そのまま壊滅させて死人は死んだままにして欲しかったぜ。ルネの件もそうだが、痛みを受けて傷が残って大切なものが失われて、それでもヴァッシュの様に振舞えるのか。それが見たかったもんだ。まあ、それは読者が望んでいたもんじゃないのかもな。メイン層を思えば、あんまり悲壮が過ぎると難しいんだろう。アニメ化もしていたしな、そのあたりは商業作品の悲しいところか」

唯一この男を止められるルネが伏せている分、仮面の男はひたすらにわけのわからないことを語っていた。

そして、語りつつもレンガを地面に並べていた。

なにやら、日本のホームセンターで買ってきたらしき園芸用品一式が、大量に荒野で並んでいた。

彼だけではなく、レオナルドとヴァレリー、混血吸血鬼や検体たちも参加している。もちろん、剣道の防具のうち面だけをつけている仮面の男以外の全員が、浮かない顔をしながら、それでも黙々と作業していた。

「あの、なんで僕らは園芸をしているんでしょうか」

レオナルドは、腐葉土を地面にまきながら、やや諦めつつ仮面の男に問う。

いきなり大量の園芸用品を持ってきた彼は、いきなりルネ以外の全員を集めて、全員に花壇を造るように強要したのである。

まあ、死人を生き返らせて人間爆弾を造る、ということに比べればこの世のあらゆることがマシである。誰もが彼の意見に従い、気力に欠ける中球根や種を植えていた。

ヴァレリーもルネを思うと辛いが、それでもルネ本人から拒絶されたこともあって、彼女の分も花壇を作っていた。

「決まってるだろ、レオナルド。この世に絶対が無い以上、きっとここもいずれは見つかるさ。そうなったとき、ここになにもなかったら相手に悪いだろう？　こうやって花壇を作っておけば、いい感じで演出になるさ。楽しみだなあ、過酷な世界でろくでもない目にあってきた面々が、毎日世話をしていた花が咲いている花壇を、無遠慮な連中が吹き飛ばすんだぜ？　きっとみんな絶句するに違いない！」

「ああ、なるほど」

「吹き飛ばさせるために花壇を作るんですか……悲しいです」

レオナルドは納得し、ヴァレリーは悲しみの涙を流した。

実際のところ、この世界が誰にも発見されることもなく終わるとは思えない。神滅具には空間を操るものがあるというし、いつかはここにも攻め込まれるだろう。アレだけのことをして、自分達は安寧を得られると思うのはあまりにも虫が良すぎる。

だとしても、吹き飛ばさせるために花を植えるのは、余りにも悲しい作業だった。

どうにもこの男は、お約束というものが大嫌いなくせに演出にはやたら気を使っている。矛盾しているようにも見えるが、この男の中では矛盾していないのかもしれない。

「それにだ……自分はこうやって食べられるわけでもない花を、ただ暇だからという理由で植えるのは初めてだが、結構楽しんでるぜ」

まったく今更だが、仮面の男は寂しそうに語りだした。その眼は、他の不遇な面々と変わらないようにさえ思える。

「自分は歌が好きだ。別にビームになるわけでも、体力が回復するわけでも、戦争を止められるわけでも、世界を救うわけじゃなくても、誰にも思いが伝わらなくても、歌手やアイドルを目指さなくても。単に一人でうろ覚えの歌詞を適当に歌うだけでも、自分は十分幸せだ。これだってそうさ、喰えるわけでも売るわけでもブログに載せるわけでもないけど、でも、これが『出来る余裕』があるってのは幸せだろう？」

利益に繋がらない、必要ではない行為に時間や費用や手間を費やす。

それこそが、文化であることに疑いはない。

「本を読んで、そのとおりに世話をして、水をやって肥料をやって、芽が出て花が咲けば自分は満足だ。他は何もいらないよ、余暇を埋めること以外に求めたりはしないさ」

軍手をはめた仮面の男は腐葉土に指で穴をあけて、丁寧に種を植えていく。

それを見て、レオナルドもヴァレリーも作業に戻った。なるほど、確かにそれでいいのかもしれない。

理由や必然を求めるには、この瞬間は確かに満ち足りすぎていた。

かくて、『オーブ庭園』と名付けられた多くの花壇があるここは、この地に集められた者達の始めの余暇の場所となっていた。

あとがきと、設定

自害せよ、ランサー（挨拶）

これにて、西尾維新風卑劣系最強最低オリ主と、日和見少年レオナルド、復讐鬼ルネ、慈悲深い混血吸血鬼ヴァレリーの出会いの物語はひとまず幕引きです。

いかがでしたか、赤城九朗の４人目の兵藤一誠の物語は。

正直に言って、ここまで極端な評価されたのは初めてです。まあ、アンチですし問題作といって差し支えない内容ですからねぇ。

この問題作は、書いているうちにどんどん主人公のキャラクターが強大に成長して、ついには作者の脳みそまでのっとって、気付いたら一日おきに更新していました。

キャラクターの個性が強すぎて、彼の存在がこの物語を打ち砕いていく感じがありました。物語というか、世界観そのものさえもバラバラに解体してしまいます。

ただまあ、アンチというタグをつけることで、色々なタガが外れて創作物全般への溜まっていた不満が噴出しましたね。

神滅具にしても、作中でストーリーの軸にするために魔獣創造と幽世の聖杯がやたらと強くて、特に捏造もしていないのに凶悪な状況をあっさりと造れてしまいます。

さて、兵藤一誠に転生した主人公は、どうしてこうもグレたのでしょうか。

彼が作中で語ったことは全て本当です。嘘偽りは彼の最も嫌うところです。どこぞのインキュベーターのように情報を隠すことも聞かれるまで答えないこともしません。

彼の信念は、彼自身の決して拭えない後悔から来るものであり、ある意味ではそれを他人にさせないためのものでもあります。おせっかいではありますが、意外と面倒見がいいんですよ、こいつ。

彼がグレた理由は既に作中で語られたとおり、誰かのための戦いを

好む人間ではないにもかかわらず、この世界に転生してしまい、前世でできていたこと、したかったことが完全にできなくなったことに気付いたからです。

それこそ、良く考えればすぐに分かることでした。ですが、彼は転生神の前でそれに思い至らなかったのです。

さて、彼は今後いかに生きるのでしょうか。まあ、のんびりお待ちください。

少し話がそれますが、赤城九朗の作品を初めて読んだという方へ。

他の作品にこの品質を求めないでください（断言）。

真面目な話、この作品は『七人の兵藤一誠』シリーズという無駄に壮大な作品の第四章であり、つまりは同じ原作で７回オリ主を書こうという試みの一環です。ぶっちゃけ作品ごとに主人公が違い過ぎて、ストーリーも全然別物です。

作者が未熟だったこともあって、期待しているものは読めないと存じます。

もちろん、読んでいただければそれはそれで、作者として嬉しいのですが。

では、ほんの少しだけ設定を書いて、このあとがきも終わらせていただきます。

みなさん、どうもありがとうございました。

三つ目　仮面の男

専用ＢＧＭ

デジモンテイマーズ　Ｔｈｅ　Ｂｉｇｇｅｓｔ　Ｄｒｅａｍｅｒ

主人公なのに何を考えているのか、主観では語られない一貫性のある不良少年。

とにかく良く喋るのだが、喋っている内容そのものは善良で道徳的

でも、結論は反社会的というどうしようもない男。
言葉の意味を歪曲させ、言葉の価値を下落させる言霊使い。
チート能力はＮＡＲＵＴＯの三大瞳術全部をノーリスクで使用できること。
（イザナギとイザナミは例外。普通に失明する）
最終回では彼自身が言葉で解体されて、１０年後にはアイドル事務所の社長になっている。

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ
専用ＢＧＭ
ウルトラマンネクサス　青い果実
原作での不遇キャラ。
ぶっちゃけ曹操よりもヤバイ神滅具の所持者ながら、殆ど喋っていない。自己主張もなく、そのままフェードアウトしている。
そのため、この作品では半オリキャラとして扱われ、主人公の付き人をしている。
ビジュアルは幼き日の『Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ』のレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ。
基本スペックはきわめて高いが、まだ幼いので主体性に欠けている。
実家は没落貴族で、神器を自覚したときにプライドばかり高い家に反発して家出した。
その彼が主人公に出会ったのは、不運と言えば不運だし幸運と言えば幸運なのかもしれない。

ルネ・カーディフ・獅子王
専用ＢＧＭ
Ｔｈｅ　Ｓｏｕｌ　Ｔａｋｅｒ～魂狩～　ＳＯＵＬＴＡＫＥＲ
原作では怪しげな集団に殺されていたとされ、名前さえ明らかになっていない不遇キャラ。
この作品では、悪魔に捕まって実験を受けていたということになっ

ている。
ただまあ……原作での神滅具の使い手の危険度を思えば、悪魔ならこれぐらいはやっていそうである。
ビジュアルは勇者王ガオガイガーの同名キャラ。

ヴァレリー
専用ＢＧＭ
グランダー武蔵ＲＶ　キミに負けないように
原作では正気を失いっぱなしの不遇キャラ。
彼女の聖杯が三つあるという設定は、彼女を死なせないための設定としてしか機能しておらず、あげく三分の一でもアホみたいな性能を誇る。
魔獣創造もそうだけれども、ストーリーのために色々設定が滅茶苦茶になっている気がする。
優しい性格だが、優しいだけが彼女の限界だった。今後の成長に期待しましょう。

乾いた叫び

『もう何をやっても無駄だよ～～』

あくびをしながら、現魔王ファルビウムは面会を希望したリアス・グレモリーとソーナ・シトリーに、寝転がったままの通信で真っ先にそう言った。

彼は普段から公私を問わず自堕落だが、それでも彼ほどの戦術戦略の専門家はいない。伊達や酔狂で魔王の椅子を暖めているわけではないのだ。

その彼が、そう言ってしまった。それはこの場に揃っている魔王の妹二人にとって、どれだけ衝撃的か知れたものではない。

「……それほどに、事態は深刻ということでしょうか」

「何故ですか!?　だって、彼等の戦力は確認できたのでしょう?!」

才媛ソーナの表情は嫌な予感が的中した、という苦々しいものであり。

情に厚いリアスの叫びは現実を受け入れかねているものだった。

「彼等を捕まえて、処罰することだって！」

『出来ないね。というよりもだ、それが出来たとしても全く関係ない』

棋士は数手先の詰みが見えると言うが、正にそれである。ファルビウムの戦略眼は悪魔の明るくない未来を見通していた。

『いいかい、リアスちゃん。今回の一件で一番問題なのは貴族が数百人死んだことでも、神滅具所持者四人が敵対していることでもない。悪魔という種族の弱体化を他の神話に悟られてしまった事なんだよ』

悪く言えばハッタリであり、虚勢。善く言えば威嚇であり権威。

悪魔は新体制に切り替わり、新しい世代が台頭してきている。前魔王の１０倍もの魔力を持つ最強の悪魔、それに抗しうる大天才、５人目の魔王エンペラー。

彼等を筆頭として、多くのネームバリューがレーティングゲームのプレイヤーに与えられていた。

それが、今回の一件で剥ぎ取られたのだ。

別に、彼等が実際は弱かったわけではない。別に、彼等が有事の際

に逃げ出したわけではない。別に、彼等が冥界を裏切ったわけでもない。

単純に、彼等がいても状況に対処できない。それが証明されてしまったという事だ。

「……もう既に、そこまででしたか」

頭脳明晰で知られるソーナである、権威の重要性は痛いほど良く知っている。

結局のところ、実際に強いかどうかよりも強いと思われていることは、ただそれだけで利益があるのだ。戦争に勝つのではなく、戦争そのものを防ぐ抑止力としての意味が。

『うん、そうだね。それこそ、彼等がまとめて悪魔に忠誠を誓うとか、そんな異常事態がおきない限り悪魔の地位は決して回復しないよ。だって、信頼という幻想は、積み上げるには時間がかかるけど、吹き飛ぶときはすぐだからねぇ』

今回の犠牲者である上級悪魔達が、どれだけ強力な武器を持とうとも人間であるというだけで侮っていたように。高貴な血を宿す自分達がこんなところで死ぬわけが無いと思っていたように。

それが、今回の一件で吹き飛んだように。

悪魔という種族を守っていた幻想はここで張りぼて程度に落ちてしまった。

『国家としてみれば、僕達は既に負けている。彼等をどうしようが、とっくに国益は失われている。だからまあ、無駄なのさ』

それは、リアス・グレモリーの中の常識が崩壊する言葉だった。

奇しくも今回の犠牲者同様に、彼女の中にあった未来への希望が、音を起てて崩れた瞬間だった。

「それでは、私達に何かできることはありますか」

ソーナは理解している、これは歴史の節目だと。もしもここで踏ん張る事ができなければ、悪魔という種族は今後千年衰退の憂き目を見るだろう。

まだ何かできることがあるはずだ。そう信じている彼女は、専門家の意見を求める。

『……打てる手は全て打つよ。サーゼクスから頼まれているからね。でもまあ……全て無駄に終わるだろう。相手の手を僕はある程度読めるけど、なんとも最悪な事に相手は性格が悪すぎる』

そう、そこが最大の問題だ。はっきり言って、三つ目と呼ばれている男は、赤龍帝云々ではなくひたすら単純に、人間としての『人間力』が違いすぎる。

歴代の神滅具所持者ではありえなかった、世界を傾けるだけの器量が彼にはある。

「性格、ですか」

その言葉に、未だ若い二人はやや困惑する。

この二人はまだ、三つ目と呼ばれる仮面の男を『危険な思想』と『強力な武器』を持つ犯罪者、としか思っていない。

確かに策を練るだけの頭脳はあるが、それでも目の前の冥界最高の頭脳を超えているとはとても思えない。

いや、実際のところ超えていなかった。この時点で、ファルビウムは三つ目という男の心中を読みきっていた。

今後、幾度か冥界を襲う三つ目だが、その都度作戦は読まれてしまう。もちろん、想定した可能性の一つでしかないが、それでもファルビウムの頭脳を終ぞ、三つ目は超える事はできなかった。

だが、それでも終ぞファルビウムは三つ目に勝利する事ができなかった。

『彼は非常に独特な美意識があり、同時に悪意に満ちている。自分の利益を一切度外視で、他人に損害を与える事しか考えていない。ほら、性格が悪いだろう?』

それを聞いて、二人は顔を青ざめさせた。なるほど、彼の行動原理を心理面から読み取ればそう解釈できる。

彼は今回、いくつもの不自然な行為をしている。

リアス・グレモリーを介して宣戦を布告して不要なはずの警戒を悪魔にさせた。

悪魔社会を崩壊させるだけの戦力を用意できたはずが、ただの囮としてしか使わなかった。

殺したことを、わざわざ最強の魔王に直接報告した。
その何れもが、ある意味では不合理だった。だが、結果から見ると合理的に解釈する事もできる。
悪魔に対して宣戦布告したのは、標的となった遺族を一箇所に集めさせるためだった。保護をするのであれば、一箇所にまとめた方が簡単であるし、逆に殺すにしてもまとまってもらった方が単純になる。
黄金のモンスターたちがただ頑丈で攻撃をしなかったのは、確実に復讐を遂げるまでの時間稼ぎとしか考えていなかったから。攻撃機能を持たせてその分倒しやすくなってしまえば、全滅させられて護衛が戻ってくる可能性があった。
遺族を殺したことを報告したのは、自らの正当性を信じるゆえ。今後交渉があった際に有利に進めるため。
もちろん、どれもがやや苦しい。相手は最初からリストを所持しており、一人一人殺して回ればよかったのだ。わざわざ警戒させる意味が無い。
陽動にしても、単純に数をそろえるなり補充を怠らなければ、撃破され続けても問題はなかったはずである。
そして、犯罪者であることを良しとする復讐者が、政府と今後正式に交渉等するわけが無い。
「……宣戦布告したのは私達に無力感を与えるため、モンスターが攻撃しなかったのは私達を苛立たせるため、お兄様に勝利宣言をしたのは『その顔』が見たかったから？」
「形式を整えて布告し報告したこと、余計な被害を造らなかったことは、『綺麗』に勝利を彩るため、だということですか」
なるほど、悪意と美意識に満ちた作戦である。人間流に修飾するならば『悪魔のような』人間というところだろう。
実際、彼等はリスクを侵してまで復讐を遂げたが、何がしかの金銭的な利益は殆ど得ていないはずだ。
危険が待ち受けていたとしても、何の得もなくても。ただ相手の嫌がる顔を拝みたいというだけで全力を尽くす。
確かに最悪の相手だった。

『つまりだ、君達に頼む事は何もない。むしろ関わったりしたら駄目だ、絶対に勝てない。なぜなら、関わった時点で既に負けているからだ』

ソーナもリアスも、サーゼクス同様の無力に苛まれた。

リアスは疑いもしなかったし、ソーナは信じようとしていたのだ。

どのような経緯があったとしても、彼等は必ず裁かれると。

獅子王の少女は確かに哀れだ。それは二人もそう思う。だが、だからと言って遺族を殺していいなどという法律は存在しない。少なくとも、悪魔には存在しない。

当然だが、復讐するにしても法で許された範囲というものがある。

被害者が加害者に報復するのは当然の権利だが、今回の用に度を越えた行為を法で許せば際限がなくなってしまう。故に、法では『刑罰』という形で制限が設けられているのだ。

もちろん、今回のケースで遺族に対して刑罰が下される可能性は薄いし、実際に下されたとしても彼女の納得するものではないだろう。

だが、それが社会を形成するための法なのだ。それを心情で破ってしまえば、社会制度が立ち行かなくなってしまう。

今回はそれが通ってしまった。単純に、個人の心情を優先した者が社会の秩序を守ろうとした者よりも強かったというだけで。

つまり、これから悪魔の社会は立ち行かなくなるのだ。当然の帰結であろう。

『ああ～～、本当に厄介だよ、悪意と美意識を持った奴はさ』

「陛下は、彼の手の内が想像できるのでしょう。だとしたら、有効な手が打てるはずです」

『出来ないよ』

あえぐような、搾り出したソーナの言葉を、ファルビウムは鬱陶しそうに跳ね除ける。

『殺意があれば、手口は単純で手順の少ないものになる。最速かつ最短の方法で殺してくるだろう。嫌悪があれば、一定の手段をこちらが飽きるまで繰り返して、接触を拒絶してくる。だが、悪意があると厄介だ。悪意のある輩はとことん手口を変えてくる』

「……？　今回のような作戦は二度と使わないということでしょうか」

『そうだよ。彼は美意識も高いから、少なくとも全く同じ方法では使用しないね』

ソーナの回答に、丸を与えたファルビウム。しかし、それは聞いているリアスはもちろん、答えたソーナにしても疑問が残る。

二度と同じ手を打たないとわかっているのであれば、手段が限られてくるという事ではないだろうか。

『けどねえ、それを理由にしてこっちがおろそかにできると思う？』

それは、できなかった。少なくとも、現体制の悪魔には不可能だ。

おそらく、今後三つ目から宣戦布告があったとしても、トッププレイヤー達は直接狙われない限り討伐に参加しないだろう。

なぜならば、今回のようなことがおきないとも限らないからだ。

『我々は領地を守る義務がある』

それは如何なる魔王にも否定できない、絶対の義務だ。

単に、相手は二度同じことをしないだろう、というのは推理から導かれた結論でしかない。いや、もっと不確かなプロファイリングによる仮定でしかない。

前回と違って攻撃してくるかもしれない。彼等が危惧したとしても、それを明確な根拠と共に否定することは誰にも出来ないのだ。

『今回の一手は今後の楔だ。僕達は彼等と戦うときに、ずっとそれを警戒しなければならない。対応できないと証明された一手を、ね』

それが、国を背負う政治家でしかない魔王の枷だ。合議制であるが故に、独裁をしくわけには行かないのだ。

そして今後も彼等は、法に守られる必要のない、法に縛られない彼等は。

継続して、魔王が魔王である限り対応できない手を打ってくるということだった。

「悪意は分かりました……でも、美意識ってなんですか?!　こんなに多くの民に迷惑をかけることの、どこに美意識があるって言うんですか?!」

リアスは声を荒げていた。今回の一件で国家の威信が喪失し、内外で問題が大量に発生する。それはつまり、より多くの悲劇が生まれるということである。

貴族であるリアスやソーナだけではない。多くの民衆が、今回の一件とはなんの関係もない国民が被害を受けるのだ。

それを実行に移した相手の、美意識など認めたくなかった。少なくとも、美しいとは思えなかった。醜悪極まりなかった。

『美意識か……それはつまり、他人から見て価値のないものに熱狂できるという事だよ』

例えば、強くなりたい。或いは、金銭を得たい。多くを学びたい。遠くへ行きたい。

どれもが誰もに理解できる事であるが、それも度を超えれば狂気でしかない。

まして、万人に理解されぬものに熱狂すれば、それは正に狂人である。だが、それこそが美意識というものだ。

『例えば、一宿一飯の恩で命をかけて戦うとかね。或いは花一輪のために世界を敵に回すとか、そういうものに拘りや価値を見出す奴は確実にいるんだよ』

ファルビウムは、つくづく『彼』を見切っていた。そして、そんな彼の今後さえも。

仮面の男を取り巻く環境と、それに伴う世界の激変を、彼はほぼ正確に予知していた。

ルネは、とぼとぼと芽も出ていない花壇の周囲を徘徊していた。

復讐を完遂し、明確に存在した目標を達成した彼女は、予想していた通りに、想像以上の罪悪感と燃え尽きた感情を持て余していた。

この状況を事前に想定していたし、だからこそ後悔はない。ただ、幸福かと言えばそうではない。そもそも、故郷を焼かれた時点で彼女

が幸福であろうはずが無いのだ。
だが、それでも彼女には友人がいたし、疑う事のない日々の糧もある。少なくとも、研究所で検体だった日々を思えば圧倒的なほど、見渡す限りの希望に満ちた未来が存在している。
やや不自由ではあるが、彼の庇護下にあれば文化的な生活が可能だと思っている。生命を存続させるだけの、機械につながれた生存ではない、人間らしい生活が。
だが、それでも彼女にはまだ時間が必要だった。復讐鬼とはいえ狂人ではない彼女は、自由な時間を持て余していた。
そして、それは彼女だけではなかった。検体として集められていた希少な神器所持者、純血主義の元迫害されていた混血吸血鬼。
彼等はルネのように燃え上がることも出来ず、予定がいないという贅沢に戸惑っていた。ただ過去におびえつつ、彷徨う事しかできなかった。
だが、それでも彼等は花壇の前にいた。仮面の男に提案されたとはいえ、仮面の男が用意したとはいえ、己の手で造った花壇の前にいた。
隔離空間であり、雑草や害虫の心配はない。まして、芽が出ていない状況である。定期的に水を与える以外にすべき事はない。むしろ、余計な事をすれば腐ってしまっただろう。
それでも、彼等はただ花壇の前にいた。そんな彼等を眺めつつ、ルネは彷徨っている。それこそ、何の価値もない花壇の脇を歩いていく。
自分は参加していないが、この花壇に植えてある花の種はそれこそ普通の種であるらしい。市販されている、初心者でも比較的世話のしやすい花だと聞いている。
あの男がそういうのであれば、本当にそうなのだろう。何かの薬の材料になるわけでもなく、食用ですらもなく、金銭的に価値も生じない、ましてや怪しげに儀式に使われる事もない。
芽が出て花が咲いても、何の価値も意味も必要もない。ただの花壇だった。
だとしても、ルネはそこを彷徨っていた。花壇と、それを眺めてい

る同じ境遇の彼等を眺めていた。
吹き飛ばされることが前提の、演出の一部でしかない花壇を。
そうと知らされている、生きる希望の意味も知らない彼等を。
「あの……」
だというのに、その他大勢の一人でしかない混血吸血鬼の一人が、ルネに声をかけていた。
多くの人がいるというのに、静寂に包まれた花壇の道で、誰かが主張をしようとしていた。

「ふっふっふ！　下準備はこれから始めるが、その前にアクエリアを大量に造っておかないとな。楽しくなってきたぞ～～～！　黄金の超巨大モンスターが守る入り口を潜れば、アイディアをぎっしり詰め込んだ、トラップの数々が英雄や魔王の子孫をお出迎えだ。最初はそれこそ姑息な罠でいい。落とし穴とか、吊り天井とか。そういうオーソドックスかつ向こうが喜びそうな罠を大量に設置だ。中盤では強力なモンスターを大量に設置して暴れさせてやろう。きっといい気分で無双してくれるに違いない。だが、後半になれば鬱陶しい嫌がらせが満載だ。非殺傷兵器をこれでもかと並べてやる。滅茶苦茶臭い液体の撒き散らされた部屋とか、汚物が降ってくる部屋とか、すんげーうるさくて頑丈なモンスターが並んでる部屋とか、ただひたすら長くてグネグネしている通路とか、品のない言葉が書いてある扉とか、悪魔のＡＶが大画面で放映されている部屋とか。とにかく精神的苦痛を与える事に特化した悪戯心満載のダンジョンを造ってやろう！　そして最下層には豪華で巨大な宝箱があり……その中には、『ハズレ』と書かれた紙切れが入っているだけ。名付けて『イベントが終了した後のダンジョン作戦』だ。きっと怒りに震えるぞ～～！　その顔が見られないのは残念だが、彼等の憤怒や絶望を思うだけで、もう辛抱たまらないぜ！」
白いノートに、思いつく限りの嫌がらせを書き込んでいく仮面の男。今日の仮面は3色が縦に並んだ国旗のような模様の、眼だけが出ている覆面だった。

その発想力は、それだけで一種の神器めいており、それを眺めているヴァレリーとレオナルドは、それだけで呆れていた。

ただ、嫌がらせのためだけにダンジョンを形成しようとしている事もそうだが、ここに敵が攻め込むことを前提に話を進めている。

仮面の男のアドバンテージの一つが、始球空間と呼んでいるこの広大なスペースであることは確かだ。あまり空間について詳しくは無い二人だが、それでもこの世界があることによって、多くの難民を収容できていることは事実である。

もしもここを攻め込まれれば、それはかなり不利なるはずだ。だというのに、こうも能天気に無駄な嫌がらせに時間を割いている神経が知れない。

いや、それは今更だったが。殺した相手を蘇生させ、爆弾として遺族に送り込む相手の神経等、想像もできない。

とはいえ、彼には計画性が確かにある。こちらから見て余裕があると言うことは、実際に攻め込まれても問題が無いのであろう。

ある意味、この二人は仮面の男を信用している。この男が、負けるとかそういう状況に陥ると、想像する事ができないのだ。

もちろん、それも一種の幻想であることは確かだが。

「あの……攻め込まれた場合僕達はどうするんですか？」

「言うまでもないと思いますけど、検体の皆さんや、混血の人達のことも忘れないでくださいね？」

「大丈夫だ、何の問題もない。万事上手くいく」

布の覆面越しに、表情が読み取れた。明らかに楽しそうに笑っている。

覆面から見える二つの眼は、どちらも波紋模様を描いていた。

「この拠点は、もうすぐ放棄する。ただのモンスター置き場ぐらいに考えておけ」

「……え？」

「ここを出て行くんですか？」

「太平洋のど真ん中に、空のタンカーを用意してある。巨大モンスター以外、全員でそこにお引越しだ。動力も切ってあるし、海のど真

ん中でぷかぷか浮かんでいるだけの船を捜すなんざ、砂漠で砂金を探すようなもんさ。どんだけ神滅具が万能で、使い手が一級でも、広範囲を吹き飛ばすんじゃなくて広範囲を捜索するなんざ不可能だからな。カタログスペックでしか他人を評価できない連中だ、誰もいない空間を、死に物狂いの血眼で無駄に捜査するに違いないぞ！　正に無駄な努力だな。３Ｄゲームのデバッカーや、ＩＴドカタのごとく、草の根を分けてでも探すだろうよ！　それっぽいヒントは大量に残しておくし、第一自分の空間はここだけじゃない。砂漠やら酸の海やら溶岩地帯やら雪山やら超重力やら、探すところがあって飽きないと思うぜ」

既に、ヴァレリーに提案して流水への耐性は混血吸血鬼全員に与えている。故に、海の上であっても誰もさほど困らない。まして、食料の類を空間移動で手に入れることができ、しかもその場所がめまぐるしく変わるとすれば……誰にも捕捉出来ないアナクロな隠れ家になるだろう。

だとしても、この男の発想の無茶苦茶さにはあっけに取られた。これだけ広大な空間を、或いはそれを用意できる自分の能力を、それこそ仮宿程度としか認識していない。

彼はここを発見し、襲撃してくるであろう相手をカタログスペックでしか見ていない、視野の狭い相手だと嘲っているが、それは当然のことだった。常人では、こうもあっさり自分の世界を放棄しないだろう。

この男は、異物が過ぎる。能力ではなく、その発想が。

思考の差異者。

ヴァレリーにもレオナルドにも、この男の風貌や思想よりも、発想が意味不明だった。

まるで宇宙人のような、この世界の人間ではないように思えた。

そんな折、研究所の会議室にルネと、他に一人が入ってきた。

ここに入ってくるのは、主要人物とも言うべき４人か傀儡となった悪魔だけだったので、元居た三人はやや驚いた。

ルネとヴァレリーを例外として、迫害や実験を受けた彼等には前向

きさの一切がなかったはずなのだが。
「おい、クソ三つ目。この子がアンタに話があるんだってさ」
あまり大柄ではないルネの脇に立つ少年は、仮面の男を見て体を振るわせた。
それは他人におびえているというだけではなく、この男のしでかした事と、思想を知っているからに過ぎない。
極めて適切な認識で、極めて正当な反応だった。だというのに、その少年は怯えながら仮面の男の眼をみて、そらして、そのまま口を開いた。
「どうしたの？」
口を開いたまま、喋らない少年を見かねて、ヴァレリーが歩み寄ろうとする。
しかし、それを三つ目は片手を上げて止めた。彼らしくもなく、無言で止めた。
今彼は、その両目を真っ白に染めて、その少年が何かを言うのを待っていた。
「あ、あの……」
少年は、泣きそうになりながら、それでも逃げ出そうとしなかった。
自分達を支配していた純血の吸血鬼、それを嘲笑いながら蹴散らして、ここにつれてきた新しい恐怖の対象。
そんな彼を前に、ただの無力な少年は『立ち向かっていた』。
「め……」
生まれたときから尊厳を奪われ続けてきた、悔しいと思うことも出来なかった少年は。
「……め、め……めが」
神滅具所持者、ヴァレリーに保護されているだけの少年は。
「芽が、出たんです」
自覚が無いとは言え、世界を揺るがすほどの意味を持つ『自己』主張をした。

「花壇の、種が、芽が、出た、んです……！」
不毛の地に、奇跡的に芽が出たわけではなく。
「芽が生えてきたん、です！」
何かの賭けをしていたわけでもなく。
「僕の花壇で、芽が生えたんです！」
誰よりも先に芽が出たわけでもなく。
或いは、他の誰かも同じように花壇の種から芽が出ていたのかもしれない。
だとしても、少年は言葉にして、自分の思いを吐露しようとしていた。
単に芽が出たことを報告しようとしているのではない。もっと大切で、大それた要求を彼はしようとしていた。
それに気付いて、ヴァレリーは言葉を失い、レオナルドは無言のまま言葉の続きを待つ仮面の男を見た。
そして、ルネは仮面の男を睨んでいる。
「……ぼ、ぼくの、僕の……！」
搾り出すように、世界の命運を左右する言葉を少年は、ありったけの勇気で言葉にして伝えていた。
きっと、何の価値もなく意味もなく理由もなく必要もない。
とても、小さくて儚い、しかし貴い拘りを。

「僕の花壇を吹き飛ばさないでください」

彼は、ようやくそれを口にする事が出来た。世界を手玉に取る大悪党に、己の『意志』を伝える事ができていた。
そしてその少年を守るようにルネは前に出た。そして不器用ながら、しかし仮面の男を睨みつけながら、恐れることなく『己』の主張を口にした。
「クソ三つ目、ここが今の私の家なんだ。私は、ここを守る為なら戦える」
おそらくこの場でただ一人、あるいはこの世でただ一人。

神滅具の所持者であるというカタログスペックなどとは何の関係もなく。

ルネは、仮面の男に意見した。

「たとえ、あんたが相手でもだ」

それを聞いて、仮面の男は自分の顔を押さえた。

万力のように力を込めて、自分の覆面を両手で隠した。

体が細かく痙攣している。力みすぎて体をよじっている。

だが、対等の存在であると主張しているルネと、勇気を振り絞った少年に応えるために、自らも衝動を抑えつつ返事をした。

「ああ、任せておけ」

それを聞くと少年は頭を下げて、小動物の如く慌てて逃げていった。

目の前の男が、本性がはちきれつつある男が恐ろしくて敵わなかったのであろう。

レオナルドが一歩引くほどに。ヴァレリーの涙が引っ込むほどに。

この男は、不吉が過ぎた。

「花壇を、守れ……だと……？　ヒャアアハハハハハハハハハハハ！」

もはや感情の奔流を抑えきれない。彼は手元のノートに、湧き上がるアイディアを書き記し始めた。まるで、乙女の衣服を剥ぎ取る強姦魔のように、狂騒して鉛筆を走らせる。

「なんて、なんて下らない！　どうでもいい理由なんだ！　最低だ、最悪だ、最高すぎるにもほどがある！　ホームセンターで売っていた花が、咲いたわけですらないのに、その花壇を守る為に戦え?!　そんなどうでも良いもののために、あの子以外から見れば雑草同然の物を守る為に?!　あんな吹けば飛ぶような物を、真っ先に狙われるであろうこの世界に、足手まといだらけのこの世界に、吹き飛ばす事が前提の演出程度で植えた花を守る為に?!　あんな小さい子が、あろうことかこの自分に?!　初めて『自己主張』したってのか?!　なんて可愛い我侭だ！　なんて美しい自侭だ！　無知ゆえとはいえ、なんて傲慢な主張だ!!　あんなくっだらない物のために、再び尊厳を奪われる覚悟が

できるのか！　ルネも、あの子も！　そうか、そうか！　我ながら、なんて無神経な！　なんて厚顔無恥な！　なんて残酷な！　なんて無思慮な！　そうだ、あれはあの花壇は……彼等にとって『世界の全て』か！　そうかそうか、悪ガキですら脅かせる、どっかの主人公でも踏み荒らせる、女を口説くために色男が摘み取る、女が自分を飾るために抜き取る、そんなものをあの子は……どうせすぐ枯れる花を、守れってのか！」

その様が美しいかはともかく。

その心が美しいかはともかく。

どんな正義の味方でも守れない、あの花壇に込められた儚い幻想を。

自分には未来があるのではないかと思える希望を。

生まれたときから何も与えられず、作り出せなかった『彼等』の明日を。

もうこの男は、全てを賭けて守り抜く所存だった。

コネクト　1

「生きていれば、何度でもやり直せる。生きてさえいれば、また作り出せる。そういう輩は確かに存在する。それも、間違っちゃいないだろう。確かに生きてさえいれば、こそだろう。だが、生まれてこの方明日に希望を見出せなかった誰かが、ようやく明日を見出せた何かを、それを吹き飛ばされて前向きになれるだろうか。幸せだった時代が一度もなくて、迫害を受け続けてきて、そんな彼等が植えた花の芽。そうだよなぁ、そんなものが、吹き飛んで、また植える気になんてなれないよな。失敗して消失して、それでまた前向きになろうって思える強さは、彼等には望めないものだ。そんな強さがあれば、彼等は決して長生きできなかっただろう。そんな余計な反骨心があれば、彼等はとっくに殺されていた。芽生えようもない、彼等の意志。それが、ここでようやく育まれつつある。彼等の人生はここが始まりなんだ。だとしたら、自分は彼等の親同然だ。赤ん坊のように、生まれ変わった彼等を自分は全面的に守らないとな。それが親というものだ。花壇一つ守れなくて、そのくせ又花を植える人たちの姿をみて、それでしたり顔で彼等は強いな、とか抜かす惰弱な主人公どもとは格が違うというところをみせてやるぜ。大体あの連中はなにを考えてあんな事を抜かすんだ、守るべき街が吹き飛んで、その再興を見て、それで前向きな気持ちにどうしてなれる。物が壊れて思い出が吹き飛んで、自分の人生が陵辱された人達をみて、どうして前向きに笑える！　もっと殊勝になれ！　自己陶酔でごまかすな！　彼等は強いとか、戯言抜かしやがって！　一般市民はな、弱いんだよ、戦えないんだよ！

　そいつ等を守る為にスーパーパワーがあるんだろうが！　守るって約束したんだ、それこそ何をしてでも守りきらないとな。例え世界の全てを敵に回したとしても、世界の全てを焼き尽くしたとしても、あの花壇を守れずしてなにが神滅具だ！　なにが禁手だ！　そもそもな、世界に知らしめてやればいいんだよ、自分達にケンカを売ればどうなるのか、二度とかかわりたくないと思わせるほどに屈辱的で決定的で、絶対的で絶望的な敗北を、この世界の全ての生ける者に染み

付かせないとな！　武力による戦争根絶、犯罪による外敵の排除！　この世界の恒久平和、救われざるものの最後の流血！　いいだろう、この『英雄墓場』をユートピアにしようじゃないか！」

「この街の名前、英雄墓場になるんですか」

ものすごくノリノリで、仮面の男は看板を造っていた。今日の仮面は、鉄鋲の打ち込まれている鉄兜であり、角や装飾も多かった。

「そうだぞ、名前は大事だな。ここに埋葬する予定の英雄の銅像をアクエリアに作成させている。ものすごくかっこいいのを、大量にな！　いやあ、ちゃんとぶっ殺してその銅像の下に埋めてやらないとな！　彼の伝説はここで終わってしまうんだから！　大丈夫、大丈夫。きっとイベント負けだから都合よく助けが来たりするか、或いは自分が仏心を出して身包み剥いで砂漠に放置ぐらいにしてやるからさ。まあ、その可能性は限りなくゼロに近いわけだが。全員ぶっ殺して、記念碑を立てて博物館を造って展示品を並べて、戦闘データを放映しまくってやる。英雄を名乗って雄雄しく現れたところから始まって、思惑や段取り通りに行かずに困惑して、自分が追い込まれたところを思い知らせて、その上で英雄らしさの欠片もない戦闘という名の虐殺をしてやるよ。『強さ』などという不確かで曖昧な代物が、伝説の英雄の血統が、伝説の武器の無敵の力が、如何に無価値で無意味で無駄で無能なのか教え込んでやる！」

上機嫌すぎて、仮面の隙間からは液体が漏れている。おそらく、涙や鼻水ではなく唾液だ。興奮しすぎて口が半開きのまま、唾液が溢れて止まらなくなっている。

レオナルドはその醜態を見守りつつも、それでも質問を止めなかった。

実際のところ、この男が何をどの程度計算しているのか分からない。

ただ、心中を聞けば必ず回答が帰ってくるという確信も確かにあるのだ。

「まずは、何をするんですか？」

「正直政治的にゴタゴタしている今の時期が一番動きやすい。つまり

時間との戦いになるからな、事後報告で悪いが、もう一手は打ってある。旧魔王の子孫の一人にカテレア・レヴィアタンという女がいる。そいつを拉致して監禁して幻術で操って、肉体と精神を調教して調整して落書きして玩具を取り付けて、で、犯して撮影して記録して、他の旧魔王の子孫にレターで贈った」

「流れるように最低な行為をしますね。それでこの世界を守ることにどの程度の意味があるんですか？」

「直接はないな。まあ、伏線の一つですらない。単に自分の趣味だ。しいて言えば、宣戦布告というか、見せしめというか、嫌がらせというか、悪戯というか、単に面白そうだったからだな」

鉄仮面の隙間から見える二つの目は、甚だしく模様が替わっている。過剰な興奮状態にある証拠であろう。

それにしても時間との戦いというが、何故看板やら銅像やらを造っているのだろうか。どう考えても時間の無駄だと思うのだが。

「僕も毒されているとは思いますが、その程度では動じなくなりましたよ。それで、僕達はまず何をするんですか？」

「……そこなんだよなぁ」

ぴたりと、仮面の男は動きを止めた。

非常に冒涜的な動きで看板を大地に打ち込んでいた男は、急に素面に戻ったかのように両目を白くしていた。

「ぶっちゃけさ、君とヴァレリーは良いんだよ。特にヴァレリーは自分のものだしな。でもなあ、ルネは違うだろ。あの子はもう戦わなくていいと思うんだ。第一、それって洗脳っぽくて嫌なんだよ。彼女には『誰か』とは無縁の、人生が有っていいと思うんだ。正直直接手を汚すのは自分だけにしたいね」

「その志は立派だと思いますが、手を汚すのが好き過ぎると思いますよ」

この男の場合、何もかもが一貫して無茶苦茶だ。何もかもを悪く捉えすぎていて、ひたすら悲観的で破滅的で、してはいけないことを全力でしている。

それは、つまり。

この男には本当に正しいことと間違っている事が分かっているのだろう。

だからこそ、それをどちらも行うことができるのだ。

「それにしても、じゃあ具体的に何をさせるんですか？」

「そうだなぁ、自分としては自分と一緒に犯罪行為に手を染めてくれるだけで十分楽しいんだが……なんだか、彼女が無駄に思いつめているのが、嬉しいやら悲しいやら」

腰を下ろし、虚空を見上げる。

その目には、何が写っているのか。ろくでもないこと確かだろうが、この場合は少し違う。

彼には明確にこだわりがあり、その一環として彼女に何かを押し付けることを拒んでいる。

「……危険な事をさせず、安全なところで作業してもらうか。そうだな、それがいい。十分な訓練期間と、十分な事前情報、十分な援護を行った上で……弱いものをいじめてもらうか。それがいいな、うん」

「……それで、少し話はそれるんですが、この英雄墓場という街を、貴方はどんな場所にするんですか？」

それは彼等の、誰も救えない彼等をどう導くのかという疑問だった。

今の彼等は迷える子羊ですらない。途方にくれている、彷徨う事さえできない幼子同然だ。

この男は、彼等にどんな生活を与えようとしているのだろうか。

「まずは、字だな。彼等には『本を読めるようになりたい』と思えるようになって欲しい」

両目を波紋模様にして、穏やかに語りだした。

その言葉には、紛れもない暖かさと慈悲がある。

きっと、世界の何処でも通用する優しさと、思いやりが確かにある。

彼らという人々を、確かに見ている。自分の考えを押し付けずに、その歩みを見守ろうとしている。

「勉強という自助努力ができるようになるまで、彼等には立ち直るなり希望が芽生えて欲しいと思っている。彼等にはまずそれが必要だ」

仮面の男は立ち上がり、振り向いて花壇を見た。そこには、無気力でも自分の意志で自分の花壇の前に座り込んでいる彼等がいた。

「まあ、神器所持者の中には字が読める奴もいるだろうが、できれば英語か日本語を覚えて欲しいな。そうすれば、いろんなことが勉強できるようになる。それはとても素晴らしい事だ」

「そうですね、本当にそう思います」

人口の少ない地域では、何かを勉強する際にまず英語を学ばなければならない。なぜならば、勉強するにもその国の言葉で訳されている本が無いからだ。

その国の言葉へ翻訳して、更に出版するにはある程度の人口が必要である。なぜならば、本を売るということは商売であり、人口が少なければ収益が見込めないからだ。

そして、英語と日本語のどちらかが読めれば、おおよそ全ての物事が勉強出来ると言って良いだろう。

「勉強にはいくつもの種類がある。単純にテストでいい点がとれるようになる勉強、研究したい分野や、職業に就職するための勉強、好奇心を満たすための勉強。そして、どれもが貴く価値がある。勉強できるという事そのものに、自分で勉強していることに価値がある。昔読んだラノベのラスボスが、パートタイムプリンセスのラスボスが、異世界から地球に精神だけで訪れて、兵器を学ぶうちに勉強そのものに魅了されていった。ただそのラスボスを止めようとしている主人公を、そのラスボスは嘲った。こんなに勉強できる環境なのに、だからこそお前はその価値が分かっていないと。なんでも勉強できることが、幸福だと分かっていないと」

人は、パンのみで生きるにあらず。

それは、レオナルドがルネを見て確信したことでもある。

ただ生かされているだけでは、それは楽しくないはずだ。生かしているものを殺したくなり、自分自身で死んでしまいたくなるだろう。

「今更ながら、自分は共感してしまった。確かに、学べることはとても楽しい。日本語や英語を学んで、その字を学べば、一気に世界が広がるんだ。その第一歩として、彼等には花が咲くところまで頑張って欲

しい。もちろん、花はいつか枯れる。だとしても、種が残ればきっと次に進める。また花を植えたくなる。自分が用意した花だけじゃなくて、どんな花があるのか知りたくなる。自分で調べたくなる。図鑑が読みたくなる。図鑑で読んだ花を育てたいと思ってくれるようになる。花の育て方を学びたくなる。そうなったら、字を教えて欲しいと言ってくれる。前向きに、自分の人生を描いてくれる。したいことができて、したいことができるようになりたくなって、勉強して、そしてまた花を植えるだろう。花壇を増やしたくなって、植木鉢も欲しくなって、案外果物や野菜にも挑戦するようになるかもしれない。そうなったら、料理にも興味が向くかもしれない。これは、そういう意味では第一歩になる。第一歩で上手くいけば、いや、上手くいかなくても、誰かの手で吹き飛ばされない限り、きっと彼等は失敗してもまた挑戦できる。だから、この花壇は絶対に守りぬく」

彼等の人生は、ここから始まるのだとしたら。

仮面の男の描く未来は、きっとルネやヴァレリーが望む未来に形にしたものだ。

ルネにもヴァレリーにも言葉に出来ない、漠然としすぎていて形にできない未来の、明確なヴィジョンがこの男にはある。

誰もが未来を語れず、しかし未来を望む中、この男だけがそれを見通していた。

夢の先を、その先の本当の夢の世界を。

先天的な理由で普通ではなかった彼等の、安住の地。その世界に、本当の楽園をこの男は作り出せる。そう錯覚してしまいそうになる。

「そのためにも、強いことに価値を求めている連中の、その存在を全面的に否定してやらないとな」

彼等を救う事と、敵を辱める事。

果たして、どちらが大事なのだろうか。この男は再び模様が多彩に変化していく。

「勉強が嫌いな少女が必死で魔法を勉強しているのが大嫌いだ。大嫌いになった。杖の先から火が出て、何が楽しい。それの先に何がある？　特別であることに意味を求める？　そうでないと自分が保てな

いなら、その程度でしかないという事だ。【世界一自由でなければ自由を感じられないなんて、なんて不自由な男だい】自分の価値を魔王の子孫であることにしか見出せない連中、英雄の血や魂を継承し伝説の武器を得て英雄になると思考を止めている連中に、本当の人間としての意思を見せてやる。魔王になりたい奴にも、英雄になりたい奴にも、自分は絶対に負けない。魔王の価値も英雄の意義も、なにもかも引き摺り下ろして泥に埋めて後悔させてやる。そんなものはこんなものだとな」

いや、違う。きっとどちらもなければならないのだ。

この男にとって、両方が無いと破綻してしまうのだ。

「そのためにも、彼等にも頑張ってもらう」

「彼等？」

「混血吸血鬼と、それから検体のみんなさ。彼等にも、パーティーの準備をしてもらう。折角のイベントだ、皆で盛り上げないとな」

間が悪かった、というべきではあるまい。

もっと確実で、恐れるべき何かによって、彼等はその手紙を手に震えていた。

『どうもー！　みなさん、こんにちわー！　もしかしたら、こんばんわかな～？』

とても陽気な声が、手紙から聞こえてきた。

それは、先日の黄金風船事件で違法研究所職員の遺族に送られたものと、全く同一の代物だった。

クルゼレイ・アスモデウス、シャルバ・ベルゼブブ。

旧魔王の血を継ぐ二人は、もう一人の同志カテレア・レヴィアタンが行方不明になった情報を知って、彼女の家に向かった。まったく同時に、その家に送り届けられた不審な手紙。

それを開封すると、やはりカテレアが陵辱されている映像が音声と共に流れ出した。

そして、それが終わると同時に、更にウサギの面をかぶった三つ目の男が、この二人が手紙を読むことを予知していたかのように、語りかけていた。

『実は、お二人にいいニュースと悪いニュースがあります。一つは、自分はカテレア・レヴィアタンを生涯使い魔にして愛する事を誓い、その一切の権利と心身を奪いました。よかったですね、これで彼女はもう、理想と現実のギャップに惑わされることはなくなったのです。だってほら、まともな神経の持ち主なら、あんな年甲斐もなくコスプレしてはしゃいでいる公私を弁えない痛いオバさんに劣っているなんて、耐えられませんよね。実際に負けているからこそ、尚の事辛かったと思いますよ。かっこよすぎて、自分なら自殺しちゃいますね。ですがこれでもう大丈夫、別れはつらいでしょうけど祝福してあげてください。彼女は正に、愛に満ちた夢の世界に生きているのです。もう誰も彼女を傷つけることは出来ません。彼女の因果は断たれ、幸福な世界に旅立ったのですから！』

とても大仰に、仮面の男はその全身を使ってアピールした。

その隣には、呆けた顔のカテレアの姿がある。情事の後、そのまま撮影を続けていたらしく色々と乱れている。もちろん衣服がではない。そんなものはとっくに剥ぎ取られている。

それでも、彼女は確かに幸せそうだった。まるで、現実を認識していない。認識していれば、ああもふやけることは出来ないだろう。

『今のが悪いほうのニュースです』

突然動きのテンションが収まり、いたって真面目ぶって、居住まいを正してそう言った。

なるほど、確かに善いニュースではないのだから、悪いニュースであるというのが正しいだろう。

彼女がどれだけ幻想の世界で生きていようとも、この場にいる二人は魔力を高ぶらせて怒りに震えることしか出来ない。

『では、いい方のニュースです。今度自分は、アグレアスを盗みに冥界へお伺いします。一月後ですので、どうか楽しみに待っていてくださいね！　大丈夫ですよ、自分は約束を守ってその日のうちに盗み出し

ますから！　例え貴方達が前魔王の子孫だったとしても、現魔王の勢力が貴方達に助太刀しても、天界から天使が助勢に来ても、堕天使が援軍にきても！　伝説の英雄達が伝説の武器を持って現れようとも！　自分は必ずお伺いします、たとえ破滅がまとうとも！』

なるほど、確かに良いニュースだった。今一番殺したい相手が、何時現れるのか教えてくれたのだ、欲しい情報だったことは確かである。

だが、その言葉の一々が許しがたい。まるで、自分達がこの情報を横に漏らすようではないか。まるで、単独ではなにも出来ないようではないか。まるで、この男を倒すのに自らとその一党だけでは足りぬかのように。

『特に、白龍皇は怖いですね！　だって、全ての悪魔の王、魔王ルシファーの子孫なのですから！　混血とはいえ、その実力は計り知れません！　この自分を、凌駕する実力を持っているかもしれませんね。もしも彼が来たら、自分達は彼一人に壊滅させられてしまうかもしれません！　だって、ルシファーですから！　アスモデウスとも、レヴィアタンよりも、もちろんベルゼブブとも格の違う圧倒的強者、それがルシファー！　そんな彼が来たら、自分は身の破滅だなー（チラッ）』

余りにも、意図があけすけだった。

余りにも、目的がハッキリしていた。

余りにも、言動がそのままだった。

『堕天使陣営に所属しているルシファーの子孫か、怖いなーー！（チラッ）

ルシファーの子孫の中でも天才と呼ばれる魔力量をもつ白龍皇かー！（チラッ）

強いんだろうなー、カッコいいんだろうなー、目の前にきたら逃げたくなって逃げ出しちゃうかもなー！（チラッ）

ううん、多分怖くて逃げちゃうよー！　だって、覇龍を制御できるんだぜー！（チラッ）

現在過去未来を問わず、最強の白龍皇、ヴァーリ・ルシファーなん

だぜー！（チラッ）』

この男は知っているのだ、自分達が聖書の勢力に対して反攻しようとしている、否、正しい形に戻そうとしている『禍の団』を結成しようとしていると。

そして、その誘う中に、極めて業腹ながらルシファーの血を継ぐ混じり物がいる。

それを、少なくともシャルバ・ベルゼブブは快く思っていない。

『この犯罪を、貴方方はたちどころに解決する手段を持っている。だってそうでしょう？　貴方達は合理的に判断ができる悪魔だ、とっくに見当がついているはずです。自分の思惑が、単に他の勢力と協力するだけで、それも全面的に恒久的にではない。ただ一時、同じ相手を倒そう、そう思うだけでいい。それだけで、貴方達は自分を倒せる。貴方達がほんの少しだけでも歩み寄れば、それで冥界を騒がす強盗は哀れな末路を迎えるでしょう。本当ですよ、自分は嘘をつかない。【1足す1が、1より小さいとは、僕、思わない！】過去を水に流す必要はなく、未来を限定する必要もない。今現在、適当な言葉を並べて協力を取り付けて、その場を凌げばそれでいい。頭を下げて舌を出して、それでもそれで問題ない。それだけで、カテレアさんの無念は晴らせる。彼女を精神的に殺害した自分を殺せるし、上手くいけばその心を取り戻せるかもしれませんね』

そこで、わざとらしく、大げさに笑い出した。

仮面の男は、およそ人間離れした悪意をむき出しにして、そのまま腹を抱えて笑い出した。

それが嬉しいのか、カテレアも同じように空虚に笑い出した。

不思議と熱量が無い。この二人の笑いは、どこか虚無的だった。

『……って、できるわけないか！　貴方達が、そんなに上手く立ち回れないか！　例え嘘でも、現魔王に頭を下げたり出来ないか。堕天使やら天界やらに協力を要請なんて出来ないか。ですよねー、できるんだったら、ここまで落ちぶれてないですよねー！　私怨と劣等感で、カツチカチに覚悟しちゃってますからねー！　まあ、正直ヴァーリ君には会ってみたいとは思っているんですよ。色々確認したい事もあ

りますし、伝えたい事もありますしね。どっちかというと、そっちがメインなんですよ、今回の一件って。なので、できればつれてきてくださいね、そっちの方が助かるんで』

彼等の前には、手紙がある。

強盗から送られてきた、犯行声明文だった。

これを詳しく調べれば、或いは敵の本拠地を調べることができたかもしれない。

そうでなくとも、この重要情報は即座にでも現政権に報告する必要がある。

だというのに……。

「……一ヵ月後だったな」

「手勢を準備しておこう」

二人は、その手紙を魔力で吹き飛ばしていた。

コネクト　2

四大魔王の揃った会議室に初代バアル、ゼクラム・バアルを加えて、ファルビウムが召集した緊急会議が始まっていた。

そして、机に突っ伏している彼の第一声は、ある意味平常なものだった。

「あのさあ、魔王やめていい？」

ファルビウムは、極めて深刻そうな顔でそう言った。

それは、怠惰を極めているながらも、しかし優秀な眷族をそろえている事で魔王としての公務をこなしている彼の口から出るとは、とても思えない言葉だった。

それは、彼が把握している状況が極めて破滅的であることを示している。

「ファルビウム。頼むから用件を言ってくれ」

「ええ？　うん。ぶっちゃけ、アグレアスが仮面の男に盗まれる」

「……なんだと？」

その発言に、露骨に眼を吊り上げたのは初代バアルだった。

老いて尚、冥界の政治で多大な発言力を持つ７２柱筆頭は、人間風情に前魔王の遺産が奪われると聞いて苛立ちをあらわにした。

まあ、そう思うであろうと予測がついたので、ファルビウムは先に呼んでおいたのだが。

「ふむ……それは惜しいな。あそこはまだ調査が済んでいないんだが」

「なら早めに済ませなよ。絶対返ってこないからさ」

アジュカの能天気にしか思えない他人事のような達観と、既に全てを諦めているファルビウム。その捨て鉢が過ぎる言動に、サーゼクスもバアルもより一層顔をしかめた。

転生悪魔、という制度の根幹となっている『悪魔の駒』。その製造には、アグレアスで生産されている結晶が絶対に必要なのである。そういう意味でも、奪われる等論外だった。

「……ねー、どうしてそんなことが分かるの？」

セラフォルー・レヴィアタンのややずれた質問は、しかし尤もだった。

結論は確かに致命的な問題だが、しかし、それに至るまでの経緯はまったく明かされていない。

そして、それが分からなければ問題に対処のしようが無い。例え、ファルビウムが既に熟考を重ね、無理だと結論付けていたとしても。

「旧魔王の子孫、カテレア・レヴィアタンの行方がつかめなくなった。関係者は自宅にいるというけれども、なんかさらわれたっぽい。でね、そのタイミングでクルゼレイ・アスモデウスとシャルバ・ベルゼブブがアグレアスを使用すると届出を出したんだよ。これ、仮面の男となんの関係もないと思う？」

魔王の血を汚す輩か、と初代バアルは怒りを滾らせた。

良くも悪くも原初の悪魔らしい悪魔である彼等ではあるが、その実力は魔王の名前を名乗るにふさわしくない。

少なくとも、超越者であるアジュカとサーゼクスはもちろん、ファルビウムやセラフォルーよりも、更に劣っている。

そんな彼等が今回の一件に関わっている事を、全盛期の悪魔を知る老体は嘆いた。

「……浚われて、犯されて、予告されたという事か」

「そーだね。旧魔王の面々はイベントだって言ってるけど、絶対に違うよ。凄いねぇ、戦力を殆ど集めてる」

サーゼクスの問いを、ファルビウムは肯定した。

こんな言い方はどうかと思うが、前魔王時代の遺産である空中都市アグレアスは、前魔王の子孫のもの、という見方もできる。もちろん、それは彼等の勝手な妄想でしかないが、それは彼等にとって真実でなければならないのだ。

そんな彼等に盗む、と予告したのであれば、彼等は全力で戦うだろう。例え、頭では敵わないと分かっていても。自力で誰の力も借りずに。

それが冥界全体へどれだけの影響を与えるとしても。考慮の材料にさえならないはずだ。

「……アジュカ、もしも彼が空間跳躍によってアグレアスを奪った場合、追跡は可能か？」
「ああ、事前に準備しておけば、ある程度は可能だ。つまり、仮面の男は空間跳躍で直接本拠地に移送する事はないだろう。技術的には可能でも実際には不可能だ」
藁を掴むようなサーゼクスの問いに、アジュカは肯定しながら否定した。
つまりは、何がしかの発信機をつけるとか、そんなことは可能だろう。だが、発信機とは何かを『発信』するものなのだ。たとえ広大な空中都市とはいえ、異空間から冥界に届くほどの発信を行えば、当然相手には見つかるだろう。
そして、技術屋であるアジュカが思いつくほどに、相手はそのリスクを込み入れて行動することが分かりきっている。
サーゼクスに啖呵をきった男が、そんな間抜けな失敗をするとは思えないのだ。
「……ファルビウム、相手の作戦は分かっているのか？」
「もちろん、見当はついているよ。ただね、サーゼクス。一応確認しておくけど、君にとって最悪の事態とはなんだい？」
間延びした口調を取りやめて、ファルビウムは突っ伏したままサーゼクスを見た。
その目には、明らかに呆れが見て取れる。
「……アグレアスが奪われ、悪魔の駒が生産できなくなり、その上権威が更に失墜する事だ」
「違うね、ぜんぜん問題じゃない」
ファルビウムは、極めて捨て鉢に回答を述べた。
とてもではないが、善良とも正義とも言いがたい発言を。
「彼等が僕たち悪魔だけを標的にする事だ。そうなったら、もう完全に僕らはおしまいだよ」
現時点では、仮面の男の一派は悪魔だけを狙っている。それ故に、他の勢力は悪魔の敵である、という能天気な考えしかもっていない。
だが、彼と直接会っているサーゼクスは違う。仮面の男は、一種の

王だ。彼は、自分が納得しない事には絶対に妥協しない。
稀代の激情、覇王の資質。何人の裏づけも必要としない彼が、悪魔だけを標的にするなどありえない。
だが、ファルビウムの言っている事はつまり、他の勢力も彼等の餌食になってほしいというものだった。
とてもではないが、正気の発言ではない。
しかし、その言葉を初代バアルは否定せずにいる。敗北宣言のようだが、それでも既に悪魔の権威は地に落ちている。ならば、他の勢力にも痛みを受けてもらうのが一番の良策であることは確かだ。
「ファルビウム……我々はどうすれば、この問題を解決できるんだ」
なんとか、サーゼクスは話の流れを調整した。実際のところ、対応できる手段があるのであれば、それに越した事はない。
少なくとも、自分達が被害を受けたのだから、他の国も等しく被害を受けて欲しいというのは、余りにも機械的過ぎる。
「簡単だよ、旧魔王派が僕らに頭を下げて協力してくれと言って、更に僕らが聖書の勢力の中だけでも団結すればいい。それで問題は解決できるよ」
旧魔王派が、現魔王の派閥に助力を要請する。
それは彼が思い描く理想の未来への第一歩であり、つまり永遠に訪れない未来そのものだった。博愛を語るサーゼクスとて、彼等が一切の怨恨を忘れているとは思っていない。
「……彼がアグレアスを襲撃する時期は？」
「半月後だね」
「……無理だ」
言い方は悪いが、堕天使と天界を巻き込むだけなら簡単だ。予告の日にアグレアスを調印の会場にすればいい。
もちろん多くの問題は予想できるが、事前に通達しておけば多少マシだろう。悪魔にこれ以上落ちぶれられては、聖書の勢力全体の失墜に繋がるからだ。
だが、半月後にアグレアスを調印の場にする事は不可能である。
いくらなんでも、調整が追いつかない。

「サーゼクス、初代バアル、良く聞いて欲しい。ぶっちゃけた話、僕は今回の一件を見て見ぬフリをするべきだと思う。多分それが一番被害が少ないよ」

彼の意見は真実だった。彼が想定している今回の一件における想定される最悪の事態、それは後に発生する『大事件』と呼ばれる騒動を含めて最適解だった。

実際のところ、それをされては仮面の男の計画が多少狂っていた可能性もありえる。もちろん、誤差の域ではあったのだが。

それほどまでに、ファルビウムの読みは正解に近かった。

「第一ねぇ、多分だけど彼にとって今回の一件は本命じゃない。土台作りというか、単なる布石だ。本命はもっととんでもない事だよ。それこそ、僕らが知っている以上の何かを彼は知っている。それを最大限に活かして、最悪の行動をするつもりだ。そしてそれは、僕たちだけが被害を被る事じゃない。つまり……」

「見逃せば、全神話に被害が及ぶと？」

「そうだね、だから放置するべきだ。都合よく、旧魔王の一派は仮面の男が掃除してくれる。その上、彼が今回の一件を布石に『でかいこと』をしでかせば、それはアグレアスを失う以上に、相対的に悪魔は得をするだろうね」

仮面の男は『原作』を知っている。ただそれだけで、冥界最高の頭脳が想定の外に立っている。

だが事実だった。仮面の男の構想は、花壇を守る為の作戦は、即ち世界の全てを敵に回して尚勝てるだけの力を得るものだった。

強さを否定し、しかし『強か』に振舞う彼は、今回の一件でその脅威を世界に示す事になる。

世界に散らばった断片に、自らの悪意とチートを合わせて、最悪のパズルを完成させるために。

「……まあ、とにかく今回の一件は旧魔王の面々に頑張ってもらうべきだよ。責任は全部彼等に押し付ければいい。多分彼等も何がしか後ろ暗いものがあるだろうしね。今回の協定にだって不満はあっただろうし、調べれば一発だよ」

「……だとしても」
　見てみぬフリをする、それは本当に最適解だった。だが、それが出来ないからこそサーゼクスは魔王なのである。
「私は魔王ルシファーとして、それを拒絶する。犯罪者には決して屈しない。彼の思惑がなんであれ、この悪魔社会の中核となっている悪魔の駒の生産のため、そして悪魔社会全体のために、私は戦う」
「当然だ」
　サーゼクスの言葉を、バアルは肯定する。
　なるほど、ファルビウムの提案は賢しい手段ではあるのだろう。だが、それは誇りを捨てる事に他ならない。
　まるで嵐が過ぎ去るのを待つ民草のような、そんな無力なものが貴族であるものか、悪魔であるものか。
　前魔王の遺産を、どこかの誰かにくれてやるわけには行かない。
　バアルの言葉に、サーゼクスは頷いた。そう、これは完全に矜持や沽券の問題でもある。たとえ多くの矛盾を孕んでいても、貴人としてすべき事は絶対にあるのだから。
「ファルビウム、彼等の作戦を教えてくれ。君が思いつかなくても、我々なら手立てが思いつくかもしれない」
「無理だけど……まあ、いいか」

「……アジュカ、今の事は技術的に可能だと思うか？」
「さて、仮面の男の能力次第だろうが、可能だろう」
　サーゼクスは、ファルビウムから語られた内容を聞いて愕然としていた。
　もしも仮面の男がその作戦を実行に移せば、それこそ魔王では絶対に対応できないものになってしまう。
　ファルビウムが旧魔王を悪役に仕立てようとした理由も分かった。これでサーゼクスが無理矢理作戦に参加しようものならば、それこそ最悪の場合悪魔は絶滅する事になる。
「なんということだ。これでは、どう足掻いてもアグレアスは奪われてしまう」

初代バアルは沈痛な面持ちで机を叩いた。
彼をして、この作戦には悪意が満ち満ちている。いやらしいにもほどがある、嘲笑が聞こえてくるような一手だった。
これでは、何をしてもしなくても、それこそ旧魔王の連中を全員無理矢理拘束しても、なんの意味もない。
前回は遺族を処刑する、という次善策があった。だが、今回アグレアスをぶっ壊すというのは、それは悪魔にとってはあらゆる意味で不可能である。そして、それでは全く意味がない。
「……天界とか堕天使にも連絡しておく？」
セラフォルーは、やや消極的になりながら挙手し提案をする。
実際のところ、行動に移すかどうかはともかく想定しうる最悪の事態への備えは必要だ。
そして、聖書の勢力のトップ陣はいずれも友好を求めつつも、しかしその認識が全体で共有されているわけではない。
であれば、これから起きるであろう『最悪の事態』にも、共通認識を持っていなければならない。
「……ああ、そうしてくれ」
サーゼクスは、極めて沈痛な面持ちでそう言った。
「それにしても、だ。ファルビウム、よくもこれだけ悪辣な作戦が思いついたな」
アジュカは、冥界最高の戦略家を素直に褒めた。彼が想定した仮面の男の作戦は、技術者としての発想ではない、一種の工夫程度の作戦だがそれだけに性質が悪すぎる。
よくも、これだけの悪質な作戦を、とアジュカは素直に認めていたのだ。
「逆算したんだよ。彼は性格が悪いからね、僕らが一番嫌がることをすると思ったんだ。それこそ、こうして旧魔王派の人がばれるようなことをしてもね」
ばれなければ、それでよし。ばれれば、それもまたよし。
こちらの事情を知り尽くした上での、その悪辣さ。強大な力を手に入れて尚、とことん卑に走る性分は『悪魔』めいていた。

「なぜだ、なぜ我々がここまで翻弄される」
初代バアルは、そうつぶやいた。
実際のところ魔王は看板通りの実力者で、その眷属も優秀である。
そして、今回の一件に旧魔王の遺児たちが関わっているのは残念だが、確かに事前に備えられている。
だが、それでも全く、これっぽっちも対応できていない。長い時を生きてきた原初の悪魔は、未知の存在に困惑を隠せない。
「……ん～、だってほら、彼は性格が悪いからね」
ファルビウムはいつか魔王の妹達に語った事を、老人にも語った。
「彼の最大の強みはその機動力だ。何をするにしても、それを最大限に生かしてくる。僕たちにはなかった発想だけど、人間らしいといえば人間らしい。もちろん彼のやり方にも限界は有るけど、それでも犯罪レベルなら十分に過ぎるね」
「ふむ、特異さや物量ではないのか？」
「そうじゃないね、多分魔獣創造がなくても何とでも出来たよ。単に、できそうだし派手そうだからやってみただけだと思うよ。ぶっちゃけ、普通に適当なテロ予告でもすればいいんだし。まともな上級悪魔だったら、そんな予告をされた時点で召集自体に応じなかったと思うよ」
つらつらと、ファルビウムは冥界の脆さを指摘していく。
そんなことはとっくの昔に分かりきっていたというのに、誰もが口に出来ずにいた。
実際のところ、悪魔の人口が減っていることが最大の問題なのだ。だからこそ、少数を強化するために悪魔の駒を使って、強化や移民を募ることとなったのだ。
だが、それでも全く問題は解決していない。
彼は誰もが分かりきっている弱点を、正確に突いてきただけなのだ。
それはつまり、サーゼクスの選んだ道の、そのデメリットを狙い済まして攻撃していただけの事だ。
こんな言い方はおかしいが、サーゼクスが最初からもっと大胆に動

いていれば、こんな事にはならなかった。独裁に近い政治を敷き、前政権の関係者を根絶やしにし、魔王という職業に強い権限を与えていれば、こんな事にはならなかったのだ。

もちろん、それはそれで社会に歪みがあっただろう。だが、この男はその歪みを適切に穿ってくる。

「君は優しい。彼は悪人だからそこを突く。それだけだよ、気にしちゃ駄目だ」

ややや気を見せているファルビウム。彼は確信していた、ここで踏ん張らなければ、もっと面倒な事になると。

「字ですか……そうですか、そんなことを」

「やっぱりアイツ、色々考えてるんだな」

始球空間に移設された研究所の一室で、レオナルドはヴァレリーとルネに今後の方針を簡単に伝えた。

犯行計画の絵図はまだ微修正するかもしれないが、それでも相当に壮大であると察しがつく。

とはいえ、負の意味で仮面の男を二人は信頼している。彼が強いとか弱いとかではない、極めて大胆かつ狡猾な計画性の持ち主である事。

それが、彼女達に悪い意味で成功を確信させている。絶対に、ろくな事にならないと。

今も女性を女性と思わぬ、心を砕いた人外の『雌』への鬼畜の所業を行っている彼への、間違っていない信頼である。

「確かに、皆には前向きになってほしいわ」

「……ああ、そうだね」

そしてどちらかと言えば、今後この『英雄墓場』で行われる、不遇だった彼等への支援。そちらの方が衝撃的だった。もちろん、いい意味である。

彼は嘘をつかない、そっちの方が面白いからだ。であれば、実際に彼は待つのであろう。

花が咲き、種を残して散るのを。彼等がまた自分の意志で種を植えるのを。それこそのんびりと待つのであろう。

劇的な結果には繋がらないであろうが、それでもその優しさが二人の少女には嬉しかった。

「……にしても、アイツはなにがしたいんだ？」

だからこそ分からない。彼はもう一つの仕事を彼等に課している。それも、それこそ何の意味もない行為だった。

小太鼓やら小さいラッパを配って、それこそスポーツの応援に使うような簡単な練習をさせている。戸惑いつつも、花壇の前で呆然としているしかなかった彼等は、それなりに楽しんでいるようで何よりだった

もちろん、やろうと思えばいくらでもできるのだろうけれども。いや、もっと言えば仮面の男は、そもそも他人を必要としていないとも思われる。

「まあ、三つ目さんにはいろいろ考えがあるんでしょう。聞きたくないですけどね」

「ああ、まったくだ。あのクソ三つ目、どうせ意地の悪いことに頭を使ってるんだろうよ」

「でも、三つ目さんの思いやりは本物だと思うわ」

やや嫌そうに陰口を叩く二人に、ヴァレリーはいたって真面目にそういった。なにやら、思いつめているようですらあった。

「……つってもさ、私が言うのもおかしいけど、アレはねーよ」

職員をできる限り惨たらしく殺した後で、再生能力と自爆機能を与えた上で蘇生し、遺族へ突っ込ませた挙句目の前で遺族を殺すという凶行を許したルネが言うべきではない。

だが、アレは明らかに常軌を逸していた。アレを思いついて実行に移す人間がまともなわけが無い。

「……私は、つくづく考えるようになったの。平等とは、なんだったのかって」

「……色々言いたい事はありますが、考え込んでいて異次元の方向に尊敬の念が進んでますよ」

「あのさ、ヴァレリー。私はバカだけど、もっと色々話して良いんだよ？」

なにやら、難しくて哲学的な問題を口にしたヴァレリー。それを見て、とりあえず二人は止める事にした。

実際のところ、仮面の男は優秀だろう。だが、それでも悪人なのだ。感化されるのは、あるいは尊敬するのは間違っている。

仮面の男は、嫌ってやるぐらいが調度いいのだ。間違いなく本人もそれを望んでいる。

「そうね、確かにその通りだった……。ねえ、二人とも、私は迫害されていた混血吸血鬼の一人というのは知っているわよね？」

「ええ、まあ。現場には一緒にいましたし」

「……そういやそうだったね」

「それで、いつも悲しかったわ。どうして私達は苛められているんだろうって、どうしてあの人達は私を苛めるんだろうって。だから、誰もが平等で、迫害されない社会が欲しかった。でも……平等ってなんだったのかしら」

平等、つまりは平らで等しい。皆が皆、同じ権利を持ち、義務を負う事であろう。

ただ、それが果たしていいことなのだろうか。

言い方は悪いが、弱いものは弱いままではないのだろうか。

「例えば、三つ目様よ。あの方は、なんというか、『強い』でしょう。力が有るとか無いとかではなくて、力が大きいとか小さいとかではなくて、自分というものを持っていると思うの」

その言葉を、二人は釈然としないまま頷いた。

確かに、彼は弱くないだろう。強いだろう。それは、人間性というか、非人間性という強さだ。

ただ、それは認めてはいけないもののように思える。

「真に平等というのであれば、実験台になっていた神器所持者の皆さん、混血吸血鬼の皆にも私達同様に義務を与えなきゃならなくなるわ。そして、もっといえば三つ目様のように強くならないといけない。だって、そういうものでしょう？」

「まあ、そうかもしれませんね。確かに……でも、彼等に権利を与えてないでしょう。実際のところ、三つ目さんは全部一人で決めてますよ。意見は汲み取りますけど」
「だよなあ、第一、まあ……クソ三つ目を基準にするのは間違ってるだろう」
仮面の男の『強かさ』を万民に求めるのは無理がある。第一、あんなにも我の強いのばかりでは社会が立ち行かなくなるだろうに。
「そこよ。彼等は弱いわ。それも、彼等に全く責任の無いところで、彼等には全く強さが無い。多分彼等は、このまま弱いままでしょう。一生おびえて生きていくのでしょう」
酷薄な想定だが、おおよそ間違ってはいない。そもそも、彼等の人生はここから始まるといっても、既にケチがついている。今後、彼等がどんなに健全に成長しても、ルネやヴァレリーほどに積極的にはなれないだろう。
それは仕方が無いのだ。皆が皆、ルネのように復讐心を維持できるわけでもなく、ヴァレリーのように博愛精神を育めるわけでもない。
ある意味では、この二人も又仮面の男と同類の強い人間性の持ち主であろう。もちろん、種類も異質さもまったく違うのだが。
「平等と言うことは、強くなれということ。少なくとも私には、彼等にそんなことを言う事はできないわ」
「あんまり難しく考えすぎだと思いますよ？　だってほら、実際に平等な社会なんて本当は何処にもありませんよ」
レオナルドは、幼いが教養がある。それ故に、ヴァレリーの極論、或いは理想論に待ったをかけた。
「神器もなにもない普通の人間社会だって、優劣はあるんですから。そういう人を助けるために福祉制度というものがあるんですし」
「……それは、私達吸血鬼で根付くと思いますか？」
「ノーコメントです。僕は吸血鬼社会を知らないので」
「根付かないでしょうね。少なくとも、一般の混血と一般の純血、それも貴族では実力差がありすぎます。それで、権利だけ平等にするのは不可能です。そして、ここ……『英雄墓場』のように大量に窃盗して

いる上に神滅具で労働力を確保していない以上、どうしたところで弱者に利益が行き渡らない。それは、仕方の無いことです」

そして吸血鬼が人間を襲う、食う生き物である以上、吸血鬼の富とは即ち……。

略奪を財源とするこの『英雄墓場』と何も変わらず、略奪に他ならない。もちろん、それが吸血鬼の生態ではあるのだけれども。

「まあ、気持ちは分かるよ。ヴァレリーを含めて、混血吸血鬼は吸血鬼の国にいたって幸せにはなれないってんだろ？　でもって、あいつが連中に必要なものをくれてやってる。それもまあ事実だろうさ。でも、そんなのうまくいきっこない。長続きはしねーよ」

「そうですね、彼等が強くなれないというのは同感です。ですが、こんなのはそのうち破綻しますよ。このやり方で救えるのは、つまりは弱者だけです。現にルネさんは三つ目さんに反抗的です。花だの音楽だの、それだけであまねく全ての人が救われるわけが無い」

この男のやり方が、短期的に見れば正しいのは明らかだ。だが、それは要するに飼育に等しい。彼等には生産性は望めない。少なくとも、補助もなく単独で自立するのは難しいだろう。

だが、今後も増やすとなれば、或いは継続するとなれば。このままのやり方で上手くいくとは到底思えない。

「それは、そうかもしれません。ですが、彼等に私は頑張れ、とはいえません」

「平等が彼等の望むものではない、というのは同感です。ですが、だからと言って三つ目さんの意見を全面的に肯定するのはおかしいでしょう。まあ、そこも織り込み済みかもしれませんが」

ヴァレリーは仮面の男が自分にできないことが出来ている、と肯定したがっている。それが正解ではないか、と目の前にある正解を正解だと思いたがっている。

それを、ルネは嫌悪で、レオナルドは理屈で否定する。

だとしても、今現在の彼等は代わりになるものを用意できずにいた。

「……レオナルド、私は頭が良くないし、舌も回らない。ヴァレリーはあんまり勉強できなかったみたいだし……まとめてくれないか？」
「そうですねぇ、少なくともルネさんやヴァレリーさんが救いたいとか、幸せになってほしいと思っている人たちは、平等とかそういうのは求めてないし、逆に重荷だと思います。そういう意味では、三つ目さんの方針は全面的に正しいと思います」
レオナルドの発言を、二人の少女は頷いた。
なるほど、今更彼等が神器や吸血鬼の特性を生かして、仮面の男の部下として犯罪に走る。あるいは自立して、自分達同様に恵まれない人を助ける。そんな前向きさは一生育まれないだろう。
それが彼等の普通というものだ。心に消えない傷を刻まれた彼等の、望んだ刺激のない穏やかな日々であろう。
「ただ、三つ目さんのやり方はそこまでが限度でしょうね。彼等はきっと、この閉ざされたコミュニティーで箱入り娘や放蕩貴族のように花や音楽を愛するだけの一生を送るでしょう。それはそれで、きっと幸せだとは思いますが」
「まあ、クソ三つ目が飽きたらそれまでだろ」
「そうなんですよ。結局ペット同然ですし、ルネさんやヴァレリーさんみたいに外側へ興味を持ち出したら、彼等はとたんに幸福ではなくなってしまう」
例えば、実験台になっていた彼等のうち数人が復讐をもくろんだとしよう。それも、ルネと違い悪魔そのものに。
あるいは、ヴァレリーのように自分以外の誰かを助けたくなったら。この世界にいくらでもいる、自分に責任が無いにもかかわらず虐げられてきたものを救いたいと思ってしまったら。
この閉ざされた世界で、満足できなくなってしまったら。知恵の実を食べたアダムとイヴ同様に、ここを飛び出してしまうだろう。
「……どうすればいいのでしょうか」
ヴァレリーの嘆きに、二人は答える術を持たない。というよりは、この世の誰も答える術を持たないであろう。
そんな、人類が平和に幸福に生きられる社会。理想郷など、地上に

は存在し得ないのだから。
「一つ言えることがあるとすれば、貴女も僕たちも勉強しないと駄目と言うことでしょう。三つ目さんは誰よりも先が見えていますが、神様じゃありません、間違いもあるでしょう。そして、自覚もありますから僕らの意見も取り入れてくれると思います。それに、理想的な生活云々は置いておくとしても、彼等にできることはまだたくさんあると思いますし」
「まあ、それがいいね。一人で焦るとろくな事になんないよ、ヴァレリー」
「……そうですね、できることがありすぎて、つい高望みをしてしまいました」
実際のところ、三つ目のように一つ一つ解決する。それが大事なのであろう。少なくとも、彼等には傷を癒す時間が必要だ。たとえ彼等が二度と高みを目指したり走り出すことが出来なくとも、出血が治まり痛みを感じなくなったり、或いは歩いてみたいと思うようになったり。それを待つのが大事だ。そう言う意味では、仮面の男は暴走等してはいない。むしろ四人の中の誰よりも腰を落ち着けていた。
そして、何を重んじ何を示すのか。この『英雄墓場』で示すべき心のあり方を、三人は考えていく。
それは、つまりコミュニティーの指標となる文化の芽生えであった。

コネクト　3

四人は、のんびりと食事をとっていた。幸いというべきか、襲撃はまだ大分先である。犯罪者が常時緊張を維持していても仕方が無い、と夕食時は他の『被害者』達同様に穏やかに食事をとるだけのゆとりが英雄墓場のトップ達にはあった。

「さて、特殊能力というものをどう考える？」

「随分、突っ込んできましたね」

食事中だが、静かに食べろというマナーはない。強いて言えば、顔の焼けた男が喋りたくなったら、いつでも会話が始まる。

しかし、その題は中々深刻だった。良くも悪くも、この場の面々にとってあまりいい言葉ではない。

治療系の最上級という、おそらく最も社会に貢献できる能力を持ったヴァレリーでさえ、その出生と社会情勢から戦争のために利用されていた。

一番マシなのがレオナルドであろうが、彼とて仮面の男と関わっている時点で幸運ではあるまい。なので、今の発言にはやや驚いていた。

もちろん、神滅具を兵器としてではなく能力として捉えた場合の話だが。

「ろくでもないもんさ。でも、嘆いたって始まらないだろ」

「危ういと思います。ですから、その分良く考えて使うべきだと思います」

ルネは不運であると認めつつも受け入れ、ヴァレリーは危険であると知る故に慎重論を唱えた。

その言葉に、仮面の男は頷いた。食事中なので、もちろん外しているのだが。

「どっちも間違っちゃいないな。レオナルド、君の意見が聞きたいね」

「そうですね……正直邪魔です」

「違いない！」

ケラケラと一笑いして、仮面の男はフォークでライスを食べた。あ

まり上手そうではないが、それでも一応テーブルマナーを守ろうとしていた。

「……まあ、確かに邪魔だろうさ。究極的には、そんなものがなくても大成する奴は大成するし、あっても駄目な奴は駄目な奴だ。考えてもみろよ、高学歴高年収高身長のイケメンでも、人間的に駄目だったら幸せな人生なんざ望めないだろう？　そりゃあボクシングの世界チャンピオンだの陸上競技のオリンピックだのを目指しているんなら、ないと話にならないだろうさ。でも世界で一番強くなりたいとか世界で一番金持ちになりたいとか、そんなレベルを求めない限り突出した能力なんざ無駄なんだよな。あっても、努力しなかったら同水準の奴に負けるだけだし。いやあ、現実は無常だなぁ」

この場の四人の意見はとりあえず一致している。それが嬉しいのか、本当に愉快そうに笑っている。

その三つの目は、等しく薄紫色の波紋模様を描いていた。

「突き詰めると、強いとか特異な能力とか、そんなもんは人生に不要なわけだ。だって、世の中の大概の人間はそんなものがなくても不自由してないからな。魔女の宅配便でも、空が飛べるからって個人でやってたら重いものは落しそうになるし、雨が降ってたら濡れるし、風邪ひいたら仕事が休みになるし、途中から手動で宅配便やってたし、全く意味が無いわけだ。ＤＩＯ曰く【思うに自動車という機械は便利なものだが、誰も彼もが乗るから道路が混雑してしまう】と言っていたが、それは社会というものを理解していないとしか思えない。普及しているからこそ得られる恩恵もあるというのにな。特定の人間しか自動車に乗らなかったら、ガソリンスタンドだって数が少なくなるし、道路だって車が走れるような舗装がされなくなってしまう。携帯電話なんざその典型だな、一人でもってたって何の意味もないぞ。据え置きの電話があればまだマシだが、電話さえなかったらどうするんだかな。【天才の持つ天才性の最たるものって、己の才能を一般化する力だと思いました】という、言葉もある。至極最もだ、たった一人の突出した天才が誰にも理解できない真理に到達するよりも、全人類が好きなだけ技術水準の恩恵を受ける方がいいに決まっている」

「まあ、一理ありますね。僕らの能力も、皆が使えるもので替えられるなら、それが一番楽ですし」

こういうとき、レオナルドは率先して返事をしている。理由は、自分が応じないと仮面の男が他の二人に話しかけてしまうからだ。少年レオナルド、気遣いのできる紳士である。

そして、実際のところ仮面の男の発言は一つの真理を突いている。現に、先日の『黄金風船事件』では突出した超越者がその限界を晒していた。個人の最強さなど、余りにも無力だった。

「そう、便利だ。『強い』なんかよりも、よほど価値があるとは思わないか？」

「それは私へ説教か？」

治療、改造のヴァレリーは言うに及ばない。加えて、レオナルドのモンスターも強いというよりは便利に該当する能力であろう。それらにはやや劣るものの、それらを強化できる仮面の男の神器も便利であろう。

だが、ルネだけは基本的に戦闘用だ。他の補助がなければ、戦闘にしか使えない。

「ああ、その通りだ。勘違いされると困るからな、確かに復讐ができたのは君が強くなったからだ。だが、それはつまり敵よりも君が強いからだ。そして、君は別に強くなる事に人生を奉げるつもりもないんだろう？　だとしたら、強い事にこだわるな。強くなっても、実際のところ何の得もない。所詮強い弱いなんて相対的なものだ。どんなに強くなったところで、自分より弱い奴にしか勝てないし、自分よりも強い奴には勝てない。いや、自分よりも強い相手に勝てることもあるだろうが、それは逆に自分よりも弱い奴にも負けうるということだ。そんなもんだ、強さなんて。まして、神滅具の中でも比較的下側の獅子王の戦斧ごときの禁手程度で、調子に載って万能感に酔いしれられても、困るんだよ。頭では分かっていても、心では勘違いをしているかもしれないしな。実際のところ、彼等の護衛を務めていた連中は例外なく君よりも強かった。彼等を退かせなかったら、たとえ自分達が死力を尽くしたとしても、自分達は全滅し遺族は全員生き残っていた

だろう。それを避けることが出来たのは、つまりは便利さだ。もっと言えば、便利さを運用する知恵であり知性であり知識だ。どんな便利なツールも、いろんな人が『あったら便利だな』『こういう機能が欲しいな』『これがあると良いな』的な需要の元に『ああでもない、こうでもない』『やってみよう、作ってみよう』『計画、実行、評価、改善』『試行錯誤』の末製品化された多くの商品も、結局使う人間の向上心や整備の手間隙で大きく変わるからな。道具を使うのは人間である、という当たり前の結論に行き着くわけだ。そしてそれは、シューティングゲームのように弾幕の場所を記憶したり、ロール・プレイング・ゲームのように沢山の装備や魔法を覚えたり、格闘ゲームのように画面上に現れる相手の思考を読んだりするようなことじゃない。多くの友人と相談して役割分担をし、多くの物事を多面的に解決したり、常に周囲に気を配って気付かれずに気付き見つからずに見つけ狙われずに狙い攻撃させずに攻撃し殺されずに殺したり、罠をこれでもかと張り巡らせて相手の顔を拝まずに陥れたり。そんな、個人が強くなくても、或いは強くても解決できない事を解決するには『本当の強さ』が必要だ。【力だけが本当の強さじゃない】【己を許し本当の自分を認める者……それこそが本当の強者だ】ルネ、君は強くなった。だとしても、隣にいるヴァレリーの事を忘れてやるな。君の心も体も癒した彼女の持つ『優しさ』を、君は踏みにじらないでやってくれ」

「積極的に踏みにじっている人が言わないほうがいいと思いますよ」

レオナルドの冷静な突っ込みを受けて、朗らかに笑う顔の無い男。やはり突っ込み待ちだったらしい。

食事を続けながらも、それでもルネは不満そうな顔をしている。反論したいが、上手く言葉にならないようだ。

ヴァレリーは顔のない男に感銘を受けつつも、レオナルドの言葉が真っ当すぎて返事に窮している。

確かに、自分ひとりが優れた治療用神器を持っていても、それでは限度がある。皆が使用できるようになれば、それが一番だ。

「……まあ、ヴァレリーに関しては言われるまでもないよ。そんなこと、分かってる。でも……ズルイね、アンタは。私は、レオナルドと

違って上手く反論が出来ないけど、でもアンタの言ってる事全部に賛同は出来ない」
「それでいいのさ。実際のところ、君はヴァレリーを忘れなければそれでいい。一番大事なことを間違えなければ、何度間違えてもやりなおせるさ。だからルネ、君は自分の考えに賛同なんかしなくていい」
「一番大事なことを間違えっぱなしの人が言うと説得力がありますね」
「いいこと言ってるんだから、あんまり茶化すなよレオナルド」
「どうにも、前にもまして丸め込もうとしていませんか？」
「違うさ、このままだと逆に暴走する。ヴァレリーも君も、それが分かっているようには見えなかったからな」
その言葉に、三人は硬直していた。
見透かされている。見抜いている。見通している。
この男の眼ではなく、洞察力。それが、余りにも群を抜いている。
ヴァレリーは更に感銘し、ルネは羞恥し、レオナルドは背筋が凍った。
確かに、前回は余りにも上手く行き過ぎた。ルネという少女の復讐は滞ることなく完璧に果たされた。だが、言われてみれば完璧が過ぎた。あの後、吐しゃ物を撒き散らして心身のバランスを崩したルネ。しかし、調子を取り戻した今の彼女は、一種の万能感を得ているのではないのだろうか。
少なくとも、彼女はこの英雄墓場を守る為なら戦えるといっていた。それこそ、顔のない男が相手でも。
勝ち負けはともかく戦おうという意気は、ある種彼女が殺した上級悪魔に通じる間違った強さである事は確かだ。
その芽生えを、彼は今この場で絶っていたのかも知れない。
底知れぬ闇を心に抱えているこの男は、何処までも遠くと未来を見ている。
「……少し話が逸れたな」
再び、手を動かしてスープを飲む顔のない男。
一気に飲むのではなく、口の中に少し留めて味を楽しみ、それから

飲み込んだ。
液体の中にはない食材の、その味が口内を暫く支配している。
美味しい。
それを口にすることなく、顔のない男はまた顔を上げて話題を修正する。
その三つの眼を勾玉模様に変えて。
「マンガやアニメでは、特殊な能力が存在しても大概戦闘に限定される。なぜかって？　話が複雑になって混沌とするからさ。さっき言った便利な能力は、制限を設けないと際限なく話が複雑になりうる。例えば『治す』という能力だ。ジョジョの奇妙な冒険では第四部の主人公が無機物さえ修復可能だったんだが、この能力を活かしてしまえば町に潜んでいる殺人鬼を一発で見つけることができたというのに、それをしなかった。思いつかなかったのかもしれないし、それをやったら話が破綻するんであえて無視したのかもしれない。だとしても、実際にやったらそれまでだよなぁ。なんというか、読者がそれに気付くと一瞬で作中人物がバカに見えてしまう。野暮な話だと思うけどね。似た話で、移動速度がある。聖闘士星矢では戦闘中頻繁に音速だの超音速だの光速だので戦闘しているが、戦闘中以外は飛行機で移動したり徒歩で移動している。音速は当然のこと、超音速で移動できるんだったら大概の距離は一瞬で移動できるよな。そのあたり、説明が一切ないんでもやもやしたもんさ。……で、今回の作戦はそれを演出としてではなく便利な機能として捉えて利用するわけだ。だからルネ、君には安全な役を回す。前回と違って今回の主役は自分だ。白龍皇、ヴァーリ・ルシファーにも会わないといけないし、凄い危険だからな」
須佐能乎と赤龍帝の砦。その双方を用いて、アグレアスを覆い移動する。
そして、その速度を生かして国境線をまたぎ、悪魔と堕天使を食い合わせる作戦。
「読まれずとも良し、読まれてなお良し。敵の戦艦をぶんどって自分

のモノにする『孤影再び作戦』は万全だ」

兵は拙速を尊ぶ。速度を演出ではなく作戦に組み込むこの男は、勝利を確信し笑っていた。

心のどこかで、失敗すれば面白いと思いつつも。

『……というのが、ファルビウムの予測だ』

沈痛な面持ちで、サーゼクスはアザゼルにそう伝えた。もちろん、機密通信を用いてである。

そして、その内容は極めて深刻な内容だった。もしも、その作戦が仮面の男の作戦そのものであり、かつそれが本当に成功した場合、堕天使にも深刻な影響がある。

そして、それは回りまわって天界へも影響するだろう。絶対に避けねばならない事態であると同時に……避け様のない事態でもあった。

「間が、悪すぎるだろうが！　ファルビウムもそうだが、仮面の男はどれだけの天才なんだ!?」

思わず、アザゼルは頭を抱えた。問題は、もはや単なる窃盗対策テロ対策では留まらない。これはもはや、政治の領分、国家戦略にさえ突入している。

「和平を早めるか……いや、無理だ。前回のアレで、堕天使も天界もお前等を侮ってる！　このまま当初の予定通り条約を結べば、それこそ暴動が起きるか」

良くも悪くも、三勢力のトップは戦争をできるだけの余力が無いと認識している。だがそれは、国家単位で国民一人一人が納得しているわけではないし、むしろ全く逆の感情を抱いているものが殆どだ。

加えて、悪いことにそれこそ殆ど意見が統一している堕天使を除いて、悪魔も天使もエクソシストたちの殆ども、上層部にさえ互いと戦争をするべきだと固執している面々が多い。

まして、悪魔の権威が失墜している今この状況で、対等に近い形で和平を結べばそれこそ大問題である。

そして、ファルビウムは悪魔内での反攻勢力を一掃するために、仮面の男を利用するつもりでもあった。もちろん、それは今後一切転生悪魔を生み出せないという事でもあったのだが。

『……すまない、アザゼル。せめて、私の目の前の現れたとき、排除するべきだった！』

「その時は、逃げていただろうさ」

そう、それが最大の問題だ。相手は物腰が軽く逃げ足が早すぎるし、サーゼクスは強力だが、それだけでしかない。少なくとも、まったくの異次元空間に時間ごと隔離されてしまえば、空間を破壊する頃には終末が訪れているという可能性さえもある。

つくづく、とことんバカにしてくる相手である。正々堂々とか卑怯千万以前の問題で、仮面の男は勝つつもりさえない。

魔王サーゼクスを如何にして倒すか、などとは毛ほども考えず、戦わずに全力でただ嘲る男。

自分の名誉など一切度外視して、ただ相手の名声を地に落す。トリックスター、にしても度を超えていた。

「……とはいえ、天界も神滅具の所持者を特定できていない。絶霧の使い手も、期日までに見つかることはありえないだろうよ」

『……堕天使は、どう対応するつもりか教えてくれ』

そう、そこが問題だ。ことは堕天使にも関わる、アザゼルにとっても他人事ではないのだ。

故に、アザゼルとしても対策を求められるところだった。もちろん、ファルビウムが悲観的な未来を描いているのかもしれないが、そうとはとても思えない。

仮面の男は、それだけの事をするだろう。

「……すまんが、こちらとしても戦力を投入せざるを得ない。ありえないことではあるが、最悪アグレアスを撃墜する」

『……そうならないように、こちらも全力を尽くす』

全力を尽くす。その言葉が、甚だ心もとない。悪魔の全力等、つい先日地金を晒したばかりだ。

国家の問題に対して、国家の戦力が対応できていない。地方の有力

者から戦力を集めざるをえず、そして今後はそれも不可能になってしまった。

数だ、数が余りにも不足している。戦力に数えられるだけの人数が、悪魔は長期的に不足し続けている。それが解消する事は、当分ありえないだろう。少なくとも、数千年間は。

アグレアスが奪われれば、それが永遠にさえなってしまうかもしれない。

『……分かっていた事ばかりだ。ああ、こんな事は分かりきっていた事ばかりだ。だが、これでは、余りにも……』

「サーゼクス、落ち着け。気持ちは分かるが、嘆くな。まだできることはあるはずだ」

『ああ、その通りだ。まったく……なんてルシファーだ』

サーゼクスの自虐を最後に通信は切断された。執務室は静寂に包まれ、しかし沈痛な空気が拭われたわけではない。

サーゼクスの嘆きは、痛いほど分かる。なにせ、こちらもそうなのだ。仮面の男はこちらの強さの隙を暴いてくる。強さそのものは認めても、強い事で得られる利益を全面的に否定してくる。

「……ヴァーリに連絡を入れるか」

彼にも動いてもらう必要がある。たとえ彼が望む形ではなかったとしても、彼が戦わなくてはならない。

結局、この状況で自分がこの事件で死ぬ事は、政治的に大問題である。そう、そういう意味で仮面の男はこのタイミングで仕掛けてきたのだから。

「アグレアスをのっとって冥界を物理的に移動し、旧魔王派を満載したまま堕天使領土に突っ込んでくるだと?!」

ファルビウムの予知した最悪の作戦。それは、仮面の男の作戦そのものだった。

だが、だとしてもこの情勢下では、対策が全く取れない作戦でもあった。

もう一度ＴＥＮＤＥＲＮＥＳＳ　１

何が正しくて、何が間違っているのか。

思春期の面々が揃っているリアスとその眷属達は、『黄金風船事件』の一件以降修練に明け暮れつつも身が入らなかった。それは、ソーナ・シトリーとその眷属も同様である。

言ってしまえば、前回の一件は悪魔社会全体に浸透していた、あるいは蔓延していた楽観と平和ボケを一蹴するものだった。

現魔王は強い、その眷族は強い。レーティングゲームのトッププレイヤーは強い。彼等さえいれば冥界は安泰だ。

レーティングゲームは実戦を忘れないための、貴族のたしなみである。

悪魔の駒は、大戦で失われた軍勢を補うための、少数精鋭のための優れたアイテムである。

全部、幻想だった。吹けば飛ぶような、ありもしない幻想だったのである。少なくとも、国体を維持するには余りにも微力だった。人間が四人揃って、強力な兵器を運用しただけであっさり破綻するような代物だった。

リアスとソーナ、冥界の未来を背負うであろう魔王の妹達は、しかしそもそもそんなモノが存在するのか。そんな根本的な疑問さえ抱くようになってしまったのである。

そして、悪いことにそれは、魔王達も危惧している現実味を帯びた未来だった。

「……先日、冥界のシトリー領に帰還するように実家から要請がありました。貴女もそうではないですか、リアス」

「ええ、その通りよ。お父様とお母様から眷属をつれて帰還するように、と指示されたわ」

駒王学園の生徒会室で、リアスとソーナは神妙な面持ちで語り合っていた。

人間界から、冥界へ帰還するように当主から指導されたからである。

リアス・グレモリーの眷属の一人であるギャスパー・ヴラディ。彼と境遇を同じくしていたヴァレリー・ツェペシュが、仮面の男の部下として隷属している。

どうやら仮面の男は身内にはそれなりに配慮するらしく、ヴァレリーの弟分であるギャスパーと、その保護者であるリアスにはそれなりに敬意を表していた。少なくとも、リアスの兄であるサーゼクスほど辛らつには論破しなかった。

こんなことはありえないが、彼の身内の身内であるギャスパーには人質としての価値があるのだ。もちろん、そうやって彼を利用しようとすれば、仮面の男は大喜びで彼を悪魔の手から『奪還』するのだろうが。

空間跳躍能力を赤龍帝の力で強化している上に、死者蘇生を可能とする聖杯まで保有している仮面の男である。はっきり言って、どうやっても人質にはならない。そういう意味でも、ギャスパーの立場は安定していた。

ただ、それは悪魔から見た場合である。他の陣営からしてみれば、リアスが狙い目であることに変わりはない。

それに次ぐ形で、ソーナも候補にはなりえるのだ。少なくとも、他の陣営から見れば。仮面の男とは何の関係もなくとも、弱体化が顕になった悪魔の、そのトップの妹なのだから。

「……私は帰るわ。眷属たちも、日本とのしがらみもないしね」

リアスの眷属は、良くも悪くもリアスの眷属である事以外に世間との関係性は薄い。少なくとも、友好的な家族がいるというわけではない。

よって、帰ってこいと言われれば、心情的にはともかくあっさり帰ることも可能だ。

「……私は残ります。生徒会としての業務もありますから」

反面、ソーナはそうも行かない。彼女の眷属には、この日本で生活しているものも多く、容易に全員を連れて帰るわけにはいかないのだ。

加えて、これが一時的な措置なのか継続されるのか。未だに不透明

である。いや、そもそも……この日本に存在している悪魔の縄張り、それそのものが維持できるのかさえ怪しいのだが。

「……ねえ、ソーナ。私達はどうすればいいのかしら」

「わからないわ」

リアスには夢がある。それはグレモリーの当主として領地を良く治めるという義務だけではなく、レーティング・ゲームのタイトルを手にするというものだった。

ソーナには、より大きい夢がある。それは、レーティングゲームのプロプレイヤーを要請する学校、それも下級悪魔や資質の劣る悪魔を受け入れる学校を設立するというものだった。

どちらも、社会的に間違っているものではない。リアスの場合は言うに及ばず、ソーナの夢もまた、貴族から見れば笑われるような大望だが、需要は確実に存在している。

だが、先日の仮面の男は『悪魔社会』そのものを否定した。

そんなものには、何の価値もないのだと批判したのではない。全くの無価値であると証明してみせたのだ。

単純な物量作戦、それだけで彼女達が信じていた悪魔社会は完全に敗北した。

もし仮に、リアスとその眷属が全員魔王クラスの実力を得て、レーティングゲームのプロプレイヤーとして名を売っていたとしよう。それでも極めて単純に、領地を襲撃されれば義務として彼等を、何の罪もない『遺族』を見捨てるしかない。

ソーナも同様だ、いやもっと深刻だった。もし彼女の望みが完全に成就していた場合、つまり下級悪魔がゲームで実績を積み上げて上級悪魔と成り、あの遺族の保護に参加していた場合、あの保護施設に残らされていただろう。

そして、討ち死にすればまだ良いほうだ。何の抵抗も出来ずに放置され、遺族を目の前で殺されていた可能性さえある。そして、その場合彼等は責任が取れる一人前の悪魔として、責任を取らされ、処刑されていただろう。

成り上がりの、上級悪魔。責任を取らせるにはいかにもうってつけ

である。だが、ソーナはそんなスケープゴートをさせるために、学校を造ろうとしているのではない。

悪魔が生贄の羊を差し出す、というのも一種の皮肉ではあったが。

少なくとも、今回ハッキリした。この場にいる二人と、国民全体の憧れでもあったレーティングゲームのトッププレイヤーは、現魔王は。

有事には何の役にもたたないということだ。

「……私がお兄様と同じくらい強くなっても、結局意味なんてないじゃない」

「……それは、違うわ」

言葉では、ソーナは否定する。だが、内心では否定できなかった。

実際のところ、リアスが超越者ほどに強くなっても、戦術的にはともかく戦略的な価値は皆無である。

数、そう数こそが問題だ。結局のところ現政権が少数精鋭、という形で補おうとした人口の減少という問題は、しかし全く補えていないということが明らかになっただけである。

少なくとも、仮面の男の一味が同じことをもう一度すれば、又同じ醜態を晒すだけであろう。

そして、それは別に、他の勢力でも十分に再現可能である。ただ、数に任せて全土を襲撃すればいいのだから。その場合、仮面の男のように悪戯ではすまないことは確実だった。

彼女たちが『教科書』で呼んで知っていた、悪魔を含めた聖書の陣営。それがいままで行ってきた侵攻が、より苛烈に行われるだけである。

「……でも、私は分からなくなってしまったの。信じていたモノが、壊れるのってあっけないのね」

「もう一度……皆が信じられるように頑張るしかありません」

ソーナは、そう語る。しかし、それは殆ど不可能だ。少なくとも、今のソーナには不可能である。

彼女自身、信じていた地盤が根こそぎ破壊し尽くされた。それこそ、文化文明そのものの破壊である。

それで、平然と新しい価値観が造れるほどには、彼女は柔軟ではなかった。

そして、それは彼女だけではない。既存の価値観、既存の社会を生み出したサーゼクスをして、同じ苦悩を抱えていた。

そもそもこの社会制度になったのは、生態としての限界、生命体としての限界である。寿命が長く、数が増え難い。たったそれだけの理由で、悪魔は窮地に立たされていた。

これに、この場の彼女達の知らない『神の不在』も加わるのだが、それは又別の話である。

「だけど、どうやってアレに対処すればいいの？」

「それは……」

「どんなに強くても、頭がよくても、誰にもただ過ぎ去るのを待つことしか出来なかったじゃない」

サーゼクスが突然弱体化したわけではない。ファルビウムやアジュカの頭脳が劣っていたわけではない。

単に数をそろえて広範囲を攻撃するという、基本的過ぎる作戦に誰も対処できなかった。数が足りない、それだけで。

「……他の陣営と協力すれば、あるいは」

「……どの道、強くなっても、賢くなっても意味なんて……」

悪魔は、独力では自国さえ守れない。その事実に、二人は打ちのめされていた。

なんて、情けない。

「まだ、手遅れではないはずだ」

サーゼクスがそう言ったのは、一種の悪あがきだったのかもしれない。

だが、それでも魔王足らんとしている彼の、彼のすべき事ではあった。

嘗て、前魔王が聖書の神と刺し違えて以降、悪魔は真っ二つに分かれて内戦となった。

兵力の過半が喪失し、人口が激減したとはいえ首脳陣がそのまま残っていた堕天使陣営の傷が最も浅かった。

聖書の神が死に、その結果新しい天使生まれなくなったとはいえ内部ではまとまっていた天界。

それらに比べて、悪魔は内部の抗争によって大いに勢力を減らしたといえるだろう。それでも対等に近い形で他の2勢力と対等に近い形でわたりあえているのは、現魔王を含めて次世代の強力な悪魔が誕生しているからといえる。

だがそれでも、旧魔王の遺児たちとの亀裂は埋めがたかった。

言ってしまえば失策だったのかもしれないし、あるいはやむをえなかったのかもしれない。

そもそも前魔王のやり方を引き継ごうとした旧魔王派と、そのやり方を否定しようとした現魔王派で、話がかみ合うわけが無い。

旧魔王派の意見を尊重できるのであれば、そもそも現魔王派が内戦等するわけが無いのだ。

だが、それでも。

同じ種族である彼等と、対話で解決ができるのであればそれが一番だった。

「旧魔王派と、交渉がしたい」

「……いいよ、好きにしなよ」

サーゼクスの発言を、呆れつつもファルビウムは肯定した。完全に、無駄であると分かりきった上で、或いはそう思った上での肯定だった。

だが、それでも許したのは、物事の順序から言えばそこまでおかしくはなかったからだろう。

実際のところ、もし万が一にでも交渉が成功すれば、それだけでアグレアスは確保できる。加えて、仮面の男の一派を拘束できる可能性さえあった。

だが、通常の『万が一』という言葉が実際には全くありえない、という意味であるように、ありえなかった。

仮面の男の『心』を読む力は極めて正確であり、また当人もそれを

確信している。それは客観的な事実でもあった。
旧魔王、堕天使、現魔王。その『敵対関係』は仮面の男の脅威などが問題にならないほどに、深く、長い。単純に、流血の量が違い過ぎるのだ。
また、仮面の男の一派がどれだけの力を持つとしても『犯罪者』であるのに対して、悪魔と堕天使は『敵国』の関係である。
両国の首脳陣がどれだけ利で結びつこうとも、民衆や貴族に根付いた情は立ち消えるものではない。
だからこそ、旧魔王派へ反攻予告する事によってアグレアスの護衛から現魔王派を排除し、更に旧魔王派を堕天使に排除させる作戦は極めて合理的だった。
何が合理的なのか、作戦の全てをファルビウムが察しても、それを両国が極めて重く受け止めても、それでも何も出来ないという点が、だ。
現魔王は公的施設であるアグレアスの使用許可を、仮にも国民である旧魔王派を相手に一方的に棄却できない。
堕天使は仮面の男の策略であると分かっていても、敵国の軍勢である旧魔王派を乗せたアグレアスに対処せねばならない。
そして、旧魔王派は堕天使の領地に突っ込むと分かっていても、前魔王の意思を継いでいる彼等は他の勢力に力を借りることが出来ない。
三者の対立を、微妙な力関係を利用しきった妙手は、つまり旧魔王派が他を頼ってさえくれればそれだけで解決できる。
だが、それだけが、それだけが果てしなく不可能だった。
「無駄ではない、な。だが、交渉というからにはなにかを差し出すのだろう。それは、なんだ？」
「魔王の椅子だ……最悪、私の妻の首も、差し出す」
沈痛な面持ちで、サーゼクスは他の魔王に告げた。それを聞いても、セラフォルーを除いて反応は薄い。
なるほど、情に厚いサーゼクスにしてみれば辛い決断だろう。だが、それがそれだけの意味を持つとは考えにくかった。

「和平が済み次第、私達全員が一度退陣し、魔王を選びなおす。その折に旧魔王の派閥から二人を選べば……」

「あ、あのさ！　でも……私はともかくサーゼクス君の代わりなんて、いないよ？」

その、セラフォルーの尤もすぎる言葉を聴いて、サーゼクスは拳を握り締めていた。

最強の魔王、サーゼクス・ルシファー。その勇名を、前回は逆手に取られた。そして、今回もそれが足かせになっている。

あの、仮面の男の『世界そのものへの憤怒』を込めた言葉が蘇った。

実際のところ、サーゼクスはルシファーを名乗るに足る実力者であり、政治家としての能力も、カリスマ性も支持率もいい。

だが、それ故に前回は遺族の元を離れて首都に戻らざるを得なかった。サーゼクスは優れた人格者ゆえにルシファーになり、であるが故にいなければ不安を加速させる事になった。

それ故に今回退陣を躊躇されている。

全く、彼の言ったとおりだ。自分が最強でも、最強であることが何の役にもたっていない。

そして、彼の『世界そのものへの憤怒』は、この世界の統治者の一人である自分にとって人事でも何でもない。

この世界の不条理の一端は、間違いなくサーゼクスという魔王に責任があるのだから。

最強の悪魔こそ、魔王にふさわしい。そんな価値観を、そのまま維持してしまった自分の責任だった。

レーティングゲームを推奨し、少数精鋭を謳った自分の責任だった。

優れた『個人』に依存する社会制度、個人がいなくなれば成立しなくなるシステムを構築した彼の責任だった。

「サーゼクス、それは無謀だ。言いたくはないが、旧魔王の陣営で魔王を名乗るに足る『人材』はいないよ」

「お飾りでもいい、神輿でもいい、なんて奴はいないよ～～。第一、他の勢力との協定だって彼等は許すかどうか～～、ね？」

アジュカとファルビウムは冷ややかだった。サーゼクスにしてみれば全てをなげうつに等しい譲歩ではあるが、この状況下では何の意味も持たない。

実際のところ、個体差の大きい悪魔を統べるには相応の実力が求められ、旧魔王の派閥でそれができるのは皮肉にも、裏切って久しいサーゼクスの妻ぐらいであろう。

また、聖書の陣営が一丸となろうとしている今、前魔王のやり方を引き継ぐであろう旧魔王派を魔王に据える事はできない。据えたとしても国益のために、その意見を無視せざるを得なくなる。

そもそも、今の今まで旧魔王派を無視してきたのは、要職から排除してきたのは、単に彼等にその能力が無いからである。時代錯誤な彼等を引き入れれば、無用な混乱が発生するだけである。

それを、今更このタイミングで引き入れるなど不可能であった。三陣営が手を組んで外交を結んでいく、新しい時代には彼等の乗る船はない。

「だが、このまま内憂を抱えていても、どの道破綻するだけだ」

サーゼクスは悟っていた。仮面の男の手口は、つまり物理的な弱点ではなく心理的な忌避を利用するものだ。アジュカ風に言うのであればそちらの方がスマートだと思っており、ファルビウム流に言うのであればそちらの方が美しいと思っているのだ。

それ故に、慢心している。それ故に、黄金風船のような『小ばか』にしたような作戦を展開する。

だからこそ、前回だって開き直って自分が残っていれば、彼等の作戦を妨害できた。国民にパニックが起きて、その結果犠牲者が出ようとも、或いは自分の支持率が急落しようとも、それでも残っていればよかったのだ。少なくとも、遺族だけは救えたのだ。

だが、今回は違う。まだ、まだ間に合う。

自分が旧魔王派に歩み寄れば、或いは彼等も歩み寄ってくれるかもしれない。

「できることは、全てしたい」

その判断は、最強の悪魔の判断ではなかった。たった一人の、自ら

の無力を認めた政治家の苦し紛れの苦渋に満ちた決断でしかない。
だとしても、『最強』の放棄こそが仮面の男の奸智に対する唯一の手段である。そう信じたサーゼクスは、たった一人の男として会談に臨むつもりだった。
それは、言ってしまえば悪魔の根源的な価値観、そのものへの反逆でもあった。
勝者であり、強者。勝利者であり、支配者。魔王にふさわしい実力者が、政治的な合理的判断によって退陣する、敗者に頭を下げる。
実力主義、成果主義などという『非合理的』な悪魔のあり方への、反逆であった。

だが、遅かったのかもしれない。遅すぎたのかもしれない。
少なくとも、まだ国家への反逆者にはなっていないシャルバ・ベルゼブブは、この提案を聞くや否や怒鳴り散らしていた。
今更、自分達のことなど忘れていたかのように無視をして、仇敵と和平を結ぼうとしていた現政権が、前魔王の遺産を守るために戦おうとしている自分達に何の用があるというのだ。
彼の怒りは正当であろう。短くとも数百年単位でいなかったこと扱いにされていた旧魔王派の、その尊厳を冒涜している提案だった。

だがもう一人の重鎮、クルゼレイ・アスモデウス。どのような意図があるにしても彼は、サーゼクスとの密談に応じていた。
この会談が成功すれば、或いは仮面の男の慢心は叩き潰されるかもしれなかった。

問題があったとすればそれでも別に、仮面の男の本当の目的は全く妨害できないという事だったのだが。

ギャスパーは、旧校舎で引きこもっていただけのギャスパーは。
それこそ、強すぎる自分の神器が他人を傷つける事を恐れていた、臆病を絵に描いたようなギャスパーは、それでも犯罪者に加担し悪魔社会全てを敵に回そうとしていたヴァレリーを必死で止めていた。
それでも、ヴァレリーは如何なる迫害にも屈しなかった博愛の精神ゆえに、頑として譲らなかった。
『私は、ルネを助けるって決めたの。可哀相な彼女の、体と精神だけじゃなくて未来も助けるって、決めたのだから』
それは、ある意味では彼女自身の成長を意味していた。
仮面の男との会話、そしてルネとの触れ合い。それらが彼女に誰かを助ける事の難しさと苦痛を教えていた。
悲劇にみまわれた人を一人助ける事、その困難さを気付かされたのだ。
人間が必ずしも美しくないように、人間を救う事もまた必ずしも綺麗なものではない。そして、それは人を救うことをためらわせるものではない。
『だって、悪魔には強い人が沢山いるんだよ!?　吸血鬼よりも、ずっと沢山！』
『あの人は、三つ目様は誰にも負けないわ』
ギャスパーの懇願を、ヴァレリーは悲しげに否定する。それは、勝利を確信しつつも肯定的に捉えているものではなかった。
仮面の男、その力の根幹が心の闇にあると見抜いた彼女は、その強さに絶望さえ感じていた。
『だって、あの人の心の闇は余りにも深すぎて、あの人自身にさえ抑えきれていないもの』
強くなりたいと、そう思うほどに勝利できるのであれば。
優しくしたいと、そう思うほどに救済できるのであれば。
誰よりも激しい感情を抱いている彼に、一体誰が勝てるというのだろうか。

綺麗事を地に落したい、そう思っている彼の感情の凄まじさは尋常ではない。それこそ、敗北を想像できなくなるほどに。

『ギャスパー、私は昔貴方を救うどころか放り出してしまったわ。貴方を救ったのは、私ではなくてリアス・グレモリーでしょう?』

『違うよ、ヴァレリー!』

『いいえ、違わないわ。私は、他人を傷つけることを恐れるだけで、戦おうとしなかった。それが、貴方を一度とはいえ殺してしまった……』

ヴァレリーが欲した平等な社会、それはつまり支配者階級への反逆であり革命である。

下級の者を押し上げれば、当然相対的に上級の者の地位は落ちる。それを肯定的に捉えるものは少ないだろう。

差別の是正、それは決して容易い事ではない。そして、そんな彼等を一番手っ取り早く救うには、それこそ全員を常世へ誘うことぐらいであろう。

それを、いともあっさり、物のついでに成し遂げたのは、仮面の男の異常な性格によるものだ。

少なくとも、全く生産性の見込めない被差別階級を、大量に連れ込む等普通ではない。例えそれが聖杯を宿すヴァレリーを取り込むためだったとしても、だ。

『ギャスパー、話し合いはとても大切よ。相手を理解する事はとても大事よ、それはルネと友達になれて、良く分かったの』

人に思いを伝える事は、或いはそうしようとする事はとても大事だ。

そして、分かり合えることはとても嬉しかった。

ルネはヴァレリーに救われたが、ヴァレリーの精神の安定にルネが無縁とは思えない。

『だけど、それでも分かり合えなければ、戦うしかないの』

ルネは、決断を下した。その彼女を助けると、ヴァレリーは決断していた。

ルネは誰かに誘導される事なく、捻じ曲げられた情報を与えられる

ことなく、故郷を焼き払った職員の、その遺族を『ぶっ殺す』と決めていた。

　であれば、それに殉ずる覚悟がヴァレリーにもあった。

『駄目だよ！　ヴァレリーは戦っちゃ駄目だ！』

『そうね、負けるかもしれないし、死ぬかもしれない。成功したとしても、人を殺したという罪は消えないわ。だとしても、私は彼女を最後まで支えたいの』

　これから行われる所業を、一種の害虫駆除だと断じる事はできる。人畜に被害を及ぼした害獣を殺し、更にその巣をも焼き払う。それは、それなりに正しいことだろう。

　だが、少なくともヴァレリーの認識は違っていた。

　これから行う事は報復であり復讐であり、つまりは殺人であり犯罪であり虐殺であると。

　それでも、優しいはずの彼女がその優しさゆえに加担する。それは一種の成長と呼べるものだった。

　少なくとも、祈るばかりで嘆くばかりで誰一人救えなかった時代に比べればよほど、である。

　そして、ヴァレリーの語ったとおり、仮面の男はいともあっさり報復を成功させていた。リアス・グレモリーの信じていた全てを打ち壊して、ヴァレリーの期待に応えていた。

　ある意味では、ギャスパーを保護したリアス以上に、ヴァレリーを確保した仮面の男は混血吸血鬼の待ち望んでいた男なのだろう。

　社会の風潮など笑い飛ばし、積極的に世界に挑む変革者。既存の常識を打ち壊し、新しい時代を生む革命家。

　つまりは、未来だとか希望だとか明日とかではなく、『今この場で』自分達を救ってくれる人だった。

「でも……やっぱり間違ってるよ」

　ギャスパーは、旧校舎の中で引きこもっている彼はパソコンを前にそうつぶやいていた。

　仮面の男は、あまりにもやりすぎている。ネットで得られる情報が

全て正しいわけではないと、不幸にも実際に知っているギャスパーではあるが、それでもパソコンで得られた情報の範囲でさえ悪魔社会が受けている被害は甚大だった。

先日の『黄金風船事件』以降、明らかに他勢力との小さな接触が増え、被害がじわじわと拡大している。加えて、そもそもあの事件そのものでも多くの損害が発生していた。

誰かが幸せになるために、誰かを不幸にすることが正しいと、ヴァレリーには言って欲しくない。彼女には陽の当るところを、できれば自分と一緒に歩いて欲しい。

少なくとも、彼女は人を傷つけて喜ぶ人ではなかったはずだ。今も苦しんでいるに違いない。

「だけど……どうすればいいんだろう」

例えば、自分が神器を自在に操れたとしても、或いは吸血鬼の能力を十全に行使できても、もしくは『甚だしく強力な能力』を制御できたとしても。

それでも、ヴァレリーを確保している、仮面の男をどうこうできるとはとうてい思えない。

自分同様に強大な能力を持ちながら、しかし完全に制御し、加えてこの世の何物をも恐れぬ勝利者に、自分如きがなにができるというのか。

自らの強大な資質に振り回されてばかりのギャスパーだが、少なくともその思考だけは萎縮しているが故の卑屈な結論ではない。それはその答えはギャスパーだけではなく誰もが持っていないのだ。

それ故に、彼は悶々としたものを抱え込むしかなかった。

「……今日は、ここまでにしましょう」

リアス・グレモリーの『騎士』木場祐斗は生み出していた魔剣を消失させ、訓練を打ち切った。誰もが、身が入っていないことが明らかで、それでも今まで続けていたのは、他にすべきことが見つからなかったからだろう。

そう、仮面の男の言葉は催眠術や洗脳でもなんでもなく、ただそのままにリアスの眷属に迷いを与えていた。

少なくとも、木場祐斗にとってルネの復讐は人事ではない。もちろん、論理的に言えば『研究所の職員』はともかく、その遺族を殺すのは間違っていると思う。だが、悪魔の法で考えれば『研究所の職員』さえ、殺していい道理はない。

そういう意味では、木場祐斗にとってもルネの行いは否定しきれない。感情と法律の乖離が存在するという意味では、彼女も己自身も同じなのだから。そして、感情と法律のどちらを優先するのか、それさえも今は定かではない。

リアスは言っていた、今からでも止めろと。それが彼女のためでもあると。

自分はどうだろう。少なくとも、今の自分は幸せだと思っている。だが、復讐を諦めているかといえば、それも違うのだ。

少なくとも、自分がリアスにではなく仮面の男に拾われて、復讐の機会を与えられていれば。いや、今この瞬間に目の前に現れたとしたら。

（ありえないわけじゃない）

自分達に非道な行いをした研究者を、己自身の手で『ぶっ殺す』。それはなんと甘美な誘惑だろうか。

果たしてそれは、大恩あるリアスに迷惑をかけると知っていても、尚断りきれるのだろうか。

即断即決などありえないが、迷っている事も確かだ。

リアス・グレモリーの庇護下にあって、彼の心の闇は拭いきれずにいたのだから。

塔城小猫は、俯きつつも無言で頷いていた。

実際、迷ったままでは稽古など危険なだけである。

そして、彼女の悩みは殊更に深刻である。

血の繋がった姉が、主となった上級悪魔を殺して逃走した。ルネの理屈で言えば、その上級悪魔の親族から見れば自分も復讐の対象であ

る。

いや、実際のところそうなりかけていた。今は、単に魔王の妹であるリアスの眷属になっているというだけで。魔王の権威に守られているだけで。

もしかしたら、体面を重んじる上級悪魔としては、眷属に殺された身内等恥でしかないのかもしれない。そういう、一種の感傷的な理由で自分を殺そうと思っているわけではなかったのかもしれない。

だが、そういう感傷的な理由で自分の命を、それこそ『加害者の妹』である自分を殺したいと思っている遺族がいないとも限らない。

いたとして、自分はそれを否定していいのだろうか。法的に正当性があるとはいえ、返り討ちにしていいのだろうか。

どのような理由があったにせよ、自分の姉は自らの意志でヒトを殺している。自分のたった一人の、血のつながった姉がだ。

もちろん、自分の命を差し出すつもりはない。だが、自分を襲った誰かを、筋違いだと蔑むことはできない。

自分は魔王に守られている。だが、それはただ安全圏にいるというだけで、別に自分自身に向けられている悪意が煙のように消えてなくなったわけではない。

未だに姉は指名手配中であるし、そもそも上級悪魔が一人死んだという事実は永遠になくならないのだから。

もし仮に、上級悪魔に下種な考えがあって、黒歌がそれを察知して先手を打ったという事実が存在したとしても、そもそも一般的な悪魔にとって眷属とはそういうものである。生まれが下賤な妖怪であれば尚のことだった。

人間の理屈でも殺すのは確実に過剰な行為であろう。殺す前に妹を連れて逃げればいいのだから。

もちろん、それが出来ない状況というものは、当然存在するのだけれども。

「そうね……」

普段は余裕があり、艶のある笑みを浮かべる姫島朱乃も、例外では

ない。
結局のところ、一番理不尽な理由で他人を恨んでいるのは朱乃でもある。自分でも、思うところが無いでもない。であれば、その葛藤は深刻だ。
彼女の実父は、つまり堕天使の幹部は今回の一件で命を落しかねないのだから。

「一体何を考えている?!」
シャルバ・ベルゼブブは、同志であるクルゼレイ・アスモデウスに怒鳴り付けていた。
その原因は明らかである。すなわち、サーゼクス・ルシファーからの密談を受けたことそのものに、腹を立てているのだ。
現魔王がなにを何処まで把握しているのか、それは分からない。だが、少なくとも旧魔王派は意思統一が既になされている。即ち、もはや叛乱するしかないと。
そんな状況下で、旧魔王派の主要メンバーたるクルゼレイが現魔王のトップ、サーゼクス・ルシファーと密談する意味。それは結束を揺るがしかねないものだった。
アグレアスでの決戦に向けて綿密な打ち合わせを行っていた面々は、まさかこの期におよんで我等を売るつもりなのか、と動揺が走っていた。
だからこそ、個人的な感情を抜きにしてもシャルバの怒りは極めて正当だった。
「落ち着け、シャルバ。考えてもみろ、今うかつに現魔王へ口実を与えれば、それこそ何もかもが台無しになりかねないのだぞ。我等の決起はまだ現魔王に知られてはならない、であれば、形だけでも会話をする必要があるだろう。それとも、我等が二人して断って、それを理由にしてアグレアスの予約を解消されては、目も当てられない」
しかし、冷静かつ論理的にクルゼレイは返答した。
確かに、内部の組織としての感情を考えれば軽挙であろう。だが、

外部からの疑いの眼を考えれば、それもやむをえない。
もし仮に、アグレアスの使用にかんして延期にでもされようものならば、カテレアの奪還さえままならなくなる。
こんな言い方はおかしいが、クーデターに比べれば小事とはいえ、前政権の遺産であるアグレアスを窃盗される事を、予告されながら防げなければ士気に関わるのだ。
そして、それは旧魔王派だけで成さなければならない事でもある。断じて、他の如何なる勢力の力も借りず、独力で成して初めて意味があるのだ。
人間の犯罪者風情を、追い返せずしてなにが真の魔王か。もはや、意地の問題となっているのだ。
「ぐ……」
「安心しろ、どの道今更私にも退路等ない。それは貴公も良く分かっているはずだ」
「だ、だが……」
「カテレアを奪還したいという思いは、誰よりも強い。それは知っているはずだろう」
シャルバがかくもこだわるのは、ベルゼブブの血を継ぐものとしてルシファーの名前を名乗るものへ劣等感があるからだろう。あの挑発は、彼にこそもっとも効果が合った。
私情と言えば私情だが、クルゼレイにも私情はある。情にこだわる相手には、情で訴えるのが一番納得させやすい。
「……分かった。私からも、他には伝えよう」
「ああ、頼んだぞ」
「しかし、それだけか？」
シャルバは、納得しかねているのか更に問い直した。
やけに、クルゼレイの冷静が過ぎるのだ。まるで、何かを覚悟しているかのようにさえ受け止められる。
「……思えば、我等は冥界から忘れられていた。ベリアルやバアルから次世代が台頭する中、真の魔王の血を継ぐものからは誰一人名を上げる者がでなかった」

「それは！　偽りの魔王どもが」
「いいや、違う。単に我等が不甲斐無いのだ。ただ一人、ヴァーリだけが可能性を持っていたが、奴は混血でしかない」
　認めたくはないが、分かってはいるのだ。結局のところ、『旧』魔王の子孫はこのまま沈殿して、誰からも思い出されることなく歴史の一部になるのだと。
　認めざるを得ないのだ、魔王の血を継ぎながら、しかし魔王にふさわしいだけの実力を持っていない自分達を。
　それこそ、超越者である二人を例外としても、魔王クラスとされる他の面々ほどの実力さえ無いのだから。
「……分かってるのだ、認めたくはないだけで。そして、認められないからこそこうして行動をするのだ」
　仕方が無い、といえば仕方が無い。個体差の大きい悪魔は、現場に出ず上に立つものであっても実力が必要であるし、自分達にはそれが備わっていない。
　自分達、というのは旧魔王派全員を意味しているところが、悲しいが。
「そうだ、であれば、なぜ？」
「その前に、偽りの、いや現魔王と話がしたくなった。それだけだ」
　それは単なる感傷でしかない。しかし、彼にとっては十分な理由だった。
　果たして、自分達に打ち勝った現魔王は何を考えているのか。何を目指して、今更になって自分達に声をかけたのか。それを知る機会は、おそらくこれを逃せば永久にない。
　故に、断固たる信念を持ちながら、クルゼレイは現魔王のトップと会談に臨むつもりだった。
　当然、それはサーゼクスにしてみれば望んだ心境ではない。しかし、歩み寄ろう、話し合おうと思ったこと自体は、決して嘘偽りではない。
「そして、もっと言えば……」
　もしも、現魔王がこちらの全てを知っていたとして。その場で自分

が処断されたのであれば。
いっそ、そうであれば。
――人間の犯罪者の罠にはまり、不名誉な最期で終わるよりは、現魔王に歯向かった反逆者として名を残した方がマシか。
そうした、余りにも後ろ向きな打算があったことは事実である。
「シャルバ、貴公は『仮面の男』だか三つ目だかを、我等だけで本当にどうにかできると思っているか？」
その問いに、シャルバは憤慨さえ覚えた。言った相手が同志でなければ殺していたかもしれない。
だが、その視線は余りにも真っ直ぐにこちらを捉えていた。故に、体が膠着して動けない。
「負けるとでも、思っているのか？」
「そこまでは言わん。だが、少なくとも我等の半数が落ちることは懸念するべきだろう。そして、首尾よくカテレアを奪還できたとして……我等の真の敵である現政権の打倒ができると思うか？」
言ってしまえば、愚かしい判断なのだろう。旧魔王派の面々にしてみれば、最初の段階から現政権に比べて圧倒的に戦力が不足している。その上、更に宣戦を布告する以前の段階で、既にしてカテレアを『盗まれ』たうえに、更に神滅具保持者四人と戦わなければならない。
勝って、それこそ何もかもを奪えればまだいいかもしれない。だが、その可能性は極めて低い。何せ、相手は現魔王さえも嘲笑う、腰の軽い犯罪者だ。旗色が悪くなったら早々に退くであろう。
そして、その頃にはどう頑張っても、こちらの戦力はがた落ちのはずだ。
「では、アグレアスを差し出せと？　このままおめおめと引き下がれというのか!!」
ある意味では、そうするのが最善なのだろう。クルゼレイはそう考えていた。
他の如何なる状況に、クーデターやらに現政権が気付いているのかは分からないが、少なくともアグレアスを盗む云々が知られていることは確かだ。

それを、向こうの陣営の『優秀な魔王様』が感づいたのか、内部からリークがあったのか、或いは仮面の男が教えたのか。それは分からない。

だが、盗むと予告した当日にアグレアスの現場にいた者が、仮面の男と正面から戦う事は確実だろうと踏んでいた。

つまり、今からでもアグレアスの使用申請を取り下げれば現魔王は勝手に陣取るであろうし、そうすれば仮面の男の一派は現政権と戦う事になる。

そうなれば、労せずして両陣営にダメージが及ぶだろう。

だが、そんな情けない作戦を、旧魔王派の面々が実行に移すわけが無いのだ。

「無論違う。だが、少なくとも私が死ぬ可能性もある。であれば、その前にしかるべき相手に伝える事もある。それだけの話だ」

仮面の男、その策は余りにも深く旧魔王派の咽元に食い込んでいた。

向こうはこちらの急所たる、尊厳を突いて来た。そうなれば、こちらはバカ正直に戦わざるを得ない。

たとえ、最善の策が思いつこうとも。たとえ、次善の策が思いつこうとも。

「我々は意地を通す。それだけは確約するさ」

当然だが、今回の一件を引き起こした張本人である仮面の男も、なにもかもを完全に把握しているわけではない。

むしろ、想定外の事態が起こることを楽しんでさえいる彼が、全てを把握しようと努力しているわけが無い。

そのあたりが、心理的な障害を戦略に組み込んでいる彼の隙と言えば隙だった。彼の作戦の肝は結局『政治的』な限界を利用したものではあっても『物理的』な限界を利用したものではない。

今回は、特にそうだ。旧魔王派の説得に成功すれば、最悪でもアグレアスが盗まれる事は避けられるだろう。

それはそれで、仮面の男が『本当の目的』を達成することの障害にはならないだろうが、悪魔社会にとっては、そして堕天使にとっては意味がある。もちろん、それが仮面の男が目標としている状況に持ち込まれれば、無意味に終わるとしても、だ。

とはいえ、今回の一件に限って全ての状況を本当の意味で理解しているのは、推理ではない確定情報を得ているのは旧魔王派の面々だけである。

現魔王の一派と連携をとっているのかいないのか、堕天使サイドのヴァーリとは既に密約を結んであるのかまだなのか、そして英雄派は本当にこないのか。

こうなっているのかもしれない、ああなっているだろう、と想像するのではなく、実際に情報を持ち判断ができるのは彼等だけだからだ。

故に、今回の一件で大局を握っているのは仮面の男ではなく、仮面の男からそれを悪意で託された旧魔王派のものでしかない。

現政権や堕天使が、どれだけの推理を重ねようとも。ファルビウムが語ったとおり旧魔王派が救援を求めなければ結局、動けはしない。

「まずは、この密談に応じてくれて感謝する。クルゼレイ・アスモデウ

ス」
「もったいないお言葉ですね、陛下」
　密談の席は、やはり魔王領とも旧魔王領ともちがう、番外悪魔の領地で行われていた。
　周囲は人払いがされクルゼレイの手勢の他には一人もおらず、現魔王サーゼクスは体一つでここに来ている。
　とはいえ、現魔王がその気になれば単独でもこの場の全員を痕跡一つ残さず殺すなど、容易い事なのだろうが。
　そのことに、やや苛立ちを感じるのは、自分が卑屈だからなのだろう。そう判断する程度には、クルゼレイは落ち着いていた。もちろん、それで苛立ちが消えるわけでもないのだが。
「前置きは結構。今は前回のテロからの建て直しや、天界や堕天使との協議でお忙しいはず。何ゆえ我等に、密談を持ちかけていらっしゃったのですか？」
　やや、間をおいて強く尋ねる。
「このタイミングで」
　それは、クルゼレイにとって絶対に外せない用件だった。もしも、自分達真の魔王の血族の決起が知られていれば、それは致命的になる。
　故に、そこを何よりも優先して尋ねていた。
　返答によっては、この場で無意味であっても矜持を示す所存だった。それは、この場の面々には伝えてある。
「……アグレアスで、集会を開くそうじゃないか。旧魔王派の、いや、前魔王の血族を集めて」
「それに、なんの問題があるのですか？　アグレアスはレーティングゲームの会場にも使われている、公共施設。それを我々が正規の手続きにのっとって集会を開く、おかしなことなどなにもない」
　クルゼレイは、内心やや落ち着いていた。どうやら、決起そのものは知られていないらしい。おそらくカテレアが失踪したタイミングと、アグレアスの使用申請の時期が重なったゆえであろう。

つまり、仮面の男からの予告を、推理ないしリークされたらしい。それだけならば致命的ではない。

「我等の先祖の嘗ての栄光の地で、一族を集めて集会を開く。それの何が悪いのですかな？」

「……カテレア。彼女の行方がつかめなくなった事と、今回の一件は無関係なのか」

「なんのことだか。彼女とは先日も打ち合わせをしましたよ。少し、体調を崩していましたがね」

もちろん、嘘だ。彼女を見たのは、あの衝撃的な挑発の映像が最後だ。いや、あれはもはやカテレアと呼ぶに値しない、なにかなのだろう。

心、精神、誇り、感情。そう言ったもの全てを書き換えられた彼女を、愛した女だとは思いたくなかった。

「……我等現政権は、君達前魔王の遺族を余りにもないがしろにしすぎていた。言い訳を言うわけではないが、我等は内戦で傷ついた悪魔を立て直すために、必死だったのだ」

「……」

「だが、今後は違う。もちろん、政治的に安泰というわけではないが、それでも今までよりは良くなるだろう。そして、時代は新しくなる。今後は、新魔王、前魔王の垣根のない社会や政治を作りたい」

誠意が篭っていた。誠意を込めていた。嘆願にも近い、切実さがあった。悲鳴にさえ似ていた。

最強の魔王ではなく、一人の政治家として。サーゼクスは目の前の敗残者に頭を下げていた。

「どうか、我等に協力して欲しい。いや、協力させて欲しい。今回の協定が結ばれれば、私達現魔王の四人は退陣し、再度魔王を選出する。もちろん、新しい魔王の椅子は君達前魔王の血族からも選ぶつもりだ。だから、どうか……隠し事をせず、協力させて欲しい。そうでなければ……悪魔は滅びてしまう」

「顔を上げてください……なんのことだか、さっぱりですな」

クルゼレイは、やや気の抜けた表情で、椅子に座ったまま机に頭を

つけているサーゼクスにそう言った。
「我等がアグレアスで集会を開く事と、悪魔の存亡がどうからむというのですか？」
「アグレアスを、どうして仮面の男が狙っているのか。それはわからない。いや、もしかしたら転生悪魔という制度そのものが憎いのかもしれない」
天才、アジュカ・ベルゼブブの生み出した、悪魔の駒。それは駒に応じて悪魔を強化するだけではない。その最大の特徴は、神のような超越の存在を除いて、人間だろうと妖怪だろうと悪魔にできるという点だ。
これによって、悪魔はその数の不足を補うことが出来た。
もちろん、それは新しい差別対象の発生を意味していたのだが。
「転生悪魔という制度には、確かに問題が多い。それは、とても遺憾だが事実だ。だとしても、それでも悪魔の駒は悪魔社会に必要だ」
脳裏に思い浮かぶのは、仮面の男の批判、いや糾弾だった。
どのような建前があったとしても、結局のところ純血の悪魔を守る為の制度でしかない。
悪魔の駒は、悪魔社会にとっては必要でも、他の勢力に利するものではない。特に、人間に対しては。
仮面の男が語ったとおり、悪魔という種族を守る為には、転生悪魔を矢面に立てざるをえない。
前回の襲撃の際顕になったように、力ある悪魔とはつまりは責任ある領主であり、それ故に戦場へ軽々に赴く事もできないのだ。
もしも、戦闘系神滅具保持者が転生悪魔として存在すれば、極端な話だが死んでも問題が無いという理由で、駆り出されるだろう。本人をそういう風に誘導するか、あるいは強制して。
やむを得ず、仕方が無い。本当に、そうするしかないのだ。サーゼクスやアジュカがどれほど傑出していても、結局のところ悪魔の出生率の問題は解決できなかったのだから。
人数が少ない、そんな基本的な問題はそれ故に致命的だった。前回、それはあからさまになったように。だが、だからと言ってではど

うすればいいのかという話になる。
「悪魔には、それが必要だ。だから……アグレアスを、失うわけには行かない！　例え、なんと言われようとも！」

「転生悪魔、という制度がなくなっても、損をするのは悪魔だけだ。だが、同時に誰かが得をするということもない。無意味だろうよ」
　仮面の男は、とんがっている形に包帯を顔の輪郭が隠れるほどに巻き上げている仮面の男は、赤毛のアンという本を読んでいた。読みながら、そうつぶやいた。
「……そうなんですか？」
「ああ、甚だ無意味だ。だってそうだろう？　考えてもみろよ、転生悪魔という仕組みを利己的にしか使わない悪魔が、転生悪魔を生み出せなくなったとしても人間を利用するのをやめると思うか？」
　アルセーヌ・ルパンが主人公を務める古典の名作を読むレオナルドに、仮面の男は問い直す。
　そして、それは確かにそうだな、とレオナルドは思った。そもそも、悪魔に利用されていたルネは人間のまま実験されていた。転生悪魔になっても同じだろう。
　ヴァレリーにしたところで、おそらく純血の吸血鬼だったとしても利用されて終わりだったはずだ。もちろん、人間の血が混じっていなければ神器は宿らないのだが。
「確かに、僕らを転生悪魔に出来なかったとしても、人間のままに利用されるだけでしょうね」
「ああ、ぶっちゃけな。寿命が長くなって利用される期間が延びるってだけだ。悪用する側とか、される側はともかく、全体から見れば大差ねーよ。どっちにしろ一生利用されるだけだからな。人間は数が多く、希少な能力者は目立つ。その上悪魔に比べて貧弱だ。だから、結局利用されるだけ利用されておしまいなんだろうさ。どちらかを根絶やしにしないかぎり、その関係は終わらない」

「……根絶やしにするつもりですか？」

前回もそうだったが、仮面の男は大量虐殺を好んでいない。もちろん、前回の数百人を殺したことを虐殺ともいえるが、行った犯罪の規模から考えれば少なすぎるほどだ。

少なくとも、種族単位で何かを考えている。そんなことはない。

「いいや？　そしたら他の種族がハバを利かせるだけさ。結局、労力に見合わない結果だけが待っているだろうよ。つまりだ、悪魔の駒を生産するアグレアスを盗んだところで、悪魔は困っても自分達は得をしないさ。もしも、自分がアグレアスを利用するのだとしたら、それは今回の一件に限定されるだろう。悪魔にとっては重大であり、そこと協定を結びたい相手も配慮しなければならない。『目的』を達成するまで、時間が稼げればそれでいい。旧魔王派が全員死ねばそれはそれでスムーズだが、そうは行かなくても結局同じ事だ。だって、悪魔はもうとっくに時期を逃している。……全く、連中には熱量が足りない。石川賢の漫画の登場人物のように、石にかじりついてでもぶち殺してやる、という勢いが足りない。島本和彦の漫画の登場人物のように、刺し違えてでもやり遂げてやる、という勢いが足りない。車田正美の漫画のヤラレ役でもあるまいに、根拠もなく自信満々だったり、数で押せば勝てると思い込んでいる。まあ、それはそれでもちろん面白いさ。漫画ならな、様式美で済む。だが、この世界は現実だ。天高く吹き飛んで地面に激突して終わり、とはいかないさ」

顔は相変わらず見えないが、寂しそうだった。それは、狂気というよりは哀愁に満ちていた。

「だからこそ、期待もしてしまう。自分の作戦を彼等が超えて行く事を。どんな打算でも良いから、強かになってほしいと。【強きこと、それが常に最善とは限らない。だが、真に強ければそれが最善だ】【お前の運命を握っているのはオレだ。だがお前の運命を決めるのはおまえ自身だ。オレが言ったことを思い出せ……そして考えろ。己を許し本当の自分を認める者……それこそが本当の強者だ!!】難しいだろうがな。結局のところ、人は自分をごまかせない。自分が陥れようとして、それで成功するのは、相手が頑なになってしまうからだ。謙虚

さと素直さは得がたい美徳だ。疑心暗鬼と愚直さは得るべきではない悪徳だ。だが、どちらも背中合わせほどに酷似している。他人はともかく、当人は見分けがつかないほどにな」

仮面の男は、作戦の本筋は語らない。しかし、今回は解決方法も正しく教えた。旧魔王派は、この男の犯行を防げたはずなのだ。そして、それは今からでも決して遅くは無い。

仮面の男は、突如として演技を始めた。

「【練に練られた謀略が、遺伝子の如く自己を複製する！　真実はいつも残酷だ、それは認め難くもある。だが、それが真実というものだ！　目を開けろ！　目を逸らすな!!　これが真実だ!!!　お前にとっても！　お前にとっても!!　お前にとっても!!!】」

大仰に、大胆に、大げさに、大声で。

仮面の男の言葉には熱があった。だが、それは地金が晒されたのではなく演じているだけのように、レオナルドには思えた。それが証拠に、そのすぐ後には寂しさがにじんでいた。

「【そして、検証者は呟く】ああ、そうだ。結局のところ……【それは私にとっても真実なのだと】」

仮面の男は、再び読書に専念し始めた。それっきり、レオナルドも口を開かなかった。

「勘違いをしないでいただきたい」

顔を上げたサーゼクスに、肩をすくめたクルゼレイはやや皮肉めいた笑顔をしていた。やや、砕けた感を得られている。

「貴方は、我等に勝利して今の地位にあるのだ。それは決して覆せない真実だ。だからこそ、我等前魔王の血族が政治の中心から離された事も、必然でしょう」

もしも、旧魔王派が内戦で勝利を治めていれば、サーゼクスを含めて反逆者達は一族郎党皆殺しにされていた可能性もある。悪魔とは

本来そういうものであるし、政治とは本来そういうものである。
故に今この段階で、クルゼレイを含めて旧魔王派の面々が脚光を浴びていないのも、納得するしかない。悔しいが、負けるとはそういうものだ。
「貴方は、魔王として良く治めておいでだ。それは、国民が誰よりも認めている。貴方が退陣するといっても、国民の誰もが貴方を選ぶでしょう」
国民の、というのは下級や中級だけではない。上級悪魔、それも議会に席をおいているようなトップクラスの面々でさえサーゼクスの続投を希望するだろう。
彼は悪魔の為に力を尽くしてきたし、成果も上げてきた。失点を探せば無くは無いが、それは揚げ足取りに近いだろう。少なくとも、クルゼレイはサーゼクスほどに上手くやれる自信はない。
「もし、我等旧魔王の子孫のうちいずれかを魔王に据える、という話になっても、だれも賛同等しないはずだ。貴方方の代わりは、この冥界には存在しない」
再び、サーゼクスは顔を曇らせた。自分は替えの効かない、魔王であるということ。それは仮面の男の語ったとおり、悪魔という種族の平均水準が低いというだけのことだ。
現に旧魔王派の中ではトップであろうクルゼレイは、サーゼクスの百分の一程度の実力しかない。そして、そんなクルゼレイやクルゼレイにさえ劣るであろう旧魔王派の面々を、悪魔の誰もが魔王とは認めないだろう。
「……だ、だが……」
ここにきても、サーゼクスが行ってきた政策が問題になった。
彼がこの悪魔を治めても、結局悪魔にとって強さこそ価値である、という基本的な思想は変化しなかった。
レーティングゲームを始め、『個人』が統治するシステムを維持し続けたのである。それ故に、誰よりも英雄であるサーゼクスは退陣が認められず、英雄にふさわしい実力を持たない旧魔王派は魔王として認められなかった。

「そもそも、我等とて魔王の座等望んではいない。魔王とは、悪魔を統治するもの。故に、勝者からの施しのように、与えられるものでは断じてない」

だが、それは旧来の悪魔にとっても共通の価値観ともいえる。

「故にだ、魔王の座は欲しくない。もしも、我等の内から魔王にふさわしいだけの実力者が現れれば、正規の手段によって奪うまでだ。よって、我等の実力にふさわしいだけの、役職さえもらえれば文句はない」

それは、掛け値なしに本音だった。

「ほ、本当か？」

「もちろんだ。我等とて、敗残なりに矜持はある。今のように追いやられているよりは、或いはお飾りの魔王の座などよりもよほど好ましい。もちろん、それなりに要職である事を望むがね」

妥協であり、打算であり、名より実をとる行為だったのかもしれない。

だが、クルゼレイとて前魔王の遺児。誰が好き好んで、悪魔社会に反逆するものか。

まして、相手が頭を下げているのだ、それぐらいの配慮はする。

「そ、そうか……」

「だが、当然条件がある。これを飲んでくれれば、少なくとも私は現政権に協力するし、無論他の旧魔王派にも働きかける。上手くいく保証はないが、半分ほどはこちらにつくはずだ。もちろん……こちらの内部の事情も明かす。些か不名誉なものを含めてね」

「そうか」

どんな条件が来るのか、サーゼクスは身構えた。頭に浮かんだのは、旧魔王派最大の裏切り者である自分の妻だった。

既に、彼女にはそう伝えてあるし、彼女もそれを既に覚悟していた。

胸がきしむが、それで丸く収まるのであれば、と覚悟するほどに今の悪魔は切羽詰っている。

「……言ってくれ」

「そう、硬くならないで欲しい。とても、とても当たり前の要求をするだけだ」

クルゼレイは、覚悟を決めているサーゼクスを冷淡な目で射すくめた。

「堕天使と天界、これらとの協定を白紙化させ、我等旧魔王派の意見を取り入れつつ悪魔内部で議論し直して欲しい」

それは、確かに当たり前すぎた。だが、それ故にサーゼクスは頷けなかった。

「戦争を再開しろとも、悪魔に有利な形で結びなおせとも言わない。我等悪魔内部で意見をまとめなおせ、そう言っているだけだ。まさか、とは思うが貴方のいう『要職』とは、敵対していた勢力との協定に口を挟むだけの権限もないというのか？」

確かに、クルゼレイの意見は尤もだ。旧魔王派はいままで政治から遠ざけられていた。故に、今回の和平にも旧魔王派の意見は一切取り入れられていない。そして、もしも彼等を政治の場に戻すのであれば、彼等からの意見もまとめる必要がある。

だが、それは協定が結ばれた後の政策を前提としているサーゼクスには、不可能なことだった。なぜなら、それは不利になっている悪魔の立場を更に悪化させるものであり、他の陣営との交渉を停滞させるものだからだ。

「我等とて、他の神話やらとも手を結ぶだけの柔軟性はある。事前に言ってくれさえすれば、それを受け入れるだけの度量はあった。だが、ルシファー……貴方はこの期に及ぶまで我等を忘れ続けていた。今更なんだというのですか、手遅れなのですよ。『なぜ、このタイミングで』」

今更、そんな事ができるわけがない。サーゼクスはそう言えなかった。

なぜならば、それはつまり自分が話を持ちかけるタイミングを逸していたことを意味しているからだ。

確かに、旧魔王派には現在発言権等ない。今、この冥界では彼等等所詮は前時代の遺物に過ぎない。

加えて、前魔王のやり方を引き継ごうとしていた旧魔王派は、この和平にすんなりと賛成するわけが無い。

そして、悪魔には時間がない。できる限り急いで和平をする必要があった。

だから、旧魔王派の意見を聞こうともしなかったのだ。

「遅い、遅すぎるのです。貴方は、その話を協定がある程度固まる前に、我等の前に現れるべきでした」

もちろん、旧魔王派に発言権を与えれば、現魔王派と意見が対立し、こじれにこじれただろう。それは、確かだ。

だが、それを怠った上で、ある程度他国との協定が結ばれた後で、その面倒な相手に擦り寄るなど、機を逸したとしか言えない。

クルゼレイは、もう話す事はないとばかりに席を立ち上がった。

「この国は、貴方方の国だ。貴方が治める、貴方を慕う者達の国だ。だから、我等には関係ない。勝手にすればいい。だから、我等も好きにさせてもらう」

サーゼクスは、動けなかった。彼等の悲哀を思い知ってしまったから。正に、今更だった。

彼等に残っていた、最後の矜持さえも、境界線さえも自分達は無思慮に踏みにじってしまったのだと。

「ここは貴方の国だ。だから、貴方方の力で何とかしろ。我等の力など当にするな」

去っていくクルゼレイ。彼を引き止める言葉は、サーゼクスにはない。

分かった、協定を白紙にしよう、などとは言えるわけが無い。そんな事をすれば仮面の男を云々ではなく国が滅びる。最悪、戦争が又おきるだろう。

だからこそ、彼は誰もいなくなった部屋で頭を抱えていた。

「何故私は、彼等を知ろうともしなかったのだ……」

もう少し早く話せば、分かってくれそうだった。少なくとも、クル

ゼレイは。彼が折れてくれれば、他の面々も受け入れてくれたかもしれない。

もちろん、彼等と意見をすり合わせるには時間がかかっただろうし、最悪協定そのものが結べなかったかもしれない。

だとしても、怨敵との和平よりも同胞との和解を、現政権は優先するべきだった。

だとしたら、これはサーゼクスの怠慢以外の何物でもなかった。少なくとも彼自身はそう思っていた。

ルシファーは、今更になって自分の傲慢さに絶望していた。

彼は何一つ間違っていない。彼の理想は正しい。悪魔は、そうしなければ生き残れなかった。

だが……彼の正しさは、その程度でしかない。

【理解しない者を拒絶する】

【同意しない者を排他する】

【首肯しない者を弾劾する】

【それが正しさということ】

彼の正しさは、悪性の正しさでしかなかったということだろう。

例え彼に全ての責任を押し付けることができず、彼に万能を求めることは残酷だったとしても。

Ｒｅｃｋｌｅｓｓ　ｆｉｒｅ　１

ついにというべきか、冥界を揺るがしかねない大事件の、その当日になってしまった。

仮面の男を迎え撃つ前魔王の子孫と、仮面の男と旧魔王の子孫両方を迎え撃つ堕天使陣営。

彼らの緊張を他所に、仮面の男はウサギの仮面をかぶり上機嫌になり、暗闇の支配する神威空間で戦闘準備を整えていた。

「さて、そろそろ行ってくるが……もう一度確認しておくぞ。自分はかく乱しつつアグレアスを囲って奪う。でもって、ルネは旧魔王派を相手に戦ってな。レオナルドは脱出する準備。ヴァレリーは両方のサポートだ」

三人はここ、神威の空間で待機である。実際のアグレアスに出向くのは、仮面の男ただ一人であった。

それは、ヴァレリーもレオナルドも戦闘ができないということであり、ルネもまだ実戦ができる水準ではないということだろう。

それはつまり、この男は全く他人を必要としていないということでもあった。

畏怖と畏敬、恐怖と嫌悪。各々その配分は違えども、それらが入り混じった感情で三人は、散歩にでも行くかのように敵地へ赴こうとしている仮面の男を観察していた。

「じゃあ、行ってくる」

心配など、する必要がない。だが、三人の心から不安が消えないのは。

「お気をつけて」

「……お待ちしております」

この男が、引き起こすであろう惨劇の、その凄まじさに悪寒が走るからであろう。

「……お前一人でやってるんじゃーねー」

最も近くにいながら、しかし論理的にも感情的にもこの男を止めることができない。

なんだかんだ言って、この男は何でもできている。この男の示す未来は、ルネにとってもヴァレリーにとっても、魅力的で希望に溢れていた。

生まれながらに迫害されてきた混血吸血鬼、不運にも『希少』な神器を宿した実験体。

彼らをどうにかしたい、そう思ってもどうしていいのかわからない二人にとって、彼の語る未来絵図はまさに『形にできない夢』そのものだった。

そして、その実現のための布石であるというこの作戦が、どれだけ非人道的な結果で終わろうとも。結局、代案が一切思いつかないのだ。

悲しいことに、レオナルドを含めて誰もが子供で、仮面の男の案に乗ることしかできない。

だが、少なくとも一切未来絵図が思い浮かばない。それに比べれば圧倒的にマシだった。

「私のことを、忘れんなよ」

「忘れてないさ。君たちのことは、いつでも忘れていない」

まるで、穴に吸い込まれる水のように、仮面の男は自分の右目に吸い込まれていった。

それを見送ると、ルネは独り言のようにつぶやいた。

【ただの子供の癇癪だ。ルネ、その場合は流石に止めるぞ】……クソ三つ目は私にそういっていた」

仮面の男は、誰よりも遠くを見ているのかもしれない。そんな彼の誰よりも近くに、ルネたちはいる。

ルネの暴走をヴァレリーや仮面の男が止めてくれた。それは事実だ。止め方はまったく違うが、それでも二人のおかげでルネはまだ人間性を維持できている。

「いざって時、アイツが暴走したら、殴ってでも止められるのは私だけだ。だから、そのときに後悔をしたくない」

もしかしたら、そういう他人を理由に戦うのは、仮面の男としては否定したくなる事なのかもしれない。

だが、他人を理由にしないことにこだわって、後悔をすることはもっと嫌だった。

少なくとも、ヴァレリーは仮面の男の所有物に近い。だから、ルネと違ってヴァレリーには拒否権が無い。

ヴァレリーだけを戦わせるのは、嫌だった。それがしがらみと呼ぶものであっても、結局ルネは英雄墓場というコミュニティーで生きる事を選んだのだ。

他人を拒絶して生きる事を選ばなかった以上、他人の為に戦うことは間違っていない。ルネはそう感じていた。

「戦えるのは、私だけだから」

もちろん、それだけで良いとは思っていない。だが、それも必要なのは事実だった。

そしてそれができるのはこのメンバーの中では、戦闘用神滅具所持者のルネだけであることも、確かだった。

復讐が過去の清算ならば、これからの成長は未来への挑戦だった。もちろん、それは舗装されていた復讐劇よりも、困難を極めると知っていた。

「忘れるな、か。嬉しいことを言ってくれるじゃないか」

ぼそりと、らしくもなく一人ごとをつぶやいた仮面の男。その仮面の隙間から汗ではない、うれし涙が漏れていた。

実態空間、つまりは冥界に出た。その視界は、神の領域。すなわち空中都市アグレアスさえもはるか眼下に見下ろす、雲のさらに上の高空だった。

そこから、一切の異能を用いずに自由落下に身をゆだねて、重力加速度と空気抵抗を楽しむ。

仮面に空いた隙間、三つの眼に空気の壁がぶつかって、とてもではないが眼を開けていられない。

それでも、顔を真下に向け続ける。

地面に激突すれば死ぬしかない。それを免れても、結局単身敵の只

中にとらわれるだけ。
味方である三人は、仮面の男がその気にならなければ神威の空間から脱出することもできない。
まして、混血吸血鬼も実験体も、仮面の男がいなければ生きようとさえ思えない。
もしも、万が一、ありえないことだが……仮面の男が死ぬか囚われれば全てが、全てが台無しだ。
そして、仮面の男にしか救えない、彼らの人生は飢えと渇きによって終わるということになる。
だというのに。
仮面の男は、自分の『他人の弱みにつけこんだ下種な作戦』が上手くいっていないことを心のどこかで心待ちにしながら、絶体絶命の窮地に身も心も胸も躍らせていた。

集会という、穏やかな響きからはとても結びつかない、血気に満ちたアグレアス。
その都市群の中で、旧魔王の血と名を継ぐ者たちはいまや遅しと拳を震わせていた。
吹き上がる魔力は気炎となり、全体に満ちて燃え上がっていた。
数を減らし、質を落とし、それでもなお矜持を示さんとしている彼らは。
「……」
そんな彼らを、クルゼレイは哀れんでいた。
彼らの中のどれだけが、生き残るのだろうか。仮面の男という、どうしようもない犯罪者風情の手にかかって死ぬのだろうか。
この場の面々は、確かに忘れられて腐っていくよりも、反逆者として立ち上がることを選んでいた。
だというのに、サーゼクスやアジュカのような魔王ですらない相手

と戦うことになるとは。
そして、クルゼレイ自身自覚しているが、現魔王を相手にあざ笑った男を、魔王ですらない自分たちがどうにかできるのか。
「何を腑抜けた顔をしている」
シャルバ・ベルゼブブ。クルゼレイ・アスモデウスと並び、旧魔王派の重鎮だった。
覇気を滾らせている彼は、クルゼレイを睨みつけていた。
「分かっているのか、あの下種は我等の矜持を汚した。それは、到底許せる事ではない。我等がすべきことを、見失っているのではないか?!」
その言葉には、迷いが無い。そう、誇り高き魔王の血と名を継ぐ彼は、今回の一件で激怒していた。
打算も損得も一切脳裏から消えていた。
仮面の男を、ぶちのめさなければ気が済まない。そんな、余りにも原始的な感情が彼を支配している。
そして、それはクルゼレイも同様だった。
「ああ、もちろんだ」
結局のところ、一番仮面の男を許せないのはクルゼレイだった。
だからこそ、現魔王の提案を蹴り、自分の手でなすべき事をなすつもりだった。
「カテレアを汚したあの下賤の輩に、渾身の一撃を叩き込まなければな」
拳を握り締めた直後だった。
上空を警戒していた者が、何かを発見したのか大声で怒鳴っていた。
「来たか!」
全員が身構える中、まるで役者のように優雅に、空中都市アグレアスの建造物の屋根の上に、赤い尾を生やしウサギの面をかぶった男が降り立った。
「どうも、旧魔王派の皆さん! 現政権と戦って負けた皆さん! 前魔王の血と名前を継ぎながら王の座に座れていない皆さん! 友達

が魔王をやっているから自分も魔王をやっている奴とか、面倒だ面倒だと言っている奴とか、妹の寝顔を無断で撮影している奴とかにも劣る皆さん！　自尊心だけは一人前で、勝ち目もないのに戦いを挑もうとしている皆さん！　はじめまして！　貴方方が束になっても叶わない、最強の魔王に二ヶ月の準備で完勝した犯罪者、仮面の男でございます！」

　慇懃無礼、ここに極まれり。

　深々と、自分を包囲している全ての悪魔へ恭しく頭を下げていた。

　彼を包囲している悪魔達の、その心を逆なでにしつつ、不敵なことに無防備を装いながら一人一人へ街頭演説めいて語りかけていた。

「おやおやぁ？　どうやらこの場にいるのは、本当に旧魔王派の皆さんだけですか？　他には誰もいらっしゃらないんですか？　伝説の武器を持った英雄とか、魔法使いさんとか、現政権の方とか、神器を無効化するルシファーさんさえもいないんですかぁ？　おやおやぁ、これは予想外、きっともっと沢山いると思ったんですけどねぇ……」

　三つの目が、全て白く染まる。

　正面に立つものだけではなく、その背後で翅を羽ばたかせているものさえも、その三つの目に視界に収まったとき、全方向への透視という基本的にして効果的な能力は死角なく発揮される。まして、赤龍帝の力を受けて増幅しているとなれば、並みの迷彩ではまるで無意味だ。

「……ここまで本当に誰もいないとなると、これは作戦を推理されたのか。凄いな、ここまで想定どおりだと背筋が凍る。凄いな～～、ファルビウムってのは本当に天才なんだな。その割りに、原作ではまったくと言って良いほど活躍していなかったけど。というかまあ、戦略の専門家が有能だったら、そもそもテロなんて独力で未然に排除できてるはずだしねぇ。主人公を活躍させるために大人の無力に描かなければならないのも現実なら、こうして非情に振舞うのも現実ということか。現実が見えていない連中は死ぬ、これも現実だねぇ」

　旧魔王派がまとめて集ったのだ、何がしかの監視が着くとは思っていた。それさえもないということは、つまりはそこまで現政権が無能

かあるいは、逆にこちらの作戦を完全に察知していたということになる。

いよいよ、目の前の彼等は切り捨てられたようだ。

「……貴様が、貴様がカテレアを浚った不心得者か……クルゼレイ?!」

轟音が、罵声をかき消した。

シャルバが「こちらを見ようともしていない」相手へ怒りをぶつけるよりも先に、クルゼレイは殺意を込めて魔力弾を放っていた。

いかに、彼等が魔王にふさわしくなかろうとも、それでも彼等は魔王の子孫だ。その火力は人間一人等一撃で殺して尚余りある。

とはいえ、とっさだった。もっと手っ取り早く言えば、カッとなっていた。

カテレアを浚ったこの男を跡形もなく殺してしまえば、カテレアは帰ってこない。だというのに、うかつにも致死性の攻撃を放ったのは、つまりは口より先に手が出るほどに怒り狂っていたからに他ならない。

軽挙だった、と恥じながらも視線は煙に隠れるアグレアスの屋根を睨んでいた。

弾かれたわけではない、逸らされてもいない、受け止められてもいない。

ただ、進行方向になにもなかったかのように魔力弾は貫いていった。

手応えが、余りにもなかった。

「クルゼレイ……」

「まだだ、まだ何も終わっていない」

その言葉に答えるように、煙の中から現れたのは傷一つない仮面の男だった。

この一撃で倒されたか、と思ったのは末端ぐらいだ。ややあっけにとられて、しかし湧き上がりかけて……しかし、煙が晴れると同時に健在な姿を見せる仮面の男に戦慄した。

重ねて言うが、弾かれてもいないし逸らされてもいないし受け止められてもいない。

目の前にいるこの男が、実際に存在しているのか。幻術かなにかなのではないかと疑うものもいた。

しかし、赤龍帝の尾から漏れ出る存在感は幻術ではない。もしも、これが幻術ならば目の前の男はいよいよ化物である。

「やれやれ、こんなものか。初撃には殺意があったが、空間を削りとるほどのものではないか。全力を出しても、本気を出しても、真面目でも、こんなものか。所詮は負け犬だな【そう謙遜するな。お前は油断などしていなかった。いつだって全力だ。尊敬する。凄いな】全力をだしてもこの程度じゃあ、お前等ごときに名前やら意思やらを託した前魔王も浮かばれないだろうよ。まあ、仕方が無いか。最強の魔王でもあの程度だったんだ、それ以下の、『普通の魔王』以下の諸君じゃあ、これでも精一杯なんだろうな」

空間、という言葉がその場の全員に聞こえた。なるほど、筋は通っている。どうやら仮面の男は空間跳躍によって先ほどの魔力攻撃を避けたらしい。

問題は、その空間跳躍を何時したのかこの場の面々では見切れなかったということだ。

事前に用意していた策はある。自分達には『アレ』がある。自らの力を劇的に向上させる代物は確かに存在している。

だが、悲しいかな。それは特殊な能力を彼等に与えるものではない。

今現在、仮面の男は悪魔の真っ只中で孤立しているが、かといって四方から攻撃しても空間跳躍で回避されては仲間を攻撃するだけに終わる。

空間を、削り取る。それは話に聞く最強の魔王の、その本領の……。

「おやおや……【どうする？　どうするんだ？　化け物はここにいるぞ】旧魔王派の諸君。【倒すんだろ？　勝機はいくらだ、千に一つか万に一つか、億か兆かそれとも京か】まさか、魔王の名前を、血脈を、尊厳を引き継いでいる皆様が、まだ一度しか攻撃していないのに諦めるとか？　名前を雄雄しく名乗り、復讐の大義を私へ語り、その上で死力を尽くして死に物狂いで喰らいついて来るべきなのでは？　少な

くとも、自分の『妹分』はそうしていましたよ？　あれはかっこよかったなー！　しびれたなー！　すごかったなー！　正に復讐劇でしたよ！　スカッとするものがありましたね！　おやおやぁ？　それに引き換え皆様は大分おとなしいな？　彼女のことが大切じゃあないんですか？　実は、自分が浚ったカテレアは、貴方方にとってそんなに大事じゃなかったとか？　実は偽者で、本物は颯爽と登場して自分の背中を攻撃するつもりだったとか？　それはカッコイイな！　ぜひ成功させてくださいよ！　それで負けるなら、殺されてもいいぐらいです！　ほらほら、どこに隠れているんですか？　本物のカテレア・レヴィアタンは？　相手の正体を見抜く自分の眼をごまかして、相手の精神をいじくる自分の眼でも見抜けない替え玉を用意していた正真正銘の、魔王の名前にふさわしいカテレアさんは？」

　手袋で隠れた両手で、双眼鏡のように輪を造る。そして、如何にもわざとらしく周囲を探す仕草をした。

　仮面の男が期待している、というのは真実だ。だが、彼が捕らえているカテレアが本物のカテレアである、というのも真実だ。

　少なくとも、クルゼレイが愛したカテレアは、もうこの世界には存在しない。

「まさか、自分の貧相な逸物を咥えつつ自分に罵倒されるのが大好きな、自分が避妊具をしているのが不満で子作りを懇願している、下賤な自分の子供を心の底から欲しがっている、命令されれば如何なる欲求にも応える、貫かれれば大喜びで獣のようにあえぎ声をだしていた彼女が本物のわけが無いですよね？　あんなみっともないのが、魔王の子孫なワケが無い！　そうでしょう？　カテレアさんと将来を誓い合っていた、クルゼレイ、さ、ん？」

　想像は出来ていた。現物を見たわけではない。だが、手紙によってその映像は見ている。そして、今改めてクルゼレイは認識した。

　目の前の男を、生かしておくことは出来ないと。

「き、さ、まああああああああ！」

「コワイ！　アイエエエエ！」

　軽く飛び上がった仮面の男は、そのまますり抜けるように建物の中

へ消えていく。
もはや、我慢の限界など遥かに超えていた。沸騰する旧魔王派の面々は、先ほどまでの警戒心を忘却したかのようにその建物へ、前魔王の遺産である建物を攻撃した。
しかし、当然ながら仮面の男に攻撃は命中していない。建物はおろか、地面さえもすり抜けていく仮面の男は残骸に埋もれる事もなく姿を隠した。
「さがせ！」
「見つけ次第殺せ！」
「許さんぞ！」
「血祭りに上げてやれ！」
もはや、暴徒だった。血気盛んな旧魔王派の面々は、先祖が拠点としていたアグレアスの、その遺跡を破壊しながら怒鳴り散らしていく。
彼等が怒るのは当然だが、怒ったからといって問題が解決するわけでもない。
なぜならば、仮面の男はすり抜けにすり抜けて、アグレアスの直下、船底とも呼ぶべき場所へ逆さになって張り付いていたのだから。
隠れた相手を探すに、人海戦術は基本ともいえる。だが、旧魔王派の人数はお世辞にも多いとはいえないし、隠れた相手を探すことに慣れているわけでも、統率に優れて効率よく捜査できるわけでもない。まして、ここは空中都市。その広大さは、仮面の男が潜むには十分が過ぎる。
彼は知っている。この世界では戦う技術や手段は山のように存在するが、隠れる手段や探す手段となると格段に減る。少なくとも、どこかに隠れた相手を見つけ出して、そこを遠距離で攻撃するとなるとまずない。
空間跳躍を用いた擬似的な透過。これも、機動力の一端である。彼らが仮に仮面の男よりも早く動けたとしても、障害物を無視して移動できるこちらの方が大幅に有利である。まして、室内ともなれば。戦うことなく隠れ潜むことに専念するとすれば。

そして、その三つの眼を輝かせて、赤い尾を大きく伸ばして、天狗の装甲と赤龍帝の砦でアグレアスを包み込んでいく。

「デカイ分、流石に面倒だな」

仮面の内側では、焼けた顔の筋肉が引きつっていた。伸縮自在の赤龍帝の尾、六道の力を得ている写輪眼でも、大きいものを包めば流石に消耗は激しい。

如何に、魔獣からチャクラを遠隔で受け取っているとはいえ、負担そのものが軽減されているわけではない。

とはいえ、そもそもこの装甲は防御のためではなく移動のためだ。脆くしても、問題はない。むしろ、そちらの方が内側からも外側からも攻撃されにくくなる。

いつでも逃げられる、そう思えば却って逃げなくなるものなのだから。

そして、現魔王にとってもアグレアスは失うと政治的にではなく戦略的に問題がある代物だ。覆っている装甲が脆いと分かれば、返って攻撃も出来なくなるだろう。

「さあて、堕天使領に向かうとしますか」

赤く染まった、天狗の翼。それが羽ばたき、巨大な空中都市をゆっくりと、しかし加速させつつ移動させていく。

それは、当然都市内部で暴れている旧魔王派に震動で伝わり……。

「ファルビウムの予想が、当ってしまったか」

極めて視覚的に、現魔王も把握していた。

突如としてぐらり、とアグレアスが大きく揺れた。
浮遊都市であり空中要塞であるアグレアスが、揺れるというのはある意味当然だ。なにせ、そもそも大地に根をおろしていないのだから。
血気にはやった旧魔王派の面々は、入り組んでいるアグレアス内部を魔力弾で砕きながら動いていたため、少々気づくのに遅れた。しかし、継続的に自らにかかるＧに、ついにはどこかへ移動しているのだと理解するに至る。
それでも、彼らはまったく焦っていなかった。大方仮面の男のアジトにでも向かっているのであろう。そう思っていた。確かに、最終的な目的地という意味では間違っていない。そして、ならば望むところだ。そこにいるであろう仮面の男の仲間も、そこにあるであろう簒奪物を、全て打倒し簒奪すればいい。
そう思っていた。
『ぱんぱかぱ～～ん』
気の抜けた放送が、アグレアス内部のいたるところに、いたるところから響いてきた。
ふと、旧魔王派の一人が足元を見ると、大音量で再生しているテープレコーダーがあった。おそらく、館内放送の類も併用して、ありとあらゆるところに仕掛けて聞こえるようにしているに違いない。
この建物内は、もともと遺跡でありレーティングゲームの試合が行われている会場はともかく、調査が完了していない内部の音響設備は万全とはいいがたいし、戦闘で破壊されている可能性もあった。それを解決するために、これだけの小道具を準備したのであろう。
それこそ、何が何でも教えてやろうという悪意の表れだった。
『現在アグレアスは、冥界の上空を超音速で移動中でございます！』
そんなことはわかっている。いらだちながらも、しかし比較的冷静な輩は気づいた。
なぜ、態々冥界の上空を移動する。これだけ大きい構造物を、物理

的に移動させるなど多くの労力が必要なはずだ。魔法陣の類を利用すれば、即座に本拠地へ移動できるはず。

赤龍帝の力を持ち、空間跳躍を操る仮面の男が、どうしてなぜわざわざリスクもコストも高い方法で、無駄なことをする。それへの回答は極めて速やかだった。

『目的地である、堕天使領土までは2時間後の到着を予定しております～～～す』

それを聞いて、全員が身を震わせていた。癇癪を起して無意味に破壊していた者たちさえも、その動きを完全に止めえていた。特に、クルゼレイは戦慄していた。

自分たちは、今の今まで仮面の男とその一味と戦うものだと、そう思っていた。だが、そんな前提条件さえも違っていたのだ。

仮面の男は、自分たちと堕天使をぶつけて疲弊させて、そのうえで漁夫の利を得るつもりなのだ。

思惑は明らかでも、旧魔王派はこのアグレアスから脱出することが許されない。なぜならば、それは仮面の男よりも尚憎い堕天使に、前魔王の遺産を明け渡すに等しい行為だからだ。

真の魔王の後継者を名乗る彼らは、極めて論理的に感情的に政治的にそれが不可能なのである。

「そういうことか！」

クルゼレイは、自分の無能さ加減に絶望と憤怒を覚えていた。心のどこかに存在していた、自分への甘さにどうしようもなくなっていた。

自分は、生まれながらに才気が乏しい。魔力が少なく、魔王にふさわしくない。

だから、サーゼクスやアジュカは当然のこと、ファルビウムやセラフォルーに劣っているのは仕方がない。そう、思っている部分がないでもなかったのだ。

だが、これは違う。違いすぎる。我々は、想定が甘すぎたのだ。命

を懸けてアグレアスを守ると、そんな思考が停止していたのだ。
そんな思い込みを、仮面の男はあっさり上回った。自分たち真の魔王の血を継ぐ者たちが、思惑を理解しても対処できない策をあっさりうってきた。
予告の際に仮面の男が言っていた通りだ、こんな問題はあらかじめ堕天使の上層部と話をつけておけば、あっさり解決できたはずなのだ。
だが、そんなことはできない。前魔王の遺産を盗賊から守るために、現魔王はもとより堕天使の力を借りるなどできるわけがない。
できるわけがないからこそ、これから起きることに対処できない。
猶予の時間内に仮面の男を見つけ出して倒し、アグレアスが堕天使領地に着く前に止めることはできない。
潜んでいるであろう仮面の男一人を見つけるには、アグレアスは広すぎるし旧魔王派は人数が少なすぎる。なによりも、仮面の男は移動手段に長けすぎている。
堕天使領地についてしまえば、悪魔の現政権とどれだけ水面下で蜜月の関係だったとしても、堕天使の上層部は国民の手前、国防上の理由から対応をしなければならない。つまり、軍勢を派遣しなければならない。
その軍勢はこのアグレアスに入らなければならないし、旧魔王派はこれを迎撃しなければならない。
なぜならば、前魔王の戦略兵器が領地に入れば堕天使は何もしなわけにはいかないし、前魔王の敵である堕天使が前魔王の遺産に侵入すれば旧魔王派は何もしないわけにはいかないのだから。
「これが、これが貴様のやり方か！」
己に絡みついた鎖が、誇りや信念が、重荷となって選択肢を奪う。
クルゼレイは悟っていた。もはや、旧魔王派に未来はない。クーデターを起こし現政権に挑むことさえ、もはや叶わぬ夢になってしまった。
いくらなんでも、無理だ。前魔王と違い、幹部格が全員生き残っている堕天使の、その精鋭を片付けられるとは思えない。そして倒した

としても、ほぼ無尽蔵に供給されるであろう。なにせ一国のど真ん中なのだから。

アグレアスの移動速度は、本来そこまで早くない。であれば、一度堕天使の領地に入ってしまえば脱出は不可能に近い。

そして、それらを片付けたとしても仮面の男が、疲弊した悪魔をひねりつぶすだろう。

もし万が一、それを退けることができたとしても。それでも、とてもではないが現政権に戦いを挑むだけの戦力は残らない。

「これが、これがっ!!」

悪魔の叡智をはるかに凌駕する人間の、底さえない悪意だというのか。

だとしたら、我らは勝負の土俵に立つことさえできなかったのだ。

いいや、仮面の男は一度も土俵に立っていないのだ。

意気高揚で土俵に上がった我らを、土俵ごと移動させて堕天使と戦わせるつもりだったのだ。

「愛する女を奪ったお前と、戦うことさえ許さないというのか!」

彼の咆哮は、怒りに燃えるの男の叫びは、人知れず忍ばされていたアンチモンスターによって録音されていた。

酒の肴にするために。

すべてを理解した彼らは、しかし抵抗することさえ許されず、逃げることもできず、戦う相手さえ押し付けられて、ついにアグレアスごと堕天使領地に突入していた。

堕天使領土は広い。上層部が全員生き残っている代わりに、国民の多くが死んでしまっていたが、それゆえに人口密度は低い。

だというのに態々狙って、人口の密集している地帯のはるか上空で、仮面の男はアグレアスを停止させていた。

『良いか、あの連中は確かにバカだ。前魔王の血と名前を継いではいるが、とてもじゃないが魔王を名乗れるだけの実力はない』

突入部隊の指揮を任されたバラキエルは、ヴァーリが先行しないよ

うに牽制しながら、アグレアスへ向かっていた。
その心中では、アザゼルからの警告が反響している。
これから向かう先には、赤龍帝の所持者がいる。それは、まあいい。こちらには歴代最強の白龍皇がいるのだ、戦闘に限定すれば遅れはとらない。もちろんそれは、相手が戦ってくれればの話だが。
であれば、自分達が気にしなければならないのは魔獣創造のモンスターと、旧魔王派の面々だ。
そして、ファルビウム曰く仮面の男の趣向からして、二度連続して同じ手を使うことはないそうだ。少なくとも、前回のように数で押して勝つような無粋な手はさけるらしい。それでも安心は出来ない。なぜならば、それでも勝てる自信があるからだそうだ。
それはつまり、少々茶々をいれてくることはあっても、旧魔王派の面々だけで自分達堕天使陣営を打倒できる確信があるのだろう。旧魔王派の過信ではなく、仮面の男の客観的な評価であれば、その信ぴょう性は高いだろう。
『本来あの程度の輩ならお前なら高確率で押さえ込める。そこは信じてる。問題は、旧魔王派の連中にも連中なりに勝算があるということだ』
旧魔王派の面々は、仮にも魔王の血と名前を継いでいる。そこらの上級悪魔の中では上位の実力者だ。だが、バラキエルを含めた堕天使の精鋭は、前魔王本人と悠久のときを超えて争っていた面々だ。
真っ当に考えて、前魔王の劣化品、粗悪品でしかない末裔などバラキエルの敵ではない。加えて、旧魔王派の連中は別に堕天使と戦うつもりではなかったのだ。バラキエルを相手に対策を練っているわけが無い。
だが、旧魔王派は仮面の男を相手にするための対策は持っているはずだった。それが問題だ。人間や神器にだけ有効な武器なら、バラキエルには問題ない。だが、単純に自らの実力を向上させるだけの代物ならば。
『油断すんなよ』
「つくづく、どうしようもない！」

堕天使領土の都市、そのはるか上空で静止した巨大構造物、アグレアス。

神話の時代から生きるバラキエルにとっては忌々しい代物だが、これを外部から攻撃して破壊することはできない。曲がりなりにも旧魔王の移動要塞である。雷光をもってしても、そう簡単に外部から粉砕することは出来ないだろう。

また、それに成功した場合直下の堕天使の都市が残骸によって破壊され、かつ和平を結ぶ予定の悪魔との関係が大幅に悪化する。

もちろん、確保したらしたで、悪魔とのうんざりするような交渉が始まるのであろうが、それは取らぬ狸の皮算用である。

今の彼にとっての注意すべきこととは、空間移動を得意とする赤龍帝を相手に、室内戦をしなければならないということだ。

絶対に、まともに戦ってはこないだろう。

なにせ、相手は特殊な眼を持つ相手である。その能力の一つに、視界共有や透視の類がないと考える方がうかつだ。

障害物を無視して移動できる上に、障害物を透視してこちらを視認できる相手と、室内戦。考えるだけでも、うんざりである。

実際には、これに障害物をすり抜けて移動するという手段も加わるので、尚のことうんざりするのであろうが。それは無用な心配でもあった。

仮面の男、それを打倒するための策を用意した旧魔王を打倒しつつ、その上で仮面の男の妨害を潜り抜けてアグレアスを奪わなければならないのだから。

仮面の男は当然のこと、旧魔王派にも交渉の余地はほぼない。向こうにしてみれば、アグレアスは父祖の遺産であり、堕天使の侵入を許すことは出来ず、こちらにしてみれば領空侵犯をした空中要塞を放置することなど出来ないのだから。

仮面の男を打倒するまでの短期的な協力、という可能性さえほぼない。なにせ、連中は内戦状態にあったとはいえ、同属であるはずの現魔王の協力さえ蹴ったのだから。

「……せめて」

娘の顔を見てから死にたかった。それを飲み込んで、バラキエルは視界を大きく塞ぎつつあるアグレアスへ接近していた。

「……アルビオン」

『ああ、あそこに赤龍帝がいる』

史上最強の白龍皇、過去に比類なく、未来に置いても彼に勝る存在はありえない。そうアザゼルから保障されたヴァーリは、アグレアスを睨んでいた。

彼の立場は複雑だ。堕天使の勢力に所属しているが、旧魔王の子孫でもある。同時にこの事件の犯人である、黒幕というには余りにもあけすけな男、赤龍帝を宿敵とする男でもある。

そんな彼の心中はシンプルだ。赤龍帝の所持者を見つけ出して、殺す。それだけである。ヴァーリは若く浅慮だが、愚かではない。こうした手を打ってくる相手が、目の前に現れるとは中々考え難い。今彼と戦わなければ、今後一切チャンスは回ってこないだろう。

「見つけ出して、ぶちのめしてやる」

だが、心中は穏やかではない。いざ、こうして目の前に現れた赤龍帝。さて、彼は自分と戦うのだろうか。

仮面の男は正体不明だが、幾つかの能力を確実に持っているとされている。捕らえた相手を洗脳する力と、空間を跳躍する力だ。どちらも、真正面から戦う類の力ではない。

火だの風だの、闇だの光だの、そんな直接的な攻撃手段ならヴァーリはいくらでも対処できる。だが、赤龍帝の力で増幅されているであろう精神攻撃と空間跳躍に如何に対処すべきか。

並みの精神操作ならば、白龍皇の格や魔王の血統で無効化できる。だが、相手は赤龍帝だし、魔王の血統であるカテレアさえも掌中に納めている。もしも、赤龍帝の力を抜きにカテレアを操作できるのであれば、自分も彼の手駒に成り下がるのではないのだろうか。

真っ向から戦って、力及ばずに負けて、無様を晒して死ぬ。それは彼にとって、理想的な最期だ。だが、それは相手がいてこそである。相手がそれを拒否して来れば、ヴァーリには対策が存在しない。最強であるヴァーリだが、アザゼルのように優れた頭脳をもって、相手に

対策をすることができない。彼の強さは、あくまでもただ強いだけという尖った強さであり、仮面の男と比較するに、余りにも幅が無い。空間跳躍で移動した相手を見つける能力も、身を隠して待ち伏せする力もない。

つまりは、相手のご好意に甘える形でしか『戦う』ことさえもできない。

そんなことは分かっている。分かっているが、しかしなにもしないわけにはいかない。

それは、敗者ですらない臆病者だ。結局のところ、彼はこのまま無視されるのが我慢できない。

最強であること、最強であろうとすること、最強を目指すこと。それを自らの存在理由としている。そうでなければならない。

それを若さと呼ぶことはできるが、だからこそ我慢が出来ない。

神話の時代から生きる聖書の住人を、その奸智一つで翻弄する老獪かつ奔放な相手。白龍皇のことなど忘れているかのように、好き勝手に振舞う赤龍帝。

「絶対に、ぶちのめす」

強い言葉を使うのは、余裕が無いからであり、焦燥しているからでもある。

最強であるはずの彼は、白龍皇の鎧を身に纏って意気を高揚させている。

自分のことなど忘れて、あのデカブツの中でバカ騒ぎを起こして、そのまま逃げようとしているであろう仮面の男に自分を認めさせなければならないのだから。

だが、それは杞憂でしかない。

なぜならば、この『馬鹿騒ぎ』の最大の目的は、仮面の男がヴァーリ・ルシファーと会うことに他ならないのだから。

「はじまっちゃったねぇ～～」
とても落ち着いた、或いは達観した様子でファルビウムはつぶやいた。
目の前にあるモニターには、高速移動しているアグレアスの、現在の位置が示されている。
国境を利用した作戦という、いかにも人間らしい姑息な考えの作戦ではあるが、しかし冥界には国が二つしかなく、しかもアグレアスは空中都市である。つまり、事前に堕天使領土へ移送されると分かっていても、ルートはほぼ無限大である。極端な話、移動速度が高速ならば、どの方向に向かって移動しても必ず堕天使領土にぶつかる。
「まあ、これも仕方が無いといえば仕方が無い。盗みやすいところに盗まれたら困るものがあるんだもん。僕らの敵なら盗むよね」
それは、投げやりな発言だが的を得ていた。アグレアスは空中都市であり、移動要塞でもある。それはつまり、少なくとも通常の都市や要塞よりは盗むことが簡単ということだ。
今回、仮面の男は外側を覆う事で運んでいるが、一旦制圧した上で内部に侵入し、そのまま魔方陣などで移送することも、そこまで不可能ではない。
「……！」
拳を握り締める、悪魔勢力の重鎮初代バアル。歯軋りを抑えきれず、震えもとまらない。もちろん、恐怖ではなく憤怒によるものだった。
分かっているのだ、なぜアグレアスがこうも容易く奪われつつあるのか。
それは、悪魔の総数が激減している、それだけの事なのだ。
今回、警備の増員は元より監視さえもつけなかったのは、旧魔王の子孫達にすべての責任を押し付け、堕天使との関係悪化を避けるためである。
もし仮に、あの場へ現魔王、大王、大公のものを置けば、旧魔王派と堕天使の抗争に巻き込まれてしまう。
だが、もしも……最初からアグレアスに魔王クラスの戦力を常駐さ

せておけば、そもそも奪われる事、それ自体を回避できた可能性もある。

それをできないのは、結局戦力が不足しているからに他ならない。

「それにしても、だ。ファルビウム、何故彼の目的がアグレアスではないと言い切れる？」

国の行く末に余り興味が無いのか、アジュカは思い出したかのようにファルビウムに尋ねた。

彼にしてみれば、アグレアスは宝の山であり実利の塊だ。あれを盗む事が、仮面の男にとって本命ではない、というのは違和感があるのだろう。というよりも、それ以上に価値がある物が、あの場所にあるとは考え難いのであろう。

そして、それはこの場で言う事ではないのかもしれない。だが、確かに疑問ではある。前魔王のその遺産、それを盗む事以外にどんな目的があるというのか。

沈痛な面持ちのサーゼクスは何も言わなかったが、それでもあえて止めようとは思わなかった。この場で語ることではないのかもしれないが、確かに重大なことでもあるのだから。

「え？　一々説明しないと駄目？」

「うん、全然わかんない」

セラフォルーの天然な否定。しかし、それはこの場の首脳陣にとって、ファルビウム以外にとって当然の疑問だ。逆に、ファルビウムにとっては質問されなければ、説明する必要性を感じないことでしかないのだが。

「いや……だって、あんなものを盗んで、どうするってのさ」

だからこそ、その苦悩を根本から否定する。ファルビウムは、どうでもよさそうにそういった。

転生悪魔というシステムの根幹、旧魔王の遺産。それが盗まれることを、本当に、毛ほども気にしていない。それが余りにもあけすけだった。

それに、怒りを覚える初代バアルとサーゼクス。共に滅びの魔力を宿す実力者は、その魔力を迸らせて、しかし、互いの顔を見合わせて

嘆息し、納めた。
今この場で憤っても、なんの意味もない。今この状況で、いやさこの先も仮面の男の策を読みきれるファルビウムは、絶対に必要だ。少なくとも、怒りに任せて処分する事等できない。
今回も、彼がいなければ現状以上に混乱し、混沌としていただろう。
「……続けてくれ」
「うん、わかったよ」
かろうじてサーゼクスは促す。同等の実力者であるアジュカは当然の事だったが、ファルビウムも余り動揺はしていない。
この場所に揃っている面々が、そうそう軽挙妄動に走るとは、彼も思っていないのだろう。もちろん、それを差し引いても彼の発言は問題があったが。
「まず、仮面の男がアレをこのまま盗むことが出来たとして、それで一体なんの意味があると思う？　アレはね、アジュカやアザゼルのような豊富な知識を持つ優れた技術者がいて初めて有効利用できるものだ。少なくとも、違法研究所の職員如きじゃあ、盗んでも扱いきれない」
その発言を受けて、アジュカは納得したように頷いた。それを見て、他の面々も真実だと理解する。
なるほど、確かにその通りだ。仮面の男はファルビウム同様に戦略眼、戦術眼を持っているのだろう。だが、まさかアジュカやアザゼルに匹敵する技術力の持ち主が、そうそう沢山いるとは考え難い。
兵法指南は古今東西を問わずに存在するが、悪魔に関連する秘匿技術は、悪魔かその敵対者にしか知られていないはずなのだから。
「でもさ～～、他のどっかの神話とかに売っちゃうのかもしれないよ？」
外交を担当しているセラフォルーの、いかにも外交的な発想である。確かに他神話勢力でも、アグレアスを即利用できるわけではないだろう。だが、それでも、だからこそアグレアスを解析して役立てようという勢力は少なくない。
そして、技術的なことを考えなくても、単に空中要塞としても運用

できるアグレアスを欲しがる陣営は少なくないだろう。
「それも、ない。サーゼクスが直接あって確認したんだろう？　彼は覇王の気質の持ち主だ。誰にも媚を売らないし、金銭にはなんの頓着も持たないよ。ほしいものがあったら買わずに盗むさ」
　そこは、ファルビウムのサーゼクスへの信頼でもある。そして、アジュカへの信頼でもある。
　仮面の男は確かに強大な犯罪者だ。だが、だからと言って過剰に評価しては返って本質を見誤る。
　しかし、確かに無用の長物だ。人間で例えるならば原子力発電所だろうか。確かに国家としては非常に有用だろうが、個人で所有していても仕方が無い。確かに、盗むことそのもので利益は発生しないだろう。
「……では、転生悪魔への批判か？」
「いや、それも違う」
　サーゼクス自身、心を痛めている眷属悪魔と上級悪魔の関係の問題。
　つまり、本来フェアな取引を行うべき主従契約。それが、上級悪魔からの一方的な、極めて強行的な行為によって不当に結ばれていることもある。
　あるいは、契約時だけではなく長期間の過酷な使役などによって、はぐれ悪魔という犯罪者になるものも少なくない。
　それの根幹が、アグレアスによって生産されている悪魔の駒によるものであることは事実だ。
「だって、今更アレを盗んだって、今困っているヒトはそのままじゃないか」
　なるほど、確かにその通りだ。サーゼクスへ心中をぶちまけた仮面の男が、今後数百年という長いスパンを視野に入れて犯行を行うとは考えにくい。
　いや、仮にそうだったとしても今困っているヒトを放置するというのは、確かに彼らしくないだろう。
「では、何が目的だ？」

「さあ？」
　初代バアルの問いに、見等も付かないとばかりに首をかしげるファルビウム。
　というよりも、分かっているのであれば、最初の段階で報告していただろう。身内に無駄な隠し事をするような男ではないのだ、ファルビウムという魔王は。
「何故だ、何故わからない……！」
　苛立って、言葉を荒げる初代バアル。彼にしてみれば、犯罪者でしかない男に前魔王の遺産を『意味不明』な理由で奪われることが許せないのだろう。
　だが、ファルビウムには本当に分からないのだ。余りにも、材料が不足しすぎている。
　その判断材料の不足を、仮面の男も確信しているのだ。今ファルビウムや悪魔が知りうる情報では何も分からないのだと。いや、正確に言えば絞込みが出来ないのだ。
「数百は思いつくよ、それ全部言えばいいの？」
　或いは、仮面の男が思いつく以上の策略が脳裏に浮かんでいたのかもしれない。
　だが、この状況下では絞り込む等不可能だ。頭が良いと言う事は、無駄なことをしないということでもある。
「……なにか、とっかかりでも分からないか？」
「一つ言えることがあるとすれば、彼は危ういところがある。つまり、彼の作戦は最初から破綻も内包している……たとえ僕らが彼の真意に気付こうが気付くまいが、無関係なところで失敗する事もありえるだろう」
　そこで、彼は一呼吸おいてつぶやいた。
「問題は、彼にとってそれすらもスパイスに過ぎないであろうということだ」
「どういうことだ」
「今回の彼の作戦が、万事上手くいくことを祈るべきだという事だよ。下手をしたら、次の本命はもっと危うい賭けに出かねない」

ファルビウムの言葉は、この状況さえも下準備でしかないと、より深刻な状況を懸念しているがゆえの言葉だ。

その場の一同は、今更になってファルビウムという男が魔王にふさわしいのだと確信する。

相手が真っ向から攻めてくれれば、最強の魔王であるサーゼクスは戦える。相手が何がしかの新兵器を用いてくれれば、技術者であるアジュカが対抗策を練るだろう。

だが、奸智を用いて翻弄してくる相手には、軍略に特化したこの男がいなければ、土俵に立つ事さえ許されない。そして、同じ土俵に立ってなお、仮面の男は底を見せていない。

「……ファルビウム。ここまでは、君の言うとおりになった。それを良しとすることはできないが、君が察知してくれたおかげで、最悪の事態は避けられた。もしも、今アグレアスに現政権の悪魔がいれば、それこそ和平どころではなかっただろう」

「だろうね、向こうは外敵を排除しないといけないし、こっちはこっちで国家機密の塊であるアグレアスに敵対中の堕天使を入れるわけには行かない。どうなったって、抗戦せざるを得なかっただろうね」

おそらく、公共の電波等を用いて内部の状況を冥界各地へ放映するだけの準備はあっただろう。そして、そうなれば『小ざかしい裏の交渉』などできるはずが無い。それを国民に知られれば、政権への信頼は地に堕ちる。そうなれば、ただでさえ権威の失墜している悪魔の現政権は、政権交代に追い込まれる可能性さえある。そして、そうなれば戦争の再開にさえ繋がりかねない。

上層部は、戦争を避けたがっている。和平をしようと思っている。だが、多くの面々は互いを敵と認識している。その認識のずれを利用した作戦だった。

「人間風情に、ここまで翻弄されるとは……」

「まあまあ、絶滅させるつもりなら前回で十分だったし、そういう意味ならまだマシだよ」

ファルビウムは、彼がするであろう最終的な着地点を概ね絞り込んでいた。

おそらく、彼は……全ての悪魔を殺す、という手段にはでない。
もっと、ぞっとするような手段を用いて悪魔を滅亡させるのだろう。
なんとも最悪なことに。
それは、真実だった。

前魔王の遺産である空中要塞。

バラキエルを筆頭とする精鋭部隊は、背筋に寒いものを走らせながら死地に降り立った。

つい先ほどまで破壊が行われていたであろう証左の、灰の混じった煙が舞っていた。

それを見て、バラキエルはいよいよ悪魔という種族が、どうしようもなく衰退しているのだと理解する。そして、それは彼らを倒せない堕天使の衰退も意味していた。

悠久の時を超えて争っていた、前魔王。彼らの子孫は悪魔内の内戦に負け政権を追われ、神滅具を持っているとはいえ人間の手玉に取られ、あげく先祖の遺産を自らの手で破壊している。

哀愁だ。もはや、自分も情けなくなってくる。今更ながら、聖書の神と前魔王が呪わしい。彼らが生きていたならば、もう少し聖書の陣営はマシだったはずだ。何を勝手に相打ちをしているのだ。

とはいえ、今は最善を尽くすべきだろう。絶対に上手くいかないことが前提の、無謀な手順を踏んだうえで、彼らと戦うのだ。

「……薄汚いカラスに、混ざりものか！　よくもこの神聖なるアグレアスにその姿を現せたものだな！」

内部におり、ここがどこだかわかっていない、という可能性もあり得た。だが、自分たちを待ち構えていたところを見ると、あいにく彼らはここにどうして自分たちが現れたのか、把握しているらしい。

つまりは、これから自分たちが誘導されて行うであろう、無駄で滑稽な血肉を相食む茶番を、知っていて避ける気はないということだった。

なにもかも、仮面の男の手のひらの上である。誰も彼もがそうと知って、しかしそうせざるを得ない。

奸智。その二文字で表すことがためらわれるほどに、仮面の男の悪意が姿を見せずともこの空間に満ちていた。

「……気づいているようだが、ここは堕天使の領空だ。直下には街も

ある」
「だから何だ？」
「貴様たちの状況はある程度把握している。協力してくれとは言わないが……せめて互いを敵視することはやめてほしい。ここにコレがあることは、互いにとって不都合なはずだ」
「ああ、すぐにでもそうしてやろう。貴様らを駆逐し、盗人を成敗してな」
この事件の主犯格、というのもおかしいが旧魔王派の首魁の二人は、既に交渉を排除していた。
隠れ潜んでいる仮面の男への無駄な捜索を打ち切り、ただ巻き込まれただけの堕天使たちを前に覚悟を決めて、全戦力を集めて戦闘態勢をとっている。
旧魔王派の面々は、つまりは現在の魔王に負けた面々は、誰もが退路を排除した決死の形相だった。
その表情から、バラキエルは分かり切っていた事実を確認する。つまりは、数か月前からわかっていたことが、証明されていた。
誰もが、仮面の男の手のひらの上から出ることはできず、踊らされているとわかっているくせに、踊ることをやめられない。
全てが意のままだった。堕天使も悪魔も、ついさっきこれを知ったのではない。何カ月も前から、こうなることがわかっていてなお、仮面の男の手のひらから出ることができずにいる。彼の望む演目を、誰もが必死で踊っている。踊り狂っている。
仮面の男自身でさえも望んでいないほどに、滑稽なほど誰もが自分の意志で、必死で策略通りに動いていた。
「……貴様、俺の名前を言ってみろ」
「もちろん、私の名前もだ。知っているはずだろう？」
その質問の意味を理解しているバラキエルは、覚悟を決めて彼ら二人の名前を呼ぶ。
それが、ただの「鐘」でしかないと知っていて。
「シャルバ・ベルゼブブと、クルゼレイ・アスモデウスだろう」
それは、仇敵の名前だった。聖書の陣営でも、最古参であるバラキ

エルは自らの陣営にとって、聖書の神と同様に大敵だった魔王の名前を呼んだ。

憐憫と、失望を込めて。

「そうだ、私はシャルバ・ベルゼブブ」

「クルゼレイ・アスモデウス……魔王の血と名を継ぐ者だ！」

バラキエルは、不退転の覚悟を感じ取り、この場が丸く収まらないことを悟っていた。それは、彼にとって悲しむべきことだった。

だが、それは旧魔王派にとってはどうか。

自分たちのことを、憐れんですらいる堕天使を見て、どう思ったのか。

「ここをどこだと思っている?!　堕天使の領空?!　知ったことか!!」

「ここはアグレアス。我らが先祖の、その威厳たる要塞だ！　貴様らが立ち入っていい場所ではない！」

悔しい。許せない。

堕天使が、現魔王が、そしてなによりも自分たちが。

魔王の名前とは、恐怖と敬意をもって呼ばれるべきなのだ。少なくとも、前魔王と直接敵対していた堕天使の幹部からは、敵意と憎悪をもって呼ばれるべきなのだ。

少なくとも、誇るべき偉大なる初代魔王は……自分たちのルーツは、そうだったはずなのだ。

なのに、なぜ自分たちは憐れまれている？

どうして、自分たちはそれを不自然に思わない？

「侮るなよ、堕天使の幹部バラキエル。ふぬけきった、現魔王と我らを混同するな！」

「そうとも、我等こそベルゼブブ、我等こそアスモデウス……その我らが……貴様らを見逃すとでも思っているのか?!」

知っているからだ。今の自分たちが、冥界で必要とされないほどに価値や能力がないのだと。

我らの先祖の、その恥さらしでしかないということを。

堕天使の幹部からすればかつての仇敵の、その没落した子孫でしかないという事実を。

今のバラキエルにとって、旧魔王派は敵ですらない。憐れみの対象でしかないのだと。

なんと情けない、なんと不甲斐ない、なんと……。

「魔王の名を名乗る我らを、軽く見るな！」

「貴様らを駆逐し、神器を持っているだけの人間を排除し……我らは凱旋するのだ！」

できもしない、大言雑言を吐いているのかと……。

偉大なる前魔王。彼らが結局倒せなかった、堕天使の幹部。前魔王が偉大であるほどに、強大であるほどに、その怨敵である堕天使の幹部は強大ということになる。

武闘派であるバラキエルの死は、一種の意味で悪魔の悲願なのだろう。だが、それが今の旧魔王派にできるわけがない。

龍王に代表される、転生悪魔。それを取り込むことで戦力を拡充してきた現魔王。

それに比べて、内戦に敗れて、見逃されて、辺境の地に追いやられた旧魔王派。それがどうして、前魔王ですら果たせなかった偉業を成せるのか？

ましして、その後に控えている仮面の男に。

そして、旧魔王派の本当の意味での敵である現魔王に。

「さあ、行くぞ魔王の名のもとに集いし精鋭よ！」

「いまこそ、我らの力を示すとき！」

冷ややかな視線を感じる。自らと同じ前魔王の血と名を継ぐ、ヴァーリ・ルシファーからの、失望の視線を。

自分たちとは違い、人間との混血でしかなく、しかし魔王を名乗るに足る資質に加えて、白龍皇の力さえもつ天才からの侮蔑の視線を。

実の伴わない名を、大義を振りかざす、魔王の末裔というだけの我らへの……抱かれて当然の軽蔑の眼を。

「「「おおおおおおおおおおおおおおおお！」」」

旧魔王派は、全員が龍神から手に入れた力を発動させた。それに

よって、彼らは格段に実力を向上させる。
無限の龍神、オーフィス。並ぶものなき世界最強のドラゴンから手に入れた力で、自分たちの力でもなければ悪魔の力でもない、担ぎ上げた龍神から与えられただけの力をつかって。
そこまでしても、前魔王と同等程度の自分たちの無力さに憤慨しながら。
「来るぞ……！　殲滅しろ！」
バラキエルは、理解していた。アザゼルの想定通り、旧魔王派は仮面の男を倒すためのなにがしかの手段を用意しており、それを堕天使である自分たちに使い、結果大幅なパワーアップを遂げたのだと。
彼らは大幅に強化されている。それこそ、全盛期の悪魔の軍勢ほどに。しかし、数が少ない。対するこちらは、それこそ全盛期の時代から生き残っている堕天使の幹部と、その部下である精鋭部隊。戦闘経験も含めて、決して劣ってはいない。むしろ優位にあるだろう。高確率で勝てるはずだが……それも仮面の男の横やりがなければである。
言うまでもなく、双方に最も被害が出るのは、戦力が偏っている場合ではなく拮抗している場合である。そして、本来の戦闘ではどちらかが劣勢になれば、撤退という名の敗走もあり得る。だが、矛盾していることにこの戦いは堕天使にとっても悪魔にとっても、等しく陣地の防衛線なのである。その上、双方にとって極めて致命的なことに、この場にいない第三勢力まで存在している。
空間跳躍を巧みに使いこなす仮面の男は、この戦場に対して如何に立ち回るか？
語るまでもない。優勢になりそうになった陣営の、その戦力を間引く。さながらシーソーのように、戦場で潰し合いが続くように、戦力のバランスを整え続ける。
それこそ、戦闘が終了した時に、全員が倒れているように気を使いながら。
己の陣営の戦力が、疲弊しないように気を使いながら。
これを打破する策は単純だ。旧魔王派と仮面の男の陣営。双方を殲滅できるほどの戦力を、アグレアスに集中させればいい。

なんであれば、悪魔の現政権と手を組んでもいいだろう……。前回の、黄金風船さえなければ。

初手だ。初手で、されたら一番困ることをされた。実行できると証明されていた。

戦力を一か所に集中すれば、向こうは戦線を大いに広げる。対処できなくなるほどの物量を投入してくる。だから、戦力を一点に集中させることができない。

だから、この場のだれもが犬死だ。どれだけ必死に頑張っても、ただ空回りするだけだ。

茶番にもほどがある。

「という、地獄絵図になっているはずです」

「すげえな、クソ三つ目。性格悪いにもほどがあるだろ」

「……これって、よく考えなくても堕天使がとばっちりですよね」

「どっちも最悪ですよ。僕らも含めてですけど」

神威空間で待機している三人は、当然アグレアスで起きているであろう状況を把握している。把握しているというよりは、こうなるであろうということをあらかじめ聞かされていた。

空中要塞をほぼ人力で移動させるという単純極まりない力づくでの作戦だが、万事うまくいっているであろうことを考えると、コストパフォーマンスの凄まじさに感心するしかない。

なにせ、この状況を作って得をしているのは三つ目ただ一人であり、他の全陣営が等しく損を被っている。

仮面の男が洗脳してカテレア・レヴィアタンから裏を取った情報によれば、旧魔王派はクーデターを起こす予定だったらしい。正直、悪魔社会とはほぼ接点のない三人からすれば、政権を巡って内輪もめするとは悪魔らしいな、と思った程度である。

しかし、仮面の男にそれを利用されているとなれば、話は別だ。彼らは龍神から手に入れたクーデターの為の力を、余すことなく仮面の男に利用されている。彼らはため込んだ鬱憤も、憤怒も、希望も、期

待も何もかもを使いつぶされている。
結局、仮面の男の悪意の前には、誰もが等しく無力ということだろう。それこそ、仮面の男自身さえも。
彼が期待している、全てが発生していない。
誰かが、仮面の男の策を打ち破ってくれれば、少なくともアグレアスは奪えないだろう。仮面の男にとって、英雄墓場という勢力にとって、何の価値もない空中要塞だが、悪魔にとっては重要な拠点であろう。それを防衛することは、旧魔王派にとっても、悪魔の現政権との同盟を予定している堕天使にとっても、意味のあることのはずだ。
できないわけではない。少なくとも、この場だけでも和解することができれば、今からでも悪魔と堕天使は仮面の男の作戦を打ち破るだろう。
ただまあ、それでもあまり意味はない。いや、もっと言えばこの作戦で重要なのは二つしかない。
一つは、旧魔王派が壊滅すること。
もう一つは、白龍皇を仲間に引き入れること。
特に後者を達成できるのであれば、今現地で相争っている彼らがアグレアスの防衛に成功しても、何の支障もなく聖書の陣営は全部まとめて滅ぶ。
仮面の男は、仮面の男自身が望まないほどにあっさりと、聖書の陣営に勝利する。
「ただ、白龍皇との交渉が上手くいくことはありえない、とも言っていました。これに関しては、上手くいくことを望んでいましたが……」
旧魔王派を壊滅させることには、余り重きを置いていなかった。どのみち、放っておいても滅ぶ勢力である。早めに滅ぼした方が都合がいい。その程度の理由であり、しかし状況の加速という意味では、重要なことだった。必要ではないというだけで。
つまりは、旧魔王派の壊滅に関していえば『高確率で成功』し、『上手くいったらつまらない』、そして『失敗してもそこまで困らない』という目的だった。
だが、白龍皇の懐柔に関しては『高確率で失敗』し、『上手くいった

らうれしい』、そして『失敗したら危うくなる』という種類の目的だった。

つまりは、この作戦は最初から失敗が前提なのである。

例え、目的の半分である旧魔王派が壊滅したとしても。

例え、堕天使陣営の投入した戦力が全滅したとしても。

例え、アグレアスという拠点を盗み出すことができたとしても。

白龍皇の光翼所持者、ヴァーリ・ルシファー。彼を懐柔できなければ仮面の男にとってさえ失敗に終わるのだ。

「考えれば考えるほど、害悪にしかならねー奴だな」

「巻き込まれた方の悲哀を思うと……ああ、どうしてこんなことになってしまったんでしょうか？」

「彼ら自身に非があったとしても、身から出た錆を削ぐ、というレベルではないことだけは確かですね」

漆黒の空間でレオナルドは思う。白龍皇の所持者の懐柔に失敗したとして、アグレアスの奪取に失敗したとして、旧魔王派の殲滅にさえ失敗したとして、それでも別にどうとでもなってしまうのではないかと。

単純な話、何もかもが失敗したとしても、別に英雄墓場という陣営は時間と労力を無駄にしただけだ。勢力間の亀裂が拡大した、聖書の陣営ほどに損は被っていない。

もちろん、時間の浪費は大局的に見て英雄墓場にとって、致命的になるのかもしれない。それを見切るだけの戦略眼を、今のレオナルドはもっていない。例え、仮面の男の持つ目を、レオナルドが備えていたとしても同じだろう。

だが、それでも危うければ危うい状況であるほどに、危うさを増すのが仮面の男の奸智であり智嚢であり頭脳であり戦略だ。つまりは、劣勢になれば劣勢になるほどに大喜びするのが仮面の男なのだ。

彼は、彼自身が否定したくなるほどに強かすぎる。

「上手くいかないって、どうして思ってんだかな」

ルネにしてみれば、仮面の男が交渉事で失敗するという未来を理解できない。少なくとも、彼女の知識の中で彼ほどに弁舌のたつ男はい

ない。

もしも、仮面の男ほどに白龍皇の所持者が優れた知性の持ち主ならば、この作戦自体が成立しそうにないものだが。

「おそらく、主体性のある人なのでしょう。自分の道を自分で決められる、そんな強さを持った人を、言い負かせるには三つ目様は正直すぎると思います」

己の弱さを理解しているヴァレリーは、祈るようにつぶやいていた。

仮面の男は、虚言を用いない。その枷を己に課している以上、自分の信念をもって生きる相手を、懐柔できないことが当然だと思っているのだろう。

いや、もしかしたら、どれだけなそうとしていることが重要であったとしても、自らの如き犯罪者の甘言に乗ってほしくないと思っているのかもしれない。

「……つまり、あのクソ三つ目は私たちの未来がかかっていても、それが上手くいかなくて被害が大きくなったとしても、嘘を言わないって？　ありえる……」

仮面の男は、価値観が異なっている。損得勘定で動かず、己の嗜好を満たすために動く。そして、虚言を弄することは彼にとって、甚だしく興が冷める行為なのだろう。

そして、興と命。自他を問わずどちらを選ぶかといえば、興だろう。

「……つっても、私らに他に頼れるのがいるわけじゃないし」

遠い、遠すぎる。ルネには仮面の男が遠すぎた。

追いつかなければならないその背中は、霞がかっているかのように遠かった。

白龍皇、ヴァーリ・ルシファー。
彼は己の曽祖父、前魔王の遺産の内部を白龍皇の鎧を身にまとって歩いていた。
足元を非常灯のような淡い光が照らし、歩みに迷いはない。迷いはないはずなのだが、心には不可解さがある。
臭いとも言うべき残滓が、道の分岐点で残されている。
赤龍帝の気配。白龍皇にしか分からないであろう儚げな目印に誘導されるままに、ヴァーリは歩いていく。
誘われている。それは余りにも明らかだ。
戦うのであれば、それはかまわない。たとえ、前魔王の遺産であるアグレアスがどうなろうとも、崩壊によって堕天使領土がどうなろうともだ。
だが、意図が分からない。本来気になる事ではないのだが、それでも分からない。
なにか、自分というバトルマニアの、その思考のはるか彼方へ歩かされているのではないのか。そう直感する。
そして、沈黙のまま歩いたその先には、当然のように仮面の男がいた。
機嫌よさそうに尻尾を揺らして、その仮面を脱ぎ焼けた顔を晒している。
三つの目が穏やかな波紋模様を描き、優しく輝いていた。

「……やあ、待っていたよ。君達二人と話がしたかった。協力してほしいことがあってね」
おそらく、歴代でも最強の力を持った二天龍の武具所持者。その中に宿る、二天龍の魂。
彼等は、本能的な敵意を抑えながら会話をしていた。
「……どういうことだ？」
それは、顔のない男の最もすべき事。
墓を造った彼のすべき事。

死者の御霊を鎮める、そのために必要な事だった。

自分の目的はーーーーーー

白龍皇の光翼と赤龍帝の籠手をーーーーーー

二度と誰にも使えないように『完全破壊』することだ

終わりのない円舞。

赤龍帝の籠手の所持者と、白龍皇の光翼の所持者。

赤龍帝ドライグと白龍皇アルビオン。

神話の昔から続く戦いを終わらせるために。

メビウスの輪から抜け出すために。

歴代最強の赤龍帝である少年は……歴代最後の赤龍帝となるために『対話』を行おうとしていた。

『……壊すだと?! どういうことだ、答えろドライグ!』

『白いの……俺たちは変わらなかった。生前も、死後も。だが変わったこともある』

上手くいってほしい、争わずに共に先達の菩提を弔う関係になりたい。

『……そうだな、生前の我等なら人間に使われるなどあり得なかった』

『俺たちは人に触れて、分かり合ってきた。もう一度変わることもできるはずだ』

上手くいかないでほしい、こんなことをやらかした犯罪者の言葉に流されないでほしい。

『我らの争いを終えろと?』

『そうだ……少なくとも、もう人を巻き込むべきではない』

己自身の中でさえ、意思の統一のできぬままに。

「どうか、協力してほしい。この過ちを引き継がせないために」

仮面を脱いだ少年はドライグと共に、ヴァーリ・ルシファーとアルビオンに語り掛けていた。

「やあ、カテレア。カテレア・レヴィアタン。前魔王レヴィアタンの血を継ぐ、所謂旧魔王派の一角だ。君をこうやって裸にひんむいて両手足を拘束して恥ずかしい体勢で固定しているのにはあんまり理由はなくてね。言ってしまえば、自分のきわめて個人的な性的欲求を満たすためだけの、つまりはかわいい悪戯なわけだ。許してくれるだろう？　悪魔は悪をささやくものだ。まさか、他人にしろとささやいておいて、自分がされるのは嫌とか、そんなダブルスタンダードが許されるわけもないよね。これから君は自分のおもちゃになる。自我は奪われ、自尊心は失われ、君は新しい君になる。自分に使われることだけが生きがいの、悲しい大人のおもちゃになるんだ。つまりはドレイでありゲボクであり……まさに眷属悪魔だな。いい飼い主に飼われている犬は楽園に住んでいるというが……君もそれだな。喜ぶと良い、君は雌犬に堕ちる。それは甘美な誘惑だろう？　どうせもう、君は死ぬしかなかったわけだし。よかったじゃないか、運が良ければ子孫が遺せるかもしれないよ」

「き、貴様！　黙っていればいい気になりおって！　よいか、卑しい下賤な人間である貴様の貧相な代物で、私をどうこうできると思うな！　そして、例え一時貴様に心を支配されようとも……いつか、貴様にふさわしい報いを与えてやる！」

負け惜しみ、そうとしか思えない言葉だった。だが、それは彼女に許された最後の抵抗だった。彼女の体に突き刺さった黒い外道の棒は、彼女の体の内側を完全に支配し、その内部でのエネルギーを完全に狂わせていた。

そして、この状況が彼女と仮面の男の実力差を如実に表していた。

つまりは、拘束されている状況どうこうではなく、単純に彼我の実力差を明確に示していた。

「貴女が黙っているんで、寂しいのでひたすらしゃべっていました。話しかけてくれてうれしいです。てっきり、嫌われてしまったのかと……。まあ、嫌われても仕方がないですよね、貴女の家に忍び込んで、

貴女を拘束してさらってしまったんですから！　しかも、特に女性的に魅力的だと思っているわけでもなく、犯罪の為の犯罪に利用するための犯罪行為なんですから！　そりゃあ、女性的なプライド的にアウトですよね。ああ、それとデジカメでいろいろなところを撮影しています。あ、デジカメってなんだかご存知ですか？　悪魔の場合、ほら、人間の文明に関して未開なところとかありそうですよね。テレビの中に人がいる?!　とかそういうリアクション好きなんですよ」

「貴様……いい加減にしろ！　我ら悪魔を、魔王の血を継ぐ尊い我らを侮辱するか！」

「へえ、侮辱したらどうなるんですか？」

臀部を天に突き出す形でひっくり返されて、地面に頭頂を押し付けているカテレア。彼女のその怒りに歪んだ顔に、彼女の股をくぐる形で仮面の男は顔を近づける。

仮面に隠されていることなどなんの関係もない。仮面の男の所作と声色で、仮面の男の悪性がにじみ出ている。

「ねえ、ねえ！　教えてくださいよ！　旧魔王派のカテレアさん！　ねえ、ねえ！」

歯を食いしばって、カテレアはにらみつける。先ほどまで黙っていた理由を今更思い出したのだろう。実際のところ、この男の弁舌は……比喩誇張抜きで悪魔が逃げ出す悪辣さだ。

カテレアの智嚢や語彙を総動員しても、この怪物は黙らせることができない。

「【何だヨそんな難しい顔して。　良いじゃアないか減るもんじゃ無し。ケチケチせずに見せ給えヨ、ホラ】さあ、さあ！　見せてくれよ、君たちに酷いことをしたら、どんな素晴らしい酷い目にあえるんだい?!」

床に這いつくばって、カテレアと合わせて情けない姿をさらしている仮面の男。しかし、当然ながらカテレアの姿ほどに情けなくはなかった。

「パパとママに言いつけてやる～～、とかだと嬉しいな！　君達や現魔王よりも楽しめそうだ！　そういう、死んで美化されて神格化され

ている手合いを嬲るのもいいなあ！　テンションが上がる！　それともあれかな、呪詛の言葉を吐くとかかな？　それ、効果があるの？

自分が生きているうちに効果を発動させてくれる？　自分が死んで人類が滅びても、それでも結果が出そうにないんですけど？」

今この場で、女性としても悪魔としても貴族としても、その尊厳の全てを奪われメスとなる、哀れな彼女に今この場で仮面の男に苦痛を与えることはできない。

例え、この仮面の男自身がどれだけ苦痛を望んでいたとしても、カテレアが視線に力を込めても。

「ねえ、ねえ？　教えてよカテレアさん！　どうして今すぐにでも自分のことを引き裂かないんですか？　こんな痴態をさらしていても平気なんですか？　あれですか、まだまだ我慢できるってことですか?!　もっと恥ずかしいことをしてもオッケーってことですか?!　忍耐力の限界に達していないので、まだまだいけるところまで……本当の本気の全力を見せてくれないんですか？」

本当の、本気の、全力。

カテレアにとって、どれだけつらい言葉なのか。知っていて、分かり切っていて、そのうえで聞いていた。

「ズタズタにしてくださいよ、ボロボロにしてくださいよ、ぐちゃぐちゃにしてくださいよ。ハチの巣にしてくださいよ、八つ裂きにしてくださいよ、ひき肉にしてくださいよ。大歓迎ですよ、大賛成ですよ、大往生ですよ！　貴女に殺されるなら、どんな苦痛だって快楽の如きですよ！」

「貴様……」

「ほらほら、へでもこいてみますか？　小便でもひっかけてみますか？」

「貴様ぁ！」

ついに、カテレアの表情が怒りではなく弱気に染まった。目尻に涙が浮かび、重力に従って額の方へ流れていく。

それは、彼女の精神が折れたことを意味し、同時に、仮面の男にとって歓喜の瞬間だった。

もちろんそれは、彼に取って失望の瞬間でもあった。
「カワイイ！　超カワイイ！　綺麗ですよ、今の貴方の表情は、実にそそられる！　例え全裸でも、体に黒い棒が刺さっていても、尻を天へ突きあげて、つま先立ちで大股を開いて両手をダブルピースにして頭が床についていても！　それでも、貴女は美しい！　なんという悲劇、何という悲哀、何という絶望、何というドラマ性、何とも……ありきたりでありふれていてどこにでもあって珍しくもない、テンプレートな様式美！　ああ、やはり悪魔も人間も、つらいことがあったり苦しいことがあったら、泣いてしまうんですね。感動的です！　やはり我々は分かり合えるんですよ！　なんという、ぐぬぬぬ！」
もう、カテレアは分かっている。この男が、これから何を言うのか。
そう、つまりは……カテレアが覆そうとして、しかし覆せなかった事実を。
「まあ、あなた方の本気なんて、現魔王に負けた時点でお察しですがね」
そう、カテレア・レヴィアタンがセラフォルー・レヴィアタンに勝てなかったという事実を。
「あんな人格的にどうしようもない連中に負けた時点で、あんな人格的にどうしようもない連中が王座にある時点で、悪魔の人材不足の深刻さを現していますよね。いやあ、他にいなかったんですかね？　もっと他人の気持ちがわかって、政治的に配慮できて、他の魔王をいさめることができるヒトとか？　客観的に考えても魔王の名前を地に落としているどうしようもない連中を」
仮面の男は、這って後ろに下がり、立ち上がる。そして、カテレアの臀部の上に腰かけた。
細身のカテレアも、当然悪魔。故に仮面の男の体重を支えええるのは難しくない。加えて、彼女の体は黒い棒が貫き、床に固定されている。故に、動けるはずがなかった。
「あんな、ラノベのキャラだから許されているような連中が、実際に魔王なんざしている時点で、まあ、滅びても仕方がない。まして、それ以下の貴女達がね」

「黙れ！」
　屈辱によって、彼女は遂に涙を隠せなくなっていた。
「貴様に何がわかる！」
　仮面の男は、ここにきて黙った。
　彼女の、本心からの言葉に耳を傾けていた。
「私の、旧魔王などと呼ばれている我らの何がわかる！」
　まるで、秋の虫の求愛に耳を澄ませているかのように、悪魔の女性の、その遠吠えに耳を澄ませていた。
「あんな連中が、魔王をやっている、そんな屈辱を味わい続けてきた我らの、諦めきれぬ復権への意思の、何がわかる！」
　もう、嗚咽が混じって言葉にならない。
「前王の、その威厳ある名前を、貶められた私の気持ちが、短命なる貴様らにわかってなるものか！」
　そんな、むき出しの悲痛な叫びに、情緒や風情を感じているのであろう。仮面の男は完全にリラックスしていた。
「あんな、あんな気のふれた格好をしている女が、レヴィアタンなどと認められるものか！」
「……分かった。やはり、貴女にも貴女にとって価値のあるドラマがあったということだ。出てきて数ページで倒されて、数行しかしゃべらなかった貴女にも……大切な何かがあったということだ。新しい時代などという暴論が、貴女を踏みにじった。作者に負け犬としてやられ役としてアザゼルの活躍シーンの相手にされただけの、ライトノベルのキャラクターではない。それがわかっただけでも、貴女を拉致監禁して封印して羞恥プレイをした甲斐があった。うん、労力に見合った価値はあったな」
　仮面の男はカテレアの顔を持ち上げた。彼自身が動かしたからか、床に刺さっていた黒い棒もあっさりとぬけた。
「では、貴女の望みは叶えよう。現魔王は、ついでに滅ぼしてやる。貴女方がどれだけ切望しても叶えられなかったであろうことを、片手間で解決してやるよ。まあ、結果的に貴女方の名声は更に落ちるだろうがね。なにせまあ……聖書の陣営が滅びるんだ。誰も覚えてないし、

調べようもなくなるさ」
　涙目のカテレア。彼女自身の感情を示す涙は……。
「別天神！」
　流れ落ちて、消えた。
「あ、ぁはぁぁあ……」

　ほとんど無関係に巻き込まれたバラキエルはしかし、だれよりも被害を被っていた。
　筋骨隆々たる肉体には、多くの魔力による傷が刻まれている。彼の敵は、旧魔王派のトップである二人。本来であれば、二人を同時に焼き尽くすこともできるバラキエルだが、なにがしかの手段で強化された二人は、魔王クラスに匹敵する実力者となっていた。
　それゆえに、歴戦の雄であるバラキエルをして苦戦は免れなかった。
　そして、本来であれば目の前の彼らと戦うはずの白龍皇ヴァーリは、いつの間にかどこかに消えていた。
　それは、別に良かった。なぜならば、ヴァーリがここにいないということは、赤龍帝である仮面の男と遭遇しているか、そのために行動しているということなのだから。
　武闘派であり、あまり奸智に長けていないバラキエルにも、この状況に至ればわかることもある。仮面の男の目的が、赤龍帝と縁深い白龍皇にないとは言い切れないのだから。もちろん、その目的までは分からなかったが。
「ふん……やはり無様だな」
　バラキエルは、目の前で焼かれて倒れている旧魔王派のトップ二人に語り掛けていた。
「ぐぅ……」
「な、なんの……」
　魔王クラスであるはずの、シャルバ・ベルゼブブと、クルゼレイ・

アスモデウス。オーフィスとの取引によって力を得たはずの二人は、無様にもアグレアスの建物に倒れていた。

しかし、言ってしまえば当然だったのかもしれない。極めて単純に、悪魔の二人はつい最近出力だけが向上したのであって、バラキエルは神話の時代から素のままで戦ってきた。堕天使の幹部であり戦闘要員であるバラキエルが、魔王『級』でしかない二人に二人がかりとはいえ、押し負けるなどあり得なかった。

文字通り、戦いの年季が違うのである。

「無様だな……本当に無様だ。このままでは、仮面の男に会うことさえできんぞ」

単純な話、旧魔王派では目の前の男に及ばない。もっと凶暴な強化をはたしていれば別だったかもしれないし、魔王クラスであって悪魔以外なら別かもしれない。しかし、魔王の血を継ぐ彼らは、皮肉にもバラキエルにとって戦いなれた相手の劣化コピーでしかない。

もっと言えば、旧魔王派と戦うつもりだったバラキエルと仮面の男と戦うつもりだった旧魔王派では、戦う前段階での覚悟も違う。

つまりは、別にこの結果は想定外でもなんでもないということだった。

「どこぞの神に媚びを売ったか知らんが、その程度のパワーアップでは私を倒すことなどできん。ましてや、仮面の男にはな。……今からでも遅くはない。これ以上、無様をさらすな」

それは、バラキエルなりの交渉だった。自分から見れば若年の、仇敵の子孫への情。憎悪だけではない、魔王への敬意が彼にそうさせていた。

周囲を見れば、不自然なほど堕天使が押していた。押しているにもかかわらず、押しきれずにいた。おそらく、調整されているのであろう。調整されて尚、旧魔王派が劣勢というだけのことで。

「……別に、軍門に下れとも言わん。とにかく、おとなしくしてくれ。そうしなければ、いよいよ仮面の男の思うがままだぞ」

しかし、その言葉は届かない。

ある意味では、聖書の争いの当初からの当事者であるバラキエルと

は違い、目の前の彼らにとっては親から引き継いだものだ。
つまりは、自分が始めたことを自分でやめたバラキエルとは違う。
それ以外に、受け継ぐものない彼らには、堕天使は敵でなければならないのだ。
そうでなければ、いよいよ自分たちは名乗れなくなる。血を継いでいるだけのなにがしかになってしまう。
「俺の名前は……」
「私の名前は……」
何もかも理解した。それでも、それでも……。
無様というのであれば、とっくに無様だ。あんな、緊張感に欠ける軽薄な『化け物』がルシファーを名乗り、研究者であることを第一とする『研究者』がベルゼブブを名乗り、自堕落である己を前面に出す『怠け者』がアスモデウスをなのり……

はじめまして☆　私、魔王セラフォルー・レヴィアタンです☆『レヴィアたん』って呼んでね☆

あんな、恥知らずがレヴィアタンを名乗っている。
あんな奴らに負けた自分たちは、とっくにみじめを極めている！
「ベルゼブブだ！」
「アスモデウスだ！」
「意気ばかりの……大局を読めぬ魔王の亡霊が!!」

「と、まあ……大筋しか決めていないけれども、こんな感じで考えている。どうだろうか、協力してほしい」
仮面を外した焼けた顔の男は、尾をうねらせながら訪ねた。
彼は説明を終えていた。ヴァーリという男と、アルビオンという龍に、いまだ堕天使陣営に属しているはずの彼らに全てを明かしていた。

それを知られれば、なにがしかの対策を取られる。まさにそういう作戦だった。今までのそれと違い、知られればそのまま敗北を意味しかねない、危険な情報漏えいだった。いや、もっと言えば……目の前の史上最強の白龍皇こそ、唯一彼の作戦を阻みうる要素だった。

「くっ……」

そして、その作戦は。彼が明かした大計画は。神話の全てを根こそぎ覆す大事業は。

「くははは！」

実に、ヴァーリ好みの作戦だった。

「なんて、なんてでかい絵だ！　そんなこと、考えたこともない！　随分キレイ事をを並べていたんで、てっきり人違いかと思ったが……なるほど、大悪党だ！」

焼けた顔の男は、笑っていた。慈悲の欠片もない、加虐に満ちた凶暴な笑みだった。

表情が動かないはずの彼からは、隠しきれない悪があふれている。歴代の赤龍帝所持者と白龍皇所持者の御霊を鎮める、という目的から考えればありえないほどに、悪辣極まりなかった。

そして、理解した。ヴァーリという男は目の前の顔のない男を理解した。

これこそが、自分の好敵手なのだと。魔王の血を継ぐ己でさえ不釣り合いかもしれない、歴史の転換点足りうる悪党。

この男には、善と悪が混沌としてまじりあっている。

穏やかで他人のことを思いやれる暖かな善性と、激しく自分勝手な熱い悪。それらが、全く矛盾なく同居している。

『なるほど、確かにそれは我らの最後の大暴れにふさわしいかもしれないな』

『ああ、聖書の神が何を思って我らを封じ、かつ人に与えたのかはわからん』

神話の時代から続いた、二天龍の旅。それの終わりを見るには、ドラゴンの価値観から言っても仮面の男の作戦はふさわしかった。

『だがアイツの意図などどうでもいい。もう、我らは人の世にかまう

べきではないのだ』

そして、その作戦には確かにヴァーリの協力が必要だった。

無理やりいうことを聞かせても仕方がない、全貌を明らかにしたうえで全面的に協力してもらうしかないのだ。

ヴァーリには、もはや作戦など必要ない。告げ口の必要もない。

ただ、彼からの協力を拒めばいい。それだけで、彼の大望はとん挫する。

だからこそ、ヴァーリは聞かなければならない。

「なあ……もしも、俺がお前への協力を拒んだら……どうするつもりだ？」

「ああ、その時は、拒んだ理由によって対応を変えるところだ」

もちろん、考えていなかったわけではない。顔のない男は、思考回路の多くをヴァーリに割いていた。

それだけ彼の協力が必要不可欠であり、同時に彼の行動が固定できなかったからであろう。

「堕天使陣営に属しているから、魔王の血を継いでいるから、白龍皇だったから、とか

まあいろいろ思いついた。考えがなかったわけじゃない」

その眼には、迷いが映っていた。

言ってしまえば、もはや取り返しがつかなくなる。そんな言葉を、彼は悩まし気に口にする。

もとより、虚言は嫌うし、ましてや協力者を弄するなどあってはならないことである。

ゆえに、顔のない男はヴァーリの最も望むことを口にした。

「君がもしも、赤龍帝云々を抜きにしても自分と戦いたいというのであれば……その時はまあ、戦うしかないな」

その言葉はヴァーリとアルビオンを揺さぶるものがあった。

「ご存知の通り、自分には多くの能力がある。洗脳に幻覚、空間移動。どれもが強力で、言ってしまえば逃げることに優れた力だ」

説明しながら、顔のない男は失敗を悟った。

目を輝かせている。先ほどまでの、大事業への興味を忘れている。

三陣営をまとめて、真正面から叩き潰す計画への興味を失っている。

「だが、君が協力を拒むなら……戦うしかない」

赤龍帝も白龍皇も関係ない。

旧魔王の血筋も関係ない。

堕天使陣営のことなど最初から思考にない。

「洗脳を用いず、幻覚も使わず、空間移動も使わずに……自分が死ぬか、君が満足するまで戦うしかない」

これだけの計画を立てる男と、真正面から戦ってみたい。

「そうか……そんなことを言われたら、断るしかないな！」

神話を真っ向から潰そうとしている男と、対等な立場で戦えること。それがうれしくてたまらない。自分に、それだけの価値があるのだと再確認できた。

そう、この男を殺せるのは、自分だけなのだ。史上最強の白龍皇である自分だけだ。

「俺は、お前と戦いたい！」

「ああ～～やっぱりか。アルビオンは？」

頭を抱えながら、顔のない男は理解した。つまりは、目の前の彼は知っている通りの少年なのだと。ロマンを追い求める、はた迷惑なバトルマニアなのだと。

『ドライグの言う旅の終着駅に興味がないわけではない。だが……俺もヴァーリと同じだ。興味がある、歴代最強の二天龍の武具所持者。果たして戦って勝つのはどちらなのかということをな！』

『ドラゴンらしく、戦って決めようということか』

「その通りだ！」

ヴァーリは、禁手の鎧を身にまとう。

闘志を吹き上がらせて、臨戦態勢に移行する。

「史上最強の白龍皇である俺を倒せ、それが成せれば、お前は望む通りに歴代最後の赤龍帝になれるぞ！」

「そうか、残念だ……」

意気高揚のヴァーリと違い、惜しみながらもうなだれる顔のない

男。

本当に、覇気が消え失せていた。

穏やかな善も、激しい悪もない。ただ、失意だけがあった。

「本当に残念だ。君とは、一緒に墓参りをしたかった……」

それでも、少年は勾玉の浮かんだ波紋模様の、三つの眼でヴァーリを見た。

「だが、君の選択を尊重しよう。君と戦って、その結果に従おう」

「ああ、そして、戦うなら今すぐだ！」

輪廻写輪眼のプレッシャーに、そそられるヴァーリ。我慢できぬとばかりに、交渉の決裂を示す闘志をもって、爆発するように仮面の男に襲い掛かる。

「今すぐはダメだ。だから……逃げるとしよう」

おそらく、幻覚ではない空間跳躍の一種。それを思わせる、空間に空いた黒い窓。自分の背後に空いたその穴に体を倒す顔のない男。

「逃がすか！」

転移するというのであれば、追いすがるまで。全力で飛翔するヴァーリは、しかし、目の前が唐突に暗闇に閉ざされた。

幻覚か、と思った矢先、背後から背中を押された。

「【闇に飲まれよ　（おつかれさまです）】」

ヴァーリの手が自分に届く刹那、自らとヴァーリの位置を入れ替えた顔のない男は、自分の作ったワープゲートへヴァーリだけを押し込んだ。

それだけで、十分だった。あとは、ゲートを閉じて終わりである。太平洋のどこかに移動したヴァーリが、冥界に戻るにはだいぶ時間が必要だろう。

「……残念だ。本当に、残念だ」

『……そうだな。これでお前は、奴を殺すしかなくなった』

「……結局同じだ。勝った方の意見が通るなんて、野蛮な話だ」

多くの言葉を使って本心を隠すこともなく、何かの引用をすること

もない。
　素をさらけ出した顔のない男は、寂しそうに自分の手を握っていた。
「まあ、仕方がないか。切り替えていこう」
　目の模様が変わり、その眼に吸い込まれていく顔のない男。吸い込まれたその先は、当然のように神威空間だった。
　暗闇と静寂が支配するその世界には、多くの死体が散乱していた。堕天使、悪魔を問わず多くの人外がものを言わぬ死体をさらしていた。
「今頃、お出ましかよ、クソが……」
　そこには、返り血を浴びた黄金の鎧を纏う少女ルネ、彼女に水を飲ませていたヴァレリー、そして自分でも水を飲んでいたレオナルドの姿があった。
　視界共有で常に見守っていたので無事は当然だが、それでも直接会えば安堵は深まる。
「へこむな……友達になりたかったんだけどな……」
「三つ目さん。本当に勧誘するつもりあったんですか？」
「クソが。あんなこと言われたら、そりゃ戦うだろ」
「三つ目さま。ああいう時ぐらい、調子のいいこと言ってくださいよ……」
　戦闘そのものが苛烈だったのであろうルネは、写輪眼で力なく顔のない男をにらんだ。
　彼女が戦ったのは、全員ベストとは言い難い、傷だらけの手負いだった。だというのに、前回以上に疲弊していたのは、つまりは相手が戦士であったということだろう。それは、ルネにとって天狗の鼻を折るに十分だった。
　顔のない男ほどではないにしても、覇気が欠けている。少なくとも、英雄墓場で仮面の男に戦うと宣言した時よりも万能感は消えている。
　最も、その姿にヴァレリーもレオナルドも安心していたようだったが。

「それじゃあ、ここからは僕らの仕事ですね」
「ああ、二人とも頼むぜ」
「ええ、では送ってください」
仮面の男によって、アグレアスに送られたレオナルドとヴァレリー。これから二人は輪廻眼で能力をリンクさせつつ、アグレアスをステルスモンスターで覆う予定である。
本来、二人の神滅具は弱点をカバーする、耐性を持たせることに特化しており、光学的、魔術的に迷彩するということは不得手だった。だが、改造と創造を合わせれば、共鳴させれば不可能ではない。
『活岩の鯨【トイボックス】』。そう名付けた巨大モンスターは、アグレアスを瞬く間に覆い……堕天使からも悪魔からも捕捉できなくなる。あとは、宇宙空間にまで上昇させてしまえばいい。それで、窃盗は完了である。
「やっぱりこうなったか……アグレアスは盗めても、ヴァーリを引き入れることはできなかったか」
「予定通りだろ……クソが。ほんとに何もかもお前の思う通りかよ」
「ああ、その通りだ。１００点満点中……８０点てところだな」
凶悪な笑みが、焼けた顔を覆っていた。
先ほどまでの失意はどこへやら、既に顔のない男は切り替えていた。これから起きる神秘と神話と価値観と文化の破壊に、胸を躍らせていた。
「もう、ヴァーリにしか自分を止められない。彼以外では自分を阻むことはできない。少なくとも、自分の想定の範囲ではありえない。それを超えてほしいとも思っているが、もうなるようにしかなりえない。英雄も、死神も、冥王も、聖槍も、神器も、超越者も、誰も自分を止められない！」
それは、うぬぼれでもなんでもない事実だった。
結局、彼の暴走を止められるのは……彼自身だけだった。
「お、まだ生きているのがいるな……どれ、辞世の句でも聞いてやるか。【ノックしてもしもお～～～し】オラオラ、なにか言い残すことある？　予定通り無駄死にして犬死して、遺言とかある？」

彼の激しすぎる悪を止められるのは、いつでも……彼の中の穏やかな善だけだった。

「しゅり……あけの……」

「そうか、こいつは……バラキエルか。朱璃、朱乃……ヒロインと、その母親か」

一瞬で、悪意は鎮火していた。死体に鞭打つのだろうと呆れていたルネは、突如として彼から放たれていた悪のプレッシャーが消えたことに困惑していた。

なぜ、嬲らない。彼は、そんな生易しい悪ではない。

「……『朱乃さん、親父さんに不満があるんでしょう？　だったら、がつんと言ってやりましょうよ。そりゃあ、会いたくもないかもしれませんけど、それが嫌なら手紙でも書いてやりましょうよ。絶縁状の一つでも。そうすれば、多分多少は……胸のもやもやがすっきりすると思います。それで、もしも会うなら……手紙を渡すだけでも勇気がいるなら、自分が一緒にいます。俺たち、同じグレモリー眷属じゃないですか』とか、言うつもりだったんだよな……まったく、托卵したバカが言うことじゃねーよな。他人の複雑な家庭の事情に、首を突っ込むべきじゃないよな。軽いノリで……ギャルゲーの攻略対象の選択肢を選ぶ調子でな……。まったく、何様だったんだろうな」

「おい、クソ三つ目……？」

「【心が迷ったなら……ジョニィ・ジョースター。撃つのはやめなさい。よいな、心が迷ったらだ……撃つのはやめなさい。『新しい道』への扉が開かれるだろう】か。いいこと言うもんだな、先人も」

アグレアス窃盗事件。政治的、国防的、文化的、経済的に計り知れない損失を悪魔が受けたこの事件。

しかし、死者は、悪魔堕天使を合わせて『０名』だった。

「さて、どうなるのかな？」

ファルビウム・アスモデウス。

自堕落な姿を隠さない彼は、しかし一人書斎にこもって想像を巡らせていた。

彼の知略をもってしても、ここから先の展開は五里霧中だ。余りにも情報が不足しすぎている。

アグレアスで陣取っていた旧魔王派、アグレアスに突入した堕天使。彼らは誰も戻ってこなかった。冥界では、行方不明と言いながらも死亡説が流れている。だが、実際にそうだろうか。そうした細かい点も、彼にとっては疑うべき点だった。

大局的には、もはや関係がないと思ってしまうかもしれない。だが、それは間違いだ。そうした細かいところを見誤ると何もかもを見誤る。

彼という人間を、もっと理解する必要がある。そうでなければ、おそらく降伏さえできなくなる。そう、ファルビウムは既に諦めていた。勝てない相手であると、受け入れていた。

「多分、最後は力技だ。こちらの希望を打ち砕きにくる」

搦め手ばかりを利用し、正面から戦うことを避けていた仮面の男。それはこちらに対して強さの否定を兼ねたものだった。

だが、それはつまりこちらに対して『正面からぶつかれば勝てる』という思い込みを与えるものでしかない。

いや、それも違う。正面からぶつかっても勝てるだけの何かを用意するつもりだ。

だが、それが尋常の手段では不可能であるともわかっている。というよりも、聖書の三陣営を真正面から切り崩す、打ち砕くということ自体が、一種困難だった。

なぜならば、聖書の陣営はそもそも敵同士だったのだ。今でもそうであり、民衆に至るまで根強く敵対意識が広まっている。

実際には、三陣営が正面切ってぶつかり合えば共倒れにしかならな

い。だとしても、今回の一件のように、誰もが賢しく立ち回れるわけではないのだ。

「……つまりは、逆をするということか」

仮面の男は、優先順位や過去の確執を利用して、こちらの戦力を分散させていた。だが、本命であろう次回は逆をやるつもりだろう。

そんなことは分かり切っている。彼の狙いも逆算すればわかり切っている。

だが、だとして……どうやって現場の人間を納得させるつもりだ。

おそらく、彼の作戦はこちらの戦力を一丸にまとめ上げた上で行わなければならない。そうでなければ意味がないのだ。こちらに、言い訳の余地を残してはならない。

そんな方法が、存在するのか。

それは、戦略の域を超えている。言ってしまえば詐欺めいた手法が必要であり、犯罪者の思考方式が必要だった。

「逃げ道をふさぐのか、それとも危機感を持たせるのか、餌を用意するのか。いずれにしても多分、それ自体は重要じゃないのか……それとも」

ファルビウムにとって、想像しうる最悪の展開が脳裏をかすめる。

「僕を利用するつもりか？」

それは、十分にあり得る。一番高い可能性だ。だとすれば次回の本命に関しては、関わるべきではないのかもしれない。

「だけどね、自滅を覚悟で巻き込んでくる可能性もあるわけで……」

やはり、もう戦略的に負けている。であれば、それ以外の何かが必要だ。それこそ、彼にとって個人的な領分に踏み入れる必要がある。

「でも多分、彼の心を慰めるとなると……」

それは、サーゼクスの強さでもアジュカの技術力でもない。ましてや、戦略で鍋を削っている自分でもない。

どちらかといえば、セラフォルーだ。可能か不可能かはともかく、彼のこだわりに介入できるのは彼女だろう。

それは正しかった。方向性から言えば、それは彼女の領分である。

ただ、ベクトルは正しくとも一致はしていない。彼女では、彼の心を

慰めきることはできない。
だが、結果としてまた別の方向で、セラフォルーの苦渋の決断が冥界の命運を握ることになるのだが……それは流石に、彼の叡智をもってしても想定できることではなかった。
「いずれにせよ、情報を集めないと。流石に無駄な時間だね」

「やはり、エクソシスト内部でも混乱があるようだね」
「当然さ。人間が討つべき悪魔や堕天使と、手を組むなんて受け入れられるわけがない」
衰退した聖書の陣営。それは、疲弊しているからこそ和平を結ぼうとしていた。だが、その隙間を狙いすまして仮面の男が急所を突いた。その結果、戦争を続行する声も上がりつつある。だが、和平を押し切ろうとする声はそれを黙殺しようとしていた。
実際のところ、強硬派のなかにも危機感をもつ者は少なくないのだ。敵対勢力と戦って負ける分には、死ぬのは良い。だが、それが仮面の男などに利用されての結果などと受け入れられるわけがない。そして、その先に何も残らないのであれば、受け入れられるわけがない。
だが、旧魔王派がそうであったように、誰もが賢しく立ち回れるわけではないのだ。
反感をもつ者は、こうして英雄派に情報を与えてくれる。
「他の神話の御仁も、次が自分たちになりかねないと危機感を持っている。僕らと彼らで潰しあってほしいと思っているようだよ」
「おそらく、俺では彼を従えることができないと思っているようだ。だが……そうはいかない」
仮面の男と潰しあえば、必ず英雄派が勝つ。それは、ある意味では正しい認識だった。少なくとも、それは仮面の男にとっても絶対に避けなければならないことだった。

そうなってしまった時点で、仮面の男は負けたも同然である。
なぜならば、彼が正面からぶつかるということは、つまり英雄墓場で保護している面々が被災することを意味しているのだから。
だが、それは英雄派にとっても同じことである。なにせ、相手は三陣営を手玉にとる大悪党。はっきり言って、潰しあって勝ったとしても、こちらの戦力が激減しては意味がない。なにせ、英雄派の主戦力は替えの効かない一騎当千の英雄なのだから。雑魚ならばいくらでも補充できるが、神滅具所持者などは、いなくなっては大損害もいいところである。
「使われるだけの英雄に終わるつもりはない。必ず、彼を従えて見せるさ」
「そうこなくてはな」

この世界に存在する、人間が人外と戦うための力。聖書の神が生み出した神器もそうだが、その一つに聖剣と魔剣が存在する。
聖剣も魔剣も、神器と違い担い手が死んだからと言って消えてなくなったりはしない。ある意味普通の武器同様、そこに存在して使用者が変わるだけである。
とはいえ、どちらも誰でも使えるような、そんな代物でもない。努力ではどうにもならない素質の壁がそこに存在し、その素質にも差はある。
そんな差を埋めるための計画も存在したが……既に失敗に終わっている。
まあ、最初から破たんしているといえばそれまでではある。そもそも、聖剣の数が限られている以上、担い手を量産できたとしても聖剣の数以上に使用者は増やせない。替えが効くようにはなるかもしれないが、一騎当千を前提とする聖剣や魔剣の使い手にはふさわしくないだろう。第一、敵に奪われてはそれまでである。
そこまでして使う価値があるのが魔剣や聖剣であるが、その頂点の一角たる魔剣グラムの担い手でもあり神器所持者でもある彼は、エク

ソシストを抜け出し禍の団に身を置いていた。
エクソシストの闇を知りながら属し続けていた彼が天界を裏切ったのは、彼なりに思うところはあったのであろう。
もっと言えば、天界という天使の組織と、その下位組織のであるエクソシストの間に問題があったのかもしれないが。
いずれにせよ、彼は押し付けられた人種だった。おそらく、知っていても見て見ぬふりをせざるを得ない汚点を、彼は一身に背負っていた。
「ねえねえ、貴方がジークフリートお？」
そんな彼に話しかけてきたのは、魔女の夜（ヘクセン・ナハト）の幹部ヴァルブルガだった。神滅具「紫炎祭主による磔台（インシネレート・アンセム）」の所持者であり、曹操が集めた人材の一人だった。
言うまでもなく、今聖書の陣営を揺るがしている仮面の男に対抗するための人材だった。神滅具に対抗できる人間は、神滅具所持者だけ。それは間違っていない。
上手く彼らを現魔王派が勧誘していれば、仮面の男に対抗できた可能性は大いにある。
もちろん、それは対抗であって圧倒ではない。上位神滅具である魔獣創造が向こうにある以上、物量で劣ることはやむを得ないことだった。
ただそれでも、この場の面々が遺族を守っていれば、悲劇は防げた可能性はある。もちろん、だからと言って遺族の立場がよくなるということはなかったのだが。
「そうだよ。君はヴァルブルガだね、話には聞いている」
「私も聞いておりますわぁん！　あの戦士養成所の実験体だったとか。三つ目ちゃんの研究所襲撃と、その職員の遺族への復讐劇。なにか思うところはありましたの？」
底意地悪く、紫炎の魔女は笑いながら訪ねた。
それに対して、軽く首を振る魔剣士。彼は、自分でも意外なほど落ち着いて、彼女からの暴言を流していた。
そう、彼自身が呆れるほどに、その一件に関しては無関心だったの

だ。もっと言えば、自分が受けた実験そのものをつらいと思っていても、復讐したいとは思っていなかった。

「あいにくだが、心は涼風のようだ。今の自分にあるのは、曹操の力になることだけだよ」

「あらあらん？　貴方、本当にそれでいいですの？　てっきり、復讐のために禍の団に入団したのかと思っていましたわん」

それがないわけではない。復讐云々はともかく、今の自分はエクソシストの組織を抜け出ている。であれば、その時点で大いに裏切っている。だが、どちらかといえば愛想をつかしたに近い。

いや、もっと言えば……。

「どうでもよくなってしまったのかもしれない。あそこに、もう自分のような穢れたエクソシストは必要ないんだろう」

最強のエクソシストが、天界にはまだ存在している。彼がいる限り、自分が抜けたところでなんの損失もないのであろう。

いや、もっと言えば……。

冥界で密かにささやかれている、和平。それが成されれば、自分たちのような戦うことしかしてこなかったエクソシストは不要になる。特に、自分のように改造を受けた汚点は、適当な役職を与えられて放置されるのだろう。

それで、自分の人生に何が残るのだろうか。それは救いではない。少なくとも、寿命の残り少ない自分にとって、何の意味も持たない。

せめて、戦いの中で消えたかった。その方がまだ、自分の人生に意味があった。

だが、戦いは終わるという。その後に、自分は残り少ない時間を、どう過ごせというのだろうか。

わかっている。平和が一番であり、自分のような不幸な実験体や、身内が死んで嘆く復讐鬼も生まれない。時代の区切りであり、今自分たちが我慢しなければ、それこそ永遠に戦いは終わらない。そして、それを判断するのは上の面々だ。どれだけ強かろうと現場の人間が口を挟むなどあり得ない。

しかし、それでも平和は自分を救わない。であれば、自分が救いを

求めるのはいけないことなのだろうか。
　せめて、戦いの中で生きて戦いの中で死にたい。例え、神に弓を引くことになったとしても。
「あらあら、自滅が望なんて、髪の毛同様枯れてますわねぇ！」
「そういう君は人生を楽しんでいるようだね。うらやましいよ」
「ええ！　だって、曹操ちゃんの作戦が万事うまくいけば、とっても楽しいことになりますわ！」
　三つ目の勢力を取り込めば、神滅具所持者の過半が集結することになる。特に、上位神滅具は過半を手に入れることになる。戦闘的な神滅具も、ほとんどが掌中だ。
　であれば、仮面の男が黄金風船事件でやったことが、もっと派手にできる。それはなんて圧倒的で、一方的なのだろうか。
　自暴自棄になっているジークフリートと違い、彼女は言動ほど異常ではない。むしろ、極めて普通だ。
　優勢の戦いにしか興味はなく、拮抗状態や劣勢になれば一目散に逃げだす。言うまでもなく、戦士の気質ではない。だが、それでも間違ってはいなかった。そして、そんな彼女にとって、今回の作戦は実に好みだった。
「三つ目ちゃんと同数の神滅具所持者を集めて、電撃作戦で切り込む。いいわねぇ、実に好みだわぁ」
　確かに、魔獣創造の物量は脅威だ。だが、それは攻勢だからこそ意味があるのであって、守勢に回ると盤石とはいいがたい。特に、こちらには空間系最強の絶霧が既にある。であれば、間合いを詰めてしまえばいい。そして、担い手を隔離してしまえばどうとでもなる。
「こちらの集めた資料だと、三つ目ちゃんのところにいるのはみんな役立たずばかり。こっちの有象無象以下ですわ」
　それは、事実だった。仮面の男にとって、最大の泣き所は彼にとって保護すべき面々が弱すぎる上にそこそこ多いということだった。だからこそ、始球空間内の拠点を放棄してでも、彼らを守ろうとしているのだから。
「こっちには最強の神器を持っている英雄がいるしぃ？　あとは噂の

白龍皇ちゃんをゲットすればいよいよひっくり返りますわん。どんなに神滅具が御大層でも、こっちは使い手が違いますもん」

「本当だったのか？　聞いた話では、堕天使サイドでアグレアスに突入したと聞いていたけれども」

「ええ、逃げたのか、追い出されたのか。結構目撃例もありますわぁ」

ピースがそろいつつあった。そもそも曹操とは、個の武勇に特化した英雄ではない。英雄派のトップである彼の先祖は、人を集めることに、従えることに優れていた。

だからであろう、彼の周囲には英雄の魂を継ぐ者や血を継ぐ者。強力だったり特異な性質を持つ神器の担い手も集まっていた。

仮面の男と違い、利用価値のある戦士が、彼のもとに集っていた。

「三つ目ちゃんの空間跳躍に対応できる絶霧を持っていて、自分でも戦闘ができるゲオルグちゃん。魔王の血を継ぎ強大な戦闘能力を持つ白龍皇ヴァーリちゃん。美人で燃えるわ、た、し。これにヘラクレスやジャンヌや貴方が加わりますわ。一方的にぶちのめせますわねぇ」

そして、常識的に考えて、彼女の論理から言って、そこまで戦力差があれば戦うわけがないのだ。なぜなら、戦っても負けるだけなのだから。逃げても追いつかれるだけなのだから。であれば、こちらに従うだろう。

あれだけの作戦を立てて成功させた男が、その程度の大局を読めないわけがない。実際、曹操にしたところで仮面の男と全面的にことを構える気はないのだ。ただ、こちらが優位な条件で取り込みたい。それだけのことなのだ。そのために神滅具の所持量でも同等でなければならない。

それは正しかった。極めて論理的に正しかった。

曹操が確保し、そして手に入れるつもりの神滅具は最強の神滅具「黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）」上位神滅具「絶霧（ディメンション・ロスト）」聖遺物「紫炎祭主による磔台（インシネレート・アンセム）」そして「白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）」である。

四分の三が戦闘用であり、担い手たちはいずれも神滅具抜きでも戦闘能力を持っている。

対して、仮面の男が集めている神滅具は自身の「赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）」上位神滅具「魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）」戦闘用神滅具「獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）」聖遺物「幽世の聖杯（セフィロト・グラール）」。

四分の二が戦闘用であるが、ルネ自身に特別な血統や能力、技能があるわけではないし、ましてやレオナルドに個人としての戦闘能力などないに等しい。ヴァレリーはかろうじて混血吸血鬼だが、しかし聖槍に対抗できるわけもない。

なによりも、仮面の男はヴァーリと正面から戦えば戦闘能力は拮抗する。

そう、なにもかも万事うまくいく。彼女はそれを確信していたし、その確信は客観的に正しかった。

ただ一つ根本的に、どうしようもなく論理的な抜けが存在していることに、彼女は気づいていなかった。

いや、英雄派の誰もが気づいていなかった。

それを知っているのは、仮面の男とヴァーリだけである。

「……何から何まで、あの男の言う通りになりそうだな」

『ああ、やはり傑物だな。アザゼルでも対抗できん』

太平洋上空に放り出され、そのまま放置されていたヴァーリ・ルシファー。かれは冥界に戻ったものの、アザゼルの元へ帰還することはなかった。

彼は混血悪魔であるということもあって、悪魔領でぶらぶらとしていた。手にした新聞には、先日の一件が大きく載っている。というよりは、全ての新聞の全ての面で、それに関することを取り上げていた。

新聞ごとに微妙に書いている内容や表現が違っていることに、やや面白いものを感じるが、それでも概ね書いてあることは一緒だった。

つまりは、現政権への批判ではなく、旧魔王派への攻撃的な記事

だった。
　無理もない話ではある。元々、彼らが柔軟に動けば問題は解決していた。少なくとも、仮面の男に利するばかりの争いだけは、避けられたはずだ。そうすれば、例えヴァーリが何も手伝わなかったにしても、バラキエルならば多少なり勝機はあったはずだ。その程度には、ヴァーリはバラキエルのことを認めていた。
　とはいえ、自分をああもあっさりあしらったあたり、仮面の男と戦うには、やはり自分がそうであるように相手にそうしなければならないと、思わせる必要がある。
「アルビオン、この後世界はどうなると思う？」
『おそらくだが、奴の言う通りに動くことになるだろう。諸神話の連中も愚かではない。この機に乗じて水面下で動くだろう』
「そして、だからこそ思惑も読み取れるか。とんでもないな」
　どの程度の期間が開くのかは、仮面の男自身にさえ明らかではないだろう。なにせ、ここから先は仮面の男にとっても他人任せの段階だからだ。
　そして、その他人任せには当然ヴァーリも含まれている。いや、もっと言えば、ヴァーリだけが全貌を理解できるのだ。
「そして、お預けにされた以上、すべきことは決まっている。」
　来るべき決戦に向けて、己の力を高める。それ以外にありえない。
「あんな無様は二度とごめんだ。アルビオン、修行するぞ」
　ヴァーリのモチベーションは高い。仮面の男の語った通りになるのかを見極めつつ、修行に専念するつもりだった。
『ああ、そうだな。これは最後の大一番だ。今まで散々戦ってきたが、これで終わりになるというのなら……何が何でも負けられない』
　最も、ヴァーリとアルビオンが勝てれば戦いは続く。そういう意味では、アルビオンもアルビオンなりに区切りを求めていたのかもしれない。
　あるいは、勝ったとしても、それでも終わらせるつもりなのかもしれない。
　それは、ヴァーリにとっても同じことだった。終わるのはいい。退

屈な人生よりは、鮮烈に生きて死にたい。相手が、あれだけ壮大な計画を立てる相手ならそれでもいい。何よりも、白龍皇としてではなく、旧魔王の子孫でもない自分、というものに興味も沸いていた。

だが、それでもそれはきっと、戦って区切りをつけた先のことだ。

何かを選ぶのは、その後でも全然いい。

「それに、コケにされた借りを返さないとな」

白龍皇ヴァーリ。唯一仮面の男を止めうる男は、迷いなく歓喜の笑みを浮かべていた。

ハートを磨くつきやない

悪魔は前魔王の遺産であるアグレアスを奪われた。その事実は当然のように冥界全土に、加えて諸神話全てに伝わった。

あれだけ大きなものを、あれだけ派手に盗み出せば、当然公表をせざるを得なくなる。つまりは、冥界に住まう悪魔も堕天使も、成すすべもなく仮面の男に敗れたのだと。

だが、どうしろというのだ。だが、いったいどうすればよかったというのだ。

奪われて、数日が経過した。それでも、まだ世界は滅びていない。これから、滅びが加速するというだけで。

「……会長、どうしたんですか？」

駒王学園の生徒会室にて、静かに資料を見ていたソーナ。彼女を気遣って彼女の兵士である匙元士郎は、声をかけた。

「サジ……私はこの時ほど己の無力を呪ったことはありません」

その気遣いが無駄とばかりに、魔王の妹でしかない彼女は心中を吐露した。

「彼の作戦は卑しい。相手の弱みに付け込んだ、下品な作戦です。ですが、だからこそ血が流れている」

作戦に血が流れている。その詩的な表現に対して、浅学な匙は返答ができない。もとより、彼女の知略は匙の限界を遥かに超えている。

だからこそ、聞き手に徹する以外で彼女へできることはなかった。

「もし仮に、私が旧魔王派という立場の設定だったとして、仮面の男の作戦に気付いたとして、これがテストやレーティングゲームだったとして、私はこう回答したでしょう。現魔王に押し付けて、高見の見物を決め込むと」

最適解だった。模範回答だった。つまりは、机上の空論でしかない。

確かに、そうすれば現魔王が勝ったとしても現魔王はダメージを受けるであろうし、負ければ政治的にもダメージを受ける。つまり、労せずして堕天使を含めて敵陣営にダメージを与えることができる。

そうすれば、アグレアスが奪われた後に明らかになった、彼らのクーデター計画も現実味を帯びていただろう。

「そう書いていたでしょうね、深く想像もせずに」

そんなことが、できるわけがない。仮にソーナがトップで、そう主張したとしても、理路整然とメリットとリスクを語ったとしても、結局理解は得られなかっただろう。

そう理解する程度には、ソーナも現実を知っていた。

「でも、それは旧魔王派が間違ってた、アイツらのせいで盗まれたってことじゃないですか！」

「違います。サジ……現魔王は、ある程度事前に状況を理解していました。ですが、結局旧魔王派の暴走を止めることができなかった。責任のありかなど、どうでもいいのです。いいですか、サジ。重要なのはアグレアスが盗まれた、知っていたのに防げなかった。それだけのことなのです」

そう、目の前の少年である匙。彼を悪魔へと転生させた悪魔の駒。それの製造に必要不可欠なものが、アグレアスには存在していた。それが盗まれた。それがどれだけの意味を持つのか、どれだけ国家戦略的に損害を受けたのか。

それは、後に領主となるソーナにとって、どれほどの衝撃を与えたのか匙には想像もできない。

「サジ。これは一種詰みの一手でした。つまりは、チェックメイトが確定していた盤面で、実際にチェックメイトをした。それだけのことなのです。つまりは、あの状況で何をしても手遅れだったのです」

つまりは、既に負けていたのだ。ああされては、どんな天才にも最強にも太刀打ちできない状況だったのだ。

できたことといえば、喪失の全てを旧魔王派に押し付けることぐらい。そして、それでも別に、一切の問題が解決したわけではない。むしろ、ただそのままになっただけである。

元々、内戦に負けて僻地に追いやられていた旧魔王派である。加えて、主要な人物は全員『行方不明』となり、その親族も既に旅行という名目で国外に亡命していた。

残っていた財産など知れたものである。人口が激減している今、土地など奪ってどうしろというのか。

つまりは、損失分を誰かから回収することはできず、むしろ堕天使への賠償も問題視されていた。

「ですが、サジ。もし今の悪魔がチェックメイトだったとして、いつからチェックメイトだったと思いますか？」

それこそが、彼女の絶望だった。

旧魔王派との確執は、つまりは内戦で現魔王派が勝利したことに由来する。つまりは、彼女が生まれる以前に、内戦になってしまった時点でとっくに負けていたということになる。

彼女が未来を夢描いていた未来は、盤石だと思っていたこの時代は、自分にとって過去の歴史でしかなかったはずの、姉たちの栄光であるはずの内戦での勝利によってとっくに失われていたということになる。

「私が信じていたものが、根本的に間違っていたということになります」

今の、この時代はサーゼクスをはじめとする現魔王が作ったもの。つまりは、彼らが勝利したことが間違っていたということになる。

そんな社会の中で成功を求めていたソーナもまた、根本的に間違っていたということになる。

「……私が貴方達に語った夢は、何もかもが間違っていたということです」

過去の歴史が過ちであり、現在の社会が過ちであるなら、未来の理想も過ちである。

それは、ある意味では仮面の男の至った結論に酷似しているものだった。

「会長！」

それを、匙は否定する。声を張り上げて、沈んでいた彼女の心を奮い立たせようとする。

「犯罪者のしたことを、真に受けてどうするんですか！　悪いのは全部アイツじゃないですか！」

「そうですね」
「そうですよ！　あんな、あんな腐れ外道のしたことで、理想を諦めるなんてどうかしてます！」
　その通りだった。現政権が悪であるわけがなく、悪魔という種族が悪であるわけがない。悪いのは、犯罪者である仮面の男だ。
「子供を、妊婦も殺したアイツが、正しいわけがない！」
　それこそ、匙の怒りの根源だった。極めて正しい、正しい怒りだった。
　正確な情報を基に、正常な思考の持ち主が、正義に燃えるに足る悪行だった。
「研究所でやってたことは、どうかと思ってます。その責任を、親族がとらなきゃいけないのもわかります。でも、殺すことないじゃないですか！　赤ん坊や子供、妊婦のおなかの中の命だって……殺すことないじゃないですか！　そんなことをしたやつが、正しいなんて、正しい風なことを、言わないでください！」
「それは、分かっています」
「だったら、今後どうすればいいのかを考えるべきじゃないですか！　間違っていたなら、これからどうすればいいのかを考えれば」
「それが、できないからチェックメイトだというのです」
　匙の言っていることは客観的に言って正しい。しかし、その客観的な正しさに意味があるのかという点だった。
　そう、実際のところ大事なのは今後どうするのかということだろう。
　過去が間違っていたとして、現在が危うかったとして、できることは未来を変えることだけだ。では、どうすれば未来を得ることができるというのか。
　仮面の男が間違っていたとして、悪だったとして、だから何だというのだ。悪であると認定することで状況が変わるのか。
「私たち悪魔に、できることは何一つない……！」
　仮面の男の最大の強みは、拠点がわからないという点だ。逃げ足が速く、戦うことにこだわらない仮面の男。彼がフットワーク軽く立ち

振る舞えるのも、究極的には逃げ帰る先がわからないからだ。
そこを特定することができれば、状況は劇的に変わる……ということもないが、好転はする。
国家を有する勢力ならばともかく、仮面の男はほとんど単独の犯罪者だ。特定の拠点に根を下ろす必要がない。というか、具体的にはアグレアスだってそうなりうる。仮面の男がアレを盗み出したのは、それが目的であるとも察しが付く。だからこそ、電撃作戦に賭けるしかない。
もしくは、仮面の男に真正面から戦わざるを得ないような、何かを見せるしかないのだ。
「そんな、なんでですか?!」
「合理的に考えて、仮面の男がその優位を手放す意味がない。逆に言えば、それをひっくり返すほどの何かを、私は想像できません」
仮面の男の最も厄介なところ、それは合理的思考に徹さない狂気の面にある。ファルビウムだけは、その両面を見抜いているが、それでも後手に回っている。
つまりは、作戦を絞り切れないのだ。合理に徹するならば読み切れる。狂気に走るなら自滅するだろう。
だが、仮面の男はそのバランスを取りながら歩いていく。世界を崩す危うい男は、その思考の形さえもバランスが取れず危うかった。
「そんな……」
「サジ。これは言ってしまえば私の理想の、そのはるか先で行われている攻防なのです。例え世界を砕く力があったとしても、いえ、実際に世界を砕く力を持つサーゼクス様であっても、仮面の男の狂気と知略には抗しえない」
どれだけ力があったとしても、対抗できない知恵。即ち、これぞ作戦の極みであろう。
例え、それがどれだけ邪悪で醜悪で凶悪であったとしても、羨望さえ感じている。
「レーティングゲームが試合でしかなく、作戦も多くの局面で生かすべき知略の演習だというのであれば、彼はそのはるか先です。私で

は、太刀打ちできない」
「最強で無敵で、誰も勝てないっていうんですか?!」
「違います。対抗する術は、必ずあります」
「それは?!」
「最強の空間系神器、上位神滅具『絶霧』。その所持者に協力を乞えば……彼の空間転移に対抗できます。問題は、その所持者がどこにいるのか把握できていないということです。下手をすれば、既に仮面の男は把握しているかもしれない」
なんとも最悪なことに、それは事実だった。旧魔王派の面々を拘束している仮面の男は、その脳内から情報を抜き取り、英雄派の面々の情報もある程度把握していた。
「……分かりますか、匙。本当に、何もできないのですよ。私たちは、都合よく現れる善意の協力者抜きに、未来の希望を語れないのです」
極めて技術的な壁がそこに存在している。サーゼクスが空間を削ることができたとして、アジュカが世界を数字で操れたとして、それでも別に隠れた相手を探すことができるわけではない。
強かろうが、頭がよかろうが、対抗できない世界の壁が、当たり前のように存在していた。
「例え、目の前に仮面の男が現れたとしても、我々には、彼を拘束する術がない!」
詰みの盤面。ファルビウムが至っていた思考に、ソーナはようやく至っていた。
だからこそ、彼らの異常性が際立つ。なぜ、こんな絶望の世界で希望を口にできるのか。比較的マシな未来を模索できるのか。
夢も希望もない世界で、未来から目をそらさずにいられるのか。
「せめて、彼と会って話ができれば……彼の心中を理解することができれば、彼の狂気に触れることができれば」
そうすれば、彼の策を読み切れるようになるのかもしれない。そうなったところで、別に彼の作戦を妨害できないのかもしれない。
彼ははまりすぎている。能力と人格が。空間を操る能力と、精神を操作する力と、それらを強化する赤龍帝の籠手と、それを十全以上に

操る精神性がかみ合っている。
その全てに対抗できなければ、太刀打ちなどできるわけがない。
彼の持つ能力が、精神的にも性能的にも彼個人で完結しすぎていて、他の物を必要としていない。だというのに、他に神滅具が三つも存在している。不足どころか過分なのだ、彼の力は。
「策はファルビウム様が対抗できます。ですが、戦闘面ではサーゼクス様が対抗できたとして、魔獣創造の物量にも空間転移にも、我々は抗する術がない」
「……だから、諦めるんですか！　悪魔の未来を、全部諦めちゃうんですか!?」
匙は正しい。正しいが、無力だ。正しさだけでは無力だ。正しさなど無力だ。
匙という少年の精神性や潜在能力は、あるいは『ライトノベルの主人公』にふさわしいのかもしれない。
だが、ライトノベルの主人公がここにいたとしても、結局問題は解決できなかっただろう。
この世界には非の打ちどころのない悪が存在する。しかし、それに対抗できる正義の味方は存在しない。
「そんな、簡単に諦めちゃえるんですか?!　会長は!!」
「……どうしようもないのです。奇跡に縋るほかには、私たちにできることはない」
どれだけ少年が声を張り上げても、少年がどれだけ熱くなっても、少年がどれだけ義憤に燃えても、結局対抗できることはない。
強い、正しい、諦めない、負けない。
そんな精神性では、尊ばれるべき精神では、なんの価値も意味もなさない。
それを目指して仮面の男は戦っているのだから、この場で若き二人が絶望するのも無理はない。
だがしかし、奇跡は起こるべくして起こる。
つまりは、悪魔を救う可能性は、この場の若い悪魔にだけはあった。

生徒会室の、扉がノックされた。

「あの～～、すみません！」

少年の声が聞こえた。おそらく、学園の生徒だろう。神秘も何も知らない、この学園の生徒だろう。滅ぶ悪魔に関心も持たない、人間の生徒だろう。

そう思ったソーナは、匙に目配せする。興奮を抑えて、生徒会役員である匙も居住まいを正した。

「どうぞ、入ってください」

「失礼します～～」

どこか、申し訳なさそうに、一人の少年が入ってきた。

いや少年なのか判別はできない。なぜなら、その来客の顔は、とぐろを巻くまでにぐるぐる巻きにされ、片目しか見えないようになっている包帯まみれになっていたのだから。

「生徒会長の、支取蒼那さんはいらっしゃいますか？」

その姿を見て、一瞬で二人の若手悪魔は理解する。噂をすれば影が差す、それを体現するように、不審者が現れた。

「私が、支取蒼那です。いえ、ソーナ・シトリーと名乗りましょうか、三つ目！」

「てめえが、三つ目か！」

「ええ、そうですね。そう呼ばれています」

驚くほどに、邪気に欠ける気勢で応じるのは、困った様子の仮面の男だった。

なんというか、居心地が悪そうに、申し訳なさそうにしていた。

強さの欠片も感じられない、弱気な物腰に、気勢が削がれた二人。

とりあえず、話をすることにする。

というよりは、まず目の前の男が本当に仮面の男なのか、確認するつもりだったのだろう。

「……神器を、見せていただきますか？」

「ええ、どうぞ」

仮面の男の背後から、濃密な龍のオーラが漂うしっぽが生えてきた。紛れもなく、神滅具の一種である。

であれば、目の前の男は紛れもなく仮面の男に他ならない。

「何をしに来たのですか」

「会長をさらいに来たのか！」

「滅相もない！　自分はただ、少し聞きたいことがありまして」

今にも襲い掛からんばかりの二人に、やはり慌てた様子で仮面の男は居住まいを正して尋ねた。

「リアス・グレモリーは、今どちらにいらっしゃいますか？」

「……答える義務はありません。いえ、私も知らないのです。貴方と関わった彼女は、冥界でも狙われる恐れがありますから」

それは、とっさの嘘だった。実際は、今の彼女はグレモリーの邸で保護されている。

とはいえ、もちろんそれをそのままいうなどあり得ないのだが。

「そうですか。では、冥界に行ってみますか」

聞いたところで、回答が返ってくるとは思っていなかったのであろう。仮面の男はあっさりと引き下がった。

そのまま、何もせずに帰ろうと入ってきた扉から出ようとした。

本当に、ただ聞きに来ただけの様だ。そして、彼が冥界に向かうというのであれば、真っ先に向かうのはグレモリー邸だろう。であれば、それを極力防ぐ必要があった。

それだけではないだろうが、ソーナは不意に手を伸ばして引き留めていた。

「待ってください」

「……なんでしょうか」

「……少し、話をしませんか？」

それはうかつな発言だったのかもしれない。

「はなし、ですか！　自分とＯＨＡＮＡＳＩしたいと、そうおっしゃるんですか?!」

だが、それはのちに世界を救うことになるターニングポイントだった。

「ええ、貴方に聞きたいことがあります。それに、言いたいこともたくさんあります」

その言葉には、少なからずとげがあった。だが、そうした隠しきれぬとがった敵意も、しかし仮面の男にはうれしいことだった。

寂しがり屋の話したがり屋。他者との交流を好むこの男は、感情を向けられることを好む。それが暴力ではなく、会話であるならなおのことに。

「そうですか！　いいですね！　では他の者も呼びましょうか?!」

「ええ、お願いします」

「会長?!」

「サジ……できることをするべきです。違いますか?」

「でも……」

（リアスに、このまま会わせるわけにはいきません）

「わかりました……！」

匙は、その時ソーナの眼を見て、活力が戻ってきていることを理解した。

今、彼女は燃えていた。目の前にいる危険人物に、何かができるのではないのかと燃えていたのだ。

さっきまでとは違い、目の前に明確な目標があり、目的があり、手段があった。であれば、彼女にはなせることがあった。

「やあ、君がヴァーリ・ルシファーかな?」

「……そうだが、お前は?」

「曹操。禍の団、英雄派のトップだ」

「……」

「君の力を借りたい。君をコケにした仮面の男と、もう一度戦いたくはないかい?」

「話を聞こうか」

そして、そんなこととは何の関係もなく、世界は終焉に向けて加速する。

幸せ

「クソ三つ目の奴、どっかに行ったと思ったら……若手悪魔と茶飲み話をするだと？」
「いいじゃないですか……どっかの国を滅ぼそうとか言い出すよりは……」
どこか気だるげにしていたと思ったらいきなりどこかに消えて、そのまま上機嫌で戻ってきて、挙句日本にいる若手悪魔と話をするとか言い出した。
運動していたルネ、土いじりをしていたヴァレリー、戦車のプラモデルの塗装をしていたレオナルドは服を着替えて、仮面の男の指示されるままに研究所の前で待機していた。
「おい、レオナルド。お前あのクソがどこに行ってたか聞いているか？」
「ええ、確か駒王学園に伺うとか」
「なんで一緒に行かなかったんだよ！　お前はいつでもあいつと一緒にいないとダメだろうが！」
「ダメよ、ルネ！　あの方とずっと一緒なんて、誰も耐えられないわ！」
「そこまでではないんですけどねぇ。なんだかんだ言って、一緒にいて面白い人ではありますし。ただまあ、戦車のプラモデルの塗装がまだ終わっていなかったので。三つ目さんは乾燥待ちだったので、ちょっと見てくる程度の気分だったらしいですけども」
レオナルド自身、仮面の男と一緒に過ごすことに不満はない。
レオナルド自身聡明であるし、仮面の男の行動や思想は刺激になる。傑物との会話は、いつだって人生に新しいものを吹き込んでくれるものだ。
なによりも、彼は常に悪であるわけではないのだから。
「なんだ、おもちゃで遊んでたのか。あの野郎は……私が縄跳びしてるってのに」
「ルネ、その言い方だと貴女も遊んでいたみたいよ……」

「まあいい。どうせ気まぐれだろ？　まあ文句を言われるかもしれないが……そん時はそん時だ」

ルネは忘れていない。自分たちが悪魔の敵であるということを。自分がしたことを、この手を汚したことを、それが人間の論理感から言っても間違いであったと。

つまりは、これから自分が向かう先で、何を言われたとしても。それでも、自分は言い逃れも言い訳もしない。開き直りも悪びれもしない。同情も共感も求めない。

結局、今も仮面の男の計画に協力している、立派な犯罪者だ。

「ルネ」

「大丈夫だよ、ヴァレリー。私は、大丈夫」

「サジ、先に言っておきます。もうすでに、リアスには警戒するように伝えましたが……貴方以外の眷属も、彼との話し合いの場に同席させません。彼女たちには、私たちの会話を、生徒会室の外から記録してもらいます。貴方には、格段に危険な役目をしてもらいます」

それは、これから行う会話がどれだけ危険なのか、それでも行うだけの意味があると知っての行為だった。

最悪、自分は旧魔王派同様に殺されるかさらわれるだろう。心を壊され、体を犯されるだろう。同席する匙も、同様のリスクを負う。だが、最悪でもそれだけだ。彼との会話記録は、絶対に無駄にならない。

自分やその眷属が一人犠牲になったぐらいで、彼の記録が取れるなら安いものだった。

そして、それ以上のことなど、彼女は一切望んでいない。

「わかりました。会長のことは、たとえ何があっても守って見せます」

「逆です。サジ、貴方は私が何をされたとしても、絶対に抵抗しないでください」

「そ、そんな?!」

ソーナは、険しい目つきで匙をにらんだ。そこには、絶対に譲れない覚悟があった。

実際のところ、匙という少年がどれだけ頑張ったところで、仮面の男からソーナを守り切るなどできるわけがない。

それは、無駄な被害を生むだけだ。

「サジ……酷なことを言いますが、貴方に命じることは、もしもの時に私と一緒に死ぬことです。私を守ることではありません」

相手は、他の面々も連れてくる。であれば、自分一人で応じるのは無礼であろう。であれば、一人でも供をつけるべきである。

そして、酷だが死ぬのは兵士の役目だ。

「そ、そんな?!」

「サジ……貴方は知っているはずです。ルネという少女に起きた悲劇を」

神滅具所持者、ルネ。彼女の身に起きたことは、匙にとっても他人事ではない。

強力な神器を狙った悪魔と、エクソシストの過激派の激突。それによって、彼女は全てを失った。

匙という少年にとって、アグレアスという国家の戦略資源を奪われたこと以上に重要なあの事件は、それに端を発している。

「この街でも、同じことを繰り返すつもりですか」

「それは……」

「冥界を守るために、この街を犠牲にするなどあってはなりません」

仮に、何もかもうまくいって、匙がすさまじい力を得て、仮面の男を倒すことができたとして。それに伴う被害は、この学校の敷地だけでは絶対に収まらない。

勝てればまだいい。勝てれば、少なくとも悪魔は匙を許すだろう。全力で、彼の蛮勇をほめたたえるだろう。だが、それはあくまでも倒せた場合の話だ。逃げ足の速い仮面の男は、街に被害が出た時点で颯爽と逃げ出すこともありえる。

その場合、匙やその主であるソーナがどれだけの罰を受けるのか、想像に難くない。もっと言えば、それだけでは済まない。

この街で、人が死ぬ。日常と何の関係もないことで、人が死ぬ。それは、絶対に許されないことだった。

ルネという少女は、復讐という暴力でそれを世界に示した。だが、それが起きなかったとしても、それでもそこまでするような理由を、この世界にばらまくことになる。

人が死ぬということは、それだけの悪しきエネルギーを生むことなのだ。

ましてや、無関係の人間にとって、仮面の男以上に匙やソーナが憎まれることになるだろう。

「わかり……ました！　でも、会長は逃げてください！　俺は、抵抗はしませんが、それでも会長の前に立って、逃げる時間を稼ぎます！」

それが、どれだけの難事か。仮面の男から誰かを守るなど、魔王にさえ不可能だった。それでも、それでも少年のまっすぐさはソーナにはうれしかった。

「わかりました。その時は、お願いします」

できるだけ、多くの情報を引き出す。そのために、自分の尊厳が失われることも恐れることはない。だが、できるならこの少年のことも、守りたかった。

「では改めまして、私が仮面の男です」

「僕はレオナルドです」

「ヴァレリーです」

「ルネだ」

会長室で、机を挟んで対峙している悪魔と仮面の男一行。

仮面の男こそ緊張感なく、それこそ憧れの人と出会ったかのように弛緩して、興奮している。だが、他の面々は緊張が隠せなかった。

ルネはややこわばりなめられまいと覇気を昇らせ、ヴァレリーは申し訳なさそうに委縮し、レオナルドは仮面の男の調子に呆れていた。

「シトリー家次期当主、上級悪魔ソーナ・シトリーです」

「眷属悪魔の、匙元士郎だ」

極めて緊張し、一挙手一投足を見逃すまいと集中しているソーナ。

敵意を隠せず、憎悪の視線で四人を見る匙。

駒王学園で、世界の未来を変えかねない話し合いが、始まろうとし

ていた。
「まずは、話し合いに応じていただいて感謝しております。ろくな茶も出せませんが、どうかご容赦を」
「結構ですよ。お互い毒を疑うのは不毛でしょう。自分も犯罪者です、それぐらいのことは弁えています」
上機嫌に、役者めいてオーバーリアクションで楽しそうにしている仮面の男。
勝負服なのか、先ほどまで巻いていた包帯は外し、三つ目のウサギの面をかぶっていた。
「ですが、流石に顔も見せないのは無礼ですね。汚い顔ですが、仮面を脱いでもよろしいですか？」
それに、ソーナも匙も硬直する。確かに、話し合いの場で顔を隠すのは無礼だろう。だが、それでも目の前の犯罪者が、顔をあらわにすることはリスクのある行為だった。
なにせ、顔から得られる情報は少なくない。もちろん完全ではないが、顔がわからない相手と分かる相手では、正体を探る難易度は大きく違う。
国籍や年齢、人種や性別が……少なからず明らかになる。そう思っていた。
仮面の男が、焼けた顔をさらすまでは。
顔を失うことは、つまりは、先ほど挙げたつながりを断つことであり……人間性を欠くものだった。
声もない。目の前の男が、何を失って凶行に走ったのか、少なからず想像してしまったのだ。
「……これだよ」
鬱陶しそうに、焼けた顔の男はため息をついた。
「あいにくですが、自分の顔を焼いたのは自分です。それに、別に悲壮な何かを抱えていたわけではありません。そういう風にみられるのが嫌で、普段は顔を隠しているんですが」
実のところ、顔がないことと仮面の男の凶行にさほどの因果関係はない。無関係ではないが、顔の有無は関係ないのだ。まあ、顔があれ

ばそれはそれで顔を隠していたかもしれないが。
「なので、あんまり気にしないでください」
「そうですか……」
だが、それはそれで困る。期待していたものは得られなかった。まあ、それがわかっただけでも収穫とはいえるが。
この部屋の外で、記録をとっている眷属たち。彼女たちが、情報を冥界に送ることに成功すれば、多少は意味があるだろう。
もちろん、それは仮面の男が気づかないか、それを許した場合に限るのだが。しかし、勝算はあった。以前宣戦布告のためとはいえ、リアスに手を出すことなく退散したのだから。
この男は、知られることをまったく恐れていない。むしろ喜んでいるのだ。
「では、一番先に聞きたいのですが……リアスになんの用があったのですか？」
「それは……彼女の眷属である姫島朱乃さんの状況を知りたかったのです」
やや口ごもりながら、言いにくそうにそういった。
「……はぁ？　だれだそいつ」
ルネの疑問は、レオナルドとヴァレリーにとっても同様だった。ヴァレリーの弟分であるギャスパーが、リアスという悪魔の眷属として保護されていることは知っている。
だが、そのリアスの他の眷属のことなど、知らないし興味もなかった。
「朱乃さん、がどうしたんだよ」
「……そうですか」
朱乃のことを知る匙にしても、仮面の男が気に掛ける意味が分からない。
だが、朱乃はリアスの一番最初の眷属である。リアスの幼馴染であるソーナは、当然朱乃の家庭の事情を知っていた。
だからこそ、仮面の男の行動の意味を理解した。
「実父であるバラキエルが死んで、彼女が気にしているのか、落ち込ん

でいるのかを確認しに来たのですね？」
「……はぁ?!」
「ええっ?!」
「会長、それ本当ですか?!」
「ああ、そういうことですか」
　困惑する他の面々を置いて、レオナルドも理解する。つまりは、ヴァレリーとの約束に絡むことなのだ。
「サジが知らないのも無理はありません。これは、一種の機密ですから。悪魔の敵対者である堕天使幹部バラキエルの、人間との間に生まれた混血児がリアスの眷属になっているなど」
　それを、目の前の男が知っている。それは、余り驚くことではない。
　だが、それは分かったがなぜ気にするのかわからない。
　確かに、ギャスパーはヴァレリーにとって重要であろうし、ギャスパーの保護者であるリアスのことは気に掛けるだろう。だが、それでもリアスの実の兄であるサーゼクスには全面的に敵対関係だ。ある意味同僚である朱乃に関して、ここまで気にするとは思えないのだ。
「じゃ、じゃあギャスパーに迷惑が？」
「……っつうか、なんで悪魔の眷属なんざやってるんだ？　堕天使の陣営だろ普通」
「彼女は、母親を失ったことをきっかけに、父親と袂を分かっています」
　それでも、父親が死んでいい気にならないだろうが。
「だからか……お前があいつら全員を蘇生させたのは」
　ルネは、顔のない男を背後からにらんだ。
　かなり間接的だったが、正直縁が遠すぎるが、それでもヴァレリーにとって大切な人、そのまた大切な人を結果として傷つけたのだ。
　それを、彼なりに気にしていたのであろう。
「それで、許されるとでも思ってんのか？」
「別に……実際のところ約束には絡まない。それが関係ないわけじゃないが、それでも個人的な感情がなかったわけじゃないんだ、ルネ」
　静かに、穏やかに。顔のない男は背後のルネに語りかけた。それ

は、内心を明かすことをためらっているような、そんな静かさがあった。
「……待ってください。蘇生、とはどういう意味ですか？」
「……あのアグレアスで死んだヒトは、皆私が聖杯で生き返らせてます。もちろん、三つ目様が拘束してますけど、死んではいません」
ややためらいがちに、ヴァレリーが答えた。彼女としても、殺した相手を生き返らせたから許される、とは思っていない。
だが、それでも自分の行為の結果は誠実に明かしていた。
「そうですか。全員を生き返らせたのは、バラキエルさんだけ生き返らせることに抵抗があったからですね」
「まあな。命の選別なんて御免だ。やるからには、全員だろう」
それは、間違いなく朗報だった。おそらく、真実であったとすれば、悪い知らせではない。少なくとも、全員が死んだよりは、ましだろう。
例え、真実であっても仮面の男の掌中にあるという事実の前には無力だが。
「……なぜ、そんなに気にするんですか？」
「ん～～」
ソーナからの問いに答えにくそうに、やや恥じらいながら、それでも仮面の男は心中を明かしていく。
それは、彼にとって過ぎた夢であり、理想であり、無意味な妄想だった、妄念だった。もっと言えば、下種な欲だった。
それでも、今の自分に比べれば……圧倒的にマシなのだろうけれども。
「貴女が、サーゼクス様から何をどこまで聞いていたのか知りませんが……自分は昔、匙さん、貴方の様になりたかったんですよ」
「……俺？！」
いきなり、悪魔全体のみならず、聖書の陣営全てに戦いを挑む怪物が、魔王の妹の眷属でしかない少年にあこがれていた。
それは、まるで意味が分からないことだった。
その驚きは、レオナルドを除く全員が共有していたものだった。
「匙さん。自分は、貴方のようになりたかった。それが自分の目標

だった。そのために、必死で努力をしていた。その結果、これだけの力を手に入れた」

懐かしみながら、哀しみながら、思い出しながら。顔のない男は心中を明かす。

それは、余りにも寂しそうで、余りにも悲痛だった。

「自分は、リアス様やソーナ様のような、己の理想をもって邁進する、社会的な立場の女性の元で活躍したかった。出世したかった。正義を語りたかった。ヒーローの様になりたかった。そして、あわよくば……そんな身も心も美しい少女と恋をしたかった」

そんな、ある意味ではありふれ居てるユメを語る顔のない男。彼の語調に激しさはなく、楽しさもなく、喜びもない。

語るユメの普通さに似つかわしくない、何かがあった。

「だからこそ……リアス様やソーナ様。貴女方のことは知っていた。調べていた。今匙さんがそうであるように、眷属になりたかった。今でも、心に焼き付いている。貴女やリアス様の眷属になって、匙さんのように貴女方の他の眷属と親密になっている未来絵図を」

つまりは、リアスの眷属である朱乃のことも、彼にとっては恋い焦がれた相手なのだろう。だからこそ、彼女のトラウマである父に関しても、心を砕いたのであろう。

だが、それではサーゼクスはどうなのだ。彼とてリアスの実兄だ。もっと言えば、何がどうしたら、今の彼になるのだ。

「……だから、ヴァレリーとの約束もあって、バラキエルは殺さなかったんです。ただ、バラキエルに関して、朱乃さんがどう思っているのか知りたかった。それによって、対応を変えるところでした」

「彼女は、とても落ち込んでいました。それを表に出すことは控えていましたが」

「そうですか……やはり」

神妙な顔で、とはいっても表情は読み取れないが。それでも声と所作だけで痛いほど伝わってくる。彼が、朱乃という少女に心を砕いていることを。

「気になっていたことが聞けて、すっきりしました。では、リアス様の

ところに顔を出す必要はありませんね」
　顔のない男は、ソーナの言葉をすんなりと受け入れていた。おそらく、彼自身もそうではないかと思っていたのであろう。ただ、確認をしたかっただけなのだ。
「……ヴァレリーさんとの約束とは？」
　サーゼクスとバラキエルの扱いの違い。それを聞くのはためらわれた。
　ソーナは理解した。匙は顔のない男の感情の変化に困惑しているが、要するにこういう男なのだ。感情の起伏が、尋常ではないのだ。であれば、会話は慎重を機するべきである。
「ああ、それですか。ご存知だとは思いますが、自分はヴァレリーを吸血鬼の国から奪いました。その際に、協力と引き換えに『吸血鬼に危害を加えない』という約束をしたのですよ。まあ、その理屈でいえば転生悪魔であるギャスパーは約束に含まれませんが、それはお役所仕事ですし彼女を裏切る行為です。それが嫌なので、極力配慮しています」
　妙なところで律儀だった。だが、嘘ではないだろう。実際嘘をつく意味がない。
　少なくとも、この場にいる面々にとっては。
「ただ、混血吸血鬼は元々迫害の対象でしたからね。自分の隔離空間に保護してます。これは、ルネと同じ研究所にとらわれていた被害者も同様です」
「……そいつらに、何をさせるつもりだ？」
　その疑問は、ある意味当然だった。ソーナの背後に立ち、やや困惑しながらも敵意を保とうとしている匙の疑問は、ある意味ではソーナも同様の疑問を抱くものだった。
　混血吸血鬼と実験対象となる希少な神器の所持者。少なからず、利用価値がありそうである。
「……なにって、何をですか？」
　きょとんとしながら、顔のない男は尋ね返した。
　やや演技臭さが戻ってきていた。調子を取り戻してきた、というべ

きだろう。
　敵意を保つ努力が不要になり、苛立たし気に匙は怒鳴った。
「だから、そんな可哀想な連中を利用して、何かをさせようとしているんじゃないかってことだよ！」
「はははははははは！　匙さん、漫画やアニメの見すぎですよ！」
　大仰に、相手をいらだたせるようにオーバーリアクションで、顔のない男は分かりやすすぎるほどに大笑いした。
　それを見て、彼の背後の三人は苦笑いをした。実際のところ、匙の想像は邪推でしかない。
　あの英雄墓場で過ごしている彼らに、なんの利用価値があるというのか。というか、顔のない男は最初から他人を必要としていない。自分たちだって、本当は必要ないのだと。
「匙さん、いいですか？　利用するといったところで、つまりは彼らを労働力になるまで教育する必要がある。その手間を考えたら、彼らを利用するなんて大赤字もいいところですよ。もちろん、資源としてばらばらに解体するというなら別ですが、それにしたって彼らに資産価値なんてありませんよ」
「あの……数が必要なら僕の魔獣創造でどうとでもなりますし、質の向上ならヴァレリーさんの聖杯があります。彼らを強くするなり有効利用するなんて、無駄手間です」
　笑いながら説明する顔のない男に、レオナルドが補足した。
　実際のところ、助けた相手を利用するというのは悪人の常套手段だが、仮面の男の場合持っている能力がチート過ぎて、利用するには利用して得られる以上の労力を割く必要が生じていた。
「……じゃあ、お前はそいつらをどうするつもりなんだ?!」
　赤面しながら、匙は問いただした。本来、こうして激高している眷属をいさめるべきソーナだが、どうやら顔のない男は匙に好意的らしく、からかうほどに楽しんでいる。であれば、このまましゃべらせるべきであろう。
　そしてなによりも、それは仮面の男以外の全員の共通の疑問だった。

全員の視線が、仮面の男に集中する。
「……おい、お前ら。その眼はなんだ」
それを察したのか、背後の三人へ向き直って顔のない男は聞いた。
彼にしてみれば、共犯者に疑われることは相当不本意だったらしい。
「……ぶっちゃけ、私たちも気にしてたんだ。お前、あいつらをどうするつもりだ？」
「私も気になってました……いい機会ですから、教えてください」
「そうですね、ちょうどよく聡明な第三者もいますし」
いきなり、第三者扱いされたソーナ達。確かに、匙にしてもソーナにしても分かったところで被害を受けるような内容ではないが、彼らの中でも意思が統一されていなかったことに驚いた。
やはりというか当然というか、顔のない男のワンマン組織なのだ。
彼らは、仮面の男が居なければ何もできないのだ。
「……ルネは仕方ないとして、ヴァレリーも学がないから仕方ないとはいえ、レオナルド。お前には失望したぞ。がっかりだ」
「それは過大評価ですよ。僕は貴方から評価されるほどの人間ではありません」
改めて、座りこむ顔のない男。やや拗ねたように、脱いだ仮面をいじりつつ、気を取り直して説明を再開した。
「まず、現状の説明をお二人にしますが……今、研究所の被害者と混血吸血鬼たちは、隔離空間で保護しつつ、心のケアや美観を整えるために花壇で花を植えています。とはいっても、まだ芽が出ただけですけどね」
悪魔の二人は知らないことだが、始球空間は気が狂うほどの何もない空間だ。生存や生活には適切な気候だが、それでも精神的にはつらいだろう。
花壇による自然な色彩は、きっと優しい意味を持つ。それは、それだけは絶対に間違っていない。三人は、そう信じている。
「その後は……機会を見て字を覚えてもらおうと思っています。今は、自分が盗んだ金で買ってきた育てやすい花を、自分が言う通りに

育てているだけですが、そのうちに自分で育てる花を選んで、試行錯誤しながら、失敗したり成功したり、投げ出したり再挑戦したりして、頑張ってほしいと思っています。そのために、字を覚えたい、そう思えるように待つつもりです」

聞くだに、時間のかかる気の遠くなる計画だった。研究所被害者の面々が、決して若い面々だけではないと察しがつく以上、彼らが立ち直るころには、様々なことが遅くなっているのだと想像もできる。

だが、それでも悪魔の二人は黙って聞いていた。

その、顔のない男の語りが、余りにも毒気なく邪気もなく、穏やかな優しさに満ちていたのだから。

敵意を保つことも忘れて、記録を取られていることも忘れて、聞き入っていた。

「それができるようになったら、希望者を募って、料理とかにも挑戦してもらうつもりです。火や刃物を怖がるヒトもいるでしょうから、簡単なパンとかがいいかもしれませんね。流石にどこかのアイドルのように材料や畑から作るのは無理でしょうが、それでも、自分が普段何気なく食べていたものを、自分で実際に作って食べてみてほしい。それは、きっと新しい発見と感動がある。その先に有る、自分が作った料理を他の人に食べてもらう喜びも知るかもしれません」

その、凡庸な未来。平凡な未来。価値のない未来。

手間がかかるだけの、利益のない未来。

それが素晴らしく聞こえるのは、語る顔のない男にとって、希望に満ちた、宝箱の中身を自慢するような語り方だったからだろう。

「彼らが活動的になったのであれば、いろんなところに連れて行ってやりたいですね。ルネやヴァレリーに出会う前に、自分はレオナルドと一緒に盗んだ金と空間跳躍で世界の名所を見て回っていました。人間が作った建築物とかもいいですけど自然は特にいいですよ、特に海がいい。澄み渡る空の下の、命のあふれる海は自分でも素晴らしいと思えるものでした。流石に全員を一度に、となると無理ですが、ローテーションを組んで、いろいろ連れまわしたいですね」

それは、本当に楽しそうだった。本当に嬉しそうだった。本当に喜

ばしそうだった。
それが、とても先であることを。もしくは、希望的観測でしかないことを。
利益を得られない、時間のかかる苦難の道であることを。
全てを知った上で、仮面の男は希望に満ちているかのように語っている。
「外の世界を知って、その世界に興味を持ってもいい。留学したいとか、就職したいとか言い出すかもしれませんね！　それはいい。とてもいい。なんて、なんて素晴らしい。もちろん、プロのスポーツ選手になるとかは無理でしょう。でも、スポーツを知って、実際に他の人と混じって楽しんで、それに関わりたいとおもったら、すごい興奮しませんか？　疲れて、自分の世界に帰ってきて、それでそこの面々に、スポーツを教えて、皆で楽しむかもしれませんね。それはそれで、きっといい」
顔のない男が、どうしてこうも、表情を見せずに、声だけで、語りだけで感情を表現できるのだろうか。
もはや、独壇場だった。顔のない男の語る、偽る意味のない未来は、その場の面々の脳裏に鮮明に浮かんでいた。
「彼らは、幸せを自分で見つけるんです。彼らだけに価値のある、彼らの人生に意味を感じてほしい。簡単なことではないと、こちら側にとっても彼らにとっても、とても長く険しいことでも、それでも、彼らの歩き方で未来を目指してほしい」
レオナルドが、ヴァレリーが、ルネが。恐れてさえいた、彼らの興味が外の世界へ向かうこと。
それさえも、顔のない男はどこまでも前向きに、素晴らしいことであると語っていた。
「彼らには、舗装された道が必要だ。彼らの今までの人生は、余りにも苦痛で、苦痛と感じることさえできない人生だった。だから、彼らに道を作る。でもそれは、電車のレールじゃない。遥か未来へ飛んでいく、彼らが助走するための、帰還するための飛行場の滑走路だ。まあ、つまりはまだまだ途中で、草案ばかりで詰めていませんが、それは後

ろの三人が考えてくれている」
その言葉に、三人はもう生唾を呑むしかない。
目の前の男の、未来を創る力。それは特殊能力云々ではない、人間に与えられた偉大な力そのものだった。
「急ぐ必要もないし、焦る必要もない。諦めなければ、それでいい」
現実的だったし、道理は通っている。少なくとも、そこまでおかしくはなかった。
だが、話が終わったことで匙は、ようやく目の前の男が憎むべき敵であると思い出した。慌てて、声を張り上げる。
この男を、憎まなければ、ならないと。
「なんでだ?!」
「なにがですか?」
「なんで、なんでお前はそんなことをする?」
それは、ある意味では自己否定だった。
しかし、そうでもしなければ、匙には難癖も付けられなかった。
「自分は、ルネやヴァレリーを妹のように思っている。レオナルドのことは、弟のように思っている。そして、あそこにいる犠牲者や被害者は、子分だと思っている。であれば、自分は親分です」
そして、匙は後悔した。ソーナも後悔する。そんな、そんな質問をしなければよかったのだと。
「つまりは、親代わりだ。親として、してやるべきことがある」
憎むべき、憎まれるべき悪であろうとしている顔のない男。
その所業は、決して許されるものではない。吸血鬼の視点から言えば、被差別階級とはいえ混血吸血鬼は国民であり、ヴァレリーは戦略兵器である。悪魔の視点から言っても、違法とはいえ上級悪魔である研究所の職員を皆殺しにし、その遺族さえも殺し絶やし、陽動で多くの影響を広く与え、しかも戦略資源であるアグレアスを奪った。堕天使との関係も、大幅に悪化している。
「自分の眼、輪廻眼というんですが、これには陰陽遁という考え方がある。陰遁、つまりは精神の力が無に形を与え、陽遁、つまりは肉体の力が形に命を吹き込む」

悪を成した、悪を成す、悪である、悪人。

「それは、本来知恵ある生き物ならだれでも持っているものです」

そんな彼の、善の側面。相手のことを思いやる気持ち。

「白い紙に、いろんな夢を描き、それを現実にするために頑張ること。それは知恵のある生き物の、本来の姿です。だがそれには、どうしようもなく余裕が必要だ。教育だって、本当はそのためにある。だが、彼らにはそれがなかった」

彼の持つ、相手に感情を伝える力。それが、極めて無自覚に周囲へ影響を与える。

彼自身にとってさえ、不本意なほどに。

「匙さん、貴方はソーナ様と出会って充実していますか、幸福ですか？かつて自分があこがれた、貴方の居場所はきっと価値があるんでしょう。ですが、それは余りにも希少な例だ。加えて、誰もが目指せる場所ではない」

彼の抱えている、寂しさや愛情が、自分の間違いを他の人に味わってほしくないという願いが。

「匙さん、あそこにいる彼らは、ろくでもない人生だったんですよ。少なくとも、彼ら自身に一切非はなかった」

どこかにいる誰かではない、特定の場所にいる、一人一人を認識して、彼らのために考えて、行動していた。

「神器所持者は、なぜ実験を受けたのか。混血吸血鬼は、なぜ差別されていたのか」

行動に、発言に、血潮がめぐっている。生きている。

「社会が悪いのか、時代が悪いのか、世界が悪いのか、宇宙が悪いのか、神話が悪いのか、宗教が悪いのか、政治が悪いのか、種族が悪いのか、そんなことは分かりません。ですが、一つはっきりしている」

自分のことを語っているのではない。自分が見た、彼らの不遇を嘆き共感を求めている。

「彼らは、なにも悪くない」

そこのどこに、悪を見つけろというのか。

「匙さん、貴方は確かにソーナ様に出会って救われたんでしょう。で

すが、そんなに大仰である必要がありますか？【果たして人生をやり直すには、本当に神様にチートをもらって、異世界で生まれ変わらないといけないのでしょうか？】伝説のドラゴンを身に宿して、英雄として振る舞う必要があるんですか。たくさんの人に慕われて、美人を侍らせて、最強の力を得ていないといけないんですか」

この男のどこを憎めというのか。

「貴方は、ありふれた日常に不満を抱いていたかもしれない。自分も昔はそうでした。ですが、少なくとも不幸ではなかった。水も飲めたし、飢えたこともない。親にはしかられる以外で叩かれたこともないし、社会から不当に差別されたわけでもない。少なくとも、今自分が保護している彼らの、誰よりも自分たちは恵まれていた」

こんな優しい男と戦えというのか。

「そんな自分たちが、日常の不満の解消にヒーローの力を求め、実際に得て、それこそが幸福であると考えるのは、余りにも傲慢だ。許しがたいほどに、強欲で恥知らずだ。ましてや、それを無知で無力な彼らに押し付けるのは害悪でしかない」

対価を求めずに、彼らのために頑張れる彼は、何とも非の打ち所がないほどに正義だった。

「自分も、最初は彼らになんの期待もしていなかった。あれだけつらい目にあった彼らに、何かを求めてはいけないと思っていた。何かが成せるとおもうのは押し付けだと思っていた。だから、介護されるように穏やかな日々を送らせるつもりだった」

余りにも、慈しみに満ちていた。

「でも、匙さん。彼らの中の、たった一人が、たった一人でも、自分に意見をしたんです。希望をもって、意思を伝えたんです。あれは、とてもうれしかった。彼らには、まだ可能性があるんです！」

本当に自分の子供の自慢をするような、父性と、母性に満ちていた。

「もちろん、彼ら全員にそれを求めるのは余りにも酷だ。でも、彼らの中の一人でも、そうなったのであれば、なりたいと思ったのであれば。自分は、それを見ていたい。かつての力を得る前の自分よりも、圧倒的に絶対的に、比較対象にふさわしくないほどに不遇だった彼らが、

生まれ変わることもなく、異世界に行くこともなく、過去を忘れることなく、素晴らしい力に目覚めることもなく……」

顔が焼かれていることと何の関係もなく、心から幸せそうに笑っている彼のユメを。

「夜に夢でうなされても、目が覚めれば安心して起きて、一日を過ごすことができるのであれば」

暖かで穏やかで健やかでにぎやかな彼のユメを。

「子をなさなくても、誰かの子供が歩いていくところを見守ることができるなら」

そんな、尊いユメを。

「自分は、何に代えても、それを見てみたい」

社会の正義にのっとって、壊せというのか。

「それには、どうしてもヴァレリーの努力が必要だ。彼女には、自分に無いものがある。それが彼らには絶対に必要だ」

この、彼らにとっての救世主を……いや、彼らにとっての『親』を。

「他人の痛みを分かち合い、対価を求めずに献身する。つまり……」

そして、誰もが今度こそ絶句したのは、最後の言葉だった。

「無償の愛ですよ」

愛しさとせつなさと心強さと

「まあ、実際のところ自分はあそこの連中にとって、恐怖の対象ですからね。あんまり近くにはいない方がいいんです。まあ、恐怖の対象はそれなりに存在価値がありますけどそれだって、連中には一生分以上に味わってきましたから、正直いらんでしょう。同じ境遇で、それでも誰よりも強く立つヴァレリーと、それを支えるルネなら、きっと彼らも励みになるはずです。いやあ、真面目な話、自分はギャスパー君にも驚いていたんですよ。だって、ヴァレリー同様にまともな生活をしていなかったにもかかわらず、ちゃんと自分の食い扶持を就労で得ていたんですから。すごいですよねぇ、彼。ぶっちゃけ神器何ぞよりもそっちの方が驚きだ」

顔のない男は、あからさまに語調を変えていた。いや、変わっていたというべきだろう。重い話から、軽い話に切り替えていた。

それでも、周囲の空気は変わらない。

今、この男はなんといったのだ？　無償の愛、それが自分にはないと言ったのだ。

そんなわけはない。少なくとも、彼が語るものは……愛に満ちた世界だった。

「まあ、そんな感じですね。盗んだ金で勉強させたり遊ばせたりしたい。よくある話ですよ。イイハナシダナー、盗んだ金でなければ！　まあ、吸血鬼の国やら研究所の遺族からがっぽり盗んであるから、ヨユーヨユー。これが本当の税金泥棒だな。なあレオナルド」

「……三つ目さんが、ここまで深く考えているとは思ってもみませんでした。まだまだ過小評価していたみたいですね」

「というかだな、レオナルドとヴァレリーにはそう話しただろうが」

「いつですか?!」

「最初に会ったときだよ。ほら、『体に管で栄養補給されていた彼女だ、きっと何か食べたいに違いない。なんでもは難しいが、それでも色々食べさせてあげたいね』とか『ベッドの上から動けなかった彼女だ、きっとどこかへ行きたいと思っているに違いない。何処でもは難

しいが、できる限りいろんなところへ連れて回ってやりたいね』とかいっただろう？」

「ああ、そういえばそんなことも言っていましたね……その後の『君が幸せだと俺が可哀相だ』のインパクトが強すぎて、もう……」

「本当に、レオナルドの言った通りだな。何もかも、このクソの想定内か」

ルネやヴァレリーが悩んでいたことも、決して無駄ではない。むしろ、それは顔のない男の計画の中身になりうるものだった。であれば、彼女たちはそのまま彼らのために何ができるのかを考えておけばいい。

ただ、この男は本当に、彼らの未来を夢描いていたのだ。その三つの眼に如何なる機能があったとしても、決して備わっていないであろう想像力が、この男の最大の長所だった。

「あの……その他の人へ伝える力を一番教えてほしかったんですけど」

涙を流しながら、ヴァレリーは訴える。顔のない男は多くをヴァレリーに示し続けているし、多くを教えてもいる。だが、そんな中に他者を説得する方法は含まれていない。

聖杯の使い方や他人を陥れる方法よりも、なによりもまずそれを学びたかった。

それがあれば、ルネの罪を軽くすることができたかもしれないというのに。

「おいヴァレリー……お前は詐欺師になりたいのか？」

呆れながら、顔のない男はヴァレリーに尋ねる。

この世のありとあらゆる悪を成し、国家転覆まで企てている男は、偽証を嫌っている。それゆえに、軽蔑さえ感じながら諭した。

「相手に意思を伝えるのは、確かに技術がいる。だがそれは、要するに詐欺の手口と同じものだ。詐術も話術も同じだ、違うのは中身があるのかないのかだ。今のお前に必要なものは、相手に気持ちを伝える技術じゃない。一度言って伝わらないなら、何度でも根気よく話せばいい。お前は簡単な礼儀は知ってるんだから、ちゃんと相手と確認しな

がら話せば問題ない。今のお前に必要なのは気持ちを伝えて相手に理解してもらうことじゃない。話の中身だ。知恵と知識と経験と想像力だ。それがなければ、お前の気持ちが伝わっても意味がないだろう？　悪気がなくても、誰かを無駄に損させるだけだ」

「じゃあ、その中身を教えてください……」

「そんなことを言われてもなぁ……知恵や知識はともかく、経験と想像力はいかんともしがたい。ことが落ち着いたら、学校に通うのはどうだ。いろいろ学べるものはあると思うぞ。第一、ルネもいるんだから相談しながら進めればいいだろう。一人で何とかしようというのは、ただの我儘だ。救われる側から見れば、一人に助けてもらうのも二人に助けてもらうのも百人に助けてもらうのも大して変わらないぞ？」

「クソ三つ目の言うとおりだよ。悔しいけど、こいつの言ってることはもっともだ。私を頼ってくれていいんだよ？」

語り合う犯罪者たちを前に、匙はもう敵意を保つ努力さえできなかった。

彼の語る未来は、ソーナの未来に似ていた。救う対象が違うだけで、彼の慈悲はソーナのそれよりも成熟していた。

彼の成した悪を知っていても、それでも、もう匙は目の前の男を『憎むべき悪』とは認識できなくなっていた。

ソーナはもっと深刻だった。彼女は、のど元まで出かかっていた。貴方にも無償の愛はあると。貴方の夢は愛に満ちていると、貴方の夢に……協力させてほしいと。

外で中を記録しているソーナの眷属も、呆然としていた。

ただ、魔法の呪文でもなんでもない『言葉』という他者へ思いを伝える道具が、かくも力を持つのだと思い知っていた。

「質問してばかりでは申し訳ありませんね。貴方からも、なにかありますか？」

ソーナは、これがのちに魔王にも見せることになる資料になっていることも忘れて、かろうじて話し合いを続けていた。

言ってしまえば、ただ話を長引かせるだけのものでもあるが、相手

がどんなことに興味を持っているのかを探るものでもあるが……ただ、藪をつついて、これ以上の何かが出るのを恐れていたのかもしれない。

「そうですね……貴女の好きな音楽や趣味なども気になるところですが、夢とかはありますか？」

「ユメ……理想ですか。私の理想は、全ての下級悪魔に、学ぶ楽しさを与えたいというものです」

「そうですか、それは素晴らしい。具体的には、どのようなご計画を立てているのですか？　草案だけでも伺いたいですね」

「……学校を作りたいのです。魔力が乏しい子供でも、魔力がない子供でも、誰でも等しく最高級の教育を受けられる学校を。そして、できるのであれば……彼らにも中級や上級を目指してほしいのです」

「……ふむ」

顔のない男は、三つある眼を全て白く染めていた。別に、圧力は感じていないが、それでもソーナを見定めている。そんな視線を感じていた。

「今の社会体制では、下級悪魔が中級や上級になるにはレーティングゲームで成績を残すしかありません。ですが、実質的に下級悪魔が上級悪魔の眷属になることは難しいのです。ですから……」

「そうですか。わかりました……ですが、一つ犯罪者からの、忠告を送らせていただいてもよろしいですか？」

正直、顔のない男は彼女の国を滅亡に追い込むつもりだ。故に、彼女の夢は土台から根こそぎ覆される。つまり、彼女の夢も何もかも、顔のない男はご破算に追い込むつもりである。

だが、それでも、言わねばならないと思い、顔のない男自身も迷いながら口にした。もし万が一自分の悪だくみがつぶされて、彼女がユメを叶えられる状況になったときのために。

「少々酷なことを言いますが、貴女の望む学校ができたとしても、それでも結局貴女の理想は叶わないでしょう。下方修正が、絶対に必要です」

「……どういうことだ？」

語り掛けるような、優しい声色。それに、警戒さえできなくなった匙は、ソーナに変わって尋ねていた。

「もし貴女の教育が上手くいったとして、貴女の学校で教育を受けた生徒が実力を得たとして、それでも出世の道は余り広がりませんよ」

それは、犯罪者としての発想ではなく、どちらかといえば経営者としての発想だった。極めて単純な、利害得失による、赤字黒字の世界だった。

「プロという看板そのものに、大して価値はありません。プロになることそのものに、余り意味はありません。卒業も就職も、断じてゴールではないのです」

理想の否定。それは、本来であればソーナにとっても匙にとっても許せることではなかった。若く血気盛んな匙であれば、大声で怒鳴り散らしていたかもしれない。

しかし、それでも、顔のない男の語りかけには、素直に聞き入っていた。

「ものすごく極端な話、サーゼクス・ルシファー様とアジュカ・ベルゼブブ様が政治的な理由で対立して、レーティングゲームで試合をすることになったとしましょう。当然、どちらもプロのレーティングゲームのプレイヤーではありません。ですが、誰だって見たいと思うでしょう？」

その極端極まりない例に、しかし二人の悪魔は頷いた。最強の悪魔であるサーゼクスと、それと対抗できる唯一の悪魔アジュカ。二人が試合形式とはいえ戦うのであれば、それはぜひ見てみたい。

「それですよ。その見たいと思う気持ちがあるから試合は成立するんです。その気持ちがあるから客はお金を払って試合を観るんです。だから、スポンサーがつくんです。だから、プロスポーツは成立するんです。言っては悪いですが、下級悪魔出身者は最初は物珍しく思われますが、身内しか見なくなって終わりですよ？」

その言葉は、若手悪魔二人にとって、その会話の記録をとっているソーナの眷属にとって、余りにも酷な話だった。

単純な話、レーティングゲームのプレイヤーはそんなに数が必要な

いのである。レーティングゲームのプレイヤー、プロは……選ばれたものであるから見る意味があるのだ。

「上を目指す下級悪魔は多いでしょう。そういう意味では、貴女の作る学校には需要がある。供給するために学校を作るのは正しいでしょう。ですが、貴女の育てた生徒を、眷属にしたいという上級悪魔の需要はあるんですか？　ないと思いますよ。だって、地味で人気が出ませんから」

ものすごく、単純でわかりやすい否定だった。

ソーナの学校ができたとして、生徒が入学したとして、生徒がプロ相応の実力を身に着けたとして。そんな、理論上の最高値を達成したとして。

それでも、客は入るのであろうか？　客が入らなければ、プロではないのではないだろう。

「といいますか、レーティングゲームのプレイヤーに引退ってあるんですか？　確か、現役の当主も参加なさっていましたよね。引退制度がないのであれば、ますます数が増えて、名ばかりのプロは増えるだけだと思いますが」

それは、寿命が長い悪魔故の懸念だ。確かに、ここしばらくトッププレイヤーは固定されている。もちろん、政治的な思惑はあるのだと知っている。

だが、つまりはプロになれば引退がないということは、新陳代謝がない。寿命が長い悪魔故仕方がない。もし引退制度があれば、プロになっても悪魔の主観から言えば若くして失業することになってしまう。だが、引退制度がなければ、いつまでたっても若手に機会は訪れない。

「その点に関しては、何か案はありますか？」

「……いいえ、全く考えが及んでいませんでした。ご忠告ありがとうございます」

おそらく、ただ笑われてバカにされるよりも、聡明なソーナにとってはつらいことだっただろう。

内容が理路整然として、しかもこちらを気遣うものだったのだから

当然だ。なによりも、内容が余りにも当然すぎて返す言葉もない。
「……あの、匙さんからはなにかありますか？」
赤面して、うつむいたソーナ。犯罪者が語るユメに比べて、次期領主であるはずの自分の語るユメが稚拙で幼稚だったことにショックを受けているようだった。これでは、それこそ先に顔のない男が言った『詐欺師』同然である。
期せずしていじめてしまった気になった顔のない男は、話題を切り替えようと匙に話を振った。
「……なあ、なんでお前は悪魔を敵に回すんだ。悪魔だけじゃない、堕天使にも……」
それは、核心を突く質問だった。
だが、それは匙にとって、本当にわからない質問だった。こんな、良心的な男があれだけの悪を成したとは、信じられなくなっていた。
しかし、その疑いは一瞬ではれた。目の前の顔のない男の、文字通りの豹変によって。
三つある目の模様が目まぐるしく変わり、その全身からはすさまじく激しい怒気が吹き上がった。
極めて自分勝手な憎悪が、先ほどまでの和やかさを吹き飛ばして顔のない男自身を染め上げる。
「……むかつくからですよ。他に理由なんてない。アイツらは、全員叩きのめして打ちのめして泥だらけにしてやると決めている！」
赤面していたソーナの顔から、一気に血の気が引く。
穏やかさなど、どこにもない。ただ、激しい憎悪が全身を駆け巡っている。
「ソーナ様、聡明な貴女はこうおもっているはずだ。自分が死んでも冥界に影響はない。自分が危険を冒して情報を得れるのであれば、それは自分がどうなったとしても価値があると。ある意味卑屈ですが、正しくもある。今、冥界は現在を守るために、目先の問題を解決するために必死だ。貴女が一人さらわれて犯されて汚されて、それで冥界を救う手だてを得られるのであれば、安いものだ！　ええ、そうでしょうね、だって、貴女はシトリーの次期当主でありレヴィアタンの

妹ではあっても、冥界に今必要な戦力ではないのだから！　無力を気にすることはありませんよ、それが当たり前、それが普通、それが自然でありものの道理だ！　だから、自分は貴女に対してなにも思わない！　ですがねえ、あいつらは違う、あいつらは許さない！　あいつらは許せない！　あいつらは暴かなければ気が済まない！」

イスに座っている顔のない男は、全身から悪を吹き上がらせる。覇気に色があるのであれば、それは紛れもなく黒であろう。全てを染め上げ、汚す純粋な黒。それが、彼の体からあふれ出て世界を覆うようだった。

彼の背後の三人も、慣れているのとしても目を背けそうになる。逃げ出そうと思うことさえできなくなる。

ましてや、ソーナの眷属たちはどうか。同じ部屋にいない彼女たちでさえ、顔のない男から吹き上がる濃密な怒気と憎悪、嫌悪に汗が止まらない。呼吸を忘れて、気を失いそうになる。

「匙さん、貴方はこう思ったことはありませんか？　今の自分の境遇はまるでアニメか漫画のようだと！　自分の通う学校に、綺麗で優しい悪魔のお嬢様が留学してきていて、自分を部下にしたいと勧誘してきた！　平凡だと思っていた自分には実は伝説のドラゴンの力が宿っていて、その力を使えばいろんなことができると！　まるでフィクションだとは思いませんか？　思ったことはありませんか？　あいにくと、この世界は現実ですがね！」

理不尽な怒りが、理不尽への怒りが。

世界への怒りが、自らへの怒りが、あふれ出て止まらない。

文字通り、氾濫してあふれ出てくる。

「自分はそうなりたいと思っていた！　貴方のようになりたいと思っていた！　そのために、自分でいうのもなんですが、それなりに必死で努力したし危険だって犯した。その結果、今の力を得た！　得て、初めて思い至った！　自分の欲しかったものは、自分を満たすものではなかった！　この世界で最強の力は、この世界に存在しないはずの最強の力は、自分には全く必要なかった！　夢を見て、努力して、達成して、そこに何の嘘偽りもなかったというのに……全てが『終わっ

た後』の自分には後悔しかなかった！」

その、目まぐるしく模様の変わり続ける目が、彼の感情の甚だしさを表していた。

眼だけではない、その言葉が顔のない男の悲痛さを訴えていた。

「匙さん」

そこで、いったん言葉が止まった。それでも、あふれ出てくる憎しみは止まらない。

顔を押さえている顔のない男は、しかし、激しさを押し殺しながら訪ねる。

「貴方は、顔も知らない誰かのために、命を賭けることができますか？」

それは、回答を待たない問いだった。

「貴方には、その義務がある！　ソーナ・シトリーの眷属であるあなたは、顔を知らないという理由で、シトリー領地の悪魔を見捨てることができない。なぜなら、貴方はソーナ様の眷属だからだ。ソーナ様は、領民から税収を得ている。それは、領主としての義務を背負うものでもある！　故に、シトリー領で問題が起きれば貴方にも解決する義務が生じるし、死んだとしても仕方がない！　そうですよね、そして、貴方はそれが実際にできるヒトだ！　実に素晴らしい、実にうらやましい、実に妬ましい。貴方のような、熱血主人公のような性格なら、自分もどれだけましだったことか！　自分が、自分の理想の主人公にふさわしい性格なら、どれだけよかったか！　だが、自分は違った。顔も名前も知らない相手のために、好きな音楽も好きな食べ物も知らない相手のために、命を懸けるなんて……冗談じゃない！　戦って実力を示して実績を積んで、出世して祭り上げられるなんてまっぴらごめんだ！　どんなにきれいな女が周囲に居ても、どんなにたくさんの人から称賛されても、どんなにいい家に住んで美味い飯を食ったとしても！　それは、戦うだけの人生じゃないか！　戦い続けるだけの人生じゃないか！　死ぬまで戦うだけの人生じゃないか！　そんな、そんなのは、絶対に嫌だ！」

教師にあこがれる人がいて、医者にあこがれる人がいて、貴族にあ

こがれる人がいる。
しかし、誰もが実際になったわけではない。誰もが、実際にその職業に就いたわけではない。
誰もが、夢を抱く。そのために努力する。しかし、その夢の先が、幸福とは限らない。
「強くて出世するということは、戦って出世するということは、強くなるためにもろもろを我慢して修行し続けるだけの人生だということだ、死の危険を冒してまで戦闘をする人生ということだ！　そんな生き方に、自分は耐えられない！　終わりがあるなら努力ができる。その先に幸福があるなら辛抱できる。だが、その先にインフレしかないのなら！　日常が強くなるための努力と強さを維持するための努力で埋まるなら！　そんな出世になんの意味がある?!」
むき出しの感情が全体重をかけてぶつかってくる。
夢を叶えるために努力して、夢を叶えるために危険を冒して、夢に到達して力を得た。
ある意味では、ソーナが育てようとしていた力なき生徒。彼らが力を得た先に見るかもしれない、一種の地獄を味わった男が叫んでいた。
「自分は耐えられない！　他の誰かがうらやむものも、自分は耐えられない！　どれだけの力を得ても、自分はそんな重みに耐えられない……」
涙が枯れていた。泣き叫びたいであろう、顔のない男は、しかし涙を流さなかった。
「だから、あいつらを許さない」
屈折していた。筋が通っていなかった。
達成すべき目的があり、そのための手段として聖書の三陣営を滅ぼそうとしている男は、しかしその動機が理不尽極まりなかった。
「匙さん。貴方が幼少のころ楽しんだアニメには、きっと子供が活躍するものもあったんでしょうね。子供が、子供のままヒーローになる。自己投影し、楽しんでいたのではないですか？　自分もそうでしたよ。それで、子供が活躍する場合、大人は何をしていると思います

か？　パターンとしては、大人がそもそもその場にいないパターンと、大人が介入できないパターンの二つがあります。前者は所謂漂流ものですよね。これはまあ、仕方がない。デジモンアドベンチャーもそうでしたが、ある意味機動戦士ガンダムだって同様だ。大人がそこに居なければいけなければ、子供の状況を把握できなければ、大人だって神じゃない。できないことだらけでしょう。それは仕方がない。後者だって、同様です。新世紀エヴァンゲリオンや戦姫絶唱シンフォギア、古くはエルドランシリーズの絶対無敵ライジンオーや元気爆発ガンバルガーに熱血最強ゴウザウラー。ああ、プリキュアシリーズもそうでしたね、あっちは多すぎるので割愛しますけど。世界を滅ぼす敵と戦えるのは、特別な力を持っていたり、不思議な力を与えられた少年少女だけ。大人たちは、子供が戦うことを歯がゆく思いながら、それでも自分にできることを全力で頑張って、子供たちを支援する。そういうドラマ性がある」

　憎悪が、より明確になった。

　その対象を、視認しているかのようだった。

「で、この現実は、どうなんですかね？」

　この現実を作った、大人たちに憎悪が向いていた。

「トップをねらえ2とかストライクウィッチーズみたいに、大人になったら無力になっちゃうんですかね？」

　最強の魔王、サーゼクス・ルシファーをはじめとする、強いはずの大人に憎しみを向けていた。

「違うでしょう？　彼らは……強くて尊敬できる素敵な味方なんでしょう？」

　ふざけやがって！

「じゃあお前が何とかしろよ！　子供が戦うことを憂うなら、子供に問題を押し付けるなよ！　お前らすごいんだったら、すごいってことを目の前で示してみろよ！　子供が狙われているんだったら、護衛を大量に付けておけよ！　なんで、守るべき対象であるはずの、子供をそろえて組織を作るんだよ！　大人がやればいいだろうが！　なんのための最強の魔力だ、何のための最強の眷属だ！　じゃあ活躍しろよ！　お前が世界を救えよ！　お前が反逆者を倒せよ！　お前が伝説の化け物と戦えよ！　お前は最強なんだろう!?　なんのための最強だ！　ラノベならわかるさ、主人公を活躍させないといけないからな！　だが、この現実ではそれじゃ通らないぞ。お前に仕事させてやるよ、お前に仕事を回してやるよ！　さあ、活躍してみろ、お前が悪を倒せ、お前が世界を救ってみろ！　できるはずだ、できなければいけないはずだ！　それが大人であるべきだ、それがお前の仕事のはずだ！　世界を守るのは、国家を守るのは、民草を守るのは、子供に押し付けるものではなく、大人の仕事のはずだろう！　それができないなら、偉そうな口を叩くな！　今すぐ椅子から降りて冠を放り捨てろ！　一体何様だ！　魔王様だってんなら犯罪組織の一つや二つ、他の業務のついでに片付けてみやがれ！」

余りにも、ちぐはぐだった。余りにも、支離滅裂だった。少なくとも、誰も意味を理解できなかった。

顔のない男を憐れみの眼で見るレオナルド、彼ただ一人を除いては。

「……貴方は」

ソーナは理解した。つまりは、ソーナの絶望の裏返しなのだ。

今まさに、冥界は奇跡を求めている。最強のはずの四大魔王をして、目の前の男に抵抗もできずにいる。

そして、善意の協力者を期待している。それはつまり、世界の命運を悪魔とも堕天使ともなんの関係もない誰かに、押し付けることに他ならない。

善意の協力者が協力を拒めば、あるいは善意の協力者が目の前の男に及ばなければ。

冥界は滅ぶだろう。
それは、善意の協力者にとってどれだけの不運か。本来、なんの関係もない世界や国家の存亡を極めて一方的に押し付けられてた彼の、その心情たるや、いかに。
それが、目の前の男のそれなのだ。
だが、それは……。
「確かに、そうかもしれません。私たちは、独力で貴方に対抗できずにいる」
ソーナは、言いたいことを言いきった顔のない男に、勇気を振り絞って意思を伝える。
「貴方がしたことを、他の誰かがすれば、貴方に協力を仰ぐこともあったでしょう。ですが、貴方の行為を正当化するものではありません。貴方が語った通り、魔王も全能ではありません。弱いところもあります。貴方は、そこを浅ましく指摘して、悦に浸っているだけです」
それだけではない。だが、それも事実だ。
会話の中で、顔のない男の本質に触れたソーナは、それを指摘した。
「貴方は、幼児的な万能感の抜けない、力のある『こども大人』です」
それを受けて、顔のない男の悪が急激にしぼんでいく。
もとより、顔のない男は賢い男だ。であれば、理にのっとって語れば、理解してもらえるはずだった。
ただ、それは彼自身の自覚がなければの話である。
「自覚はあります。確かに、自分の理屈は幼稚が過ぎる。こども大人と言われても、仕方がない。ですが……」
やや呆れつつも、ためらいながら、それでも顔のない男は気まずそうに応じた。
「それは貴女のお姉さんに言うべきでは？」
ソーナは、ここで初めて顔をそらした。

「姉のことは言わないでください」
「貴女のお姉さんは、引きこもりのニートでも凶悪な犯罪者でもないでしょう。一国家の顔である魔王であり、外交の責任者では？」
「姉のことは、言わないでください！　お願いします！」
「いえいえ、それは卑怯でしょう。ちゃんと答えてくださいよ。正直、貴方は彼女のことをどう思っているんですか？　個人的には、いまだに褒めるところが一つもないんですけど」
「いいじゃないですか、姉のことは、関係ないでしょう！」
「いやいやいやいや……」
「私だって、私だって、私だって！」
「泣かないでくださいよ……」
「姉のことは、どうかと思っているんです！」
「ああ、やっぱりですか。ですよねぇ。正直、【それはひょっとしてギャグで言ってるのか!?】という気分でした」
　顔のない男は、旧魔王派から情報を抜き出している。
　そして、彼らの逆鱗の上でタップダンスを踊っていたのは、サーゼクスよりもむしろ他の三人だった。彼らは、素行に問題がありすぎたのである。
　アジュカには多くの功績があった。ファルビウムに関しては能力的に見直していた。だが、一つも褒めるところがないのがセラフォルーだった。
「犯罪者が催眠術で確認した情報に、なんの信ぴょう性も価値もないとは思いますが、旧魔王派のクーデター計画はご存知ですよね。彼らの鬱憤の半分は、セラフォルー様の公私をわきまえないドレスコードもなにもない振る舞いと、それをいさめない周囲への怒りでしたよ」
「いいえ、多分そうだと思います……私だって、マジカルシトリー参上、とか他の家の人にされたら抗議せざるを得ませんし……」
「じゃあ止めるべきでしたね」
「止まらなかったんです」
「じゃあ、魔王から降ろすべきですよ、アレ」
「ほかに適任な方が居なかったんです！」

「じゃあ……滅ぶしかないですね」

「……私もそう思います」

「……すみません、撮影している方、ご覧になっていますよね？」

気まずくなった顔のない男は、部屋の外で記録を取っているソーナの眷属に、カメラ越しに声をかけていた。

「一息入れましょう。私どもは勝手に水でも飲んでいますので、ソーナ様に紅茶でも一杯入れて差し上げてください」

そう声をかけられた眷属たちは、部屋に入るなと言われたことも忘れて準備にとりかかる。

なにせ、聡明で冷静なソーナが、静かに涙を流し続けているのだ。それはもう気まずかった。

顔のない男を含めて、誰もが何もできなくなっていた。

「……ねえ、レオナルド。こども大人ってなに？」

困った調子で顔を引きつらせていたレオナルドに、ヴァレリーが訪ねた。語彙が少ない彼女には、こども大人という単語の意味が理解できないのであろう。

そして、それを理解できないがゆえに、顔のない男以上にこども大人であるという、ソーナの姉に恐怖を感じていた。

「三つ目様よりも恐ろしい人が、魔王をしているというの？」

「いえいえ、こども大人というのは常軌を逸脱して悪を成す人を指す言葉ではありません。三つ目さんみたいな人がこの世界にあふれていたら、今頃世界はとっくに滅びています」

おそらく、顔のない男はオンリーワンだ。比較対象など、この世界に存在しないのであろう。

その理由も含めて察しのついているレオナルドは、慌てて説明を始めた。

「こども大人というのはですね、自分の絶対性を疑わない人、幼稚な思想を持つ人です。年齢相応の落ち着きに欠け、他人の都合を無視して自分の享楽を優先するのが特徴ですね」

子供っぽいところがあるひと、という説明はヴァレリーには酷である。幼少のころから虐待され迫害されていた彼女に、一般的な幼児像

は存在していないだろう。その気遣いから、あえて抽象的な表現ではなく直接的な表現をしたレオナルドは気遣いの少年である。

しかし、その具体例はソーナには火に油だった。

さらに泣きじゃくるソーナに、傍らの匙も何も言えなかった。

「あの、あの人のお姉さんが魔王で、こどもっぽいところがあるんですか？」

「ああ、あのひとの無邪気さは自分とは次元が違うぞ。当人の妹の前では詳細な説明がためらわれるほどだ」

「それなのに、目の前の三つ目さんに『貴方はこども大人』って言ったんですか」

「ここは突っ込まないとダメかと思って、素で聞き返してしまった。まさか、真面目にそう言ったとは」

その、一国の王への侮辱発言を、もはや匙は訂正する気がなかった。悪魔になってから日が浅く、人間的な価値観を持つ匙をして、弁解の余地は一切なかったのであろう。

「……まいったな。泣かせる気はなかったんだ。本当だ、信じてくれ」

「お前こそナニ言ってんだクソが。普段してることに比べれば、なんのこともねーだろ」

「いや、悪気はなかったんだ」

「悪気全開だろーが、いつものお前は！」

「いや、だからソーナ様には悪気はなかったんだ。傷つけるつもりはなかったんだ」

「どーいう基準だ！」

うろたえている顔のない男は、空間に穴をあけてミネラルウォーターの入ったペットボトルを４本取り出した。自分を含めて、共犯者たちに渡していく。

ほとんど同時に、まるで黒子のように現れたソーナの眷属が、慌てた様子でソーナと匙のために、ティーカップに入った紅茶を机の上に置いていった。そして、そのまま去っていく。

「……なんか、思ってた空気とだいぶ違うな。これも想定外なんだか、喜べない」

予想外の展開を好む顔のない男ではあるが、この空気は好物ではないらしい。なんとか空気を変えられないか、と脳内で目まぐるしく言葉を探していた。

困る顔のない男、というのは中々新鮮であった。或いは、初めて見たのかもしれない。一番付き合いの長いレオナルドを含めて、共犯者たちは珍しいものを凝視していた。

「そうそう、想定外といえば匙さん。貴方の対応も想定外でした。てっきり、自分は憎まれていると思っていたのですが」

なんとか空気を変えようとして、会話の相手を匙に据えたのは必然だった。

できるだけ軽い調子で、ソーナを不快にさせないように、しかし真面目な話題に切り替える。

「……正直、お前と会う前は、お前が憎くて仕方がなかった」

その、真面目な話題に匙も応じる。それは彼としても自分で再確認しなければならないことだった。

顔のない男と話をして、明らかに変わった自分の中の印象を、目の前の男に宣言する必要がある。

「でも、お前に会って、話をして、それで少し考えが変わった。お前が言っていることも、思っていることも、全然間違っていないと思う」

顔のない男の語る夢や理想があいまいでフワフワしていたならば、うさん臭さを感じていただろう。或いは極端で一人よがりな理想であれば、その思い上がりに憤慨していたかもしれない。

だが、顔のない男の語る未来は、到達が困難であっても不可能ではなく、時間はかかっても永遠ではない。

彼ら一人一人に、均一で平等な温かさのある未来を与えていた。

「でも、お前がしたことは絶対に間違ってる」

それは、確固たるものである。揺らぎそうになりつつも、しかし絶対に許してはいけないことだった。

「お前が、お前たちが殺した研究所の遺族。法的にはどうだったのかわからないけど、少なくとも俺は、彼らが死んで当然だったとは思ってねー。もしかしたら、悪魔の法律で、裁判の結果死刑になってたか

もしれない。それなら、まあ仕方がないって諦めてたかもしれない。だけど、お前たちが復讐だって言って殺すのは、絶対に許せない」

静かに、心中を明らかにする匙。

しかし、語りながらも、それでも当人はなにか引っかかるものがあるのか、今一煮え切っていなかった。

「だってよ、ルネ。お前はどうだ？」

「私は、後悔しているし、今アンタが言ったことを今でも考えていないわけじゃない」

それも、彼女の素直な心境だった。

家族を殺された彼女は、故郷を失った彼女は、それでも別に故郷の全てや家族の全てを知り尽くしていたわけでも、深く愛していたわけでもない。

ただ、あの時点の彼女の全てだった。いずれどこかへ巣立ったかもしれないが、それでもかつての彼女にとっては世界の全てだったのだ。

「だけど、でも私はそれを承知で殺したんだ。今アンタにどう思われたって、絶対に取り下げない」

わかっていたことだ。知っていたことだ。であれば、夜の悪夢も含めて、自分の決断の結果だった。

あの日、極めて不条理に全てを失った彼女は、その日以降初めてした、人生の決断だった。復讐という行為をどれだけ否定されたとしても、復讐という決断を揺るがすことはなかった。

「私は、許されなくたって、それでもいい」

と、心中を明らかにしたルネではあるが、やはり苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

そして、同じ顔をしている匙とルネは、同じ男を見ていた。

つまり、顔のない男の、その焼けた顔である。

「……なんだよ」

「お前がうらやましいと思ったのは、初めてだ」

「なんだか、ちゃんと伝えられてねー気がする」

二人は、顔のない男の先ほどまでの心中の吐露に比べて、自分の言

葉が軽く感じられて仕方がなかった。
そんなはずはない。そんなはずはないのだ。なのに、目の前の男の全体重を込めてぶつかってくるような、圧倒的な熱量が欠けていた。
いや、朗らかに語っている時でさえ、目の前の男のイメージはしっかりと伝わってきていた。
ヴァレリーではないが、やはりこの男の言霊はモノが違う。
この男の後に話した身としては、やはりやりきれないものがある。
「あのな、ルネ。なんで自分に対してコンプレックスを抱く。匙さんが今言ったように、何を言っても何を思っていても、行為にこそ罰は発生するもんだ。口でどう言っても、あるいはどう思っても、結局行為につながらなきゃしょうがないだろ。政治家じゃないんだ、この場で何をどう言ったって何も変わらねーよ。匙さんも、そんなに睨まないでください。なんで犯罪者に嫉妬の眼を向けるんですか。自分からすれば、貴方の方がよほどうらやましい」
そう言って、改めて顔のない男は匙を見た。その眼は、波紋模様を帯びて淡く光っている。
「自分は頭が悪いですからね、貴女の主の様に頭の良い方のそばにいることができる貴方がうらやましい。そしてそれは、きっと自分のような日陰者だけではなく多くの方が感じていることですよ」
それは、半分事実で、半分は明らかにおかしい発言だった。
確かに、魔王の妹であり優れた資質と容姿を持つ彼女の眷属になりたいという悪魔はとても多い。それはリアスも同様だが、彼女とソーナを比べれば、やはりソーナの方が顔のない男としては好ましいのであろう。女性としてではなく貴族として、権力者として理想を持つソーナの方が、顔のない男としては好ましいのであろう。
もちろん、その差は比較すれば、という些細な差でしかない。
「おい、クソ三つ目。おまえの頭が悪い？　なんの冗談だ、いつものより笑えねーぞ」
「性格が悪いの間違いではありませんか、三つ目様。それでしたら、全面的に賛成いたしますが」
「三つ目さんの頭が悪いということになったら、世界のほぼ全員が頭

が悪いということになりますよ。貴方が人並み以下なら、僕らなんて犬以下です」

相変わらず、顔のない男は真面目にソーナを称えているが、それでも卑下が過ぎる。

一つの神話を相手に、奸智と謀略をもって立ち向かうさまはまさにトリックスター。

つまりは、共犯者である三つ目一味の狭い了見による井の中の蛙っぷりではなく、世界で証明された事実でしかない。

それを、当の本人は全面的に否定していた。

「何を言ってるんだ。いいか、本当に頭のいい奴は世界と喧嘩なんかしねーんだよ」

それは、彼の中の『頭がいい』人間に対する定義であり、同時に反論できないものだった。

「荒っぽい手段に訴えて、暴力で主張を通す人間のどこが頭がいいんだ？　それともお前らは、上手に相手を貶める奴になりたいと思っているのか？」

「……じゃあやめろよ、って言っても、自分は頭が悪いから他にやり方を知らないんだ、とかいうんだろうな」

「ルネさん、その気づきは大事ですよ」

「どうしてこう、この人は自分の悪を客観的に考えることができるんでしょうか？」

「逆だ、お前ら。頭の悪い人間にしかできないことだってあるもんだ。レオナルドが言うほどじゃないが、世界は頭の悪い奴で満ちているんだからな」

にやり、と勾玉を瞳に浮かべて顔のない男は笑う。それには悪があふれていた。

「頭が悪い奴の気持ちは、頭が悪い奴の方がよくわかるもんなのさ」

匙は理解した。この男はどうやら、尋常ではないほど感情の起伏が激しいのだ。そして、それはつねに論理的な思考によって制御されている。いや、相互関係にあるのだ。感情と思考、そして意思。それらが、この男はどれもが常軌を逸脱していた。そのくせ適合性が取れて

いる。

もちろん、匙はその表現を言葉にできたわけではない。だが、直感的に理解していた。目の前の、化けものの、その精神的な異常さを。

善と悪。それらが全く矛盾なく同居している。一つの犯罪行為に、善と悪がないまぜになり、しかも両方を達成している。

どうやったら、こんなわけのわからない個性が成立するのか、それはもはや困惑を凌駕して納得せざるを得ない領域に突入しつつあった。

「さて、匙さん。さっき貴方は私になぜ悪魔や天使と敵対するのか、と聞きましたね？」

そして、再び悪性が匙に向けられた。戯れめいて、もうどうにもならない真実の、その一端を明かそうとしていた。

「自分が明かした心中は、言ってしまえば動機でしかない。目的に関してではなく、私の心中を貴方は尋ねたと思ったので、そう答えました。ですが、私が彼らと敵対して何を得ようとしているのか、それに関して多少明かしましょう。全部教えるのは、流石に面白くありませんからね」

そう言って、ペットボトルの水を飲む。それこそ、とても美味しそうに。

今の匙の、その呆然としている姿を肴にしていた。それを自覚しても、匙は表情を引き締めることしか出来ない。

少なくとも、二人は泣いているソーナから意識を意図的に遠ざけていた。

余りにも、器量の違いが明確だった。力の大きい小さいではなく、不可能を組み伏せ叩きのめす、圧倒的な人間力に負けていた。

「端的に言って、研究所の被験者と混血吸血鬼を助けるためですよ。『別に他の神話でもよかった』のですが、聖書の神話が一番都合がよかった。彼らには生贄になってもらいます。彼らを滅ぼすことで、自分が守るべき連中に安息を与えたい」

それは、ファルビウムが想定している作戦そのものだった。

つまりは、真正面から神話を一つ潰すことで世界に暴力の大きさを

示す、それだけのために神話を崩壊させようとしていた。
「数百人を助けるために、数億を犠牲にするっていうのか？」
「別にかまわないでしょう。少なくとも、聖書の陣営が今まで流してきた流血に比べれば非常に細やかだ」
激高する気勢を失っている匙は、固唾を呑みつつ確認する。
「いったいどれだけの神話や国家が、民族が宗教が、『西暦以降』の聖書の勢力によって駆逐されていたのか、知らないわけがないでしょう？」
そこで、西暦以降、と強く言った。それには、匙には余り意味がないことだったが、それでも強くいった。
「貴方の尊敬している魔王や、彼と同盟を結ぼうとしている天界が、どれだけ版図を広げてその犠牲が生まれたのか。貴方は知っているはずだ」
「だから、滅ぼすってのか。そのためにアグレアスも？　眷属悪魔を生み出さないために？」
「いえ？　あれに関してはもう返してもいいくらいです。まあ、返しませんが」
眼に浮かんだ模様が、勾玉から白いものに切り替わる。
「だって、あれ、なくても別に関係ないでしょう。フレーバーでしかない。例えば貴方だ、もしも眷属悪魔という制度がなかったとして、それで貴方は今の立ち位置が変わっていたと思いますか？」
その言葉を普段に言われていれば、匙は怒り狂っていただろう。
だが、今の匙は冷静だった。気勢を鎮めて、彼は考える。思考にふける。
それを喜びながら眺める三つ目は、まるでレオナルド達をみるように匙を見ていた。
「……多分、何も変わっていなかったと思う。転生悪魔が居なくても、悪魔の駒がなくても、混血悪魔はいるし、神器を宿した子だっていただろう。会長なら、そんな子のために学校を作りたいと思っていただろうし、それに協力してって言われたら、俺はきっと協力していたと思う」

熟慮の果ての答えは、それなりに正しかった。

もちろん、今よりもさらに悪魔は衰退していただろうし、社会的にも悪化していたかもしれない。それでも匙の想像の範囲では、なにも変わっていなかった。

「じゃあ、なんでだ？　アグレアスを盗んだんだ？」

「【言うなら……気まぐれでもあり……計画でもあり……戦争のためでもあり……平和のためでもある】匙さん、貴方は勘違いしているようだが、実際のところ世界を滅ぼすことを手段ではなく目的に据えるなら、ここまで面倒な手順を踏む必要など一切ない。【次の戦争のために、次の次の戦争のために】簡単に滅ぼしてしまうのは、かえって意味を失うんですよ」

そう言って、顔のない男はヴァレリーを指さした。

「匙さん、貴方は生物兵器というものを知っていますか？　大抵『巨大なモンスター』を想像するものですが、実際はそんなものを作る意味はない。実際に作成されており、且つ脅威となるのは細菌やウイルスのような病原体だ」

その言葉に、匙は蒼白になる。

そう、生物学に詳しくなく、軍事にも明るくない匙だが、それでも兵器として運用される病気がどれだけ恐ろしいのか、フィクションで腐るほど語られていることだ。当然のように知識として知っている。

「彼女の生命改造の能力は、単品で考えればそう使うのが一番手っ取り早い。潜伏期間や感染方法、病気の症状や致死率、なによりも後遺症や治療方法。それらを極めて直接的に操作できる彼女なら、いともあっさり悪魔を駆除できるでしょうね。少し想像してみましょうよ、空気感染する上に潜伏期間が極めて長い、しかも発病と同時にすさまじい苦痛を与え、後遺症で人生に影響を与える病気を。しかも似た症状をもちながら治療方法の異なる病原菌も合わせて散布されている、地獄の様な世界を」

「お前、そんなことをヴァレリーにさせるつもりか?!」

声を荒げるルネだが、彼女もまた恐怖で顔が歪んでいた。ヴァレリーなどそれ以上に、失神寸前まで気が動転している。

レオナルドは、顔のない男がそういう種類の虐殺を好まないとは知っているが、それでも吐き気を抑えようとしていた。
「させないさ。そんなの面白くないだろう？　他にも、水源に酸の海と空間を直結するとか、レオナルドのモンスターで穀倉地帯を襲うとか、まあ面白くないアイデアはいくらでもある。でも、どれも意味がない。いや、逆効果というべきか。目的にそぐわない」
「目的、ですか……」
涙をぬぐいながら、ソーナは復帰した。
いつまでも、姉のことを引きずっている場合ではないと、自らを奮い立たせた彼女は顔のない男をにらんだ。
それをみて安心したらしき顔のない男は、調子をさらに上げることにした。
「貴方の目的は、世界の犠牲者たちの安寧。であれば、アグレアスを奪った理由は何ですか？」
「……旧魔王派を滅ぼし、かつ堕天使に所属していた白龍皇を政府から離脱させるためですよ」
「……アグレアスには白龍皇が突入していたと聞いています。一緒に行方不明になっていたとは聞いていましたが」
「彼だけは、外に放り出しました。今頃どこで何をしているのやら」
その材料は、即ちファルビウムが求めていたものだった。余りにも多くのモノが失われた、アグレアスを奪われた事件。その結果が余りにも多くに及んだため、彼が得たかった結果を絞り込めずにいた。
だが、今ここに顔のない男は心中を明かした。もはや、顔のない男の手元を離れた作戦の、その一端を。
「……」
泣きはらして赤くなった目を細めて、ソーナは思考を加速させる。
顔のない男に、聡明と呼ばれた彼女である。であれば、ここで結果を出さなければ何の意味もない。
その、思考の時間を匙は茶を飲みつつ見守っていた。
同様に、顔のない男も水を飲んで彼女の思考を見守っていた。

「まさか……」

そして、ソーナは結論に至った。それは、彼女にとって戦慄すべき結論だった。

「貴方の目的は、全ての神滅具を集めることですか?!」

その言葉は、神滅具の恐ろしさを改めて理解した匙にとっても、戦慄すべき目的だった。

「ちがいます」

だが、反面顔のない男は呆れと共に赤点をつけていた。

謎　1

少し、前の話である。

「世の中には、笑いごとで済ませていいことと悪いことがある。そうは思わないか？」

焼けた顔の少年は、寂しそうにそうつぶやいた。うねる赤い装甲の尾を優しくなでる所作からは、歴代の赤龍帝への哀愁が込められているように思える。

演技ではない。ヴァーリは彼が本心を明かしていると察していたし、素面であるとも理解していた。大仰に演じることもなく、変に悪ぶることもない。ただ、胸の内を明らかにしているだけだった。いっそ、独白に近いものがある。それは、ヴァーリの中にいるアルビオンも同じ感想を抱いていた。

「この赤龍帝の宝珠の中には、無念と怨嗟の声が満ちている。それは、仕方のないことだろう。人は大抵未練を残すものだし、ましてや赤龍帝の力を得たのであれば、激情の中で果てて当然だ。心穏やかに息を引き取るなど望むべくもない。そんな彼らの声が、今も残滓として残っている。それも仕方がない。だが……それを引き継ぐのは間違っている」

異形の穏やかな目が、ヴァーリを見ていた。そこに殺意も闘志もない。

理解を求め、同意を得たがっている。しかし、それを手に入れるための嘘も偽りも込めていない。

対話。世界に対等な関係などあるのかはわからないが、それを目指していることは明らかだった。

「自分には選択肢があった。言ってしまえば、自分は赤龍帝になることを選んでここにいる。その後悔は深く、なかったことにしたくてたまらないが、それは恥の上塗りだ。選んだことには責任を取らなければならない。赤龍帝の籠手の所持者として、今生を全うする義務が自分にはある。だが……それは選択肢を与えられていた自分の、贅沢な

悩みでしかない。『選択肢』の与えられていなかった彼らとは、違いすぎる」

自責の念が、にじみ出ていた。戦闘狂であるヴァーリをして、戦う気が削がれるほどに穏やかだった。

これが、この悪辣すぎる一件の首謀者であり実行犯だとはとても思えない。

しかし、目の前に座っている少年からは、赤龍帝の力があふれていた。

「自分は、自分の選択が誤りだと知っている。だからこそ、かつての選択を否定するために好き勝手やっているわけだが、自己否定の一環として鎮魂を行うのは自分勝手とは少し違うと信じている。大抵の人間は満たされることなく死んでいく。赤龍帝にならなかったとしても、別に幸せになっていたとは限らないだろう。だが、赤龍帝の力は選択肢を奪う。時代や国によって、性別や階級によって、選択肢の数は増減し、総じて結局のところ大して数はないのかもしれない。それでも、それらと全く関係なく選択肢を一つにする赤龍帝の籠手は、存在そのものが間違っている」

強すぎる力、特別すぎる出生は人生を決定してしまう。それを、ヴァーリは嫌というほど知っている。

アルビオンにしても、宿主を通して人間を知ってきた。別に善人ばかりでもないし、悪人ばかりだったわけでもない。大抵の人間は『普通』に苦しんで『普通』に悩んで『普通』に死んでいく。大抵の彼らは『普通』に不幸だ。だが、それだけではないとも知っている。

赤龍帝を選んだ、という言葉には違和感を覚えるが、そこは余りにも些細だ。

「自分と君はまだいい。こうして本能を抑えて話をできる。だが、これまでは違った。ドライグとアルビオンの影響を受けて、出会えば殺しあうしかなかった。禁手同士はおろか、覇龍さえも使いあって……まったくなんの関係もない周囲に破壊をばらまいて。客観的な事実として、この武具は誰も幸せにしなかった。仮に、自分と君が幸せに生きて死んだとして、その後はどうなる。次の代は、次の次の代は？

間違ったものは引き継ぐべきではない。自分は選択を誤った。そんな自分がすべきことは、選択肢のない誰かに選択肢を与え、選択肢のなかった彼らの魂を鎮めることだと信じている」

ドライグは知っている。アルビオンも知っている。

歴代の所持者たちは、互いに殺し合い、勝ち、負け、死んでいった。他の神滅具の所持者に殺されることもあった。

例外はない。最強の使い手も、女性の中で最強と言われた使い手も、使い魔に譲渡して戦った使い手も。

大同小異。結局、死んだ。

人間が死ぬのは当然だったが、彼らの死は人間の死ではない。ドラゴンの死だった。

「この世界は現実だ。現実だからこそ、これを笑い話で解決することはできない。これが物語ならば、主人公の武器に歴史を持たせるために、読者に深みを演出させるために、前任者たちを不幸にして目の前に並べることもあるだろう。そんな彼らの分も、主人公が幸せになるということもできただろう。そういう演出もアリだろう。だが、現実である以上は、彼らはそんなことのために死んだとはできない。彼らの死は悲劇であり、その魂に安らぎを与えるのはギャグで済ませていいことではない。ありきたりだが、慰霊碑に墓碑銘を刻み、ヒトとしての眠りを与えたい。赤龍帝の籠手の所持者などではなく、ヒトの名前を刻んでやるべきだ。例え髪の毛一本さえなくとも、彼らには魂の休める場所が必要だ。自分はそうしてやりたい」

慈しみがあった。愛があった。悲しみが、哀しみが、願いが、祈りがあった。

異能など関係ない。赤龍帝も関係ない。

死者の尊厳を取り戻すために、少年は本心をさらけ出していた。

「救いの形なんて、人それぞれだ。笑いで救われることもあるだろう。だが、主人公でもなんでもない自分はそうすることができない。自分には、ありきたりな方法で解決することしかできない。もしかしたら解決ではなく自己満足かもしれない。でも、それが『正しい』と思っている」

戯れも穢れもなく、真摯さと信念があった。
「いや、正しくなくてもいい。それでも、彼らにはそうしてやりたいんだ」
そこに迷いはなく、潔さもなく。
「この武器は、もしかしたら意味があるのかもしれない。だとしても、それでも……これまでの彼らはどこぞの誰ぞの意図から外れた『失敗』だったということになる。無作為に選ばれた人間をつかっての挑戦などバカげている。この武器を作った『奴』の思惑なんて、成功する必要なんてない」
疑いなく、感情が言葉に乗っていた。
「だから、協力してほしい。過ちを残さないために、君達の力が必要だ。」
焼けた顔の少年は、握り返されることを期待して、手を伸ばしていた。

今代の白龍皇の光翼の所持者、初代ルシファーの子孫、ヴァーリ・ルシファー。
彼はいま、英雄派を自称している輩の、その巣窟に案内されていた。
つまりは、上から下までくだらない連中である。少なくとも、彼はそう思っていた。
純粋な人間だけで構成されているこの英雄派には、基本的に魔法の使い手か英雄の子孫や転生体、あるいは神器の所持者が大勢いる。
そして、純粋な人間でもなければ純粋な悪魔でもない、しかし強大な力と神滅具をもつヴァーリに対して、誰もが警戒と好奇の目を向け

ていた。

つまりは、期待しているのである。新しい英雄の、その誕生を。

馬鹿馬鹿しい、と断じきれないままに、ヴァーリは英雄派のトップの座る円卓に腰を下ろした。

「やあ、待っていたよヴァーリ」

「ふん、有象無象ばかりかと思っていたが、どうやらましなのもいるようだな」

値踏みするように、円卓に座っている面々を見た。つまりはこの部屋の他の輩は木っ端程度の存在ということだろう。

それは強者にのみ許された特権であり、つまりは己の絶対性を疑わない発言だった。

極めて客観的に言って、無謀極まりない発言だった。如何にヴァーリが歴代最強の白龍皇であろうとも、この中には最強の神滅具の所持者をはじめとして強力な使い手がおそろっている。仮に、彼らを含めてヴァーリが最強であったとしても、覇龍の使用を前提とする以上多数を相手にするのは、絶望的に不利である。

よって、この場でヴァーリが戦えば、逃亡さえできずに死ぬ。それは必然だった。もちろん、その場合この場の半数には道連れになってもらうが。

そういう意味では、どう考えても英雄派にとってヴァーリに暴れてもらっては困るのだ。

なにせ、英雄派を英雄にするには名のある敵の首印をあげなければならない。今彼らの目の前にいるヴァーリ・ルシファーは、公には仮面の男にさらわれたことになっている。

仮に、ここでヴァーリを打ち取ったところで、誰も彼らを称賛しない。意味がないのだ。

加えて、ヴァーリがそういう気質なのは英雄派にとって非常に都合がよかった。

「そうだろう？　この時代に集った、英雄英傑だ。君が歴代最強だとは聞いているけれども、この円卓に座る面々も決して劣ってはいない」

「ああ、どいつもこいつも面白そうだ」
そう、円卓に座した面々は、それ以外の英雄派とは一線を隔てている。
神器という神造兵器。それを宿しているだけではない、それ以外の特異さをもつ面々だ。つまりは、ヴァーリ同様に神器を抜きにしても本人が強いということだろう。
それは、客観的な事実だった。故に、修正されない事実だった。修正されない故に致命的な事実だった。
「それで、円卓に座らせたということは、俺にも英雄派だかなんだかの一員になれと？」
「そうだ」
曹操は、自分のすぐ脇に座る青年を手で示した。
「彼はゲオルグ。空間系最強の上位神滅具『絶霧』の使い手だ」
「どうも、初めまして」
にやりと、上位神滅具を持っているがゆえにこちらの方が上、という笑みを見せる不敵な魔法使い。
とはいえ、傲慢不遜さではヴァーリもいい勝負だった。
「あのアグレアスで何が起きたのかはあえて聞かない。しかし、君がこうしてここにいるということは、おそらく空間跳躍か何かでアグレアスの外へ放り出されたということだろう」
曹操は状況から推理できることを確認する。それは、ヴァーリにとって不愉快なことに、事実だった。
自然に表情が歪んだことを、その場の全員が理解した。
「それはお気の毒に。戦うこともできずに逃がすなど、恥どころではない。君としても再戦を望むところだろう？」
「ああ、アイツを倒せるのは俺だけだ」
ヴァーリは、闘志をみなぎらせてそう答える。
そう、それもまた飾りのない真実だった。
ヴァーリ・ルシファーはもう決めていた。あの男と、絶対にもう一度会い、そのうえで戦うと。
「ならば話は早い。ゲオルグはすでに、彼らの拠点を発見している」

それは、仮面の男が予見した通りの状況であった。同時に、聖書の陣営が渇望している情報だった。

ある意味では当然のように、空間系最強の使い手であるゲオルグは、顔のない男の隔離空間を発見していた。

「ほう？　では今すぐにでも殴り込みをかけるつもりか？」

「いいや、何事にも時期はある。それに、焦ることは何もない」

仮面の男が拠点を放棄していれば、この会話もさぞ間抜けなことになっていたであろう。そういう意味でも、仮面の男が当初から組み立てていた作戦は正しかった。

そして、襲撃の時期を英雄派は好きなだけ選べる。加えて、仮面の男は英雄派の所在を知らない。調べようと思ってもいない。圧倒的に不利だった。

「はっきり言って、彼の拠点のある空間はとても遠い。空間として、非常に大きく乖離されている。つまり、絶霧の禁手でもない限り発見も到達も不可能だ。であれば、あえて今態々向こうに突っ込むだけの理由もない。こちらにも準備がある」

「準備、だと？」

「ああ、俺たち英雄派は、仮面の男が作った勢力を乗っ取るつもりだ」

それは、彼にとっての理想図だった。十三ある神滅具、その半数以上を手にいれる。それによって、さらなる飛躍を目指す。

「調べられるだけ調べたが、一切手掛かりのなかった仮面の男、彼以外の神滅具所持者はたいしたことはない。彼を君が倒してさえくれれば、自動的にかれらもこちらに従わざるを得ない」

それも、一面では真実だった。少なくとも、仮面の男が居なくなれば残った面々では勢力の維持は不可能である。つまり、目の前にいるであろう、英雄派という脅威に対抗しきれなくなる。

「いや、そこまでいかないだろうね。なにせ、こちらは純然たる戦闘集団だ。仮面の男という悪辣極まる醜悪な男に、彼女たちが従っているのは単に彼が強力な使い手だからだ。であれば……」

「不利を悟れば、仮面の男の死を待つまでもなく、こちらにつくと？」

「そのとおりだ。俺たちには、彼らに示せる理想がある！」

ヴァーリは笑いを漏らした。曹操の自己陶酔した語りに、こらえていたものがあふれたのだ。
「随分都合のいい話だな。そんなにうまく事が運ぶと思っているのか？」
「上手くいくさ、神器を宿すものは、神滅具をもつ者は例外なく一つ物を求めている。つまり、自分がそれを手に入れた意味だ」
神器は、原則として血統に由来せず、育ちにも由来しない。当然、出身地にも由来しない。
であれば、それが甚だ些細であったとしても、例えば影を自在に動かせる程度であったとしても、それが世界的に見てどうしようもないほど安っぽいチンケな代物であったとしても、それは迫害の対象になりうる。
「彼らには必要なのさ、英雄が。目指すべき英雄である俺たちが、俺たちのような英雄になりたいという目標が！」
それは、確かにそうなのかもしれない。人生には指針が必要だ。
何かを目指さなければ、力をもてあまして、何もできなくなるだろう。
そういう意味では、きっと仮面の男もそうなのだろう。
自分が何者かでなければならない。それは神器に限らず、他と違う何かをもって生まれた者たちの、宿業なのかもしれない。
「……そうか、そうかもな」
ヴァーリ自身、最強の白龍皇という理想を掲げている。それもまた、目の前の曹操同様の陶酔、ないしそうでも思っていなければ自分の悲劇性を正視できなかったからかもしれない。
「まあ、つまりだ。彼と戦うには俺たちの協力が絶対に必要だ。であれば、分かってくれるだろう？」
「一つ、聞きたい。なぜあの男の拠点がわかった？」
「駒王学園さ」
曹操は、とても自慢げに手の内を明かした。
「あそこにいる魔王の妹に、彼はアグレアスを盗み出す前の黄金風船事件で、宣戦布告を行っている。つまり、彼はそこから空間を移動し

たんだ。であれば、空間使いであるゲオルグなら、その残り香から追跡が可能というわけだ」
「ふ……そうか、大分調べているな」
ヴァーリは、意味ありげに笑いながら席を立った。
「赤龍帝と戦う、というのであれば同行してやってもいい。だが、忘れるな。俺はあくまでも赤龍帝と戦うためにお前たちを利用するだけだ」
「そうか、仲間にはならないと？」
「ああ、襲撃する日が決まったら、教えろ。それまでは放っておけ」
颯爽と、ヴァーリは去っていった。
それを見送る英雄派の幹部たちは、彼が居なくなったところで同じ感想を抱いていた。
「フラれてしまったな、どうする曹操？」
「決まっているさ、歴代の天龍のように同士討ちになってもらう。所詮、彼は魔王の子孫。英雄にはふさわしくないということさ」
英雄派の面々は、思惑通りに物事が進んでいることを確信した。
「仮面の男様々だな。彼が邪魔な旧魔王派を全部まとめて始末してくれたことで、俺たち禍の団英雄派は、神話からの援助を一身に受けることができる。誰かに気を使う必要もなく、勢力の強化にいそしむことができる。加えて、ヴァーリ・ルシファーを野に放ってくれたことで接触も勧誘も自在だ」
なにもかもが、思うがままである。理想を求める人間たちは、己の勝利を疑っていなかった。
「なぜアグレアスを盗んだのかはわからないが、赤龍帝のおかげで我々の天下だ」

「笑いをこらえるのが大変だったな、アルビオン」
『ああ、思うにあの連中に必要な英雄は、劇作家や軍師の類だ。どれだけ強力な戦士がそろっていても、あれでは今代の赤龍帝には及ばな

い』

巣窟を抜け出したヴァーリは、高らかに笑っていた。何もかもが、想定の範囲内だからだ。

顔のない男の計画を思い出す、そう、彼は英雄派を自分の領地に引きずり込むつもりだった。その時期を如何に絞り込むかが重要であり、それはこれから考えると言っていた。

「こういう趣味はなかったが、こうも思うがままだとあの男の気持ちがわかるな。弄ぶ立場の、なんと愉快なことか」

『恐ろしいな、よくもここまで物事を操作できるものだ』

「ああ、これが奴の言うところの遠距離戦か」

何もかもが思い通りに動いていると思っている。仮面の男の手のひらから一歩も出ていないというのに。

「あの男がアグレアスを盗んだのは、自称英雄派を誘導するためだったというのにな」

ほんの、少し前の話である。

「旧魔王派を捕まえた時に裏を取った。旧魔王派は真魔王派を名乗り、禍の団とかいう勢力を作ろうとしていた。その中で、旧魔王派に次ぐ勢力として神器所持者や英雄の子孫や生まれ変わりで構成されている、英雄派とかいう陣営があった」

「ふん、自称で英雄とは滑稽な連中だな」

「言ってやるなよ、テロリストなんてそんなもんだ。ある意味お国柄ともいえるからな」

嘲笑の雰囲気を身に宿した顔のない男は、アグレアスを盗もうとしている理由について語りだした。

それは、旧魔王派の排除とヴァーリ・ルシファーへの接触を目的としている。

それは、実質どちらもかなっていた。ある種、拍子抜けするほどに。

「まあ、上で暴れている連中に劣る分際という時点でお察しの連中だが、自分にとって非常に都合のいい、利用しがいのある連中だ。なので」
「なるほど、旧魔王派を排除するのは『英雄派に動いてもらうため』というわけか」
「ご明察。まあ、若くて思慮の足りない連中で、大義もなく理想もいい加減らしい。その評価をしたのは旧魔王派の連中だけれども、実に的確だね。その冷静で的確な判断力を自分たちの行動にも結び付けるべきだった」
　アグレアスという重要施設を盗み出し、堕天使、悪魔両陣営に大きなダメージを与える。その犯罪行為の目的が、英雄派を名乗る犯罪者の活動を支援するため、というのであれば余りにも意外だ。
「頭のいい方々はアグレアスの窃盗そのものに意味はないと悟るだろう。なにせこれを運用するには、それこそ膨大な知識の積み重ねが必要になるからね。まあ、売っぱらう分にはいい値がつくだろうけど、現金に興味はないんだ」
「英雄派は違うと？」
「当然さ【馬鹿にも二種類ある。自分が馬鹿だと知っている賢い馬鹿と自分が賢いと思っている本物の馬鹿だ】自分のことを頭がいいと思っている連中は、一旦自分にとって都合のいい事実を見つけたら、それを疑わない。自分が愚かだと知っている馬鹿ならもう少し慎重にことを進めるだろうが、自分が優秀だと疑わない連中は前後の安全確認さえ怠って盛大に事故を起こす」
　それは、本当に賢い人種であるアザゼルを知るヴァーリとしては、納得できるところだった。確かに、私的には緩いところのある男だが、それでも国家の一大事には果断な判断と同時にもろもろの細かいところの打ち合わせも怠らなかった。
　おそらくもっとも賢いであろうファルビウムが結論を急がないのも、つまりはそういうことである。たった一つの情報を知らないだけで、状況は激しく変動するのだ。
「彼らは君と接触するだろう。自分から勢力を奪うために戦力を『対

等な数』ないし『勝負にならないほど』そろえて、武力による恐喝を行い自分を孤立させたうえで君と戦わせる。そうなれば、最悪君が負けたとしても、疲弊した自分を倒せばいい。両者相打ちになり、神滅具を奪ってもいい。まさに『賢い』作戦だとは思わないかい？　まさにバカ丸出しだ」

「そして、お前がさっき言っていた『ほしいもの』を勝手にそろえてくれるというわけか」

「そうさ、彼らには自由に行動してもらって、自分に貢ぐためにそれをそろえてもらう。だってほら、盗むんなら一つ一つ盗むよりそっちの方が楽でいいだろう？」

　少なくとも、『ほしいもの』を手に入れるために必要なものの一つである絶霧だけは絶対に持ってくるはずである。

　なにせ、空間使いである顔のない男に対抗するには、どうしたって空間系最強の神滅具が必要だ。加えて、顔のない男の隔離空間に侵入するにも、それはどうしたって必要になる。

　であれば、彼らは仮面の男の思惑を知っていようがいまいが、それを持ってくるしかないのだ。

「その計画通りに事が進んだとして、曹操とやらをどうやって倒すつもりだ？　お前の作戦通りだと、敵は全員お前が倒すんだろう？　曹操一人だって容易ではないだろうに」

「まず、いたぶって弱らせる」

　顔のない男の、その三つの眼が狂気に染まった。勾玉模様が複雑に変化し、その感情の高ぶりを現していた。

「そのうえで、まず耳をもぐ、鼻を削ぐ、指を一本一本落とし、手足を丁寧に切除する。みっともなく泣き叫ぶ英雄の様を記録に残したうえで、生きたまま墓に埋める。それで、終わりだ。どうだ、完璧な作戦だろう？」

　それは、余りにも露骨な悪意だった。それ以外の何も含んでいない、純粋な悪意。それが、彼の体から吹き上がって止まらない。

　別人格が露出したのかと疑うほどに、余りにも雰囲気が様変わりしていた。

「他の面々はどう片付けるつもりだ？」
「大丈夫、何の問題もない」
顔のない男は嬉しそうに笑っていた。とても、無邪気に思えた。
「自分には『無敵のキュアラブリー作戦』があるんだから」
「随分面白そうだが、それは現場で確認するとしよう」
神聖ローマ帝国と自称し、そしていまだにそうしているこの集団は、いかなる点においても神聖でもなければ、ローマ的でもなく、ましてや帝国ですらない。
同様に……無敵のキュアラブリー作戦もまた……。
その言葉の意味は分からないが、おそらく癒し（キュア）も愛らしい（ラブリー）もカワイイ（プリティ）の要素もないのだろう。
「そうしてくれ【最高のショーだと思わんかね。見ろ、人がゴミのようだ】【よく見ろ。地獄に行ってもこんなに面白い殺戮ショーは見られんぞ】君にもその時にいろいろしてもらうからねぇ」
そう、仮面の男としてはヴァーリに作戦を伝えることこそが重要なのだった。
顔のない男との融和を拒絶し敵対を選ぼうが、ヴァーリが顔のない男と戦うにはその案に乗るしかないのだから。

謎　2

「ちがいますか……」
「ええ、途中までは合っていると思いますよ」
ソーナは、違っているという返答に対して、再度熟考を始める。
途中までは合っている。それは神滅具を全て手に入れる、という結論だけが間違っているということだろう。
「旧魔王派の殲滅は、つまり旧魔王派を邪魔に感じていた別勢力への間接的な助勢であり、その勢力は独自に貴方を標的にしている。貴方はその勢力の存在を、どのようなルートかはわかりませんが知った」
「ええ、その通りです」
「白龍皇の開放は、貴方と既に協力関係にある白龍皇にその勢力から接触させ、その勢力に『勝ち目がある』と判断させるための獅子身中の虫」
「ええ、おおむねあっています」
確かに、それが達成できれば最高だった。だが、そう上手くはいかなかった。顔のない男は、自らの能力の半数以上を封じて戦うことを約束する形で、一時的な協力を得ただけだ。
つまり、顔のない男は英雄派の戦力を全て単独で撃破し、且つその後に最強の白龍皇と真正面から戦わざるを得ない。
そういう意味で、ヴァーリ・ルシファーは顔のない男の最大の敵となっていた。
「そしてその勢力は貴方と対抗するために、白龍皇以外にも神滅具を集めている。貴方は、あえて彼らに襲撃させて逆に神滅具を奪う。そういう算段ではないのですか？」
「そこまでは合っている。ただ、自分の目標が『神滅具を全て揃える』というのは大間違いです。そんなことをしても、なんの意味もない。貴女は賢しすぎる」
「意味がない、賢しすぎる？」
そこで、ソーナは確認を終えて、ヒントを得た。
匙もそれに追いつこうとするが、なにが何やらわからない。神滅具

を全て揃えることが目的ではないというのは、まあわかる。おそらく、ソーナの推理した勢力にしても、残る五もの神滅具を集めることは不可能であろうし、仮に過半を集めたとしても残りを探すのは困難を極めるはずだ。

だが、しかし。神をも殺す可能性を秘めた、神が人間に与えた最強の武器。それを独占することに、なんの意味もないとは、これいかに。

誰よりも神滅具を有効活用し、実戦投入している男の発言とは思えない。

「……どういうことだ？　神滅具を四つ持っているだけのお前らが、アレだけのことができたんだ、全部そろえれば、なんでもできるだろうし、それに誰も対抗できないだろ」

「匙さん、それが勘違いなんですよ。貴方は勘違いをしないと勘違いをしている」

勘違いをしないと勘違いをしている。その言葉は匙には意味不明だった。

だが、ソーナは流石に理解した。つまり、そういうことなのだ。神滅具をいくら揃えようが独占しようが、それを使うのは人間でしかない。

「逆に、民意を得られないということですか」

「ええ、そういうことです。前回も前々回も、それのおかげで大分有利に立ち回らせていただきました。敵がこちらを見くびってくれれば、それはそれはありがたかった。ですが、今後はそれがよくない方に作用する。なぜならば、所詮人間ですからね。百年も生きることができない、薄命の虫けらですから。悠久の時を生きる賢いつもりの連中は『宝を持ったカモ』としか思ってくれないでしょうね」

そう、神滅具を持とうが聖剣を持とうが、扱うものが人間でしかない以上、悪魔などの人外はどこまで行っても軽く見る。それは相手が油断するということだが、裏を返せば相手はこちらに軽々しく敵対してくるということでもある。

「神滅具をいくら揃えたところで、それは抑止力たり得ない、ということですか」

「そう、軍隊の最大の機能は抑止力に他なりません。真の護身とは戦うという行為をせずに済むこと。地球において核武装がそうであるように、実際にそれを運用することがなかったとしても、保有しているだけで戦争を未然に防ぐことができる。或いは、相手に核を使わせないことができる。では核兵器のように戦略的に被害を加えうる神滅具は抑止力たり得るか？　それは否です。貴女の察しのとおり、人間が使う限り侮られ続ける。そして、それは事実でもある。人間の寿命は短いですからね、どれだけ優秀な使い手でも代替わりし続ければ劣化する。あるいは、そう思われる。それでは抑止力になりえない。自分は、次の一件で犠牲者の彼らへの援助に区切りをつけるつもりです。つまり、次の一件で彼らの未来を外患から守るつもりです。まあ、長期的に見れば永遠に続く共同体などあり得ないし、そもそも永遠に続くことを目指す意味もない。そこで生きている面々が代を重ねるなりして数を減らしたり、あるいは彼ら自身が外に出ていくなりして廃れていくならば、それは自分たちの役割が完遂されたことになる。もう、彼ら自身が我々の庇護を必要としなくなるわけですからね。どちらかといえば、それを目指すべきでしょう。まあ、内憂によって自壊することもありえますが、それはそれで仕方がない。微力はつくしますが、それでも彼らに暴れるだけの元気と余裕が生じれば避けられないことでもあります。ですが、それもまた良し。身から出た錆によって滅ぶなら、理不尽な暴力によって潰えるよりはましでしょう。それも彼らの意思の結果なのですから。まあ、実際には外に出ていこうが帰りたくなるとは思いますし、内部分裂するならムラを増やせばいいだけの話です。衰退するにしても内乱が起きるにしても、彼らの保護が完遂されるのは相当先ですよ。なので、その間外から攻められないように、長期間機能する抑止力を得る必要があるのです。それこそ、悪魔などの人外にも通じるようなね」

それは、まさに客観的な主観だった。或いは楽観という主観を客観視していた。

ソーナは理解する。馬鹿の考えは馬鹿の方が理解できる。ソーナは賢しい故に神滅具の脅威を理解できるが、それは万民が共有するも

のではない。
どれだけの脅威を目の前の者が持っていたとしても、その相手が人間である限り侮ってしまう。奪えるのではないかと攻め込んでしまう。
そして、民衆がそれを望むならば、貴族がそれを望むならば、政権はそれを押さえつけることができない。
どれだけトップが危機感を持っていても、それを大多数が共有できない。
民主主義ではなくとも、国家とは本質的にそういうものなのだ。そして、多数決とは数が多い方の意見が優先されるというだけのことで、別に多数の判断が正しいと保証するものでもなんでもない。
「……ですが、我々は貴方の拠点を見つけることができるのですか？」
それは、攻め込まれる顔のない男にしても不愉快だろう。だが、攻め込む側であろう悪魔陣営とて同様である。黄金風船の時悟ったのだ、アレと戦うなど正気ではないと。
現在、顔のない男の拠点はどこにあるのか知られていない。それは悪魔が攻め込めないことを意味しているが、逆を言えば悪魔も正面切って戦わずに済んでいるともいえる。
歴戦の雄であるアザゼルをして、絶霧がなければ勝負にもならないと思われていた。
「貴女は、陥落しない城があるとでも？　それは、攻略する価値がないというだけのことです」
攻め込む側が難しいと深刻に考えるのは当然だが、隠れている側にしてもいつまでも隠れていられると考えるのは余りにも考えが浅い。
隔離空間、始球空間。それは確かに通常ならば発見は困難だ。そして、そこに入るなど相当の空間干渉能力が必要になる。覇龍や滅びの魔力の様に、空間を削り取るだけでは足りない、空間そのものを制御する力が必要だった。
だが、それは裏を返せば『この世界に存在している力』で侵入しうるということであろう。
もっと言えば、そうでなければ顔のない男もまた困るのだ。利用す

るつもりの英雄派には、始球空間に侵入してもらわないといけないのだ。

「見つけられてしまいますよ、当然のようにね。どこにあるのか判然としないというのは如何なる堅牢な城壁よりも強固ですが、見つかってしまえば脆いものです。もっと言えば、我々はそれにおびえ続けなければならない。だからこそ、抑止力が必要であり、それを得るために聖書の陣営に戦いを挑まなければならないのです」

「それは、矛盾では？　神滅具の有用性を示しても、結局貴方が危惧しているように利用するために悪魔以外も群がってくるだけでは」

「やり方はいくらでもありますし、流石にネタバレが過ぎます。そこから先は、まあ多分貴女が気に病むまでもなく優秀な魔王様方や、各指導者の皆様が察してくれていますよ」

そう、確信するだけの情報がないというだけで、彼らはすでに最悪の事態を想定して動いていた。

とはいえ、ファルビウムを除いて、彼らの想定している最悪は余りにも考えが浅いのだが。

「やあ、君だけは来てくれると信じていたよ」

ディハウザー・ベリアルは、目の前の超越者を見て驚愕を隠せなかった。

魔王、サーゼクス・ルシファー。「紅髪の魔王（クリムゾン・サタン）」とも呼ばれる、聖書の神話において最強の存在だ。グレートレッドやオーフィスといった規格外の存在を抜きにすれば、シヴァやインドラといった古き神とも対等に近く戦える、最強の魔王。

超越者と呼ばれるだけのことはあり、その態度は常に余裕と気品のあるものだった。

先日の黄金風船事件の際も、やや複雑そうではあったが、その表情には断固たるものがあった。

だが、今はそれがない。彼にあった、余裕や自信の一切が失われて

いた。
「……私と、その眷属は仮面の男との戦いに参加させていただきます」
「ああ、頼もしいよ」
　生まれてこの方、力不足など感じたこともない天才であるディハウザー・ベリアルだが、目の前の魔王には大きく劣る。だというのに、そんな彼からは覇気や王気が感じられない。なぜか、語るまでもない。
　度重なるテロ行為への、全面的な敗北の連続が彼から一切の自尊心を失わせていた。
「なにせ、他のトップランカーには断られてしまってね。無理もない話だ、あの一件でパニックが起き、結果犠牲者も数人だが出てしまったのだから」
「あれは、私にとっても苦い敗戦でした」
　ディハウザーは、現政権に関して思うところがなかったわけではない。だが、それでも彼も貴族として民衆を愛していた。悪魔なりではあったが、誠意を持っていた。それゆえに、守るべき遺族を見捨てざるを得なかった。
　それは最上級悪魔や上級悪魔としては当然のことであり、つまり、悪魔社会全体が戦う前から負けていたのである。
「再戦の機会が得られるのであれば、これに勝るものはありません。ですが……」
「ああ、分かっている。君の従姉妹に関してだね？」
「はい、それを教えていただけなければ……協力できません」
　それは、悪魔社会全体にかかわるスキャンダルであり、貴族体制の崩壊を意味しているものだった。
　だが、もはやサーゼクスにとっては隠す意味を感じられないことだった。故に、被害者の家族に気遣うことなく、淡々と語りだした。
「私の妹であるリアス・グレモリーが縄張りとしている駒王町。その前任者であるクレーリア・ベリアル。彼女は『表向き』としてはエクソシストと恋をして、それを咎められたがゆえに粛清されたことになっている。だが、真実は更に深い。君の想像している通り、才能のないものに力を与える『王』の駒の存在を知ってしまったがゆえに排

除されたのだ」
「やはり、そうでしたか」
「ああ、細かいところに関しては、君も噂で聞いているだろう。ロイガン・ベルフェゴールやビィディゼ・アバドンがそうだ。彼らは幼少の頃は才能に恵まれなかったが、アジュカの作った王の駒によって、トップクラスの力を得た……」
それは、拍子抜けするほどにあっさりと明かされた。最高機密に位置し、例えベリアルという上級悪魔であっても知ることさえ許されない、悪魔の恥部。それはレーティングゲームのプレイヤーに対して民衆が抱いていた幻想を裏切るものであり、ランキング一位でありながら、何も知らなかった己への自責の念を抱かせるものだった。
そう、生まれながらに最強の素質を持っていた、皇帝ディハウザー・ベリアルにとっては許しがたいことだろう。なにせ、自分は知らないとはいえ自らを称える民衆をだましていたのだから。
それは、彼にとってクーデターに参加させかねないほどの意味があり……。
「しかし、だからなんだというのだろうね？」
サーゼクスにとっては、もはやどうでもいいことだった。
そして、その発言は本来のサーゼクスにはありえないものだった。サーゼクスが壊れていることの証明だった。
「な、なにを言っているのですか?!　私は、恥知らずもいいところだ！　家と家の都合もあるとはいえ、私とその眷属は真面目に研鑽し、真面目にスポーツをしてきたつもりだった。ですが、他のトップランカーは、人間風に言うなればドーピングをしていたのでしょう?!」
無自覚に道化を演じていた皇帝は、激高する。しかし、それは無意味な怒りだった。目の前の超越者は、既に全てを諦めてしまっていたのだから。絶望を、受け入れてしまっていたのだから。
「ああ、その通りだ。制作したアジュカ自身さえ忌避するほどに、あれは素質のないものに簡単に力を与える。だが、それがなんだというのだ？」
壊れた笑顔だった。超越者であるはずのサーゼクスは、自分が作っ

てしまった現実に押しつぶされていた。
　仮面の男が示した、自らの世界の脆さに気付いて自らが壊れていた。
「それで、彼らはその力を悪用したのかね？」
「民衆を欺いていたのでしょう?!」
「だから、そこが間違っているんだ。いいかい、皇帝ディハウザー。彼らは確かにドーピングしているし、八百長だってしていた。だがね……彼らは弱いのかい？」
「……！」
「そうだ、彼らは強い。それはレーティングゲームに参加していない私よりも、直接彼らと鎬を削った君の方が知っているのではないのかな？」
　それも、事実だった。少なくともディハウザーは、自分とトップを競い合っていたロイガンやビィディゼが強いと知っていた。だからこそ、クレーリアが噂の真相を調べた時も妬みでしかないと思っていた。
　彼らはディハウザーが憤った通り八百長やドーピングをしていた。だが、サーゼクスの語った通り彼らは強かったのだ。
「もっと言えば、王の駒で強化されていたのは彼ら自身だけだ。彼らの眷属はどうなのかね、彼らもインチキなのかい？」
「そ、それは……」
「王の駒は、そう沢山あるわけではない。であれば、彼らの眷属の強さは本物ということだ。つまり、いかさまをしていたのは彼らの中のたった一人ということだ」
「ですが、それはペテンです！　王自身が……」
「いいかい、ディハウザー。協力してもらっている君にこんなことを言うのは心苦しい。だが、はっきり言って『そんなくだらないこと』は今どうでもいいんだ。いや、最初からどうでもよかったんだ」
　ベリアルという名家に生まれた少女を、殺さざるを得なかった国家機密。しかし、それはサーゼクスにしてみれば最初から隠すべきでもないことになっていた。

「王の駒によるドーピングになにがしかの副作用があり、それによって実戦に問題があるというのなら問題だ。あるいは、彼らが悪魔を裏切ったり、死や傷つくことを恐れて実戦に参加することを断ったというのなら確かに問題だろう。だが、彼らはそうじゃない。そうだろう？」

民衆を守るために力を得て、民衆を守るために戦った。そういう意味では、彼らは決して間違った最上級悪魔ではない。

例えそれが後天的に得た力であったとしても、その事実の前には毛ほども問題ではない。

「で、ですが……」

「では、民衆は一々そんなことを気にすると思うかい？　あの黄金風船を退けるために戦った彼らへの称賛は、自分たちを守るために戦った彼らへの正しい称賛であり、彼らが強かったからこそ生まれたものだ」

それは、仮面の男の語った現実の延長線上の存在だ。レーティングゲームに夢を見ていたディハウザーに、残酷な真実をサーゼクスは突きつける。

「君や私は、確かに生まれつき優れた資質を持ち、かつそれを鍛えて優れた力を得ている。それは確かにキレイに見えるだろう。で、それになんの意味があった？」

魔王の語る絶望の現実。それは、仮面の男の語りに似ていた。

実際に仮面の男がここに居ればこう付け足しただろう。【これらは全て偽物、おまえの言う取るに足らない存在だ　だがな、偽物が本物にかなわないなんて道理はない！】【ただし、偽物の全てが一流だ】ディハウザー・ベリアル、【本物であれば実物であれば全て事足りるのかね？　世の中にはホンモノというだけの三流品がいくらでもあるのだよ。いやむしろそっちのほうが多いかもしれんな。伝統があるというだけの粗悪品……〟見たこともない〟とは言えまい？】そう、笑いながらあざけっただろう。

そう、どうでもいいはずだ。実際に強いならば、その強さがドーピングによるものだろうと、メッキだろうと。実際に民衆を守れるなら

ば、民衆はそれでいいはずだ。少なくとも、二流以下の本物では何も守れない。本物であることにこだわって弱いままの方が、よほど問題だ。

「面子だよ。我々はともかく、古参の悪魔がそれをごまかしたのは面子の意味が大きい。確かに、恥ずかしいことだからね。だが、隠していたとして、それで失笑を買う程度だろう」

「で、ですが、我々プロは彼らを欺いていた！」

「君はアスリートやスポーツマンのつもりかい？　君は本物であるという体裁にこだわって、民衆を巻き込んで破滅するつもりかい？　そちらの方がよほど裏切りだと思うがね」

「……」

「汚れていようと欺こうとも、民衆を守るためならば何でもするのが貴族の務めだ」

ディハウザーは、もう何も言えなかった。壊れたように笑うサーゼクスの眼から、涙がこぼれていた。

それは、正真正銘最強のくせに、なにもできなかったどうしようもない無能者の、本物である以外になんの価値もない、最強であるというだけの魔王の等身大の姿だった。

「そう……国を守れない私は王の資格が最初からなかったのだろう」

結局、サーゼクスは恐れていたのだ。冥界をコントロールするために、他の貴族が力を得ることを。力を得ることで冥界に仇成すかもしれないと、最初から彼らのことを信じていなかったのだ。

「ディハウザー。黄金風船事件の時に、私は仮面の男にこう言われた。【死ぬわけには行かない立場の貴方が突出して強くたって、何の意味もないんですよ！】まったくだとは思わないか？」

魔王としてはサーゼクスは潔癖すぎたのだ。いや、汚れる必要性を感じなかったのかもしれない。

彼は最強だった。彼の眷属もまた最強だった。それは全神話を見ても事実だった。

だからこそ、それで大丈夫だと油断し慢心し甘えていた。その結果が黄金風船だった。

強ければそれで問題が解決できると思い込んでいたのだ。
「私が仮面の男の億分の一でも、いや兆分の一でも悪辣さを持っていたならば、秘密裏に王の駒を用いて部隊を編成していただろう。一人一人が魔王クラスの力を持つ、眷属とは別の特殊部隊だ。そんな日陰者の汚れ役を作っておけば、黄金風船の時に遺族を守ることもできただろう。少なくとも、君たちに負担を強いることはなかったはずだ」
もちろん、そんな称賛も栄光もない部隊には多くの苦労を強いるだろう。もしかしたら、彼らが裏切っていた可能性もある。
だが、言ってしまえば、それが支配者というものだ。下の人間に力を与えることを忌避するのは健全な警戒心だろう。しかし、かと言って力を与えないのでは支配者の意味がない。
「そもそも、ただ受け取るだけで強くなれるというのなら他の駒も同じだ。レベルが違うというだけでね。その基準を決めるのが私たち政治家だが、そういう意味でも私は判断を誤っていた」
「まるで、もう冥界が終わったかのようですね」
「ああ、もう終わっている。私たちは最後まで戦うつもりだが……もう既に敗北は決まっているらしい」
ファルビウムには、ことあるごとにもう駄目だ、と言っていた。それは諦めでしかない、怠慢でしかないと思っていた。だが、実際にはサーゼクスこそが現実を見ていなかったのだ。
この、分かりやすいほどに疲弊した、簡単に滅ぼせる悪魔の状況を。
如何に最愛の妻であるとはいえ、たかが裏切り者一人の首一つで物事を収めようとした、どうしようもない恥知らずな自分を。
「では、なぜこの期に及んで少数精鋭なのですか？」
そう、既に仮面の男の犯行は隠し通せるものではない。民衆はどうにかごまかせても、一番問題となる諸外国からの眼は欺けない。
そして、それは即ち戦争を意味していた。
その先には、悪魔を含めた聖書の神話の滅亡だけがある。
それを、初代バアルをはじめとして古参の悪魔がわからないはずがない。魔王以上に強い発言権を持つ彼らが、無理やり手勢を動かさない理由がわからない。

「答えは単純だ……」

それは、ファルビウムの予測をそのまま口にしただけのことだった。

だが、それゆえに絶望をディハウザーにも与えていた。

「馬鹿な、そんなことができるはずがない！」

「それこそ、馬鹿な、だよ。それ以外には考えられない。そのために、我々は既に動き始めているのだから」

一方そのころ……。

残る超越者二人は世界のどこかで談笑をしていた。

ファルビウムはメフィストフェレスへ協力を依頼しようとしていた

全ては、既に負けが決まっている戦いをするために。

そう、ファルビウムだけは知っている。仮面の男が勝とうが負けようが、聖書の神話は滅ぶのだと。

謎　3

「なんだか、そっちは大変らしいな」
「まあね。確かにてんてこ舞いで、魔王としての仕事しかできていない。おかげで趣味の研究が滞って仕方がない」
　一人は二日酔いで頭痛を覚えている、老齢の男。その顔の部分を見れば、威厳や気品があってしかるべきであろうに、しかし彼にはそうした重厚さの一切がない。
　身なりがいい故に多少マシに見えるが、その雰囲気は生ける屍同然だった。
「だが、面白いものも見れる。憔悴したサーゼクスだ。あの顔は見ものだぞ？　今の貴殿よりもさらに落ちぶれている。まるで自殺寸前だ」
「へえ？」
　もう一人は、青年のように見えて達観を備え、しかし嬉しそうに薄く笑う、不気味さや無機質さの漂う男だった。
　彼もまた、人形が笑っているような空虚さを感じさせていた。
「滑稽だよ。アレだけ悪魔の未来のために精力的に活動していた男が、未来を信じていた男が、その手のひらから未来どころか現在さえも手のひらから取りこぼしていく様はね。全力で頑張れば何でもできる、恥をさらせば失点を取り返せる、犠牲を差し出せば丸く治められるかもしれない。その甘い考えをありとあらゆるものに一蹴された、何もできない現実に押しつぶされるのは愉快だった」
「あの『さいきょーちーと』野郎がね？」
「ああ、貴殿の復帰を渇望したほどにね。まあ、無理もない話だ。私も敗北感を覚えているよ、結局私は技術者としてなにも新しいものを生み出せなかった」
　それは、一種の清々しささえ感じさせる敗北感だった。少なくとも、青年はその敗北を安らかに受け入れていた。
　新しいものが古いものを駆逐し、より前へ進む、それは悪魔の敗北かもしれないが、技術者という職業からすれば勝利に近い。

そう、いつまでも過去に縋り付いていてはなんの進展もない。
「確かさ、サーゼクスちんの息子って普通の悪魔なんだろ？　まあ、確かに一代限りのチートなんて無意味だわな。でも、アジュカっちは悪魔の駒とか作ったんだろ？」
「ああ、そうだ。しかし、ただの一度もアップデートもバージョンアップもしていない。確かにそれだけ完成度が高いともいえるが、逆を言えばなんの進歩もしてこなかったということだ」
青年は思う。結局、だれもアジュカの後に続かなかった。誰もが個人の力を求め続け、誰もアジュカの様に素晴らしいものを生み出そうとは思わなかった。
既存のモノを研究することはあっても、全く革新的なものを生み出そうとはしなかった。
自分の最高傑作であろう悪魔の駒にしても、思えば余りにも進歩がない。単に悪魔を増やす程度の代物だった。
「人間がうらやましいと、いつの時代も思っていたよ。彼らはすぐに老いて死ぬが、それゆえに短い時間を熱中して過ごす。私の様に趣味で戯れているのとはわけが違う。金が欲しい、称賛が欲しい、発見をしたい、発明をしたい、独自のものを生み出したい、誰よりも先に真実に至りたい。そういう熱が、切磋琢磨が我々には欠けていた。欠けていた故に、我々はいまだにさっぱり進歩がない」
技術進歩の停滞。それは貴族が利権を守るため、というものも確実にある。
例として、フェニックスの涙がある。これは非常に高価で希少で、しかも効果は大きい回復薬である。当然、生産できるのはフェニックスだけだが、アジュカがその気になれば量産が可能だったかもしれない。
多少は質が劣化していたかもしれないし、結局価格は下がらないのかもしれない。だが、量産できるようになればその分多くの供給が発生するし、必要としている者に行きわたりやすくなるだろう。
加えて、その研究が進めばさらに効果の大きい薬が作れるかもしれない。フェニックスの涙でも治せない、病気や肉体の欠損にも効果の

ある薬が作れるかもしれない。
だが、それはできない。なぜならば、ほかならぬフェニックスが損をするからだ。
「人間は、月にも独力で至った。たいしたものだろう?」
「ああ、ちょっと前にテレビでやってたよな。見てたぜ……よく覚えてないけど」
「私はよく覚えているよ……何かが終わり、新しいステージに進んだのだと理解したよ」
「……で、今回もそうだってか?」
「そうだ、貴殿にも我ら聖書の神話の最後の祭りに参加してほしい」
青年は、負け戦に老人を誘っていた。勝ちが決まっているのならば、誘う意味はないだろう。老人を引き入れることで勝ちの目が生じるのであれば、是が非でも連れて帰るべきだろう。だが、青年は最後の負け戦を彩るために老人を誘っていた。
だが、その誘いは老人に腰を上げさせるだけのものがあった。
言ってしまえば、面白そうだと思わせるものがあるのではないかと、期待させたのだ。
「黙示録の日が来るってのか?」
「いや、単にそれまで我々が持たなかったということさ。そんな大仰なものじゃない」
単に、衰退して緩やかに滅びていくということだ。いや、きっと四大魔王と主神が相打った時点で、とっくにそれは始まっていたのだ。それを穏やかにすることはできたとしても、止めることはできなかった。
「ふ~~ん。でもさぁ、負け戦に参戦って、なんだか恥ずかしくない?
出番には早いんじゃない? もっとこうさ、サーゼクスちんとかがぶっ殺された後とかに颯爽と登場した方がカッコよくないかな?」
「いや、それは無意味だな。なにせ、次を逃せば貴殿の出番は永遠になくなるのだから」
「悪魔が全員死ぬってこと? ああ、天使とかエクソシストとか堕天使もいたっけ?」

「いや、そういう問題ではないし、第一、それは面白くない」
それは、アジュカの中の確信だった。
仮面の男に関しては、アジュカとしても思うところはあった。言ってしまえば、彼のやったことを面白いと思う自分が心の中に居たのだ。
悪魔という種族が脅かされ、前王の遺産であり国家の威信が奪われ、自らの研究対象が失われた。だというのに、アジュカの中の悪魔性が、それを笑ってた。
だがとても面白かったのだ。自分の周りにいた優秀だと思っていた誰も彼もが、敵も味方も一生懸命に踊るさまが。
必死さや真面目さが滑稽さを生み、誇りや信念が失笑を誘い、絶望や後悔が愉悦へ誘う。
何もかもが予定通りに、分かり切った通りの悲劇が始まって、喜劇として終わる。
それを、魔王という特等席で眺めることのなんと愉快なことか。
そして、いよいよ最後の演目である。もはや、舞台に躍り出るしかあるまい。
「俺っちがそこにいて、それで面白くなるのかい?」
「ああ、その通りだ。かつての強敵同士が、聖書の神話を守るために集う。天界の天使とエクソシスト、三人の超越者とレーティングゲームの皇帝、堕天使幹部たちと信者。彼らが遺恨を超えて結集し……なんの意味もなく、あっけなく駆逐される。最高のショーだとは思わないか? まさに落日だ。我々聖書の神話は全力を尽くして滅びの定めに立ち向かい、言い訳の余地なく完敗する」
「そりゃあ、確かに面白そうだ。そのとき、生き残った連中は何を思うんだろうな? どんな顔をするんだろうな?」
「見ものだろう?」
もちろん、老人も青年も全力を尽くす。その上で、負ける。ああすればよかったとか、こうすればよかったとか、そんな余地の一切ない敗北。それは、先のない絶望そのものだった。
それは、終わりを意味している。再起の機会などあり得ない。幼子

が転んだのとはわけが違う。老齢の男性が転び、そのままベットの上で余生を過ごす。それはつまり、生き切った証であり、老いるまで死なずに済んだ結果であり、そこから先はない。希望はないし、未来はない、明日もない。子孫の成長も次代の繁栄もありえない。

そういう、複数の種族を内包した神話の完全なる結末が訪れようとしていた。

「まあ、適当なタイミングでファルビウムがタオルを投げるはずだ。それこそ、我々が抵抗の意思を失うほどに疲弊したタイミングでね」

「なるほど、それはいい！　確かに面白そうだ！　少なくともここで腐ってる場合じゃないな！」

なんとも悪魔的な理由で、しかし悪魔の未来に貢献するつもりのない魔王の名を持つ二人。彼らは、敗北の確定した未来を喜んで受け入れていた。

だが、老人は何かを思い出す。そう、置き去りにされた一つの言葉。

「僕たんの出番が永遠になくなるって、じゃあどういう意味だったりスンの？」

「私も貴殿も、サーゼクスと並んで超越者とされている。つまり、悪魔という種族に存在するはずのない能力を備えているということだ。私の特異能力『覇軍の方程式（カンカラー・フォーミュラ）』、サーゼクスの真の姿『滅びの魔力の塊』。そして、貴殿は……」

「『神器無効化（セイクリッド・ギア・キャンセラー）』だろ？　流石に自分の能力は知ってるって。まあ、我ながら変な話だとは思うけどニャー」

サーゼクスはバアルの滅びの魔力を母親から受け継いでいるが、彼は滅びの魔力を操るのみならず、それそのものになることさえできる。そうなった彼は、目の前の老人の父親、初代ルシファーの十倍もの魔力を誇る化け物となる。

それに対抗できるとされる唯一の悪魔、青年の能力は全ての現象を数式と方程式で操作するという破格のもの。

そして、老人の能力は聖書の神が生み出した武器『神器』、その効果を完全に無効化する体質である。

彼が生まれたのは前魔王が生きていた時代であり、つまりは神器が生み出されていなかった時代なので、先天的な体質であると考えるには余りにも不自然だが、それでも彼は悪魔には備わっているはずのない力を得ていた。

「でもさ、聖書の神話の住人が死んだぐらいで、神器はなくならないだろ？」

「いや、違う。なにせ、彼らが選ぶ戦場は間違いなく『天界』だ」

ずるり、と老人は惚けそうになった。

ありえないのだ、そこを神器の使い手が戦場に選ぶなど。少なくとも、使用者に助言を与えられる赤龍帝の籠手の所持者がそこで戦うなど。ありとあらゆる意味で、自殺以外の何物でもない。

「正気か?!　その三つ目とかいう兄ちゃんは!?　あそこには……」

「そうだ、天界には神の奇跡をつかさどるシステムがある。それは今は、知っての通りの理由で健在ではない。非常に不安定で、何かの拍子で壊れるだろう」

「そんなことすりゃあ……まさか?!」

「そうだ、私が推測する仮面の男の目的は……」

青年は、サプライズを告げるように絶望的な真実を語った。

「神器の全てを奪い、聖書の信者の信仰を盗むことだ」

それが、一番『面白い』理由に他ならない。

もしも青年が聖書の神とではなく聖書の陣営全てと敵対し、つまり一切のしがらみなく欲するものを奪えるのだとしたら、一番面白そうなものはその二つだ。いや、厳密に言えば一つだが、得られるものはその二つとなる。

神の奇跡を司るシステム。それは、神器の根幹をなすシステムであり、同時に信者が奉げた祈りを資源として、信者への幸福として還元するというシステムでもある。

もちろん、天界という世界の根幹でもあり、失うということは天界の大黒柱と土台を乱暴に引っ込ぬくに等しい。

だが、仮面の男としては気にしないだろう。聖書の陣営の敵対者である彼にとってはなんの問題もない。なによりも、天界という神話上の敵対者の世界を失うということは、悪魔や堕天使の住む冥界にも多大な影響を与えるだろう。

「なるほどな、聖書の神話の勢力はともかく、信者の数は今でも一位だ。その祈りを仮面の男が救いたい数百人で『独り占め』しちまえば……」

「ああ、例えシステムが損壊したとしても、その効果が半減しようとも、その恩恵は計り知れないだろう。なにせ、数十億人で数百人を支えるのだからな」

まさに、幸福を盗むという行為である。一種の税金泥棒であるともいえるだろう。

聖書の信者が増えれば増えるほど、布教に勤しめば勤しむほど、熱心に祈れば祈るほど、救いを求めれば求めるほど……英雄墓場は幸福に満ちていく。信者も天使も全く救われないままに。

「おまけに、神器の根幹システムを盗んじまえば、そのシステムを書き換え放題だ。これぞ正真正銘の『違法改造（チート）』ってわけだ！」

神器の強化形態をバランスブレイカーと呼ぶが、青年の想定することが実際に起きればバランスもへったくれもない。ルールそのものが特定の誰かの欲しいままとなる。

「ああ、どこまで融通が利くかわからないが、おそらく仮面の男のことだ、自らの保有するものも含めて、全ての神器が使用不能にすることもためらわないだろう」

神器とは、それ単独で武器として成立しているが、それは全体として神が作ったシステムで制御されている。つまり、理屈でいえば聖書の神が作ったシステムに介入すれば、天界の天使たちは今すぐにでも、この世のすべての神器を自らのモノにできるのである。

だが、それはできなかった。なにせ、天使は聖書の神の意図を知らないため、また『確かめること』ができないため、神が作ったシステムを改ざんするなどという背信行為をすることができない。もしも、実行に移そうものならば翼は一瞬で黒く染まり堕天してしまうだろ

う。

「確かに、そんなことになったら僕ちゃんも廃業だなぁ！　なにせ神器を無効化しようにも、世界中の全部の神器がなくなっちまうんだ、無効化しようがねー！」

「同時に悪魔をはじめとする人外が、神器使いの人間を利用する意味合いそのものが消失する。例えアグレアスが奪還できようとも、転生悪魔を作り出す意味がない」

人間を利用する勢力は、悪魔だけではない。そして、人間を利用する場合最も多いケースは神器だ。少なくとも、エクソシストや巫女の様に家系として、あるいは宗教に属するものがその神に力を奉げる『古典的』な方式以外では、それがほとんどである。

だが、神器がなくなればそれはなくなる。今現在、転生悪魔として名を売っている神器の使い手も、あるいは利用され搾取されている犠牲者も、一切合切利用価値がなくなる。

そして、なによりも。今後一切、神器にまつわる事件も事故も起きようがなくなる。まさに、根こそぎの解決と言えるだろう。

「でもさあ、ぶっちゃけそんな簡単に上手くいくのぉ？　仮に仮面の兄ちゃんがさぁ、こっちを根こそぎ相手取れるだけの戦力をそろえたとしてもだよ？　聖書の神のシステムを盗むなんてできんの？」

「通常なら無理だ。だが、既に仮面の男は聖杯を、神滅具の聖遺物を所持している。あれならば聖書の神のシステムに正当に侵入できるかもしれないし、セラフのクローンを作成することも可能だろう。それでなくとも仮面の男には非常に強力な精神操作能力がある。セラフ達に自分を聖書の神だと誤認させ、彼らにシステムを操作させて変更させる可能性もあるだろう。もしくは……」

それは、技術者としての好奇心が生んだ推理だった。

神器という、聖書の神が生み出した無数の武器。その根幹に触れたいという、魔王の枠から外れた興味。

「『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』だ。あれがあればなお確実だろう」

最強にして最初の神器。その槍の中にはある『意志』が封じられている。

それを用いれば、聖書の神のシステムなど改竄できて当然である。なにせ、作成者なのだから。

「まあ、問題はそれを『どうやって』手に入れるかだ。それに、ファルビウムが言うには仮面の男がアグレアスを盗んだ理由の候補の一つが、『白龍皇の光翼』を得るためだった、かもしれないそうだ」

「へえ、あの『おちびちゃん』のことかい？」

「ああ、アレを使って色々する可能性もあるそうだ。まあ、確証がないというだけでほとんど確信しているらしい」

「もったいぶるねえ？　他に仮面の兄ちゃんが欲しがってるかもしれない神器はいくつもあんの？」

「最後の聖遺物『紫炎祭主による礫台（インシネレート・アンセム）』だ。これは持ち主がはっきりしている。あれは少し他の神器とは性質が異なるからな。とはいえ、それでも逆に見つけて得ることは難しいだろう」

「？　それって、システムを手に入れるのとはまた別なの？」

「ああ、らしい。まあ、有ればそれに越したことはないだろうが、時間さえかければ聖杯だけでも可能だろうし、聖槍があれば完全に不要だろう。赤龍帝の籠手があればなおのことだ。ファルビウムいわく、仮面の男が十字架を欲していて、手に入れた場合、想像しうる限りにおいて最悪の事態が発生するそうだ」

それは、逆に聖書の陣営にとって利するものになるかもしれないが、それでも避けねばならないことだった。

「とはいえ、流石に時間がかかるだろ？　そんなもんをぱぱっと全部そろえるなんて、いくら仮面の兄ちゃんが凄くてもできるわけがない」

極めて常識的に考えて、老人の言う通りだった。複数ある種類の一般的な神器とてほしいものを選んで手に入れるなど甚だ至難である。まして、一つしかない神滅具を。既に誰かが得ているかもしれない最

強の武器を。
　世界を滅ぼしかねない力を持つ、神滅具。その使い手の危険性は、仮面の男こそが最も証明してきた。であれば、仮面の男をして発見しても即座に手に入れることなど不可能にしか思えない。
「ああ、私もそう思っている」
　問題は、ファルビウムは全くそう思っていないということだ。彼の魔王は確信している、仮面の男は既に欲してる全ての神滅具を集める算段を整えていると。
「だが、仮面の男は常に情報戦によって先を見ていた。であれば、楽観はできない。悲観して絶望しても、それでも全く足りないだろう。遥かに上をいくかもしれない」
「そうか……悪魔は滅びんのか」
「ああ、悪魔以上に悪辣な、悪の権化によってね」
　老人は、なるほどと納得した。そこまで考えていると、そう思われているほどの男が悪魔を含めて聖書の神話を滅ぼそうとしている。
　ならば、勝てるはずもなし。存続できるわけもなし。
　悪魔が『悪』で負けるなら、それもやむを得ないということだ。悪で人間に劣るならば、そんな悪魔は滅びた方がいい。
「いつだ？」
「さてね、ファルビウム曰くかなり早いはずだ。なので、こっちは昔のツテを使って最終決戦に備え始めている。なにせ、三勢力の総戦力が暴れるのだ、特にサーゼクスがやばい。アイツはただ立っているだけで世界を脅かすからな、天界をそのままにしておけばアイツのせいで滅びる」
「ひゃっはっは！　そりゃあ愉快だ！　どうしようもないな！　役に立たねーな！」
　ゲラゲラと、老人は品もなく笑う。
　そう、滅びの魔力の塊となったサーゼクスは強い。インドラやシヴァに匹敵する強者だろう。だが、まったく制御できずに世界をたやすく滅ぼす力など、危ないだけで、強いというだけでなんの意味もなかった。結局、面倒が増えただけである。

だが、それでも彼を戦わせなければならない。
仮面の男は、そのつもりで戦力を用意してくるに違いないのだから。

この『世界（シャカイ）』で成功しているものを全員無価値に落としたとしても、この『世界（シクミ）』の犠牲になるものを永劫に消すために。
この『世界（ゲンジツ）』には、もはや『神話（カミ）』も『神器（キセキ）』も『英雄（イケニエ）』も『主人公（アコガレ）』も存在しないのだと証明するために。
どうしようもない幼稚な理屈で動く『犯罪者（馬鹿な悪人）』を否定してくれる『正義の味方（現実に負けなかった理想）』か、『優秀な大人（主人公を否定してくれる現実）』が、存在するのか確かめるために。

謎　4

「で、君は彼が何をするつもりなのかわかっているんだろう？　もったいぶらずに教えてくれないかな？」
「彼は、二天龍を完全復活させるつもりだよ～～」
魔王ファルビウムは、なんでもなさそうにそういった。
その言葉が、どれだけの意味を持つのかを知った上で、甚だどうでもよさそうにそういった。
彼というのが、聖書の神話に仇なさんとしている仮面の男であることは余りにも明白だというのに。
「……本当かい？」
「本当ですよ～。少なくとも僕はそう思ってますよ～メフィストさん」
最古の悪魔にして、聖書を抜け出た番外悪魔。メフィストフェレス。一勢力の長に収まっている彼に、魔王であるとはいえファルビウムは敬語だった。
とはいえ、彼の無気力な敬語に敬意を感じ取ることは難しかったのだが。
「ただまあ……正直そんなことはどうでもいいんだけどね～～」
仮面の男が成そうとしていることは、一種の安定を求める行為だ。その前提として椎の為の破壊があるだけで、破滅はありえない。少なくとも、聖書の陣営が壊滅する程度で済むだろう。
もちろん、魔王としてはそれをこそ回避するべきであろうが、それには考えがある。おそらく、ファルビウムが想像している通りの人物像ならば、仮面の男の目論見がすべてうまくいっても、さほど脅威ではない。精々、聖書の皆が絶望するだけだ。
むしろ、逆のことをファルビウムは案じていた。もしも、仮面の男の策が成らなければ、そちらの方が問題である。そして、おそらくその件に関して仮面の男はまだ策を練ってさえいない。
「それよりも、僕だってもったいぶらずに言ったんです。貴方ももったいぶらずに話を進めてくださいよ」

「おいおい、これじゃあ蛇の生殺しだ。なあ、どうしてそう思うんだ？」
そして、どうやってそれをするつもりなんだ、何のために？」
「ダメですよ。なんでもかんでも聞いたら。さあ、話を続けてください」
頼んでいる立場ではあるが、それでもファルビウムは話を続けることを促した。なにせ、仮面の男の策は時間との戦いである。それが今日であるとは思えないが、明日であったとしても、さほど驚くことではない。そういう部類なのだ、仮面の男の策は。
そして、こちらの降伏を受け入れてもらうためにも、こちらはそれにある程度乗る必要がある。少なくとも、受け皿は早々に作らなければならない。
「……分かった。確かに僕が理事を務めている魔法使い協会「灰色の魔術師（グラウ・ツァオベラー）」は、北欧神話ともつながりがある。しかし、オーディンにユグドラシルの技術を流してもらうとなると……」
「やっぱり、相当譲歩しないと無理かぁ……やだなぁ、こういうの僕の仕事じゃないのに」
「だけど、その話は聞き捨てならないな。二天龍の復活なんて、大問題だろう？」
「別に？」
「いやいやいやいや……」
そこは、たいしたことではない。少なくとも、目の前の魔法使い協会の理事には、余り係わりのない話だった。
「なになら交渉の材料になるかな？」
「多分、二天龍の復活の情報を渡せばいいんじゃないかな？」
「無理、確定じゃないし」
確信はしている。しかし、証拠がない。単なる思考の結果を、国家間の交渉に使うことはできない。
とはいえ、外交担当のセラフォルーには別の仕事がある。そして、それはそれで急ぎだった。なにせ、天界との打ち合わせである。こちらこそ大急ぎでしなければならない。

「かなり無理をしてもらうことになるけど、いいかな？」
「一応祖国だからね。それに、君たちのことも結構好きだし」
メフィストは、前魔王とはあまりいい関係ではなかった。それゆえに、メフィストは実質的に冥界を離脱し人間界で新しい組織を作るに至った。
だが、現在の彼は現政権を支持している。アジュカとは技術面で意見が異なっているが、それでも個人としては尊重しあっている。
故に、ファルビウムの無理な願いも、割とすんなり受け入れていた。
「なにせ、サーゼクスとアジュカがドライグとアルビオンと戦うんだ。相当強化しておかないと、即崩壊することになってしまう。北欧神話とはあんまりいい関係じゃなかったけど、今だけでも協力してもらわないと」
「いっそ、闘技場でも作るかい？」
「いいね、彼なら大喜びで参上しそうだ」
とはいえ、世界最強クラスの四柱が真正面からぶつかり合うのだ。できる限り強固な闘技場を作成しても、気休めにしかならないだろう。特に、サーゼクスは立っているだけで空間を削り取るのだ、その辺りの対策も考えなければならない。
「まあ、そういう技術面はアジュカの仕事だし、ここで考えても仕方ないか」
「……で、実際どうして二天龍が復活するって話になったんだ？」
メフィストは、よほどその話を広げたいらしい。推論の結果でしかなく、また違ったとしてもすべきことに大して差はないので、ファルビウムからすればする意味のない話だった。それでも、実際に二天龍との交戦経験があるメフィストからすれば、決して無視できない案件だった。
「仮面の男はどういう男なのか？　そこから推論は始まる」
悪逆非道、残虐無比。神算鬼謀、神出鬼没。そうした多くの言葉は、仮面の男の表面しか表していない。
「サーゼクスが直接会って話したところから察するに、彼はサーゼクスを含めて悪魔に怒りを抱いている。それは、サーゼクスがそういっ

たんだから確かだろう。しかし、その割には明らかにおかしいことがある」
「おかしいこと？」
「ではなぜ、彼はルネという少女の復讐の手助けをするまで、一切情報が上がってこなかった？」
計画性と行動力を、仮面の男がもてあましていることは余りにも明らか。だが、しかし。なぜか、仮面の男はつい最近まで完全に無名だった。或いは、詳しく調べれば細かい事件はあったのかもしれない。
それでも、彼は冥界そのものを脅かすことはなかった。少なくとも、彼は自分から直接悪魔に挑もうとはしなかった。
「……自分の目的を隠すためじゃないのか？」
「違う、彼は態々サーゼクスの前に現れて勝利を宣言するほどに自己顕示欲が強い。もしも、彼に悪魔と戦うだけの理由があれば、それは大声で喧伝してしかるべきだ。でも、彼はそれをしなかった」
「……」
「彼にとって大事なことであったとしても、客観的に考えて『悪魔にケンカを売る』理由にはならないからだ。つまり、彼は悪魔を憎んではいても、それが悪魔にケンカを吹っ掛けるほどの理由ではないと、自覚していたからに他ならない。多分、死ぬほどくだらない、どうでもいい理由だろうね」
それは、事実だった。仮面の男が悪魔を憎む理由は、言ってしまえば完全に自業自得であり、自覚もしている。
だからこそ、悪魔は今日まで無事だったのだ。もしも彼が悪魔を憎む客観的に正しい大義を得ていれば、最初から宣戦布告に足る理由を持っていれば。
それは、悪魔という種族の凄惨な結果しかありえなかった。
「彼は、彼なりに自制ができる男だ。だからこそ大量虐殺はしなかった。きっちりと、明確に目標以外が死なないように、被害が少なくなるように配慮している。もちろん、そこにも明確に悪意はあるんだけどね」

「だが、ルネという少女にであい、大義を得た」
「それは前回で完結している。そして、今回はその発展だ。おそらく、彼は保護している面々の為に動いている。であれば、彼が保護している面々に、彼だけができることがあるとすれば……彼らの身の安全を、ある程度保証することだ」
　そのために、二天龍を復活させる必要がある。彼らには、彼らにしかできないことがある。
「彼は悲観的な人間の様だ。であれば、居場所が分からないように隠しているだけで、保護している面々の安全が保障されているとは思わないだろう。であれば、単に強いだけではなく、強いと知られている抑止力になりうる力が必要だ」
　そこで、二天龍である。彼らはオーフィスとグレートレッドを除けば最強のドラゴンだ。現に、全盛期の聖書の神話をして、三陣営が一時休戦し協力してまで倒している。
　もしも、完全に復活させることができれば、単純な実力はシヴァやインドラに匹敵し、かつそれが全神話に知られている。
「二天龍は実力もさることながらネームバリューが抜群だ。現に、最古の悪魔であるメフィストさんも気にしているしね。彼らを全盛期のまま復活させ、かつ戦力として運用できるなら、この上ない戦力になり示威も抜群となる。彼らを実際に使役し、神話を一つ滅ぼせば、間違っても彼と正面切って戦おう、という勢力は出なくなるだろう。少なくとも、数は大幅に減るはずだ」
「それと、アグレアスを盗んだことの何の関係が？」
「知っていると思うけど、アグレアスには堕天使が確保していた白龍皇も投入されていた。仮面の男が『堕天使は白龍皇を確保している』ということを知っていれば、アグレアスという目立つ物で堕天使領につっこめば、本能的に赤龍帝を敵対視する白龍皇は例えアザゼルに制止されても突っ込んでくると想定できる」
　余りにも、大きな隠れ蓑だ。アグレアスそのものには何の利用価値もなかったとしても、アグレアスには多くのモノが群がり、その全てが失われた。

であれば、その失われたものこそが彼の求めたものだったとすれば。

「彼にとって、白龍皇と『接触』することこそが、最優先課題だったんだろう」

「ふむ……大胆な話だ。偉大なる魔王の空中要塞アグレアスは餌でしかない、いや単なる誘蛾灯か……」

「そして、彼が白龍皇を最大限利用するならば、彼を一旦野に放つだろう。彼を利用しようとするであろう勢力に向こうから接近させるために」

「実際には、白龍皇と赤龍帝は既に手を組んでいるというわけか。美味い手だ、まさか二天龍が協力するとは思わないだろう。だが……」

「二天龍が協力することを、良しとするのか？　かな」

それこそ、当時の二天龍を知るメフィストからすればあり得ない話だ。なにせ、あのドラゴンは三陣営の戦争のさなかに突っ込んでも、それでもケンカをやめないほどにどちらが上かを決めようとしていたのだ。

三陣営とて協力しなければ二天龍に対抗できなかったが、二天龍とて三陣営と真っ向から戦うまでケンカをやめなかったのだ。

まあ、ドラゴンらしいといえばそうなのかもしれない。

「でも、完全復活は彼らにとっても利のある話だよ。なにせ、肉体が蘇るんだからね。神器に宿って、彼らも長い。人間と触れることにそれなりに面白さも感じているだろう。なによりも、戦って負けた結果だからね。でも、彼らだって諦めているだけで復活はしたいはずだ。自分の意思じゃ動けないし、人間に使われるだけで何もできない。何よりもご飯も食べられない。僕だったら絶対にごめんだね」

死者蘇生は、ドラゴンにとっても魅力的であろう。意思だけあって、力だけあって、それで人生を楽しめるかといえば別の話だ。それができるのであれば、協力することもやぶさかではあるまい。

「なにより、僕ら聖書の陣営は彼らにとって仇だ。貴方だってそうだし、アザゼルだってそうだし、ミカエルだってそうだ。負けて納得はしているだろうけど、再戦の機会があるなら大喜びだろうさ」

「うわ……なに、アレとまた戦うの？」
　メフィストは、頭を抱えそうになる。あの、反則級のぶっ壊れ能力を持った『最強種族ドラゴンの頂点』と戦うなど悪夢以外の何物でもない。それこそ、戦争のさなかだった陣営が手を組まざるを得ないほどの脅威だったのだ。
「それに……そもそも二天龍が生前通りの人格なら、人間に自分の力を使われることなんて絶対に嫌がっていたし、互い以外とは絶対に戦わなかったよ」
　言われてみれば、その通りである。神器に彼らが封じられていることになって、とても長い。その時間は、彼らが人間に使われる武器に成り下がった違和感をぬぐっていた。
「彼らも、多少は丸くなったということかな？」
「その丸さが僕らに生かされることはないよ。多分、たまりにたまった鬱憤をぶつけてくるはずだ。そして、それが彼の大義となる。今まで犠牲になってきた宿主を含めて、二天龍の因果の終着に僕らを選ぶのは正しいだろうさ」
「で、その後彼らは保護対象を守るドラゴンになると……」
「実行可能なら、彼らだって協力しかねないでしょ」
　そういう意味では、接触さえできればだいぶ成功率は高かっただろう。
　そして、こればかりは洗脳をするわけにはいかない。二天龍を一時洗脳することができたとしても、長期間となると不可能に近い。抑止力がいつとけるともしれない洗脳で縛られたドラゴンなど、厄介なことにしかならないだろう。
「仮面の男は、そこまで考えているのかい？」
「そこまで考えているはずだよ。多分、彼は早めに決着を付けたがっている」
　客観的に自分のことを観れるならば、自分の勢力が拡大しすぎることを警戒するだろう。はっきり言って、ルネやヴァレリーという少女に関しても早めに切り離した方が（切り捨てるではない）互いの為なのだ。

「彼のやり方は余りにも過激すぎる。まっとうな価値観の持ち主なら、彼の所業に対して鬱憤をため込んで反旗を翻しかねない。もちろん、それはそれで彼は喜びそうだが、守る対象に危害を加えることは避けるだろう。であれば、早めに、数回の犯罪で決着をつけたがるはずだ」

そこまで気回しができるなら、いっそもう少し温厚に立ち回るべきではないかと思うのだが、それは彼の嗜好に反するのであろう。

「しかし、まともな神経の持ち主へ気遣いができるようなやつなのかい？」

「もちろん。彼は彼なりに、まともだよ。そうじゃないと、ここまでことを成功させられない」

確かに、彼は悪辣で過激で凄惨で獰猛だ。だが、それは目立った部分でしかない。

「彼は、戦術的にも戦略的にも、しなくていいことをわんさかやっている。それが悪辣に見えるけれども、セオリー通りにうごいているよ。教科書通りどころか、教科書を書いてほしいくらいさ」

「あれだけ卑怯なのに……セオリー通りなの?!」

「そりゃあ、戦略の基本は卑怯だからね」

戦闘も戦術も戦略も、はっきり言ってしまえば自分の強い部分で相手の弱い部分を叩くところに終始する。その理屈でいえば、確かに仮面の男の犯行は極めて合理的且つ適切だった。

まず、成功している時点で彼の有能さの証左であり、同時に結果から見れば成功して当然という納得を誰もに与えていた。それは、彼が成功するための鉄則をきっちりと守っていたことを意味している。

「まず、黄金風船を囮に使った復讐戦だ。サーゼクスは冥界各地に居た遺族を一か所に集め、且つレーティングゲームのプレイヤーを招集した。つまりサーゼクスは戦力を集中させたんだ。数的有利を活かすなら、包囲戦を仕掛けるところだっただろうね。だが、それは力押しだった。もしも、それを仮面の男が実行に移せば、如何に戦力が無尽蔵であったとしても失敗していた可能性が高い。サーゼクスの眷属は当然のこと、トップランカーはみんな有能だからね。戦闘や戦術

レベルなら、勝てていたかもしれない」
サーゼクスは、当初人気のない荒野の守城戦を想定していた。各プレイヤーの戦力を確認し、受け攻め色々考えていただろう。
だが、それは視野が狭まっていた。将棋盤を前に唸っていたサーゼクスの前に、仮面の男は冥界全土の地図を持ってきて、魔王領を含めたプレイヤーたちの領地に駒を置いたのである。
つまり、集中させていた戦力を拡散させ、弱い部分を露出させるどころか孤立させたのである。
「だから、彼は戦わなかった。優先順位の低さと戦力の少なさを弱点とみて、戦線を拡大させて集中した戦力を希釈させた」
「結果、苦戦するしかなかった」
「うん、少数精鋭の弱みだね。突破力はあっても防衛には余りにも不向きだ」
もちろん、そんなことはファルビウムが一番分かっている。しかし、国家戦略において、内戦で疲弊した悪魔が徴兵を行うなど余りにも負担が大きすぎた。であれば、少数精鋭をうたうのもそこまで誤りではなかった。アジュカの作成した悪魔の駒を含めて、そこまで非現実的ではなかった。ただ……それでも補いきれなかっただけで。
無理やり徴兵していれば、経済的に破たんしていた可能性もある。つまり、とっくに詰んでいたのである。
「次の飛行機雲事件。つまり、アグレアス奪取だ。これに関しても定石通り」
拠点を丸ごと移動させる、というのはセオリーかといえば微妙だろう。だが、それでも起きたことを記号的にとらえれば間違っていない。
「移送中の彼はおそらく、一切戦わずに逃げ続けていたはずだ。つまり、押してくる相手に対して引き続け、第三勢力にぶつからせた。そして、戦闘している両者を横からチクチク殴っていたんだろうね。被害は抑え、戦果は最大。ここまでキレイに決まるのはマレだよ」
逆を言えば、ファルビウムにしても相手が『基本』を外れなかったからこそ手の内を読み切れたのだ。

もちろん、基本に徹していたからこそ、失敗しなかったのであろうが。

「で、最後は真正面からぶつかると」

「そうさ、天界に攻め込むんだ。そうなれば聖書の陣営は全力で迎え撃たざるを得ない上に、戦えば戦うほどにこっちが不利になっていく。最終的には世界が滅ぶ寸前までいくだろう。勝っても負けても、滅ぶしかなくなる」

「でもさ……勝てるの？　こっちにはサーゼクスとアジュカがいる。あの二人は、二天龍に劣らない。彼らを三陣営の総力がサポートすれば」

理屈でいえば、二天龍と超越者二人は互角である。この上で、軍勢のサポートを得られる魔王二人は、圧倒的に有利のはずだ。

「ドラゴンが、簡単に死なないのはメフィストさんの方がよく知ってるでしょ。それに、向こうには「獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）」もある。ヘラクレスに打倒された獅子王が復活すれば、戦力としては十分でしょ？　それに、なにより仮面の男がいる。彼の能力は一切が未知数だ」

もっと言えば、最強の悪魔であるサーゼクスに、アジュカは対応することはできるが、協力するとなると相性がいいわけではない。

対照的に、二天龍の相性は最高に近い。もしも、完全に和解し互いの力を相互に恩恵として与えるならば、チームとしては噛み合うだろう。

「……そうか。でもさ……『どうやって』復活させるの？」

「聖杯を使って、神滅具の中から封じられている魂を抜き出す。その上で、そのまま聖杯で蘇生させるんだろうね。もしくは、仮面の男自身に蘇生能力があるのかもしれない」

「……そんなこともできんの？」

「どっちかというと、そっちの方が本命だと思うね。二天龍や獅子王を復活させるとなると、聖杯の使い手への負担は計り知れないし、もしかしたら聖杯で復活したらリゼヴィムの能力の対象になるのかもしれない」

事実だった。仮面の男には外道輪廻天生の術という、己の死と引き換えに死者を完全に蘇生させる術が存在する。また、失明と引き換えに己の死をなかったことにする、イザナギという術も存在する。

そして、必要となるであろう大量のエネルギーを魔獣創造から供給し、失明した眼を聖杯で治療してしまえば、実質的にリスクはない。

「君も大概だけど、仮面の男もひどいね」

「そうかな？　どっちかというと……もう一つの可能性の方が、怖いけどね」

彼が欲しているであろう神滅具の中に、紫炎祭主による磔台（インシネレート・アンセム）という聖遺物がある。

もしも、それを彼が手に入れた場合、神器に封じられた如何なる魔物が復活するよりも、最悪のことが起きるだろう。

「これ以上……なにがあるんだい？」

「言えない。やばすぎる」

ファルビウムは、蒼白の表情でそう〆た。

ソーナと顔のない男。どちらの頭脳が優れているのか、それは判別がつかない。

少なくとも、傍から見ていればソーナも十分異常だ。わずかな時間、わずかな材料だけで見事な推論を組み立てていた。正直に言って、全貌を知っている三人は戦慄したほどである。

「大丈夫ですよ。どうやらファルビウム様は自分の想定以上に優秀で有能なようです。きっと自分が考えている以上のことも想定していることでしょうね」

顔のない男は、それ以上なにも明かさなかった。実際の所、ソーナにすべてを語る意味はない。彼の言葉の節々に張り巡らせた伏線に、聖書のお偉方は気づくだろう。

その程度には有能であると、顔のない男自身も知っていた。

「それに、一番肝心なところはまだ決めていないんですよ。【ノープランだ！】いやあ参った参った。そのうちいいアイディアが浮かぶとは思うんですがね」

顔のない男の作戦は、今のところ成功している。しかし、聖書の陣営も妨害できていないというだけで、最悪の事態は常に回避してきた。

それは彼らが有能であることの証左であり、同時に限界も示していた。顔のない男にとって不愉快なことに、やはり彼らには顔のない男を止めることは期待できない。

【心が迷ったなら撃つのはやめなさい。成長するのだ…再び『新しい道』への扉が開かれるだろう】心に迷いがあっては、何も成せない。そういう意味では、問題はないと思っています。ただ、きっかけがあれば、閃きがあればいい。問題は、時間がないということです」

だが、それでもそこまではできるのだろう。であれば、彼女に教える必要はない。

それを理解したのか、ソーナもそれ以上聞き出そうとはしなかった。彼女自身がわからないことでも、他の誰かならわかる。元々、そ

のために記録しているのだから。
「このままでは、貴女方と共倒れになってしまう。それだけは避けたいですね。とはいえ、こればかりは運も絡む。それまで何も起きないことを祈るのみですよ」
それに、ここでうかつに彼を問いただして、機嫌を損ねるのも面白くない。自分と眷属が全員死ぬ程度ならまだいいが、学校や周辺が吹き飛ぶのは大問題だ。悪魔社会が許しても、彼女自身が許せない。
「とにかく、ここにリアス様がいらっしゃらないのであれば、それだけでも大分ありがたいですね。なにせ……」
水を飲みながら、穏やかに会話をしていた顔のない男。彼は、語っている最中で、突然と言っていいほどに言葉を区切り……。
「……」
それを不自然に思った悪魔の二人が声をかける前に、爆発した。
「ひゃあああああああはははははは！」
突如として、身震いしながら絶叫した。
「はははははははははぁあああああ！」
それは、論理的な意味を一切持たない、何かを誰かに伝えたいという意図を一切持たない、ただの感情の発露だった。
「げひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」
嗜虐の思考回路がフル回転している。憎悪でも憤怒でもない、ただ相手に嫌がらせをしたい、それだけの、それだけの思念が沸き上がって止まらなかった。
「……みなさん、大丈夫です。もうしばらくしたら勝手に落ち着くので、お茶でも飲みながら笑いが収まるのを待ってください」
心底愉快そうに、不快な笑い声をあげる顔のない男。彼の脇に立つ少年は、何事もないようにペットボトルの水を飲んだ。
彼ほど平静を保てているわけではないが、ルネとヴァレリーも慌てることなく、ただ呆れつつ嫌そうな顔をしているだけだ。
会話の最中に前触れなく、発狂したかのように感情を吹き上がらせるのは、決して珍しくない。
だが、ソーナと匙はやはり面食らっていた。やはり、感情を吹き上

がらせる顔のない男の、そのプレッシャーは悪魔である二人をして耐えきれるものではないらしい。

人間と混血吸血鬼でしかない三人がこれに耐えられるのは、単に慣れだ。目の前にどれだけ恐ろしい化け物が居て笑い転げていても、それがこちらに危害を加えないと理解して、それが続けば耐性を得る。もちろん、不愉快が愉快になるというわけではないので、決して一緒にいて楽しいというわけではない。

だが、一つ確かなことがあるのだとすれば、彼の衝動はそのまま暴力に直接つながることはない。大抵、性欲につながるのだ。彼なりに、発散させようとしているのだろう。

それはもう、いろいろな相手にいろいろなものを大量にぶちまけている。

「ソーナ様！」

勾玉模様が目まぐるしく変容していることが、ソーナの目にも明らかだった。それが彼の心中の激しさを表していることは余りにも明白であり、その感情が名前を呼んだソーナ本人に向けられていないことも明らかだった。

その眼は、ソーナを映しているがソーナを見ていない。

未来を、彼方を、地獄を、犯罪を、絶望を視認していた。

そして、ソーナも理解する。この男は、『本物』だと。

「いいことを思いついてしまいました！」

おそらく、ソーナと顔のない男は何度チェスをしても、ソーナが勝つだろう。

計算や暗記、そうした勉学でもソーナが勝つだろう。

だが、アジュカのような科学者としての頭の良さとは別次元に、ファルビウムと同類の、そしてソーナが目指すべき視点があった。

バラバラに散らばったパズルのピース、それをくみ上げて地獄を作る力。

情報や材料、知識や経験。それらで楽園を構築する力。

「自分がアグレアスで拘束した、堕天使の精鋭と旧魔王派！」

直感で得た未来絵図に等しいアイディアを、いともたやすく本物の

設計図に昇華させ、それをためらいなく実行に移す熱意。
自分が破滅することも理解の上で、全てをゆだねる狂気。
何もかもを一切合切、主観的な欲求を満たしつつ客観的にも問題を解決する合理性。
化け物だ。それ以外の何者でもない。
悪魔の敗北を予見したファルビウムの絶望を、ソーナは本人を前にして理解する。
こんなイカれたやつに、勝てるわけがない。誰も勝てない。
「今、全員ここに開放します！」
頭が良いとか悪いとか、そういう問題ではない。
この男は、頭がおかしい
ファルビウム様は、こんな化け物と戦っていたのだ。こんな化け物の脳内を覗いていたのだ。
【バゴアバゴア！】【カーッカッカッカ！】【マキマキマキー！】【ケケカーッ】【ノォホホノォホ】【魚雷魚雷魚雷！】」
些か意味のある言葉も発するようにはなった。だが、それでも笑いは止まらない。
「【実行しないなんてありえなぁ～い！】【絶好調ナリ～！】【悪戯するぞー！けってーい！】【犯罪行為で幸せゲットだよ！】【堪忍袋の緒が切れました！】【ここで決めなきゃ女がすたる！】【神話を滅ぼしてウルトラハッピー！】【墓場の皆に幸せ、注入！】【この犯行計画ステキ過ぎる!!】」
よほど愉快でよほど嬉しいのだろう。
「【できるだけドラマティックに、できるだけロマンティックに】ああ、姫島朱乃さんもきっと大喜びですね！　この際親子が仲直りするかもしれませんね?!　まあ、それはいいとして……体育館にしましょう！　透視しましたが、ちょうど誰もいない！」
人質の解放。それも、生存が絶望視されていた面々。それが、なんの対価もなく返還される。
上手い話が過ぎる。だとしても、それは喜ばしいことだった。今目の前にいる顔のない男が何がしかの細工を彼らに施していたとして

も、そうと知っていれば対処はたやすい。
一旦隔離して、そのうえで調査すればいい。どのみち、長期間拘束されていたのだ、程度の差はあれども健康診断は必要だろう。ＢＣ兵器や洗脳、思考操作の可能性もある。なにより、旧魔王派はテロリストだと判明していた。どのみち拘束する必要がある。
むしろ、相手の手の内がわかるだろう。目の前の彼が、何を意図して彼らを解放したのか推理することができるだろう。
だが、分かっている。分かってしまう。分かりたくもないが、明らかすぎる。
この男は、何も処置せずに、細工せずに、ただ開放するつもりだ。
「【最高に「ハイ！」ってやつだアアアアアハハハハハハハハハーッ】」
それが何を意味するのか、ソーナにはわからない。
だが、それがソーナ・シトリーという個人ではなく、悪魔という種族ないし聖書という神話全体に向けられた悪意であることは余りにも明白だった。
この男が、ここまで狂喜乱舞するほどの、圧倒的な悪意の結実。そのための手段として、人質の解放はされるのだ。
「……ああ……ああ」
匙は、遂に後ずさりした。己の愛しい主を守ることも忘れて。ソーナも、ソファーに座っていなければ同じことをしていただろう。
燃え盛る憤怒ではない。焼き尽くす嫉妬でもない。ただの、悪戯心。子供が虫をいたぶって、その動きを見て楽しむような、相手の痛みを理解しても共感しない、遊び心。
目の前の存在にとって、自分たちなど、悪魔など、聖書の神話など、俎板の鯉でしかないということだ。
これが、絶望というものなのか。
望みが絶たれるということなのか。
「レオナルド！　思えば二代目火影作戦は失敗だったな！」
「貴方がこの世界に生まれ落ちた以上の失敗なんてありませんよ」
「観客が、いない！　生存者が、いない！　故に、あの素晴らしい地獄

を、誰も知らない、想像しない、認識しない。かと言って、もう一度するなど下策も下策！　ならば何をするべきか?!　知れたこと、あれ以上の地獄を！　あれ以上の絶望を！　あれ以上の最悪を！」

二代目火影作戦なる作戦が、如何なる作戦なのか。それはソーナにはわからない。おそらく、聞けば例の『最後まで強制的に大音量で再生する映像』の入った手紙を渡されるか、丁寧に装丁されたＤＶＤないしブルーレイを渡されるのであろう。

少なくとも、その作戦を知っているであろうヴァレリーは嗚咽をこらえきれず、膝をついた。ルネは悪意の重圧に抵抗しながら、かろうじて彼女に寄り添う。レオナルドも顔をしかめていた。だが、それでも耐えている。

「……それは、果たして可能か？　否！　記録も記憶も、塗り替えてこそ意味がある！　【信念さえあれば人間に不可能はないッ！　人間は成長するのだ！　してみせるッ！】そうだ、確かにやっているこちらとしてはつまらないのかもしれない。だが、それはあくまでも裏方の事情！　大事なのは、そう！　見る者の気持ちだ！　立ち向かう彼らの心情だ！　ああ……ああッ！」

写輪眼。その眼は、感情を表す。だが、それはつまり眼そのものではなく、感情の在り方こそが意味を持つことを明示している。

危うい。危険すぎる。災害そのものだ。悪意に満ちている。

「【迷ったなら『撃つな』……だ！　だが、もう『迷い』はない】悪意の伝言ゲーム、これはいける！」

「どこに行く気だ、クソ三つ目」

「楽しくてたまらない最高の地獄さ。ああ、ぞくぞくする！」

おぞましい。虫唾が走る。気持ち悪い。

その言葉を、それに類する言葉を、いままで幾たび使っただろう。相手を侮辱するために、あるいはふざけるために、または体調を表すときに。

だが、真のそれは、もはや言語化を絶するものがある。

この男の悪意にも熱はある。だが、それは火炎の類ではない。強酸のもつ、すべてをただれさせる熱だ。膨大な量が、沸騰しているかの

ように泡と熱を発している。
「る、ルネ……私はもう駄目かもしれないわ！　あれ以上に酷いことをさせられるなんて……耐えられない！」
「おい、クソ三つ目！　ヴァレリーに変なことさせるってんなら私が！」
「ルネさん、その場合はこの人が一人で何とかするだけです」
「……そっちの方がやばいな」
「でしょう？」
「そうですね……」
「まあ、その前に帰って女だ女！　全員真っ白になるまで穴という穴にぶちまけてやる！」
あふれる情動を抑えきれないのか、顔のない男は仮面に手を伸ばした。
だが、おそらく覆面を被ることとはなんの関係もなく、男は調子を沈めた。
間違いなく、ソーナへの気遣いであろう。それが彼女を救うとはとても思えないが、別れの挨拶は穏やかだった。
そのテンションの上下に、ソーナも匙も置いていかれている。
「ソーナ様。今日はこれで失礼いたします。楽しい時間をありがとうございました。おかげでいい作戦を思いつきました。貴女のおかげです。ですが気にしないでください。どのみち結果は一緒でしたしね。貴女は何も悪くない。気にする必要はない。魔王の妹であること以外に、次期当主であること以外に、何の義務も背負っていない、何の権限もない貴女が、国家の存続に関して責任を感じることそのものが間違っている」
すっぽりと、自分の顔を隠す仮面の男。
彼は、彼にとって『当然』の現実を、優しく告げていた。
筋の通らない責務を苦痛と感じる彼の、慈悲深い言葉だった。
だが、それは野心家のソーナにとって傷口に塩を塗るような発言だった。
「悪いのはサーゼクス様でありアジュカ様でありファルビウム様であ

りセラフォルー様だ。アザゼル様でありミカエル様だ。次世代に何も残せなかった、現役の無能が招いた当然の帰結だ。有害な加害者である自分に罵倒の言葉をぶつけてもいいし、無能な被害者である現政権を憎んでもいい。だが、自分自身を責めることは、それだけはやめてください。現役世代への侮辱です」

仮面の男は、ゆったりと席を立った。そのまま、中身の減ったペットボトル片手に生徒会室を出ようとする。

犯罪者は、暴いた。少女の一切を、粉微塵に粉砕した。

そのうえで、諭すように語る。

「貴女は、まだ子供なのだから」

それは、彼のやさしさだった。

「貴女は……何も悪くない。呪うならば、自らの無力ではなく、この犯罪者にするべきです」

仮面の男は、空間跳躍能力を用いずに、態々生徒会室から扉を開けて出ようとする。それに続く形で、三人もソーナ達から視線を外した。

「では、今日は本当に楽しかったです。ファルビウム様にはよろしくお伝えください。二週間後、朝飯を食って昼飯を食ったら、晩飯を食いに行くと」

「待ってください！」

話を終わらせようとした、部屋を出ていこうとした仮面の男へ、ソーナは叫んでいた。

それは、弾劾ではなく、罵倒ではなく、叱責でもない。

してはならない、懺悔に近いものがあった。

「悪魔は、どうすればよかったんですか！　現魔王はどうするべきだったんですか！　私は……」

再び泣き叫びながら、ソーナは叫ぶ。救いと答えを求めて。

「私はこれからどうすればいいんですか！」

ファルビウムは最初からあきらめていた。ソーナもそこに行き着

いた。だが、ソーナはそこから希望や最善を見つけることができない。

再び、仮面の男は素に戻っていた。

それを、自分に聞く理由がわからないのだ。彼という男の、数少ない盲点、自らを完全に把握しきっていないことが、どう思われているのかを理解していないことが、彼にその質問の意図を理解させなかった。

「な、なぜそれを自分に聞くんですか？　そういう重要なことは周囲の信頼できる大人に聞くべきではありませんか？　なぜ犯罪者に聞くんですか？」

「三つ目……貴方が全部を壊したからです。貴方が、全てを暴いてしまった。真実をさらしてしまった」

聡明なソーナは、すべてを理解していた。つまり、悪魔社会に存在していたなにもかもが幻想にすぎなかったのだと。

「私が歴史として学んだことも、私が現在として受け入れたことも、私が未来に描いていたものも、すべてなにもかもを貴方は行動と言葉で破壊した」

過去の歴史、現在の政治、未来の計画。それらを、仮面の男は極めて論理的に、実証によって否定した。

それが、自分を頭が良いと思っていた彼女にとって、どれだけ残酷なことかは彼女にしかわからないだろう。

「過去、旧魔王派と現魔王派が戦い、旧魔王派は敗れて僻地に封じられた。それが原因で、今回は貴方にそれを利用された。それでなくとも、クーデターを企てた！」

単純な事実として、仮面の男が動くまで、あるいはすべてが終わるまで現政権は旧魔王派のクーデターを知らなかった。それが、国家の保安上どれだけ問題なのかは語るまでもない。

「現政権が作っていた悪魔の駒によって強化された精鋭の眷属悪魔。彼らは実際の国難の時に、国家全体よりも領地を優先せざるを得ない！　少数精鋭では、防衛には余りにも不向き！」

四大魔王によって、構築されていた現在の悪魔社会。その構造の脆

弱さを指摘されるまで、実証されるまで彼女は疑問さえ感じなかった。

「なによりも、私が眷属達に語った夢は、根本的に破たんしていた！　レーティングゲームのプレイヤーに引退制度がない以上、悪魔の寿命が長い以上、強者だけが残り弱者は排除され、しかもその水準は上がり続ける！　素質で劣る下級悪魔が出世するための手段には、決してなりえない！」

そう、それこそが彼女にとってどれほどつらいことなのか。

引退制度がないとはいえ、若手が台頭して来れば順位に変動も起きるだろう。

だが、それはプロの世界で生計を立てるための水準が、上がり続けることを意味している。

「少し考えればわかることを、私は考えもしなかった。私は本物の愚か者です！　そんな私に教えてください！　悪魔は、どうすればよかったんですか！　現魔王はどうするべきだったんですか！　私はこれから何をするべきなんですか！」

そんなことは、悪魔の誰も知っていない。知っているならば、最初からそうしていたはずだ。或いは、発言していたはずだ。だとすれば、ソーナの周囲にいる誰に聞いても、決して返ってこない。

そして、今近くにいる匙にとって、それがどれだけつらいことだろうか。

どれだけソーナに正当を訴えることができたとしても、鼓舞をすることができたとしても。正答を彼女に示すことができない、匙の無力さは尋常ではない。

そう、それこそが匙という少年の、あるいはライトノベルの主人公になれたかもしれない、真面目で優しい熱血漢、自己犠牲をもいとわない努力家。その、正しいだけの少年の限界だった。

論理的な問題に対して、感情的に叫ぶことしか出来ない男の、どうしようもない現実だった。

「……自分が言うべきではないと思うんですが」

しかし、それは仮面の男にとっては泣き叫ぶ理由さえ分からないほ

どありふれた問題でしかない。きちんとした正答のある、悩む必要のない問いだった。

「……あの、三つ目様。貴方は彼女にそれを答えられるんですか？」

「そりゃまあな」

「なら言ってやれよ。言ってもどうにかなるわけじゃないんだろ？　もう、悪魔は詰んでるって言ってたじゃないか」

「そうですね『キュアピーチ作戦～みんなで幸せ強奪（ゲット）だよ～』が成功しても失敗しても、結果は一緒だって言ってたじゃないですか」

仮面の男の背後に立つ三人も、泣きじゃくる少女に一定の同情を示していた。

あるいは、仮面の男の犠牲になる彼女たちに、悲哀を感じていたのかもしれない。

この男と関わると、敵だろうが味方だろうが、それこそ敗北感しか感じないのだ。

「……なあ、お前は本当に、会長に納得できる答えを言えるのか？」

「当然でしょう？」

不思議そうに、首をかしげながら仮面の男は匙に答えた。

「まさか、悪魔の直面している事態が、人類史上においてただの一度も発生しなかったことだとでもいうんですか？　よくあることじゃないですか、失政が原因で国が亡びるなんて」

「まあ、そりゃそうだろうけどよ」

「ぶっちゃけた話、歴史を学ぶ上で年号や固有名詞を覚える意味なんてないんですよ。そんなのクイズでしか意味を持たない。語呂合わせで何年に何が起きたとか、どこそこのだれそれが死んだだの生れただの、そんなのはテストでしか意味がない。大事なのは因果関係です。結果だけ覚えて、原因や経緯を理解していなかったら勉強の意味がないでしょう？」

再び、匙という少年は敗北感で目眩を覚えた。まるで、特大のハンマーで自分の頭を殴られたかのように、いや、それ以上の苦痛を感じた。

つい先程まで、意味があるのかないのかさえ分からない叫びをあげ

ていた犯罪者に、理路整然と勉強不足を、否勉強の意味を理解していなかったことを説かれたのだ。仮にも教師を目指していた自分がである。

いや、もっと言えば、悩んでいる生徒に頑張れとしか言えない自分に、果たして教師としてできることはあるのだろうか。

「ですから、少し考えればわかるもんですよ」

「いえいえ、分かりませんよ。分かりませんから、教えてあげてください」

レオナルドは、いい加減哀れが極まっていた。

いい加減、正答を教えてあげなければ、いよいよ彼はどうしようもなくなってしまう。

邪悪と正道を極めている仮面の男は、普通に話をしていても相手の心をぽっきりとへし折るのだ。己の信念があればあるほどに。

「っていってもな。別に、普通に当たり前の話をするだけだぞ」

「それでいいです。いいですから」

レオナルドに促されるままに、扉の前に立ち部屋の中の面々を視界に入れたまま、仮面の男は語り始める。

「では……まず、自分が旧魔王派を拘束して抜き出した情報を含めて、話させていただきます」

仮面の男は、ドラマ性を好む。誰が、なぜ、どのようにして、生きて、死んだのか。何を思っていたのか、誰を愛していたのか。それらを知りたがる彼は、拘束した悪魔や堕天使から情報を抜き取っていた。

彼らの主観でしかないが、それは彼らにとっての真実であるともいえる。それこそ、現政権が無視し続けていた、都合の悪い真実だった。

「初代四大魔王亡き後、悪魔は方針に関して対立が生じました。つまり、旧来のやり方を貫こうとする前政権の後継者と、新しいやり方に変えようという新勢力です。結果から言って、クーデターによって現魔王派が勝利し政権を得ました。これに間違いはあったのか。なかったでしょうね、旧魔王派のやり方を続けていれば、悪魔は聖書の陣営内部で共倒れするか、或いは他の神話によって滅ぼされていたで

しょう。さりとて、旧魔王派が新しいやり方への転向をするわけもない。内戦という暴力的な手段も、それによって生じた多くの被害も、まあ仕方がない。では、事後処理として旧魔王派を僻地に送ったことはどうか。これに関しても、彼らを皆殺しにすればクーデターを防げたでしょうし、アグレアスを我々に盗まれることもなかった。ですが、それに関しては古参の悪魔が止めたようです。前魔王の血筋が絶えるのは見たくない、ましてや身内の手にかかっては……。サーゼクス様にしても殺したいとは思っていなかったでしょうし、古参の悪魔には発言力もある。態々逆らってまで殺すことはないと思ったんでしょうね。実際、それでも間違ってはいなかったでしょう」

意外なほどに、仮面の男は現政権のやり方を支持していた。とはいえ、それは現政権の判断がなんの問題もなかった、という肯定ではない。最善はつくしたが、それでも遺恨を残したというものだった。

「では、現政権の融和政策に端を発する旧魔王派のクーデターに関してはいかがでしょうか。停戦状態を長年維持していましたが、それでも人間の住む世界を中心として対立や衝突は幾度となく行われてきました。ある意味では、ルネもその犠牲者の一人。これを完全に止め、且つ弱体化している神話そのものを補強するためには、神話内での戦争を止め、その上で神話外の勢力とも協定を結ぶ。それは理想論だと吐き捨てることはたやすいですが、それでも非現実的ではありません。今回我々のテロ行為によって無為に帰しましたが、犯行が起きる前に協定が結べていたならば各神話からの助勢も望めたでしょう。まあ、それは神話というか国家として国防面で問題だとは思いますがね。その時はその時で色々策を巡らせてはいたと思いますが、それは別の話です。ただ、それに旧魔王派が賛同することはありえなかったでしょう。少なくとも、全員が称賛し賛成する、などというお花畑な結論はありえなかった」

それは、仮面の男が一人一人の主観を把握したから言えることであり、同時にそうであろうと察することができる結論でもあった。

旧魔王派、つまりは偉大なる四人の魔王の血と名を継ぎ、それしか残っていない面々が彼らの意思を捨てることは難しいだろう。

「貴女の夢ですが……これに関しては無謀としか言い様がありません。レーティングゲームのプレイヤーになったこともない少女と、上級悪魔になったこともない少年が、レーティングゲームの選手を養成し下級悪魔から上級悪魔を目指す学校を作りたいなど、滑稽どころの騒ぎではありません。レーティングゲームのプロの世界は、下級悪魔が本当に努力してまで参加する価値のあるものなのか。下級悪魔が上級悪魔に成り上がることは、本当に幸せなことなのか。貴方達は答える術を持たない。【憧れは理解から最も遠い感情だよ】貴方達の夢は、レーティングゲームのプレイヤーに向けられている尊敬の目、上級悪魔という家系への尊敬の目、その延長線上でしかない。小娘の甘い夢、そう断ぜられたとしても仕方がありませんね」

ぐうの音も出ないほどの、圧倒的な説得力だった。

理路整然と、淡々と、声を荒げることなく厳しい意見が彼女と、その眷属へ切り込んでいく。

その口調には荒々しさも悪辣さもない。さながら、教師が生徒に言って聞かせているような、叱りつけるような誠意があるだけだ。

だが、それゆえに、生徒でしかない二人には、記録を取っている面々にはつらいことだった。

確かに、少し考えればそれで分かることだった。

第三者が、悪魔ですらない男が、ただ事実を並べただけで至る結論に彼女は至りもしなかった。疑問を感じなかったのだ。

「では、【悪魔は、どうすればよかったんですか！　現魔王はどうするべきだったんですか！　私はこれから何をするべきなんですか！】それに対して、回答を示しましょう……」

そこで、仮面の男は一旦区切った。

「なあレオナルド、本当に自分が言わなきゃダメか？　ものすごく説教臭くて嫌なんだが。犯罪者が説教とか、ＴＨＥレイプマンじゃないんだから」

「いつもしてますからねぇ、強姦。というか性犯罪は思いつく限り全部してますよね」

「他にもいろいろしてますからね、拉致監禁とか」

「洗脳とか窃盗とかもな。ああ、殺人教唆もしてるな」
「そうなんだよ、だいたいこのままだと彼女の国を滅ぼすんだぞ？なんで侵略者に国家の行く末を尋ねるんだ」
「素面でそう思えるんでしたら、話を早く終わらせましょう。なんだかんだ言って、共犯者である僕らも心苦しいので」
「そうか、わかった」
こほん、と軽く咳払いの上で、仮面の男は部屋の中の全員へ語り掛けていた。

「では、答えましょう。貴方達は……正しい。だが、正しいだけでは何も救えません。そんな正しさは有害な正しさでしかない」

数分間、彼は語った。
そのしばらく後に、彼が事前に語った通り、生死不明ないし生存が絶望視されていた堕天使や旧魔王派は解放された。
これによって、白龍皇ヴァーリ・ルシファーを除いて、投入された戦力はすべて生存を確認されたことになる。
だが、それが吉報であるわけがなく、凶報でしかなかった。

「やっほー、元気ぃ？」
「リゼヴィム……」
駒王学園近くに存在する悪魔所有のビルに、聖書の陣営の有力者たちが派閥や垣根を超えて集結しつつあった。
それを代表するように、二人の超越者が。二人のルシファーが向き合っていた。
方やルシファーの血を継ぎながら魔王を放棄した男。
方やルシファーの座を継ぎながら魔王として悪魔を守れなかった男。
つい先日まで死んだように生きていたリゼヴィムは、しかし目の前の男の醜態に喜色満面の笑みを浮かべている。
醜態というよりは、憔悴というべきだろう。自分の信じる精鋭が、完全に健在なまま国家の血肉を削ぎ落されていく姿焼き。即ち、無能の証明以外の何物でもないこの現実に、打ちのめされているサーゼクスにはかつてのみなぎっていた自信はない。
「よく、よく来てくれた」
「なに、その面を拝めただけでも来たかいがあったってもんよ」
嗚咽さえ漏らしながら、悪魔を捨てた男の到来を喜ぶ魔王。その姿は余りにも威厳に欠けていた。
だが、それはそれで仕方がない。彼は本心から信じていたモノが、一切合切機能を果たさずに無価値であると示してしまったのだから。
そこで、仇敵が参戦を表明してくれたのだ。涙腺が緩んでも仕方がない。
なによりも、リゼヴィムは前魔王の遺児である。彼がこうしてサーゼクスに協力を表明したのだ。それは古参の悪魔にとっても大きい意味を持つだろう。
「お久しいですな、リゼヴィム坊ちゃん」
「あれれ、ぼっくんだってもう孫もいるってのに、まだ坊ちゃんっていうのぉ？」

その、古参悪魔の筆頭であろう老人の名前はゼクラム・バアル。初代７２柱の筆頭に位置し、今や冥界を陰から支える、或いは支配する老人である。

そんな彼にとって、ルシファーの遺児であるリゼヴィムの帰還はサーゼクス以上に喜ばしいものだった。

「なにをおっしゃいます。この老体から見れば、坊ちゃんはいつまでも坊ちゃんですぞ。この冥界の危機に参じていただけるとは……老いぼれの涙腺が緩みそうになりますぞ」

魔王の血を継ぎ、魔王にふさわしいだけの魔力を持ち、魔王を超えた異能を持つルシファーの帰還。まして、神器を操る人間によって存続の危機に立たされている悪魔にとって、どれだけ喜ばしいことなのか。涙ぐみ歓喜に震えても不思議ではない。

その、幼き日の自分を知る、且つ己の偉大すぎる父親を崇拝している老人を見て、リゼヴィムは悲しそうに目を細めた。

「すまない、我は……お前達の期待する魔王にはなれなかった」

ふざけるのをやめて、役を作って演じるリゼヴィム。彼としては、自分の大根役者ぶりは良く知っている。だがそれでも、未だに亡き父を慕う『身近な大人』に礼節を示した。

「わかっていたのだ。お前達重臣が、我に亡き父の跡を継ぎ冥界を治めてほしいと思っていたことは。だが、偉大だった。我が父は、偉大すぎたのだ」

大根役者を演じつつ、それでも素直に心中を明らかにしながら謝罪するリゼヴィム。

精一杯謝ろうとしている、かつての王子を前に今度こそ原初の悪魔は涙腺を決壊させた。

「お前には、人一倍の苦労を掛けただろう。すまなかった、我が全てを投げ出したばかりに……」

「よいのです……こうして、悪魔の危機に戻ってきていただけたのです。これ以上何を望みましょうか」

その姿を見て、サーゼクスは痛感する。やはりルシファーの名は、血は、座は、どこまでも重かったのだ。

最初から、自分がルシファーになるべきではなかったのだ。前魔王の遺児である彼が魔王になっていれば、こんな面倒なことにはなっていなかったはずなのだ。

「やはり、私にはルシファーは重かったようだ。貴殿を王に据えるべきだったのだ……」

それは、悪魔の内戦の全ての否定だった。或いは、勝利者である彼が今まで築き上げてきた、治世の全ての否定だった。

だが、そう思うほどに、彼に突き付けられた現実は残酷だった。

「いいや、ただ父の血を継いだだけの、非才な我では破たんしていただろう。貴殿はよくやっていたのだろう。ただ……その貴殿でも、魔王の座にはふさわしくなかったのだ。おそらく、あの日に全てが終わったのだろう」

リゼヴィムのその言葉には、ねぎらい以上に偉大すぎる魔王の死への絶望が秘められていた。

あの日、即ち前魔王と主神が『お隠れ』になったあの日、聖書の神話は終わったのであろう。

「けっ……今更出てきて悟ったようなことほざきやがって……」

その場に集った中で、或いは聖書の神話の勢力の中で唯一生き残ったトップ。『神の子を見張る者（グリゴリ）』総督に座すアザゼル。或いはそれを最初から悟っていたであろう彼は、それでも否定するように現れた。

その眼には、先日まで庇護していたヴァーリを虐待していた、リゼヴィムへの憎悪がわずかに燃えている。

だが、それも今は追及するべきではない。今は、まさに正念場だ。目の前に現れた男は、あらゆる意味で戦略的な意味を持つのだから。奇しくも、彼を直接的に憎んでいるであろうヴァーリは、既に自分の手元にはいないのであるし。

「リゼヴィムもそうだが、こうやって会うのは久しぶりだなバアル。相変わらずでかい顔してサーゼクス達に口出ししてるらしいじゃねえか。隠居したんならおとなしく引っ込んでりゃいいもんを」

最古参の堕天使の登場に、悪魔三人はわずかに身構える。その姿に

は、つい先日まで引っ込んでいた全盛期の堕天使総督としての圧が、今更のようによみがえっていた。
　そう、偉大すぎるルシファーと鎬を削っていた男が、無能なわけがないのだから。
「ふん……あんちくしょうを持ち上げすぎだぜ。あの頑固者が生きてようが、仮面の男に太刀打ちできていたかどうか？」
「侮辱するなら言葉を選ぶことだな、カラス。勢力の復興から目を背け続けた貴様が、偉そうに何をほざくか」
　それに応じるように、悪魔を支え続けてきた重鎮は圧を放った。サーゼクスの滅びの魔力、そのルーツたる老人の力はいまだに衰えを見せてはいない。
「その勢力の復興が、今回の一件に無関係だとでもいうつもりか？」
　今の言葉だけではなくこれまでの政策さえ軽蔑しつつ、堕天使のトップは吐き捨てるようにサーゼクスさえにらんだ。
　そう、勢力の復興という目的のために、いったいどれだけの蛮行を悪魔が尽くしてきたことか。
　その憎悪の蓄積が、今回の一件と完全に無関係だとは、誰も言い切れない。
「お前ら悪魔が勢力を復興させるために、内戦の傷を癒すために熱心に契約を求めたことが、土着の信仰を食い荒らしたことが、今回の一件に無関係だとでもいうつもりか?!　なあ、ミカエル！」
　アザゼルに次ぐ形で現れた、現在の天界のトップである最古の天使、ミカエルは苦渋を隠さずに現れた。
「堕ちた天使である貴方にそういわれては、私もどう返せばいいのかわかりませんね」
「ふん……こうなるのは、分かり切っていたことだ！　神器、神滅具の危険性を考えれば、いつかはこうなるとな！　こうなる前に、和平によって事態を鎮静化させようと思っていたが……間に合わなかった」
　信者が勝手にやったことだ、とはミカエルは言えない。それは決して許されることではないのだ。
　土着の信仰を守るために、『邪教』の戦士たちはその神の力で侵略に

立ち向かった。それを、神の力で切り払ったのはエクソシストであることに違いはないのだ。

「結局、何もかも我々に都合よく治めようとしたツケが回ってきたということだ……」

サーゼクスの脳内で、今更のように仮面の男からの弾劾が反響する。【ですから、貴方達が我慢してその憎しみの連鎖を断ち切ってくださいい】。そう、そういうことなのだ。

聖書の神話は、失った勢力の戦力を取り戻すために、ありとあらゆることを行った。或いは、信者たちは無自覚に行ったことかもしれない。だが、それでも結果として侵略と簒奪は行われ、それを止めようとは誰も言わなかった。

確かに、サーゼクスは和平の道を模索していた。だが、それは決して彼らから奪ったものを返還するという話ではなかった。

つまりは、聖書の神話は彼らから奪えるものはすべて奪ったうえで、そのうえで上から目線で融和と友好を語っただけなのだ。

「ミカエル……アザゼル。おそらく彼が求めているものは私たちと同じものだ。平和だよ……私たちと同じように自分にとって都合のいい平和を求めて戦っているのだ」

そういう意味では、決して気が狂っているわけでもなんでもない。極めてまっとうな理由での戦いだった。

「ああ、まったくだ。だがへーそうですかと、なんでもかんでも差し出すつもりはねぇ」

摩耗した勢力の中で唯一、勢力の復興に関心を示さずに、神器の所持者の管理や処断を行ってきたアザゼルは、闘志をみなぎらせてかつての仇敵たちへ戦意を問う。

そう、少なくとも仮面の男は大義を背負ってはいない。彼は諸神話の怨恨を背負って現れたわけではない。ただ、聖書の神話が勢力を維持するために行ってきた蛮行の、そのリスクを引き当てた怪物でしかない。

彼は聖書の神話から直接的な被害を受けたのではない。ただ、我々を滅ぼして得たいものがあるというだけなのだ。それこそ、今まで聖

書の神話がそうしてきたように。
「でだ、エクソシストどもはどうだ？　いっちゃあなんだが、アイツらが一番面倒だろう」
　アザゼルは、ミカエルに問う。そう、天界で戦う以上面子の意味でも天界の勢力が最大戦力を用意しなければならない。であれば、神が隠れた今増えることのない天使ではなく、エクソシストこそが戦力の中核となる。
　しかし、相手は仮面の男である。先日の旧魔王派の様に、彼らを利用して内部からひっくり返しかねない。
「その点は大丈夫です。流石に、先日のアグレアス奪取を見れば……彼らも鉾を収めざるを得ません。そして、我らにとっても……敵が完全復活を果たした二天龍だというのであれば、一切気兼ねすることはありえません」
　ミカエルは、強い意志をもって断じた。実際、エクソシストの多くは悪魔に対して強い敵意を持つ者も多い。だが、先日旧魔王派が鮮やかなまでに利用しつくされたことを知れば、流石にそうも言っていられない。
　加えて、二天龍の復活こそが目的であると知った今、天使は堕天を気にせずに全面協力をすることが許される。
　なにせ、前例があるのだから。もはや居もしないトップにご意見をうかがう必要はないのだ。
「【さあぁ、エクソシストの諸君！　加えて天界の天使達！　どうだろうか、この場は自分に任せてもらえないだろうか!?】」
　突如として、リゼヴィムが演じ始めた。その対象が、誰であるのか余りにも明らかだった。
「【なに、しばらく見て見ぬふりをしてくれるだけでいい。エクソシストは腹が痛くなったとでも言えばいいし、天使も天界のシステムにトラブルが発生したとでも言えばいい。何もせずに、悪魔と堕天使が負けるところを見届けたらどうだろうか？　さすれば我らは潰し合い、疲弊するだろう。君たちはその後、悠々と生き残った方を聖書の言葉と共に裁けばいい。さあ、勝利は目の前だ！】とか言い出しそうだな」

ミカエルの信頼を込めた断言に、しかし茶化すようにリゼヴィムは警鐘を鳴らす。

実際の所、そういわれたとしても不思議ではないし、それを実際に言われて、迷いが生じないとは言い切れないのだ。

そういう意味では、リゼヴィムの発言は正しい。人間とは必ずしも愚かではない。しかし、いつ何時でも、或いは自らの生死さえかかっていたとしても、賢しく合理的に振る舞えるとは限らない。

扇動の天才と評されるに値するリゼヴィムは、悪魔の誘惑で天使に警告を発したのだ。

「どうだい、ミカエルおじちゃん。末端の隅々まで、今の言葉に手を止めずに戦えるのかい？」

「エクソシストや天使への説明を……再度、徹底して行います」

「そうした方がいいぜ……勝つにせよ負けるにせよ、泣いても笑っても最後の祭りだ。丁重にお出迎えしないとあとくされが残るってもんさぁ」

と、リゼヴィムは敗北が決まっているかのように語った。

それは、それだけは受け入れかねるとその場の面々は黙る。しかし、実際の所否定しにくいのも事実である。

なにせ、もしも二天龍が完全に復活し天界に攻め込むならば、どう考えてもどう都合よく転んだとしても、天界は滅び連鎖的に冥界も滅び、つまり聖書の神話は滅亡する。

それは、戦力をそろえればそろえるほど発生する、構造上の矛盾である。

単独でも世界を滅ぼすほどの龍が二頭現れる。それを倒すために世界を滅ぼす力を持った存在をそろえて戦わせる。それも、守るべき壊れかけた世界で。

「リゼヴィム坊ちゃん、この戦いは……」

「おっちゃん僕はね、負けに来たんだよ。アジュカちんがそう誘うんでね。もちろん全力で命を惜しまずに戦うさ。最後の、最期までね」

ここで死ぬならば、いっそ美しいというものだ。自分は何者なのか、ただルシファーの血を継ぐだけの者なのか。その問いに答えを得

られず、その姿を表舞台から消した悪魔。それが、悪魔が滅ぶという土壇場で、冥界を守るために戦って消えるならば、意味はなくとも役を演じ全うできるだろう。いっそ、そうであるべきなのだ。

『神器無効化（セイクリッド・ギア・キャンセラー）』などという力は、もう意味をなさなくなる時代がそこまで来ている。であれば、引き際を見誤るわけにはいかないのだ。

「この期に及んで、無駄に生きながらえてもシャーネーだろ。もう僕のパパも、ミカエルおじちゃんやアザゼルおじちゃんのパパも、どこにもいないんだから」

否定し辛いことを、世捨て人はためらわず口にする。ことさらに、ミカエルにとっては存在意義を揺さぶるものだった。

「だからよ、まだ生きてる俺の前で言うなリゼヴィム。王のために国があるんじゃねえ。民のため、国のためにトップがいるんだ。そのトップが死んだくらいで、国ごと民ごと死んでたまるかってんだ！」

アザゼルだけは、それを大声でためらわずに叫ぶことができる。それゆえに、怒りを込めて叫んだ。

誰もが、リゼヴィムやアジュカのような例外を除いて、この場の全員が危機感を共有して国難に立ち向かっているのだ。滅ぶ定めに抗うために。

「そうだ……たった一人が決めたことで、世界の存亡が決まってたまるかってんだ！」

そのアザゼルの叫びに、サーゼクスは身を固めた。そう、それは彼自身さえ否定したがっていたことだった。彼という人間が、どこに所属し何を思うかで世界の命運が左右されるなどあり得ない。だというのに、現実は、悪魔も堕天使も天使も、あるいは神さえもそれを否定できずにいる。

たった一人の決断が、国を背負っているわけでもない、ただ特別な力を持っているだけの人間が決めたことが、さながら運命の様に立ちふさがってくる。決めた当人さえ困惑するほどに。

「ああ、その通りだ。この世界に筋書など存在しないのだから。リゼヴィム、貴殿やアジュカが負け戦を楽しむつもりなのは知っている。

だが、負けると決まり切っているわけでない。仮にそうだったとしても、覆すことはできるはずだ」

サーゼクスは自分でも白々しいとはわかっている。だが、それでもそれを認めることはできない。

「我々の苦境は一個人が決断した結果ではない。我々の身から出た錆だ。それを削ぐために出血することも仕方がないのかもしれない。しかし、その血は民が流すべきものではなく我らが流すにとどまらせるべきだ」

それは、魔王らしくはないのかもしれないが王らしい言葉だった。どれだけ憔悴しても、どれだけ無力を思い知っても、絶対に諦めることのない王のあるべき姿だった。

ただ、それが戦略的に意味を持つのかといえば疑問だった。実際の所、それは今まで散々してきたことだ。だが、ただの一度もまともに機能したことはない。そう、今の苦境が身から出た錆を削ぐ行為だというのであれば、それこそ今まで彼らがしてきたように、滅亡寸前まで追い込まれなければ解決しないのかもしれない。

「で、返還された戦力に関してはどうなんだ？」

アザゼルのどうなんだ、という言葉には重い意味があった。

はっきり言って、これで手放しに喜ぶのは愚か者である。仮に、実際に何もなかったとして、それで一安心するのは更に愚か者である。

何が目的だというのだ。仮面の男は、何故に戦力を戻したというのだ。

「アジュカが今調べている。一応念のため入念な検査をしているが……おそらく問題ないだろう。もちろん、我らの解析できない細工が施されている可能性もあるので、隔離の上で拘束させてもらう。どのみち……旧魔王派はテロリストなのだから」

「堕天使側としても、それで文句はねえ。バラキエルには悪いが、アイツを戦場に連れていくことはできねぇからな」

この大戦で負ければ、戦力の温存に意味などない。アザゼルは既に、恥知らずなことだが自分が直接天界に参陣するつもりだった。

それほどに、分かりやすい脅威なのだ。二天龍という存在は。

「……まあ、なんにもしてないと思うけどねえ」
と、気だるげに現れたのはこの場で唯一、仮面の男に対抗できている存在。冥界最高の戦略家、ファルビウム・アスモデウスだった。
彼の登場に、その場の面々はリゼヴィムの存在以上に戦慄する。
この男は、その気だるげな表情の裏で幾千幾万もの策略を張り巡らせているのだ。それは、負けっぱなしの聖書の陣営の中でただ一人仮面の男に敗北感を味合わせている、それほどのものだった。
「ファルビウム、貴方が先ほど私達に明かした情報はどれも信じがたく、しかし信ぴょう性がありました。ですが、なぜ今明かしたのですか？」
ミカエルの問いは、その場の全員の疑問だった。
実際、先入観を持つのは危険だったのかもしれない。だが、仮面の男がソーナ・シトリーに接触し、会話記録をあえて残して去った、という情報を知ってからそのまま内容を確認することなく、そのまま明かしたのは解せなかった。
「……想定が確信に変わったからね。だって、このタイミングで人質を解放するなんて他には考えられないし」
と、さらりと凄いことを言い放った。
「……ファルビウム。貴方はまさか……敵の作戦が完全にわかっているのですか？」
「そんなの映像記録なんか見なくても分かるよ」
全員が、もう開いた口がふさがらなかった。ハイレベル極まりない頭脳戦は、この場の首脳を置き去りにしていた。
片方は何の細工もせずに拘束した面々を解放し、片方はそれだけですべての意図を察した。
既に、この二人は遥か高みから戦況を俯瞰しているというのか。
思わず、生唾を呑む。サーゼクスは、今更ながら自らの友人の無茶苦茶さ加減に戦慄する。
自分などよりも、よほどこの王の方が常識から逸脱しているのでは

ないのだろうかと、今更思い知っていた。
「……あのさぁ、なんで分かるの？」
リゼヴィムの問いに、ファルビウムは気だるげに応じた。
「だって、他に考えられないし。ああめんどくさい、伝言ゲームを強制してくるなって話だよ」
この場の首脳がどれだけそろっても、たった一つさえ可能性を模索することができない中で、この男はどれだけの可能性をたどっていたのか。
烏合の衆、という言葉が全員の脳裏を駆け巡る。さりとて、口には出さない。
今このタイミングで、こうして人質を解放する意味。それは何なのか？
仮面の男は会話の中に伏線を張り巡らせ、記録を見たことで結果的にその結論へ至らせたかったのだが、ファルビウムは記録を確認することさえなく見切っていた。
「仮面の男の目的はね、僕らをこうして集めることさ」
その言葉に、最古の悪魔である初代バアルさえ戦慄した。今、この魔王はなんと言ったのだ？　確かに、今回仮面の男が解放した面々は堕天使の幹部をはじめとする精鋭と、旧魔王派の戦力全てだ。
それらが意識を失ったまま全員全裸で、可愛らしいレースのリボンで包まれて、メッセージカードと共に駒王学園の体育館に空間跳躍で遺棄されたのだ。
もちろん、その第一発見者であるソーナの眷属はそれを覚悟もなく目視し、唖然として言葉を失ったという。
それはさておいて、しかしそれだけの戦力が若手悪魔の領地にぽつんと返却されていれば、最悪堕天使と旧魔王派で再度激突する可能性さえある。
堕天使は自分の戦力を確保するために、悪魔は名実ともに犯罪者となっている旧魔王派を捕縛するために、天界は仮面の男の情報を得るために。
それぞれがそれぞれの理由で集まるのは当然の帰結である。

「僕らをこうしてここに集めてしまえば、もう後戻りはできなくなるからね。それだけが目的なんだろうさ」
言ってしまえば、恐喝に近いのだ。しかも、ファルビウム限定のである。
「……では、どうすれば仮面の男の目論見をつぶすことができるのですか？」
「逆。何が何でも成功させないといけない」
と、ミカエルの希望を探るような問いかけに、絶望的な回答が返ってきた。
「仮面の男の作戦を成功させないと、僕らに未来はない」
非常に軽く、しかし断言した。
そこに、交渉の余地や妥協の余地は一切ないと言わんばかりに。
「まあ、どこから説明すればいいのかわからないし、一遍見てみようよ。きっと、二天龍の復活を臭わせたり、システムを盗むこともさりげなく明かしたりしているさ」
誰もが声もない。
一体どれだけ深い領域で、戦略家と犯罪者は通じ合っているというのか。
「……で、セラフォルーはどうしたの？」

「ソーナちゃん！　駄目だよ、危ないことしちゃ！」
と、明らかに見た目の年齢からすれば危険な格好をしている、明らかに年相応ではない口調の魔王は、しかしまっとうに自分の妹の危険な行為をしかっていた。
果たして説得力が発生するのか、それは甚だ疑問だったが、それでも言っていることは間違っていない。
仮面の男は、女性を洗脳し性的に犯した上でその映像を親族に送る

ことを得意としている、正真正銘の鬼畜である。まあ、天使はともかく悪魔が人間を鬼畜というのは明らかにおかしい気もするのだが。

「仮面の男はね！　女の人に酷いことをする、サイテーのクズなんだよ！」

悪魔の頂点である魔王の名前を極限まで貶めつつ、且つ魔女や魔法使いの風評被害までしている女には、言われたくないであろうが……まあ、言うまでもないだろう。

ただ、その姉の言葉に頷きつつも、ソーナは紅潮した顔を隠せずにいた。

「だ、大丈夫よ。アジュカ様に真っ先に確認していただいたけど、洗脳の類はされていないわ」

「そういう問題じゃないよ！」

セラフォルーは、女の勘で察していた。自分の目の前にいる妹に、重大な何かが起きたのだと。

そう、強盗を自称する仮面の男はとんでもないものを盗んでいったのだ。

ソーナの聡明な顔はややだらしなく緩み、怒られているにもかかわらずやや口角は吊り上がり、姉の服装に気をやることもなく心ここにあらず。そんな余りにもわかりやすい所作だった。

「ソーナちゃん！　お姉ちゃんの目をみて本当のことを言って！　何があったの！」

「おい、セラフォルー！　なにやってんだ！」

「黙っててアザゼル！　姉妹の一大事なんだよ！」

「知るか！　こっちは神話の危機だぞ！」

二人のいる部屋に入ってきたアザゼルに、しかしセラフォルーは一歩も退かない。

妹を愛していると公言してはばからない彼女は、冥界の一大事よりも妹の心中を図ろうとしていた。

「もういい！　じゃあ映像記録だけでもよこせ！」

と、余裕のないアザゼルは会話を打ち切った。実際の所、一刻も早く内容を確認したいのであろう。

しかし、記録のありかを知っているソーナは、興奮している紅潮から蒼白になり、しどろもどろになりながら応じた。

「……現在、その、私の眷属たちが編集中です」

「なんでだ?!」

政治的に不適切な個所を修正するために、鋭意編集中のソーナの眷属達。

彼らの努力もむなしく、全編にわたって魔王たちは記録を拝聴するのだった。

「まったく、何を考えていやがるんだ！」

アザゼルの怒りはいまだに収まりをみせない。あるいは、平常時であればまだ抑えがきいたかもしれない。笑って許していたかもしれない。

しかし、この火急の事態に正しく余裕は失われていた。

モニターの有る会議室で、魔王セラフォルーの妹であるシトリー家次期当主は、聖書の神話の名実のトップが集結した前で罵倒されている。

それを不満に思いほほを膨らませているセラフォルーではあるが、流石にサーゼクスに睨まれては動けない。

普段は困った顔をしながら笑って許したサーゼクスにも、情愛故の余裕は一切ない。

「一分一秒が惜しい。ソーナ、君の映像記録を見せてもらうよ」

前置きを一切排除して、未編集の記録映像が映し出される。駒王学園の生徒会室に複数設置された、監視カメラによる複数の映像が一度に写される。

ソーナの眷属は優秀な人材がそろっているが、流石に監視カメラの設置に長けているわけでもないし、ましてや盗撮の経験が豊富というわけでもない。

故に、カメラの映像はどれもが、なにがしかの障害物によって写すべき仮面の男達がきちんと映っているわけではない。

だが、それでも複数設置の効果があったのか、全部を同時に見ることで全体を把握することは可能だった。

『では改めまして、私が仮面の男です』

『僕はレオナルドです』

『ヴァレリーです』

『ルネだ』

映像に現れた、四人の神滅具所持者。彼らは各々が世界を滅ぼすほどの力を持ち、現に神話世界を脅かす危険な犯罪者集団だった。

その中で異彩を放つのは、ウサギのような耳をつけた、真っ白な仮面をかぶった男だった。

言うまでもない、比喩誇張一切抜きに聖書を滅ぼそうとしている天地創造以来最大の敵、無貌の絶対悪。

その出現に、初代バアルは歯ぎしりと共に拳を握りしめ、サーゼクスは複雑な心境と共に魔力を高ぶらせた。

リゼヴィムやアジュカはそれを面白そうに観察し、仮面の男から視線を外してさえいるが、そんな余裕や達観があるのはこの二人だけだ。少なくとも、ソーナは部屋の雰囲気に圧倒されている。ファルビウムは、ただどうでもよさそうになにがめているばかり。

これだけの面々が、危機感を共有し、憤怒に燃えているのだ。それはつまり、仮面の男がそれだけ異常ということでもあるのだ。

これだけの面々を、彼以外の誰が恐怖に陥れることができるというのだろうか。

そんな、戦慄すべき事実にさえ今の彼女は胸が躍っていた。

『ですが、流石に顔も見せないのは無礼ですね。汚い顔ですが、仮面を脱いでもよろしいですか？』

一瞬画像の中のソーナと、それを観ている首脳陣の体が同時に硬直する。

しかし、目を見開いてもそこにあるものはやはり薬か熱でただれた、表情のうかがえない顔だった。

覆面の男は、覆面を外して尚顔のない男だった。

『……これだよ。あいにくですが、自分の顔を焼いたのは自分です。それに、別に悲壮な何かを抱えていたわけではありません。そういう風にみられるのが嫌で、普段は顔を隠しているんですが。なので、あんまり気にしないでください』

仮面の奥には何もない、強いて言えば目が三つあることが改めて確認できた以外に、なんの新情報も得られなかった。それは落胆となって会議室に蔓延する。

だが、それは些細なことだ。まだ映像は始まったばかりである。

『では、一番先に聞きたいのですが……リアスになんの用があったのですか？』

『それは……彼女の眷属である姫島朱乃さんの状況を知りたかったのです』

『……はぁ？　だれだそいつ』

そこから始まった会話は、意外なほど穏やかだった。

仮面の男が常に興奮している、というのは流石に考えていなかった。だが、仮にも魔王の妹であるソーナに対して、好意的ともとれる敬意や誠意を示しつつ、会話は不思議なほど順調に進んでいく。

『貴女が、サーゼクス様から何をどこまで聞いていたのか知りませんが……自分は昔、匙さん、貴方の様になりたかったんですよ』

それは、穏やかで悔いに満ち、しかし赤裸々な告白だった。

まるで、既に結婚している初恋の相手に心中を語るように、返答を求めない好意を示しているかのようだった。

『自分は、リアス様やソーナ様のような、己の理想をもって邁進する、社会的な立場の女性の元で活躍したかった。出世したかった。正義を語りたかった。ヒーローの様になりたかった。そして、あわよくば……そんな身も心も美しい少女と恋をしたかった』

幼少の頃の、淡い夢を語るように顔のない男は捨てた夢を語る。

そんな理想とは、余りにもかけ離れた行いをためらわず行う、犯罪

者とはとてもではないが思えない。
ソーナは、映像に映っている先ほどの自分とは違う表情でそれを観ていた。
対するにサーゼクスは自分が聞いた、仮面の男の主張の適合性を感じていた。
自分に対しても、ソーナにも同じことを言っている。ただ、伝え方が余りにも違う。彼が言うように、ソーナやリアスは彼にとって理想の残滓なのだ。
まだ、正しい夢を見ていた頃の、淡くも美しい夢の欠片なのだ。

『だから、そんな可哀想な連中を利用して、何かをさせようとしているんじゃないかってことだよ！』
『はははははははは！　匙さん、漫画やアニメの見すぎですよ！』

声を荒げているソーナの眷属を、からかうように笑う仮面の男。まるで弟や子供をあしらうように、朗らかに応じていた。
その会話が、したくてたまらなかった。もしも、自分がリアスやソーナの眷属になっていたならば、匙とこうして話をしたかった。
その夢が一端でもかなった。そんな印象を受ける。

『匙さん、いいですか？　利用するといったところで、つまりは彼らを労働力になるまで教育する必要がある。その手間を考えたら、彼らを利用するなんて大赤字もいいところですよ。もちろん、資源としてばらばらに解体するというなら別ですが、それにしたって彼らに資産価値なんてありませんよ』
『彼らは、幸せを自分で見つけるんです。彼らだけに価値のある、彼らの人生に意味を感じてほしい。簡単なことではないと、こちら側にとっても彼らにとっても、とても長く険しいことでも、それでも、彼らの歩き方で未来を目指してほしい』
『神器所持者は、なぜ実験を受けたのか。混血吸血鬼は、なぜ差別されていたのか。社会が悪いのか、時代が悪いのか、世界が悪いのか、宇

宙が悪いのか、神話が悪いのか、宗教が悪いのか、政治が悪いのか、種族が悪いのか、そんなことは分かりません。ですが、一つはっきりしている。彼らは、なにも悪くない』

『他人の痛みを分かち合い、対価を求めずに献身する。つまり……無償の愛ですよ』

ミカエルが認めるほどに、博愛に、慈愛に、親愛に満ちていた。

試練や苦悩に満ちているであろう、保護している面々の未来。それを彼は祝福していた。試練に打ちのめされ苦悩する様をあざ笑うのではなく、その先に有るありふれた生活を微笑みで見守っている。

その三つある眼は、確かな未来を幻視していた。

それを理解しつつも初代バアルは憎悪で燃え滾る。やりたければやればいい、だが、悪魔を巻き込むのであれば容赦はしない。悪魔の悪をもって、仮面の男の守ろうとしているものを、仮面の男がそうしてきたように、仮面の男の前で踏みにじるつもりだった。

それは彼だけだが、他の面々にしてもその程度で覚悟が揺らぎはしない。彼らには明確に、仮面の男同様に守るべきものがあるのだ。

だが、サーゼクスは改めて仮面の男の信念を理解した。

『ルネが望んだ平穏が、誰にでもあるはずの日常が、そこいらにあるはずの人生が。恋愛が、結婚が、妊娠が、出産が、子育てが、貴方には絶対に用意できない！　負い目につけこんで、恩やら借りやらで縛って、子供と会わせて情に訴えて、関係ないはずの大義を語って心酔させて！　本当の意味で『洗脳』して、冥界のために戦わせていたはずだ！』

それは、記録映像には残っていない、彼が直接訴えられた未来図だ。余りにも悲観的にとらえすぎている、余りにも極端に過ぎる認識。しかし、それは真実でもある。

血を流すべきは民ではなく貴族である。それは彼にとって当然のことだ。だが、現実はそれを裏切っている。

初代バアルは特にそうだが、貴族制度の崩壊を恐れて、或いは自らの血統の断絶を恐れる上級悪魔。彼らは眷属という形で引き入れた人間などの他種族を文字通り捨て駒にしている。

そして、そんな彼らははぐれ悪魔となって民衆を脅かしている。

戦う義務のある者が戦うことを放棄して、戦う義務のない者に戦う力があると言って押し付けている。そんな社会を仮面の男は憎んでいる。サーゼクスが作り上げてしまった社会を憎悪している。

であれば、人間の戦う力。その根幹となる神器のシステムを奪うのは当然だ。そう、それによって実際に利用される人間は激減する。悪魔が衰退するとかではない、極めて根幹的に人間の利用価値が激減するのだ。

そして、それによって悪魔社会は大きくダメージを受けるだろう。神器の使い手は混血悪魔や転生悪魔に多くいるが、彼らは根こそぎ無価値になる。大きな戦力ダウンだろう。

なによりも、人間の実社会には何の影響もないのだ。なぜなら、人間社会は最初から神器を運用などしていないのだから。であれば、ためらう意味がない。

悪魔が一方的に、神器所持者を利用しているという、極めて残酷な真実からいよいよサーゼクスは目を背けることができなかった。

サーゼクスの落胆を他所に、映像はどんどん進んでいく。

『……なあ、なんでお前は悪魔を敵に回すんだ。悪魔だけじゃない、堕天使にも……』

ソーナの兵士の、当然の疑問。駒王学園の生徒会室で行われている、穏やかな会話。そこからは到底想像できない、顔のない男の悪辣すぎる所業。

だが、それは当然のように顔のない男の悪性を浮き彫りにした。いや、爆発させたというべきだろう。

魔術的な記録装置であったが故か、彼の三つある眼からも、言葉からも発される地獄の業火に勝るとも劣らぬ悪が燃え盛って会議室を

覆う。

『……むかつくからですよ。他に理由なんてない。アイツらは、全員叩きのめして打ちのめして泥だらけにしてやると決めている！』

『じゃあお前が何とかしろよ！　子供が戦うことを憂うなら、子供に問題を押し付けるなよ！　お前らすごいんだったら、すごいってことを目の前で示してみろよ！　子供が狙われているんだったら、護衛を大量に付けておけよ！　なんで、守るべき対象であるはずの、子供をそろえて組織を作るんだよ！　大人がやればいいだろうが！　なんのための最強の魔力だ、何のための最強の眷属だ！　じゃあ活躍しろよ！　お前が世界を救えよ！　お前が反逆者を倒せよ！　お前が伝説の化け物と戦えよ！　お前は最強なんだろう!?　なんのための最強だ！　ラノベならわかるさ、主人公を活躍させないといけないからな！　だが、この現実ではそれじゃ通らないぞ。お前に仕事させてやるよ、お前に仕事を回してやるよ！　さあ、活躍してみろ、お前が悪を倒せ、お前が世界を救ってみろ！　できるはずだ、できなければいけないはずだ！　それが大人であるべきだ、それがお前の仕事のはずだ！　世界を守るのは、国家を守るのは、民草を守るのは、子供に押し付けるものではなく、大人の仕事のはずだろう！　それができないなら、偉そうな口を叩くな！　今すぐ椅子から降りて冠を放り捨てろ！　一体何様だ！　魔王様だってんなら犯罪組織の一つや二つ、他の業務のついでに片付けてみやがれ！』

ソーナ達の前で明らかになる、以前サーゼクスにたたきつけられた莫大な悪。

それが、彼女たちに向けられたものではないとはいえ、彼女たちの前で爆発する。そして、結果的に彼の怒っている対象である聖書の陣営の有力者たちにぶつけられている。

それは、ある意味では初代バアルが思っていることを、そのままぶつけていることでもある。確かに、余りにも不甲斐ないのだ。魔王の座にありながら、現魔王は全くと言っていいほど顔のない男に抵抗で

きていない。
これで、大手を振って魔王と名乗らせるわけにはいかないだろう。
だが一方で、リゼヴィムは納得する。これは本物だ、と。
顔のない男は本気で怒っている。全力で怒っている。偽りなく怒っている。際限なく怒っている。
果たして、自分はここまで怒ったことがあるだろうか。そう思うと、羨望さえ感じる。
こんなに怒っているのだ、世界を滅ぼそうと思っても当然だ。そして、それに対抗するだけの感情を、今の面々は持っているのかと思えば否だ。
悪魔には仮面の男に憤っている者がいるだろう、堕天使には仮面の男を殺したいと思っている者がいるだろう、天界には彼を罰したいと思っている者がいるだろう。
だが、それらをすべて足して、数万倍に増したとして。それでこの男一人に匹敵するのだろうか。それは甚だ疑問である。
少なくとも、この場にいる面々には絶対にない。そう言い切れる。
なにせ、彼らにとって大事なのは組織を維持することだ。だからこそ、仇敵であったとしても滅亡の危機であれば手を組むのだ。
だが、それはつまり自らの命と引き換えにしてでも、相手を滅ぼしてやろうという気概に欠けているということでもある。
リゼヴィムは勢力争いに意義を見出せず、しかしやりたいこともなくただ死んだように生きていた。
だが、それは今までの冥界もそうなのではないのだろうか。初代バアルが特にそうであるように、現状維持がしたいだけなのではないのだろうか。自分の利益を守りたいだけなのではないのだろうか。
だから、だらだらぐだぐだと、冷戦だの停戦だのとやっていたのだ。
そんな、熱意のない面々が、これだけの熱量のある相手に太刀打ちできるのであろうか。それは、否であると思う。いや、そうであってほしいと思っている。
リゼヴィムには、熱中することが見つからなかった。自分が納得できる存在意義を、見つけることができなかった。それにあこがれても

いた。

だからこそ、その体現者には勝ってほしい。

世界を焼き尽くす怒りと憎しみ。それが生き永らえることしか考えていない、腐り切った神話をキレイさっぱり燃やして灰さえも残さないならば、それはリゼヴィムにとってはいっそ救いである。

莫大な感情の塊が、数が多いだけが取り柄の群衆を薙ぎ払うのであれば、それは愉快極まりないだろう。それに自分が混ざったとしても、いっそ面白いのかもしれない。

悪魔とは、神の敵対者である。神亡き今、その存在はもはや余分なのだろう。生きていても、仕方がないのだ。自分同様に。

『確かに、そうかもしれません。私たちは、独力で貴方に対抗できずにいる』

『貴方がしたことを、他の誰かがすれば、貴方に協力を仰ぐこともあったでしょう。ですが、貴方の行為を正当化するものではありません。貴方が語った通り、魔王も全能ではありません。弱いところもあります。貴方は、そこを浅ましく指摘して、悦に浸っているだけです』

そんなリゼヴィムの憧憬に水を差すように、映像の中のソーナは凛々しくも反論する。

どれだけ社会に不満があっても、それを暴力で示すなどあってはならない。それによって多くの命が失われるなど看過できない。

上級悪魔の次期当主として、ソーナ・シトリーは毅然とした態度で巨悪に立ち向かう。

『貴方は、幼児的な万能感の抜けない、力のある『こども大人』です』

それを聞いて、初代バアルはにやりと笑う。ミカエルも頷いていた。

そう、それだけのことだ。世界がどうあるのかは、個人の裁量を大きく超えている。社会が定まった形に不満を抱き、癇癪を起して勝手

に絶望して憤慨している。そんな子供の寝言など、一々真に受ける必要はない。

お望み通り、大人の力でねじ伏せるまでだ。そう、心の中で称賛していた。

だが……。

『それは貴女のお姉さんに言うべきでは?』

とても、言いにくそうに応えた顔のない男。

それを聞いて、部屋の雰囲気は一気にがらりと変わった。

「げひゃひゃひゃひゃひゃ！　そりゃそうだ！」

老人の風貌のリゼヴィムは、威厳もへったくれもないと言わんばかりに大笑いする。

「ちょっと！　酷いよ！　そんなことないもん！」

「いやいや！　これは爆笑ですわ！　超草生える！　ソーナちゃん、ナイスボケ！」

「違うよね、私こども大人なんかじゃないよね?!」

半泣きで抗議するセラフォルーだが、その所作言動服装のすべてが彼女の主張を否定していた。それ故に、彼女の周囲の面々も目を背ける。

正直、馬鹿に馬鹿であると指摘するのは無駄なことなのだから、そんなことをしている場合ではない。

「ちょっと、みんな酷いよー！」

自分の妹を含めて、老若男女全員から目を背けられたセラフォルーは更に叫ぶ。

『姉のことは、どうかと思っているんです！』

『ああ、やっぱりですか。ですよねぇ。正直、【それはひょっとしてギャグで言ってるのか!?】という気分でした』

しかし、その叫びを否定するように、映像はどんどん進んでいく。

嗚咽を交えながら、映像の中のソーナはため込んでいた感情をぶちまけていく。
「あはははは！　だよねー、ですよねー、そう思うよねー！」
「ソーナちゃん、酷いよ！」
「酷いのは姉さんだと思います。全面的に姉さんが悪いと思います」
反抗期というわけでもない。しかし、やや闇を宿しながらいつもよりも辛辣に姉へ攻撃するソーナ。周囲には首脳が多くいるが、しかしためらうことはない。隠したかったが、もう首脳にばれたのだ。隠す意味がない。
そして、つい先ほど仮面の男からアドバイスをもらった通りに、無能どころか有害な自分の姉を罵倒していた。日々の鬱憤も込めてである。当然、未だかつていないほどに攻撃的な毒舌だった。
「どう考えても姉さんが悪いんです。国家存亡の危機も、大部分が姉さんのせいです」
「ソーナちゃんがグレた?!　仮面の男のせいだね！」
「違います！　ずっと言ってたじゃないですか！」
「姉妹ケンカは後でしろ！」
緊張感は完全に失われているが、それでもアザゼルは怒鳴りつけた。
こんなことなら編集させておけばよかった、と思いつつも、改めて映像に集中する。
そこには、泣きじゃくるソーナと、困っているソーナの眷属や顔のない男がいた。

『犯罪者が催眠術で確認した情報に、なんの信ぴょう性も価値もないとは思いますが、旧魔王派のクーデター計画はご存知ですよね。彼らの鬱憤の半分は、セラフォルー様の公私をわきまえないドレスコードもなにもない振る舞いと、それをいさめない周囲への怒りでしたよ』
『いいえ、多分そうだと思います……私だって、マジカルシトリー参上、とか他の家の人にされたら抗議せざるを得ませんし……』
『じゃあ止めるべきでしたね』

『止まらなかったんです』
『じゃあ、魔王から降ろすべきですよ、アレ』
『ほかに適任な方が居なかったんです！』
『じゃあ……滅ぶしかないですね』
『……私もそう思います』

映像の中のソーナのつぶやきに会議室の中は、沈黙に包まれた。リゼヴィムの爆笑を除いて。
「納得すんなよ！　納得できるけどさ！」
アジュカはわずかに笑っているが、それだけだ。今度こそ絶句しているセラフォルーを他所に、誰もが改めて神話の衰退を認識していた。
「もう、駄目かもしれん……」
ぽつりと、終始強気だったはずの初代バアルが弱音をつぶやいた。
それは、全員の心が一つになった瞬間でもある。
映像の中でのソーナを含めて、天使も悪魔も堕天使も、等しく現状を再認識していた。
そう、なんだかんだで慣れてしまったが、今自分たちの目の前にいる『魔王少女レヴィアたん』こそ、聖書の神話の衰退を如実に表していたのだと。
「もう、駄目かもしれん……だっはははははは！　おっちゃん言っちゃダメだって！　その通りだけどさ！」
バアルの言葉がよほどツボにはまったのであろう、ゲラゲラと笑うリゼヴィム。
それは、末期の会議室の、その絶望を表していた。もう完全に、映像を確認する前の闘志は萎えていたのである。
だが、誰よりも先に諦めていたファルビウムだけは違っていた。
「もしかしたら……僕らには未来があるのかもしれない」
誰にも聞こえないように、そうつぶやいていた。

普段の気だるげさなどどこにもなく、意思をもって見開いた眼で、映像を見ていた。

『……すみません、撮影している方、ご覧になっていますよね？　一息入れましょう。私どもは勝手に水でも飲んでいますので、ソーナ様に紅茶でも一杯入れて差し上げてください』

そこには、性的ではないとはいえ好意を向けている少女の泣く姿に困惑している、一人の男の等身大の姿があった。

Ｇｅｎｅｓｉｓ　ｏｆ　Ａｑｕａｒｉｏｎ　４

ソーナ・シトリーという少女がいた。

彼女は元７２柱の一角、名門シトリー家に次女として生まれ、姉にセラフォルー・レヴィアタンという魔王が居た。

言ってしまえば、現状の冥界の中では屈指の好条件で生まれ、加えてサイラオーグ・バアルと違い、優れた資質を持っていた。

つまりは、冥界で最も幸せな少女と言っても過言ではない。そういわれたとしても、ソーナは決して否定しないだろう。確かに、姉には人格的に問題を感じてはいるが、それを抜きに考えれば、自らの境遇が素晴らしいものであるとはよく理解している。

それは同時に、多くの者は自分よりも遥かに不遇であるということを、聡明な彼女は痛感するようになった。

順番はどちらだったのか、それは定かではない。しかし、一つ確かなことは、ソーナは日本という人間の住む世界でも屈指の識字率と就学率を誇る恵まれた国へ留学することで、自分の生まれた国がそれに比べて大きく劣る、ということに気付いたのだ。

恵まれぬものに、就学の機会を。上級悪魔を目指す者に、レーティングゲームへ参加する機会を。

そうした、自身の持つ強い野心と同調した気高い理想を抱くようになった。

旧態依然とした冥界では、ことさらに上級悪魔の社会では受け入れられないと知った上で、彼女はその理想を学校の設立という形で実現させるつもりだった。

しかし、それはたった一人の男の出現によって、土台ごと揺らいだ。

仮面の男。三つ目。そう呼ばれる、歴代の神器所持者の中でも最悪の犯罪者。

かつて聖書の神話に戦いを挑んだ、赤龍帝ドライグの魂を封じた赤龍帝の籠手の所持者であり、それが極めて些細に思えるほどに凶悪な存在だった。

多彩な能力や、自分以外の神滅具所持者の統率。それ以上に、悪魔

以上に邪悪な思想と計画性の持ち主であった彼は、戦闘型の神滅具を所持しながら、しかし全くと言っていいほど戦わずに聖書の神話に勝利を重ねた。

その勝利のすべてが、余りにも鮮やかで血みどろで卑しさに満ちていた。

ただ勝つだけでは飽き足らない、とばかりに入念に被害者を痛めつけ、犠牲者を踏みにじり、遺族さえも殺し絶やす。

直接会わずとも、その策略を知るだけで虫唾が走る。

自らで配布している、犯行を観れば許し難くなる。

そして、出会って言葉を交わせば、敗北感に打ちのめされる。

それこそが、無貌の絶対悪であり、伝説の犯罪者であり、比類なき悪意であり、人類最悪の遊び人であり、迷宮の言霊使いであり、三つ目の通り魔であり、幻惑の道化師だった。

幻想を殺し、現実を突きだし、闘志を否定し、尊厳を奪う。

そんな彼が、ソーナという少女に全く別の物を与えたのは、言うまでもなく彼にとってソーナが特別な存在だったからに他ならない。

しかし、それでもソーナにとって仮面の男が、より特別な存在になるとは、仮面の男には想像できないことだった。

「待ってください！」

「悪魔は、どうすればよかったんですか！　現魔王はどうするべきだったんですか！　私は……」

「私はこれからどうすればいいんですか！」

悪魔の社会の、その未来を背負って立つであろう、名家の才女。彼女はありえざることに、不正義の塊の如き存在にそれを尋ねていた。

本来彼女自身が見つけるべきものを、彼女は世界の敵に尋ねていた。

「では、答えましょう。貴方達は……正しい。だが、正しいだけでは何も救えません。そんな正しさは有害な正しさでしかない」

扉の前に立つ、これからすぐにでも生徒会室を出ようという男は、しかし立ったまま語り始めた。

どうするのが正しいのか。それを知りながら、しかし絶対にそれを選ばない男の、余りにもちぐはぐな語りが。

「1192つくろう鎌倉幕府。さて、語るまでもなくこの日本国における武家による統治の明確な線引きとなる年号ですが、まあ要するに源氏が平氏を打倒し、朝廷よりも実際的な権力を得たわけです。細かい年号なんてどうでもいいでしょう。大事なのは、平家を打倒したのは平家に敗れて殺された源義朝の息子、源頼朝だということだけです。悪魔に無理やり例えれば、現魔王派を倒すために旧魔王派が立ち上がり、政権を奪取しようとしたということでしょう。これから学ぶべきことは、後の遺恨を断つために、一族郎党を皆殺しにする方が、結果として流血は少なくて済むということでしょうね。ですが、それはできなかった。ではどうするべきだったのか。今あげた例など一例にすぎず、どう考えても旧魔王派は現魔王派に反抗するはずです。さりとて僻地に追いやるのが精いっぱいで、殺し絶やすことは政治的に不可能。それならば……」

そこで、仮面の男はやや溜めた。

そのうえで、ソーナを観る。仮面の男の目は全て白く染まっていた。白眼とされる、透視に優れた目である。もちろん、服の下を除くという品のない目的ではない。単に、ソーナを冷静に観察しようとしたところ、心情が反映されて白く染まっただけである。

ソーナは、まるで死刑囚のように沙汰を待っている。果たして、如何なる判断が最適だったのか。それを、何も思いつかないかのように、目を潤ませていた。

それに、やや落胆を覚える。

「監視をつけておくべきでしたね」

そして、声に出した回答は本当にありふれていた。

生徒会室の空気が、一気に弛緩するほどに当たり前のことだった。

「え？」

「え、じゃねえよ、ルネ。それをしておけば、少なくとも今回の様に

クーデターが発生するか、その前に壊滅するまで反乱を知らなかった、なんてことにはならなかったんだ」

本当に、それだけのことだった。

クーデターをもくろんだことを、現政権が把握していれば対処も速やかだっただろうし、未然に防ぐことも不可能ではなかった。

監視をつけている、というプレッシャーが抑止力となり、旧魔王派にクーデターを断念させる、という効果もないではなかったであろう。

「貴女が何をどこまでご存知かは分かりませんが、少なくとも旧魔王派は他の諸神話とも連携を取っていました。それを未然に防ぐどころか、察知することもできなかったのは余りにも無能と言わざるを得ません」

内憂が、外患を引き寄せた。最悪の事態であるというのに、結局『本来の歴史』では現魔王はまったく察知できていなかった。それを未然に防ぐどころか、察知することもできなかったのは余りにも無能と言わざるを得ません」

「少なくとも、自分が拘束した堕天使もクーデターに関しては何も知りませんでした。現魔王が伝えていなかったとは考えにくいですし、であれば正真正銘なんにも知らなかったんでしょうね」

ソーナは、羞恥で顔を赤らめる。嘆きで顔を赤らめる。

結果から対処を思いつくのは、或いは終わった後ならば何とでも言えることなのかもしれない。

しかし、ソーナは少なくとも『危険な勢力に監視をつけておく』という当たり前の行為を思いつかなかった。現政権も実行に移していなかったか、あるいは行っても手薄だったのであろう。

危機感が薄かったのか人材が不足していたのか。つまりは、無能だったのである。

「次に、大政奉還だの明治維新だの、まあ鎖国を解いた絡みの日本の変革期ですね。色々面白い時期ですが、大事なのは政変の時期にはそれによって被害を被る、利権を失う輩が大局も読めずに反乱を起こすことがあるということです。言うまでもありませんが、西南戦争では新政府に対し士族の反乱はあっさりと鎮圧されました。所詮、血統や家

柄以外になんの価値もない連中ですからね。まあ、生きていても新しい時代にはなじめず没落して失意のまま死んでいたでしょう。これも大分状況が違いますが、聖書の神話は三勢力の中で和平を結ぶ流れがありました。それに合わせて、彼らは反乱を企てたわけです。自然な流れですね、新時代に彼らの乗る船はありませんので、負けるとわかっていても、立ち向かうしかなかったでしょう。負けたら皆殺し、勝ってもどのみち他の神話につぶされていたでしょうがね。とはいえ、監視云々を抜きにしても彼らが動くことは予想できました。であれば、現魔王はどうするべきだったのか」

　これも、当たり前の回答しかありえなかった。

「まずは、話してみるべきでしたね」

　そう、まずは話してみるべきだったのだ。少なくとも、きちんと話が固まる前に。

「さっきも言いましたが、誰もが幸せになるという可能性はゼロでしたよ。現魔王派が納得する、旧魔王派も納得する、堕天使も天界も、他の諸神話も納得する。そんな虫のいい話はありえません。少なくとも、旧魔王派は表向きとはいえ同神話内の敵と手を結ぶことはできませんし、そもそも自分たちをクーデターで政権から追いやった現政権の掲げるものに賛同できるわけがありません。まあ要するに『知っているがお前の態度が気に入らない』というやつですね。極めて暴力的に政権を奪取した連中から、上から目線で平和や友好を語られてもむかつくだけでしょう。言ってしまえば、今後もずっと現魔王派のやり方でいくということなんですから」

　そう、それはソーナも分かる。匙も、分かってしまった。他の三人もなおのことである。

「世の中には復讐を選んだルネ同様に、自分が多少つらい目にあっても臥薪嘗胆とばかりに相手を不幸にしたくてたまらない、そんな大局を読めずに私情で争いを起こす輩が大量にいるのです。自分が多少幸せになったとしても、恨んでいる相手がもっと幸せそうだったら、それを捨ててでも唾を吐くことだってあるのです。ですが……それでもまずは話しかけてみるべきでした」

他人の心情を察することに長けた仮面の男が、それをわかっていないわけがない。しかし、それでも仮面の男は諦めを否定する。

何もしない、という選択肢を断固として否定する。

その三つある眼は、勾玉模様に変化していた。或いはこの場にいない、美辞麗句を並べるだけの『情愛』の悪魔を軽蔑しているのかもしれない。

「いいですか、物事には順序や筋道というものがあるのです。無理だと思って何もせずに諦めるなど、無視しているも同然です。それでは彼らの怒りはたまる一方でしょう。まずはできるだけ早く、現魔王の側から話しかけてみるべきでした。そりゃあまあ、確実に上手くいきませんよ。少なくとも、全員が賛同することはない。ですが、それが本来の平和と友好というものではありませんか？　対話による武力を用いない相互理解なのではありませんか？　もちろん、他の陣営との兼ね合いもありますから、時間をかけすぎるのは難しいでしょう。彼らに利権を分配するのも、総量から言えば彼らが納得するほどに与えるのは難しいでしょう。ですが、それは何もしなくていいということではありません。仇敵との講和に対して一番戦いたがっているものを無視して話を進めるのは無神経であり、何もせずに諦めるのは怠慢というのです。そして、彼らのことを忘れているのは、能天気というのです」

辛辣ではあったが、理路整然としていた。もしかしたら、旧魔王派の記憶を読み取ったことによらず、最初からそう思っていたのかもしれない。

だとすれば皮肉にも同じ種族であり、長く対立していた現政権よりも、彼らを陥れた仮面の男の方が旧魔王派を理解していたのかもしれない。

いや、そもそも現魔王派は旧魔王派を理解しようと思っていなかったのかもしれない。

「全員は無理でも半数は、半数は無理でも一部は、一部は無理でも一人は。少なくとも、全員が犯罪者になるという最悪の事態は避けられたかもしれませんでした。【献愛は時に苦痛を伴うもの。だがおまえの

胸にあるのは手を差し伸べることの優越感のみ！】臭いものにふたをして、敗残者の苦痛や苦悩を想像さえせずに、耳聞こえのいい言葉を並べて自分たちに都合のいい世界を盤石にしようとすることを、自分は繁栄だとは思えない。それは退廃だというのです【半歩だ。君が一歩を踏み出せないと言うのなら、ぼくの方から――半歩だけ近づこう】自分は平和を否定しません。争わないのならばそれが一番です。競う程度でも十分なはずです。ですが、戦う理由があるのであれば戦うことを肯定します。そして……無自覚に無神経に、綺麗な未来だけを見て過去を切り捨てようとする輩は、平和も戦争も根こそぎ否定している。それはいい加減なだけだ」

その三つの目が、更に禍々しさを増した。目まぐるしく模様を変えていく。

薄く赤く輝くその眼には、薄っぺらい善への憎悪が煮えたぎっていた。

だが、相手がソーナだからなのか、その憎悪はゆっくりと収まりを見せていく。

しかし、その意思は伝わっていく。彼の憤りが、言葉と共にその部屋の中の面々へ伝わっていく。

「中々傑作な話がありましてね【お前一人の命で何千万人が助かるんだ！　千夜！　お前が死ぬのが一番簡単で確実なんだよ!!】とほざいた輩が【国中の富と財を全て燃やして灰を埋め供養するにゃ。何人が凍えようと飢えようと全てにゃ】と言われるや否や、【ふざけるな!!じゃあそれで死んだ奴は死ぬためにうまれてきたっていうのかよ!!】とほざくこともある。まさにどの口が言うか……というやつですよ。心の中では無自覚か自覚があるのか、綺麗ごとを言いながらその慈悲は……選民と差別に満ちている」

「三つ目さん、本題からずれてきてますよ」

「おお、レオナルド。確かにそうだな」

どれだけ自重しても、仮面の男の放つ圧力はねばりつく。それは決して心地よいものではない。また、仮面の男は話し出すと長いのだ。それゆえに、レオナルドは軌道を修正する。それを理解して、仮面の

男も頷いた。
そう、本題はこれからである。
今まで、こうするべきだった。という終わった後の話だ。今後に生かすにしても、過去を変えることはできない。そう、未来を変える話が始まるのだ。
「貴女はどうすべきなのか、ですね」
その言葉を始めた途端、全員が絶句した。
その部屋の中にいる面々が、或いはこれより数時間後に記録映像を確認する面々も、絶句した。
「確かに、貴女の望みは叶わない。絶対に、上手くはいかない」
もしかしたら、仮面の男の語っている言葉が脳内に入ってさえいなかったのかもしれない。
「誰もが通える学校を作っても、レーティングゲームのプレイヤーを輩出し、下級悪魔が上級悪魔になる門は開かれないのかもしれない」
その眼は、今まで共犯者の三人が見たいずれの目よりも意思と信念、力と心を感じさせた。
仮面の男がただの一度も見せたことがない、初めて見せる目だった。
「ですが、それのなにが問題だというのですか」
その眼は、その『双眸』は……。

「貴女の夢は、決して汚れない」

ただの人間の、普通の目だった。
眉間にあるはずの縦に割れた第三の目は消失し、瞼を閉じているだけではなくその眼の厚みは消え失せている。それが、仮面に空いた穴から覗いて確認できる。
加えて、いずれもがなにがしかの能力を秘めている、仮面の男の特別な目。そのいずれでもない、ただの人間の目。その視線が、他の誰でもないソーナだけを射抜いていた。
「何を迷うことがあるんですか、貴女は何も間違えていない。冥界に

は、様々な理由で学ぶ機会を得られない、就学を望む子供たちがたくさんいます。彼らのために学校を作る。それの何が間違いだというのですか」

その言葉に込められた意思が、ソーナが失いかけていた理想に対する誇りを取り戻させる。

「貴女は、ただ少し焦っているだけだ。何もかもが憧れているだけだと指摘されたのであれば、それを気にしているのであれば、まず自分がプロになりタイトルを目指し眷属を上級悪魔にするよう努力すればいいだけのことじゃありませんか。今の貴女がシトリーの次期当主でしかなく、魔王の妹でしかないというのであれば、これから貴女自身が実績を積み重ねることで、自分自身の評価を世間に浸透させればいいじゃありませんか」

それはきっと、彼自身が挫折した在り方なのだろう。しかし、今でも正しいと信じている社会の中での在り方なのであろう。

それを歩むべき、歩むことを諦めない、歩み続ける彼女への応援なのであろう。

「貴女は聡明な方だ。社会とケンカをすることなく、自分の理想を実現させることができるはずです」

どれだけ己自身が邪悪に堕したとしても、どれだけ社会が醜悪を晒したとしても、決して彼の中から失われることのなかった、穢れ無き黄金のような正義の定義。

何一つ曇りのない、恥じることなき善性の正義が輝き、歩むべき道を眩く照らす。

「匙さん」

その眼は、自分と重ねていた匙にも向けられる。

無力感に打ちひしがれていた、主人公の器へ向けられる。或いは、彼が憧れた主人公と重ねていたのかもしれない。

「貴方もそうです。何を無力を感じて挫折しているんですか。そんな必要がどこにあるんですか？　貴方はまだ学生じゃないですか。こんなテロリストの対策なんて、大人に任せて学業に専念するべきなんです。確かに自分は聖書の神話の滅亡を確信しています。だとして

も、そんなのはまだ虚像にすぎません。貴方が信じるべきは犯罪者の妄言ではなく四大魔王の威信であるべきです」

自分が悪だと知っているからこそ、悪を行っているからこそ、暗闇の中から歩みだせないからこそ、正道を歩むものを信じている。

彼らが間違っていないと信じている。

「貴方は明日も冥界が存続すると信じて、上級悪魔を目指して努力を重ねるべきなんです。それは、最初から上級悪魔だったソーナ様にもできないことです。貴方をはじめとして、ソーナ様の眷属は皆転生悪魔。生粋の悪魔ではない貴方達だからこそ、貴方達が目指す下級悪魔が実際に上級悪魔になったときに感じる空気を、経験として得ることができるはずです。貴方は見極めることができるはずだ、果たして下級悪魔が上級悪魔を目指すことは、労力に見合うものなのかと。上級悪魔になることは、本当に素晴らしいことなのかと」

その行く道の困難さを想像する。数多の絶望を悲観する。

しかし、その中に希望を見つけ出す。夜天の中に瞬くいくつもの星を見上げる。

「ソーナ様、貴女は焦りすぎです。確かに、今何かをしなければ、今困っている彼らを救うことはできない。ですが、貴女が今失敗をすれば、それで挫折をするのは貴女達だけではなく貴女達の救いたいと思っている生徒やその家族です。貴女達は転んでもまた立ち上がれるかもしれません。ですが、不遇な生徒たちはどうでしょうか。彼らはまた立ち上がれるのですか。そんな強さがあるのですか」

理想を形にするためには、現実と向き合わなければならない。

それは決して楽しいことばかりではない。そして、その先に成功が待っているわけではない。

だが、だったとしても。いや、だからこそ。

「失敗を恐れるな、という言葉を否定はしません。ですが、成功を前提に話を進めないでください。いきなり学校を作っても、無理やり形だけ整えても、上手くいくかどうかなど丁半博打ですらない。一度うまくいったとしても、それがずっと続くかどうかなど定かではない。

【確かに我々は多少傲慢なところもある。詳細に検証もせず自分たち

の主張が絶対に正しいと思い込み柔軟性に欠ける面があることは否定できない】ソーナ様、貴女は新しいやり方で下級悪魔を救おうと思っていますが、必ずしもそうである必要はないでしょう。まず貴女は、或いは貴女の眷属は教職について経験を積むべきです。想像や計算だけでは、教育現場で発生しうる状況に対応できるとは思えない。まずは、今までの教育現場を再確認してみるべきでしょうね」

現実の中で、理想を目指す姿は美しい。

「身分制度によって区切られた、就学できる学校が限定される教育制度。しかし、それにも非合理的なだけではない理由があるのかないのか、それさえ貴女達は知らない。もちろん自分だって知りません。貴女が日本の学校の生徒になって、学校制度を学んだのであれば、今度は冥界の学校の教師になって冥界の教育制度を再確認するべきではないですか。教える側と教わる側では思うことも変わるはずです」

現実の中で、夢想を一つ一つ実体に変えていくことは素晴らしい。

「……これは犯罪者の、強姦魔の、愉快犯の勝手な理屈でしかありません。ですが、どうにも貴女方現魔王派に属する方々は、正しさをなにか魔法の方程式か何かと勘違いしている節がある。自分は正しいのだから、間違っている相手を暴力で排除することも仕方がない。まあそうかもしれませんが、だとしてもその後が杜撰すぎる。平和は正しいのだから、今は分かってくれなくてもそのうち分かってくれるだろう。それは本当にそうなのか、上から下まで中から外まで確認した結果なのか。平等は正しいのだから、既存の枠は悪でしかなくそれを保持する輩は絶対に許さない。そんな攻撃的になっては相手だって頑なになってしまいますよ」

だからこそ、彼らの正しさに善性を。

「【相手を黙らせたからといって、その人を説得できたわけではない】イギリスの政治家ジョン・モーリーの言葉です。相手を黙らせても、怒っているだけなのかもしれないし、呆れているだけなのかもしれないし、興味を失っただけなのかもしれない。ソーナ様、匙さん。貴女達が今後多くの人に出会ったとして、その人たちと意見をたがえたからといって、決して攻撃的にならないでください。先ほども言いまし

たが、頭のいい人は誰かとケンカをしないものです。仮に貴女が誰かと意見をたがえたとしても、相手次第ではありますが問題はないでしょう、ですが、もしも貴女が誰かと遺恨を残せば、それは貴女の生徒にも暗い影響を与えることになる。貴女方が新しい教育を行うとしても、以前のやり方を頭から否定せず、先人に敬意を払って、衝突を避けるべきです。悪いと思ったり合わないと思ったところは真似せず、良いと思ったところは取り入れればいい。何から何まで新しくする必要も、何から何まで平等にする必要もないはずです。どうか、大義を見失わないでください」

弱者に選択肢を与えるという、自分が目指すべき正道に栄光を。

「貴女の目指す理想は学校を作ることではない」

仮面の中の顔は、薬や熱でただれている。

そもそも、顔は仮面でほとんど見えない。

だが、仮面に空いた穴から見える二つの目は。人間の意志を込めた目は。

今こうして生徒会室にいる、若き指導者たちへ優しく微笑んでいた。

「不遇なるものに、道を示すことのはずです」

一切の邪心も計算もない。ただ、心の底から心をさらけ出している。

だからこそ、それは如何なる洗脳や催眠よりも深く刻まれる。

「下級悪魔が上級悪魔を目指すということは、きっと多くを諦め多くを我慢し、それでも叶うかどうかわからず、叶ったとしても辛いことばかりなのかもしれません。ならば、それを生徒に語ってあげてください。それでも諦めないというならば」

人格と品格、理性と知性の灯された両目は、ソーナとその背後にいる生徒たちを幻視していた。

「その時は、精一杯応援してあげればいいんです。それが貴女が選ぶべき道だ」

「ファルビウム……」

サーゼクスは、自分の友人であり同等の椅子に座る男の名前を呼んでいた。

元々信頼はしていたが、しかし仮面の男の台頭によってより明らかになった、冥界最高の戦略家の頭脳。

仮面の男は映像の中で、理路整然と冥界の失敗に対する模範解答と、彼女の夢へのフォローを行った。

情報を集めてなお仮面の男の内面が更に謎に包まれたが、それは重要ではない。彼が何をどう思っていたかなど些細な事。彼が冥界に仇なす犯罪者であることに変わりはない。

問題は、仮面の男が悪魔の失策について気づいていたにも関わらず、彼以上に悪魔に対して深い理解のあるファルビウムが、それに対して対応をしていないことが気になった。いや、言ってしまえば気づいているはずなのに何もしていなかったことが、サーゼクスにとって許しがたいことになっていた。

というよりも、分からなくなった。悠久の時を生きてきた友人に、裏があるなどとは信じたくなかった。

「君は、気づいていたのか。我々現政権が過ちを犯し続けていたのだと」

「もちろん」

当然のように、後ろめたさなく言い切った。

それを聞いて、悪魔の敵対者であるアザゼルやミカエルも固唾を呑んだ。

まさか、ここにきて不和の種がまかれるとは思っていなかったのだ。ましてや、四大魔王内部で。

「では、なぜ指摘してくれなかった？」

「面倒だから」

なんでもなさそうに、いつも通りにファルビウムは答えた。

同時に、初代バアルのプレッシャーが膨れ上がる。それに遅れて、

アザゼルのプレッシャーが膨れ上がった。
　初代バアルが何かを言う前に、悪魔の敵対者であるアザゼルが怒鳴っていた。
「まだわからねえのか！　お前らを説得するのが面倒だって言ってんだよ！」
　その、お前らという対象に、ソーナを除いたこの場の悪魔全員に向けられていた。
　サーゼクスも、アジュカも、セラフォルーも、当然初代バアルも。
「……本当なのか、ファルビウム」
「うん。だって、君たちは絶対に応じなかったからね」
　仮面の男が極めて現実的な対応を丁寧に説明していた。確かに、それを実行に移していればまだマシだっただろう。だが、それはもう手遅れだった。
　ファルビウムは悟っていたのだ。悪魔はふとした拍子で滅ぶ脆弱な体制でしかなく、それを倒す暴風が吹き荒れたのだと。
「第一、セラフォルーの魔王少女に関して呆れながら見て見ぬふりをしていた君が、何を偉そうに言うんだい？　それとも、君たちは僕が態々『魔王少女ごっこはカテレアを始めとして旧魔王派を刺激するよ』って、言わなきゃわかんなかったの？」
　旧魔王派からの怒りを買う以外に、魔法使いからも反感を持たれるだけでなんの利益ももたらさなかった、セラフォルーの魔王少女。
　それを、サーゼクスは看過していた。少し考えれば、彼女の行いは悪魔内での不和を招く行為であると気付けたはずなのに。咎めなかった時点で、彼も同罪なのであろう。もちろん、ファルビウムもだが。
「サーゼクス、彼はさっきいいことを言ったよね。【相手を黙らせたからといって、その人を説得できたわけではない】だっけ？　僕はね、どうせ君たちに何を言ったって無駄だと思っていたから何も言わなかっただけだよ」
　その、心底全てを煩わしく思っている口調は、普段からのそれとさほどの変化はない。しかし、それは今この状況ではことさらに異常

で、恐ろしささえ感じた。言ってしまえば、仮面の男の底知れなさに通じるものがある。

ただし、ファルビウムのそれには絶望はない。ただ、達観だけがあった。

「第一、何をいまさら。僕はずっと言っていたじゃないか。面倒だって」

そう、それもまた問題発言だった。

セラフォルーのそれほどではないが、魔王が公共の場で気だるげに面倒だ、というのは大いに問題がある。

「君はそれを許していたじゃないか。どうして今になって咎めるんだい？」

「……冥界に、危機が訪れる予兆を、防がずに放置した理由が知りたいだけだ」

「君たちが反対するし、説得できないってわかってたから」

なんでもなさそうに、同じトーンで答えた。

そうして、おそらくサーゼクスにとって、絶対に頷くことができないことを言ってのけた。

「君はグレイフィアちゃんと結婚するべきじゃなかったし、もちろん子供だって作るべきじゃなかった。悪魔の未来のためにそうしろって言ったら、君はそうしていたかい？」

びしり、と硬直するサーゼクス。冥界を守るためならば何でもする、と言いかけた口が開いてふさがらない。

今、ファルビウムはなんと言ったのだ。最愛の家族の、その存在そのものが間違いだと言い切ったのだ。

そして、極めて論理的にその理由を思いつく。感情的に、絶対に頷けない結論だった。

「グレイフィアを、魔王に置くべきだったと？」

「魔王ってのは、最低限の戦闘能力が求められるからね。そういう意味では、セラフォルー以外には彼女しかいなかった。それに、元々彼女は旧魔王派だ。新政権に彼女を置くことで平等であることをアピールすることもできた。とはいえ、それは彼女と君が個人的に親し

くないことが前提だ。そうだと、魔王の座を君達が半数占めていることになる。結婚なんてできないし、子供なんて論外だ。君が真に悪魔を思うなら、君は個人の幸せなんて求めるべきじゃなかったんだ」

もしも、聖書の神話の存続が危ぶまれている今現在でなければ、激高し魔力を荒げていたかもしれない暴言中の暴言だ。だが、この状況では理解できる。加えて、彼が言わなかったことも理解できてしまう。

「旧魔王派の監視に関してもそうだよ。僕らは秘密結社のトップじゃなくて国家の威信を背負う魔王。であれば長期間にわたって監視をしなければならない旧魔王派に関して公的機関を設置するならば、当然予算を組む必要があるし、それは当然のように旧魔王派だけを対象にすることもできない。つまり、上級悪魔を監視する組織の設立だ。で、バアルのおじいちゃん。彼らに個人的な援助などもしていたおじいちゃんはそれの設立を許してくれたかな？」

数年見張るだけなら、組織を立ち上げる必要はない。数人を見張るだけなら、人数は必要ない。簡単な調べ物ならば、プロフェッショナルは必要ない。

しかし、悪魔の寿命は長く、旧魔王派も少ないなりに人数はいるし、そもそも他の神話との接触を調べるなどは特殊な技術が大量に必要になる。

であれば、専門的な技術をもつ者を複数揃え、旧魔王派を露骨に差別しないために上級悪魔全般を監視する権限を持った組織を作る必要がある。

それを、貴族主義者である初代バアルが許すはずがない。許さないから、提案もしなかったのだ。無駄な手間がかかるだけなのだから。

「無理だよねぇ。一度痛い目を見ないと、絶対に頷かない。だから何もしませんでした。それだけ」

全員が納得してしまった。仮面の男が語った対策は、しかし彼ら自身が拒絶し廃案にしていたであろうという結論に。

「まあ、そんな風にずっと無視していたんだ。今更旧魔王派に何を言っても遅かったよ。現に君は断られたじゃないか」

「……ああ、そうだった」
「サーゼクス、おじいちゃん。君らは何かを勘違いしている。僕ら聖書の神話の面々は、各々が思うほど一生懸命になにかを成し遂げようなんて、思っちゃいないんだよ」
「だよな」
それに頷いたのは、やはりリゼヴィムだった。
先ほどの激高もそうだが、既に終了している仮面の男の画像は、非常に感情豊かだった。
それこそ、この場の面々はあそこまで熱くなって、目の前の問題を解決しようと思っていたのであろうか。
「どういう意味ですか？　我々の行いに対して、信仰心が足りないと？」
悪魔だけではなく天界さえも否定したことにより、ミカエルは眉をしかめる。明らかに攻撃的な発言に、穢れ無き天使は強くにらんだ。
「ああ、訂正しようか。他の神話の領地への侵略行為だけは一生懸命だったよね。他は杜撰だったって言い直そうか？」
と、とてもではないが言い返せない言葉が飛び出てきた。だが少なくとも、魔王が言っていい言葉ではない。
「僕ら悪魔と天使は、神話内での敵対者を倒すことそっちのけで他の神話を駆逐していったじゃないか。いろいろ理由はあるにしても、自分たちは悪魔を倒すために全力を尽くしましたって言い切れるのかい？　悪魔にしても、天界を倒すために全力で戦い続けたって言えるのかい？」
言えない、言えるわけがない。少なくとも悪魔と天界は、体勢を立て直すために聖書の神話として侵略を繰り返していた。相互に争うことを禁じるほどではないが、全面戦争には至らなかった。
「第一、神滅具に限らず神器に関してはどうなんだい？　あれは仮にも僕ら聖書の神話主神から、無作為にばらまかれ続けているものだ。歴代の赤龍帝や白龍皇が、覇龍で幾度となくよそ様に迷惑をかけていることは、全員良く知ってただろう。で、それを回収して封じることもできたのに、こうやって直接的に僕らに敵対するまで放置していた

じゃないか。それで、よく偉そうに融和を語るもんだよ。仮面の男がそうしなくても、現に禍の団の英雄派だっけ？　結構な数の神滅具を所持しているらしいじゃないか。本当に存続を真剣に考えているのなら、そんな物騒なものは封じておくべきだったんだよ」

これは、ファルビウムの知らぬ本来の歴史の出来事だが、旧魔王派のトップの一人が魔獣創造の使い手に外法をもちいて強制的に禁手に至らしめ、更に冥界の各主要都市にそのモンスターを送り込んだ。

それに対して、悪魔は単独での対抗が困難であると諸神話に救援を求めた。

つまりは、魔獣創造一つでも悪魔を滅亡寸前に陥れることは、極めて簡単なことなのである。

「少なくとも仮面の男はそう思っているだろうね。彼から見れば、僕らはみんな同じ穴の狢さ。真剣みが感じられないんだろうね。現に、彼はほんの半年で僕らを滅亡に追い込んでいる。西暦から考えても、二千年以上続いた争いは、半年持たずにあっさり終わろうとしている。単純計算で、僕ら全員を合わせた分より六千倍以上優秀だ」

終始、どうでもよさそうにそう言うあたりが、ファルビウムたるゆえんであろう。

しかし、他の面々はそれどころではない。再認識する、己らの不甲斐なさ。加えて理解する、仮面の男の狂気と憎悪。

自分の神話が生み出しばら撒いた兵器を押し付けられた彼らの、その歴代の全ての神器所持者の悲劇を背負っているのだ。それゆえに、彼は決して聖書の神話を許さない。

今の今まで被害者面をしていたが、しかし結局のところ聖書の神話は全世界から見て加害者なのだ。

「それも、遊び半分でね。いやあ参った参った」

「遊び半分だと……我らの受けた被害が、遊び半分だと?!」

「真面目なわけがないじゃん」

ついに、激高して叫ぶ初代バアル。しかし、相変わらず相手にしていないファルビウム。彼にとっては当然で、よく考えればわかって当然で、言ってしまえば考えるまでもないこと。

「真面目ならね、犯行予告なんてしないよ」

もう、返す言葉がない。そう、実際の所仮面の男の犯行声明、あるいは犯行予告にはなにがしかの意味があった。

最初の復讐劇の際は、復讐の対象を一か所に集める意味があった。しかし、別に一人一人を襲撃して回れば、それで済んだ話でもある。

次の際には、やはり旧魔王派の戦力を一か所に集める意味があった。しかしこれも、一人一人を殺して回れば済んだ話だ。

「それが、今回彼に協力しなければならない根拠でもある。いいかい、サーゼクス。ついこの前言ったよね、僕らの神話だけが標的になることが最悪の事態だと」

そう、それは仮面の男の脅威を痛感した時の話だ。

その時ファルビウムは思ったのだ、この男が誰かに負けて何かを奪われるわけがないと。しかし、仮面の男はその一線を軽々と超えた。

自分が負けるかもしれない状況を造りだし、それをこちらに伝えて協力を強制してきたのだ。

「このままだと、仮面の男は禍の団の英雄派に負ける。そうなったら、あの黄金風船と違って、攻撃性バリバリのが大量に送られ続けてくるぞ。それに、目的を達成したら撤収ってこともない。強いて言えばそうだね……僕らが無事でも、悪魔のほとんど全員が死んだら飽きて帰るかもしれないね」

それは、仮面の男が証明してみせた魔獣創造と幽世の聖杯のコンボ。それは赤龍帝の籠手と獅子王の戦斧によってさらに強化されていたが、それが他の何かでも同等かそれ以上の結果を出せたであろう。

まして、全てを英雄派が手に入れたなら、或いは彼らの黒幕が手に入れたならば。

途中で帰ることもないし、そもそも予告などするわけもない。まして、大衆に被害を与えないように気を使うなどあり得ない。むしろ積極的に殺戮に興じるだろう。

「わかったかい？　僕らは何が何でも彼の計画をサポートしなければならない。確かに仮面の男の計画が実現すれば、天界という脆い世界

で真正面から二天龍と戦うことになる。だけどね、もしも彼が英雄派とやらに負けたならば、真正面どころか全方向から不意打ちされて袋叩きに合うよ」

それは、言われてみればその通りだった。

そして、本当に絶望的な未来だった。

仮面の男の狂笑が脳裏によみがえる。

つまり、あの時仮面の男は今の自分たちを想像して大笑いしたのだ。

憎い筈の相手を叩きのめすために、全面的にサポートしなければならないという、論理的な矛盾。

まして、その映像を見た後では脳内で叫びが反響していた。

「……なぜ、負けると思っている？」

アジュカの問いは、彼の技術者としての問いだった。というよりも、なぜその結論に至ったのか、メッセージであろう映像を見ても納得できなかった。

というよりも、二天龍の復活や神器のシステム奪取などのメッセージがあると、最初から意識しなければ読み取れないものばかりだった。まして、全く何もわかっていなかった、映像を観る前の段階でどうしてそれを受け取れるのだろうか。

「だって、少なくとも仮面の男の周りの面々は戦えないやつばかりじゃないか。美意識の高い仮面の男にとって、守るべき彼らを巻き込まざるを得ない状況になった時点で、どうしたって負けみたいなもんだよ」

最初ファルビウムは、仮面の男は拠点を移し続けると思っていたのだ。例えば地球限定にしても、空間跳躍を抜きにしても、極めて広い範囲を捜索する必要が出てくる。

移動し続けることができるなら、捕捉されることはない。そしてファルビウムは知らないが、仮面の男が最初から持っていた目を用いれば……。

「……なぜ、拠点が移動していないと分かる？」

「ただ一パターンだけ、仮面の男が英雄派とやらに絶対勝てる状況が

存在する。それも、失うどころか大量に得ることができるパターンがね。それが……この状況というわけだ。それにしても二週間後か、思ったよりも切迫してるな……」

もっと言えば、これから起きることを逆算すると、そうなるしかないのだ。そう向けるために、聖書の神話はこれから決死の伝言ゲームをしなければならないのだが……。

「ただ、何もかもが彼の思うがままになるというわけじゃない。僕もこれを見てそれなりに得るものがあったからね。冥界の未来を思うなら……この提案に乗ってほしい。ミカエルにも、バアルのおじいちゃんにも」

そう言って、やる気のない魔王はやや期待を込めた目で初代バアルを観る。

憔悴したバアルは、それに胆力を振り絞って応じた。

「……何をすればいい？」

それは、悪魔の存続の為ならば何でもする、という覚悟を込めた問いだった。

周囲もその覚悟を察知して、ファルビウムの策を待っていた。

「ミカエルには後で話すけども……」

しかし、ファルビウムの策はもはや、策と呼べるものではなく……。

仮面の男のそれとはまったくベクトルの異なる、利益を得るためには手段を択ばない『悪』だった。

「初代バアルには○○した○○○○を全員引き連れて、○○○に○○させて○○してもらう」

その言葉を聞いて、一同は全く意味が理解できなかった。なにがなんだか、さっぱりわからない。

それが、何の解決になるのかさっぱりわからない。少なくとも、それで仮面の男の作戦が破たんするわけではない。

「その上で降伏する。その後の交渉でソーナちゃん、君を嫁として仮面の男に差し出して彼らに僕らの保護者をやってもらう」

うんうん、と自分の戦略を説明して満足するファルビウム。
冥界最高の頭脳の、余りにも端的な説明に、誰もが言葉がない。
しかし、停止から復帰したセラフォルーは大声で抗議した。
「ダメー！　ソーナちゃんは、私と結婚して子供を産むんだから！」
生物学的な限界を遥かに無視した、性的にも倫理的にも個人の意思にも著しく反した発言だが、ある意味では極めて正しい。
そう、仮面の男に嫁ぐという言葉への否定だけは、極めて正しい。
仮面の男。彼は女性の精神を操って性的に辱め、その映像を親族に送りつけて強制的に見せるという最悪の性犯罪者である。
そんな男に最愛の妹を嫁がせる。それは妹を生贄に奉げるに等しい。いや、実際そうなのだろう。
最高権力者の妹を嫁として差し出す、聖書の神話の完全敗北宣言である。おまけに、犯罪者の庇護下に入るなど、そもそも受け入れられるかどうかなど考えるまでもない。
「そ、そんな！　急に言われても……心の準備が！」
「なんでまんざらでもなさそうなのぉーーー！」
当の本人は意外と好感触である。なので、さほどの悲壮感はない。
しかし、それでもまったくと言っていいほどファルビウムが最初に話した初代バアルへの依頼が、意味不明である。前後の文章がまったくつながっていない。
「……あ」
と、真っ先にリゼヴィムは気づいた。
同時に一気に顔が蒼白となり、潤滑油の切れたロボットのようにぎこちなく、なんでもなさそうな顔をしているファルビウムを見る。
「アスモデウス陛下……これって、聖書の神話の存亡がかかった戦争ですよね？」
「何をいまさら、そうに決まっているじゃないか」
「これ……世界一性格悪い奴を決める戦いになってません?!」
そう、リゼヴィムは理解した。一旦聞いた後ではファルビウムの作戦は何一つ得るものがなく、失うことばかりの無意味な犬死の作戦だ。だが、実際に失うことだけが目的だったとすれば、どうだろうか。

それだけの説明で十分で、それ以上は無粋ではないだろうか。
「これって、サーゼクスちんもアジュカっちも俺も必要ないじゃん！」
「いやいや、そうでもないと思うけどね。全力でぶつからないと意味ないし」
「にしたって性格悪すぎるだろ!?　どういう脳みそしてんの?!」
相手に美意識があることが前提であり、且つこちらの作戦を汲んでくれなければ成立しない、完全なる自爆戦術である。
「しょうがないんだよ、そうでもしないとこちらの勝利条件が厳しすぎる。どこかで彼我で共有できる区切りを作らないと、落としどころを決められない」
二天龍を倒すだけならいいだろう。もしかしたら、サーゼクスとアジュカならできるかもしれない、しかし、問題は主犯である仮面の男や、共犯者の神滅具所持者である。
彼らを殺そうものならば、神滅具が世界に散らばることになってしまう。
それを聖書の神話が探し出して全部封印ないし、利用できるならいい。だが、おそらく確実に失敗する。そして、諸神話の手に渡ればどのみち聖書の神話は終わりである。
つまり、世界が滅ぶカウントダウンの中で、こちらに対して攻撃してくる『死ににくいドラゴン』が守る『死にやすい人間』を拘束しなければならないのだ。そうでなければ、勝利とは言えない。少なくとも魔獣創造だけでも確保しなければならず、それは向こうも承知の上だ。つまり、どう考えても無理である。対するに相手は時間を稼げば自動的に勝利なのだから。
例え天界が崩壊し、神器の根幹システムが失われたとしても、彼らは微塵も後悔しないだろう。だが、聖書の神話は文字通り瓦解する。
「うわぁ……仮面の男も大概だけど、お前もぶっ壊れてるわ……」
リゼヴィムの蒼白な表情から、単純な回答を得る会議室の面々。
「そういうことか……！　ファルビウム！」
「そういうことだよ、サーゼクス」
ミカエルもアザゼルも、それを理解して言葉を失った。常にわずか

な笑みを浮かべていたアジュカさえファルビウムを見て怯えている。
「他に、他に作戦はないのか！」
「やだなぁ、いつか君が言ったことじゃないか。僕が思いつかなくても、他の皆なら思いつくかもしれないって……」
そう、つまり……新しい時代が来るので邪魔だから死ねと言っているのだ。
「自分で考えて、提案してよ」
「なら、お前から死ね！」
ファルビウムは、ここにきて限りなく酷薄だった。そう、誰もにいい顔をしようとした、優しい魔王に現実を突きつけて。
「……分かった。彼らには私から説明しよう」
それを引き受けた初代バアル。彼は、どこまでも死んだ目で、しかしその運命を受け入れていた。
それは、変わることを拒否し続けてきた、それを周囲にも押し付けてきた、結果的に冥界を危機に陥れた老害の、最期の献身だったのかもしれない。あるいは、悪魔を支えてきたのは己だという矜持を示す最後の機会ととらえたのかもしれない。
「で、ですが！」
「今更だが……サーゼクス・ルシファー。後は任せたぞ」
全てを理解し、そのうえで友人であるファルビウムを殺そうと魔力を高ぶらせていた、真の姿を晒そうとしていた心優しい己の子孫に、初代バアルは今度こそ時代を託していた。

そして、ファルビウムは誰にも聞こえないように、無意味な言葉をつぶやいた。

「やはり彼の正体は……≪読者≫か」

もちろんそれは比喩でしかなく、しかし真実でもあったのだった。

「他所のことなんて、読んで楽しむに留めておけばいいものを……」

レオナルドに続いて、仮面の男の二人目の理解者がそこに現れていた。

「ああ、面倒くさい」

そして、その頃英雄墓場では……。

広く、薄暗い部屋。そこに顔のない男がいた。

「はぁぁあああああああ……！」

周囲には、昇天した表情の女性たちが『散乱』している。

大量の白濁液にまみれた彼女たちの中心に立つその男は、一向に収まらない昂ぶりをもてあましていた。

「【おちんちんが破裂してしまう!!!!】」

「【痛たっ♡♡】」

「【パーンって！】」

「【パーンってなってしまう!!!!】」

「【スプラッターになる!!】」

「【血液の一極集中が止まらない!!!!】」

今、レオナルドは慌ててヴァレリーとルネを呼びに行っている。

既に、世界中を回って集めた仮面の男のコレクション、洗脳された女性たちは全員潰れていた。

故に、精神の昂ぶりをぶつける相手を失っている。

三つの血走った眼は、闇の中で怪しく輝いていた。

「【ドキドキが止まらない!!!】」

「【精子が止め処なく作られているのが実感できる!!!!】」

「【飛び出したがっている!!!】」

「【十兵衛ぇ!!!　個々の精子が意思を持ち始めてきたあぁぁ!!!!】」

「【このままでは射精ではなく、しゅつさ……ん】」
汗まみれの、しかし蒼白のレオナルド。彼は暗く、そして臭う部屋に飛び込み、ヴァレリーを引っ張ってきた。それに続いて、ルネも入ってくる。
「お待たせしました！　ヴァレリーさんを連れていました！」
「ああ……ついに私も……」
「てめえ、ヴァレリーまでその毒牙に……」
「いいところに来た！　ヴァレリー、彼女たちを治してあげてくれ！」
そこには、仮面の男の感情を受け止めきれずに転がっている、心底幸せそうな女性たちがいた。
明らかに、性的に使いつぶされていた。そんな彼女たちを、治療して回復させて、もう一度使えるようにしてくれと、仮面の男は叫んでいた。
「もう、誰でも、いい、気分、なんだ。早くしてくれ……！」
その三つの眼はルネやヴァレリーだけではなく、レオナルドさえ視界に収めていた。
「……ハイ、ワカリマシタ」
「ワタシモ、テツダウ！」
「イッショニ、ガンバリマショウ！」
三人の心が一つになる。断じて、この化け物をこの部屋から出してはならないと。
遠足前の小学生の様に、楽しみで楽しみで眠れない。ご馳走を前にした抜き身の悪が全身から吹き上がっている。
犠牲となる彼女たちにはつらいことだろうが、やむを得ない。これに逆らうには、この三人はまだ幼すぎる。
「早く、早く……！」
薄氷の上にある勝利を確信して、彼は待っていた。
「【早く戦争になーれ！】」
ファルビウムからの伝言によって、自分を止めることができる、自

分を殺しにくる、宿敵ヴァーリ・ルシファーが現れることを。

輝きは君の中に　1

「さて、豪華なメンバーだ。記者会見でも開くわけでもないのに集めたということは」
「茶化すな、ロイガン」
その場には、三人の悪魔が集っていた。
誰もが比較的若手でありながら、しかし魔王に匹敵する実力者であり人気者であり……つまりレーティングゲームのトップランカー3人だった。
1位、皇帝。最上級悪魔。ディハウザー・ベリアルを筆頭に……。
女性悪魔でも屈指の実力者、ベルフェゴール家現当主。最上級悪魔。2位、ロイガン・ベルフェゴール。
そしてやはり最上級悪魔。3位、ビィディゼ・アバドン。
つまり、冥界において魔王に次ぐ、或いは同等とされる実力者たちであり……。
「こうして、最後の戦いに赴く前に時間ができたのでな……なぜこんなことをした」
本来ライバルであり対戦相手ではあっても、敵として憎まれることはなかった。
だが、この場を作ったディハウザーは明らかに敵意を向けて、他の二人をにらんでいた。
それを受けても苦笑しているのがロイガンだった。来るべきものが来た、そんな諦めが彼女の表情に現れている。
対照的に、開き直っているかのような、そんなあけすけな顔をしているのはビィディゼだった。
「なぜ、だと？　つまらないことを言うな、ディハウザー」
目の前の皇帝様は既に知っているのであろう、自らや冥界の恥部を。それを無駄に気にしている、潔癖な男をあざけっていた。
「それができたからだ。それだけの話だ」
「……王の駒。そんなドーピングで観客たちを欺いてきた、不正に対する返答がそれかビィディゼ！」

不正、そうなのだろう。少なくとも、皇帝である純粋な実力者であるディハウザーにとっては、王の駒という代物による強化は不正以外の何物でもなかった。

確かに、サーゼクスの語った通り、彼らはテロリストと組んで冥界を脅かしたわけではない。彼らは彼らなりに、貴族として恥じぬ行動をした。

だが、だからなんだというのだ。観客たちを欺き続けてきた。その事実は決して消えることではない。

あくまでも、一人のスポーツ選手として、しのぎを削ったライバルに問いただす。

「不正？　言ってくれるな、ディハウザー。そもそも、そもそもが間違っている。いいか、ディハウザー。ルールブックのどこに、王は駒で自己を強化してはならないと書いてある？　むしろ、お前の好む眷属悪魔上りは全員駒で強化されているだろう？」

それも、あくまでも理屈の上では事実だ。王の駒は法的に存在しないことになっている。つまりルールブックに王の駒という単語が明記されているはずもなく、同時に下級や中級から上級となったプレイヤーならば、体の中に駒があっても当然である。

駒を用いた強化そのものは、一切非合法ではない。問題があるとすれば、一番肝心な古参の上級悪魔がそれを隠して用いていたということだろう。

「お前は、本当にそれで私が納得するとでも思っているのか?!　第一、王の駒の強化の度合いは他の駒とはケタ違いなのだろう?!」

「そうだな、まさに王にふさわしい。そうではないか？」

舌戦を続ける二人を前に、ロイガンは一旦黙ることにした。とりあえず、ディハウザーもビイディゼも手は出しそうにない。であれば、熱くなったところで仲裁に回ればいい。そう思っていた。その資格が自分にあるのかといえば、非常に疑問だが。

だが、少なくともこの状況で誰か一人でも冷静な者が居なければ、非正規正規を問わず、魔王クラスの正面衝突が起きてしまう。

「いいか、ディハウザー。そもそも、我らと他の悪魔ではスタート地点

からして違うのだ。最高級の食事、最高級の教育、最高級の環境。そして、その中には当然王の駒による強化も含まれている。まさかとは思うが、貴殿は王の駒さえあれば誰でも強くなれる、故に怠惰だとでも思っているのか？　馬鹿馬鹿しい。王の駒を得ることができる立場など極めて限られている。選ばれし者の証なのだ」

ビィディゼの理屈はこうだ。自らは恵まれた生れであると。それゆえに他とは望んで得られるものが違いすぎるのだと。それを不正というのは、ひがみでしかないと。

ある意味ではその通りだ。生れが違うとはそもそもそういうものである。同時に、背負うべき責務もまた、一般とは比べ物にならない、はずではあるのだが。

「であれば、どうして古参の貴族はそれを隠している！」

「知らぬさ。そこは彼らの価値観だ、異論を述べるなどあってはならんことだ」

「それに合わせているというのか？」

「ああ、そうだ。個人的にはなんの負い目もない。第一、目の前に力があるというのに、得ないなどどうかとは思わないか？」

その言葉を、以前のディハウザーなら受け入れかねていた。

だが、脳内で魔王からの言葉が反響している。肝心なのは強いかどうかであって、冥界のために使うことであって、他はどうでもいいのだと。

「……私は、貴殿と違って才能が乏しかった。１０倍から１００倍もの力を得て尚、私は貴殿と同等レベルだ。それで、私に何ができたというのだ。いや……それでも何もできなかったのだがな」

その場の３人は、等しく先日の無力を共有していた。

ロイガンにしてもビィディゼにしても、それなりに自分の実力や眷属には自信があったのだ。だが、先日の黄金風船を前に、何もできなかった。

数体は倒せた。だが、結局犯罪者の作った傀儡を前に無様を晒しただけだったのだ。

「何が違うというのだ。王の駒は、他の駒とどう違う？　王の駒で得

た力と、お前の様に生まれながらに強いものと、どう違う？　まさか、生まれながら恵まれぬものはそれに甘んじろと言うのか」

ビィディゼの言葉には、劣等感が少なからず含まれていた。それは、或いはずっと抱えていたモノなのかもしれない。

自分と同等の血筋でありながら、傑出した力を持つ最強の皇帝。策略だとか幸運だとか、そんなものを踏みにじる圧倒的な個の暴力。

なんの穢れも負い目もない、圧倒的な強者。それに勝てないことがどれだけつらかったことか。

「聖剣や神器などという聖書の神の産物に比べて、圧倒的にマシだろう。純然たる悪魔が生み出した悪魔の力なのだからな！」

それも、正しい。確かに王の駒は才能の乏しい者にも力を与える。だが、神器はどうだろうか、その中でも最強とされる神滅具はどうだろうか。

神の気まぐれで与えられたその力は……めぐりあわせによっては、一年とたたずに担い手に『天』に通じるほどの力を与える。

確かに、必ずしも強くなれるわけではなく。

確かに、死線を潜り抜けねばならず。

同じ条件ならば、優れたものが勝利するのであろう。

だが、王の駒とどう違うのであろうか。

先祖から継いだ血による力、それ以外の後天的に得た力がまがい物だというのであれば、王の駒だけがどうして悪とされるのか。

「恥じるものがないのであれば公表すればいいだろう！」

「そんなことをして何になる！　お前はファンなどというういい加減な衆愚にいい顔をしたいだけだ！」

「衆愚だと！」

「愚民と言えばいいのか！」

「二人とも、落ち着け」

魔力を帯び始めた二人を、ロイガンは収めようとした。

少なくとも、この場で暴力を振るうことは双方が好まないことだろう。

そして、両者は熱くはなっているが大人でもある。ロイガンの静止

に応じて黙った。
もちろん、納得しているわけではない。
「ディハウザー。ビィディゼはどうだか知らないが、少なくとも私は、貴殿と同じステージに立ちたかった」
熱くなっている二人をいさめるために、ロイガンは静かに語り始めた。
そこには、光り輝くステージへの、偽りない憧れがあった。
下級悪魔に示すべき、しかし上級悪魔自身さえも魅了した栄光のステージへの憧れが。
「ビィディゼの言う通り、観客は残酷だ。貴殿の様にトップであり続ける最強の存在や魔王のような栄光ある方々には歓声や喝采を惜しまない。しかし、そうでないものには、興味さえ示さない」
そういう残酷さに関しては、或いは上級悪魔よりもよほど上かもしれない。
彼らはたやすく移ろい、忘れる。熱狂はひと時で、冷めるときはあっという間だ。
しかし一度脚光を浴びてしまえば、もうそこから離れることなどできない。
【出世したいのだ!!】
【誉め讃えられたいのだ!!】
【誉められて】
【誉められて　誉められて】
【逃げも隠れも出来ぬ身となりたいのだ!!】
ディハウザーはそれを得ているからこそ、それに応えたいと思っていた。それを裏切ったと知ったときに後悔しかなかった。
だが、ロイガンにしてもビィディゼにしても……そういうステージに立つことを望めない素養しかなかったのだ。ディハウザーほどではないにしても、家名にふさわしいほどの素養もなかった。
「ならば、研鑽をつみ、策を練れば！」
あるいは、死線を幾度となく潜り抜ければ、実力と呼べるものが身につくかもしれない。しかし、筋書きのない死線とは、即ち死の危険

の伴うものである。
　なにがしかの筋書きによって守られた『役者』ならば、都合よくパワーアップして、リスクがあろうとも後々には解消され、昏睡しようともすぐに目覚める。なによりも、最終的には必ずハッピーエンドを迎える。
　しかし、それが訪れると信じる者は、ただの愚か者でしかない。
「それで貴殿に勝てるのか？　わかっているはずだ、どうあがいても、智謀を巡らせようと天運に縋ろうとも……魔王クラスとは、『本来』懸絶した存在なのだから……」
　ビィディゼは、力なくそう答えた。そう、魔王クラスなど世界全体から見ればたいしたものではなく、真に最強と呼ぶに値するのはサーゼクス・ルシファーのような超越者なのだと。
　そして、そんな相手に対して奸智で、策略で、知恵で、頭脳で、悪意で。
　神器の神滅具という強力な武器があったにしても、いともあっさり勝利を手にした常識外れの化け物を知った今では、全てが空しい。
「私は、強いと思っていた。自分には力があると信じて疑っていなかった。だが、神滅具だか何だか知らないが、人間の犯罪者が些細な手間で作り出したゲテモノを前に、大量生産された使い捨てのモンスターもどきを、数体倒すのがやっとだったのだ！」
『どうも冥界の皆さん、おはようございます！』
『このモンスターは安全です！』
『このモンスターは皆様に危害を加えません！』
『このモンスターは攻撃能力を持たず頑丈なだけです！』
『このモンスターは、一定の高度と一定の速度を維持して、所定のコースを飛行するだけです！』
『このモンスターは時折緑色の液体を撒き散らします。ご安心ください、ただの色水です。飲んでも危害はありません！』
『このモンスターは時折発光しますが、ただまぶしいだけで健康上の被害はありません！』
『このモンスターは常時煙を背中から吐いていますが、ただの湯気で

す。どうか気になさらず、そのまま日常生活を送ってください！』

『このモンスターはおぞましい声を出すこともありますが、なんの効果もないので避難する必要はありません！』

『このモンスターは現政権とはなんの関係もない、犯罪者の造った単なる広告塔です！』

この場の3人が、嫌というほど聞いた犯罪者の愉快そうな声。エンドレスで、ループで、大音量で、至近距離で。誰もが嫌というほど聞かされた、そう思わせる以外に何の意図もない邪悪なる意思。

本当に、ただ頑丈なだけで一切領民にダメージを与えなかった、ただの嫌がらせ。

いくらでも作り出せる、いくらでも切り捨てられる、なによりもこれからいくらでも強化できる。

そんなオモチャさえ、魔王クラスをもってしても、倒しきるには膨大な時間を要した。

神滅具などという、おとなしい代物ではない。アレではまるで、神を殺すどころか、『神話を滅ぼしつくす』代物だ。

「ディハウザー……私は、もうこりごりだ。私はあんなものとは戦えない」

それは、飾り気無い弱音だった。

ビィディゼの独白に、ロイガンも返す言葉がなかった。彼女も同じ心境だったのだから。

「民衆が信じていたように、私もまた信じていた。レーティングゲームのプレイヤーは選ばれし存在だと。トップランカーは魔王にも匹敵する存在だと。その頭上には、常に栄光があるのだと。それゆえに……私は、純粋な血統ではない、傍流や混血、或いは転生悪魔が眷属としてではなく、プレイヤーとして、王として参加することを忌避していた。そうでなければならないと思っていた。ブランドの価値は、如何に混じり物、メッキを含まないかで決まるのだからな。だが……それは幻想だった」

根本的な勘違いだった。してはならない考え方だった。

トップランカーは無敵である、という『幻想』を作り出すためにレー

ティングゲームは存在していた。だが、有ろうことか肝心のトップランカーや、彼らの黒幕面をしていた古参の悪魔さえ、それを信じてしまっていたのだ。

民衆をだますための幻想を、自らも信じてしまっていたのだ。

「私は……無理だ。アレにはそもそも戦うという考え方がない。フェアプレーの精神も、マナーも、誇りも……そして何よりも『灰色』がない」

ビィディゼは、彼なりにゲームを愛していた。そう、それゆえに対戦相手ではない犯罪者に立ち向かう気骨を失っていた。

「アレには、もしかしたらだとか、なあなあだとか、空気を読むとか、相手を気遣うとか、そういうものがない。勝つか、負けるか。それだけだ。決定的に、徹底的に、執拗に、無慈悲に。ただこちらへ現実を突きつけてくる。何をやっても、絶対に勝てないという、屈辱にまみれた敗北をこちらに示すだけだ」

もう一度やれば勝てるとか、諦めなければ届くとか、強くなればあるいはだとか、そんなものは一切ない。

「我々では……貴族では……悪魔では、奴には、絶対に勝てない……」

駒王学園、生徒会室。

「……だったんだ……」

ソーナ・シトリーの眷属、兵士四駒、匙元士郎。

彼は、絶望的な敗北感にとらわれていた。

何度も、何度も、何度も何度も。彼は記録映像を確認していた。

洗脳だとか、催眠だとか、魅了だとか。或いは詐欺だとか詐称だとか虚勢だとか。

そういう、相手を騙すテクニックやスキル。多くのモノがないと分かった映像を、彼は何度も見直していた。

強いて言えば話術を用いたぐらいであろうが、仮面の男がソーナに語った内容には虚構はなかった。幻想はなかった。偽装はなかった。絶望もあった。だが、希望もあった。

「だったんだ！」

彼の語る言葉には熱量があり、光輝があり、圧力があった。だが、それを差し引いても、単純に彼が語ったことソーナが成すべきことを箇条書きにして、そうしなければならない理由を並べただけでも、とても単純に説得力があった。

何とも恐るべきことに、これに関しては誰からも訂正の必要性はなかったのだ。

強いて言えば、表現が直接的過ぎて、詩的ではない。詩吟を学ぶべきだ、というどうでもいい要素がある程度だ。正直匙にはどうでもいい。

おそらく、彼の言う通りにしても社会との軋轢や摩擦は免れなかっただろう。だが、それでもソーナが当初計画していた通りにことを進めるよりは、はるかに滑らかであろう計画だった。

学校から送り出す生徒たちが、社会に受け入れられやすい進め方だった。

「アイツが、なるべきだったんだ！」

匙は何も考えていなかった。

ソーナの言う理想が美しいと感じ、彼女に懸想し、彼女の背中をただ見つめて付いていっただけだ。

言ってしまえば、彼女の後ろをついていくだけで、それだけで円満に夢がかなうと思い込んでいた。疑問にも感じなかった。

ソーナが間違っているだとか、ソーナが焦っているとか、ソーナが何も考えていないとは、まるで思いもよらなかった。

それどころか、そう指摘する相手は敵だと、悪だと、愚かだと、古いと、そう思って声高に抗議するほどだった。礼儀も場所も弁えずに。

その行為が、自分だけではなくソーナや、その生徒の迷惑になるとは欠片も考えずに。

よく考えるどころか、少し考えれば分かることだった。

ソーナ・シトリーの眷属である自分が無礼を働けば、それだけで彼女の風聞が悪くなるとか、彼女の敵が増えるとは考えもしなかった。

何という無思慮、何という害悪、何という足手まとい。

「アイツが、会長の眷属になるべきだったんだ！」

悪性の正しさをばらまいていた自分は、教師になる前から生徒の未来を奪っていたのだ。

「そうすれば、こんなことには、こんなことには……！」

自分は、犯罪者と何が違うのだ。自分は、生徒を送り出すべき社会とケンカをしようとしていたのだ。

極めて無自覚に、救うべき彼らの未来を摘んでいた。

「会長……すみません！」

勝手にゴールを設定し、そこに至ればハッピーエンドだと思い込んでいた。

実際には違う。そこはまだ新しいスタートでしかない。

学校を作っても、生徒を送り出しても、生徒にとっても学校にとってもそこは新しいスタートでしかない。

苦労して実力を身に着けて、苦労して中級悪魔や上級悪魔に出世して、それでも彼らが幸せになれるかどうかなど分からない。分からない癖に自分たちはそれが正しいと信じていたのだ。

「会長……俺は貴女の眷属になるべきじゃなかったんだ！」

彼の説明は完璧だった。

匙は当然のこと、四大魔王も、初代バアルさえも。誰もが納得していた。

ソーナ・シトリーが学校を作りたいという目標は、あくまでも手段でしかない。学校に通えない子供たちに、学校へ通うという選択肢を与えることが目的だ。

極端な話新しい学校を作るのではなく、既存の学校の中に学科を新設してもいいし、或いは既存の建物の一部を借りて塾のようなものを始めてもいい。にも関わらず、ソーナは新しい学校を作るという目標を設定し、それに固執していた。

加えて、レーティングゲームのプレイヤーになったことがないにもかかわらず、レーティングゲームのプレイヤーの養成校を造りたいとも思っていた。それどころか、宣言もしていた。

笑われて当然である。漫画家になったこともない女の子が、漫画家の養成校を作りたいと言い出したようなものなのだ。商業誌での連載どころか、新人賞もとったことのない少女が、である。

しかし、それをソーナの眷属はそれがおかしいとは欠片も思わなかったのだ。少し考えればわかることなのに。彼女に必要なのは、賛同するだけの同志ではなく、厳しくも優しく浅慮を指摘してくれる厳しい大人だったのだ。

それゆえに彼は、焦るソーナをやんわりと指導した。それもソーナが受け入れやすいように、ソーナの生徒の為にと言って。匙が熱くならないように、匙が頑なにならないように、匙が受け入れやすいように。

加えて、上級悪魔という立場が尊いとも決めつけず、安楽だとも言い切らなかった。下級悪魔から繰り上がることで、自分で確認すべきだと言われた。

それは、おそらく初代バアルにしても同じことを言うであろう、古参の悪魔にしても肯定する正しい選択だった。

少なくとも、魔王の妹であるソーナの眷属の匙たちは、その辺りのハードルもかなり低い。低いが、それでも楽ではない。楽ではないからこそ、意義もある。

眷属に上級悪魔にふさわしい功績をあげさせ、その眷属が単独でも上級悪魔として活動し、彼ら自身が上級悪魔なりの苦悩を知り、それをソーナが知る。

その上で、上級悪魔を養成する学校を作りたいというのであれば、小娘の妄言と笑われることはないだろう。

諦めて、素直に上級悪魔を目指さない学校を作っていたのかもしれない。

いずれにせよ、生徒を使った無謀な挑戦は避けられたのだ。彼の語った通り、ソーナには再起の道はあっても、その生徒たちにそれがあるわけではないのだから。

「畜生、畜生、畜生！」

そう、小娘なのだ。彼女はまだ、１８かそこらの小娘でしかない。

にもかかわらず、彼女はこの世界の真理であると錯覚して、偶像化して、崇拝してしまっていたのだ。
それに比べて、ああ、仮面の男は。
犯罪者の分際で、強姦魔の分際で、愉快犯の分際で。
いともあっさり、等身大の彼女の道を正していたのだ。
硬く握りしめた拳は、どこまでも無力だった。
「なんで、俺は、頭が悪いんだ！」
彼女に必要なのは、ただ従う強いだけの眷属ではない。きちんと彼女の理想そのものを語り合える眷属だったのだ。
「なんで、なんで俺は頭が悪いんだ！」
嗚咽する匙を、同胞が見守っていた。
しかし、彼女たちもまた、同じ心境だったのだ。それゆえに、語り掛けることも寄り添うこともできなかった。
「……ああ、会長……俺は貴女の眷属になる資格がなかったんだ！」

輝きは君の中に　2

「お集まりいただいた、原初の悪魔の血を継ぐ上級悪魔の紳士淑女の諸君」

それは、一人の悪魔の復帰を示す、一つの舞台だった。

「リゼヴィム・リヴァン・ルシファー……私は、恥を忍んで再び冥界に復帰した」

その会場には多くの悪魔たちが、それも名門とされる元72柱に属する多くの上級悪魔たちが勢ぞろいしていた。

「無論、この国難に対して諸君らと轡を並べるためである」

おおっ、と静寂に包まれた会場に、らしくもなく感嘆の声が漏れた。

一人二人ではなく、多くの者がこみ上げる感動を抑えることができなかった。それゆえに、誰もそれを咎められなかった。

「先日の内戦では、私は卑怯にも同志たちを見捨てて逃げ出してしまった。それは、諸君らの期待を裏切った行為だと深く謝罪したい」

魔王の息子は、魔王の息子として恥じることなき振る舞いで、しかし真摯に謝罪をしつつ決意を表明していた。

「しかし、此度は違う。私は、魔王の息子として、偉大なるルシファーの嫡子として悪魔と命運を共にするつもりである」

魔王の息子と言えば、原初の悪魔にほど近い世代である。つまり、この場にそろった面々にしても、彼やその父の尊顔を拝した者は少ない。

しかし、悪魔の本能が告げていた。ここに、真の王が帰参したのだと。

「貴殿らが許してくれるのであれば、私はこの命を最後の戦いに奉げるつもりだ！」

魔王の息子が、己の義務を果たさんがためにこうして現れた。それは、どの悪魔にとっても吉報であった。

相手は神器の使い手である。ならば……この王子こそが彼らの天敵に他ならない。

そして、失踪していた彼の復帰は多くの老人たちを奮い立たせるも

のがあった。

「あ～～だり～～」

外面だけいいのも考え物だが、少なくとも外面を取り繕おうという努力を、リゼヴィムは怠らなかった。

その努力が伝わったのか、或いは彼の振る舞いに亡き前魔王の面影を見たのか。上級悪魔たちを集めた会合は大成功に終わった。

「まったく、こっちは地蔵じゃないんだっての……ぺちぺち触ってきやがって」

彼らは、涙ながらに彼の帰還を祝福したが……しかしそれは彼としては不本意なものだったらしい。

というよりも、元々それが嫌だからこそ身を隠していたのだが。

「見事な立ち振る舞いでございましたな、坊ちゃん」

「……まあ、結構演技臭かったかな～～みたいな？」

「いえいえ、亡きお父上にそっくりで、この老体は感動で前が見えませぬ」

当人も参加していた初代バアル。彼も演技指導や台本造りに参加していたが、それでも感激で涙があふれていた。

平素こそこうして砕けてはいるが、それでも彼は公の場で魔王らしく振る舞って期待に応えてくれたのだ。この日をどれだけ待ったことだろうか。

「いっちいちオーバーだっての……まったく、孫がいる爺を捕まえて」

「まったくだねぇ」

と、ここで現れたのはやはり古参の悪魔。しかし、前魔王に対して毛ほども信仰を持たぬ不心得者。原初の悪魔でありながら、しかし人間世界で独自の勢力まで作り上げた反骨心の塊。

ある意味では、人間世界で最も有名な悪魔、メフィスト・フェレス。

見た目はリゼヴィムよりも若い彼は、紳士服で颯爽と現れた。

「いい年こいた連中が、ルシファー様ルシファー様。みっともないっ

たらありゃしない」
「そーそーそーなんだよ、メフィストのおっちゃん。とーちゃんが死んで、どんだけたってんだか知らないってのに、未練たらたらでもー大変！」
しかし、そんな彼だからこそリゼヴィムは大喜びだ。どいつもこいつも、責務をほったらかして好き勝手やっていた爺さんをもてはやしすぎである。
もう少し、目の前のメフィストの様にこちらへ冷ややかな表情を向けてほしかったものだ。
「何をしに来たのだ、メフィスト。貴様は天界での結界造りで……」
「そっちはもう大分済んだ。設計図も書いたしね、あとは現地の天使に任せた方がスムーズだ。今の天界はデリケートだしね、あんまり長居するとそれが原因で崩壊しかねない」
「へぇ、もう現地での作業は終わったんだ」
「ああ、それに……なんのかんの言って、視線が痛い。どこまで行っても悪魔は悪魔だ」
天界の崩壊は聖書の陣営の崩壊を意味している。つまりはどの陣営も利害は一致していた。だが、それでも天界を守るにあたって、主役が天使ではなく悪魔や堕天使になるなどあってはならないのである。
少なくとも、建前の上ではだが。
「そうだね……悪魔は悪魔だ……悪魔かぁ」
リゼヴィムは、遠い目をした。そう、悪魔は悪魔なのである。悪魔とはどうあるべきなのかという命題を己に問うてきた彼だが、結局その答えを得られぬままに終焉はやってきた。
もう、悩む必要も答えを得る必要もない。悪魔は景気よく滅びる。悪魔に対して議論をする必要がまったくなくなるのだ。
そんな価値は、もう悪魔にはないのだから。
「でもまあ、なんのかんの言って心強いよ。なにせ君は問答無用で神器を停止させる。どれだけ複合した神滅具も、君にかかれば煙の様に立ち消える。黄金風船の時に、君が居ればと何度も思っていたさ」

メフィストは冥界に余り未練はないが、それでも彼の女王である元竜王の領地などのしがらみはある。

そして、あの悪意に満ちた声を聞きもしたのだ。

流石に古参の悪魔だけあって若手の様に打ちのめされることはなかったが、それでも理不尽さに腹立たしく思ったものだ。

「ふん……儂は、ずっとそう思っておったがな」

魔王亡き後、冥界を支えてきたのは新しい魔王ではなく大王。その自負は老人にもまだ残っている。

少なくとも、意見をまとめる役は必要で、それは王としては若すぎるサーゼクスには務まらなかった。それも事実だ。少なくとも隠居した上級悪魔たちにしてみれば、バアルの発言はそれなりの説得力があったのだから。

「坊ちゃんにとっては重荷でも、やはり夢想してしまう。リゼヴィム坊ちゃんがルシファー様の後を継いだもしもの過去を……」

気弱になった老人は、そう漏らした。ありえなかった過去を偲ぶ未練である。

そしてそれは、内戦で傷つき多くを失った悪魔の、その貴族たちの抱える共通のものだった。

だが、メフィストは違う。それゆえに、否定をした。

「おい、ふざけるなよ」

否定をした、というよりも、否定しようとした。

その前に、当の本人が静かに怒っていた。

目の前の老人に対して感じている、申し訳なさは嘘ではない。しかし、それ以上の怒りが吹き上がっていた。

「お前は、まだ、何もわかっていないな」

老人をにらみつけるその眼光は、奇しくも初代ルシファーのそれによく似たプレッシャーを放っている。

王を思い出した老人は、金縛りにあったかのように動けなくなっていた。

「……別に意図したわけではない。しかし、もしも僕ちゃんが悪魔に残っていたら、それこそ悪魔は自滅していただろうさ」

それは、別にファルビウムに相談して得た答えではない。時間だけは無限にあったリゼヴィムが、酒で脳をごまかしつつもシュミレートした正解に近い想像だった。

「いいか、もしもこのリゼヴィムが旧魔王派に組していたならば、内戦は長期化して被害も甚大になっていただろうさ。そうなれば、今よりも尚状況は悪かった。呑気にスポーツを催すこともできなかっただろうね」

それは、正しい思考である。

なぜならば、そもそも現魔王派にサーゼクスとアジュカがそろっている時点で、どうあがいても旧魔王派の勝利はありえなかったのだ。なにせ、彼らは二天龍に匹敵する実力者。全盛期の二天龍を止めるにあたって、聖書の陣営は手を組まざるを得なかったのであるから、旧魔王派が単独でこの二人を倒すなどあり得ないことである。

そして、悲しいかなリゼヴィムはその二人に比べて大きく劣る。魔王にふさわしい程度の魔力と、神器を無効化する特殊能力。その程度では、その二人には無力だろう。

「かといって、もしも僕ちゃんが現魔王派に協力していたらどうか？」

そうなれば、そもそも現魔王派と旧魔王派という区切りにさえならなかっただろう。

ルシファーと、それ以外の三柱の魔王。四大魔王内部の分裂という形になり、内戦そのものは速やかに解決した可能性が高い。

もしかしたら、そもそも内戦さえ起らなかった可能性さえある。なにせ、ルシファーである。他の四大魔王と比べるに一つ頭の抜けた存在であるルシファーの嫡子が、新しい政策に乗り出すのだ。それを支持する派閥も多かったに違いない。

少なくとも、実際に起きた内戦よりもマシだったことは確実である。

「他の魔王の座は排除され、魔王ルシファーこそが唯一の魔王という形になっていただろうね。んでもって、サーゼクスちんやアジュカっちが政務を手伝うと、そんな感じかな」

その想定に、メフィストもバアルも異論はない。おそらく政治とし

てはそうなるのが自然だ。確かにサーゼクスは強いが、年齢から言ってもリゼヴィムの方がふさわしいだろうし、そもそもあの二人が魔王の座に固執するとも思えなかった。

しかし、バアルには分からない。なぜ、その黄金のような未来を否定するのか。

「そしたらね、なんにも変わってなかったぜ。君ら原初の悪魔が、まるで現役の様に元気よく今まで通りのやり方にしようと口を出していたさ。今よりも、もっと口うるさくなぁ！」

「わかるわかる」

怒鳴りつけるリゼヴィムに、メフィストは頷いていた。

なにせ、ついさっきもそうだったのだ。ルシファーの息子が魔王の座に就けば、尚のこと彼らは大きな声で彼に口やかましく助言を与えていただろう。

「それが嫌で、こっちは家出したんだよ！」

目の前の老人にとって、リゼヴィムはいつまでもルシファーの息子でしかない。きっと、これからもずっとそうなのだろう。それは間違いではないが、当人にすればたまったものではない。

子供が生まれようが孫が生まれようが坊ちゃんなのだ。魔王になろうが執政を行おうが坊ちゃん扱いするに違いない。

「お前らはルシファーによく似た顔の、ルシファーっぽく喋る、ルシファーの様に振る舞う、一分の一スケールの『しゃべるルシファー人形』が欲しいだけだ！　新しいやり方を考えたりとか、融和政策を始めるとか、そんなルシファーっぽくないことをしようとしたら絶対止めるに決まってるだろ！　そんなの僕らのカッコいいルシファーじゃないってな！」

その言葉を発する、リゼヴィムの顔が泣いていた。

自意識を否定され、個性を否定され、お飾りであることを強要される人生を約束されていた王子。彼は、父親の忠臣に怒鳴りつけていた。

変わる気もないくせに口は出す、隠居はするくせに文句は言う。

絵にかいたような老害に、ため込んでいた鬱憤がはじけていた。

「なんのかんの言って、まあ現魔王派のやり方も旧魔王派のやり方に比べればだいぶマシだったんだろうさ。つまり父ちゃんのやり方を踏襲するじいちゃんたちの言う通りに政治してたら、悪魔はとっくに滅びてたって話だ！」

結局のところ、悪魔の合理性とは『現状維持』でしかない。昔から続いてきたやり方を、今後も持続して行う。それだけの話だ。

そこには、一切の柔軟性がなく、未来も待たない。悪魔が変化しなくても、それ以外が変化すれば、今までのやり方では通じなくなる。

それをわかろうともしないくせに、この老人は悪魔を守った気になっていたのだ。

「リゼヴィム君……言いたくはないが、悪魔に限らず名家の子供とはそういうものだ。家という組織を守るために、親のスペアになる。それが結果として国を守ることになるんだ」

余りにも意見が偏っていると思ったのであろう。本人も嫌気がさしている、貴族という仕組みに対して、一定の歩み寄りを見せたメフィスト。しかし、それでもリゼヴィムは止まらない。

「だったら、なんで子供なんて作るんだ！　子供に孫なんて作らせる！」

それは、言ってはならないことだった。

だが、真実でもある。

なにせ、少なくとも堕天使と天界は、トップの面々が子供に仕事を引き継がずにいる。

もちろん、天界は神の不在によって影響は出ている。だが、ミカエル達にしても子供を作ることは不可能ではないが、それでも己自身で天界を支えていた。

「子供が親のスペアだってんなら孫は子供のスペアか?!　その子供は、更にその子供は!!」

リゼヴィムは、内心愕然としたのだ。知ってはいたが、眼にして絶望していたのだ。

無責任に子供を造り、彼らに責任だけを負わせてきた老害の巣窟を。

「バアル、バアル、バアル！　子供がスペアなら、お前はいったいなんだ?!　どれだけスペアを作れば気が済む！　お前が居なくなっても、お前の子供や孫が仕事を引き継げるってのか?!　ええ?!　危険な仕事があるってんなら、お前が真っ先に突っ込んで、真っ先に死ぬべきだろうが！」

それは、余りにも残酷な言葉だった。

「代わりなら、いくらでもいるんだからな！」

だが、一面では真実でもある。一万年も生きる悪魔は、一体どれだけのスペアを必要とするというのか。スペアのスペアが、大量に余って在庫で腐っている。そして、その倉庫の一番奥でふんぞり返っているのが目の前のバアルに他ならない。

「わ、私は……悪魔の、貴族体制を……」

「責任を子供に押し付け続けるのが貴族だってのか！」

結局のところ、貴族たちが一番貴族体制に辟易しているのであろう。

自分の親のそのまた親の……ひたすら遡った親がことあるごとに口を出す。あげく、失敗すれば自分の責任である。当主と言っても、名ばかりでしかない。であれば、面倒になって子供を造り、さっさと次の世代に『当主』と書かれた名札を押し付けてしまえばいい。それを、際限なくやった結果が今の冥界だ。その原因が初代バアルだ。

これこそまさに、諸悪の根源に他ならない。

おかげで、どれだけ無駄な『隠居貴族』がいることか。

「お前のスペアなんざ二人もいりゃ十分だろ！　なのになんでまたああもバカスカ作った！　お前は未だにでかい顔して、そのガキどもは腰振ってガキ作って遊び放題！　今の俺とどう違うってんだ、ああ!?」

その言葉に、自身も『家』を作らなかったメフィストとしては賛同するしかない。

結局、そうしたしがらみが冥界を硬直させているのだ。

「下級や中級はともかく、お前ら上級悪魔様は子孫何ぞこさえるべきじゃなかったんだよ！」

その咆哮は、全てを否定していた。
若手とされるリアス・グレモリーを、ソーナ・シトリーを、サイラオーグ・バアルを。
それどころか、現魔王の面々の世代さえも完全に否定していた。
だが、しかし、それでもあながち間違っているとも言えなかった。
一万年という長い年月を生きる悪魔は、そのくせ余りにも世代を重ねすぎていた。
「お前らは、単にふんぞり返って足の引っ張り合いをしてただけだ！」
リゼヴィム自身、負い目がないわけではない。しかし、それでもため込んでいた鬱憤は吹き上がって止まらなかった。
「何が悪魔を守ってきた、だ。馬鹿にしやがって！」
魔王の息子は、原初の悪魔を否定する。貴族制度を守るとほざく、家を守ることが国家を守ることだと信じている、時代遅れの大阿呆を怒鳴りつける。
「お前が守っていたのは、お前の自尊心だ！」

「ねえ、ルネ。私に字を教えてほしいの」
それは、ヴァレリーの願いだった。可愛らしい、大事なお願いだった。
「うん、わかったよ」
研究所に有った、紙とペン。それを使って、ヴァレリーは勉強を始めた。
拙い指の動きで、ゆっくりと字を書いていく。最初は、アルファベットをひたすら反復して書いていくだけだ。まずは、発音以前に字そのものを暗記しなければならない。
「……ねえ、ルネ。貴女も昔こうやって字を覚えたの？」
「ん、まあね」
ただひたすら、同じアルファベットを繰り返し書いていく。それだ

けのことなので、ルネはやることがない。
ただ、あんまりにも下手であれば指摘すればいいだけのことだ。生徒がやる気なら、先生は楽ができるのである。
「でもさ、なんで急に字を覚えたいって？」
「日記を書きたいの」
ルネの疑問に、ヴァレリーは静かに答えた。視線は相変わらず紙に向いている。
対するに、ルネもまた視線をヴァレリーには向けていなかった。彼女は、天井を見上げていた。
その視線が、まさか天井のシミを数えているわけもない。彼女は考え事をしていたのだ。
「日記？」
「ええ……私は頭が悪いから、三つ目様の言うことを全てずっと覚えていられないの。私は、憶えていたい。あの人が語った優しい未来を、また誰かに伝えたい」
無に形を与え、命を吹き込む。白い紙に絵を描いて、それを現実にする。
それが人間の力だというのであれば、自分たちの持つ神滅具のなんとか弱いことか。
それが欲しい。ヴァレリーはそう強く思っていた。
夢を語りたい。未来を描きたい。現実を作りたい。幸せを目指したい。
「『みんな』が、自分で自分の目指すモノを見つけてほしいの。三つ目様の語った未来が、私たちが作りたい未来なんだってわかったの」
言葉を重ねて、思いを伝える。現実を知って、理想を目指す。
それが人間のあるべき姿なのだとしたら、自分たちの持っている神滅具は余りにも間違っている。
人間になりたい。痛みに耐える奴隷ではなく、餌を待つだけの家畜ではなく、決まった通りに動くだけの機械ではなく、欲しいとねだるだけの子供でもなく、自分というものを持った人間になりたい。
仮面の男の強さが欲しい。ただの優しい少女には、彼の強さがまぶ

しかった。
「あの言葉を、自分のものにしたい。あれを理解して、納得して、次の人に伝えたい。どうしていいのかわからない人の、その未来に祝福を送りたいの」
　未来は明るくないとはわかっている。彼の語った未来は、正しい道ではあるが安楽な道ではない。
　だが、それがなんだというのだ。茨と薊が自分たちの前に有ったとしても、そうと『知って』選んだ道ならば歩くことはできる。
　その労力や苦痛が成果に見合ったものではなくとも、後悔などあるわけがない。
　未来があるのならば、希望があるのならば、過去も絶望も受け入れよう。
「……私は、人間になりたい。いえ、きっと大人になりたいの」
　その、大人像が吸血鬼たちではないことは明白だ。
　その、大人とは……。
「ルネ、貴女はどうなの？」
「私は、アイツの妹になりたい」
　ルネは、自然にそう答えていた。
　口にしてしまえば、あっさりとしたものだった。
　口にするまでは混沌としていたし、そもそもそれが正しいとはとてもではないが思えない。
　どう考えても、あの男は親族にしたくない。もしも親戚に彼が居れば、きっと絶縁状をたたきつけていただろう。
　だが、他人だからこそ、彼と何かつながりが欲しかったのかもしれない。
「びっくりするかもしれないけど……止めるかもしれないけど……私は、アイツの家族になりたいんだ」
　ルネは、思い出していた。仮面の男の語った言葉の中で、とても素直にうれしいと思った言葉が、彼女の中の感情に形を与えていた。
「【自分は、ルネやヴァレリーを妹のように思っている。レオナルドのことは、弟のように思っている】私は……嬉しかったんだ。あのクソ

が、私のことを妹だって、家族だって思っているのがわかって、ほっとしたんだ。本当に、本当に……」

ルネもヴァレリーもレオナルドも、自分の家族だ。仮面の男はそう思っていた。

それが、ルネにとってどれだけ安心する言葉なのか。あの到底理解できない混沌とした感情の化け物が、一般的な意味で友愛を意味する言葉で自分たちをカテゴライズしていたことが、本当にうれしかったのだ。

心の底から、安心していたのだ。

自分と同じだと、確認できたことが。

「私だって、そう思っていたんだ。あのクソのことを、兄ちゃんだと思ってた」

「そうなの……」

「ヴァレリーとも、レオナルドとも、家族になりたい。ここを……私たちの帰る場所にしたい」

字を教わっているはずのヴァレリーは、ルネの告白を優しく聞いていた。

その表情に、嫌悪感はなかった。仮面の男の激しく熱い悪を知りながらも、穏やかで温かい善からは逃れがたい。

いや、違うのだろう。きっと、一緒の食卓を囲んで、言葉を交わして、思いを伝えあって、困難に対して団結する。

それを、共犯者という事実の名詞でまとめたくない。

それが仮初の物であっても、繋がりを意味する言葉が『家族』というものであってほしかった。

「私はアイツが嫌いだ。でも、それでもアイツとは犯罪行為でじゃなくて、兄弟とかそんな感じの繋がりでいたい」

「……だったら、ルネは私の妹になるのかしら」

ヴァレリーにとって、家族とは必ずしも温かいものではない。しかし、ルネが求めているものは分かっている。

「……そう、かな？」

「……私も、家族が欲しいのかもしれないわね」

もしかしたら、仮面の男さえも、それを欲しているのかもしれない。
家族ほどにしっかりとしたものではなくとも、喜びを分かち合う誰かを。

輝きは君の中に　3

四大魔王はそろって事務処理をしていた。幸いなことに、現状リゼヴィムの復帰によって大抵の物事はすんなり通る。良くも悪くも国家の指針に口出しをしていた初代バアルが全面的に賛同してくれているからだ。

もちろん、政務が順調だからと言って、問題が簡単というわけでもないのだが。

「……ファルビウム」

「どうしたの？」

思いつめた表情のサーゼクスは、作業の手を止めることなくファルビウムに話しかけていた。

彼の心中には先日の暴言が反響している。

「……すまなかった」

「気にしなくていいよ。君の気持ちも良く分かる」

最近のファルビウムは、魔王として精力的に働いていた。間違いなく、彼なりに自分の出番であると理解しているであろう。実際の所、彼が居なければ今頃どうなっていたのかわからない。

「……だが、これでよかったのだろうか」

サーゼクスは、目を伏せながらそうつぶやく。明らかに魔王として言ってはならないことだった。

だが、それでも代案を一切出せないこの状況で、そんな泣き言を言うのはファルビウムの作戦が非人道的なものだからだろう。悪魔が非人道的というのもおかしな話だが。

「中長期的に考えて、他には思いつかないね」

「……そうだな」

結局のところ、魔獣創造と幽世の聖杯が問題だ。この二つが封印されずに存在している時点で、とっくに手遅れである。

「彼は非常に優秀な戦略家だ。自らの愚かしさも含めてね」

記録映像の中で、仮面の男はソーナに自分は頭が悪いと語った。しかし、それは違うとファルビウムは知っている。

馬鹿には三種類いるのだ。味方にいると困る自分のことを賢いと思っている馬鹿と、別段問題にはならない自分のことを馬鹿だと知っている馬鹿。そして、絶対に敵に回せない最後の馬鹿。

「彼は、自分が馬鹿だと思っている賢者だ。およそ想像しうる限り、最も敵に回してはいけない最悪の手合いだよ」

本当の本当に頭が良ければ、つまり正真正銘の賢人は俗世のことに顔など突っ込まない。そういう意味では、アジュカもファルビウムも真の賢人には程遠い。

はっきり言って、賢人は衆愚に一々かまったりはしないのだ。宇宙の真理などと言った途方もない存在に目を向けて、脳内で誰にも理解できない思索にふけるのであろう。

「彼の作戦はコロンブスの卵だ。一度誰かがやってその成果を示してしまえば、次はどんな馬鹿がやっても成功できる。なにせ同じことをそのままやればいいだけのことなんだからね」

仮面の男は確かに多くの能力を持っているのであろうし、多くの神滅具を所持しているのであろう。

だが、仮に彼と同じ能力を持ち同じだけの神滅具を持っていたとして、彼の作戦を思いつき実行に移し成功ができたかといえば、甚だ疑問だ。

それこそが、彼の賢しさの証明だ。彼はどんな馬鹿でも成功できる作戦しか実行に移していない。変に賢しく振舞おうとしていないし、その賢しさを部下に押し付けてもいない。

少々悪趣味は過ぎるが、彼の作戦はどれも達成が容易なものばかりである。無駄に手間をかけて達成が困難な作戦を組み立ててはいないのだ。

「もし仮に、こっちが彼らに勝てるだけの戦力を用意しようものならば、彼は神滅具を取り出して放流する可能性だってある。実際、そうやっても彼は少しも困らないしね」

びくりと、更なる最悪の可能性を提示されて他の三人は硬直した。言われてみればその通りで、戦略的な価値の大きい二つの神滅具は、しかし現場で使うとなるとそこまで有用ではない。

決戦にこちらが備えすぎれば、それを察して担い手を他の神話に託すか、或いは神滅具だけを『誰にでも使える状態』にして適当な勢力に売っぱらう可能性もあった。

もしもそうなっていたら、何をどうあがいても聖書の陣営は滅亡するだろう。

「……なんだか、二人ともすんごい頭が良いんだね」

もう、セラフォルーはそういうしかない。改めて、二人の頭脳戦は余人を挟める次元ではなくなっていた。

次元ではなくなっていた。

「……では、レーティングゲームのトッププレイヤーを集めても、返って悪手だったということか」

今回の一件に合わせてまたも招集をかけたサーゼクス。しかし、いい返事をもらったのはディハウザーだけだった。元々期待はしていなかったが、それでもやはり彼らがいないのは惜しかった。

確かに彼らは王の駒によって強化されている。しかし、それでも別に彼らが急に弱くなったわけではない。魔王クラスとされる彼らがいなのは戦力として痛かった。

しかし、それが逆効果になりえたと知って、心中は複雑だった。

「え？　なに君は彼らがなにかの役に立つとでも思っていたのかい？」

しかし、その幻想を根こそぎ否定する。戦略家は夢を見ず、犯罪者は装飾をはぎ取る。

最初から、なんの期待もしていなかった彼は、ぽかんと呆れさえしていた。

「……どういう意味だ？」

「君は歴史を知らないらしい。長く生きているからかもしれないけどね」

ペンの動きさえ止めていたファルビウムは、問いただそうとしていたサーゼクスにゆっくりと、生徒に語るように教え始めていた。

「君は、傭兵というものを知っているよね？　言うまでもなく戦争をすることで金銭を得る輩だ。軍人と違うのは特定の主を持たないということだ」

と、明らかにこの場の面々とは関係のない話を始めた。歴史の講釈を始めるのはけっこうだが、意図が全く読めない。

「これはとても大きな差でね、要するに彼らはビジネスで動く。そして、大抵の人間がそうであるように仕事と命なら命を取る。もちろん、他者の命ではなく自分の命だ」

もちろん、何事にも例外はある。例えば国家として傭兵を輸出していた場合は別だ。その場合特定の主を持たないが、しかし国家の威信を背負っている。彼らが雇用主を裏切れば、それは国家の傭兵としての信頼を失うことにつながりかねないのだ。

「で、そんな彼らが傭兵同士で戦うことになったら、どうなると思う？」

ここで言う彼らとは、傭兵と傭兵の激突ということだろう。

しかし、傭兵と上級悪魔では、種族以上に思考形態が違いすぎると三人は考える。少なくとも、同じと扱われれば怒るものも多いだろう。

「『八百長』だよ。事前にある程度の取り決めを敵側の傭兵と交わして、ほどほどに戦って、ほどほどに終わらせる。なんとも『合理的』だとは思わないかい？」

だが、その言葉を聞いて。

八百長、合理的。その言葉を聞いて。

魔王たちは奇妙な一致を見出していた。

「もちろん、互いに全滅しあうまで殺しあうなんてのは余りにも不毛だ。傭兵にだって家族はいるわけだしね。それにまあ、雇用主だってそこまで善良というわけでもないだろうし。で、そんな彼らが『全くの外敵』とまともに戦えたと思う？」

つまりは、侵略者であり略奪者。八百長もくそもない、下手をしたら言葉も通じない外敵。負けたら滅ぼされる、そんな相手。

さて、傭兵は役に立つのだろうか？

レーティングゲームのトッププランカーは役に立ったのだろうか。
「サーゼクス、僕は最初から彼らになんの期待もしていないし、彼らだってそれを裏切りはしなかった。彼らは何の役にも立たないし、役に立ちたいと思ったこともないだろうさ」
辛辣、過激、暴論。しかし、誰も否定できない。
王の駒云々以前に、民衆でさえ知っていることである。レーティングゲームの参加者が貴族である以上、どうあがいても家と家の関係で勝敗が左右されるのだと。
「彼は、サーゼクスとアジュカがレーティングゲームで戦えば、見たいという客が殺到すると言っていたね。確かにそうかもしれないけど、少なくとも僕はどっちが勝つのかだけは分かっている。分かっているから、見たいとは思わないね」
この場に座っている、超越者二人。
既に政務から手を放している二人は、作業に戻っているファルビウムを見て呆然としていた。
「勝つのはアジュカだ。なぜならば、サーゼクスがアジュカに勝つということはアジュカの頭を吹き飛ばすことを意味しているからだ」
サーゼクスの魔力はバアルの滅びの魔力。アジュカの能力は覇軍の方程式というこの世のエネルギーを操作する能力。
どちらが勝つのかはわからないが、勝つという結果ははっきりしている。
余りにも攻撃的過ぎる滅びの魔力は、単純に手加減ができないのである。
「なにせ、リタイアシステムがあると言っても、単純に安全圏へ離脱させるだけのことだ。頭部が吹き飛んだら蘇生も何もあったものじゃない。案外、君の滅びの魔力なら魂魄ごと吹き飛ばすかもしれないしね。そうなったら幽世の聖杯でも復活できるかどうか」
それは、確かにそうだった。それが試合である以上、まさかサーゼクスはアジュカを殺すわけにはいかないのだ。
「それはつまり、レーティングゲームのプレイヤーに必要なものが何なのかを示している。彼らに必要なのはある程度『手加減』ができる

ことだ。君の妹はタイトルを欲しがっていたと思うけど、極めて困難だろうね、なにせ滅びの魔力は手加減とはほど遠いのだから」

というよりもだ、そもそもそんなのと誰が戦いたがるのであろうか。

レーティングゲームとは試合である。例えば悪魔の弱点である雷光だとか、聖剣だとか、神滅具だとか、魔王さえも超える超火力だとか、そんなものと誰が戦いたがるのだろうか。

「つまりだ、殺傷能力を彼らは追い求めていないのさ。で、そんな彼らが今回役に立ったのかい？」

当然と言えば当然だ。レーティングゲームは娯楽であり、プレイヤーにとっては仕事である。彼らが真剣にレーティングゲームを追及するのであれば、如何に危険な攻撃を出さずに相手に敗北を認めさせるかになる。

「そういう意味では、二重三重の意味でディハウザー君が皇帝なのも納得だろう？　なにせ彼の魔力は『無価値』だ。この上なく完璧に、相手を無力化させるのに向いている」

もちろん、これっぽっちも評価していない。ただ、レーティングゲームという枠の中では便利だね、と褒めているだけだ。

「さらに言えば、彼がベリアルなのも大きい。もし仮に彼が同じぐらい強かったとしても、他の家の傍流だったり、或いは混血悪魔だったならば、まあ同じ地位は認められなかっただろうね」

家と家の関係というのであれば、ベリアルはさぞ手ごろだっただろう。

なにせ、老人たちにしても満足のいく皇帝だったのだから。

「で、黄金風船を最も多く撃墜したのは君だ。そりゃそうだろうね、実戦で大事なのは、特に『悪魔以外』と戦うならば、邪龍だとか魔獣のように『死ににくい』相手を殺しつくすには過剰なぐらいの殺傷能力が必要なんだから。つまり、レーティングゲームのプレイヤーにとっては苦手なことで、君にとっては大得意なことということさ。ね、何かの役に立つと思うことが間違っているだろう？」

仕方がないと言えば仕方がない。レーティングゲームで上を目指

すのであれば、レーティングゲームに適応している方が勝つのは当然だった。レーティングゲームでは使えないような『最強の必殺技』など、習得するなど時間の無駄以外の何物でもない。

結局のところ、ルールがあるスポーツならばそのルールにのっとって戦えるほうが強いのは当たり前なのだ。

もちろん、実戦ではルールを守ってくれることを期待するのは阿呆以外の何物でもない。

「やあやあ我こそは！　ってのは鎌倉武士の時代だっけ？　元寇にはクソの役にも立たなかったってアレ。そりゃそうだよね、外国人なんだし」

「……辛辣だな」

「事実だよ。彼らはおじいちゃんたちの遊びの相手さ。国民の皆だって大喜びだっただろ？　彼らは政治的にも経済的にも大人気の『スポーツ選手』さ。そんな彼らに『軍事的価値』まで期待するのは余りにも酷というものだろう？」

それはそうだったのだろう。少なくとも、レーティングゲームのトップランカーたちはちっとも自分たちが『軍事的価値』があるとは思っていなかった。

だからこそ本来の歴史ではディハウザーは態々国家を裏切ってまで『スポーツ』の不正を告白し、国家が危機に瀕した時ビィディゼは真っ先に保身に走ったのだから。

そんな輩が、有事に役立つと考える方が大問題であろう。

「っていうかさ、ソーナちゃんもピントのずれたことしているよね。レーティングゲームで好成績を作ったら出世できるっていうのは確かに狭い門だ。実質的には転生悪魔や混血悪魔の為のシステムで、現状下級悪魔には望むべくもない。それはつまり、政治的には下級悪魔を出世させるつもりがないって、どうしてわかってくれないんだろうね」

それも、戦略家からすればわけのわからないことだ。はっきり言って、現政権は下級悪魔を出世させるつもりなど毛頭ないのである。ないからこそ、下級悪魔が参加できないレーティングゲームのみを出世

の門としたのだから。
　つまり、現状の制度で下級悪魔に出世の道がないのは当たり前なのである。そのための制度なのだから。彼女が下級悪魔を出世させたいのであれば、制度そのものを新しく追加するべきなのであろう。もちろん、それが結果として国家全体の為になるのかといえば疑問だが。
「……では、どんな者ならば彼に対抗できた？」
「二種類いる。片方は『無価値なほど強い』タイプ、もう片方は『過剰なほど便利』なタイプ」
　つまりは、無価値と価値。その両ベクトルを徹底的に追求した者だけが、彼の怪物に対抗しうるのであろう。
　つまりは、戦略を破綻させるほど圧倒的な個の暴力、戦闘能力。
　あるいは、戦略面において仮面の男を上回る『システム』か。
「例えばだ、サーゼクス。君でも勝ち目はあった」
　サーゼクス・ルシファー、或いはサーゼクス・グレモリー。超越者と呼ばれ、最強の悪魔とされ、そもそも悪魔なのかわからない滅びの魔力の塊。
　しかし、そんな彼でも、強さの極みであろうサーゼクスであっても、彼の徹底的な悪意には対抗できなかった。
　それはつまり、強さが足りなかったということだろう。
「君が、強くなるために人生を奉げていれば別だった。魔王になって政務に勤しんだり、父親になって家族にサービスしたり、貴族として親戚付き合いをしたり、そんな無駄なことをしたら駄目だ。全部を捨てなければならない」
　しかし、ファルビウムは語る。サーゼクスは確かに強い。生まれながらに最強の生命体なのであろう。しかし、その程度ではだめなのだ。
　そんな、生まれ持った力で満足しているようだから駄目なのだ。強いだけでは解決できないのではない。強さが足りないから解決できなかっただけなのだ。
「全部だ、君が人生を全て強くなるために奉げていれば勝ち目はあっ

た。魔王の十倍の魔力、シヴァやインドラと互角の強さ。その程度に甘んじているから後れを取ったんだ。足りない、足りなすぎる。黄金風船の時だって、君が魔王の数万倍強ければ問題はなかったはずだ。そうだろう？」

まあ、そうなのかもしれない。

仮に、サーゼクスが魔王の数万倍、つまり今の数千倍強ければ黄金風船が冥界の空を覆い尽くしたとしても、鎧袖一触できたならば問題なかっただろう。

オーフィスやグレートレッドの如く、二番目に強い輩が比較対象にならないほどに強ければ、それならば問題はなかったのだ。

しかし、それは可能なのだろうか。一体、どんなメンタルの持ち主ならば、そんな過酷な修行に身を置けるのであろうか。

なんの目的もなく、ただ己を鍛え続けることができるのだろうか。

「強さを手段ではなく、目的とする狂人。この世で一番強い、レーティングゲームのチャンピオンになりたい、神滅具を持っている、最強の聖剣を使いこなしている、滅びの魔力の結晶体。その程度の強さでは満足できない、人生全部振りの化け物ならば勝ち目はあるだろうね」

まあ、そうなのだろう。誰もが納得してしまう。

確かにサーゼクスは最強だが、別に理論値ではない。彼は生まれながらに最強だが、その強さを価値がある程度で収めている。この世界で最強とされる面々と同水準程度であり、そこから先を目指してはいないのだ。

そして、この場の面々は詳しくは知らないが、一人だけ該当者が存在する。

魔王の血を継ぎ、その中でも優れた才能を持ち、白龍皇の光翼さえ所持し、それでもなお力を求める少年が。

若年故に未だ魔王クラスにさえ到達していないが、彼がもう少し早く生まれていれば、勝算はあった。

そして、今でも特殊な状況故に勝算があった。そして、当然仮面の

男もそれは把握している。
「ねー、じゃあ過剰なほど便利ってどんな感じ？」
「こっちはアジュカを極端にしたタイプだ。といってもエネルギーを操作するとかそんなことはどうでもいい。大事なのは観測する能力だ」
さらりと、アジュカのもつ頂上に位置する能力を否定した。そんなものは無駄だと言い切った。
「冥界で起きていることを、もしくは世界で起きていることを全て、四六時中観測し続けることができるのならば。もしくは自由自在に未来を予知することができるのならば、そこには強さすら必要ないだろうね。なにせ、彼がどこにいるのかわかれば、彼が何を考えているのかわかれば、彼の弱点を認識できるのならば、彼がいつどこに現れるのか把握していれば、『攻略本』を持っているかのように立ち回れるならば、世界の全てを認識できるのであれば、戦うという土俵に立つことなく世界を管理できるだろうね。そんなシステムがあるのならば、仮面の男さえ駆除できるだろう」
三人は、先ほど以上に絶句した。
まあそうなのかもしれない。空間跳躍能力を持っていたとしても『予知能力』を持っているなり『広範囲の空間異常を観測できる能力』を持っているならば、その場所にサーゼクスを配置して、出てきた瞬間に攻撃させてしまえばいいのだ。
如何に仮面の男が優れていると言っても、流石に空間さえもえぐり取るサーゼクスに勝てるかは怪しいだろう。
「それは、無理だろう……」
ある意味、同じタイプであるアジュカは絶句しながらそうつぶやいた。
そう、そんなことができるわけがない。世界の全てを観測できる能力があったとしても、或いはそんな能力を作り上げることができたとしても、それを常に発動させ続けるなど神経が持たない。三人は知っている、この世界が美しくないもので満ちているのだと。それを余すことなく認識し続けるなど、常に強さだけを追い求める以上に神経が

もたない。
　予知能力ならばそんなことはないのかもしれないが、そもそも予知能力は極めて希少である。それに、そこまで融通が利くものではない。欲した未来の情報を好きなだけ得られるなど、神滅具以上に壊れて優秀だ。
「そう、無理だね。なにせ仮にそれができる奴が居たとして、或いはそれができる仕組みを持っている奴が居たとしても、政府レベルで運用するのは不可能だ。余りにも有用が過ぎる」
　そう、それは世界を支配するための力だ。有効性を極めすぎている。そこまでいかなければ仮面の男には対抗できないが、それを政府が運用するには余りにも度を超えている。
　まさに、ディストピアという他ない。この世界の全てを観測できる輩がこの世界にいるのだとしたら、うっかり屁をこくことだってできないだろう。その能力を有効に使えば使うほど、個人の尊厳は極限まで失われる。
　特に、貴族が嫌がるだろう。何から何まで見通す能力の所持者など、生かしては置けない。
「もしも、そんなことができる上に社会で生きていくことができるのだとしたら、当人がある程度の実力を持っている場合だろうね。もちろん、ある程度の処世術は必要だろうけど、それでも弱ければ潰されるだろう。もしくは、逆らう気が失せるほど決定的な権力を持っている場合だ。天界でいうなら『主』だね、天使と神は元々そんな感じだったと思うし、そもそも種族が違う。僕らの場合なら……ソロモン王にご復活願うしかないな、こっちも元々そんな能力を持っていたらしいし」
　つまりは、どちらも不可能ということであろう。
　確かに、主であれソロモン王であれ、天使も悪魔も逆らうことなどできない相手だ。
　そんな壊れた能力を持っていたとしても反論などできないし、元々そうした能力を持っているはずだ。
「そこまでではないと、仮面の男には対抗できないのか」

「だって、現にそうじゃないか。いいかい、本来仮面の男は絶望的なはずなんだ。だって三陣営を敵に回して、他からも狙われている、味方は一切いない。なのに、この場の誰も彼に勝てると思っていない。少なくともこの時点では、桁違いの人間力を持った化物だよ」

もう何年かすれば、過ちを犯すのかもしれない。或いは対抗できる傑物が現れるのかもしれない。もしくは、自然と落ち着くのかもしれない。

しかし、今この時点の仮面の男は、余りにも壊れて強かった。

「……ふむ」

と、ここで聞き手に徹していたアジュカは何かを思いついたのか、にやりと笑った。

「ファルビウム、今お前は『天使と神ではそもそも種族が違う』と言い切ったな」

「そうだろう」

そう、天使と神は根本的に違う。なにせ、唯一神なのだから。

神は天使を生み出すし、天使は主を父と仰いでいる。しかし、天使が成長したら神になるとか、そんなことは一切ないのだ。

例えるなら、人間とロボットぐらい違う。

創造主と被創造物では、天と地ほどに開きがある。だからこそ、創造主を失った天界は大きく傾いているのだから。

「なあ、ファルビウム。前魔王は子を残すことで自分の死に備えた。まあ、全部失敗したが、少なくとも彼らは自分が死ぬかもしれないと思っていた」

「そうだね、だからこそ彼らは差し違える覚悟で戦えた。一旦主神を殺してしまえば、自動的に悪魔が勝つと思っていたっぽいよね」

「ああ、そうだ。なにせ神が居れば天使は生まれるが、いなくなれば天使は増えず、堕天使も増えなくなるのだからな」

魔王と悪魔は同じ生き物である。というよりも、悪魔の中で優れたものが魔王というイスに座っているだけのことなのだ。

「何が言いたいの？」

「なぜ神は後継者問題を解決しようとしていなかった？」

「無理だったからじゃないの？」
「そうかもしれん。しかし、そうではないのかもしれない」
天才であるアジュカは、一つの推論に到達していた。
主は死んだ、それは事実だ。そして、後継者は不在である。それも事実だ。
だが、もしも、後継者はこれから生まれるのだとしたら。
まだ生まれていないというだけで、これから生まれうるのだとしたら？
「そう、神器だ。もしかしたら、アレには『神の後継者』に関する何かがあるんじゃないか？」
もしも、聖書の神が自分の死後に備えて何かを残したのであれば、それは神器に他ならない。
「楽しみが増えたな……神器の根幹となるシステムを彼らが暴くならば、それは聖書の神の意図を読み明かすことになるのかもしれない」
技術者アジュカは、敗北後の辛酸に満ちた事後処理を、今から楽しみにして笑っていた。
「……だとしたら、それは私たち悪魔にも関係があるのだろうか」
とっくに死んだ神が、今更ながら魔王の前に、あるいは仮面の男の前にも立ちふさがろうとしていた。

「あのさぁ、アスモデウス様～～悩めるおじいちゃんの相談にのってよ～～」

疲れた顔のリゼヴィムは、迷惑そうな顔をしているファルビウムの部屋へ訪れていた。

言うまでもなく、信頼できる周囲の大人へ自分の人生について聞きたかったのだ。

もちろん、リゼヴィムに比べてファルビウムは遥かに年下なのだが。

「相談って……まあミカエルからの報告待ちだから別にいいけどさ」

部屋に案内されたリゼヴィムは、どかりとソファーの上に座った。

その正面に座ったファルビウムは、とりあえず水をコップに入れて渡す。本来はワインの一つも出すべきなのだろうが、今回は彼がそんなことを望んでいないだろうと察していたのだ。

「あのさぁ、バアルのじいちゃんに酷いこと言っちゃったんだよ……」

「ああ、老害がいつまでものさばるなとか？」

「そー、そんな感じ。やっぱりアスモデウス様もそう思ってたの？」

「別に？　実際の所そこまで間違っているわけでもないしね」

何から何まで正しい、というわけではない。しかし、正しい面も確かにあったし、そこまで煙たがるのは間違っているとも思っていた。

言ってしまえば、悪魔とは貴族である、そんな考えも下級悪魔にさえ浸透している文化のようなものだ。

例えば、魔龍聖タンニーンという最上級悪魔がいる。彼は確かに転生悪魔として龍王をやめているが、それでも純粋に悪魔かと言えばそれは否であろう。

些か極論が過ぎるが、四大魔王が転生悪魔や下級悪魔からの成り上がりで埋め尽くされるというのは、古参の上級悪魔とていやがるだろうが下級悪魔とて望んでいないはずである。

貴族の血を残す悪魔こそ、真の悪魔である。それは一種の信仰であり、守られるべき文化だ。

なんでもかんでも合理的にすればいいというものではないし、そもそも摩擦が大きすぎるだろう。そういう意味では、古参の悪魔のまとめ役である彼の老人も老害とは言い切れないのだ。害がないわけではないのだが。

「仮に、サーゼクスが僕の思う通りに動いていたとして、それに君が参加してくれたとして、暗殺合戦になるか最悪もう一度内戦になっていただろうね」

何事にも限度というものはあるが、そういう意味では別に間違っていたわけではない。サーゼクスは改革派ではあったが、強硬な独裁者になったわけではない。そんな彼が中心になったからこそ、表向きであれ平穏な今日の悪魔はあるのだ。

「甘いとか言わねーの？」

「もちろん甘いさ。かと言って、辛くしたからいいってもんでもない。正しいんだからこうしろ、なんてのはもっと面倒だよ」

どちらかといえば、仮面の男が都合の悪すぎる存在なのだ。

例えばどんな問題でも解決してくれる、古参悪魔に忠誠を誓いつつ、強く、且つ幸運に愛された存在を期待するのは間違いだ。

しかし、こうも狙いすまして政府に不都合な存在が現れるとは、流石に想定外である。こんなものが現れるとわかっていても、結局なんの手も打てなかっただろう。

「とはいえだ、君が罪悪感を感じるのもお門違いだよ。実際君には失踪してもらうのが一番都合がよかったんだ」

「でもさぁ、ぶっちゃけ……僕ちゃんがもっとしっかりしてたらさ……こんなことにならなかったカモじゃん」

「そんなこと言ったらキリがないじゃん。実際君にそんな能力はなかったんだしさ」

と、へこむことをいうファルビウム。つまり、ルシファーの息子としての価値だけではなく、最古の悪魔さえも従えるほどのカリスマや指導力をもっていればいい。そういう話なのだろう。

だが、それはどう考えてもハードルが高すぎる。おそらく、サーゼクスにもアジュカにも、その立場に立つことは不可能だ。

「……仮面のあんちゃんならそれができたのかな？」
「無理」
ある種、仮面の男を神聖視し始めていたリゼヴィムに、ファルビウムは残酷に言い切った。
そう、仮面の男は致命的なほど魔王に向いていない。悪魔ではないとか、そういう問題ではないのだ。
「彼の行動は極端が過ぎる。彼の理念がどれだけまっとうでも、彼の能力がどれだけ優れていても、彼の奇行は余りにも異端が過ぎる」
仮面の男は無能以外のあらゆる悪を網羅している。しかし、有能であるからと言って、ああも言動が無茶苦茶な男に誰が剣を預けることができるというのだろうか。
「王というものは、確かに慕われているだけでは駄目だ。だが、全く慕われていなければ、民意を得られない。彼自身よくわかっているだろうけど、何を考えているのかよくわからない有能すぎる怪物なんて、無能な一般人よりもたちが悪い。どれだけ愛を語っても、語り掛けられる範囲でしか通じない愛でしかない。きっと、彼の保護している面々は、彼の心中を知っても知らなくても、彼におびえ続けるんだろうさ」
深い付き合いがあれば別なのかもしれない。寝食を共にしたり、夢を語り合えばまた別かもしれない。しかし、それが国民全員や有力者全員にできるわけもない。
正体不明の怪物である彼のやり方では、国家という大多数を統べることはできない。
「いっちゃあなんだけど、そういう意味でもサーゼクスは適していた。彼は分かりやすく甘いからね。肉体が異常でも理解できる行動原理でしか動かないし、ある程度汚れ仕事もこなせた。だから、アジュカじゃなくてサーゼクスがルシファーになったんだ」
「なるへそね……確かに、アジュカっちはそういうところがあるか」
「必ずしも王本人が有能である必要はないよ。そういう政務は眷属に任せてもいいんだしさ」
と、そこでリゼヴィムは話題を切り替えることにした。

「そういやさ、他にどんな作戦を想定してたの？」
そう、仮面の男である。彼は今回天界に攻め込むという選択肢を選んだ。
それ自体はファルビウムも想定していたが、他はどうだったのか、ファルビウムは他にどんな可能性を模索していたのか。
「ん～～例えば、君だ。リゼヴィム、君に接触していた可能性もあった」
そう言って、銀色の髪の老人を指さした。
「オレ？」
「ああ、そうだ。君と接触して、君を魔王に仕立て上げる可能性が本命だった」
それは、アジュカがリゼヴィムに接触できたことで解消された。アジュカがその気になれば、リゼヴィムも仮面の男も殺せたからである。
「彼は悪魔が嫌いなんじゃない。彼は僕ら魔王が嫌いなんだ。だから……」
「俺っちを魔王に？」
「そーさ。自分たちの身柄を君に差し出して、君の手柄にする。そして君はこう宣言するんだ『この犯罪者は私が捕まえた！　私は旧体制の限界を感じて身を退いたが、此度の現政権の醜態を見て考えを改めた。私は現魔王の敷いた法にのっとって、解散総選挙を要求する。そして、当然のように出馬を表明する！　国民よ、どうか賢明な判断を！』とか言ってさ」
うわあ、と声を出すこともなくリゼヴィムは顔をゆがめた。
それは確かに最高に最悪な魔王への嫌がらせである。
もしもそんな手段を実行に移したならば、現政権は大ピンチである。リゼヴィムは旧魔王派だが、裏を返せば王位に関して正当性がある。別に、かつての内戦で現魔王と全面的に衝突したわけでもない。であれば、正式に選挙へ出馬すれば誰も咎めることはできない。
例え公約が、この上なく過激なものであったとしても。
「なるへそね、その上で選挙の公約で『停戦を解除し全面戦争に乗り出

す！』とか言えばいいわけだ」
「その通り。極めて民主的に僕らから魔王の座を君は奪うだろうね。他の椅子三つも、レーティングゲームのプレイヤーから選べばいい。それで問題解決だ」
そうなれば、サーゼクスはさぞや困ったことだろう。水面下でまとめようとしていた和平を根こそぎ否定され、自分が決めた制度の元に全面戦争がはじまるのだから。
しかも、彼自身が魔王の名のもとに先兵として投入される可能性さえあった。
「そうしたらどーすんだろーね。まさか、クーデターを起こしてまで平和路線にしたのに、自分で決めた制度に則って政権を乗っ取られたらさ。まさか、もう一回クーデターすんのかな」
「どんだけクーデターすんのかって話だよな。暴力的にもほどがあるぜ」
選挙だの民主主義だの議会政治だのと言っても、人気が全てである。皮肉な話だが、一切人気を気にせずに政治を行えるのは、独裁制ぐらいのものであろう。
そして、リゼヴィムには国民の期待が寄せられるであろうし、現政権は無能を晒した後故に失望は避けられない。
なによりも、もう一度内戦をすれば今度こそ悪魔は滅ぶ。
「なんともアレなことに、その場合は他の神話への侵攻も再開されるだろうね。しかも勝算がある。なにせこっちにはアジュカとサーゼクスがいる上に、二天龍まで復活させられるんだから」
内戦をすれば滅ぶ以上、サーゼクスもアジュカも『新政権』に従わざるを得ない。そして、二天龍とアジュカ、サーゼクス。これに黄金風船などが加われば、インド神話さえも一蹴できるだろう。
「景気よく侵略していくんだろうね。人間界への影響もばっちりフォローしつつ、何一つ悪魔に被害を与えることなく、僕らを兵力として使いつぶす。果たしてサーゼクスは耐えられるかどうか？」
「くあああ……それは俺も協力したかもな」
恐るべき性格の悪さである。手段が正当なのだから、尚のことで

あった。
　そして、その戦場でルシファーらしく振る舞えば、さぞ老人たちを魅了するだろう。その老人たちは笑いながら心酔しつつ命を散らすのだ。それはそれで、見てみたかったかもしれない。
「でもさ、なんで仮面の男はそうしなかったんだ？　そっちの方が面白そうだぜ？」
「おそらくだが……彼は君の居場所を知らなかった、あるいは知っている相手を知らなかったんじゃないかな」
　それは、仮面の男の正体に踏み込む推論だった。
「いいかい、最初の事件に関してはおかしいところはない。神滅具を集めていた研究所が赤龍帝や魔獣創造を捕まえようとするのは当然だし、獅子王だって同じだ。吸血鬼が聖杯を所持していることだって、彼の趣味である人外を犯すことを思えば事前に知っていたとしてもおかしくない」
　ドラゴンは力を呼ぶ。そういう意味では、仮面の男の元に神滅具がそろったのも運命めいたものがあるのかもしれない。というよりも、仮面の男がそんなものを必要に思ったかといえばまず疑問だった。
「吸血鬼の領地だって一緒さ。吸血鬼を調べればわかるし、何やら特別な目を持つ彼なら結界を視認できたかもしれない。なによりも、復讐対象に関しては研究所の職員から直接聞きだせばいいし、目録だってあるだろう。遺族を保護した施設に関しても同様だ。そもそも彼は遺族を空間転移させた先に先回りすることだってできただろう」
　獅子王の少女の復讐に関しては、始まった時点で既に必要な材料は揃っていた。
　故に、奇縁と言えば奇縁だが、ありえないとはいいきれない。
「だが、黄金風船から二天龍に関しては話が別だ。どう考えてもありえない」
　鋭い目で、リゼヴィムへ説明する眼にはなにがしかの諦めが宿っていた。自分たちの敵が、どれほど途方もないモノなのか。彼は言っても意味がないと知りながら語ろうとしていた。
「彼は抑止力を欲した。それゆえに二天龍の復活をもくろんだ。その

二天龍を暴れさせる対象として、因縁の有る天界を選んだ。そこまではいい。しかし、白龍皇の所持者の情報は？　どこにいるどんな奴だ？　果たして説得は可能なのか？　他の神滅具に関しては？　システムへ干渉するための聖槍や十字架は、彼の結界内部に侵入できるであろう絶霧は？　それらは誰が持っていて、どこに所属しているのか？　その組織は、誰から援助を受けているのか？　それが最初の段階からわからなければ、とてもではないがこんな作戦は立てられない」

「つまり、誰がその情報を持っていたのか、誰からもらったのかって話？」

「そうだ、そしてその情報を全部持っていたのが……」

「誰だよ、そんな都合のいい奴は」

リゼヴィムの疑問ももっともだ。なにせ、ヴァーリの祖父であるリゼヴィムをして、白龍皇を宿す彼がどこにいるのか知らなかったのだ。

「カテレアだ。彼女は何もかも知っているはずだった。そう、旧魔王派として禍の団に所属していた彼女は、同じく旧魔王の血を継ぐ君の孫の所在も知っていたし、禍の団の中でも英雄派を名乗る輩が聖槍と絶霧を、魔法使いたちが十字架を持っていることを知っていた。なによりも禍の団のスポンサーを知っている。絶対に」

下っ端ならば知らないことでも、幹部に位置するであろう彼女ならば知っていてもおかしくはない。いや、知っていなければならない。

つまり、仮面の男が黄金風船以降に悪魔へ接触した最初の段階で、既に彼は必要な情報を全て得ることができたのだ。

「ほら、おかしいだろう？」

「……なにが？」

なにも間違っていない。カテレアはそれを知っていて当然だった。彼女が禍の団に所属していることを知っているのならば、何もかもがスマートだ。

「なんで真っ先に彼女を盗んだんだ？」

そう、カテレアがその情報を持っていることは確かだ。不自然ではない。しかし、カテレアを真っ先に拉致監禁した仮面の男の行動には迷いがなさすぎる。

「まるで、あらかじめ知っていた情報の確認をしたようじゃないか？」

「……つまり、別の情報源があるってことか？」

「違う、それは絶対にありえない。いいかい、リゼヴィム。どう考えたっておかしいんだ。彼は嫌というほど情報の重要性を理解している。それによって、僕らは常に後れを取っていた。そんな彼が『自分の情報源』が知られることを恐れないわけがない」

仮に、リゼヴィムが情報源だったとしよう。白龍皇の光翼の所持者に関しては、天才的な才能を持つルシファーの血を継ぐ混血悪魔だということしか知らないだろう。どこにいるのか、そもそも生きているのかさえ知らないはずだ。

では、アザゼルあたりを洗脳しているとしたら？　その場合は禍の団に関しての細かい情報は分からないはずだ。

そうやって、情報源が知っていることと知りえないことを選別して、絞り込むことができるはずなのだ。

にも関わらず、仮面の男はわざとらしいほどにそれを警戒していない。最短の選択肢しか選んでいない。

「気づいてないだけで、他の勢力にも手を出してるんじゃ？」

「それはない。彼がいくら優れた洗脳能力を持っているとしても、継続的に情報源にするとなると、不確定要素が多すぎる。完全に人間が相手ならともかく、こっちは神や悪魔だ。洗脳の原理がわからなくても、精神に異常があれば調べる方法はあるはずだ、と彼だって思っている」

洗脳能力を持っているのであれば、敵の中に洗脳したスパイを送り込み、そのまま内部から食い荒らすことを誰もが考えるだろう。だが、それは悪手だ。洗脳に関して調べることができるのであれば、細かく調べれば必ずわかる。

仮面の男は捕まえた状況以外では洗脳をしていない。つまり、どう考えても洗脳されているとわかり切っている状況でしかそれを使わ

ないのだ。
「彼が能力を過信しているのならそれもありえた。不用心ならそれもアリだ。だけど今の彼がそれを警戒していないなんてありえない」
「……じゃあ、他の勢力が彼に手を貸しているんじゃ？」
「いや、それだとダメだ。今回の作戦のキモは、誰もが自分の意志で動くことにある。自分の意志で動いているのだと、そう思い込んでいなければ成立しない。実際には彼の思考誘導によるものだ、故に疑わせてもいけない」
はっきりいって、禍の団という烏合の衆が、派閥外の連中を信用しているとは思えない。彼らのスポンサーならばなおのことだ。だからこそ、この作戦は成立するのである。
「つまり、正真正銘、彼は他の神話には手出しをしていない」
「……？」
そう、それが不可解なのだ。なぜ彼は、カテレアを真っ先に捕まえたのか。
仮に彼女が欲するすべての情報を持っているとしても、どうしてそれを知っていたのか。
その情報源が明らかになると、どうして疑問にも思わないのか。
そして、仮面の男とは何者なのだ。
「つまり、彼はあらかじめ、やや不確かで曖昧ながら一方的にこの世界のことを知っていたんだ。まるで僕ら悪魔が人間界を知っているようにね」
「するってぇと、そいつはソーナちゃんとかリアスちゃんとかと同じで、こっちが全然知らない世界からこっちへ遊びに来たってか？」
そう、まるで歴史の教科書か、観光雑誌でも読んだかのように、この世界のことを知っていた。そういう世界から降りてきた。そうなのだとしたら、情報源が明らかになることを恐れていない理由も説明

がつく。
　知らない情報があるのも納得だ。本に書いていないことがあるのならば、知っているはずがない。
「ああ、そうだ。そして、おそらく彼は帰ることができない。それが彼の絶望のはずだ」
「帰れない……」
「どんな理由があるのかわからない。しかし、帰れるのであれば、彼がああも『選択肢』にこだわる理由がわからない」
　リアス・グレモリーもソーナ・シトリーも、書物や伝聞で日本のことを知っていた。それゆえにそこへ留学したのだ。
　だが、帰ろうと思えばいつでも帰れる。現に二人は里帰りもするし、リアスに関しては全面的に撤退もしている。
　だが、帰れないとしたら。思っていた場所と違っても、帰ることができなかったとしたら。
　不可逆的な選択肢を、致命的に間違えてしまったのであれば。
「彼は悔いているんだろうね。自分で決められる選択肢がありながら、どうしようもなく間違えてしまった自分自身を」
「く、くだらねぇ～～～～」
「ああ、そうだ。くだらないし、いい迷惑だ。だからこそ、彼は彼なりに自制してきたんだ」
　そして、彼の保護したこの世界の住人が、この世界を否定したがっている。この世界の住人がそれを選ぼうとしているのだ。であれば、彼は錦の旗を得た。
　彼は知っている情報の裏を取りつつ、誤差を調整し、誰にもたどり着けないエンディングを目指している。
「だが、そこが僕らの希望だ。彼はきっと、自分を止めることができる。美学のある彼ならば、降伏した僕らを受け入れてくれるだろう」
「心のどこかで、引け目があるからか……」
「そうだ。彼はこの世界そのものへの干渉は積極的ではない。いや、消極的であろうとしている。ならば、そこを突くのが僕の仕事だ」
　おそらく、彼が読んだ本ではソーナやリアスが特別に取り上げられ

ていたのではないのだろうか。そして、彼が語った通り一方的に懸想していたのだろう。

だからこそ、彼にとって数少ない価値のある誰かなのだ。彼女たち以外では駄目なのだろう。そして、自由意思を尊重する彼が、嫌々結婚しようとする少女を受け入れるわけがない。

彼が無自覚に口説き落としたソーナが、自分で嫁ぐからこそ、彼にとって爆弾となるのだ。あとは、芸術家気質の彼を一発で口説き落とすプロポーズの言葉を彼女が言えば、万事解決だろう。

問題は、一旦は納得したセラフォルーが土壇場でぐずる可能性があるということだ。

「……はぁ～～～アスモデウス様はパネェわ」

「どっちかというと仮面の男を褒めるべきだね。仮に彼と同じ本を読んだ誰かが居ても、同じことを思いついたとは到底思えない……お」

ファルビウムの前に、通信用の魔法陣が浮かび上がった。

通信先は、当然のように天界のミカエルである。

『ファルビウム……貴方の言う通りでした』

「そうか、じゃあ手筈通りに頼むよ。できるだけ早くにね、そっちの方が向こうが不自然に思わない」

本を読んでいなければ知りえない情報が、またも明らかになっていった。

輝きは君の中に　5

仮面の男から解放された人質の中には、当然のように堕天使の幹部であるバラキエルも含まれていた。

本来堕天使側では最高戦力と呼んで差し支えない彼だが、今回の第二次天龍戦争では戦力に数えることはできない。

元々負けるつもりの戦争であるということもあるが、仮面の男に洗脳されている『かもしれない』彼を、三陣営の戦力が入り混じる戦場に置くことはできない。

無駄に不信を買うのは、余りにも致命的である。取り除ける諍いは極力避けなければならない。

「父さま……」

念のためではあるが、雷光を封印する拘束具につながれ、伝染する瞳術を警戒して目隠しをされている。余りにも、見るも無残なバラキエル。

さながら罪人の様に拘束されている彼へ、透明な結界越しに語り掛けるのは彼の実子であり、転生悪魔姫島朱乃である。

母親の死によって袂を分かった二人は、互いがどこにいるのかわかっていても、会うことはなかった。

そして、聖書の神話が存亡の危機に立った時点で、ようやく会うことが許されていた。

「朱乃か……まだ私を父と呼んでくれるのだな」

「……最後になるかもしれなかったので」

相手に顔が見えないということもあって、朱乃は完全に涙顔を隠さなかった。声色にはそれが滲んでいたが、それでもそれが彼女の精一杯だった。

縁を切ったとはいえ、実の父である。犯罪者の乗っ取ったアグレアスごと、何処かに消えたと知らされて、それで平静が保てるわけがない。

「……こんなことを言うのは弱気の証だが……すまない、これから悪魔は受難の時代だ。私はお前に良い未来を残せなかった」

それは、父親であると同時に堕天使幹部としての言葉だった。
「アザゼルからいろいろ臭わされたが、結局悪魔はどうにもならなくなる。天界も相当のダメージを受けるが、それでもお前たちが一番深刻だろう。堕天使である我らが被害が一番少ないというのが申し訳ない」
「娘に会って……最初に言うことがそれですか！」
もっと、父親としての言葉が欲しかった。もちろん、実際にそういわれれば父親面するなと叫ぶのであろうが、それでもそう言ってほしかった。
「……私は、いつもお前の無事を祈っていた。朱璃のことも忘れたことはない」
「今更……今更なんですか！」

「……こんな形で朱乃が父親と会うことになるなんてね」
自分の眷属が生き別れた父親と再会する。それはとても良いことだった。少なくとも、多くの不幸が蔓延しているこの状況では細やかな救いだった。
「ええ、彼も気にしていました……まったく、支離滅裂な話です」
リアス・グレモリーとソーナ・シトリー。共に仮面の男と接触し、その圧力を受けた魔王の妹たち。
本来の歴史ではどうなったかわからないが、今この世界では彼女たちはただの『将来有望な次期当主』でしかなく、『悪魔の未来を担う主戦力』たりえなかった。当然であろう、と誰かならば切って捨てるはずだ。
そもそも、百年と生きていない次期当主が、負けが決まり切っている戦場に飛び出すなど論外である。彼女たちの本来の立ち位置でいえば、後方で領地を守り、戦地で散ったものの遺志を継ぐことである。そして、それが今の彼女たちに期待されていることだった。いや、実はリアス一人なのだが。
「……ですが、それが心というものなのでしょうね。誰しもが矛盾を

抱えている」

才媛ソーナは、論理的ではない己の感情に参っていた。

今こうして彼の悪行の結果を一つ見た後だというのに、全くと言っていいほどに嫌悪感がわかない。

惚れた弱みとはよく言ったものだ。どうしても彼を嫌いになれない。

「そうね……朱乃も本当はもっと素直に喜びたいと思っているし、もっと甘えたいと思っているはずよ。だって、父親ですもの」

「はい……ですが、バラキエルを悪者にしないと、心の平静が保てないのも本当なんでしょうね」

面会に立ち会っている二人は、しかし朱乃の邪魔にならないように少し距離を置いて話し合っていた。

そして話しあいたいと思っていることも重要だった。

この二人は、兄や姉が魔王であるということもあって幼馴染だった。良くケンカもしたし、良く一緒に遊びもした。

学校も一緒だったし、レーティングゲームなどの夢も共通していた。

二人は、同じ道を歩くはずだった。今後もずっと、こんな関係が続くと疑っていなかった。

しかし、二人の関係は引き裂かれようとしている。そもそも、道そのものが崩壊しようとしている。悪魔そのものが、冥界そのものが、聖書の神話そのものが崩壊寸前である。

レーティングゲームだとか、上級悪魔だとか、次期当主だとか、領地だとか、地上の縄張りだとか、それらが一切合切崩壊しようとしている。

「仮面の男……か」

リアスはギャスパーに確認したが、彼も仮面の男の本名を知らない。別に素性を勘繰るわけではないが、ソーナは名前も知らない相手に惚れこんでしまった。ほとんど一目ぼれと言ってもいい。

悪魔を虚仮にし続けてきた男が、いよいよ全てをご破算にしようとしている。

ソーナがファルビウムから受けた説明は、ほとんど仮面の男の計画全てである。そして、その内容はソーナからリアスにも伝えてある。はっきり言って、余りにも推論が過ぎる。決定的な証拠はどこにもない。しかも、作戦そのものも相手の思考次第でいくらでもひっくり返りうる。

しかし、それでも誰も、仮面の男の作戦が失敗するとは思っていなかった。

「……ねえ、ソーナ。貴女は今幸せなの？」

「ええ、幸せよ……」

そう、それが苦しかった。

ソーナは待望していた。英雄を踏みにじり、神々をねじ伏せ、聖書の神話を叩きのめす仮面の男へ、求婚するその時を。

愛しいあの人へ、顔のないあの卑劣漢に身を奉げることに、この上ない喜びを感じていた。

悪魔全体が苦境にさらされるにもかかわらず、自分だけが幸せになってしまうのだ。

「冥界を救うためだとか、そんなことがどうでもよく思えてしまっているの……あの人に会いたいって、そう思ってしまっているの」

それが、論理的に考えてどれだけ不謹慎なことなのか、才女である彼女にはよくわかっている。彼がどれだけ悪魔に損害を与えたのか、尊い命を奪ったのか、重要拠点を奪ったのか、知っていながら惚れている。

しかし、その一方で政治的にはそれが肯定されている。それどころか、『ソーナが仮面の男に惚れていること』が事実上最後の生命線だった。

「そうなの……」

リアスは、記録映像を確認している。そして、納得もしてしまっていた。ああ、これはソーナには猛毒だったと。

あれは本当に、彼女にとってクリティカルだった。

ソーナを女性扱いせず、一人の個人として理想を肯定していた。欠片も性欲を感じさせず、口説き落とそうなどとは思ってもいなかっ

た。

ただ、語彙の全てを総動員して彼女を暖かく肯定していた。彼女の生徒のことを真剣に考えていた。

はっきり言って、これはリアスや他の周囲の悪魔も悪いのだ。

誰も、彼女の夢を真剣に検討していなかった。下級悪魔でもレーティングゲームのプレイヤーになれる学校を作りたい、その夢に対して大人たちの反応は二通りだ。常識的に考えて鼻で笑うか、彼女の味方になってサポートするか。

いずれにせよ、彼女の夢に対して真剣に考えてはいなかった。彼女自身の味方になろうとは思っても、彼女の行動を真剣に案じてはいなかった。

彼女の夢に助言を与えたり苦言を呈したりはしなかったのだ。具体的な指摘をせず、温かい目で見守ったり資金援助や場所の提供をするばかりだっただろう。

それで、上手くいくわけがないし、上手く行き続けられるわけがない。

仮面の男だけが、彼女の『理想の計画』そのものへ深く考えて真剣に対応したのだ。

無責任に肯定するのではなく、頭ごなしに否定するのではなく、筋道を立てて彼女が行うべき下準備と、順守すべき大義を語った。

それで、惚れるなという方が無理だ。

「ソーナ……私はね、少しほっとしているわ。私はどうしても彼が好きになれなかったから」

「ええ、そうでしょうね」

「……グレモリーは情愛の悪魔だというわ。きっと、貴女の夢を応援していたわ。でも、それが情愛の限界なのね。応援するだけでは、きっと貴女のためにならなかった」

「私もです……自分の優秀さを疑わず、己の正しさを疑わず、自らを肯定してくれる眷属に囲まれていい気になっていました」

二人は、感極まって互いの名前を連呼する父親と娘を観ながら、静かに肩を寄せ合っていた。

「……ソーナ。私たち、いい友達だったわね」
「ええ、これからもずっと友達です」
遠くない別れを確信する二人は、それでも友情を確認していた。

「そろそろあいつらもラスボス病に罹患する頃かね」
と、顔のない男は水分補給をしながらつぶやいた。当然相手は隣で茶を飲んでいるレオナルドである。
「あいつらって、ルネさんやヴァレリーさんですか？」
「ああ、これからできることが増えていくし、失敗をしつつも成功を重ねていくだろう。そうして、個人の限界を知っていくんだ。そして、どうしようもない壁にぶつかる。ただでさえ看護や介護には多くの負担がかかるってのに、アイツらはそもそもまだ子供だ。それも酷い目にあった子供だ。ぶっちゃけ、アイツらだってカウンセリングの対象であるべきなんだぞ」
「貴方が一番カウンセリングを受けるべきでは？」
「カウンセリングなんかで自分が救えるかよ……誰も救えねーよ。誰も、自分を救えない。救われるわけがない。もうどうしようもない」
寂しさを漂わせつつも、言葉をつづける。或いは、寂しさを振り切るために話題を元に戻そうとしているのかもしれない。
「ラスボス病ってのはな、現実と理想の乖離に対して、手前勝手に絶望して極論に走る厨二病が治らなかった大人にありがちな『人類を全員救おう』と思って無茶な計画を立てる病気だ。つまり、こじらせた大人の末路だな」
顔のない男は、懐かしみつつ罵倒を始めた。
それこそ、今の彼と大して変わらないはた迷惑な救済者の物語を思い出しながら。
「デスティニープランとかいうアホ計画があってな、個人の資質や適性から職業を決めようというもんだ。要するに、分不相応な夢を抱くよりも、先天的に向いている職業に就職する方が幸せって話だ。無茶

苦茶な話だろ？　何が無茶苦茶って『個人の為に職業がある』という根本的な勘違いだ。『社会に必要だから職業がある』という大前提を忘れている。おまけに『職業によっては適正年齢が存在している』という現実さえも無視している。例えば文明が一定水準に達していなければ全員が農業や漁業である第一次産業に従事する。当たり前だよな、職業とはそもそも共同体に食料を供給するためにある。仮に文明が進んだとしても、工業などの第二次産業やサービス業などの第三次産業が発達しても、結局食糧生産は一定数が必要になる。いくらサッカー選手が居ても飛行機のパイロットが居ても、農家が居なきゃ米もパンも食えない。ＴＯＫＩＯ以外はな。なにせ生産者がいないんだからな。かと言って一定以上に文明が進んで食料生産がオートメーション化されたとしたら、その頃には大抵の仕事は消滅している。完全にオートメーション化が進んでいけば、人間社会を維持するために人間の労働力がいらなくなるんだからな。つまりディスティニープランとやらは、普段自分が食ってるものが泉のように湧くと勘違いしている阿呆の企画倒れな計画だ。個人の幸福を優先して社会が潰れちゃ無意味だろうに」

「社会を潰そうとしている人が言わないでくださいよ」

　とはいえ、聡明なレオナルドは理解する。社会形態にもよるが、全ての仕事には必要とされている数量は決まっている。

　いくら何でも、先天的な資質の統計を調べたら社会に必要な仕事分に分類されるとは思えない。仮にそうだったとしても、お前は便所掃除の適性があると言われて、便所掃除を一生行うなどごめんである。別に便所掃除を馬鹿にするわけではないが、便所掃除の適性があると言われれば嬉しく思うのはマレだろう。そして、清潔なトイレを保つにはどうあっても専門家が必要である。

「後はあれだな……全人類の不老不死化だ。実際には少し違って、人間という種族そのものが問題を抱えているので、寿命なんかの問題が解決した上のステージの生き物になろうという計画だ。この計画の致命的なところは、一旦実施したら後戻りができない上に、そもそも計画を作ったやつが実際に不老不死になったわけじゃないというこ

とだ。この間ソーナ様にもいったが、全人類が不老不死になれば人類は救済されますよ、僕は成ったことないけどな。それじゃあ余りにも説得力が欠けている。実際、現代の文明人は大昔の原始人から見れば遥かに安泰な生活を送っているが、それでも別に幸福というわけじゃない。そもそも、人類がなにがしかの危機に瀕してそれを解決するために新しい生き物になる必要があるというのならともかく、救済するために新しい生物になるなんて現実逃避もいいところだ。なった先で不幸になったら、今度は寿命のある生き物に退化するのかね」

「まあ、少なくとも僕は貴方が寿命のないような生き物を大量に不幸にしてきたところをよく見ていましたね」

寿命が馬鹿みたいにある生き物も、なかなかどうして人間臭い。人間離れしているのは、皮肉にも人間であるはずの目の前の怪物である。

不老不死になったからと言って、別に人類が皆幸せになるとは、中々思えなかった。

「無限月読、まあ月の眼計画なんだが……人類皆で現実逃避しようぜって計画だ。人類皆を生命維持装置につないで、幸せな夢を見続けるという。ただ……食糧危機とか環境汚染とかで問題が発生したならともかく、普通に生きている人類をそこに放り込むってのは余りにも暴論だろう。第一、それって結果的には人類を絶滅させる計画になるんだし」

「まあ、子供が増えませんからね」

「大体これって、お前らはどんなに頑張っても現実では幸せになれないんだから、夢の世界に行こうぜって話だし。人のことを馬鹿にするにもほどがあるだろ。だいたい、それじゃあ人間の想像力の限界は越えられない。想像を超えることができるのは、現実の中だけなんだからな」

「いや……貴方は越えちゃいけない一線を越えまくりですよね」

ルネもヴァレリーも、これから一生懸命頑張るのであろう。しかし、どれだけ頑張っても全員を均等に公平に救うことは難しい。というよりも、無理だ。体が一つではどうあがいても足りない。時間だっ

て無限ではないし、肉体的疲労も精神的疲労も馬鹿にはできない。なによりも、一時頑張ればいいのではなく持続しなければならないのだ。

そして、彼女たちが救えるのは彼女たちの周りにいる面々だけである。

「十のうち十を救いたい。そう思うようになったらおしまいだ。自分が頑張れば何でもできるってのは、極端な話他人は何もできなくて、自分が居なければ何もできないって見下してるだけの話だ。そもそも幸せとは社会が定義すべきではない」

さて、幸せとは何だろうか。きっと彼女たちはそれさえも迷うのであろう。

そんな、少し勉強すればわかることさえも一人で悩んで。

「人生、というタイトルのラノベがある。基本的にギャグラノベなんだが、結構ためになることがあってな。例えば自己実現理論とか言うものがある。ものすごく大雑把だがな、システマチックさも時には重宝する。案外あっさり解決することもしばしばだしな」

「承認欲求や生理的欲求などですね」

「おお、流石に博識だな。その通りで基本的に人間には欲求があり、それが満たされると幸福になる。水や食料が足りている状態、生理的欲求だな。まあ、腹が減ってたら幸せになれないのは当然だ。自分の安全が確保されている状態、安全の欲求。体は健康でいじめる奴もいない、つまり今の英雄墓場の状態だな。この二つは今のところ満たされているはずだ。そういう意味では、生物的な意味ではウチの連中は幸せなわけだ。少なくとも虐待されてないし、飯もある。必要最低限は満たされているわけだ。【質を言い出せばキリがない】これはＧＡＴＥだったか……。そこから先の社会欲求や承認欲求は、国家とか社会とかが定義していい領分じゃない。自分で見つけるべきことなんだ。そうじゃないと余りにも悲しすぎる」

例えば、外国の軍勢や蛮族に脅かされる。そんな状況は個人ではどうにもならないし、食糧危機なども個人の領分を超えている。国家としては、この二つは最低限保証しなければならないだろう。

だが、そこから先は難しい。人間の肉体に必要なもの、害となるものは基本的に共通している。

しかし、個性という領域になると一気に多様化するのだ。

「単純な話だ。全人類を救う方法なんて、それこそ巨大隕石が降ってきて滅亡の危機に瀕しているとか、そんな『全人類が死滅する』なんて状況の打破以外には存在しない。もし仮にそんな方法が存在するとしても、それを目指すのは馬鹿だ。それは手抜きであり思考の放棄に他ならない」

ヴァレリーもルネも、多くを救いたいと思うのだろう。無理もない話だ、ここ英雄墓場は次の作戦が成功することである程度の安定が約束される。しかし、それは多くの犠牲の上の平和だ。

確かに、平和とは基本的にはそういうものだ。加えて、今まで彼らは社会の都合によって不当な目に合ってきた。

だがそれでも、彼女たちはそれでも自分の状況を全肯定できないだろう。どこかで、全員を救いたいと思うはずだ。

「人類の救済は、手抜きですか」

「いいや、人を救うこと自体は手抜きではない。人類を救うために頑張るのも手抜きではない。しかし、全人類を救うための方法を探すのは手抜きだ。それって要するに、困っている人が多すぎて、多様化しすぎていて、一人一人を救う方法を考えるのが面倒って話だろう？」

なるほど、そうなのかもしれない。レオナルドは納得した。

困っている人はたくさんいるが、その困っている原因はさまざまである。

そんな彼ら一人一人を救っていくのならばともかく、全員を同じ方法で救えないかと考えるのは確かに手抜きだった。

「……まあ、無限月読が一番手っ取り早いんだろうさ。だが、それだって思考停止だ。現実を変えられないから夢に行って好き勝手したい、そんなのはおかしいだろう。それを実行に移す労力を思えば、普通にボランティアをした方がいいに決まっている。結局のところ、目の前にいるヒトを救いたいと思うのと、見たことも会ったこともないヒトを救いたいと思うのは全然違うってことさ。それに、救うのと幸福に

するのはまた別かもしれないしな」

いずれにせよ、作戦が成功した先のことであろう。

思いのほかスムーズに作戦を思いついたおかげで時間が余ってしまっているので、余計なことを考えてしまっていた。

しかし、ここからはまさに鉄火場である。一日ですべてを決さなければ、自分だけではなく保護している彼らもルネもヴァレリーもレオナルドも危機に瀕する。それは、絶対に避けなければならないことだった。

仮面の男は、静かに覚悟を決めていた。その一方で哀愁も漂わせていた。

「それに、無限月読でも自分は救えないさ」

そんな言葉が、レオナルドの耳に届いた。しかし、それは聞かなかったことにすることが、この少年にはできた。

この怪物が、何に飢えているのかを知っているが故に。

「……さて、そろそろ時間ですね」

天界の最高責任者、正確にはその代行を務める天使ミカエル。聖書の陣営ではなく、他の神話の神と会うべく待合室で待機していた彼は、約束の時間が迫ってきたことを改めて確認していた。

つまりは、これから起きる会談で全てが決するという事実に、体が震えて止まらなかったということでもある。

この会談に失敗すれば、聖書の陣営は仮面の男と共倒れを起こしてしまう。それだけは、それだけは何としても避けなければならないミカエルは、冷や汗をかきながらも拳を強く握っていた。

「ふぅ……」

「どうした、浮かない顔だな」

そんな彼の護衛を務めるエクソシスト。詳しい話はまだ聞けていないが、少なくともここがほぼ敵地であり、加えて護衛の対象であるミカエルが重要な方であるということもわかっている。

であれば、こうして護衛の誉れを授かったことは重責を達せられるだけの実力があると認められたからに他ならない。

にもかかわらず、最高戦力である最強のエクソシストが気の抜けた表情をしていることで、神経質になっている他のエクソシストは咎めた。

司祭枢機卿にして老齢の戦士、ヴァスコ・ストラーダ。どこまでも鍛え抜かれた肉体を持つ、年齢に見合わぬ若々しい肉体を持ったその男は、当然ながら最強を名乗って問題のない強さを持っている。

しかし、気の抜けた表情をしているその青年は、老齢故に実力の落ちたヴァスコよりも抜きんでた実力者だった。

デュリオ・ジェズアルド。聖槍に次ぐ二番目に強いとされる神滅具、「煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）」の所持者である。

「いえ……その……ジークフリートについて思うところがありまして」

最強を名乗るには余りにも覇気に欠けるその青年は、エクソシスト

を裏切ってしまった英雄の子孫に思うところがあったらしい。
現在英雄派なる組織に身を置いているらしい彼は、これから仮面の男の卑劣な策略によって無残な最期を遂げるのだろう。
仮面の男の暗黒面、負の狂気、邪悪な所業。
それを思うと、優しい彼としてはどうしてもやりきれなかった。
「彼か……確かにお前としては思うところもあるだろう。だが、それよりもまずはミカエル様の護衛を第一に考えろ。……今はその時ではない」
ヴァスコとて、悪魔を殺戮する機械でもなければ神の教えだけを信じる暴力装置でもない。地位にふさわしいだけの人望はあるし、それゆえの感情も持ち合わせていた。
そんな彼としては、任務に集中しろとしか言いようがなかった。
実際の所、ヴァスコにしてもジークフリートに関しては、否、教会の暗部の犠牲になった面々には思うところがあったのだ。
というよりも、目の前にいるデュリオもその一人でしかない。はっきり言って戦闘に向かない性格をしているが、単に神滅具を宿しているというだけの理由で選択肢もなく養成機関に入ることになった。
非道な人体改造があったわけではないが、それでも修練が過酷を極めたことは想像に難しくない。神滅具は確かに強い武器だが、それゆえに扱いには鍛錬を要する。
そんな彼としては、自分以上に辛い目に会ったジークフリートに対して思うところもあるのだろう。
そしてもっと言えば、教会の戦士は例外なくその苦しみに耐えて己を鍛えてきた。鍛えた上で悪魔や堕天使と戦い、多くの友人を失い、また犠牲者が生まれてきたのだ。
その全てが、無為に帰そうとしている。仮面の男に負ければ聖書の神話は敵味方を問わず滅び、勝ったとしても聖書の神話内での戦いは終わる。
どちらに転んでも、エクソシストの未来は明るくない。そして、聖書の陣営以外の未来は別にどうということはない。むしろ……。
悪魔や堕天使が滅ぶなら、教会や天界が滅びても『皆』は喜ぶばか

りなのだろう。
　老人としては、それは耐えられる。どうせ長くなどないのだから。だが、若年の彼らはどうすればいいのだろうか。それを思うと、老人は悪い意味で時代が変わることを痛感せざるを得ない。
　人が尊ぶべきものを持っていても。強くとも、優しくとも、正しくとも。何も変えられない、或いは流されるばかりの世界の不条理を思わずにはいられない。
「……どうぞ」
　と、控室に現れたのは文字通りの死神だった。
　骸骨の顔をした、冥府の神。とはいっても唯一神ではなく、彼らのさらに上位の神の配下でしかないのだが。
「わかりました」
　席を立つミカエルに、雑談を中断させた二人は付き従う。そう、これから会う相手は冥府の王、ハーデスなのだから。

　ギリシャ神話。
　紀元前から存在する古い神話であり、当然紀元前故に西暦以降に発展した聖書の神話よりも前に存在していた。
　聞けば、聖書の神も彼らから多くを学んだという。つまり、ミカエルと言えども軽々しく接していい相手ではない。
　少なくとも、とっくの昔に衰退した神話の神としては、全盛を迎えている神話の責任者と会うなど不快であろうことは確実である。
　加えて、返還された旧魔王派から情報を集めたところによると、ハーデスは旧魔王派の所属していた禍の団のスポンサーでもあるらしい。
　もちろん、洗脳されているであろう彼らから得た情報などなんの価値もないのだが。
「さて、この朽ちた世界に何の御用かな？」
　物腰はやわらかいものの、玉座に座ったまま尋ねる骸骨の言葉はプレッシャーを放っていた。
　その単純な実力は主神クラス相応であろうか。少なくとも、ミカエ

ルとその護衛がまとめてかかったとしても、たやすくはない相手である。
　まして、ここは敵地。冥府の王の僕たる死神はいくらでも現れる。
　その、単純すぎる事実に三人は身動きが取れなかった。
「この度は貴重なお時間をいただき、ありがとうございます」
「なに、このような『老骨』に一々前置きなどけっこう。なにせ椅子に座っているだけでも疲れるのでな。要件を早くいってほしいものだ」
　骸骨のジョークは、笑うに笑えない。しかし、話を済ませたいのはミカエルも同じである。であれば、早々に切り出すこともやぶさかではない。
　謁見の間で、ミカエルは『伝言ゲーム』を始めた。
「先日、我々に対して宣戦布告した仮面の男とその一党から、犯行予告がありました。今から十日後、天界へ攻め込むという大胆不敵なものです」
「ふむ……なるほど、悪魔、堕天使、と来れば天界に攻め込むは必定か……しかし、思い切ったことをするものだ。天界の全戦力はおろか、教会のエクソシストさえも敵に回すというのに」
　そう、不意を突いて攻め込む分にはまあ問題がない。しかし、予告して攻め込むとなれば話は別だ。まして、そこが最優先となる拠点であれば。
　もちろん、ただの陽動という可能性もある。しかし、それでも守りを固めるしかない。なにせ天界を滅ぼすということは聖書の神話そのものが滅ぶことを意味しているのだから。
「それだけ、神滅具は強力ということか……。しかし、そちらの神も訳が分からぬな。それを信者に配ってしまえば容易く悪魔も堕天使も駆逐できたであろう」
　それは、はっきり言って誰もが思ったことである。神器なる兵器の存在と特徴を知った信徒ならば、必ず一度は思うことだった。
　実際、神器の全てとはいかずとも、神滅具を全て揃えて戦えるならば、仮面の男の様に複合して扱う革新的な方法を用いずとも、普通に使って普通に戦って、普通に堕天使も悪魔も駆逐できそうなものであ

る。

とはいえ、それを問うことや疑問に思うことは天使にもエクソシストにも不可能なことではあったのだが。

「とはいえ、それも過ぎたことだ。して？　救援でも求めておるのか？」

ハーデスは知っている。今言われたことを全て知っている。

そのために天界の構造を強化していることも、コロシアムを作っていることも、悪魔や堕天使と一丸になっていることも。

加えて、旧魔王派と堕天使の精鋭が仮面の男から返還されたことも。聖書陣営の重要情報はおおむね筒抜けである。

禍の団、旧魔王派は旗揚げ前に殲滅されるどころか拘束された。しかし、堕天使にも天使にも裏切り者は多数いる。彼らからの情報は、冥府の王に高精度でもたらされていた。

とはいえ、最高機密などの全てを知っているわけではない。現に、ハーデスはなぜミカエルが現れたのか全く知らなかった。

「いいえ、警告です」

ややこちらを挑発するように尋ねてきたハーデスに、警告という大きな言葉を使うミカエル。

それは実際に警告以外の何物でもない。

「ご存知かとは思いますが、そもそも天界は冥界と違い侵入は極めて困難な世界。如何に仮面の男が、三つ目が空間を操ることに長けているとはいえ、正面突破は極めて難しい。少なくとも、正面を固めれば阻めるはず。しかし、そこに違和感を感じた我らは徹底して天界を調べました」

その調査に、リゼヴィムからの助言があったこともミカエルとしては悔しいところである。

つまり、聖書の神の世界を守るべく尽力しておきながら、非常に重要なことを何も知らずにいたという己の不明。それが腹立たしく、同時に恐ろしい。

自分が知らないことを、仮面の男が知っていたという事実が。

「その調査の結果、天界と冥府を、煉獄を通じてつなぐ通路を発見いたしました」

それは、信徒の二人が知っているはずもないことであり、同時にミカエルも引き継がなかったことであり、しかしハーデスは知っていることだった。

「あれだけ知略に長けた仮面の男が、空間跳躍能力を用いて力づくで強行突破するとは考えにくいのです。であれば、我等でさえ知らなかったそのルートを用いて侵入してくることは十分にありえます」

「……さて、そのようなものがあったかどうか」

それは、意外なことだった。ハーデスが一瞬返事をためらうほどに、意外なことだった。

「この骸骨は朽ち果てて久しいのでな、そのようなものが存在したかなど憶えておらぬ。しかしこの老いぼれが忘れ、貴殿のような責任者でさえ知らぬことを、仮面の男がなぜ知っていると言い切れる?」

そう、それが一番意外なことだった。天界と冥府をつなぐルートを知っているのは、冥府でも限られたものだけである。そして、そんな彼らが仮面の男から洗脳されるわけがないし、同時に洗脳されれば流石に分かる。

ミカエルでさえ詳しく調べて明らかになったものが、仮面の男の侵入ルートになりえるのだろうか。どうやってそれを知ったというのだ。

「これはあくまでも警告でございます。仮面の男が、それを使うという可能性がある以上、放置するなどありえません。故に、どうかご警戒くださいませ。あの男は……決して神滅具を持っている『だけ』の男ではないのです」

その言葉は、デュリオにも突き刺さる。そう、結局己こそ神滅具を持っているだけの男である。

果たして、己はジークフリートと比べるに、何が違うのであろうか。神滅具を持っているだけのことではないのだろうか。

それを思うと、優しいだけの最強のエクソシストは、無力を感じず

にはいられなかった。

「さて、これは熟考を要する問題だな」

冥府の王、ハーデス。彼はギリシャ神話の世界観から言えば非常に稀有な、まともな思考ができる神である。

故に、彼は極めて論理的に思考を進めていた。天界の責任者が『警戒してください』と伝えてきたからと言って、馬鹿正直に警戒するのはありえない。

ハーデスは、手元にある材料を元に思考の海に没頭する。

まず、一番肝心な事実として『冥府から天界への直通路』は確かに存在している。もしもなにがしかのテロ行為や軍事行為の為に、それを利用することもやぶさかではなかった。

だが、それはそれとして、重要なのは『仮面の男の一団が実際にそこを通るのか』ということだ。

もしも仮面の男とその一党が力づくであれ隠密裏であれ、そこを通ってテロ行為をするとなると流石に外聞が悪い。というのも、禍の団をハーデスが支援しているのは他の諸神話からすれば常識であり、公然の秘密に近い。であれば、禍の団がそこを通っても単に見て見ぬふりをしただけだと思われるだろう。

だが、仮面の男の一団は違う。確かに聖書の陣営と全面的な敵対関係にあるが、ハーデスなどの聖書の神話に対して恨みを抱いている神々とつながりがあるわけではない。

もしもあるなら、とっくに聖書の神話は滅びている。こんなまどろっこしい真似をせずに、ありとあらゆるものを焼き尽くしているはずだ。

つまりは、仮面の男にとって『聖書の陣営を滅亡させる』ことは第一目標ですらないということだろう。結果的に滅ぼすとしても、なにがしかの目的を達成するためのはずだ。

それはいい。別にかまわない。懐が痛むことなく、怨敵が滅ぶなら

ば望むところだ。だが、冥府を土足で踏み荒らすとなれば話は別である。ことは面子に及ぶのだ。

「とはいえ、冥府から天界へのルートを仮面の男が知っているのかどうか、となると話は別だ」

天界陣営がそれに気づいた、というのは確かだろう。天界内部での裏切り者からの情報も、それを裏付けている。まさか、直接こちらへ報告しに来るとは思っていなかったが。

だが、これは一つの可能性が脳裏に浮かばざるを得ない。それはつまり、仮面の男と聖書の陣営でなにがしかの交渉ルートが成立したのではないか、という懸念だ。

加えて、新魔王派などと名乗っていた輩は丸々聖書の陣営に引き渡され、拘束されている。聖書の陣営とて精神を操ることに長けた三つ目に長期間拘束されていた連中の言葉を真に受けることなどあり得ないし、ましてやそれを元にこちらを非難するなど更にあり得ない。

しかし、彼らの持つ情報を一つの可能性として受け入れることもあるだろう。

そして、その中には絶霧という、仮面の男と戦うために必要なそれも含まれているはずだ。

もちろん、それは仮面の男も知っているはずだが、それでも一縷の望みをかけてこちらに依頼してきたのではないのだろうか。

「いや、依頼というよりは恐喝か？」

仮面の男の一団が天界へ攻め込む前に、そちらの飼っている禍の団で仮面の男を迎撃しろ。さもなくば聖書の陣営はそのルートを仮面の男に伝えるぞ、と。

「しかし、仮面の男が態々冥府を通る理由があるのか？　それも天界から流された情報だけで」

一旦情報を整理する必要がある。まず、確定している情報を並べよう。

仮面の男はハーデスと禍の団の繋がりを知っている。これは旧魔王派を捕まえたことで聞き出せているはずだ。

仮面の男は聖書の陣営に旧魔王派と堕天使の精鋭を帰した。これ

は天界の裏切り者からの情報によって確定している。
天界は冥府との通路を知った。これの存在は自分が知っていることであるし、聖書の陣営に帰参したリゼヴィムも知っていそうなことである。
英雄派は仮面の男の拠点を探り当てている。これに関しても、自信満々で報告してきたので確かだろう。
次いで、未確定な情報を並べよう。重要なのは天界と冥府のルート、英雄派が仮面の男の拠点をさぐりあてたこと、である。
仮面の男は、冥府と天界のルートを知っている、とは限らない。知っていたとしても、そこを通る理由がわからない。
聖書の陣営と仮面の男は、英雄派が仮面の男の拠点を探りあてている、とは知らないはずである。というよりも、それはあり得ないはずだ。いくら何でもメリットがなさすぎる。知っているのならばなにがしかの手を打つはずだった。
仮面の男の拠点は、聞くところによると隔離空間らしい。つまりは侵入不能の鉄壁の要塞であり、侵入されることを想定しているとは思えないし、同時に侵入されればそのまま食い破られる硬い壁が一枚あるだけの城なのだ。
「さて、どうするべきか？」
推論はいくらでも可能だが、手元の材料が少なすぎる。正解を導き出すには余りにも不足しているし、なんのかんの言って取るべき手段は二通りしかない。
一つは英雄派を動かして仮面の男の拠点を襲撃させること。
もう一つは英雄派を動かすかどうかはともかく、仮面の男が攻め込んでくると踏んで待ち構えることである。
第三の手段として両方やる、というのも選択肢には含まれている。その上で、如何に判断するべきなのか。それを考えるべきであろう。
「連中の軍勢が冥府を踏み荒らすなど看過できん。天界が気づいた以上、仮面の男が知らないとは言えぬ。であれば、先手を打つよりほかに手はない……果たしてそうだろうか？」
ここで、ハーデスの脳裏には四つの勢力が浮かび上がる。重要なの

は誰がどれぐらい得をするのかということだ。
　仮に仮面の男が無防備な冥府を踏み荒らして無傷で天界へ攻め込んだとして、間違いなく得をするのは仮面の男の一団だけである。態々通るのであればそれなりの理由と勝算があるのであろうし、冥府の面子は丸つぶれであるし、聖書の陣営も流石に戦わないわけにはいかないし、英雄派にしても神器を全て失うという懸念がある。
　では、仮面の男を冥府で迎撃した場合はどうか。この場合は聖書の陣営が得をする。英雄派と冥府は仮面の男の一団と戦わざるを得ず、どうなるにせよ戦力は疲弊する。仮面の男の一団の量産型魔獣は脅威だが、絶霧がある以上使い手たちに接近して攻撃すれば数の差は埋められるはずだ。単純に言って、使い捨てられる数はともかく替えの効かない質ならば、冥府と英雄派各々でさえ凌駕しているはずだ。
　そして、仮面の男でさえ想定していないと思われる拠点への先制攻撃を行えばどうか。聖書の陣営と冥府は無傷で済み、英雄派と仮面の男の一団で潰しあうことになる。聖書の陣営が得をするというのはいただけないが、聖書の陣営を滅ぼすためにこちらも共倒れをしては元も子もない。であれば、死神を英雄派に貸すこともやぶさかではないだろう。
「……どうであろうなぁ」
　骸骨の顔が、意地悪く笑った。
「こちらの守りがおろそかになっては、本末転倒か。拠点を攻撃しても、そこに彼らがいる保証はなし、加えてこちらへ逃げ込んでくる可能性もある」
　向こうは魔獣をいくらでも量産できるが、その生産方法には担い手が必須であり、これには替えが効かない。そしておそらく、仮面の男一人が死ねばそのまま機能不全を起こして分解するか消滅する脆い集団でしかない。
　であれば、極端な話仮面の男一人を逃がせばこちらの負けで、仮面の男一人を打ち取ればこちらの勝ちである。問題は、こちら、というのが英雄派と冥府で一致していないということだ。
　旧魔王派を名乗っていた一団は、最終的に自分たちを崇拝する自分

たちの国を欲していた。そして、そのためには北欧神話やギリシャ神話の協力が必要だった。そういう意味では、利害が一致していた。

だが、英雄派は違う。はっきり言って、あの青臭い連中はそうした着地点を最初から持っていない。下手をすれば、こちらにかみついてこないとも言い切れない。使い捨ての鉄砲玉が、無駄に力を付ければ火傷では済まないこともありえる。

そういう意味では、聖書の陣営以上に厄介な相手になりかねないのだ。つまりは、仮面の男と共倒れになってもらうのが一番好ましい。

とはいえ、言葉でそのまま伝えてそう動くわけもないのだ。英雄派からも選択肢を奪う必要がある。

「これは、熟考を要するな……」

仮面の男が死に、英雄派も瓦解する。それこそが一番望ましい。聖書の陣営が無傷で済むのは腹立たしいが、現時点でもすでに致命傷を負っていると言っても過言ではないだろう。であれば、欲をかくのもあほらしい。

「そう、軽々に判断するのは愚かなことだ。それに、いろいろと裏を取って情報を確定させなければなるまいな」

つまりは、両者が手遅れになるタイミングで戦わせるのが一番都合がいいのだろう。

「熟考と情報の集積……どう急いでも、九日はかかるか」

つまり、英雄派が判断できる時間を極力奪い、且つ仮面の男が聖書の陣営へ直接攻め込むよりも前、そんなタイミングが望ましいだろう。

「まあ、前日には伝えてやらねば色々と間に合うまいな」

「……なんだと!?」

　偶々そこにいたのが、曹操とジークフリートだった。言ってしまえば、それだけの話である。

「……驚いたね、曹操。これは完全に想定外だ」

　その一報を聞いて、比較的冷静なジークフリートに対して、曹操は明らかに取り乱していた。その取り乱しようを見れば、逆に冷静になってしまうのかもしれない。

　それはそれとして、ジークフリートは曹操に指示を求めた。軽々に判断はできない一大事であった。

「……魔法使いの所に行っているゲオルクに声をかける。ヴァルブルガにもだ。ジャンヌとヘラクレスにはこっちからこれをかけておくから、ジークフリートはヴァーリを呼んできてくれ」

「ああ、分かった……行くのは俺たちだけなのかい？」

　慌てて指示をする曹操に、ジークフリートはとりあえず確認する。敵地に攻め込む以上、どう考えても人数は必要だ。であれば、神器を持っているだけの、禁手にも至っていない面々も必要に感じられた。少なくとも、連れていかない理由がない。

　ただし、それは連れていかない理由であって、事情を説明する理由ではなかった。

「わからないのか、ジークフリート！　仮面の男が天界に攻めこむ以上、狙いは神器の根幹システムだ。アレの存在を、いやこの世界から神器が失われることを知れば、迷いが生まれるぞ！」

　あるいは、当人自身がもっとも迷っているのかもしれない。

　それほどに曹操は取り乱していた。

「俺たち英雄派は神器を宿した者たちで、それによって不遇を受けてきた面々で構成されている！　その彼らが、仮面の男がこの世から神器を奪い尽くそうとしている、停止させようとしていると知れば、絶対に意見が分かれる！」

　はっきり言って、英雄派の繋がりは過去に不遇だった、という鬱憤

を抱えているというだけのことだ。隣にいる誰かは自分と同じ辛い目にあっている、それが彼らの仲間意識そのものなのだ。

だが、仮面の男の狙いが本当に神器のシステムならば、その根幹が根こそぎひっくり返ることになる。

受け取り方は二通りだ。自分たちの武器が失われる、自分たちのような辛い目にあうものが居なくなる。真っ二つに分かれることは必定であり、同時に一人の人間の中でも葛藤が生まれるだろう。

そうなれば、明確な目標を持たない英雄派はあっさり瓦解する。

「時間があれば意思統一を図ることができる。だが、明日だぞ?! いくら何でも無理だ!!」

元々曹操は、神滅具を更にいくつか集めてから襲撃をかけるつもりだった。その上、それを末端にも理路整然と説明している。それが今回仇となった。

なぜ、予定を大幅に早めて、明日攻め込むことにしたのか。いくら何でも英雄派の末端も不審に思うだろう。きちんとした理由の説明を求めるはずだ。

ここで、適当な理由をでっちあげて丸め込めるほど腹芸に長けた人材は幹部にはいない。もしかしたら旧魔王派にはいたかもしれないが、生憎そうした交渉ごとに長けた英雄はいない。

第一、襲撃をかけた先で仮面の男がそれを末端に教える可能性さえある。それを思えば、危うくて連れてなどいけない。

「……明日、仮面の男が天界に攻め込む。それを妨害するために、予定を繰り上げて急きょ攻め込むことにした。それで誰が納得すると思う?!」

「黙って……おいていくということか?」

「仕方がないだろう……まさか天界に集結した総戦力へ横やりを入れるわけにもいかないだろうさ」

それは、浮き彫りになる仮面の男の『クレイジーさ』の証明であった。

端的に言って、ただ普通にテロをすると宣言するならばともかく、日時を事前に通告して政府の主要施設を襲うなど正気ではない。

にも拘わらず、それを実行する。余りにも犯罪者離れしている。
最強の神滅具である黄昏の聖槍を持つ曹操をして、神々さえも滅ぼしかねない槍を持つ曹操をして、実際に神や魔王に挑むなど正気ではないのだ。
「俺たちもテロリストであることに変わりはない。天界に聖書の神話の助勢として参陣するわけにもいかないだろう。であれば、その前に叩くしかない！」
そう、それが曹操に拠点への襲撃を決断させた最大の理由だった。
仮面の男が侵入してくるかもしれないルート、冥府と天界を繋ぐルートの存在など、曹操は全く知らない。
加えて、なぜハーデスがそれを自分たちに今このタイミングで教えたのか、その理由を考える余裕もない。
仕方がないと言えば仕方がない。彼らの手元に『冥府と天界の秘密ルート』という重要情報の材料があれば、ハーデスの意図を読み取りあえて冥府で戦うという選択肢もあっただろう。
戦っていたが、止めきれずに冥府に逃がしてしまった。さあ、一緒に冥府を守ろう。そうなってしまえばハーデスも共闘をしないわけにはいかない。
だが、曹操は知らないのだ。知らないからこそ、判断ができない。教えられていないからこそ、察することさえできない。
だからこそ、曹操は天界で戦うか仮面の男の拠点で戦うかの二通りしか選べない。
「……分かったよ。ではヴァーリに接触してくる」
「ああ、早く頼む！」
曹操の判断は、曹操の持つ判断材料の中では正しかった。
だが、一つのことを配慮し忘れていた。それが英雄派内部ではなく、曹操という個人にとって決定的に破滅を意味する言葉だった。
仮面の男がこの会話を聞けば、さぞ爆笑しただろう。
「……結局、同じか」
他ならぬジークフリートこそが、幹部の中でも最もそれを迷いうる男だということを。

元エクソシストである彼は、当然教会を裏切った男である。なぜ教会を裏切ったのか、深く曹操と語り合っていればありえなかったミスだった。

「どこにいても、良い様に使いつぶされて終わるのか」

それは、改造を受けた自分にだけ向けた言葉ではない。

曹操が集めた、神器使い達に向けた言葉でもあった。

確かに、そもそも末端の戦闘員とは死んで当然の役回りである。その意味では、彼らが不意を打つとはいえ敵地に攻め込むという危険な作戦に参加しないことは、実力を思えば死ぬことを避けたことになったのかもしれない。

しかし、その実は『騙す、黙る、偽る』に他ならない。選択肢を前に迷うであろう彼らを気遣ってではない。作った組織の瓦解を防ぐために、彼らには盲目的に自分を信じていてもらう必要がある。それだけの話なのだ。

彼らの為ではなく、自分の為なのだ。

「……曹操の方が露骨なのは、彼が若いからか。結局同じだからなのか」

ジークフリートは知っている。自分の様に特別な『処置』を受けたものを例外としても、例えば最強のエクソシストをしても、非常に過酷な鍛錬を受けてたのだと。

それが不必要だったのかといえば否だ。それは悪魔と戦うようになって、それなりに正当なのだと分かる。

不十分な鍛錬のまま戦場に送り込まれても死ぬだけであるし、そもそも悪魔は人間より強く寿命も長いのだ。どれだけ鍛えても、自分の様に英雄の血を継いでいても、結局死ぬ可能性が高い。

そして、エクソシストが死ぬならばともかく負けるとなれば、それは多くの人が死ぬことになる。多くの人が犠牲になることになる。それを思えば、自分のような穢れたエクソシストも必要なのだろう。

もちろん、そんな言葉が自分への処置をした連中に有ったかと言えば否であろうが。

ただ、結局自分たちの個人としての自由よりも、組織の維持が優先

されていたのであろう。
　より多くの人のため、堕天使や悪魔の犠牲になる人を減らすために、皆の笑顔と幸福のために。
　そんな、虫唾の走るような『綺麗事』の為に、自分は使いつぶされようとしていた。そのあげく、その戦いさえ取り上げられようとしていた。
　教会を裏切った。それは後悔していない。自分の居場所はもう、あそこにはないのだから。しかし、裏切った先の曹操もまた、極めて無自覚に自分を裏切った。
　しかし自らも『伝言』を受け取ったジークフリートは、伝言の最終地点へ向かっていた。
　そして、その相手とは当然何もかもを知っているヴァーリ・ルシファーに他ならない。

「……ということだ。急で悪いが、メンバーがそろい次第敵の拠点に向かう」
「ああ、そうか」
　獰猛に笑うヴァーリ。その表情には戦闘を好む者としての笑み以外に、何もかもが上手く回り誰もが意のままに動いているという事実を改めて確認した笑みだった。
　思いのほか早かった。修行は万全とはいいがたいし、まだ白龍皇の光翼には大いに伸びしろがあるように感じる。
　だが、それがどうしたというのだ。それでも、十分うれしかった。
「待ちに待った戦いだ……直ぐに行く」
「ああ……」
　乗り気のヴァーリに対して、やや困惑したジークフリート。言ってしまえば、元々の予定からして使いつぶされる予定の男である。
　それを目の前の彼がわかっていないはずがない、という的外れな感想を抱いていた。

「君は、戦うのが怖くないのか？」
「ああ、怖くない」
いつものように、確信をもって言い切った。
しかし、その直後に、陰のある言葉を言った。
「だが、そういうやつばかりじゃないのも知っている」
白龍皇の光翼と深くつながるほどに、その内部の声を聴くようになった。
無念と怨嗟、後悔と恐怖。それらが、神滅具である白龍皇の光翼に満ちている。
当然、光翼の中に宿るのは使用者の犠牲になった者たちではない。ほかならぬ使用者たち自身のモノである。
一人で戦えるだけの力を得る前のヴァーリは、決して幸福だったわけではない。強くなることは好きだし、強くなることで世界との接し方が変わっていくことを感じていた。
だが、以前の所有者は違ったのだ。どれだけ強くなったとしても、ドラゴンを宿す限り戦うだけであり、その果てには戦場での凄絶な死しかない。
自分はそれでいい。そうなってもかまわない。
だが、自分以降はどうだろうか。そう思うと、負けても悔いはない、という言葉が別の意味を持ちそうになる。
「ジークフリート……お前はなぜそんなことを聞くんだ？」
「……それは、自分でもわからないからだ」
戦うことをやめないのはなぜだろうか。戦うことが好きなのではないし、嫌ってさえいる。悪魔や堕天使、或いはエクソシストが嫌いというわけでもない。
彼らにも彼らの都合がある、ということを知ってしまえば、どうにも憎悪できない。
結局、敵と味方に分かれて戦っていただけのことなのだ。だからこそ、存続の危機に瀕すればあっさりと手を組めるのだ。
上の都合で戦って、上の都合で戦うのをやめる。それが、どうしようもなく普通のことなのだと知っている。

自分だけが特別ではないと知っている。
では、自分はどうしたいのだろうか。
「自分は、なぜ自分が戦うのかわからない」
「……見つかるといいな、戦う理由が」
最期の戦場であることを察しながら、言ってしまえば死ぬ必要などない戦いに身を投じようとしている自分。だからこそ、ヴァーリはジークフリートへ素直に応援ができた。

「にしてもねぇん？　天界が騒がしいのは聞いてたけどねぇ、まさかそこへ直に攻め込むなんて予告したなんて」
「ああ、やはり仮面の男はいかれてるよ。どう考えても正気じゃない」
駒王町に集合した英雄派の精鋭及び、ヴァルブルガとヴァーリ・ルシファー。
彼らは住宅地の中の、一戸建ての前に集まっていた。
「どれだけ魔獣が強くとも、奪ったアグレアスになにがしかの秘密があったとしても、天界へ直接攻め込むと予告した上で実行するなんてありえない」
それが陽動だという可能性は十分にある。仮面の男が最初にやった黄金風船事件の様に、本命を攻めるにあたってそこの防御を薄くするための作戦なのかもしれない。
しかし、過去二度にわたって行われた仮面の男の作戦は、いずれも不可能に見えた目的を事前に相手に明かしたうえで、その上であっさりと成功させている。
今回もそうでないという保証はない。
しかし、それが実際に天界へ攻め込むという作戦だった場合、英雄派には何もできない。聖書の陣営の様に、全面的に誰かの味方としてつながっていない英雄派の悲しいところだった。
「とはいえ、連中にとっても今回の奇襲は想定外のはずだ。以前も拠点に行ったことはあるが、とんでもなくたどり着きにくい、遠い空間

だったよ」

それは、彼のメフィスト・フェレスと契約したというゲオルク・ファウストの子孫である凄腕の魔法使いゲオルクが、空間系最強の神滅具絶霧を持っているからこそ成立した力技である。

また同時に、以前に彼が駒王学園に在学していたリアスへ宣戦布告をした情報を得ていたからに他ならない。

「ここで以前に、仮面の男は自分の拠点への通路を開いている。流石に学園内で空間跳躍をすることはないにしても、近くで空間の通路を開いているとは思っていたが、ドンピシャだったな」

一度穴を開けたならば、ふさぎ直したとしてもなにがしかの違和感が残る。それが空間そのものだったとしても、それを操るものにとっては同じことである。

侵入不可能な世界だからこそ、侵入できてしまえばたやすく攻め落とせる理屈である。

「おそらく、人間であそこへ侵入できるのは自分以外では仮面の男本人だろうさ。まあ、主神であるオーディン辺りならどうにかできたかもしれないけどな」

「そうでしょうねぇ」

自らも神滅具を宿し、加えて魔法使いであるヴァルブルガは、素直にゲオルクと絶霧の性能を認めていた。

空間を操る魔術も使える故に、ゲオルクが今目の前で行っていることがどれだけ高度な行為なのか、他の誰よりもわかっていた。それはもちろん、他の面々にはわからないということでもある。

「けっ！　いいからさっさと開けちまえよ！」

「そうよ、もったいぶらないでよね」

「……そうだな、少し急げないか？」

ただイラついて急かすジャンヌとヘラクレスを他所に、曹操は曹操で単に慌てていた。拠点に攻め込んでも、既に天界に攻め込んでいては元の木阿弥である。そこにあるものをいくら奪うなり壊すなりしても、結局自分たちの持つ神器は機能を停止するか奪われるかしてしまう。

普通に危機感を持つ曹操は、ゲオルクに空間に穴を開ける作業を急げないかと尋ねた。
「無茶を言うな。とても繊細な作業なんだぞ？」
「聖槍でサポートできないか？」
「繊細だと言っているだろう！　出力があればいいというものじゃないんだ」
作業を続けながらも、苛立ち大声で怒鳴りつけるゲオルク。
「仮に覇輝を使ったとしても、奇跡が起きたとしても、そう簡単に行ける場所じゃないんだ！」
「しかし、時間が……」
何をもって明日なのか。それにもよるが、既に日本の関東であるこの街では、夜が明けて空が白み始めている。
仮面の男が日本の時間を基準にしているのかはわからないし、そもそも時間帯まで指定しているわけではないので、行ってもまだ寝ている可能性さえある。或いは、朝食を食べている可能性もあった。
「……もう少しだから……よし！」
周囲からの罵声を浴びつつも、ゲオルクは遂に道を開けることができていた。
住宅地のど真ん中、一車線ほどの道路には闇の穴が穿たれていた。
「よし、んじゃあ突っ込むとしますか！」
「ええ、さっさと突っ込みましょう！」
「言っておくが、穴の先は広大な空間だ。何もない荒野が広がっている」
一度実際に赴いたゲオルクは、前のめりなジャンヌとヘラクレスを制した。
拠点襲撃を先延ばしにしていたのは、空間が広すぎて内部の状況が把握できなかったからだ。
ゆっくりと、隠密に適した部隊で内部を調べて、万全の襲撃を行うつもりだったのだ。それが丸々台無しになってしまった。
「とはいえ、こちらには白龍皇がいて、向こうには赤龍帝がいる。共鳴か何かで探し当てることは十分に可能なはずだ」

曹操は自分につよく言い聞かせる。半ば自覚的ではあるが、曹操自身もそうなのだ。他の英雄派同様に、自分の持つ力に存在意義を多くゆだねている。

力を失うかもしれない、その事実が彼の心を焦燥で焦がしていた。

「さあ、行こう……！」

先陣を切って飛び込む曹操、それに続く形でジャンヌもヘラクレスもゲオルクも穴に突入していく。

しかし、最も逸っているかと思っていたヴァーリが、穴ではなく背後の住宅を見て止まっていることにジークフリートは違和感を感じて声をかけていた。

「どうした？」

「いや、どうしてアイツはここで空間跳躍を行ったのかと思ってな」

そこには、一軒家があるだけだ。他にもいくらでもある、中に住んでいる者にしても一般人であるだけであろう、何の価値もない凡人が暮らしているだけだ。

おそらく、単に駒王学園近くに空間跳躍を行おうとして、偶々ここになっただけなのだろう。人通りは多少多いが、それとて簡単な幻術や気配遮断でいくらでもごまかせる。

どこでもいいから、ここにした。その程度の話なのだろう。

「早くしないと、穴が閉じるぞ」

「ああ、分かってる」

夜が明ける前に、今日が始まる前に、彼らは世界を騒がす犯罪者の拠点へ突入し、その姿を消した。

ゲオルクがこじ開けた穴も時間経過とともに消失し、そこには日常だけが残っていた。

そして、誰もが一日を始めていく。

それが明るいものとは限らなかったが。

「どうしたんだ？」

「あの子が、帰ってきた気がして……」

ちょうど、ゲオルクが穴を開けた空間の前にある、つまりは仮面の

男が以前に空間跳躍を行った場所の前にある家の中で、老け込んだ夫妻が目を覚ましていた。
「そうだな……あの子は、いつもこの時間には走りに行っていたからな」
二人には遅くに生まれた子供がいた。目が三つあるわけでも、顔が焼けているわけでもない、肉体的には普通の子供が居た。
しかしその子供は、今はもうこの家に帰ることはない。
『お宅のお子さんは、申し上げたくないのですが、友達も作らず、勉強も最低限で、部活にも入らず、ずっと走ってばかりなんです』
『授業中でも指名されれば応えるんですが、本当に自己主張が乏しくて、めったにしゃべらないんです』
『いじめられているわけではないんですが……心に壁を作ってしまって、誰にも関わろうとしていないんです』
少し、変わっている子供だった。
孤独を愛している、という思春期特有の感性ではなく、毎日必死に走ってるだけの子供だった。
運動会などではそれなりの成績を収めるし体育でもそこそこの成績だった。だが、誰に何と言われようとも、毎日走るだけで誰かと競おうとはしなかった。
「あの子は……いつも、何も欲しがらなくて、私は母親として、あの子に……あの子になにもできなかった！」
「それは、俺もだよ……」
『なあ、遊園地にいかないか？』
『いい……』
『水族館はどうだ？』
『いい……』
『そうだ、お前マラソンの見物に行かないか?!』
『いい……』
『オモチャとか、マンガとか、映画とか……』
『いい……』
興味がなかったわけではないのだろう。いつも行きたそうにして

いたが、それでも毎日走っていた。
朝から晩まで、学校に通う前に走り、帰ってきた後も走り、食事をしたらＴＶをみることもなく寝ていた。
休みの日はもっと極端だった。休む、という言葉が間違っているかのように、食事の時間以外は走っていた。
宿題はしていたが、テスト勉強などはしなかった。本当に、できる限りの全てを走ることに奉げていた。
「あの子は、なにも欲しがらなかったからな……」
「ええ、あの子が居なくなった後も、最初から部屋には何もなくて……」
「ああ、残っていたのは……アレだけだったな」
『あのね、その……お、お、お、と、う、さ……ん……』
『どうしたんだ?』
『そ、そのね……えっとね……じつは、ね……』
『何かしてほしいことでもあるのか?』
『……また、靴に穴があいちゃったの……ごめんなさい』
『ああ、そうか！　じゃあ、今度買いに行こうな！』
『はい……ごめんなさい……』
『いいんだよ！　ねえ、母さん！』
『ええ、お母さんも一緒に買いに行くわ！』
『靴も小さくなっていただろ！　何足も買おうな！』
『うん……』
「穴の開いた、靴ぐらいだったものだ」
「アレだけだったものね、あの子が欲しがったのって」
「靴だ……靴だぞ?!　父親として、欲しがった物を買えたのは、靴だけだったんだ……」
恥じらいながら、申し訳なさそうに、甘えながらねだった唯一の物が靴だった。
子供の成長に合わせて靴が小さくなる、というどころではない。過酷なマラソンを続ける少年は靴を履きつぶしていった。
少年の私室には、最初からそれしかない。通常なら捨てるであろ

う、役目を終えた『無価値』で『無意味』で『不必要』な靴。それだけが、帰ることのない部屋に残されていた。

「さあて、もうすぐ墓に埋まるやつが来るぞ！　みんなで仲良くお出迎えだ。準備はいいな？」

英雄墓場、そう名付けられた世界に住む希少な神器の所持者と、混血吸血鬼たち。中心メンバーである神滅具所持者たちだけではなく、建物がある場所から離れたこの場には、知恵あるものが全て集まっていた。

彼らの手には、既に練習を済ませた小道具を渡してある。彼らは蒼白で震えているが、それでも逃げようとはしていない。

これから自分たちの敵が来ようとしているが、それでもまったくと言っていいほど逃げる気はなかった。

レオナルドにはわかっている。誰もが怖がっているのだ、こうして仮面を外した顔のない男、この男の趣向に従わないことが、恐ろしくてかなわない。

「……本当に来るんだろうな」

「ルネ……多分来るわ。だって、これまでもずっとそうだったじゃない」

「……だよな」

ルネもヴァレリーも、気の毒に思いつつも全くと言っていいほど負ける気がしていない。もっと悪い予感が、この男が勝つという最悪の展開を確信していた。

「……どうやら、本当に現れそうですね」

風もない始球空間に、どこからともなく霧が立ち込め始めた。それはまるで風穴から吹き込んでくるかのように立ち込め、予定通りの場所に予定通りの客が現れたことを確信させていた。

どの程度のタイミングで現れるのかはわからず、簡易トイレなどを始めとして給水所のような長時間待機できる準備は万全だった。だが、それも不要だったらしい。

レオナルドはこうなるのだと理解していた。如何に魔法やら神器やらでごまかしがきくとはいえ、無駄な手間であることに変わりはな

い。

日本の住宅地のど真ん中に空間跳躍の痕跡を発見し、そこから転移をするならば誰だって早朝か深夜を選ぶだろう。時間に余裕がないならば、早朝になるのは決まり切っている。

それがどの程度計算通りなのかはわからないが、賢明なレオナルドをして底が感じられなかった。

「……だな。少しジョジョっぽく語るとするならば……」

レオナルドは、顔のない男の笑みともつかない笑みを見て思い出す。

初めて顔のない男に出会ったあの時のことを。

「日本って国は地震大国でも有名だ。地震、ってのは怖いもんだよな～～。だって揺れるのが雲でもなく建物でもなく海面でもなく、地面だぜ？　どんなに踏んづけたってびくりともしない地面がだぜ？　それが縦や横に揺れたらよぉ～～、誰だってビビるよなぁ」

レオナルド、という少年は裕福な家庭に、貴族という上流階級の家庭に生まれ育った。

金色の髪に白い肌、整った顔に加えて体型も黄金律を感じさせていた。

それだけでも彼は恵まれていると言っていいだろう。それに加えて、彼には傑出した才能があった。神滅具云々などとは関係のない、聡明な頭脳だ。

芸術的なセンスや政治的な才能、経済、学問、多くの才能を彼が宿していた。

だからだろう、彼はそれを自覚すると同時に理解した。そんなものは自分の周囲の誰もが望んでいないのだと。

「でもまあ、日本で育つと別に驚かなくなるんだよ。慣れってのもあるんだが、そういうものがあるんだって分かってるからなんだよな。地面が揺れるなんて、日本人にとっては知っていて当然なわけだ。それならとっととよその国に行けばいいと思うだろ？　でも誰もどこにもいかない。なんでかって？　それが逆に当たり前だからなんだよな」

彼は歴史を学んだ。自分の先祖がどれだけ素晴らしい方なのかを嫌というほど習った。現在の死生観、或いは価値観から言えばありえない、悪とされる行為を彼らがしていたことは知っているが、それでもレオナルドはそんな彼らを尊敬している。

その当時はそういう世界だったのだ、ということを理解してしまえば、彼らの行為は崇高なものなのだと理解せざるを得ない。

しかし、自分以外の誰かを、家族や親せきを尊敬することはできなかった。

自分にキズがあったり、或いは極端に愚鈍であれば彼らは自分をけなすことで自尊心を満たすか、或いは嫌悪して遠ざけるか隠すだろう。

だが、自分がとびぬけて優秀であればどうだろうか。ただバイオリンを弾くことが上手なだけではなく、ただ絵画の真贋を見極めるだけではなく、美術品の製造された年代を当てるようなクイズ的な要素を超える才覚を発揮すればどうだろうか。

彼らは、きっと煙たがるに違いない。

彼らはそういうものを求めていないのだ。貴族制度の根本的な改革だとか、会社を興して大成功を収めるとか、或いは楽器一つで世界を魅了するだとか。そこまでいかずとも、自分たちの尺度を超えた異物を嫌うのだ。

要するに、それなりに上品でそれなりに顔がよくて、ダンスが躍れて詩吟ができる王子様人形が欲しいだけなのだ。

それが、どうにも不快だった。きっと彼らは、先祖の遺産を食いつぶすだけの彼らは金が足りなくなれば、まだ余っている親戚にたかるのだろう。困窮すれば、儲けている兄弟の足を引っ張るのだろう。

そうやって、じわりじわりと縮みながら、世界の変化から取り残されることを良しとするのだ。

「常識ってやつは、そういうもんだ。どんなにみじめでも、どんなに貧しくても、それが当たり前だって思うと、中々抜け出せない。そういうもんだって納得しちまうからな。これが厄介だ、解決しようって思わなくなっちまう」

我ながら愚かな行為だったのだろう。貴族のお坊ちゃまは、思春期特有の、早めの反抗期から無計画に家を飛び出した。

その先で、お腹がすくという珍しいことになるまで、どこかで何かができると思っていたのだろう。

結局、貴族主義社会という世間だけがそうなのではなく、資本主義社会では自分という人間には大して求められていないのだと。

貴族と言っても魔法が使えるわけでもなく、伝説の武器が使えるだけの何かがあるわけでもない。

自分にしたところで、少し頭が良いだけの、何ができるわけではない子供なのだ。きっと、自分が下に見ている親族よりも、更に役に立たない子供なのだ。

魔獣創造、聖書の神が生み出したという神器の中でも、最強とされる神滅具。その中でもさらに四つしかない上位神滅具、『魔獣創造』の所有者として生まれた少年は、自分はその程度の存在なのだと思い込んで、家に帰ろうとしていた。

その時に戻れば、きっと家の誰もが彼がいないことに気付かなかっただろう。なにがしかの稽古をさぼったことを怒られるだけだろう。

あるいは、英雄派を名乗る誰かと出会っていたのかもしれない。

「さて、どうなんだろうな？　英雄派を名乗る連中は、英雄の血を継いでいたり魂を宿している連中は、常識の崩壊を前に何を思って何を行動するんだろうな。奴らの中には誠があるのか。それとも、英雄の上っ面を真似しただけの、何も成せない運命の奴隷なのか」

だが、少年は出会った。

魔獣創造を認識した後も、赤龍帝の籠手を知った後も、顔のない男の眼の力を知った後も、何一つ変わらない一つの怪物に。

どれだけ超常現象が跋扈したとしても、どれだけのカタログスペックが存在したとしても、一切気にならない人間の化け物を。

極めて一般的な意味で、常識はずれに優秀な人間を。

自分の賢しさなど、何の意味も持たない、自分の想像力を超えたこの化け物に出会った。

そして、理解する。本当に優れたる人間は、決して屈さない。どれ

だけの困難や妨害が存在していたとしても、諦めない。圧倒的な意思をもって世界の方を改革してしまうのだと。

歴史書で見知った、多くの偉人たちの持っていたそれを彼に見た。

「彼らは本当の繋がりを持っていたのか、それとも上辺だけの付き合いなのか。彼らがどれぐらいの人数で現れるのかではっきりする」

熱意や狂気、感情を燃料とする。

知識や知恵、経験や歴史、想像力と応用力がたどり着くべき未来を描き出す。

情報や感想、風聞や見解、周囲の環境によってたどり着くためのルートを作成する。

そして、意思や信念、確固たる大義が目標を常ににらみ続ける。

語彙や詩吟、国語力と表現力。それらが周囲に己を伝播させる。

それらの総合力。それこそが、人間の力。人間力なのだと。

「さあ、お前たちに美学はあるのか。それとも、醜い執着だけなのか」

人間離れした人間力をもつ者は、果たして人間と呼べるのか。

そして、それは果たして幸福なことなのか。何も諦めない男とは、何も諦めることができない男とは、どれだけ辛いのか。

初めに、それに気づいたのはヴァルブルガだった。

白い霧の道を抜けた先は、何もない荒野。そこから周囲を調査して、天界へ攻め込む為の準備をしている仮面の男を襲撃する。

そういう手順を彼らは頭に叩き込んでいた。特に、ゲオルクと曹操はそうだった。

ヴァルブルガも風体ほどに馬鹿ではないし、そうした手順も理解していた。

ジャンヌとヘラクレスは、ただ相手の背を討つことだけを考えていたし、ジークフリートはやや自暴自棄になっていた。

そして、ヴァーリは全てが事前の打ち合わせ通りになっていたことを理解していた。

聖槍、絶霧、十字架、それに己の白龍皇。それらが完全にそろっていた。揃えて、仮面の男の元に向かっている。

つまり、これから向かう先には歓待が用意されている。荒野の世界には、それが存在しているはずだった。

「こ～んぐらっちゅれいしょ～～ん♪」

それが、顔のない男の第一声であり、同時にそれを合図として音楽が静寂な世界を満たしていった。

おそらく、仮面の男が保護したであろう、混血吸血鬼や神器所持者たち。彼らが、手に持った簡単な楽器が、音階もなにもなく音を出していた。

誰もが必死の形相で、大きな音を出すことに必死だった。小さなラッパや、小太鼓を全力で奏でていた。

「ようこそ、君たちの墓場へ！」

顔のない男にしてみれば、ありえないほど短い言葉で彼らを出迎えた。

それは必然、彼らの困惑を楽しんでいる物でもあった。事実として、レオナルドとルネはデジタルカメラで記録映像を撮影していた。

完全に、ドッキリ成功の空気であった。

戦闘経験は豊富でも、戦闘技術は突出していても、戦闘能力が甚だしくとも。

それでも、戦闘における基本が乏しい彼らは即座に撤退という反射行動を選べなかった。

そして、それは正解だった。繊細に構築された霧の通路は、時間と共に霧散する。

「……なぜ、ここから侵入するとわかっていた!?」

かろうじて、曹操はうろたえながらも尋ねることができた。
本気で分からなかったのだ、顔のない男がそろえている人員は、結局のところ事前の情報を超えるものではない。
このまま真正面から戦えば、必然英雄派が勝つ。にもかかわらず、こうしてここで歓待したのかまるで分らない。
今日、こうしてここに来ることは、自分たちの意志であり、或いは冥府から得た情報によるものだ。彼らが意図的に流したものではないはずだ、いくら何でも冥府と顔のない男がつながっていれば流石に英雄派だって気付くし、そもそも英雄派が売られた理由がわからない。
わからないから、敵に尋ねていた。
「アグレアス、アレを盗む一件はこの時の為だ。レオナルドとルネの件もあったし、神滅具をお前たちが全部集めている、或いは順調にそろえているのか確信できなかった。なのでお前たちの邪魔になる旧魔王派を一網打尽にする必要があった。どうだった、邪魔者のいない組織で好き勝手するのは？」
つまり、この時点で曹操は精神的に敗北していた。
「お前達のことは旧魔王派から聞き出せていたが、やはり聖槍と絶霧しか持っていないことが確認できただけだった。強いて言えば、そこの十字架も集めうるということだけだったな。それじゃあ困る。それじゃあお前たちはこっちに攻め込んでくれない」
それは、普通ならありえない発言だった。
彼らにとって最高の武器である隔離空間という外堀を、誰かが超えてくれるように気を回すなど。
「だから、当初の予定通りヴァーリは殺しもしなかったし引き入れもしなかった。手元に置いたらこっちの戦力が強化されるし、そっちが掌中に収めることができる神滅具が不足するからな。運がいいと思っただろう、自分と敵対関係になったであろう、最強の白龍皇が戦力になったんだから」
はめられた、その事実を認めたのはヴァーリ以外全員だった。
どこからどこまでが敵だったのか、冥府も天界も彼と協力している

のか、それとも内通者がいるだけのことなのか。
　この時点ではわからないが、一つ明らかなことがあるとすれば、自分たちは目の前の男にはめられたという事実だけは英雄派とヴァルブルガは理解していた。
　だが、一番肝心なことに気付いたのはヴァルブルガだけだった。
　その上で、二番目に肝心なことに気付いたのも彼女だけだった。
「で、お前たちが知っているのかどうかは知らないが、旧魔王派と堕天使の精鋭を返還したのは、記録映像を魔王全員、或いは聖書の陣営のトップたちを集めて見せるためだ。大事なのは、ファルビウムが一人で見ることじゃなくて、他の有力者が一緒に見ることだ。映像を見てファルビウムが察しても、彼が黙ったり面倒がったら誰も気づけないだろうからな。【分度器忘れた】とか言って逃げられたらこっちも共倒れだしな」
　一歩後ずさろうとした彼女は、しかし足が引きつって動けなかった。
　この状況が、つまりは戦力的には相変わらずこちらが圧倒的に優位であるにもかかわらず、事前に自分たちが知っていた情報と一切矛盾せずに自分たちがどれだけ致命的な状況なのか理解したからだ。
　他の面々は、なんとかこの状況を理解しようとして顔のない男の話に耳を傾けていたが、そんな呑気なこともできずに絶望していた。
「しかし、彼は上手いことこっちの作戦を理解してくれたようだ。おかげで、こっちは万全に君たちを追い込めた」
「冥府と聖書の陣営が、俺たちを売ったというのか?!」
　それはあり得ないことだった。聖書の陣営と仮面の男が、或いは冥府と仮面の男が手を組むのならばありえないわけではない。しかし、聖書の陣営と冥府が、自分たちを売るために手を組むというのはありえない。
　少なくとも、この時点では英雄派も魔法使いたちも、禍の団として目立った行動はしていないのだ。冥府や北欧神話から資金援助は受けているが、まだ彼らの不利益な行為はしていない。であれば、今このタイミングで聖書と冥府の利害が一致するわけがない。

「いいや？　聖書の陣営とはある意味手を組んだが、冥府にはさっぱり。ただまあ、こう動くことは理解できていたがな」

旧魔王派は、文章や直接会うことでハーデスと連携を取っていた。それはつまり、顔のない男は事前に『知っていたハーデス』と『実際のハーデス』に乖離がないことも確かめられていた。

「冥府のハーデスは、普通だ。だから特定の情報に対してどう動くのかは簡単に予想できるし、情報の制限次第では簡単に誘導できる。冥府の王はな、聖書の神話全体を憎んでいる。だが、そのために自分の世界を犠牲にするつもりはさらさらない。普通に考えて、お前たちのような鉄砲玉を自由にさせて、肝心な時に自分に被害が及ばないようにしているのがその証拠だ。もしも全力で聖書の神話を滅ぼすつもりなら、お前たちを禍の団とか言うテロ組織なんぞに所属させるのではなく、どこかしらの神話の組織に所属させて正規軍に組み込むはずだからな。まあつまり、自分に危害が及ぶかもしれない状況になれば、安全策として自分が困らない使い捨ての戦力を、念のために自分たちへぶつけるはずだからな」

「使い捨て、だと?!」

「もしもハーデスが本気で自分たちを妨害するなり阻止するつもりがあるなら、お前達だけじゃなくて信頼できる戦力である死神もかなりの数を投入するはずだからな」

それには、何も言えなかった。結局のところ、英雄派はヴァルブルガとヴァーリ以外に戦力は自分たちだけである。

使い捨て、鉄砲玉。念のために使いつぶされる。そこの言葉に、誰も反論できない。

「使い捨てのお前たちだからこそ、情報を教えられたのもギリギリだったはずだ。自分が『知っているハーデス』は、片方が大勝ちすることを避けるために、双方に被害を与えるために助言をギリギリのところで送って、自分の懐を傷めずに被害を与える神だからな。とはいえ、こちらの意図したタイミングでこちらの意図した場所に出てきてくれるのなら、それはむしろありがたい習性に成り下がるが」

つまりは、仮面の男の思惑が全面的に成功するのは困るかもしれな

いし、しかし英雄派に時間を与えて曹操に大勝ちされても困る。だからこそ、双方がギリギリのタイミングで情報を与えたのだ。

事実である。曹操は戦力を精鋭しかそろえられなかったし、顔のない男にしてもこのタイミングで意図せずに攻め込まれれば、例え撃退できたとしても計画は延期か中止だっただろう。

とはいえ、それも計画の内だったのであれば、問題は全部解決である。なにせ、攻め込まれなければ困るぐらいだったのだから。

「いやあ、普通最高！　【気分はどうだ？】【ふつう】【そうか、普通が一番だ】いやあみんな普通でよかったよ……ぶっ殺したくなるほどにな！」

焼けた顔をむき出しにした、顔のない男は全身から怒気を吹き上がらせた。

かろうじて音を出していた、保護されている面々は腰を抜かしていた。

ルネとヴァレリーはかろうじてこらえ、レオナルドは呆れつつも受け流していた。

英雄派たちはなんとか踏ん張り、ヴァーリは満面の笑みを浮かべていた。

そして、ヴァルブルガは全てを諦めていた。

彼女は理解していたのだ、一番肝心なことを。

この男は、本物の『マジキ○』だ。

「どいつもこいつも、やる気があるのか!?　こっちがどんだけ頭を絞って作戦を考えても、予防線を張り巡らせても、結局思惑通りにしか動かない！　自分の敵はどこだ?!　自分をぶちのめそうとする奴はどこだ?!　自分を殺そうとする奴はどこだ?!　αナンバーズはどこだ、アベンジャーズはどこだ、プリキュアオールスターズはどうした、スーパー戦隊はどうした!!　なんでどいつもこいつも、全体重を込めて自分にぶつかってこない!!　お前達は明日があるとでも思っているのか?!　勝ち取らなければ、奪い取らなければ存在しない明日が、沈んだ夕日が昇るのが当たり前だとでも思っているのか?!　自分が死ぬとか、大切な人が死ぬとか思わないのか?!　他の誰が不幸に

なっても、自分は違うとでも思っているのか?!【……俺らには無いと思ったか?『決死の覚悟』が!】自分を殺すなら、差し違える覚悟で来い!」

自分の様に馬鹿っぽく振舞っているのとはわけが違う。ファッション感覚ではない、筋金そのものがおかしいキチ〇イだ。

顔がないのがおかしいのではない、目の模様が目まぐるしく変わっていることがおかしいのではない、性根が燃え盛っているのだ。

誰かの血を継いでいるとか、誰かの魂を継いでいるとか、誰かが作った武器を持っているとか、そんなことがどうでもよくなるほどの『個性』の塊だ。

「……その言葉を、そのまま返そう。君こそ、自分が死なないと思っているのか?」

顔のない男の激情に触れて、曹操はまだ闘志を保っていた。それだけでも彼が英雄の器を持っていることの証明だった。だが、その大器が完成するだけの時間が彼に残っているのかは疑問だった。

天の時、地の利、人の和。

曹操には、致命的に時間がなかった。

「罠を張られたことには驚いたが、どうやってこちらに勝つつもりだ? こちらの戦力は見ての通りだ。旧魔王派から情報を吸い上げたのであれば、我ら英雄派の実力を知らないわけじゃあるまい?」

「ああ、そうだ! 俺はヘラクレス! ギリシャ神話最大の英雄の魂を継ぐ者だ!」

「私はジャンヌ・ダルク。フランスの守護聖人の一人の魂を継ぐ者よ!」

「僕はゲオルク。メフィスト・フェレスの契約者の子孫であり、君の世界に穴を穿った者だ!」

「そして俺は曹操! 最強の神滅具を持つ、英雄たちの頂点に立つものだ! 君の揃えている戦力などで、この精鋭を打倒せるものか!」

自己を鼓舞するべく、雄々しく名乗りを上げる英雄派の面々。しかし、未だに状況を飲み込み切れていないジークフリートはそれに参加できず、ヴァルブルガはすくみ上り、ヴァーリは笑みを隠しきれずに

いた。
「……いいか、そっちは神滅具を持っているのかもしれないが、それはこちらも同じことだ！　仮にそちらになにがしかの隠し玉があったとしても、そんな安っぽい手でこちらを切り崩せると思うな！　それに、そちらは仮面の男、三つ目、お前が居なければ何もできない寄せ集めだ！　何を自信満々に構えている！　君たちの眼の前にいるのは、世界を変える力を持つ英雄英傑だぞ！」
その証拠に、未だに映像を記録しているルネもヴァレリーも、彼らの名乗りが出荷される豚の鳴き声にしか聞こえず、自分たち以上の実力者たちに憐れみの眼しか向けていない。
そして、顔のない男はわざとらしく泣きまねをしていた。
「【相手を貶めれば貶めるほどそれに勝てない自分の価値を下げることになるというのに…そんなことにも気付けないこの英雄……知能が低くてかわいそう……ううっ】」
ついに、ヴァーリが爆笑した。
「はっはっは！　どうやら器量が違うようだな！　少なくとも弁舌では曹操、お前では遠く及ばないな！」
「う、うるさい！　少なくとも、こちらの戦力は優勢だ、いや、それどころか圧倒している。それだけの足手まといを連れて、こちらに勝てるとでも思っているのか?!　仮に空間跳躍で逃がしたとしても、ゲオルクなら追跡できるんだぞ！」
自分に言い聞かせるように、曹操は叫んだ。
そう、羅列したように優位はちっとも揺らいでいない。だからこそわからないのだ、こうして自分たちをここへ誘導した意味が。
気づいていたのは、未だにヴァルブルガだけだった。
「よし、じゃあ逆転して見せようか。まずは神滅具の数からな……ヴァーリ！」
「ああ、そうだな。もういいだろう」
ふわりと、白龍皇の光翼を展開したヴァーリは、何気なく曹操たちの側から顔のない男の側へ歩いていく。
それはどう考えても立ち向かうとか、戦闘的なものではない。

友人に挨拶をするような気やすさで、白龍皇の鎧を身にまといつつ歩み寄る。
それに応じるように、赤龍帝の力を持った尾を生み出した顔のない男。
まさか、この空気のまま戦うのか、と疑った英雄派を置き去りにして、ヴァーリは顔のない男の隣に立ち曹操へ向いた。
それは、余りにも雄弁にヴァーリの立場を示していた。
もはや、英雄派は言葉もない。
「言ったはずだろう、曹操。【赤龍帝と戦う、というのであれば同行してやってもいい。だが、忘れるな。俺はあくまでも赤龍帝と戦うためにお前たちを利用するだけだ】とな」
「そういうことだ。お前たちを皆殺しにした後で、雌雄を決するという約束でな」
「ぼ、馬鹿な!? 監視は付けていた、お前たちは連絡を取り合ってはいないはずだ!」
「そりゃそうだろう、連絡なんてしてないんだから」
「ああ、お前たちは最初にこの男が話した通りにしか動かなかったからな。一々近況報告する必要がなかっただけの話だ」
曹操の絶叫に、なんでもなさそうに答える二天龍。
それは、無自覚な役者を笑う脚本家のそれだった。
「ヴァーリ！ 誇り高いドラゴンが、虚言を弄したのか?!」
「負け惜しみはみっともないぞ、曹操。それに忘れたのか?」
ヴァーリは酷薄な笑みを浮かべて嘲った。それはバトルマニアの持つ好戦的な笑みではない。それは陥れられた犠牲者を侮辱する、悪魔の笑みだった。
「お前達英雄と違って、魔王の子孫が、悪魔が悪いことをするのは当たり前だろう?」
歯ぎしりする英雄派の面々の中で、既に諦めた顔のジークフリート。もう、完全に流れは向こうの物だった。

まだ、なにがしかの隠し玉でもあるというのだろうか。いや、あって当然なのだろうが。

「これで神滅具の数は五対三。こっちが逆転したな……とはいえ、まだ戦力的には二対六と言ったところか？　よしよし、ここからさらに逆転しようじゃないか！」

三つある眼を細めながら、あざけり笑う顔のない男。

彼は両手を広げながら、ありえないことを口にした。

「ヴァルブルガ、自分の仲間にならないか？」

「ハイ！　なっちゃいま～す！」

即断即答だった。ヴァルブルガは、迷うことなく、心底安心したかのようにルンルンのステップで顔のない男に駆け寄っていく。

周囲が止める間もなく、あっさりと、仲間だった英雄を裏切っていた。

「お兄ちゃ～～ん！　ワタシィ、欲しいバッグがあるのぉ～～！」

「はっはっは！　しょうがないな～～、盗んだ金でよければ店ごと買ってやるぞ？」

「やった～！　お兄ちゃん大好き～～！」

小芝居を挟みながら抱き着くヴァルブルガを、軽々と抱える顔のない男。

尻軽女を絵にかいたような所作に、何故か嫉妬の視線を送るルネ。

しかし英雄派の面々はそれどころではない。ヴァーリが裏切ったのは意外だが、仕方がないと言えば仕方がない。元々彼は使いつぶす予定の戦力で、仲間だったわけではない。

だが、ヴァルブルガは違う。英雄派と同盟関係にある魔法使いの組織の幹部であり、明確な味方だったはずだ。

「な、なにを考えているんだ、ヴァルブルガ?!」

「裏切ったの?!」

「てめー!!」

「……どういうことだ、説明してくれ。事前に打ち合わせていたって

いうのか?!」
　比較的冷静に尋ねたのは、同じ魔法使いであるゲオルクだった。少なくとも彼は、事前に彼女がそうした取引をしていたようには見えないし、或いは催眠術にかかったようにも見えない。
　であれば、裏切ったのであれば裏切った理由があるはずだ。彼女は馬鹿の様に振る舞っているが、実際には計算高い女のはずだ。
「いや～～ん！　お兄ちゃん、アイツらね、私ぃを脅してたんだぁ！」
「はっはっは！　そうか、怖かったな。でも、大丈夫、お兄ちゃんが生まれてきたことを後悔させてやるからな」
「きゃ～～！　お兄ちゃん最高！」
「いい加減にしろ！」
　撮影を続けながらも、怒鳴り声を上げたのはルネだった。裏切ったヴァルブルガが何故か気に入らないらしく、また顔のない男が気に入らないのは元々なので、質問に答えるように促した。
「……あのさ、ゲオルク。多分、このお兄ちゃんが死んだらこいつらが路頭に迷うのは本当だと思うよ」
「だったら、なぜ？」
　赤龍帝の尾と戯れる魔女は、蒼白なまま応じた。
　かろうじて命を拾ったことに心底安心している顔だった。

「じゃあさ、私たちはアンタが殺されたらどうやって帰るの？」

　それは、二番目に肝心なことだった。
　ヴァルブルガの問いに、誰も答えられない。そう、当たり前すぎて疑問に思わなかったが、侵入するにゲオルクが必要ということは、帰るにもゲオルクが必要ということである。
　仮に顔のない男が死んだら、この世界はどうなるのであろうか。それは顔のない男にだってわからない。だが、少なくともここから離脱するには、ゲオルクが生存していなければならない。
　逆説的に言って、顔のない男はゲオルクさえ殺せばそれでいいのである。

自分が危うくなれば、ためらわず逃げる魔女故に、真っ先に気付いた事実だった。

「逃げても無駄よん、アンタがここにこれたように、このお兄ちゃんもアンタをどこまでも追跡できる。そんでもって、空間使い同士の戦いには誰も参加できないわ。そして、アンタが死んだらその時点で私たちはどうにもならない。そんな負け馬に、私が乗るわけにはいかないでしょ？」

奇襲なら別だった。こちらが先制攻撃できるならば、顔のない男を真っ先に排除することもできたはずだった。

だが、迎え撃たれては、いつ攻め込んでくるのか知られていれば、誘導されていれば、もうどうにもならない。

この状況以外なら、まだ勝ち目はあっただろう。だが、この状況だけは、面と向かってゲオルクと顔のない男が対峙したこの状況では全てが無意味だった。

「で、ジークフリート。君もどうだ？　自分の仲間にならないか？」

ジークフリートは、もう完全に思考が停止していた。
納得せざるを得ない怒涛の展開の連続で、すっかり諦めきっていた自分の命。それがまるで、降ってわいたように助かる道が現れた。
「……なぜ、私なんだ？」
ヴァルブルガが裏切ったのは納得せざるを得ない。彼女は元々絶対に勝つ戦いにしか興味がない。勝つだの負けるだの以前に、逃げることもできないこの状況では敵に回っても不思議ではない。
ヴァーリにしても、狐と狸の化かし合いでこちらが負けただけのことだ。彼を一方的に咎めるだけの資格がない。
だが、なぜ自分なのだろうか。このまま全員を丸め込む、というのはありえないにしても、自分を仲間に引きずり込もうというのなら、その意味が分からない。
とはいえ、ここまで作戦通りに話を進めた男である。どう考えても断れないだけの理由があるのだろうが。
「そうだな……別に大した理由があるわけじゃない」
と、いきなりとんでもないことを言い出した。
手袋に包まれた手でヴァルブルガの腹や頭を撫でまわし、弄びつつ、自分の行動に確固たる理由がないと言い切った。
しかし、その三つある眼は波紋模様を穏やかに描いている。
「ただ、一つはっきりしていることがあるとすれば、この場の英雄派全員を敵に回して殲滅する以上、この場にいない連中も敵とみなして皆殺しにすることにしている」
「貴方なら、たやすくできるでしょうね」
「しかしだ、誰か一人でもこちらの味方になるのなら、話は別だ。ジークフリート、君以外の全員が英雄派を裏切ったということになる」
「……そうかもしれないな。いや、違う」
ジークフリートは理解している。結局のところ、曹操にしてもゲオルクにしても、他の幹部にしても、自分たちを崇めてくれる兵士が欲しかっただけのことだ。

そういう意味では、最初から裏切るとか裏切らないとか、そういう信頼関係そのものが最初からなかったのだろう。

「ジークフリート……！」

もう、何が何だかわからないのだろう。ジークフリートをにらむ曹操の眼は、切羽詰まっているようではあるが、しかし具体的にどうすればいいのかわからなくなっている眼だ。

実際、それ以外の何物でもない。助命嘆願が通じる相手ではないのは明白だ。かと言って戦うにも選択肢を潰されすぎている。

「ねえねえお兄ちゃん、ゲオルクはねぇ、ここに来るのに数分は集中しないといけなかったのよぉ」

「へえ、そりゃナイス情報だ。出来のいい妹をもつとお兄ちゃんは楽ができていいなぁ」

「でしょでしょ？」

必死で媚びを売るヴァルブルガ。しかし顔のない男もノリノリなので、調子はピッタリである。

実際の所、顔のない男にしてもゲオルクがここに来れることは半ば確信していても、それが自分の様に悠々自適なものなのか、しばらく集中が必要なのか、或いはヴァルブルガや曹操の補佐が必要なのか、そこまでは分からない。

しかし、それをゲオルク同様の魔法使いである彼女が教えてくれたのだ。これでただでさえ揺るがなかった優位は盤石である。

「ああ、そうそう。それじゃあなんで君なのか、は言ってないね。それというのも、第一印象が大きいんだ。君、諦めてるだろ。そこがいい。何もかもを諦めていて、未来を望んでいない。そこがいい。普段なら話は別だが、結構こっちの作戦もギリギリでね。その点ヴァルブルガちゃんは信用できるけど、他の英雄たちはどうにも駄目だ。ゲオルクを殺すのは当たり前の大前提だし、奇跡を起こすとかいう聖槍も捨て置けないから曹操も殺す。となればジャンヌとヘラクレスだが、彼らはまだ諦めていない。どうにかできるんじゃないかと、うかつな行動に出かねない。であるならば、全てを諦めて観念している君だけだ。君ならうかつな行動を、冒険を、挑戦をしようとは思わないだろう」

「いや～ん！　お兄ちゃんてば、私のこと信用してくれるのぉ?!」
「やだなあ、ヴァルブルガ。君、自分から逃げられないことぐらいわかってるだろ?」
　三つの白い目に睨まれて、びしりと硬直するヴァルブルガ。そう結局のところ、勝ち負け以前に逃げられないからこそ、媚びを売り恭順の意思を示したのだ。
　完全に性格を見切られている。それにひるみそうになるが、それでもすべきことは変わらない。精一杯媚びを売って気に入られるように努めるだけだ。
「キャー！　お兄ちゃんってば、なんでもお見通しなのね！　抜け目のないヒトって大好きよ！」
「自分も物わかりのいい人は大好きさ……ぶっ殺したくなるほどな」
　ジワリ、と怒りを一瞬滲ませて、ヴァルブルガをしっぽで遠ざけてヴァレリーに預けた。
　ヴァレリーに抱えられたヴァルブルガは、歯の根が合わないかのようにびくつきながらも、かろうじて駆け出そうとはしていなかった。
　とりあえず、命を拾ったことに安堵したのである。漏れ出た自己矛盾の感情は、しかし実行には移されなかったのだから。
「で、どうする?　英雄派全員仲良く墓に埋まるか。もしくはそこの連中を裏切って末端と一緒に助かるか。殺すからには面白おかしく残虐にやるが、葬儀は厳かに懇ろにやるぞ。どっちにしても大差ないのかもしれないしな」
　ふむ、とジークフリートは改めて周囲をみる。そこには怒りに滲んだヘラクレスと縋るような眼のジャンヌダルク、不安そうなゲオルクと、体面を保とうとしている曹操が居た。
　さて、どうするか。元より自分の命など、未来など最初からない。しかし、辛い目も苦しい目もごめんである。あんなのは二度と味わいたくない。
　なによりも、顔のない男の発言は何から何まで筋が通っている。つまり、もう完全にこの場の面々は死ぬことが決まっている。ジークフリートが交換条件などを持ちかけても、生かしておくことはできない

のだ。
なぜ、こうもキャラクターを知られているのかはわからないが、選択の余地はない。
それに……英雄派の末端が死なずに済むというのは、少しうれしかった。
「また、私は裏切るかもしれませんよ。エクソシストを裏切り、曹操たちを裏切ったように」
その言葉に、いよいよ孤立無援の英雄たちは絶望する。
「安心しろ、ジークフリート。罪悪感を感じる必要はない」
それはつまり、ジークフリートは彼の仲間になることを示していた。
「もしも自分を裏切れば、罪悪感など感じる余地もないほど後悔を味合わせてやる」
「それは怖いな」
ジークフリートは、英雄たちに背を向けて歩き出した。ヴァーリの様に、ヴァルブルガの様に。
「では、裏切らないように注意するとしよう」
「歓迎するぜ」
そして、犯罪者の隣に立ち、敗残者たちに向き直っていた。
「さて、交渉は終了だ。ヴァーリ、ジークフリート、ヴァルブルガ。これから残りを全部自分が殺すから、その間ルネやヴァレリーたちを守ってくれ。他は何も望まない」
欲しい人材のスカウトを終えた強盗は、欲しいものを死体からはぎ取るべく闘志をほとばしらせた。
それは、奇しくも英雄と呼ばれるものだけが持つプレッシャーだった。
武将や王族。それら人の上に立つ資質の持ち主だけが持ち得る、背負うもの、成すべきものを持った者だけが発揮できる覇気だった。
明確な害悪が、猛毒の意思が体から吹き上がる。
そんな彼に、自らの矜持を語ろうとしたものが居た。
「――――――――!」

そんな彼に、助命嘆願を申し出ようとしたものが居た。
「～～～～～～！」
裏切った彼らに、呪いの言葉を発そうとしたものが居た。
「・・・・・・・・！」
それらを全部聞いたうえで、顔のない男は仮面をかぶって言い切った。
「【お前はもう、死んでいる】」

それは、決まり切っていたことだった。既に、誰も助からない。仮面の男と向き合っている英雄たちに、未来などもはやない。
「もう、お前たちは死んでいる。呼吸をしていても、脈拍があっても、脳波があっても、出血がなくても、病気がなくても、疾患がなくても、もう死んでいる。今のお前たちは、アクションゲームで例えるなら被弾する直前でポーズになっただけの、動き出せば即死するキャラクターでしかない。ノベルゲーで例えるなら既にバットエンドのルートに突入し、どういう選択肢を選んでも、結局死に方が変わるだけだ。ＲＰＧで例えるなら、規定されたターン以内に倒さないと強制的に全滅させる敵を前に時間切れってやつだ。【きさまはチェスや将棋でいう『詰み（チェックメイト）』にはまったのだッ！】一応言っておくが、自分はぶっちゃけ殺す必要だってないんだ。この世界にまともな生物なんてないからな。英雄だって食わなきゃ死ぬだろ。餓死とか枯死とか自殺とか嫌だろ？　英雄らしく殺してやるって言ってるんだから、ありがたく殺されろよ」
仮面の男は、そのウサギのような仮面の隙間から見える三つの眼で英雄たちをにらんだ。波紋模様に勾玉の浮かんだそれは、持ち主の心情を表しているように毒を含んだ赤色だった。
「これからお前たちを別の隔離空間に移動させる。ジャンヌとヘラクレスとゲオルクは氷の世界、曹操だけは砂漠の世界だ。ああ、ちなみに言っておくとゲオルク、お前ならその空間跳躍に抵抗できるかもしれないが、その場合ここに残ることになるぞ。いくら上位神滅具とは

いえ、そもそも戦闘用じゃないし、お前自身の素の力もヴァーリほどじゃないだろ。自分とヴァルブルガとジークフリートとヴァーリを相手に一人で戦える自信がないなら、ヘラクレスたちと一緒に移動した方がいいと思うがな」

仮面の男にとってこの場で唯一警戒に値するゲオルク、故に何が何でもこの男だけは排除しなければならない。それゆえに態々この場でヴァルブルガとジークフリートを勧誘したのだと、多少なり戦術を心得ている曹操は理解する。

仮面の男の空間跳躍がどのようなものかはわからないが、流石にゲオルクを相手にして無理が通るものではないのか、あるいはそうだと確信できなかったのだろう。

だからこそ、自分の元々の共犯者であるルネやヴァレリー、レオナルド、そして保護している面々を守るために、一瞬であれ生じるであろう自分の隙を埋めてもらおうとしていたのだ。

保護している面々をここに集めたのも、つまりは守りやすくするため。或いはこちらから守り切れることを示すために。

人質を取ろうとしたゲオルクが離脱するなりして、無駄な手間が発生することを避けるために。

空間使い最強であろう仮面の男、それと並びうるゲオルク。しかし、こうも何もかもが密集していればその強みは封殺される。

厭味ったらしいほどに、成功してしまえば盤石な罠だった。

「ちなみに、曹操。覇輝とやらを使えば案外離脱できるかもしれないが、それって消耗が大きいんだろ？　おまけに狙った効果を出せるわけでもない。仮にフェニックスの涙を使って回復できたとしても、こっちは生憎行ったり来たりは簡単でね。逃げても探して捕まえて引きずり込むからそのつもりで……んじゃあヴァーリ、駆除してくる。少し待っていてくれ」

「ああ、なるべく早くにな」

必死の形相で、何とか抵抗しようと攻撃を行う曹操たち。しかし、何もかもが手遅れ。放った攻撃と一緒に、仮面の男と英雄たちは消え去っていった。

「……世界は、広いわね」
腰を抜かしたヴァルブルガは、矜持ゆえか強がりを言った。
自分も多少なりねじが外れている自覚があったが、アレはモノが違う。
自分のチンケな悪とは、明らかに規格や分類が異なっている。
アレが本物の異常者なのだとしたら、自分は十分健常者だ。
作戦の全貌を聞いても、はっきり言って自分では思いつかないし実行しないし成功させられるだけの自信がない。それをさらりとやり遂げたあたり、というか作戦の一部でしかない辺り、神がかっている。
「……裏切ったはいいが、どう説明したモノかな」
ジークフリートは、もうなにも疑ってはいない。あるいは、ゲオルクも死んで仮面の男も死んで、みんな出られなくなるという可能性もまだあるのだが、それになるとは到底思えない。
もう、何から何まで作戦通りに進んで作戦通りに殺して帰ってくるのだろう。
こうなると、口数の少ないジークフリートとしては残った英雄派をどうまとめたものかの方が不安だった。どう考えても、困惑と混乱が支配するだろう。
「ウチのクソに任せれば？　恐怖による支配とか説得とか得意よ、アイツ」
ややふてくされ気味に、ルネはそう語る。
あれから、つまりは前回の旧魔王派や堕天使との戦闘以降も、彼女はちゃんと努力していた。
だが元々が人間でしかなく、加えて獅子王の戦斧にしてもそこまで強力な神器ではないため、英雄派たちと戦うことは許されなかった。戦力に数えられなかったのだ。
仕方がないとはわかっている。結局、どれだけ必死に、真面目に、熱心に、努力に努力を重ねたとしても、それは『普通』なのだ。戦闘自体が命がけなのだから、それの下準備が命がけなのは当たり前なのだ。
自分の隣にいるジークフリートとやらも、自分が過ごした強くなる

ための日々の、何倍もの時間を、何倍もの辛さを味わってきたのだろう。とてもではないが、自分だけを特別視はできない。

あのクソは語った。【始めるのが遅い連中はどうあがいても早くから始めていた連中に及ばない。努力の総数は決して揺るがない。それをひっくり返すものが才能だが、どうにも世間はそれを否定したがる。努力の無力さを知りながら、無駄に努力を賛美する。醜悪な連中だ。学校に通いながら、部活をしながら、デートしながら、いちゃつきながら、昇格の為の勉強をしながら、合間合間でこなす努力などタカが知れている。死ぬ気でやるだとか、優秀な先生がいるだとか、そんな言葉でごまかしたがる。馬鹿にしやがって、馬鹿にしやがって、馬鹿にしやがって！　強くなりたいと思って一年もたたずに、皆と一緒に毎日努力しています、程度で最強になるやつが努力を語るんじゃねえよ！】と、いつものように恨み節を込めながら。

結局、努力するということは努力そのものが辛いとかそういうことではなく、したいことができるだけの時間が残らないから辛いのだろう。

そして、それだけのものを奉げたにもかかわらず、何も成せなかった、何も残らなかったことが、彼にとっては辛いのだろう。世界を滅ぼしたくなるほどに。

「……アルビオン。もう少しだ……もうすぐ、答えが出る」

『ああ、そうだな……決着がつく』

最強の白龍皇と最悪の赤龍帝。

それが、ドライグとアルビオンにとっての最後のケンカだ。

多分、そうなるのだろうとヴァーリとアルビオンは予感していた。

同時に、この上ない高揚と歓喜、負けたくないという意思が燃え上がる。

勝ちたいのだ、あのにやけ面に敗北感を押し付けたい。最強の魔王も最強の英雄も、誰も勝てなかったあの男に勝利したいのだ。

例えそれがあの男を殺すことになったとしても。

自分たち以降が、自分たち以前のように不幸になったとしても、この昂ぶりに嘘は付けない。

「いやあ、寒い寒い。凍えそうだ」

そこは、切り立った山と、吹雪の世界だった。わずかな明かりが天から漏れているが、決して視界良好ではない。吹雪そのものが障害となり、白く視界を埋めていた。

とはいえ、三つある眼に特別な機能がある仮面の男にしてみれば、この程度は昼間も同然なのだろうが。

決して厚着ではないジャンヌとヘラクレス、長袖とはいえ防寒着ではないゲオルク。彼らは寒さ以上に過酷な悪意にさらされながら、かろうじて怨敵と向き合っていた。実際の所、勝機はまだあるのだ。ゲオルグが生きているままで仮面の男に勝ちさえすれば、少なくともここにいる3人は生還できる。

そして、他ならぬゲオルクだけは、仮面の男にしても放置できない。だから態々殺しに来たのだ。

空間跳躍に抵抗しなかったゲオルクも、ヘラクレスやジャンヌという助勢が期待できることに加えて、ヴァーリなどの裏切り者があの世界に残るということから、孤立している仮面の男と戦って勝てる、という希望があったのだ。

態々仮面の男が、それを選んだという事実から目を背けながら。

「お前たちも寒いだろ？　だってほら、こんなに雪が降ってるんだ、餓死の前に凍死するよな。暖めてやろう。それに暗くて仕方ないしな」

ただ、ゲオルクは忘れていた。結局のところ、空間使い同士の戦いに、他の凡庸な戦闘者は付いていけないのだと。かえって足手まといにしかならないという、当然の事実を。

仮面の男は、両の手のひらから黒い棒を生み出した。そして、その棒が一定の長さになったところで、空間跳躍の術を使った。

「【どうだ明るくなったろう】」

おそらく、全く関係のない話だが。神話の英雄ヘラクレスと、史実

の英雄ジャンヌダルクの直接的な死因は一緒である。つまり、焼死だ。

天手力。仮面の男の瞳術の中の空間に属する技の中では非常に規模が小さく、しかも射程も長いとは言えないが、最強と呼ぶに足るこの術。

二つの物の場所を入れ替える。ただそれだけの術ながら、こうして吹雪の中ならば、棒にへばりついた雪の一欠けらと視界に写した英雄二人の場所を入れ替えてしまえば、頑丈であろうがなかろうが、二人の英雄を串刺しにできる。

そして、天照による黒い炎で燃やしてしまえば、特別な再生能力を持たない二人は死ぬしかない。

まして、黒い棒による拘束が成されているのであれば尚のことに。

「ヘラクレス、ジャンヌ！」

「残念だったな……曹操なら何とか出来たかもしれないが、所詮は神滅具を持ってない普通の英雄二人。こうして殺すのは訳がない。多分お前に直接術をかければ抵抗されたかもしれないが、いやあ無駄だな。お前だけ抵抗できても意味がないんだよ」

あっさりと、空間使い同士で対峙する。この時点で、ゲオルクは戦闘者として空間を操る一点において負けていると理解していた。

余りにも初動が早すぎる。最初にこちらを雪山に送った術もそうだが、術を使い始めてから効果を発揮するまでの時間がなさすぎる。

同じ空間使いである自分でも、対処できるかどうかギリギリの、極めて出足の速い技ばかりだ。

そして、ゲオルクは元々魔法使い。空間を操る神器はあくまでもそれ専用であり、戦闘にはあまり用いない。だが、この男は違う。戦闘に空間を組み込みすぎている。

相性は悪くないが、こちらより向こうの方が勝っている。極めて単純に速度が勝っているのだ。

「残念だな……ジョジョの奇妙な冒険でも時間干渉能力者同士が一騎討ちをしていたが、はっきり言って一騎討ち以外では勝ち目何ぞなかっただろうさ。距離とタイミング、それが戦闘の全てと言ってい

い。再生能力があったりよほど固かったり無駄に増殖するとなると話は別だがな。もっと真面目に、真剣に、自分のできることと向き合うべきだな。魔法使いとしてはどうだか知らないが、空間使いとしての物は程度が知れる」

黒々と燃え盛る、ジャンヌとヘラクレス。それを両手に盾の様に構えている仮面の男は、既に勝利を確信していた。いや、最初からそうだったのかもしれないが。

「だが、同じ空間使いであるこの俺をそう簡単に倒せるとは思っていない。そうだろ？」

「いいや、簡単さ。こっちの三つ目が伊達だと思ってるのか？」

びくり、と空間移動の前兆をとらえたゲオルクは、自分の真正面に魔法陣による防御壁を構築する。

その魔法陣に向けて、防御されていることを理解しながら、移動した仮面の男は片手に持っていたモノをたたきつける。

「プリキュア、バーニングヘラクレスハンマー！」

おそらく、英雄故の生命力でヘラクレスはまだ生きていた。そのヘラクレスの首根っこをつかんで、態々防御しているゲオルクにたたきつける。

「プリキュア、ファイアージャンヌソード！」

まだ生きているのか怪しいジャンヌの足首をつかみ、まるで鈍器の様にぶん回して魔法陣にたたきつける。

黒い炎の火の粉が舞い、雪で隠れた地面に落ちて隠れる。

「プリキュア、ダブルヒーローアタック！」

攻撃方法が悪質すぎる。非道な行いを嬉々として行うそれは、人間の論理的な限界を超えていた。

その悪意に圧されながらも、ゲオルクは踏ん張って魔法陣を重ねる。

ジャンヌとヘラクレスを助けようとは思っていないが、最悪でも自分と曹操が生還できれば、まだ何とかなる。そう信じて、己を奮い立たせていた。

「【ベリーソードは囮よ！】」

その背中に何かが突き刺さり、抉って腹部に達していた。
「【注意一秒、怪我一生】自分の神滅具を忘れたのか？　自分の禁手の形態を忘れていたのか？」
赤龍帝の砦、そう名付けられた禁手の亜種。それの変幻自在さは、本来の赤龍帝の籠手の禁手、赤龍帝の鎧の比ではない。
なんのことはない。しっぽを伸ばして、魔法陣を迂回させて背中から刺しただけなのだ。
そんな小細工に、ゲオルクは対応できなかったのだ。
「白眼なり写輪眼なり輪廻眼があれば、こんなどうしようもない小技じゃ当たりもしなかったよな。まあ、持ってないことを知ってたからそうしたんだが。あれだ、お前がループ物の主人公なら、死んでもやり直せるだろ。頑張れよ、来世でな」
魔法使いでしかないゲオルクは、腹部に穴が開けば生命維持に支障をきたす。つまりは、魔法陣が維持できなくなり、仮面の男の鈍器の餌食となる。
「仲良く燃え上がりな……そして焼き鳥だ」
黒く燃え上がり、力なく倒れるゲオルク。その上に折り重なるジャンヌとヘラクレス。そして、その三人を貫くは仮面の男の封印術。
「須佐能乎！　十拳剣！」
青く燃え盛る天狗。その手にした瓢箪から吹き上がる青い剣。それが三人を突き刺し、そのまま飲み込んでいく。相手を突き刺し、そのまま魂ごと幻術の世界に封印する幻術の一種である。
「……Ｆａｔｅのヘラクレスやジャンヌなら、燃えようが貫かれようが、怯みもしなかっただろうな……まったく……これが英雄だってんだから、強いとか弱いとか以前の問題だよな。名前負けもいいところだ」
理不尽な憎悪をたぎらせながら、仮面の男は最後の英雄の待つ世界へと転移する。

「……そうか、ゲオルクは負けたのか」
「ああ、封印した」
熱砂の世界で待っていたのは、意外にも落ち着いていた曹操だった。
その眼には開き直りに近い何かが宿っていた。
しかし、自殺志願者のそれではなく、明確に闘志を宿していた。
「一つ感謝したい、君がこうして前に現れてくれたことだ。君が言った通り……このまま放置されていても、乾いて死ぬか自殺するかだっただろうからね」
少し時間を置いていたからか、曹操は汗まみれになりながらも冷静だった。
自問自答したのだろう、戦略や戦術を練り直したのだろう。そして至った結論は、最後まで英雄らしく戦うという自棄だった。
しかし、実際の所、他にできることがあるわけでもない。
であれば、最後には矜持を示す。それが英雄の長であろうとした曹操の判断だった。
「へえ……でもまあ……無駄だがな。お前は何かを残せるのか？」
「……どういうことだ？」
【ああ、安心した】お前は、お前という英雄は、何かを世界に残せたのか？　お前に信念があり、意思があり、大義があるならば、それを誰かに伝えて残せたのか？」
その言葉に、曹操は炎天下のなか生唾を呑む。
その言葉には憎悪が込められていた。
「【生き残るのは……この世の『真実』だけだ……真実から出た『誠の行動は』……決して滅びはしない……】【ロジャーの意志を継ぐ者達がいる様に、いずれエースの意志を継ぐ者も現れる……】〝血縁〟を断てど、あいつらの炎が消える事はねェ……】【キタン……お前の遺志は受け取った】【木ノ葉舞うところに……火は燃ゆる……火の影は里を照らし……また……木ノ葉芽吹く】遅かったな……お前は何もない。お前には力はあっても残すべきものが無かった。だから、誰も連れていないんだろう？　お前たちは自分にこだわっていた。成した

いことがあるのなら、自分が死んだときにも備えるもんだ」

その言葉は、曹操には酷だった。

確かに、彼にとって部下とは手足であり、後継者など考えたこともない。若年故に仕方がないと言えばそうだが、仮面の男が死ねば彼の一党が分解すると同様に、英雄派も曹操が死んだ後に曹操の後を継ぐ者は現れない。なぜならば、そもそもそんなものは最初からなかったからだ。

余りにも痛切な言葉が、曹操に突き刺さっていく。今更覚醒したところで、何もかもが手遅れだと言わんばかりに。

しかし、その後に続く言葉には、曹操も頷くことはできなかった。

「お前達は自分と変わらない、イズムの無い自分本位の犯罪者だ」

その言葉を発した三つの眼の男の瞳には、等しく確固たる何かが燃え盛っていた。

それは、自分にはなかった断固たる意思そのものだと、思わずにはいられなかった。

「……カッコよく死ねると思うなよ……お前はみっともなく、盛り上がりに欠けるぐらい地味に殺してやる。まず、いたぶって弱らせる。そのうえで、まず耳をもぐ、鼻を削ぐ、指を一本一本落とし、手足を丁寧に切除する。みっともなく泣き叫ぶ英雄の様を記録に残したうえで、生きたまま墓に埋める。それで、終わりだ。どうだ、完璧な作戦だろう?」

それは、憎悪だった。なぜこうも憎しみをたぎらせることができるのかわからないが、自分自身を焼き尽くすほどにたぎっていた。

「……そう簡単に行くと思っているのか?」

曹操は己こそ人類最強である、という最後の拠り所に宿った誇りを侮辱され、英雄の頂点たる根拠を全力で起動させる。

それは最強の神器。

「黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）」

それは最強の神滅具。

「禁手（バランスブレイカー）」
それは最強の聖遺物。
「極夜なる天輪聖王の輝廻槍（ポーラーナイト・ロンギヌス・チャクラヴァルティン）」
人類が手に入れうる最強の刃。
聖槍の禁手、その亜種を発動させた曹操は、決然たる眼で仮面の男の三つの眼をにらんでいた。
彼の周囲には禁手の最大の特徴である七つの宝珠が浮かび上がり、威力と神秘を秘めていた。
「これは禁手亜種。つまりは君でもその機能を知っているはずのないモノだ……」
「ああ、そうだな。知っているはずのないモノだ」
「……そして、絶霧とちがって、この禁手にはいくつもの機能がある！初見で見切り切るなどあり得ない！」
「あーそーですねー」
心底どうでもよさそうに、自分でも禁手である赤龍帝の砦を尾の様に揺らめかせている。
侮っている、というのであれば好都合だった。曹操は仕掛けようとして、しかし背後に違和感を感じて宝珠の内一つの特性を発揮させる。
「神威雷切（カムイらいきり）！」
空間跳躍によって背後に回り込んだ仮面の男の背後からの奇襲。
それを空間使いとしてのそれではなく、体術使いとしての直感で回避する。
とはいっても、その移動方法は瞬間移動だったのだが。
「馬宝（アッサラタナ）。絶霧や君ほどじゃないが、空間移動なら簡単にできる。そしてこれは七つある宝珠のうちの一つでしかない！」
「そうか……まあ、関係ないな」
攻撃のモーションが終わる否や、再度馬鹿正直に曹操の背後へ瞬間移動し攻撃を仕掛ける仮面の男。
赤龍帝の籠手で身体能力を強化しているだけに、その速度はそこそこの物であり、かつ瞬間移動によって一瞬にして間合いを詰めるだけ

に、反撃もできず曹操は再度馬 宝（アッサラタナ）によって緊急離脱する。
「懲りないな……！」
「いや、これでいいのさ」
それからしばらく、何度も何度も曹操の背後に回る顔のない男と、そこから離脱する曹操のいたちごっこが始まった。
途中、いら立った曹操は他の宝珠を用いて自分の背後へ攻撃してみるが、三つある眼の機能かあっさりと回避されてそのまま背後を攻撃される。
「だが、これでは千日手だぞ！」
炎天下で汗だくの曹操は、いい加減ワンパターンになってきた戦いに怒りさえ覚えていた。
これでは、いつまでたっても終わらない。いい加減他の戦い方に切り替えるべきだ。だが、このままではいつまでたっても中断させることはできない。向こうに切り替えてもらうしかない。
それが、詰みの一手だと気付かないままに。
「じゃあお前は千日それができるのか？」
攻防の最中、不思議そうに仮面の男は尋ねた。
「……え？」
「いやな、お前はたいしたもんだ。至近距離の死角からずっと攻撃してんのに、いつでも回避できているんだからな。だが、それはあとどれぐらい持つ？」
そんなことが、分かるわけがない。曹操はテクニックタイプだが、宝珠の一つの機能でしかない瞬間移動を連続でいつまで繰り返せるなど、確かめたこともないし確かめようと思ったこともない。
しかし、神滅具の禁手を長時間維持し続けるとなると、ましてそれを連続で機能させるとなると、まして炎天下で戦い続けるとなると。
「ああ、一応言っておくと……こっちはほぼ無制限だ。魔獣創造のモンスターからエネルギーの供給を受けているし、最悪疲れたら帰ればいいだけだしな」
曹操は理解した。仮面の男は、自分が疲れ果てるまでこれを繰り返すだけなのだと。

そして、七つ機能がある禁手にしても、この状況に対応できる宝珠は一つしかない。
つまり、打開策はなかった。
「く……くっそぉーーーー！」

「よく頑張ったな……でもまあ、結構急いでるんだ。ヴァーリを待たせると悪いしな」
地面に倒れた男。彼は疲労していたし、疲弊していた。
「じゃあ、約束どおり、まず、いたぶって弱らせた。次は耳をもぐ、鼻を削ぐ、指を一本一本落とし、手足を丁寧に切除する。みっともなく泣き叫ぶ英雄の様を記録に残したうえで、生きたまま墓に埋める」
体が満足に動かなかった。疲労以上に、体内に電解質と水分が足りなかった。
「【気を楽にしろすぐに終わる】」
つまり、この男は熱中症で倒れていた。
そして、彼が適切な治療を受けることはありえなかった。

ジョジョ　その血の記憶～ｅｎｄ　ｏｆ　ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ～

地球の日本時間では、そろそろ８時か７時と言ったところだろう。
ここには太陽がないのでそもそも自転を基準にした時間は存在しないのだが、それでも何故か日本を基本とした時間設定を行っている。
「終わったぞ」
英雄派の残りと共に姿を消した仮面の男は無傷で帰還した。それを喜んでいいのかわからないが、とりあえず破たんしたというわけではないらしい。
「あっさりとしたものだな。曹操と戦うと言っていたからには疲弊していたかと思っていたが、時間はかけたが安全策に徹したということか？」
「ああ、ずっと相手の背後に瞬間移動し続けた。行った先が砂漠ってこともあって、すぐに倒れたよ。どれだけ御大層な槍を持っていても、所詮は人間、汗もかくし咽も乾く。戦闘前には水筒の一つでも持っておくべきだったな」
「……そんな簡単な方法で倒せるものなのか？　曹操の聖槍の禁手は七つの機能を持った形態だ、全部を十全に使えば……」
「倒せるさ。アイツは強い武器をもてあましていただけのアホだ。七つ機能を設定できるにもかかわらず、シナジーもコンボも考えていない。一つの局面や相手に対して一つの機能で対応しようとしただけのことだ。あげくダブリまであるしな。一つの球に対策を絞って、そこを徹底的に突っつけば、倒すのなんざ軽いもんだ。多分アイツデュエリストにもポケモントレーナーにもボーガーにも向いてないな。スタンドバトルとかしたら即負けそうだ」
その服装は、返り血にまみれている。おそらく、曹操に対して想像しうる限りの拷問をしたのであろう。その惨劇が比較的短く終わったことは、彼にとって比較的幸運であることは、確かだった。

「コンボ、シナジー……後学のために聞きたいんだが、シナジーとコンボとはどういう意味だ？」

曹操のことを高く評価していたヴァーリとしては、攻略法をあっさり見破ったことに興味がわいた。顔のない男ほどではないが、彼とも戦ってみたいと思うほどに。

仮に仮面の男がなにがしかの手段で曹操の手札を全て知っていたとしても、それでも人類最強の実力を持つであろう彼を、こうも危うげなく料理したことは彼としては気になるのだろう。

もちろん、それを知っても怖気ずくなどあり得ないことだったのだが。

「そうだな……要するにアイツは球を複数使って、能力を組み合わせて戦おうとは思っていなかった。ああくれば、この球で。こうくれば、あの球で。そんな具合に思考を停止させていたのさ。馬鹿馬鹿しい話だろ？　相手が対応するとか、適応する能力を持っていた場合のことを考えていなかったのさ。自分ならそうだな……例えば分裂する球と小さくなる球を作るな。大量の球で警戒させたところを、小さくした球で叩く。それを起点にして相手の動きを封じる球とか相手を操作する球とかをぶつける。後は槍で突き刺せばいいだけの話だ。攻撃する球なんて必要ない、槍があるんだからな」

「なるほど、それは手ごわそうだな……」

仮面の男の説明を聞いてヴァーリは喜びつつ納得したが、ジークフリートが一番戦慄し、ルネやヴァルブルガも恐れおののいていた。

実際、曹操が戦うところを詳しく見たわけではないが、仮面の男の言う作戦は非常に合理的で、能力を知っていたとしても対処が難しかった。

というのも、最初の二つは当てるための機能と言っていい。単独でも対処は難しいが、双方がそろっていれば対応は困難を極める。

そこで、当たりさえすれば相手を拘束できる、封じることができる球を当てられれば、つまり当てさえすれば勝てる球をぶつければいいだけの話だ。

実に合理的でいやらしい。

「まあ、要するに考えが甘いんだ。真面目に考えていないから、手抜きや油断が生じる。どんだけ技が優れていようが武器がご立派だろうが、戦うのは人間だ。心技体が伴っていなければ、戦士は戦士たり得ない。それだけのことだ」

「耳が痛いな……」

生き残ってしまったジークフリートも、精神的に安定しているないし完成しているとは思っていない。

おそらくあの時首を縦に振っていなければ、自分も他の面々同様にあっさりと殺されていただろう。

最初から勝てる相手ではなかったということとか。幸運に感謝しつつも、先ほどまで同士だった者たちの冥福を祈らざるを得ない。

「んじゃあ、ジークフリート。これを、お前に」

と、仮面の男はどこからか取り出した輝く槍をジークフリートに押し付けた。

それが何なのか、曹操の仲間だったジークフリートは良く知っている。

「……聖槍か。曹操からはぎ取ったのか？」

「強盗だからな。欲しいものがあったら殺してでも奪うことに決めている。そんでもって、生憎これは要らないんだ。槍術の心得があるわけでもないし……まあできなくもないが、これはお前が使ってくれ」

あっさりと、世界最強の神滅具を譲渡する辺り、この男は本気でこの槍にたいした価値を見出していないのだろう。もしくは、自分よりも適性が有る者に使わせた方が有効だと判断しただけなのかもしれないが。

とはいえ、自分の陣営に寝返ったばかりの戦士に、最強の武器を預けるなど正気ではない。例えそれを使っても自分が負けないと確信していたとしても。

「……曹操には悪い気もするが、ありがたく使わせてもらおう」

「ああ……ヴァルブルガ。お前には絶霧を預ける。とはいっても、戻ってきたら返してもらうが」

「……戻ってきたら？」

自身が既に神滅具を持つヴァルブルガは、ジークフリートほどに感動はない。しかし、それでも上位神滅具が自分の手にあることは震えざるを得ない。

というよりも、これを十全に使えたとしても、目の前の男に勝てるとは全く思えないのが恐ろしいことだ。

「これから、ヴァーリと一対一で戦う。これぱっかりは……勝てるとは言い切れないんでな」

宝珠の形にまとめられた、上位神滅具『絶霧』。仮面の男が自分で使う予定だったそれを託されたヴァルブルガは、改めてヴァーリと仮面の男を見比べる。

確かにヴァーリは最強の白龍皇だ。それは今でも疑っていない。しかし、今目の前にいる男は、単純な戦闘能力でも曹操やゲオルク、ジャンヌとヘラクレスを処理してきた化け物だ。

如何にヴァーリが強いと言っても、この仮面の男がやったようにあっさりと勝てるとは、到底思えない。

「陰遁に属する術……幻覚も精神支配も空間跳躍も、自分は一切使わない。小細工抜きで真正面からぶつかって、死ぬまで戦う約束をしている」

その言葉に、ジークフリートはようやく納得した。ヴァーリは洗脳されていない。それは英雄派で確かめたので事実だ。加えて、ヴァーリがそうした腹芸を好むとも思っていない。であれば、ヴァーリにとっての餌を用意したということだったのだ。

だが、はっきり言ってそれを実際に守る必要はあるのだろうか。ジークフリートはともかく、ヴァルブルガ辺りが助太刀することは十分に考えられる。

言ってしまえば仮面の男にとってヴァーリは用済みで、無残に適当な手段で殺しても問題はない筈だった。

少なくとも、ジークフリートやヴァルブルガにとっては。

「ねえ、お兄ちゃん。私がこれを持って逃げるとか、思わないの？」

「なんだ、ヴァルブルガ……自分を相手に持ち逃げできる自信があるのか？」

何故か嬉しそうに笑った仮面の男、もちろん顔は見えないが、声色はいかにも嬉しそうだった。
「一回してみたかったんだよな、粛清ってやつ。ルネもヴァレリーもレオナルドも、自分に反抗する意思はあっても反逆する気骨はないからな。そういう意味では確かに、お前なら自分を裏切るかもな……いいなぁ、それ」
ぞわり、とヴァルブルガは背筋が凍った。
不思議に思ったというか、不可解だったというか、不安だったので確認したかっただけなのだ。誓って、全く、逃げるつもりはない。だというのに、聞くべきではなかったと後悔していた。
本当にうれしそうだったのだ。自分を裏切る相手を粛正する、その行動そのものに陶酔しているようだった。
「お前はどこに逃げるんだ？　自分の情報をどこに持ち込むつもりなんだ？　自分の世界へ侵入できる絶霧を、どう使うつもりなんだ？　主神クラスに泣きついて、自分から身を守るつもりなのか？　いいなあ、それは最高だ！　世界がみんな自分の敵になる。いいぞ、全員ぶちのめしてやる。お前を暗殺するなんてことはない。お前を守っている奴を、そいつの守るべきものを、片っ端から焼き尽くして灰で埋めてやる。お前を守っている奴を、その家族を、仲間を、奪って盗んで晒して売っぱらってやる。お前に恨みが向くまで凌辱の限りを尽くして、その上で、最後の最後にお前に、お前を守るために失ったすべてを合わせた分よりも濃厚な苦しみを与えてやる。いいな……インスピレーションがわいてくる……裏切りには……相応の報復が必要だもんなぁ！」
「……あ、あ……お、おにいちゃん……やだぁ、じょ、冗談よ！」
「……つまらん。裏切ってくれた方が嬉しかったんだが」
「ま、マジになるなんて、大人気なくない?!」
「確かに、ガキみたいな理由ではあるがな」
仮面の男の、至近距離。三つある眼の血管の模様さえ視認できる距離だったのが不運だった。
顔をつかまれ、ヴァルブルガの整った鼻が仮面に接するほどの距離

で、鼻息の荒い仮面の男の狂気を味わえば、ましてヴァルブルガ個人に向けられた悪意を受け止めれば、如何に魔女と言えども魂が壊される。

素直に謝罪したヴァルブルガ、その涙目を見て白けたのか、仮面の男はヴァルブルガの顔を手放した。

「……待たせたな。一旦移動するか」

そして、その狂気は当然、周囲の面々にも、つまり保護している面々にも伝播していた。

改めて自分たちを保護している男の怪物さを、悪意を受けた彼らは震えながらも、それに身をゆだねる。

とは言っても、実際に空間移動するのは一瞬である。即座に移動した先は、倒壊した建物の並ぶ都市であり、しかし天蓋の有る箱庭だった。

そこが何処なのは、概ね見当がついたのはジークフリートとヴァルブルガだった。というよりも、他の面々はある程度打ち合わせを済ませているので、見当がつくというよりは想像がつくというべきなのだろうが。

「アグレアスだ……とはいっても、自分の世界じゃなくて、次元の狭間だがな。つまりもう、ここは通常の世界と言っていい。これで自分が死んでも何の問題もない」

ステルスモンスターに包まれた、かつての魔王の移動要塞にして浮遊都市。仮面の男が悪魔から盗んだ最大の成果物。

「向こうにレーティングゲーム用の闘技場がある。自分たちが戦ったら壊れるかもしれないが……お前気にしないだろ？」

「ああ、先に行っている。あんまり待たせるなよ？」

「ああ、悪い」

白龍皇の光翼をはためかせ、魔王の子孫は移動都市の空へ舞い上がった。

それを見上げた後、仮面の男はかぶっていた戦闘用の仮面を脱いで、レオナルドに預けた。

「全力で戦ってくるが、勝つとは約束できない。最後になるかもしれ

ないから言っておくが、今まで本当にありがとう。自分の長話に付き合わせて悪かったな。もしもの時は、ルネやヴァレリーのことをよろしく頼む」

「あんまり無茶を言わないでくださいよ……でも、もしもの時は頑張ります」

最も近しい関係故か、仮面の男は余りレオナルドに深く言葉を告げなかったが、それでもすべてを任せていた。

レオナルドも、それを当たり前の様に受け取って、見送る覚悟を決めていた。きっと、死んだら死んだでそれが彼の救いなのだと知っているからだろう。

「ヴァレリー、ルネ……色々策を練ったが、これが精いっぱいだった。自分が帰ってこなかったら、その時はレオナルドの言うことをよく聞いてくれ。力不足で申し訳ないが……絶対に帰ってこれるとは言い切れない」

「……ずるいだろ！　その言い方は！」

ルネは、涙をこらえながら怒鳴った。

今まで余裕しゃくしゃくだった仮面の男は、本当に自分の死期を悟ったかのように謝罪をしていた。

何をさせても本気の男である。きっと、自分が死ぬかもしれないと本気で思っているのだろう。

「お前が力不足だってんなら、私たちはどうなんだよ!?　なんにもできなかったんだぞ?!　こいつらに、私が何をしてやれたっていうんだ!!」

「それは違う」

顔のない男は、真面目に、真剣に言い切った。

「お前だからだ。特別な力を持たず、ただ偶々偶然神滅具に選ばれただけのお前が、今まで前向きにやってきた。それが、お前と同じ境遇の面々になんの影響も与えなかったとは思えない。自信を持て、お前はお前なりにちゃんとしているんだ」

特別な血を継ぐ英雄の子孫ではなく、ただの村娘であるルネ。彼女が彼女なりに前向きに頑張ってきたことを、混血吸血鬼たちも研究所

の被害者たちも良く知っている。
　それが、無駄だったとは顔のない男も思っていない。
「お前の頑張りは独りよがりなんかじゃないさ。だから、胸を張れ」
「だ、だから、それが、ずるいって、いってんだろ！」
　彼女にとって、親しい人が死ぬことは決してありえないことではない。だからこそ、顔のない男が死んだとしても、それは不思議なことではなかった。
　それでも、この男を止めることなど誰にもできない。おそらく、先に待っているあの男を例外として。
「……こんなことを言うのはきっと、間違っているのでしょうが、どうかご武運を」
　世界全体という尺度から見れば、きっと顔のない男が負けて死ぬべきなのだろう。例えこの場にいる誰もが不幸になったとしても、それでもヴァーリが勝つか相打ちするべきなのだろう。
　それでも、この場の面々を救いたいと思うヴァレリーは、世界への反逆としか言えない言葉を贈る。
「ありがとう……お前のやさしさは、得難いものだ。なくさないでくれ」
　泣きじゃくるルネをヴァレリーに預けると、顔のない男は再び赤龍帝の砦を伸ばして輝かせた。
「ヴァルブルガ、喧嘩が終わったらこの都市はお前にやるよ。自分が生きてても死んでても、売るなり研究するなり好きにしてくれ」
「……はい」
「その代わりと言っちゃあなんだが、自分が戻らなかったらレオナルドの相談に乗ってやってくれ。レオナルドはまだ子供だからな……だが、きっとすぐに大人になる。少しの間、助けてやってくれ」
「はい」
　もう、無駄口をたたく力も残っていない。
　ヴァルブルガは、空へ飛び立った顔のない男の、その背を目で追うことしか出来なかった。他の保護されている面々同様に。

「待たせたな……」
『どれぐらい待ったんだろうな』
観客のいないコロッセオ。そこで待っていたヴァーリの目の前に、颯爽と降り立つ顔のない男。
「ああ、ずいぶん待った」
『そうだな……生きていた頃も、結局決着には至らなかった』
赤龍帝ドライグと白龍皇アルビオンもまた、こみあげてくる何かを抑えながらも、感慨深く過去を振り返っていた。
多くの生があった、多くの戦いがあった、多くの死があった。
勝つこともあり、負けることもあり、そして戦えないこともあった。
しかし、結局所持者が変わればまた戦っていた。何度も何度も、懲りることなくぶつかり合っていた。
「一月ぐらいか？」
『だが、それももう終わる。俺もお前も、これ以上の宿主はあり得ない』
「いや、もっとだ。お前の存在を知ったときから、俺はお前を待っていた。こうして戦うために」
『そうだな、決着には頃合いだろう。赤龍帝と白龍皇、勝つのはどちらか』
片や、三つの眼を持つ、聖書の神話に仇なす怪物。
片や、魔王の血を継ぐ、神の器を宿した天才。
もはや、これ以上の好条件はありえないだろう。
「自分が勝てば、赤龍帝と白龍皇の戦いは終わる。そして、自分の戦いは続いていく」
「俺が勝てば、今後もお前に劣る赤龍帝を殺し続けることになるだろう。そして、俺の戦いは終わらない」
顔のない男は、なんとなく感じていた。今日の自分は人生最強だと。
ヴァーリは、なんとなく感じていた。目の前の男に勝てればもっと

強くなれると。
アルビオンとドライグは確信していた。赤龍帝と白龍皇は今日終わるのだと。
『……これが最後だ。今までのバカ騒ぎも、もうお終いだ』
『ああ、そうだな。だからこそ、今日は今まで通りに！』
ドライグもアルビオンも、或いは宿主たちも感じていた。神器には未知の領域があり、それに己たちは至りつつあるのだと。
今日戦うのではなく後日に改めれば、或いは今日戦っても決着がつかなければ、今までよりも進化した力を得ることができるのかもしれないと。
しかし、今日はそうではない。だからこそ、今日の全力でぶつかる。
「「我、目覚めるはーーーー!!!!」」
それは、今まで通りの、幾度となく繰り返されて来た二天龍の全力の戦いだった。
歴代の二天龍の武具の所持者が行ってきた、全身全霊の激突だった。
「覇の理を神より奪いし二天龍なり」「覇の理に全てを奪われし二天龍なり」
それは、神器の究極形態であるはずの禁手とは違う暴走形態。
宿主の命と引き換えに、神滅具に封印されし、全能なる神よりも強大とされた二天龍の力を再現するもの。
「無限を嗤い、夢幻を憂う」「無限を妬み、夢幻を想う」
人間の領分を超えて、神器の規格を超えて、最強の種族であるドラゴンの力を降ろす禁断の形態。
その力は敵対者を滅ぼすにとどまらず、周囲のあらゆるものを粉砕

し消滅させる。

「我、赤き龍の覇王と成りて」「我、白き龍の覇道を極め」

それを双方が発揮する以上、もはやここに小細工は成立しない。

勝つのは最強でも、最悪でもない。ましてや最善でも最適でもない。

「汝を紅蓮の煉獄に沈めよう」「汝を無垢の極限へと誘おう」

極めて原始的に、より馬鹿な方が勝利する。

『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）!!』

白龍皇の鎧は肥大化し、赤龍帝の砦は全身甲冑に変わり、共に人間のフォルムを超えて巨大化とドラゴンのシルエットを得る。

魔王の血統の中でも天才とされるヴァーリの魔力も、顔のない男の神に匹敵する瞳力も、共に覇龍を制御することに注がれていた。

故に、もはやただぶつかるのみであった。

「『ぐあああああああああああああ！』」

「『があああああああああああああ！』」

神話の昔、生前のドライグとアルビオンがそうであったように、或いは他のドラゴン達がそうであったように、手四つで組み合い、互いの龍鱗に牙を突き立てる。

背から生えた尾を激しく振り回し、相手の手足にたたきつける。翼を羽ばたかせ、相手の肉体に打ち付ける。

『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

『Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！』

今までのどの宿主よりも強く、しかし今までの宿主同様に、二人の

怪物はドラゴンそのものとなって互いを喰らいあう。
それは原始の闘争そのものであった。

地面に倒れたヴァルブルガ。その体を揺らすのは、覇龍同士の全力の衝突だった。
ある意味当たり前で、当然すぎる愚直な衝突。
それは魔王の拠点であったアグレアスをして揺るがすものであったが、流石にそのままの勢いで壊れることはなかった。
故に、もはや戦いは誰にも止められないし、止めようと思うこともない。
アレを止めるということは、最強の白龍皇と最悪の赤龍帝を同時に敵に回すことになるのだから。
しかし、呆然としたヴァルブルガは、ある意味今更過ぎる言葉を漏らすしかなかった。
「……ねえ、あの三つ目ってやつは何なの？」
その言葉に、当然ジークフリートは答える術を持たない。そもそも、彼だって顔のない男がどういう存在なのか、まるで知らないのだ。
ルネにしても、ヴァレリーにしても、そもそも神秘の世界そのものに詳しくない。神滅具だの吸血鬼だのが存在するのだ、そういう能力もあるのだと思っていた。
レオナルドも、顔のない男が語った以上のことは知っているわけがない。
「あの目の力……あんなものあるわけがない」
人間的にもおかしいところはあるが、それを抜きにしても性能面で明らかに優越している。
神滅具を持つ英雄たちを、攻略法を得ているとはいえ片手間で片付けるなどありえない。そんなものを人間が持っているはずがないし、神々だって持っているか怪しいだろう。

顔のない男の能力をすべて見たわけではないが、それでもヴァルブルガは魔法使い故に博識である。知識がある故に、どの神話にも当てはまらない彼の瞳術が理解できない。

あんなものが人知れずに存在していたなどあり得ない。

「僕は、あの目の力がどんなものなのかは知りません。ですが、彼が何処から来たのかは知っています」

全てを知っているわけではないが、全てを察している少年は、顔のない男の悲哀を語る。

「彼は、この宇宙の住人ではないのです」

君の知らない物語　1

単純な殴打戦。ただのケンカだった。

ドラゴンの鱗は硬く、肉は強靭で、骨格は堅牢で、その中でも頂点に近い天龍はことさらに全身が頑丈である。覇龍に至った二人ならば、それに限りなく接近していると言っていい。

赤龍帝の持つ倍加も、白龍皇の持つ半減も、いずれも強力な能力でありシヴァやインドラに目劣りしない。

しかし、神話の時代にそうであったように、或いは原初の時代からそうであったように、今現在がそうであるように。

戦力が互角ならばその戦いは規模の大小を問わず泥仕合となる。しかし、その泥仕合をヴァーリ・ルシファーは心底楽しんでいた。

技もへったくれもない、テレフォンパンチ。これから殴るために相手の前で大きく振りかぶって、そのままっすぐ細工なく顔面をぶん殴る。相手はそれをきっちりと視認しつつ、歯を食いしばって顔面でそれを受け止める。回避することもできるはず、能力で対応することもできるはず。しかし、赤龍帝はテレフォンを文字通り受け取って、こちらの攻撃を受けている。

応じる相手も、大きく振りかぶって芸もなくこちらの兜を、顔面をぶん殴ってくる。負けられるものか、とヴァーリも歯を食いしばって耐える。同等の相手からの、渾身の一撃。それは一瞬目の前が真っ白になりそうなほどの衝撃で、直後に燃え上がるような苦痛が脳を揺さぶった。

龍の足で踏ん張って、殴られながら殴り返し、殴り返されながら殴り返し返す。街のチンピラを、規模だけ超ド級にしただけの獣のケンカ。

同等の装備故に能力の比較は無意味であり、殴り合いの間合い故に能力の発動は不利に働き、負けず嫌い故に能力の発動は禁じていた。

それが、とてつもなく楽しかった。鳥が空に焦がれるように、馬が草原を夢見るように、動物が生来持つ己の能力を最大まで発揮したいという欲求。それをヴァーリは体感していた。

制御できているとはいえ覇龍を発動させ、且つ全力で同等の相手と殴り合う。それは全力疾走しながら息を止めつつ殴り合うに等しい。しかし、それがとても楽しい。

それはアルビオンも同じだった。殴るというのは人間的だが、大事なのは己を出し切っているということ。対等と認めた相手だけにできる、己をぶつける行為。それは生前の行為そのものであり、幾度となく繰り返された懐郷そのものである。

だから、これでいい。殴られる痛みも、焼け付く肺も、縮む命も。なんの問題もない。

今日ここで死んでも、悔いはない。全てを出し切らねば意味はない。

「おおおおおおおおおおお!!」

仮面の男の謀に付き合っている間、悪魔として悪事を働くことに快感を覚えなかったわけではない。己の意思で動いていると思い込み、その実何から何までこの男の思惑通りに動いて死んでいった曹操たちを嘲る感情がなかったわけでもない。

しかし、この歓喜。ここまで見事に世界を躍らせた男に、ここまでさせているという歓喜が止まらない。全力で殴って、それを受けてもらっている歓喜が止まらない。

これを、待っていた。待ちきれないほどに待っていた。もう我慢することなどできない。

ヴァーリ・ルシファーは魔王の子孫であり、その中でも天才であり、白龍皇でもあり、なによりも努力家である。悪い冗談にしか思えない、他者の努力を無にするバトルマニア。もしもここで顔のない男に彼が勝利すれば、彼が死なない限り、つまり一万年もの長きにわたって白龍皇は赤龍帝に勝利し続ける。戦って確かめる必要がないほどに。

ヴァーリは確信していた。自分はもっと強くなれると。今までの先人たちが到達した限界値である覇龍を、更に凌駕できると確信していた。自分こそ、現在過去未来にわたって最強の白龍皇だと。

先天的にも後天的にも、この上ない条件がそろった自分。そんな自

分と殴り合えているこの男は、いったい何者なんだ。
尋ねたい。この男の過去を。この男の生き様を。この男の戦う理由を。
知りたいが、それでも手が動く。自分と殴り合えるこの男よりも、自分が強いのだと証明したくてたまらない。
だから、伝えて確かめる。そのテレフォンパンチで、伝え合う。
果たして己と相手は、いか程に強く、どれほどに勝ちたいのかを。

自身も痛みを感じながら、ドライグは感謝しながら戦っていた。
ここに至るまでの経緯はともかく、今この場ではなんの憂いも不純物もなく戦えている。
『うるさい！　黙れ！　しゃべるな！』
歴代の赤龍帝の中でも、否、歴代の赤龍帝を宿した者たちの中でも、最も赤龍帝を宿したことを後悔していたこの男が、嫌っていたドライグの為に激痛と疲労に耐えながら戦っている。
『お前なんて！　赤龍帝なんて！　神滅具なんて！』
感謝しかない。この男は、楽に勝てる方法をいくらでも思いつけるはずなのに、いくらでも実行に移せるはずなのに、他ならぬ自分とアルビオン、そしてヴァーリの為に体を張って命を削って戦っている。
『ハズレだ、ハズレだ、大ハズレだ！』
仮にそれが聖杯によってたやすく治せるとしても、その苦痛は共有しているドライグにしても人間の限界を超えていると確信させるものだった。
『あ、あああああああああああああ！』
自滅願望、自殺願望。自己否定と自己肯定。精神面での怪物は、戦闘面でもそれを発揮していた。
顔のない男、或いは仮面の男、名前のない男、誰でもない男。
彼の感情は、この期に及んでも複雑だった。
（殺してくれ！　さあ、殺せ！　お前にならば、殺されてもいい！　殺されたいんだ、死ねないんだ、自殺ではなく殺されなければならない！）

（殺されてたまるか、お前にだけは絶対に殺されてやるわけには、負けてやるわけには、お前に劣っていると証明されることだけはあってはならない！）

（殴れ、蹴れ、打て、叩け、潰せ、痛めつけろ！　もっと、もっとだ！　足りない、足りない、足りないぞ！　自分が今まで犯してきた罪への罰には、こんなバカへの制裁には余りにも程遠い！）

（【愛がある、哀しみもある……しかし、凌辱がないでしょ！】お前に勝つ、勝って生き残る！　まだ足りない、まだ犯したりない！　まだ穢したりない！　まだ味わい足りない！　まだ愉悦と快楽が足りない！）

　矛盾した感情、鬱屈した感情、複雑な感情、捨てられない思考と思想と思念が行き場を求めて膨張していく。

（わかっているさ……分かっているさ！　そんなことは、最初から分かっていたはずなんだ！）

（勘定が合わない！　感情が割り切れない！　未練が退かない！　後悔が絶えない！　絶望は底を見せず、希望は影も見せない！）

「ぐぁあああああああ！」

　殴られても避けないのは殴られたいから。自分を罰したいから。殴っても殴っても殴り足りないのは殴りたいから。相手を倒したいから。

　防御の放棄と攻撃の継続は、正に矛盾である。矛だけを持ち盾を捨てても、それでも矛盾に違いはない。

（≪お前≫は……こんなことがしたかったのか！）

（ああ……ボクシングでもやっとくべきだったかな？）

（殴って殴られて、痛めつけて痛めつけられて！）

（殴られるのがこんなに痛いなんて……）

（何が楽しいんだ！　こんな強い力を得ても、やってることは猿並みだ！）

（首も痛い……ブリッジの類でもしとけばよかったかな……）

　激しい感情も穏やかな感情も、つまりは後悔だった。こんな愚かな自分を痛めつけたいという後悔と、戦うのであれば戦う練習もすれば

よかったという後悔。
目から火花が飛び出そうになり、脳はぐしゃぐしゃに潰れそうになり、おそらくとっくに骨は砕けている。
自分が戦っていることそのものへの後悔と、戦うことに備えていなかった後悔。
ダメージは回復せず、疲労は蓄積し、限界はどんどん近づいてくる。
戦略も戦術もこの場では意味をなさない。しかしここでも人間力が輝きを放つ。
本人が意図せず、いやさ最初から認識さえしていなかったのかもしれない。己自身の持つ、魂の輝きを。
どこにでもいる誰かが、それを超えるために発揮する、特別な誰かを凌駕する時代を切り開くものの力を。
（（足りない！））
この男の持つ力は、三つある眼の特別な能力だけではない。だれでも持っている力、昨日できなかったことを今日できるようになる力、今日できなかったことを明日できるようになる力。
もう、無理。もう、駄目。もう、限界。
そこから一歩、一秒、一瞬、一手。理屈抜きに精神論で肉体の限界を破壊する力。
昨日までの自分が積み上げたものが、今の自分の限界を超えさせる。
（（まだ自分は、限界じゃない！））
彼の努力の日々が、限界を超え続けてきた日々が。バックボーンが彼を支えて倒さない。
（（こんなものは苦痛じゃない！））
（（こんなものは絶望じゃない！））
（（こんなものは地獄じゃない！））

前世の自分のことは、誰にも話していない。
常識的に考えて、誰も信じてくれないだろう。自分に前世があると

かないとかならともかく、この世界がライトノベルの世界で、自分は元々読者だったなんて。

それだけじゃない。そもそも語るほどの何かが前世にはなかった。っていうか、全くない。全然、これっぽっちも、自分は自分の前世を語れない。

どこにでもいる男の子が、どこにでもいる学生になった。そこから、社会人になったのか更に進学したかなんて、些細なことだ。

ただ、少なくとも自分はニートの類じゃなかった。それだけは確かだった。

アニメは好きだったし、マンガも好きだったし、ラノベも好きだった。だけど、そういうフィクションよりも現実を優先できていた。フィクションで涙を流しても、リアルと混同することはなかった。

何かにあこがれても、それに実際になりたいとは思っていなかった。

いや、その何かというのがフィクションに登場するようなヒーローだけではなく、リアルに存在する実在の職業にさえ、実際になりたいとは思わなかった。

ありふれた理由で、多分日本中の誰もが感じた理由だ。

『どうせ、夢はかなわない』

声優業、漫画家、スポーツ選手、オリンピック代表。

そうした、実在し就職することが不可能ではない職業も、実際の競争率や水準の高さからすれば『それで生計を立てる』ことは不可能であると言っても過言ではないと思う。

『努力したって、それに見合う対価があるわけじゃない』

よく、天才卓球少女だとか、天才サッカー少年だとか、そういう子供にあるまじき技量を持っている幼児が取り上げられることがある。

彼女や彼らが、年上の自分よりもその道において遥かに優れていることは認めるし、彼らが才能にあふれていることも確かなのであろうし、何よりも彼らが望むにせよ望まぬにせよ、尋常ならざる努力をしていることも想像できる。

だが、それは決して『彼らだけが特別』と言うわけではない。ある

意味では、普通のことなのだ。

スポーツ選手になりたいだとか、オリンピック代表になりたいだとか、或いは子供をそう育てたいだとか。そう思うのであればそれは普通のことなのだ。

芸術分野やスポーツ分野のような、職業として成立するに必要な水準が高い職業では、三歳の頃から並々ならぬ努力をしなければならない。そんなことは、日本人ならなんとなく生きていても知っていることだ。

つまりは、努力すれば夢は叶うというのは『努力すれば成功する程度の目標』というだけのことだ。『競争相手が努力しているのが当たり前』という目標を達成するには『みんなと同じように死ぬほど努力』して、そこから先は資質だとか運だとかになってしまう。

馬鹿馬鹿しい話だと、そう思っていた。少なくとも、口でマンガなんて簡単だ、ラノベなんて俺でも書ける、とか言ってる馬鹿よりは、自分は賢いつもりだった。

ただその一方で、報われる保証のない努力を一生懸命している人に劣等感というか、尊敬をしていたのも本当だった。だからそういうキャラの出る漫画やアニメは好きだったし、素直に好感が持てた。

自分は、当たり障りなく生きていた。高い目標を設定することもなく、しかし学ばないだとか働かないなんてこともない。一旦すべてを放棄したら、却って面倒が増えると知っていたから。一生懸命でも真面目でもないけれども、少なくとも社会的に正しく生きていた。

それだって大変なことだった。朝眠いのに時間通りに起きて、各種交通機関の喧騒に呑まれて、好きでも無い勉強や仕事に従事して、それだけでも十分大変なことだった。

そんな日々の中でも、そんな日々の中だからこそ。普通に生きるだけでもきついこの世界の中で、上を目指して手を伸ばしている人や下で何とか凌いでいる人たちはどれだけ辛いのだろうかと想像をしたりもした。

実際に手を差し伸べることはなかったし、実際にそれをまねようとは思わなかった。

なにせ、楽器を弾いてみたいと思っても、レンタルさえしなかった。町の小さな教室に通うことだってためらっていた。

どうせすぐ飽きる。どうせすぐ投げ出す。どうせすぐ通えなくなる。

どうせ上達しない。どうせもっとうまい人がいる。どうせ今から習い始めてもたかが知れている。

少なくとも、自分は天才なんだから習い始めれば今からでも世界レベルに、なんて馬鹿な妄想をすることはなかった。けど、そういう馬鹿が動画サイトに自信満々で投稿するのだって、ほほえましく思っていた。

小さい夢も見ず、大きな夢も見ず。普通に生きるために、普通に生きている人たちと一緒に、普通であるために頑張る。それが普通の自分だった。誇ることはないが、卑下するつもりもない。少なくとも、自分は前世でも誰かに特別迷惑をかけて負担を強いる人間ではなかった。

そんな自分に、恋人だとか特別な親友だとかがいるわけもない。ナンパをする度胸もない小心者は、やっぱりマンガやラノベに夢中になっていた。いや、夢中と言うほどではなかったのかもしれないが、少なくとも金を出して買う本と言えばそれぐらいだったし、テレビもアニメや特撮ぐらいしか見なかった。ネットで漁る情報も、ネタバレのグレーどころか真っ黒なサイトだとか感想サイトだとか感想ブログだとかだった。

それでも、十分楽しかった。それで十分楽しかった。だけど、死んだとき。やっぱり少し寂しかった。この世界に何も残せない自分が、とても寂しかった。

家族は居た。普通の家族がいた。両親が離婚だとか、兄弟が死んでいるだとか、或いは借金がどうのとか家庭内暴力だとか、そんなものもなかった。

日本という国では普通であり、つまりは世界水準、人類史規模でも恵まれた生活を自分は送っていた。でも、結局自分が死んでも悲しむのは家族だけで、きっと自分が居た場所には自分と関係ない他の誰か

が収まるのだろうと思っていた。
誰かを感動させたい、誰かを興奮させたい、誰かを驚愕させたい。
誰かに評価されたい、誰かに称賛されたい、誰かに羨望されたい。
諦めていたものが、吹き上がって消えていくのを感じていた。

だから、好機だと思った。好機だと思ってしまった。

はい次ー！　２１番の方どうぞー！
ではおかけになってください。え？　転生モノの主人公？
やだなぁ、最近の方はいう前に分かっちゃうんだから。そうですよ、いわゆる神様転生モノです。
皆様を、ご希望の世界に転生させることができます。もちろん、このまま消滅を望まれる方もいないではありませんがね。
それに……。正直に申し上げまして、同じ世界に転生したがる方が多いと色々と面倒が……。
いえ、我々ではありません。貴方です。そう、複数の方がそこに行きたがると、あなた自身が面倒をこうむるのです。
ですから、こちらとしては皆様にその、申し上げにくいのですが、あまり人気の無い世界をお勧めしております。
サザエさんとか、ちびまる子ちゃんとか。……。ライトノベルではバカとテストと召喚獣をお勧めしております。
え？　いや？
まあ、分かりますよ。あんな殺意しか感じない料理は食べたくないですからね。
ですが、よく考えてください。死ぬ危険はないし、そこそこにスリルもある。結構楽しいと思うのですがね。

今でも、ハイスクールＤ×Ｄという作品は好きだ。
確かにマジンガーＺやデビルマンのように後世の作品群に影響を与えるモノにはなりえないだろう。聖闘士星矢やＦａｔｅの様に多くの作家がその世界に挑戦するような魅力的な設定にもならないし、

魔法少女まどかマギカや新世紀エヴァンゲリオンのように一世を風靡することもないし、ドラゴンボールやＮＡＲＵＴＯの様に世界中で親しまれることもないし、ゴルゴ１３やこち亀のように超長期にわたって継続することもないし、ゴルゴ１３やこち亀のように超長期にわたって継続することもありえない。

インフィニット・ストラトスだとかハンドレッドの類のような、学園系バトルハーレムラノベの一種であり、成功例の『一例』に過ぎないだろう。

だが、それは余りにも比較対象が悪すぎる。ハイスクールＤ×Ｄは、十分大ヒットしたラノベの一つだ。これは決して揺るがない。

ジャンプを週刊購読しているのならば誰でも知ることだが、人気のない漫画家はすぐに消えるし、それはラノベ界隈も同じことだ。

一発屋として揶揄され、一度一時期一瞬だけ作品が売れただけの作家にしても、その一度だって凡百の作家には望むべくもない。

二十一巻とか続くラノベが、四度もアニメ化したラノベが、挿絵が可愛いだけだとかの理由であるわけがない。

極めて客観的に面白いのであり、商業的に成果が出ているのであり、つまりは面白いから長期間売れているのである。

そうですか、ハイスクールＤ×Ｄですか……。あそこ、希望者が多いんですよね～～。

一体どうして死の危険が伴う世界に『生きたい』のやら。

ですが、承りました。まずは、第一希望ということで……。

上司であるブラック・ノワール様に、全体の希望者を問い合わせいたします。少々お待ちを……。

その……四十九人です。ええ、貴方を含めて。これは、選抜戦が必要になりますね。

では、ルールを説明いたしましょう。まあ、聞くだけなら危険はないので気を楽に、ただし聞き逃さず、疑問があったら質問してくださいね。

なにせ、コレが最初で最後の機会になる『かも』しれないので。

まず、四十九人全員を『兵藤一誠』として転生させます。しかも、選べませんが転生特典も差し上げましょう。

ですが、ここからが本番です。原作に介入できる、というか主人公になれるのは四十九人中七人だけです。

七分の一、もうお分かりでしょう。貴方たちには殺し合いをしてもらいます。

おや、怖気づきましたか？　ですが、ハイスクールＤ×Ｄの世界に行くとはつまりそういうことでしょう。まさか、自分と同じ顔をした者を殺すのは嫌ですか？

それならば、また別の世界に転生することをお勧めいたします。好き好んで、あんな世界に行くことはありません。

……そうですか、参加しますか。まあ、話は最後まで聞いてからでも遅くないので。

まあ、基本的にはそういうことです。七人中、主人公になれるのはひとりだけ。それを選抜する殺し合いを突破していただきます。

それができなければ、死ぬ。それだけです。まあ例外はありますがね……。

戦うルールも、その与えられる特典のテーマも、七通りあります。そして、七人全員に等しく勝利の可能性があります。

ですが、それを決めるのはあくまでも貴方個人の頑張り次第。確かに、特典があれば原作に介入し、それこそ『兵藤一誠』より活躍できるでしょう。

なにせ、彼は鍛えだしてから一年すらたっていないのに対して、貴方は物心ついたときから鍛えることができるのですから。

ですが、それは他の参加者も同じこと。特典の性能差も無いではありません。モノによっては、相手によっては立ち回りを考える必要もあるでしょう。

それが戦争というもの。コレを突破できないものに、どの道『ハイスクールＤ×Ｄ』の主人公は務まらない。

そして、もしも貴方が今参加を決めれば、もうどうにもなりません。私自身にも、貴方の運命を覆す権利は無い。

それでも、やりますか？　そうですか、やりますか……。
では、ここに七枚のカードがあります。好きなのをどうぞ。殺し合いのルールを決めるものです。引けば、貴方は参加者となる……。

ただ、それでも、どう考えても人生で一番好きだったというわけではない。
一度通しで読んだらたまに好きな部分だけ読み返す程度で、何度も何度も読み返すほどではなかったし、アニメやコミカライズには手も付けなかった。
ただちょうど、タイミングの悪いことにそのラノベのアニメ化の続報を知った後ということと、自分が一番好きだった作品、というか作者が山田風太郎と西尾維新というのがまずかった。
あの作品群の主人公になるなど無理である。その妥協が致命的だったとは思う。
そう。自分は今でもハイスクールD×Dが好きだ。
だが……この世界に生まれることを選んだのは間違いだった。
そう、何が間違いだったのかと言えば、それだった。その後の日々がどれだけ正しかったとしても、最初のかじ取りが間違っていたならば、その後何をどう頑張っても結末は決まっている。
ただ、人生はエロゲーでもギャルゲーでもない。マウスのクリックやらコントローラーのボタンを押すやらで、自動的に勝手に話が進むわけではないし、選択肢を決めるところからロードできるわけでも最初からやり直せるわけでもない。
おや、貴方の選んだカードは『アイカード』……特殊な目を用いて争う戦いですか……ハズレですね。
ちがう。
ああ、ご安心を。別にハズレと言うのはですね、一種の所感みたい

なものです。

ちがう。

大丈夫ですよ、これだって悪いルールじゃありません。

ちがう。

この戦いで優勝すれば、貴方も立派な……

ちがうちがうちがう

君の知らない物語　2

どちらともなく、両者は膝を折りかけた。

途切れかけた意識の中で、屈服による転倒ではなく、失神による転倒をしようとする両者。肉体的には既に限界である二人は、気力で己を奮い立たせて戦っている。

故に、朦朧とする意識の中でそれが途切れれば、必然体は一瞬も持たずに崩れる。

戦闘中に意識を失っても、それでも二人は一瞬で己を取り戻し、殴打戦を続ける。しかし、殴ることはできても耐えることはできない。先に当たった方が大きく崩れて、よろけて後ずさる。

そこに追撃を入れることができれば勝負は決まったかもしれない。しかし、殴ることはできても殴り続けることはどちらにもできない。

体液をまき散らしながら大きくのけぞる赤龍帝。その堅牢な装甲の内側では、ドラゴンよりもはるかに脆弱な人間の骨や臓腑が悲鳴を上げていた。踏ん張ろうとしても、激痛が走るばかりでまともに動けない。

それでも、踏ん張って拳を振りかぶる。その拳も、ほどこうとしてもほどけない。おそらく、拳を握りしめた状態で骨折しているせいで、そのまま固定されてしまっている。それを、思いっきり相手の兜にたたきつけた。

ダメージを受けているのか、ダメージを与えているのかさえ定かではない。一つ確かなことがあるとすれば、二人はまだ全力で戦い続けているということだ。

肉体的にも、余力的にも既に限界である。ヴァーリは魔王の血を継ぐ故の圧倒的な魔力で、顔のない男は神に例えられるほどの瞳力で、それぞれ寿命ともいうべき生命力を用いて発現するはずの覇龍を御していた。だが、既にどちらもそれが尽きている。

つまり、二人は寿命を削りながら戦っていた。仮に、聖杯でお手軽に回復できるそれだったとしても、その消耗に伴う疲労感や喪失感、あるいは途方もない苦痛は決して和らがない。

それでも、二人は『相手が引っ込まない』という理由だけで戦闘を継続していた。

格闘ゲームやＲＰＧならば体力や魔力を消耗しすぎても攻撃力や防御力が下がるということはない。しかし、この現実では必然的に発生する。当初の勇壮さはどこへやら。グロッキーになってなお戦うことをやめない愚かしさは醜悪で、しかし一種の美を含んでいた。

ヴァーリは前のめりに倒れそうになるが、何とか踏ん張って持ちこたえる。しかし、大きく相手の前でかがんでしまったヴァーリ、その背中に生えた翼を顔のない男は掴んで引きちぎらんと、ヴァーリの背中に片足を乗せた踏ん張りつつ渾身の力を込めて引っ張った。

双方ともに、苦痛でうめく。痛覚がつながっているのか、ヴァーリはドラゴンの翼をむしられることで激痛を感じ、間抜けなことに砕けた手でモノをつかんで引っ張るという愚行をした顔のない男も悶えている。

それでも、力任せに引き抜いた結果、白龍皇の片方の翼は引きちぎられた。赤龍帝は翼を引きちぎったが、それによって大きくバランスを崩した赤龍帝は背中から地面に激突し、骨折が痛むのかうめく。

そこへ白龍皇が追撃をしかける。意趣返しとばかりに上からのしかかると、そのまま至近距離で炎のブレスを放射した。火を噴く白龍皇にしても顔面が痛くてたまらないが、受ける赤龍帝はそれどころではない。必死で振り払おうともがくが、しかしその腕を抑え込められる。

一種強姦にも似た光景ながら、それは実際には捕食風景に近い。

しかし、火を噴き続けるにも限界はあり、無理に息を出し切った白龍皇はふらつき、赤龍帝を抑え込む力が下がった。それを察したわけではないだろうが、赤龍帝は力任せに振り払うと、白龍皇を下にして位置を入れ換える。

振り払おうとする白龍皇を、今度は自分が抑え込み大きく体をのけぞらせた。ブレスの反撃か、と身構えた白龍皇の兜にたたきつけられたのは、赤龍帝のブレスではなく赤龍帝の兜そのものだった。

馬乗りからの、ただの頭突き。龍の喞を模した兜はくちばしをぶつ

け合うかのように激突し、双方を弾け飛ばした。
それでも、赤龍帝は白龍皇を放さない。上を獲った優位を忘れたかのように、自分にもダメージが返る攻撃を決してやめない。
赤龍帝と白龍皇の、神が鋳造した防具は見る影もなく壊れていく。そして、当然のように両者の顔が露出したのも同じタイミングだった。
三つの眼を維持できず写輪眼の双眸が輝く赤龍帝の素顔が、見れたものではない爛れた顔なのは当然だったが、白龍皇のもつ明けの明星にも称えられる美しい顔も、腫れて膨れ上がり、醜くなっていた。
それを観て、赤龍帝は更に獰猛に笑い、白龍皇も不敵に笑おうとして顔をゆがめた。
振り下ろされてくる赤龍帝の素顔に、自分の頭を逆にぶつけて反撃する。父祖から継いだ銀色の髪に、汚らわしい血が降りかかり、更にその姿を醜悪にしていく。
白龍皇は背に生えた尾を跳ねて起き上がると、お返しとばかりに蹲っている赤龍帝の背に生えた翼を片方、自分が引きちぎられた側と同じ翼を、背に足を乗せる形で引きちぎった。その上で、よろけながらも体制を整えて、ケンカらしい不格好な蹴りで赤龍帝を蹴飛ばした。
勢いよく壁に吹き飛ばして激突させる、などということはなかった。ただ、悶える赤龍帝を蹴倒すのが精いっぱいだった。それでも十分であり、片翼をもがれた赤龍帝は地面でもがいている。
もがいている赤龍帝に、遮二無二襲い掛かる白龍皇。しかし、赤龍帝は背に生えた尾を振り回して当たるを幸いに乱打する。それが偶然か必然か、襲い掛かった白龍皇を薙ぐ。当然、白龍皇を転倒させる程度の威力しかない。しかし、それでも白龍皇は赤龍帝同様に地面に倒れて、もがいていた。
なにがここまでさせるのか、よくわからないだろう。二人は、或いは二天龍は、戦うことをやめない。
わからないが、やめられない。人語を解する知恵、あるいは人知を超えた寿命、もしくは神をも超える単純な力。魔王の血統の中でも天

才的な資質、神にさえなれる偉大な瞳。それなりに備えているであろう格闘術、間違いなくあるはずの戦略的な思考。

正しく戦えるはずの二人は、愚かに戦うことにこだわっていた。

少なくとも、この戦いはドラゴンのものであるがゆえに。

誰も、望んで生まれてくるわけではない。良い家に生まれる子供も、悪い家に生まれる子供も。或いは、そもそも家がない子供も。

悪い時代があり、いい時代がある。戦争の時代があり、平和な時代がある。

悪い国があり、いい国がある。戦争している国があり、戦争していない国がある。

皆時代が悪いのさ！　という言い訳を見つけた扇動者が、ルパン三世の原作の敵に出てきたと思う。子供は親を選べないと、嘘食いの主人公が言っていた。

まあ、そうなのだろう。リアス・グレモリーやソーナ・シトリーの様に、恵まれた

環境で生まれ、しかも恵まれた資質を持つ子供は前世の行いがいいからそうなったわけでもない。恵まれた環境で、とは言い切れないが良家に生まれたが恵まれた資質を持たないサイラオーグ・バアルや、恵まれているとは言えない環境で、恵まれた資質をもって生まれてきたヴァーリ・ルシファーも前世の行いが悪かったわけではあるまい。

では自分はどうなのだろうか。そういう、一種の引け目が人生になかったわけではない。

２０世紀の世紀末に日本。未来がどうだか知らないしわからないが、多分この時代のこの国は、人類史規模で見てもかなり条件のいい時代であり国家なのだろう。

世の中には、住んでいる国から出ようともせず改善しようともせずに、ただ文句を言う輩もいる。特に根拠もなく人類は衰退し続けているとほざくことが知性の証明だと思っている奴もいる。

しかし、彼らが言うところのスローライフも結局文明が存在しているのが前提であり、彼らが特に根拠もなく崇拝している原始部落は飢えや乾き、あるいは病気や怪我と紙一重の辛い生活だと知っている。

前世の自分は知っているだけで特に意識はしていなかったが、やがて出会う彼らは、つまりはグレモリー眷属は余り恵まれた環境で生きてきたわけではない。現実の人物として向き合うならば、原作主人公が彼らにむせび泣いたり協力したいと思うようになったのも自然なことだと思うようになっていた。

この時代のこの国でも、色々と問題を抱えた家庭や、そもそも家庭として機能していない家族が存在しているとも知っている。

その上で、自分が転生した先は、やはりいい家だった。

育児放棄や家庭内暴力もなく、貧困や迫害もない。前世の自分と変わらない『普通』の家庭だった。

いや、普通の両親に異物として自分が現れてしまったということだろう。それに関しては申し訳なく思っている。当時でもそう思っていたし、今でも強くそう思っている。

もちろん、原作主人公が生まれていたとしても、彼らの人生は順風満帆ではない。ポケモンのサトシのママがルギア爆誕で世界の運命よりもお前が大事だとか言ってたし、僕のヒーローアカデミアでもデクのお母さんがヴィランに狙われたり大けがするのに無理して学校に行かなきゃダメなのかとか言ってたし。

最強のドラゴンを宿しているとか、主人公補正があるだとか、あるいは魔王に気に入られているだとか魔王の妹の眷属だとか、冥界での人気者だとか他の神話の神様に可愛がられているだとか。

そういう……『親からすればどうでもいいこと』で、死地に赴いて誰かを傷つけたり誰かを殺したり、傷つけられたり殺されたり。

親からすれば、きっと寿命が縮むような、あるいはフレッシュプリキュアのキュアピーチのお母さんのように手を握ってでも敵の本拠地に攻め込ませないような、戦姫絶唱シンフォギアGで未来が響の手を握って戦わせないと言ったように。

普通の両親ゆえに、子供にも普通を望むであろうから。

『父親』と『母親』には、申し訳なく思っている。
最初から詐欺の様に、普通でないことを選んでいた『子供』が生まれたのだから。
『両親』が望んでいたのは、少なくともハーレム主人公でも赤龍帝の籠手を宿す最強の転生悪魔でも前世の記憶と痛い設定を引き継いだ転生者でもあるまい。
そう思うと、ほんの少し……。『両親』が望んでいると知っていても、自分がそうしたいと思っていても、甘えることはためらわれた。
何よりも、そんな時間はなかった。

このカードを選んだ転生者は、皆例外なく『特別な眼』を転生と同時に与えられます。
この眼は単独で見ればハイスクールＤ×Ｄの世界観から言えばたいしたものではありません。赤龍帝の籠手で強化しても知れたものでしょう。
加えて、この眼は基本的に鍛えることができません。使いこなすことはできるかもしれませんが、ＲＰＧの武器が基本的に強化できないように、眼はあくまでも基本性能そのままです。
ですが、勝ち抜いて獲得できる優勝特典の眼は破格の強さですよ。まず間違いなく、総合的に見ればすべての特典の中でも最強かつ最優です。
ななな、なんと！　ＮＡＲＵＴＯの三大瞳術全部です！　まあ、転生眼は無理ですが、そこはそれとして……。
では、肝心の戦争のルールですが、亜底市という市を丸々使っての『鬼ごっこ』でございま～す。
ああ、呆れないでください。これも演出の一環ですから。
七人の参加者は、それぞれ鬼曜日が与えられます。例えば貴方が月曜日鬼になるとします。
貴方は月曜日だけ、二四時間鬼となって他の参加者を一方的に捕まえることができます。
捕まえる、というのは相手にタッチするだけでもオッケーです。

タッチというのは服の上からでも良いのでご安心を。
そして、その捕まえた相手の持つ鬼曜日が火曜日だった場合、貴方は彼の曜日を得ることができます。
戦争中しか意味のないアドバンテージですが、勝ち残らなければ意味はありませんからね。
で、ここからは一種のペナルティについて。
言うまでもなく、鬼につかまった参加者は死にます。そうして最後の一人になるまで捕まえ合うのがこの鬼ごっこの趣旨なのですが……いうまでもなく優勝条件は最後まで生き残ること。
そう、鬼に捕まれば死にますが、それ以外の原因でも死ぬことはあるということです。
事故や病気のような、或いはそもそも期間内に亜底市に集まらなかったり、期間内に亜底市から出てしまえば……死にます。そして、その参加者の持っていた鬼曜日は空白となるわけです。
では、他の参加者が参加者を殺した場合はどうなると思いますか？
失格になって死ぬ、ということはありません。ですが、参加者が他の参加者を鬼曜日に捕まえる、以外の方法で殺した場合、殺された参加者の保持している鬼曜日が丸々他の参加者が殺した参加者を捕まえる鬼の曜日になるわけです。
ちなみに、各参加者の脱落状況は随時脳内に報告していきますので、お覚悟ください。
まあ、尤も……その程度のペナルティしかないとも言えます。極論、自分以外の全員を自分の手で殺しても、最後に生き残っていればそれで優勝であるともいえるわけですから。
できるとは思えませんけどね。
それから、期間は一年です。もしもその時点で参加者が複数生き残っていた場合、全員死ぬのでご理解ください。
では、貴方の転生特典となる眼を決めましょう。さあ、カードを選んでください。

とりもなおさず、生き残らなければならなかった。

そのためにできることは、走ることだった。幸いというかなんというか、そんなにカネがいることでもなく、ある程度独学でも可能なことだった。

だから、自分は毎日走るようにしていた。

それは、想像通りに想像以上に辛いことだった。毎日、走る。子供の足で、朝から晩まで走り続ける。

体力をつけるために走るということは、つまりは毎日持続して、継続して走り続ける必要がある。

たとえば空手の稽古で貫手の練習のために巻き藁を突くとか。或いは念能力の修行でトンネルを掘り続けるとか。どこぞの主人公のように龍王と一緒に山籠もりをするとか。そんな猛烈な苦痛や死の危険を伴うものではない。

ただ、辛かった。朝起きるのがつらかったし、走るのだって好きになれなかったし、もっと言えば他のことができないのがつらかった。かと言って宿題をしないと『両親』に心配をさせてしまうし、最低限には勉強もしなければならず、授業中に寝ることもできなかった。

それでも、自分のことは極力特別だとは思わないようにしていた。

確かに年齢から考えれば、親に言われるまでもなく走り続けるのは不気味であろうし、そのくせ競技に一切の関心を示さないのはおかしかった。

それでも、自分と違って真面目にスポーツをしている未来のアスリートたちも、自分同様に幼いころから汗を流している。それでなくとも、甲子園球児を目指す、あるいはそのレベルの男子高校生とて同じぐらい、人生を奉げている。

自分は、命がかかっているとはいえ七分の一だ。報われる可能性が七分の一、というのは彼らからすれば高すぎるほどだろう。

そう考えて、極力自分は選ばれし主人公である、とは思わないようにしていた。

それとは相反する形で、二つの感情が自分の胸を締め付けていった。

これだけ頑張っているから、という感情。これだけ頑張っているのに、という感情だった。

少なくとも、原作の主人公は自分ほどに努力していない。もちろん、原作には今の自分と同程度に努力している、或いは自分よりも辛い目にあっている誰かもいるのだろう。だが、努力を美化崇拝していた主人公よりも、努力で勝っている。

クラスのどこにでもいる、日常を、幼少期を楽しんでいる、普通の子供よりも自分は努力している。その自負が、すり減る靴と反比例して、すりつぶした靴の数と比例して、自分の中で高まっていった。

その反面で、頑張ってもこんなものだ、というわかり切った感情は消えなかった。

努力するなんて当たり前、そこから先は運と才能。それは分かり切っていた。それでも、これだけ努力したんだから、という思いは消えなかった。こんなに努力しても、結局自分は抜きんでたものを見出せなかった。

確かに、全く鍛えていない面々には勝っていた。体育でも、運動会でも、負けたことは一度もない。スポーツ特進の学校でもないのだから、自分ほど必死に、わき目を振らずに努力していた生徒なんて、一人もいなかった。

だけど、逆を言って、さっき言ったような子供には勝てない。才能があり、資質があり、かつ自分と同水準の練習をしている子供には、勝てない。

学校の授業でタイムを計って、それで分かったことだった。少なからず、陶酔はあったんだ。これだけ努力している自分なんだから、きっと同学年の誰よりも早い筈。きっと、国の新記録的な何かを出しているはずだ……と。

実際には違った。体育の先生はすごく興奮してこういった。これなら、県大会に出場できるレベルだと。自分の必死の頑張りは、長距離走の分野でも県大会レベルなのだと。

少し弁護させてもらうと、前提が大きく違っている、という一点に集約される。

陸上競技、短距離走や中距離走、長距離走にはそれぞれ前提となる距離が存在する。駅伝の場合は少し、というか結構ばらつきがあるのだが、マラソンなら４２．１９５ｋというのは非常に有名だ。１００ｍ走ならば１００メートル走の、５０ｍ走なら５０ｍ走の、それぞれの走り方や体型というものがある。短距離走の選手はムキムキだが、長距離走の選手は骨と皮だけの様に細い、あれである。

自分はどちらかと言えば長距離走を想定して鍛えているが、４２．１９５ｋ走り切ったところで力尽きるような体にするわけにはいかないし、そもそも一年間走り続けなければならないのも事実だ。それに、いざ逃げるときに相手が長距離走の構えで追いかけてくるとは思えない。周囲の人の状況にもよるが、鬼が追いかけるなら普通に短距離走だろう。逃げるこちらとしては草食獣の様に長距離走をすべきだろうが、それではこちらが追いかけるとき失敗する。

つまりは、ある程度短距離走ができて、長距離走ができる。そんな体にする必要があったのだ。であれば、長距離走の専門家に勝てるわけもない。

だけど、自分は思っていたのだ。自分はこれだけ頑張っているのだから、と。

自分は、走る以外に何もできなかった。確かに、自分は特殊な訓練も特別な試練も特異な環境でもなかった。でも、汗をかき、夏も冬も走り続けてきた。その日々は、本当につらかったのだ。

走れば走るほどに、他のことをせずに、ただ走るだけ。それが、本当につらかった。

両親から釣りに誘われたり、水族館に遊びに行こうと言われたり、遊園地に行かないかと聞かれたとき。本当は行きたかった。年齢相応に、甘えたかった。

だけど、できなかった。きっと、自分以外の六人も同じ思いをしているのだから。

だから、それは後回しにすることにした。何もかもが終わって、時間ができたなら。走らなくても良くなったなら。勝ち残り生き残ったなら。

その時は、いっぱい甘えようと、親孝行しようと思っていた。
それまでは、いろいろなことを我慢しつつ、走り続ける日々を送ることに決めていた。

つらかった。長かった。苦しかったし、投げ出したかった。
だけど、でも、走り続けることができたのは……寝る前に思い出した、前世のマンガとアニメとラノベ。
そして、走る最中には……歌があった。ウォークマンやらなんやらで聞くことはできなかったが、それでも魂に刻まれた、多くの歌があった。
それが、自分の楽しみだった。
魂に刻まれた歌は、いつだって自分を支えてくれていた。
ベッドの中で反響する昔の思い出の中のヒーローは、いつだって自分と同じぐらい頑張っていた。自分以上に耐えていた。
だから、走り続けることができていた。
全てを我慢して、自分は走り続けていた。

我慢して努力すれば、夢を叶えて結果を出せば、その後には多くの物語が待っていると知っていたから。

「この世界の人間じゃない……まあ、そうだろうけれども」
「あの方がこの宇宙の人ではないというのなら、むしろこの宇宙の人ですというほうが驚きです」
「目が三つあるしねぇ？」
「……しかし、そこまで言い切るとは何が根拠なんだ？」
レオナルドは思い返す。彼と過ごした日々を。
世界の名作小説を読んだ。
クラッシックを聞きながらコーヒーを飲んだ。

戦車のプラモデルを作った。
満点の星空の下で、星座を探したこともあった。
降りしきる雪の中、ダイヤモンドダストを待ったこともあった。
だが、ないモノがあった。異常なぐらい、ないモノがあった。

「僕は……あの人が漫画やラノベを読んでいるところを見たことがありません」

それはつまり、彼の好きだった娯楽の全てが、この世界に存在しないことを意味していた。

君の知らない物語　3

限界を超え続けたとはいえ、実際に瞳力が回復したわけでも魔力の消耗がなくなったわけでもなく、寿命の消費にも量の限界がある。であれば、覇龍の維持が不可能になるのも必然だ。そして、曲がりなりにも人間である顔のない男よりも、悪魔との混血であるヴァーリの方が生命力や寿命で勝っているのは必然であり、つまり仮面の男の覇龍が先に解除された。

覇龍が解除され、禁手になった、であればまだ戦闘継続は可能だった。しかし一切の打算なく余力を使い切った顔のない男には、禁手の維持さえ不可能だった。

共に大地に倒れたまま、白龍皇が残り赤龍帝が消えた。

その事実を見届けたヴァーリは、気を抜いてしまった。それによって、覇龍は解除され禁手はおろか、基本状態さえ維持できず、ただ一人の男として寸鉄帯びずに地に倒れていた。

勝った。そう、白龍皇と赤龍帝の戦いは白龍皇の勝利で終わったのだ。おそらく、あと少しもすればヴァーリは多少動けるようになる。その前に気絶するかもしれないが、それでもこのまま死ぬことはないだろう。悪魔は邪龍や神程ではないにしても人間よりも強靭である。失った寿命も、この場で尽きるほどの物でなし。

そして、これは終わりだった。これはこれで、赤龍帝と白龍皇の戦いの終わりだった。

今後、ヴァーリは赤龍帝と戦うつもりはない。今後、どれだけ自分は強くなれるのだろうか。

最終目標であるグレートレッドに至るまで、どれだけの壁があるのかわからない。しかし、その道が本当に存在しているのだとしたら……生前の二天龍を超える力を得た時点で、己に比肩するものはなくなってしまう。

果たして、自分はどれだけ耐えられるのだろうか。天蓋を見上げながら哀愁にふける。

うぬぼれではない。ただの事実だった。グレートレッドやオー

フィスは、夢幻であり無限。つまり他のあらゆる神霊魔獣を遥かに凌駕する存在。彼らに肉薄するということは、それ以下、それ以外から見て懸絶した力を得ながら、そんな彼らよりもさらに研鑽に勤しみ続けることになる。

そんな孤独に、そんな退屈に、自分は耐えられるのだろうか。そう思うと、少し寂しく感じる。これでもう十分なのではないのか、この強さで十分なのではないか、これ以上強くなっても、もうその先に充実などないのではないか。

楽しかった。この戦いは楽しかった。格闘技術の一切を排除した野生の戦いは、自分がただの魔王の子孫ではないということと、ただの天才でもないということを示していた。

隣で倒れている顔のない男がそうであるように、先天的な資質の更に上に、後天的な鍛錬と矜持があるが故だった。

互角の戦い、痛めつけあい、ダメージの与えあい。そして、死線をまたぎかけた戦い。

自分に、臆病な地金などなかった。対等な相手と戦っても、怖くて逃げだすことはなかった。血を吐きながら戦っても、疲れて投げ出すことはなかった。

吐き気を感じるような『強者』。戦いの中に悦楽を見出すのではなく、蹂躙や虐殺にのみ力を振るい、死の危険があれば即座に逃げ出す強い『賢者』でもない。

自分は、対等な戦いを楽しむことができる、本当の戦士なのだった。それが確認できたことがとてもうれしい。

では、この男はどうだったのだろうか。この男こそ、およそ悪の純粋な結晶に思えたが、こうして最後の最期まで自分に付き合ってくれた。文字通り、命をとして。一瞬たりとも臆病風や恐怖に顔色が曇ることはなかった。最後の一瞬まで、ヴァーリへの闘志、或いは憎悪、憤怒。それらがないまぜになった意思をもって、最後までヴァーリを倒そうと、殺そうとしてくれた。

そんな彼。結局名前も本当の顔も知れなかった、顔のない男。最後の赤龍帝にならんとした、悲劇に幕を下ろそうとした彼は、なぜこう

も悪に走ったのか。それがわからなかった。己を研鑽していたこと、限界に挑み続けていたこと、苦痛にも恐怖にも負けなかったこと。それらは戦士として優れた資質だと思ったのだが。

そんな感想を、相棒である白龍皇に語り掛けようとしたが、しかし返事はない。どうやら、もはや通常の状態にさえなれなかったようだ。さしもの二天龍アルビオンも、燃え尽きてしまったようである。

少なくとも、自分ももう燃え尽きていた。もっと戦いたい。そう思う気力がない。

そう思っていた。

顔が腫れ上がったことにより、意識がもうろうとしているがゆえに、狭まった視界と会わない焦点の眼に、影が差すまで。

ありえなかった。

仮面の男には、もう何も残っていない。特殊な眼の力も、赤龍帝の加護も、悪知恵を働かすだけの脳の余力さえも。

もうすぐ死ぬ。時間が経過すれば、彼は死ぬ。いやさ、生きているのは一種の奇跡に他ならない。

そんな彼が、立ち上がってヴァーリを見下ろしていたことがありえなかった。

もしも、生き残った方こそが勝者だというのであれば、ヴァーリこそが勝者である。仮面の男は、死力さえ使い果たして、幽霊のようでありながら人間として両足で立っている。彼はこのまま立っていれば、立ったまま死ぬだろう。それほどに、これ以上何かできるとは思えなかった。

思えなかったのだが、ヴァーリは見た。彼の双眸に燃え尽きぬ何かがあることを。自分同様に腫れ上がった顔に、印象深いその人間の眼は明確な意思をもって戦闘続行を示していた。

もしも、勝者を最後の一瞬まで立っていた方であるとするならば、勝者は顔のない男ということになる。仮にこのままヴァーリが寝たまま、顔のない男が絶命したのであれば、それは勝ち逃げに等しい。

いやさ、ヴァーリにとって死にも勝る屈辱となる。
生き残ったとしても、それは勝利ではない。二天龍の長きにわたる戦いの、その決着は赤龍帝の籠手の所持者の勝利で終わってしまう。少なくともヴァーリは、加えてアルビオンもそう思うだろう。
というよりもだ、勝ち負け云々を置いておいて、対戦相手が立っているにもかかわらず自分が寝ているなどあってはならないことだった。
無理をすれば、自分が死ぬかもしれない。両者死亡という、最悪の結果になるかもしれない。それでも、ヴァーリは立とうとした。骨も筋肉も、どちらも行動できるレベルではない。それは相手も同じことだ、と気力の限りを尽くして立ち上がる。
その、立ち上がるという行為の何たる困難なことか。余りにもみっともなく、余りにも弱弱しく、ヴァーリ・ルシファーにふさわしいとは思えない。
しかし、それでも、目の前の男が生きている間に立ち上がらなければならない。ルールが存在するわけではないが、だからこそ勝敗は心の中にしか残らない。
立つ。立って、戦う。目の前の男に負けたくない。
目の前で、何も諦めずにこちらをにらんでいる、その眼に宿るものに、その力に支えられている男に負けたくなかった。
走るのが楽しいか、と言われればそれなりに、としか答えようがない。少なくとも、長年走っていると、少なくとも朝晩は走らないと落ち着かない。一種の習慣のようなものになっていた。
ただ、それでも別に、周囲から思われているような、走ってさえいれば満足ができるとか、他に楽しいものを知らないとか、そんなことはなかった。
少なくとも、自分にとって走るとは目的を達成するための努力であり、例えるなら一夜漬けを毎日しているような、そんな必死さである。

少なくとも、死ぬ間際に後悔をしたくなかった。

実際、寝る前にマンガやらラノベを読んだり、或いはアニメを見たりしても、ストイックであり続けるのと大して変わらなかったのかもしれない。節度を保って娯楽を楽しむ分には、むしろ心身は健康に保てたかもしれない。

しかし、そんなものは言い訳になりそうで嫌だった。

勝てばいい。だが、負けたらどうだろうか。七分の一で夢がかなう、というのはグリードアイランドのレア度が低いのと一緒で、確率だけ考えれば非常に簡単なのかもしれない。しかし、それでも死ぬ確率の方がどう考えても高い。

七分の一の確率でハーレムラノベの主人公になれるか、あるいは七分の六の確率で死ぬか。それだけの話なら、死なないために全力を尽くすのは当然だった。

九十九の努力に対する一の遊び。ほんの少し、人生において短い時間である幼少期に、僅かな娯楽を楽しんで、その結果死ぬ。死ぬ間際にそれを思うとしたら、最悪だった。

たった一楽しんだせいで、九十九の努力がぱあになる。そんなのは、想像するだに怖気が走る。そんな気持ちを振り払うように、毎日走り続けた。

子供の頃は変な子供、程度だったと思う。まあ、自分もそう思うだろう。だが、小学生どころか中学生になって、それでなにがしかの異常を抱えているわけでもないのに毎日必死で走っている学生など、さぞや奇異に映ったことだろう。

なにせ、学校では短距離長距離を問わず一番だったのだ。ずっと黙々と、部活にもなにがしかの草野球のような地域スポーツにも参加していない、自分自身と戦い続ける無駄にストイックな学生は、感心をとおりこして不気味だったはずだ。

ただ、やはり部活に入れば友達やら何やらで時間を取られると考えて、自分はずっと一人で走り続けていた。

思えば、そうした人付き合いをしていれば、ここまでこじらせずに済んだと言えるのかもしれない。

尤も、その場合自分は負けるなりなんなりして、死んで、遊ばなければよかったと後悔していた可能性もある。

今にして思えば、そちらの方がまだマシだった。少なくとも、ここまでややこしいことにはならなかっただろう。

後になって後悔しないために。一日は二十四時間、一年は三百六十五日。その全てを努力に、つまりは走ることに奉げた自分。

それでも、自分のことが特別だと思わないようにしていたし、実際さほど特別でもなかった。少なくとも、自分が出会った他の主人公希望者は、皆鍛えに鍛えていたのだから。

勝ちたかった。そう思っていた。

そのために、何ができるのかを考えた。結果……積み上げられるだけの努力だけでは足りないという結論に達した。

捨てる覚悟、それだけのことだった。

なにか面白い理由があったわけではない。自分に顔がないのは自分で焼いたからであり、自分で焼いたのは鬼ごっこで勝つ為である。

変装の為に顔を潰す忍者がるろ剣でいたと思うが、それよりもっと短絡的な理由である。鬼ごっこと言っても、一つの街を丸々使っての鬼ごっこ。であればまず相手を探すところから始まることになる。であれば、相手はどうやって他の参加者を見つけるのか。

一番手っ取り早いのは『顔』だろう。なにせ、全員同じ顔なのだから。裏を返せば、顔さえ焼いてしまえば参加者であると見分けるのは不可能になる。日本では顔のやけどをした人がそのまま歩いていても、警察に通報されるということもない。

つまりは、カイジで耳を切り落としたのと発想の方向では一緒である。変装の類を見破る眼はあっても、怪我をする前の人相を特定しうる眼はない、と思いたかった。

親にバレれば泣かれるどころではないのは分かっていたので、そこは転生特典の眼の力でごまかしていた。少しずつ、少しずつ顔を焼いていって、判別不能になるには結構な時間がかかった。

しかし、その甲斐もあって自分は優勝した。喧嘩稼業がそうであるように、全力で努力している人間が、同時に全力で卑劣に走れば結果

は見えている。
そう、結果は見えていたのだ。最初から。

『よく考えればわかることなのだから』

勝利したことに関して、深く語るつもりはないし実際必要ないだろう。
少なくとも、自分は一人は殺して、生還した。それに関して、この時点では達成感があった。
そのすぐ後に、ため込んできたものが吹き上がってきた。
これでもう、毎日毎日馬鹿みたいに走らなくていい。
これでもう、毎日毎日早寝早起きしなくていい。
これでもう、好きなだけ他のことができる。
これでもう、自分はライトノベルの主人公だ。
これでもう、自分は輪廻眼をゲットした最強主人公だ。
これでもう、自分はハーレムのオリ主だ。
アレがしたい、これがしたい、アレがしたかった、これがしたかった、アレができなかった、これができなかった、アレができる、これができる。
赤龍帝の籠手がある、培った体力がある、生まれ持っていた転生特典がある、勝ち取ったＮＡＲＵＴＯの眼がある。

これでもう、努力なんて金輪際しなくていいんだ。

そう、思ったときようやく自分は気が付いた。まだ、何も始まっていないということに。まだ、自分の人生は始まったばかりだということに。

まだ、『学園≪バトル≫ラノベ』ハイスクールＤ×Ｄは始まってさえいないということに。
おかしい、そんなはずはない。そんなことはありえない。そんな馬

鹿な話はない。

つまり『俺たちの戦いはまだ始まったばかり』だというのだろうか。

いや、いやいや、いやいやいや。

あんなに走ったのに、あんなに頑張ったのに、まだスタート地点？

アレだけ努力しても、まだ自分はちっともハッピーエンドじゃない？

まだこれから、死ぬ思いをして強敵と戦って、生き残るために努力して、パワーアップして戦い続けなければならない？

これからの、長い人生もずっと、自分は、我慢して忍耐して苦悩して、修行して努力して苦労しなければならない？

世界の命運をかけて、世界の運命を背負って、負けたら自分が死ぬどころか世界や国家や民衆が死ぬ戦いをし続けなければならない？

なんでだ？

ハイスクールＤ×Ｄには、沢山の設定がある。自分の持っている神滅具『赤龍帝の籠手』は確かに強力な武器だが、そもそも神滅具は十三存在し、その中では中堅どころでしかない。加えて、神滅具でしか倒せない敵というものも存在せず、むしろ神器が効かない相手さえ存在する。

加えて、主人公の周囲には強力な使い手が多く存在し、彼らは多くの面から主人公を守ってくれているはずだった。

世界に脅威は絶えないが、別に故無く襲い掛かってくるわけではなく、主人公の陣営である聖書の神話が勢力拡大に専念した結果、それに伴って領土や信者を失った神話が正当に恨んでいるだけに過ぎない。

『突如現れた謎の侵略者！　既存の兵器は全く通用せず、軍隊も警察もなすすべもない！　そこにヒーローが現れる！　彼は正義と勇気を胸に、己の住む世界を守るために戦うのだ！』

というような、よくある話ではない。この世界は別にそういう設定ではないのだ。

にもかかわらず、自分が戦わなければならない理由はなんだ？
自分が所属している世界の為ではなく、不当に暴力を受けているわけでもなく、既存の勢力が無力というわけでもなく、強力な武器や能力があるとはいえ命を懸けて戦う理由は何だ？
決まっている。『そういうシナリオ』だからだ。
もっと言えば、自分がそんな世界であると知りながらその世界に生まれることを選び、同じ願いをもつ者を蹴落として生き残ったからだ。
だから、今後もずっと努力し続けて、今後さらに激しくなる戦いに身を投じなければならない？
とてもではないが、そんな気力はなかった。
虚脱感。それが全身を支配していた。今更ながら、原作にかかわりたくないというスタンスのオリ主に共感していた。
確かに自分がリアスの眷属にならず好き勝手していれば、最悪リアスとその眷属は死ぬだろう。だが、正直知ったことではない。出会ったならまだしも、直接面識のない相手がどうなろうとどうでもいい。
ついでにソーナとその眷属が死ぬかもしれないが、それでも別にいい。聖書の神話がどうなったとしても、自分には関係ない。なぜならば責任がないからだ。
ハイスクールD×Dの世界で誰がどうなったとしても、それは基本的に聖書の神話の自滅に他ならない。旧魔王派は言うに及ばず、英雄派にしても神器などは聖書の神話の神が作り出したものだ。それを自分が一つ持っているだけの話で、なぜ他の所持者と戦わなければならないのだ。
と、無責任なことを思ってしまった。自己嫌悪に陥る。
確かに、リアスの眷属は可哀想だがそれは世界に山ほどいる中でもごくわずかな面々でしかなく、しかもとっくにリアスが救っている。自分が横から偉そうに『ゲームの選択肢を選ぶ』ような軽い気持ちで口説いていい相手ではない。
とはいえ、彼らが死ねばそれなりに嫌な気分になるのであろうし、全面的に見捨てるのは早計だろう。

自分が勝手に異世界に転生して、自分が勝手に努力して、自分が勝手に苦労して、自分が勝手に虚脱して、自分が勝手に自棄になっているだけなのだ。

なぜ、こんな心境で人生の決定を軽々しくしてしまうのだ。

今しがた学んだばかりではないか。軽い気持ちで重大な決定をしてはならないと。

少なくとも、この時点ではまだ何も失敗をしていない。少なくとも、すぐに死ぬということはないし、力も確実に手に入れた。であれば、焦って何かをする必要はない。

少なくとも、今までの様に走り回る必要はない。しばらく休んだとしても、別に支障はないだろう。輪廻眼を始めとする優勝特典は多くの能力を持っている。

インフレが続くハイスクールD×Dでも、当初なら十分無双ができる水準だ。であれば、今大急ぎで何かを決める必要もない。

そう、自分は優勝したのだ。生き残ったのだ。努力し、結果を出したのだ。

そういう意味では、贅沢な望みだろう。自分同様に夢を描いた彼らは、等しく死んで先も何もない。

自分には未来がある。何でもできる。そう、そういう意味でも自分はこれからだ。

とりあえず、我慢と忍耐を一度だけ、今日だけは忘れよう。

ネット環境の有るマンガ喫茶に行こう。自分へのご褒美だ、今日ぐらい好きなだけマンガやアニメを楽しもう。

お菓子を食べながら、ジュースを飲みながら、ネットで音楽を聞きつつ、徹夜でマンガを読み漁ろう。

『ねえ、あのお客さん変じゃない？』

『ええ、ずっとパソコンの前で、泣きながら動かないわ』

『どうしたのかしら……検索画面の前で……』

自分は、忘れていた。

そう、考えもしなかった。

この世界に、自分が好きだったすべてが存在していないということを。

この世界には漫画もあるしアニメもあるしラノベだってある。それに伴う関連商品もあるし、ネット上にはそれのファンがＳＳを発表していたり歌ってみたを披露していたり、あるいはそれらの批評が所狭しと乱雑に、活気づいていた。

だが、その中に自分が知っている物語は、何一つとして存在していない。自分が知っている物語とよく似ているだけの、別の物語が氾濫しているだけだった。

考えようによっては、この世界には『自分が知らない面白い物語』がたくさん溢れているのだということになる。

もちろん、よく似ている設定の物語、パチモン臭いキャラの絵、どこかで見たような作品ばかりなのかもしれない。しかし、それは今更だ。

元をただせばＡＲＭＳだってデビルマンという先駆者がいるし、デビルマンだってウルトラマンが大本だ。どんなロボットアニメも源流にさかのぼればマジンガーＺに行き着くし、更にさかのぼればＳＦに戻ることになる。

ラノベでは、よく見た設定を組み替えただけの物語があふれているし、むしろそれこそが尊ばれることもある。

ありふれた設定、ありふれた展開、ありふれた人物。それらは『安易』でもなければ『陳腐』でもない。王道なのだ。王道を面白く描けるからこそ、作品は世間で評価されるのだ。

第一、昔見たアニメや漫画、ゲーム。それらを今もう一度観たり読んだり遊んだりして、昔のように熱中できるだろうか？

趣味は変わるし、技術は進歩する。昔は面白いと思っても、今になれば飽きてしまうかもしれないし、単なる思い出補正なのかもしれない。

そう、そうなのだろう。少なくとも、今の自分ならば前世で自分が親しんだマンガやアニメ、ラノベを脳裏に寸分の狂い無く思い起こす

ことができる。しかし、ああ、しかし。

もう、パソコンの向こうには誰もいないのだ。

自分と同じ国に生まれ、同じ星に生まれ、同じ時代を生きた彼らはもういない。

創作物に触れて、感想を匿名掲示板に書き込んでいた彼らはもういない。それらをまとめていた感想サイトも存在しないし、ブログだって検索しても見つからない。

あんなに面白いマンガだったのに、誰も知らない。知っているマンガによく似ているね、と言われるのがオチだった。

あんなに流行ったラノベだったのに、誰も知らない。少し前のラノベと一緒だな、と思われるのがオチだった。

あんなにエロかったアニメなのに、誰もわからない。テンプレ乙、と他の作品と一緒にされるのがオチだった。

我慢すれば、勝てる。勝てば、その先には楽しいことが待っている。そう思って生きていた。前世でも、今までも。だが、これはどういうことだろうか。何でも知っているはずの箱には、自分が知りたいことは何も詰まっていない。

今更気付いた。そう、自分がさっき蹴落として喜んでいた、殺して安心していた連中だけが自分と思い出を共有できたのだと。

そしてもう、彼らは決して蘇らない。自分の眼の力をもってしても、彼らはこの世界に戻ってくることはない。

自分は勝った。自分は生きている。自分には未来がある。

だけど、自分はこれからどうすればいい？

この世界に読みたいマンガなんてない。この世界に観たいアニメなんてない。この世界に買いたいラノベなんてない。

この世界で、検索したい情報なんて一個もない。この地球で、検索したい画像なんて一枚もない。この時代で、検索したい歌なんて一つもない。

割に合わない。自分が勝手に決めて、勝手に選んで、勝手に努力しただけだ。だとしても、夢を叶えたのに自分はちっとも幸せじゃない。これから先、自分は幸せになれない。

明日から、自分はどうすればいい？

「……父さん、母さん」

帰って、どうする？　帰っても、無駄に巻き込むだけじゃないのか？

いや、そもそも帰っていいのか？　あそこは自分の家なのか？　自分は両親の子供なのか？

昨日までは、文字通り駆け抜けてきた。でも、これからはどうすればいい？

今の自分は、どうすればいいんだ。

「おい、貴様……そう、貴様だ」

「……返事がないな。まあ、いい。貴様が持っている、その力……我らの役に立たせてもらう」

「どのみち、それは人間には過ぎた力なのだからな」

「ありがたく思え、我らの役に立てることをな」

初めて、眼を使って戦った。

それは余りにも一方的だった。とりあえず、周辺に被害が出ないように全員を隔離して、そこから一人一人能力を試すように別の能力で始末していった。

最後の一人は生かした。生かして、その上で幻術で情報を引き出した。彼らの人生が分かった。彼らには、仲間がいて友人がいて家族がいて、少なくとも自分よりも充実していて、自分よりも他人と関わっていて、自分よりも生きる価値があって、なによりも生きる場所があった。

そんな彼らが、自分に蹂躙されている。オリ主に、俺ＴＵＥＥされている。

「ははっ……」

乾いた笑みが、口から出た。

『人生』で『初めて』、自分は笑っていた。

「【何だ…何なんだ私は。何という邪悪、何という鬼畜。これが私の望み？　こんな破滅が、嘆きが、私の愉悦だと…？　こんなゆがみが、汚物が、よりにもよって、言峰璃正の胤（たね）から生まれたと。ありえん、ありえんだろ、何だそれは。我が父は犬でもはらませたというのか】」

ああ、そうか。要するに自分は最初から主人公にふさわしい精神を持っていなかったのだ。すとんと納得して、そこからは愉快なものだった。

そう、悪いことをすればいい。それはとても楽しいことなのだから。

そうだ、そうしよう。アレだけ努力したのだ、人生は楽しくなければならない。

たとえどれだけのモノを苦しめたとしても、楽しめるならそれでいい。

もう、他になにもすることがないのだから。

君の知らない物語　4

振動が止み、轟音が止まった。アグレアスの内部で決着を待っていた面々。彼らは、二天龍の争いが終わったのかと思い、その結果を見定めるべくコロッセオに向かった。とはいえ、流石に神器の実験体や混血吸血鬼はその場を動こうとはしなかったが。

故にルネとヴァレリー、レオナルドとジークフリート、そしてヴァルブルガはほぼ全員が人間であるがゆえに徒歩で向かう中、周囲の損壊具合に愕然としていた。

もとより、旧魔王派の大暴れや堕天使との交戦によって損壊していた前魔王の空中都市にしてレーティングゲームの聖地。そこは、まるで地震や台風、戦争の後の様に荒廃していた。

時折崩れる勇壮な建物や、或いは観光用の新しい建築物。それらが軒並み破壊されていた辺り、既にして戦闘の凄まじさと覇龍の恐ろしさが垣間見える。

全員が無言だった。顔のない男が死ぬとは思えないが、生きているならば既に顔を見せているはずだ。であれば、死ぬか、少なくとも重傷のはずだった。

その結果を見るのが恐ろしいのか、誰もが無言だった。道をふさぐ瓦礫をジークフリートやヴァルブルガが破壊するが、それ以外の何もかもが無音だった。

そして、コロッセオらしき、あるいはコロッセオ跡地に到達する。そこは破壊の後に破壊が重ねられていた。飽和爆撃された大地の上に、更に絨毯爆撃を繰り返したような、そんなクレーターの中にクレーターがあり、大地の裂け目が交差している、そんな風景だった。もちろん、大地と言っても浮遊都市なのでただの床としか言いようがないのだが。

あるいは、戦闘用神滅具同士、それも最上級の使い手が真正面からぶつかったのだから、この程度で済んでよかったのかもしれない。

この場で唯一の戦闘の専門家、ジークフリートは確信した。これは攻撃の余波によってできた痕跡だと。であれば、攻撃が直撃した同士

はどうなったのか。如何に赤龍帝の籠手と白龍皇の光翼の最終形態が全身甲冑であるとはいえ、中身が持つとは思えない。

パワータイプ同士の、真っ向勝負。痕跡が放射状に広がっていることから、足を止めて殴り合ったのだと想像はできる。だが、その凄まじさは言語を絶するものがあった。

そして、当たり前と言えば当たり前だが二天龍の存在は、残り香程度。既に宿主たちは戦闘状態を解除していた。

正しく言えば、両者が地面に倒れていた。

流血はおびただしく、遠くから見てもその周囲を赤く染めることで周囲に深刻さを伝えていた。加えて、その流血だけが肉体の損傷だとは思えない。接近すれば、多くの損傷が確認できる。近づくことがためらわれるほどに、二人は凄惨な姿をさらしていた。

躊躇する一行の前で、片方に動きがあった。

服装から察するに、顔のない男である。彼は遠くから見ても人間のシルエットが崩れたかのような、折れ曲がった手足で立ち上がっていた。

その時点で、レオナルド達は顔のない男が勝ったのだと理解した。いや、誤解した。正しく理解していたのは、ヴァレリーとルネである。

「い、いやあ！」

「ダメだ」

駆け寄ろうとしたヴァレリーを、ルネが前に回りこんで抱きしめる。

双方ともに、涙があふれて止まらない。

「だめよ、ルネ！　私にはわかるの！　あの人は、もう限界を超えているわ！　もうほとんど死んでいるの！」

ヴァレリーは生命を認識することができる。その膨大な情報量は常人ならば耐えられるものではない。しかし、慣れてしまった彼女は遠目でもわかってしまったのだ。

このまま放置すれば、自分が処置をしなければ死ぬのだと。

それを、ルネが分かるはずはない。彼女の神器は、赤龍帝の籠手同様に戦闘用であり、ヘラクレスに打ち取られた獅子王の魂が封じられ

ているだけの代物なのだから。

「レグルスが言ってるんだ！　まだ終わってないって！」

復讐者であった彼女には分かるのだ。最後までやり遂げなければ納得できない戦いがあるのだと。それがどれほど大事で、人生を変えてしまうものなのかを。

もしも、この場で助けに行こう物ならば、きっと彼ら二人は永遠にしこりを残す。それはとても辛いことだった。

最後まで、やり切ってほしい。顔のない男がどれほどつらい状況なのか、彼女も察している。ヴァレリーがここまで取り乱すのだ、危機的状況の深刻さは明らかである。

だとしても、彼女は止めていた。レグルスの言う通り、まだ終わっていないのだから。

関係ない。そう、関係がなかった。

顔のない男は、全身のあらゆる場所がボロボロだった。全身全霊をとして戦ったのだから必然である。命も魂も、骨も肉も。等しく限界で立ち上がれることはありえなかった。

粉砕骨折、複雑骨折などまだましな方。腕や足は解放骨折を起こし、肉を引き裂いて露出した自分の骨、その傷口から大量の血があふれていた。

それでも、心と眼が死んでいない。

普段遊び半分本気半分で戦うこの男は、今本気十割で戦っていた。憎悪と憤怒で、遮二無二全力で襲い掛かるさまは、正にドラゴンのそれである。しかし、それでもこの男は人間であり、つまりはドラゴンよりも簡単に死ぬ。

精神が不屈だったとしても、肉体が破壊されれば体は動かない。当たり前の話である。

だが、それでも顔のない男は立っていた。彼はまだ戦うつもりだった。

（関係ない）

混濁した意識の中で、激痛を覚えつつもそれを受け入れていた。

（そう、関係がない。自分はともかく、彼らは関係ないだろう）

脳裏に浮かぶのは、価値のない彼らのことだった。なんの利益も生み出さないであろう、仮面の男の保護下にある面々だった。

（彼らは望んで今の境遇にあるわけじゃないし、前世の行いが悪かったわけでもないだろう）

彼らは、生まれながらに不遇だった。神器はたとえ治療用であったとしても、教会に属していてさえも、持ち主の人生に悪影響を与える。それが悪魔から見て魅力的な神器ならばなおのことに。

混血吸血鬼はなお不遇だ。彼らは純潔の吸血鬼から迫害されるために生まれてきたに等しい。彼らは、或いは彼らの子供たちは、仮面の男が盗み出さなければ迫害され続けていただろう。

しかし、神器がこの世界から失われたとして、あるいは混血吸血鬼たちが吸血鬼の国から消えたとして。

世界から争いがなくなるわけでもないし、差別や貧困がなくなるわけがない。

仮に仮面の男が聖書の陣営を壊滅させるにしても、虐殺に興味を抱かない彼が一人一人を殺して回るわけがない。であれば、残党は残るであろうし敵対陣営と殺し合うだろう。彼らはこの世界から神器が消えても、聖剣の因子を宿す者や異能者を選び戦力にするだろう。『今まで』がそうであったように。規模が縮小化し手段が苛烈になるだけで。

吸血鬼の国では、奪われた財産の穴埋めとして、最底辺の者や当日の守衛責任者をやり玉にあげるだろう。つまりは、八つ当たりする相手、殴ってもいい相手、馬鹿にしてもいい相手、自分は上等であると思うための相手を調達して、でっちあげるだけの話だった。

（だが、彼らが幸せになっていけないわけじゃない！）

仕方がないことなのかもしれない。世界に富が無尽蔵に存在して

いるわけでもないし、民衆の全てが高潔で善良というわけでもない。貧困やそれに根差す争い、差別や不均等は消えてなくなることはない。

しかし、生まれながらに不幸な者が、幸福を願ってはいけないなどという物理法則はこの世に存在しない。この物質宇宙に、下の者は下であり続けるなどという理不尽は存在しない。

（彼らに、選択肢を）

顔のない男は、彼らに選んでほしかった。何もかもをやり直せるわけじゃないにしても、これから新しいことを始めることができる。ならば、その新しいことを彼らに決めてほしかった。

（自分はどの世界で、どの時代で、誰に生まれるのかを選ぶことができた。間違っていたというだけで、それを不満に思うなど許されない）

今すぐに決める必要はない。今の在り方で満足してしまっても、仕方がない。新しいことに挑戦するには、彼らには自立心が欠けてしまったのかもしれない。

だとしても、しょうがないことだったとしても。恵まれていない彼らではない、恵まれた己が勝手に諦めるなどあってはならない。

少なくとも、彼らのうち一人は自分に意見した。彼には要望があったのだ。

花を咲かせたいという、儚い希望が。

（いいじゃないか、別に可哀想な彼らが可哀相なままでも。彼らがそれを選んだのであれば）

確かに、やりようによっては彼らを戦士に仕上げたり、或いはなにがしかの職業に就職させて利益を生み出すことができたのかもしれない。

しかし、この上彼らから何を得ようというのだろうか。今まで過酷なほど、この世界から残酷な仕打ちを受けてきた彼らから、なぜ搾り取る必要があるのか。

上を目指すことを、高みを目指すことを、頂を目指すことを。彼らに期待し強要するなどあってはならない。

（【中国武術史４０００年。幾万、幾十万の武術家達が己の思い描く巧

夫を完成を見ずに消えていった。ある者は病に敗れ、ある者は怪我に泣き、ある者は修行の苦痛に耐え切れず逃げていく】そんな過酷な道を、どうして彼らに押し付けられる）

奇跡を、誰もが尊ぶ。偶然を、誰もが期待する。運命を、誰もが望んでいる。

しかし、その奇跡には代償が求められる。偶然をものにするにも、対価が必要になる。運命はいつだって過酷なものだ。

死んだら、どうするんだ。果たして『主人公』連中に、それを受け入れるだけの度量があるのか。

戦場に駆り出された彼らが、特に面白いこともなく死んでいく。あるいは、誰かを傷つけ殺し、罪悪感に苦しめられることは考えないのか。

主人公がいばらの道を選ぶなら、それを止めることはない。だが、それは幸福とは程遠い浪漫の道だ。

（夢を叶えるために何かを諦めて、夢を実現させるために誰かを蹴落として、そして夢に自分が負けたら、それこそ処置がないだろう）

ヒーローの条件。それはとても厳しいものだった。どれだけ最強の力を得たとしても。神の如き空間掌握能力も、他者の精神を自在に支配する眼も、どれも手に余る。

力にふさわしい高潔な信念。あるいは力さえも凌駕する熱いハート。それが、何時の時代も子供や大人の精神を震わせるものだったはずだ。

（昔は最強スレが好きだったが、今は違う。彼らは一人一人が最高にカッコいいヒーローだった。強いとか弱いとか、そういうのはどうでもいいんだ）

それは、マネできるようなものではなかった。例えどれだけ鍛錬したとしても、身につくような代物ではなかった。

いや、最初から力だけを求めていたのであれば、それはもはや主人公になるための努力ですらなかったのだろう。

（誰でもなれるモノじゃない。確かに彼らの中からヒーローが現れたらすごいと思うが、そうである必要はないだろう）

この上なく下にいた彼らが、少しずつ普通を目指す。それとて、労力や苦労は甚だしいはずだ。であれば、それを『彼女』達が支え、その『彼女』たちを自分が応援する。それはとても素晴らしいことだ。

顔のない男は、そう信じていた。

（自分は優れて生まれてくることを望んで、優れて生まれてきた。その自分が、この程度で諦めては……彼らが報われない）

必ず勝てるという保証はどこにもない。しかし、最後まで戦う義務がある。

あの少年や、あの花壇にそう誓ったのだ。なによりも、目の前のヴァーリに示さなければならない。彼をがっかりさせるわけにはいかない。

全てを投げ出して、原作通りとはいえ養父を裏切った彼は、それを望んでいた。そう約束したならば、もはやできることは全てしなければならない。

それだけではない。

（もしも、原作主人公のライバルとして設定されていた彼に、自分が負けるということは）

それは、絶対に許容できない。その結果に至ってはいけない。駆け抜けただけの日々とはいえ、その総量は理論値だった。自分は勝つ為に幼少期を奉げたのだ。

（自分が、学校に通いながら、悪魔になるための勉強しながら、ヒロインといちゃつきながら、イベントをこなしながら、ながらながらながらながら！　な　が　ら　!!）

勝つ為に万全を尽くしてきた己が、彼に劣るなどあってはならない。

彼の情欲だか童貞力だか乳力だか、そんなノーリスクで得た力に劣るなど、あってはならない。認めることができない。許せない。諦められない。

（あの原作主人公の数カ月に自分の十数年の全てが劣るなど、父さんたちに買ってもらった靴の全てにかけて認められるものか！）

わかっている。本当は全てわかっている。

顔のない男は分かっている。プリンセスメーカーやモンスターファームなどの育成ゲームならばともかく、ライトノベルという媒体で修行シーンを濃厚に描く意味はないし、そもそもハイスクールD×D自体がそんな作品ではない。それを期待しているならば、史上最強の弟子ケンイチ辺りを購読しているだろう。そんな作品だったとして、長期にわたって発刊できたか怪しい。

彼の走り続けた日々も、本人にしてみれば苦行だろうが、別に深く描写しても面白くないだろう。なにせ自分でも面白くなかったのだから。

だが、他人から見てどうかなどどうでもいいのだ。他人から見て面白い人生など願い下げである。

自分の人生は、自分が楽しければそれでいいのだ。

(お前のような、命がけで殺しに来た男に殺されるならそれでもいい。だが、お前にだけは負けるわけにはいかない!)

この世界が真実ラノベの世界なのか、それはどうでもいいことだ。顔のない男にとって、失ったことの絶望と積み重ねてきた自負こそがリアルに他ならない。

そのリアルが、話の都合による『命を懸けた博打』やら『仲間との友情』やら『ヒロインの祈り』やらに劣るなどと認められるわけがない。

顔のない男は知っている。努力とは、結果を出すために行うものだ。それが実るとは限らない。しかし、努力を結実させるのは結果以外にない。

結果で示すしかないのだ。今までの全てを無駄にしないためには。

顔のない男の力の根源は、鬱憤である。

確かにみっともないし、八つ当たりでしかないのかもしれない。しかし、それもまた感情の在り方の一つ。

どれほどの肉体的苦痛も、所詮は数刻の修羅でしかない。無数の夜を不安で過ごし、幾多の朝を呪ってきた彼らに比べれば、死んで楽に

なれる分ボーナスステージのようなものだ。
その思考がどれだけの時間続いたのか。

顔のない男の前には、心底嬉しそうに笑う一人の男が立っていた。

ヴァーリは目の前の男に勝つ為に、一人のボロクズとして立っていた。まだ戦いが終わらないならば、最後まで付き合うのみである。

二人とも、押せば倒れるような心もとなさである。少なくとも、一度倒れれば今度こそ、肉体の構造上立てなくなるはずだった。

つまりは、最後の一撃である。ヴァーリはなけなしの魔力を振り絞り、拳に集めていく。それは余りにゆっくりで、呼吸するように脈動し、収束しつつも消散しつつあった。

放っておけば、消えてなくなりそうなそれを、自慢げに握りしめるヴァーリ。自分にはまだ残弾があるとばかりに、腫れあがった醜い顔で誇っていた。

負けられない。その意地で顔のない男は最終手段に打って出る。

顔のない男の、輪廻眼を始めとする多彩な能力は無尽蔵に扱えるほど便利ではない。体力同様に使い続ければ消耗するし、肉体同様に無理な使い方をすれば破損する。それを普段は赤龍帝の加護で自分の力を倍加させるか、或いは魔獣創造のモンスターから遠隔でチャクラを吸収することにより補っている。

そして当然、赤龍帝の力はともかく魔獣創造によるバックアップは切っている。故に単純なエネルギーの回復は不可能であり、覇龍を御するために負荷をかけすぎたことで強い力は使えなくなっている。

人間の通常の眼になっていることからそれは明らかであり、最上位に位置する輪廻写輪眼は当然のこと、三大瞳術の中では負荷の低い白眼さえ使用できない。

であれば、最初に与えられた力を用いるしかない。顔のない男は、骨の飛び出た手を震わせながら顔の高さに上げる。そして、動く指を探りながら右目に突き刺した。

当然血が吹き出て、人間の眼は潰れる。そう見えた。錯乱したにし

ても、冗談が過ぎる。
　強力極まる優勝特典、ＮＡＲＵＴＯの三大瞳術。それに比べて、強いとはいいがたい転生特典。その中では、優勝者である顔のない男の瞳は比較的強かった。見る、という力には劣るものの、その多彩な能力は普通に扱ったとしても対人戦では無類の強さを誇る。
　とはいえ、これを普段使わないのはそれなりの理由がある。第一に三大瞳術が強力であること。第二に顔のない男にとって敵とは基本的に人間ではない。人間ではない相手にどの程度有効なのかわからない以上、リスクを冒してまで使うことはない。
　最後に、ごく個人的な理由として。
　この能力には嘘が前提として存在している。幻想の世界こそ楽園であり、現実の世界こそ想像が及ばぬほどの苦界である。そう信じる彼にとって、この眼の、その一つの機能に過ぎないとはいえ嘘を思わせるそれを使うのは嫌だったのだ。

「六道眼……人間道……！」

　しかし、この場でそれを使わないことは侮辱に等しい。顔のない男は、右目に『五』の字を浮かび上がらせ、黒いオーラで全身を覆った。
　吹き上がる邪気は醜悪なる人間の世界の暗黒面のそれであり、その体現者である顔のない男にはこの上なくふさわしかった。
　しかし、ヴァーリが目を奪われたのはやはり左目の、人間の眼だった。その眼には、濁り切ってなお色あせぬ何かが宿っていた。
（自分は選択を間違えた）
（どうして、最初の時にもっと神は自分を止めてくれなかったのか）
（なにもかも、自業自得ということは分かっている）
（だが、だからこそ呪わずにはいられない。あの時、どうしてもっとよく考えなかったのかと）
（自分は小さい男だ。マンガとアニメとラノベがあれば、ネット環境さえ整っていれば、それだけで満足できてしまう）
（そのくせ、それがなくなったら大悪党に早変わりだ。小さすぎる）

（こんな自分に、世界なんて救えるわけがない）
（今だって、一番馬鹿な方法で彼らを救おうとしている）
（数百人救うのに、数十億の信仰する宗教に戦いを挑むなんて無駄が多すぎる）
（ソーナさんみたいな頭のいい人なら、もっとうまくやるんだろう）
（結局自分は、自分のため込んだモノをぶちまける口実が欲しいだけだ）
（だが、過ちは繰り返してはならない。少なくとも、彼らにはまだこれからがある）
（彼らは、わかち合うんだ。楽しいことや嬉しいこと、さりげないことやつまらないこと）

【この世のものはすべて……わかち合った時に真の価値が生まれるの】

（そうだ……もう遅いが、今ならわかる。あの言葉の本当の意味が）
（一人でお菓子を食べてジュースを飲んで、マンガを読んだりネットで遊ぶ）
（それは楽しいかもしれないが、それだけじゃダメなんだ）
（話すだけじゃない。相手の話を聞いて、語り合うんだ）
（もらうだけじゃない、施すばかりじゃない）

【おまえとは『ダール・イ・レゼベール』だった。俺はあらゆる人間とその関係を築きたかった……意味を知っておるか？】
【愛よ】

（遅い、遅すぎる。自分は言葉を覚えていても理解していなかった）
（彼らは……決して楽な人生じゃない）
（これから、どれだけの素晴らしいことがあっても、きっと彼らはつらい経験を引きずり続ける）
（ケーキ屋さんになりたい女の子が、ケーキ屋さんになっても幸せに

なれるわけじゃない）
（パイロットになりたい男の子が、本当にパイロットになれるわけじゃない）
（夢の実現には苦労が伴うもの、実現してもいいことばかりじゃない）
（だけど、知らずにその道を選ぶんじゃなくて、知ってその道を選んだならば）
（辛くても苦しくても、自分の選択した結果だからって、知って選んだんだって頑張れるはずだ）
（途中で膝を折っても、知って選んだことだって、納得できるはずだ）
（だから、自分で選ぶんだ。成功するために、失敗してもへこたれないために）
（そのために、彼らの夢や目標を彼女たちは知らなければならない）
（彼らに具体的なアドバイスをするために。そのために彼女たちも学ばなければならない）
（レオナルドなら、きっとやってくれる。アイツもきっと、自分よりも頭が良い）
（だけど！）
（見たい！）
（この『眼』で！）

我執が、火を噴いた。精神に応じて朽ちた体が最後の輝きを見せる。黒く燃え盛る拳が最後に狙ったのは、やはり顔だった。

ヴァーリも同時だった。死ぬかもしれない渾身の一撃を、目の前の卑劣漢に叩き込む。狙いは当然腫れ上がった顔面だ。

攻撃は同時。余力が尽きているのも全く一緒。

どちらの攻撃も、当たれば死ぬ。

その、自滅技にして必殺の一撃は。

「……父さん、母さん。ありがとう」

当たったのは、顔のない男の拳だけだった。

ほんの、ごくわずか。先に当たった、砕けている顔のない男の拳は、

魔王の子孫を殴り飛ばしていた。
覇龍の激突によるクレーターの中で、大地に横たわるヴァーリ。彼は顔のない男の打撃以上に、転倒と魔力の枯渇が原因で死亡していた。
一瞬でも長く生きた方が勝ちであり、最後まで立っていた方が勝ちならば。
顔のない男はごくわずかな差で勝っていた。
「こんな、丈夫な体に産んでくれて……」
殴った姿勢のまま、遂に何もかもを使い果たした顔のない男は前のめりに倒れた。
その差、２ｃｍ。
ヴァーリ・ルシファーが身長１６８ｃｍに対して、顔のない男は１７０ｃｍ。
魔王の血を継ぐヴァーリよりも、ほんの少し背が高くリーチもわずかに長い顔のない男。それが遺伝などの先天的なものなのか、或いは幼少期に虐待を受けるなどの栄養状態ゆえなのか。
わずかな差だった。動き出すタイミング、姿勢や靴などで、たやすく埋まるその差が勝負を決めた。
両親に愛されていた男と、両親から愛を受けられなかった男の、親の差が決め手となって。
自らも命を使い果たした彼の眼が最期に観たものは、自分たちに駆け寄ってくる弟妹の姿だった。

君の知らない物語　5

当然と言えば当然の帰結。実力の伯仲した両者が、全力で真正面からぶつかり合えば双方ともに息絶えるのは必然。であれば、この結果もさほど驚くべきものではない。

しかし、それでも最後の最期まで、血の一滴まで絞りつくした戦いは死闘と言わざるを得ない。それにしても、アレだけの知略の持ち主がヴァーリと互角の武力と負けず嫌いさを持っているとは恐れ入る。我の薄いジークフリートには、なぜこの二人がここまで必死で戦うのかまるで理解できなかった。

「……治療します。レオナルド、ルネ、手伝って！」

「……うん」

「わかりました」

死者蘇生さえも可能とする回復用神器の頂点、幽世の聖杯。その機能をもってすれば、寿命をすり減らした死者さえも復活は可能である。

そして、それに伴う負担は未熟なヴァレリーには重い。しかし、その負担を、重荷を分かち合ったならば。三人はヴァレリーを中心に手をつなぎ、三つの聖杯を用いて意識を共有する。

最後まで戦い抜いた二人を、その力で優しく蘇生していた。

「ヴァルブルガ……言っておくが、俺は彼の味方だ」

「わかってるわよ」

実際の所、今この瞬間こそ歴史の転換点であるともいえる。最も簡単に、顔のない男を殺せる瞬間だった。おそらく、守ることに特化していないジークフリートでは、戦闘もできる魔法使いヴァルブルガを止めきれないだろう。もちろん、その場合はヴァルブルガも死ぬ危険があるのだが。

とはいえ、ヴァルブルガにしても命を捨ててまで顔のない男を殺すほどの理由はない。第一、あの男に対して彼女は恐怖しか抱いていないのだ。例えミイラになったとしても、恐れ多くて近づけないだろう。

「……にしても、どうなの？　私の所は特に不満はないけど、アンタの所は神器がなくなったら役立たずぞろいじゃない？」

本物のキチを見てふざける余裕もうせている。ヴァルブルガはジークフリートに尋ねた。曹操の危惧はある意味真実で、英雄派の面々は実際には神器の所持者の集団でしかない。ヴァルブルガの派閥は全員が魔法使いと魔女であり、実際的には神器がこの世界から消えても何の支障もない。

ヴァルブルガは他の神器の所持者と違い、前の所有者から譲り受けたのだが、それにしたところで力を失うのは不便である。まして、神器しか取り柄のない連中はどうすればいいのだろうか。

彼らが力によって迫害を受けたり不運に直面したのは一種の事実だ。だが、それが今の自尊心の源になっているのも事実である。

まあ、もめたところで曹操如きに使われていた連中が、顔のない男に抵抗できるとは思えないのだが。

だがジークフリートはどう思っているのだろうか。今なら、彼なら治療されている二天龍と、三人の神滅具所持者をまとめて殺せる。もちろん、そんな気骨が彼に有ればなのだが。

「ひとつ、分かったことがある。今でも、曹操とその元に集った面々は古今無双だったと思っている。ヴァーリを除き、貴女を除いたとしても」

彼らは強かった。それこそ、顔のない男とその仲間を圧倒できるほどに。おそらく、まともに戦えばそれができたはずだった。

それができなかったのはなぜだろうか。

「……ただ、強いだけでできることなど知れている。顔のない男は、それを証明しようとしている」

「そうね、カタログスペックでは覆せない、圧倒的な戦略の違い。キャラクター性の格ってやつかしらね」

「……ならば、俺もそうなるべきなのかもしれないね」

「なっても無駄っぽいけどね」

ヴァルブルガは、改めて顔のない男の戦略を吟味していた。

禍の団に所属し、政府の公式発表以上のものを知っている彼女は、

顔のない男の策略が相手のキャラクター性を熟知しているが故だと理解していた。

顔のない男は三つの作戦を三つの陣営に用いた。そして、その三つの陣営は戦力差云々ではなく人間性とでもいうべき性格の差が明らかに違い、それを用いて顔のない男は見事に罠にはめたのだ。

顔のない男にとっての最初の敵、四大魔王、或いは悪魔の政府。彼らは戦力的にも最も充実し、且つその精神性も他の二つに比べて優れていた。テロリストではなく秩序を維持している、一種の勝ち組であり、つまりは世界を支配している側だった。

そんな彼らに対して、守るべき世界の側を攻撃した顔のない男だが、その作戦は旧魔王派や英雄派に通じただろうか？　ありえない。少なくとも、どう動くかなど予測はできないだろう。

領地を攻撃されても、旧魔王派は領民もろとも見捨てた可能性がある。所詮僻地であるし、陽動であることは明らかなのだから放置しようとしても不思議ではない。英雄派はそもそも守るべき領地がないし、その上彼らのスポンサーにもさほど義理を感じていたわけではない。例として冥府を攻撃されても、非公式の戦力である彼らが陽動であることが明らかな黄金風船と戦う必要性はない。というよりも、スポンサー側も相手の狙いを察して彼らに遺族の防衛を任せただろう。

では、アグレアス奪取に関してはどうだろうか。現魔王派は堕天使サイドと水面下で交渉をしていたし、第一相手の作戦に既に気付いていた。であれば、ある程度妥協するなりして、少なくとも投入した戦力の全てを失うという最悪の事態は防げたはずだった。英雄派の場合はもっと簡単である。旗色が悪くなった時点で彼らは尻尾を巻いて逃げ出しただろう。それはそれで、顔のない男には不本意な結末だったはずだ。

今回英雄派をはめた作戦にしても、現魔王派なら絶霧の所持者を守りつつ、撤退戦を行うことだってできたであろうし、そのまま戦って勝った可能性もなくはない。戦うことができる状況なら、戦力をそろえた現魔王派は最強だろう。旧魔王派にしても、彼らはアグレアス同様に全戦力を集中させていたであろうし、そもそも彼らは人間を相手

に降伏など絶対に選ばない。勝てるかどうかはともかく戦闘にはなっていただろう。

今回英雄派があっさり負けたのは、彼らの動員できる『主力戦闘員』の数が少なすぎたことだ。あっさり裏切ったヴァルブルガにしても、もう少し英雄派の戦力が多ければ、つまり一般の戦闘用神器でも、禁手に至った戦力があと十はいれば勝ち目があると判断したかもしれない。まあ、ヴァルブルガは勝ち目がある、程度の不利な戦いではあっさり裏切ったかもしれないが。

守るべきものがある相手にはその守るべきものを攻めて。誇り高い相手にはその誇りを逆手にとって。逃げる相手には退路を断って。彼の作戦は相手の感情性をうまく利用しているものが多い。

とはいえ、現魔王派や旧魔王派はともかく、英雄派の面々のキャラクターまで理解されていたのは驚きを隠せないのだが。

「ん……ああ……」

「く……」

流石は神滅具。例えフェニックスの涙を用いたとしても回復できなかったであろう、命を振り絞った二人の怪我をあっさり回復させていた。ヴァーリは魔力を、顔のない男は瞳力さえも復活させて。

蘇生からの朦朧とした意識を正常に戻すと、二人は隣で呆然としている互いと目を合わせた。加えて、己の神器を展開する。

「……アルビオン」

『ああ、分かっている』

「ドライグ」

『ありがとう。お前のおかげだ』

二天龍は、互いの宿主の戦いを理解していた。途中からは通常の状態さえ維持できなかったが、それでも魂は理解していた。そう、戦いは終わったのだと。

生前死後を問わず、もはや幾度戦ったのかわからない。勝つこともあり、負けることもあり、引き分けることもあった。だが、もう十分だった。少なくとも、生前は決着の付けられなかった二人は決着を得たのだ。

『悔しいが、達成感もある。うん、悪くない決着だ』
『悔しいのはお互い様だ。我らの戦いの決着だというのに、最後には宿主が決めてしまったのだからな』
二天龍には、もはや互いに対する闘争心はない。もはやこれ以上ない好条件で、真正面から戦って戦い抜いたのだ。これ以上は、もはや無粋でしかない。
「さて、と。であれば、お前は予定通りことを進めるのだろう？」
「ああ、朝飯を喰っても、その後には昼飯とディナーが待っている……お前もどうだ、といいたいが」
「そうだな、リゼヴィムが死ぬところ、落ちぶれるところに未練はあるが、蛇足だ」
今なお回復されている、未だに全快ではないヴァーリ。彼は止めようとするヴァレリーの制止を振り切って立ち上がり、死力を尽くして戦い抜いた、座り込んでいる顔のない男に胸を張ってこう宣言した。
「この戦い、お前の勝ちだ。さあ、殺してくれ」
「……【ようこそ、男の世界へ】か。ああ、殺そう」
顔のない男はやや語気を弱めながら、ヴァレリーを止めた。もう、二人を回復する必要はない。顔のない男は魔獣創造とのエネルギーのリンクを回復させてチャクラを回復させていたし、ヴァーリはもう死ぬ覚悟を決めていた。
顔のない男は、正真正銘本気で戦った。その決死の覚悟は戦っているヴァーリとアルビオンに痛いほど伝わっていた。自分が死ぬまで戦うか、或いはヴァーリが満足するまでか。そのどちらかが戦闘の終了条件だった。
だが、顔のない男の本来の長所。それはやはり卑劣に徹した時に他ならない。そんな犯罪者がヴァーリに示したものは単独で、空間や精神を用いた能力を使わずに、一人の赤龍帝として戦うことだった。だが、それは一種のハンデ戦でしかない。そのハンデ戦で負けて死んで、その上で生き恥を晒すなど耐えられなかった。
自分は殺すつもりで戦ったし、顔のない男も死ぬつもりで戦った。それでいいのだ。これ以上はもう、望むべきではない。

「……よろしいんですか、三つ目様」
「もちろんだ、ヴァレリー。【死刑にするために助けたんじゃない!!どうしてわざわざ二回も殺すんだっ。なぜあのまま死なせてやれなかった!?】君の気持ちも分かるが、彼の意見を尊重しよう。馬鹿な話だ。だが、馬鹿で結構だ。賢く生きても悔いが残るなら、馬鹿に死んで悔いを残さない方がいいこともある。ヴァーリ、これからお前の中の神滅具を摘出する、荒っぽく抜くから、まあ死ぬだろう。そこそこ苦しいかもしれない。……いう必要はないのかもしれないが、もしも死んだ後にお前の前に転生神とやらが現れても、聞く耳を貸すな。人生は……うん、素晴らしいものであるべきだが、二度も三度も楽しむべきじゃない。キレイさっぱり消えて無くなれ」
「ああ、そうする……あと百年、一万年生きたとしても、こんなに充実しては逝けないだろう」
顔のない男の、血まみれの手。胸に延ばされたその手を、ヴァーリは受け入れていた。
「輪廻眼……人間道!」
三つの眼が波紋模様を描く、それは魂を引き抜く神の力だった。
ゆっくりと、確実に、抵抗できるはずの死の手をヴァーリは受け入れていった。
『ヴァーリ……お前は最高の宿主だった』
「そうか……それは良かった」
剥離されていく神器、白龍皇の光翼の中のアルビオンは別れの言葉を贈った。彼という最強の相棒がいたことで、ようやく戦いに決着をつけることができたのだから。
「だったら頼む、俺の墓には名前を刻まないでくれ。代わりに……最強の白龍皇とでも」
『ああ、最強の、だな』
ゆっくりと、ゆっくりと、すぐにでもやめることができる殺害は、しかし躊躇なく進んでいく。
ヴァーリは、安らかに自分の力が抜けていくことが分かった。不思議なほどに、心も穏やかだ。もう、彼の中には何も残っていないのだ

ろう。
　未だに燃え尽きぬ顔のない男、彼の旅はまだ続く。その脇に自分がいるというのも悪くはないが……それは未練だった。そんなカッコ悪い男として死にたくない。
　だから、代わりに最後まで感謝の言葉を贈りたかった。カッコいい男として、最高のライバルに。

「……ありがとう。お前が赤龍帝でよかった」

　ぴた、と顔のない男の手が止まった。白龍皇の光翼を引き抜こうとしていた顔のない男は、その言葉を聞いた自分の耳を疑っているのか、カッコ悪いことに未練がましく手を止めていた。もう、戻る道などないというのに。
　それを察したのか、苦笑しながら力なく手を動かし、ヴァーリは顔のない男の手を握って、引き抜くように促した。

「お前の手が暖かい」

　力が抜けて虚脱する中、ヴァーリが最期に言った言葉はそれだった。地面に倒れたヴァーリは安らかな笑顔のまま息を引き取り……。代わりに、顔のない男の手には白龍皇の魂が封じられた神滅具が握られていた。
　果たして、顔のない男は得たのだろうか、失ったのだろうか。その思いが脳内を駆け巡っていた。
　ヴァーリの最期の言葉は、どんな鉄拳よりも強く顔のない男をぶん殴っていた。表情は他者から読み取られることはないが、顔があったならばどんな表情をしていたのだろうか。
　静寂が世界を覆い、満たし、沈黙が支配していた。解脱したヴァーリとは対照的に、苦界でもがく顔のない男は未だに悟りを得られずにいた。
　そんな彼に歩み寄るのは、やはりこの少年だけである。

「三つ目さん」
　手に持っていた、預かっていた仮面を手渡す。それを受け取った顔のない男は、トレードマークであるウサギの仮面をすっぽりとかぶった。
「……ありがとう、レオナルド」
「ええ、どういたしまして」
　何かを失ったのかもしれないが、それでも知って決断したことだった。
　仮面の男は、確かに決着をつけたのである。自分なりのやり方で、原作主人公とは違うやり方で、二天龍の和解を得たのである。
　これでもう、二天龍の争いに誰かが巻き込まれることも、或いは二天龍を宿したがゆえに人生が歪むことも、もうありえないのだから。
　それに、何かを失ったとしても、まだこの手には何かが残っている。仮面の男はまだ得たものが残っていた。そう、レオナルドだけではなく、自分を助けるために駆け寄ってきた妹たちもいる。まあ、彼女たちが自分をどう思っているかに関しては、無粋と思って聞き出そうとは思わないのだが。
「よし、じゃあ続けるか。二人とも、覚悟はいいか？」
『ああ、やってくれ』
『どうせ一度は死んだ命だ…景気よく頼む』
「……ジークフリート、ヴァルブルガ、来てくれ」
　今、仮面の男の両手には二天龍の武具がある。それはジークフリートの持つ聖槍に比べれば劣るものでしかない、中堅の神滅具だ。だが、その中に宿る魂は、聖槍に宿る神さえも凌ぐ最強に近いドラゴンのそれだ。
「今から、この二天龍の武具を三つの聖遺物で破壊し、内部の宝珠から魂を摘出する。その上で、魔獣創造からのエネルギー供給を受けながら自分が……二天龍を復活させる」
「……マジで?!」
「ああ、マジだ」
　そう、この場には二天龍の武具に加えて、ヴァレリーの持つ幽世の

聖杯、ジークフリートの持つ黄昏の聖槍、そしてヴァルブルガの持つ紫炎祭主による磔台がそろっている。これを最初から狙っていたのだとしたら、とんでもない話だ。英雄派は、それこそ目の前の男にすべてを献上するために神滅具を集めたとしか思えない。

声こそ出さなかったが、ジークフリートも同様だった。同時に、納得もしている。なるほど、仮面の男があそこまで普通に戦っていたのは、つまり卑劣な手段で勝ったとしても二天龍の協力を得られないからなのだ。

仮面の男は彼らを満足させるために、全力で真正面から戦ったのだ。リスキーではあるが、成果は大きいだろう。誇り高いドラゴンも、その誇りを満たすほどの戦いを得られれば彼に力を貸すこともやぶさかではあるまい。そう、その相手が遺恨ある天界ならばなおのことに……。

「……まさか、この後まだ戦うのか？」

「もちろん、自分は約束を守る主義でね。きっちり予告通りに天界へ攻め込む」

愉快そうに笑う仮面の男に、ヴァルブルガは改めて後悔していた。こんなのにかかわったのが運の尽きであると。ジークフリートも同様である。まさか、英雄派を片付けるのが本番の前座に過ぎなかったとは。発想のスケールが違いすぎる。

「私だけ仲間外れだし……」

一人しょぼくれるルネ。実際、彼女の神滅具だけこの場では活用される価値がない。ある意味当たり前だが、戦闘能力が全く生かされずに話が進んでいる。

「いいじゃないですか。貴女の出番はこれからなんですから」

「ええ、そうよ！　気を落とさないでね！」

「おい、ヴァレリー！　あんまり待たせるなよ？」

「は、はい！」

落ち込むルネを慰めるヴァレリーを呼ぶ仮面の男。彼はヴァルブルガとジークフリートに黒い棒を突き刺すと、早々に二天龍復活の準備を始めようとしていた。

彼自身、興奮を抑えられていないのかもしれない。最強のドラゴンの、復活を。

「……じゃあ、始めよう」

始めると宣言したのは、やはり神の意志を宿した槍を持つジークフリートだった。

いきなり最強の神器を渡されて、さあ使いこなせと言われても困るばかり。使いこなせるわけがないと思っていた。それはヴァルブルガもヴァレリーも同じである。

聖遺物を用いて神滅具を破壊するなど、二天龍の宝珠を摘出するなど、そう簡単にできるわけがない。仮面の男は最悪輪廻眼でフォローするつもりだったのだが、その必要もなさそうだった。

意外なほどあっさり、そろった聖遺物はリンクを始める。荒れた地面に置かれた二つの武具は、厳かに破壊の瞬間を待ち、同時に聖遺物は『最初からその機能』を備えていたかのようにその時を待っていた。

ゆっくりと、荘厳な光を放ちつつ、三つの神滅具は二天龍の武具へ干渉していく。びきり、びきり、と宝珠に亀裂が走り、そして……強固な封印によって収められていた二天龍の魂が解き放たれた。

その魂は荒々しくも激しく、しかし周囲に破壊をもたらすことなく浮かび上がり、周囲に威厳を放っていた。無理もない話である、神器に封じられる以前の二天龍は、インドラやシヴァと対等の力を持つドラゴンだったのだ。その魂がむき出しで出現すれば、それは世界に影響を与えて当然の代物である。

仮に、和解を前に無理やり二天龍を復活させよう物ならば、魂同士が激突して周囲を破壊していた可能性もある。

そして、それは起きなかった。二天龍の魂は、既に納得を得ていたのだから。

ヴァレリーは戦慄する。事前に話には聞いていたが、これほどの力を持つ魂は見たことがない。仮に、肉体も何もない状態で、魂だけから蘇生を行うとすれば自分にはどれだけの負荷がかかるのか想像もできない。

「よし……じゃあここからは自分の仕事だ。みんな下がれ……本物のドラゴンは、でかいらしいぞ？」

手でいくつかの印を結び、仮面の男は死者復活の準備を始めようとしていた。

「究極幻術……イザナギ！」

額の眼を一つ、犠牲にする術を用いて己が死ぬ状況をなかったことにする、己自身と世界を騙す究極幻術を用いる。

「外道・輪廻天生の術！」

そして、己自身を犠牲にすることで発現できる究極の蘇生忍術を使用する。

『オオオオ……！』

『ヌウウウ……！』

激しい輝きを持つ魂、その輝きが更に増していき、暴風さえも放つ。

周囲の瓦礫は吹き飛び、砂塵は舞い上がり、周囲には熱気さえ満ちていく。

その風圧に耐えきれないレオナルドは、ルネにしがみついて持ちこたえる。

同じく吹き飛びそうなヴァルブルガとヴァレリーはジークフリートが支え、そしてごっそりと命を奪われた仮面の男はやせ細りながらその光景を満足げに見守っていた。

「オオオオオオオオオオオオ！」

「ガアアアアアアアアア！」

白い龍と、赤い龍。

一つの神話に戦いを挑んだ最強のドラゴンは、幾多の犠牲の果てに、ここに復活した。

再び彼らと戦うために。己を窮屈な武具に封じた神話に挑むため

に。

覇龍のような一時的で不完全な再現ではない。聖杯を用いた歪な復活でもない。

神さえも超える最強のドラゴンは、ここに、絶対悪の元に戦力として参上していた。

倍加、譲渡、透過を操る赤龍帝（ウェルシュ・ドラゴン）ア・ドライグ・ゴッホ。

半減、反射、減少を操る白龍皇（バニシング・ドラゴン）アルビオン・グウィバー。

二天龍最後の戦いを前に、彼らのその存在に迷いはない。

勇者王誕生！―完璧絶叫ヴァージョン―　1

とりあえず、ジークフリートとヴァルブルガにはするべきことがあった。言うまでもなく、自分の部下への状況の説明である。

仕方がなかったとはいえ、正真正銘、彼らには何の説明もされていない。故に、これから彼らは自分たちの仰いでいたトップが、いつの間にやら集結して蹴散らされたことを知ることとなるのだ。

「正直、口が上手い方ではないという自覚はある。なので、結論から先に言おう」

ヴァルブルガが話し始めると、流石に場の空気にそぐわないという理由で、口下手であることを自覚しながら、ジークフリートは話を始める。

清聴とは程遠い、困惑と雑談の絶えぬ中。アグレアスのコロッセオ跡にて、英雄派の全員と、魔法使い派の全員が揃っていた。

「英雄派のトップだが、私を除く全員が仮面の男に殺された。そして、私とヴァルブルガは彼に従うことで生き残ることを許された」

その言葉には、余りにも悲痛さが満ちていた。おそらく、この場でなければ、彼でなければ失笑されるか、何の冗談かと憤慨するところだろう。

しかし、ジークフリートの言葉は、隣に立つヴァルブルガが疲れ切った顔をして否定していないところから、真実であると認識されていた。

「ってえことは、姐さん。俺たちは仮面の男の傘下ってことですか？」

と、魔法使いの一人が軽い口調で尋ねる。それに対して、ヴァルブルガは黙って頷いて肯定した。

実際の所、慕っていた幹部がほとんど全員殺されるか裏切るかをした英雄派と違って、魔法使いや魔女たちにしてみればぽんぽんと所属する組織が変わっていくんだな、程度の認識しかない。

元より、彼らは英雄派ほど悲劇的な理由があるわけでもないのだし、禍の団に対して帰属意識があるというわけでもない。

「そうですか……まあ、いいですけど」

「よくねぇ！」
と、そこから一気に英雄派たちが爆発した。彼らは夢を見ていた、英雄になるという夢を。英雄の魂や血を継ぐ彼らと共に戦うのだと。そして、自分たちの生まれてきた意味を示すのだと。
それが、突然トップが軒並み死んで、残った一人も裏切っている。それでおとなしくハイそうですかと頷けるわけがない。
「ジークフリートさん！　本当に曹操さんたちは死んだんですか!?」
「裏切ったなんて嘘ですよね！」
「仮面の男はどこだ！　俺がぶっ殺してやる！」
「ウソだ……英雄だろ?!　最強なんだろ?!」
「ジャンヌ様が……フランスの守護聖人様が?!」
「ヘラクレスさんが負けるなんてありえない！」
「てめえぇ！　ジークフリート！」
「許せない……仮面の男が許せない！」
「アンタ、最低だ！」
「自分の命がそんなに惜しいのかよ！」
「アンタらを信じて死んだ仲間はどうするんだ！」
誰もが、好き勝手に好きなことを言う。極めて無意味で、中身のない、薄っぺらい、しかし彼らにとっては全てである言葉の数々を。
しかし、本気で相手を論破するつもりもなければ、相手へ殴りかかる勇気もない。
流石に殺されてやるつもりはないらしく、ジークフリートはグラムを手に牽制は怠っていなかった。
「みな、言いたいことはたくさんあるだろう。だが、その前になぜこうなったのかを話したい」
「うるせえ！　話なんて聞けるか！」
こういう時、曹操ならばうまくまとめたんだろうな。そう思いつつジークフリートはため息交じりに剣を唸らせた。
最強の魔剣、グラム。それは決して最強の聖槍に劣るものではない。
たかが量産の神器を宿しているだけの面々に、これに対抗できるも

のがあるとは思えない。
「話ができないなら、仕方がないな。全員が私の敵で、殺しにかかるということか？」
　仮面の男の気持ちが少しわかる。彼らは本気で怒っているのかもしれないが、それでも覚悟が足りず思慮も足りない。
　まさか大声でわめけば世界が変わるとでも思っているのだろうか。自分の心境に合わせて世界が優しくなるとでも思っているのだろうか。
　話し合いを放棄するということは、殺し合いに発展すると、想像もできないのだろうか。
「あ、俺らは違いますよ～～」
「やっちゃえジークフリート！」
「吐いた唾呑むんじゃねーぞ！」
　と、笑いだす魔法使い、魔女の面々。それを見て、ヴァルブルガはあふれ出る涙をこらえられない。彼らはまだ、自分たちがどれほどの災厄とエンカウントしてしまったのか、知らずに無邪気に笑っているだけなのだ。
「そ、そんなつもりじゃ……」
「じゃあどうするつもりなんだ？　話を聞くのか、戦うのか、出ていくのか。選べ」
　仮にも仲間である彼らへ力で訴えるのはあまり好かないが、しかしこのまま放置していれば彼が来る。あの仮面の男が来れば、もはや交渉だとか会話だとか対話だとかには発展しえない。
　見せしめでもなんでもなく、ただ相手の前言を撤回させるためだけに、歯向かった相手をひねりつぶすぐらいは平気でするだろう。当然、できる限り残虐な手段で。とても楽しそうに。
「私たちは、ハーデスからある情報を与えられた。仮面の男が、天界に攻め込むという情報だ。私たちはそれを阻止するために、事前に判明していた仮面の男の拠点へ侵入した」
　と、そこがいきなりわからなかった。なぜ敵であるはずの、聖書の陣営の重要拠点、天界へ攻め込む仮面の男を援護しようというのか。

文章に矛盾しか感じず、魔法使いたちも英雄派も困惑していた。それを正すように、更にジークフリートは続ける。

「皆が訳が分からない、と思うのも当然だ。だが……天界には、俺たち英雄派にとっても重要なものがある。神器の、根幹となるシステムだ」

改めて説明してみると、泣きたくなるほど情けない話だった。自分が裏切った国がばら撒いた、その国に管理システムがある武器。それを頼みとして世界に挑む。それのなんと無謀だったことか。

自分たちは便利さに目がくらんで神器を重用してきたが、しかし実際には依存していただけだったのだ。

「仮面の男の狙いがどうあれ、天界に攻め込めば神器の根幹システムが破損し、どうなるのかわからなかった。もしかしたら神器の使い手になにがしかの影響が及び、死に至るのかもしれない。もしかしたら、神器が全て使用不能になるのかもしれない。もしかしたら、神器がどこかへ消えてしまうかもしれない」

やはり、ここでも英雄派と魔法使いたちは反応が分かれた。英雄派たちは自らが手にしている武器を見て、それがなくなる状況を想像して絶句し、魔法使いたちは単に派手なことを考えているんだと感心していた。

あるいは、これこそが禍の団の致命的なところなのだろう。価値観をまったく共有できない組織が、まとまれるわけがないのだ。

「そう思った曹操は仮面の男を止めるために、予め調べておいた仮面の男の拠点へ襲撃をかけたんだ。君たちが混乱し、仮面の男に同調するかもしれないと思って、何も告げずに幹部だけでね」

それはつまり、目の前の彼らを説得するつもりさえなかったということだろう。

それは正しい認識だった。おそらく彼らは、説得の時間が多少あったところでひとまとまりにはならなかったはずだ。

なぜならば、決定的なモノが欠けていたからだ。

「その結果……罠にはまった。情けないほど単純な罠だったよ……そして、私たちにこういった。ヴァルブルガとジークフリートが仮面の

男の仲間になるならば、お前達の部下も見逃してやると……。断るならば、全員むごく殺すと」
「それで、それで曹操を裏切ったっていうのかよ」
「その通りだ」
「そんなの……俺たちの為じゃない！　アンタは、自分が死ぬのが怖かっただけだ！」
「その通りだ」
綺麗事を暴く批判を、いともあっさり認めるジークフリート。そこには一切の後ろめたさが感じられない。
「私は……自分一人が助かるために、彼の誘いに乗ったんだ。それだけの話だ」
こうも開き直られると、もうどうにもならない。そもそも禍の団は民主主義とは程遠い組織であり、必然末端の意見が上部で丁重に扱われることはない。
英雄派は特に顕著で、この武力を基本とする集団でしかない。故に、上が露骨に下を切り離せば、誰も何もできないのだ。
「だから、生憎君たちに関して何か責任を全うするとか、そんなつもりはない。君たちが帰るというならここから地球への道を手配することもある。君たちがここに残り、つまり仮面の男の配下に収まるならそれも口を利く。だが、私を殺したいというのなら迎え撃つし容赦はしない。仮面の男と戦うというのなら、助勢もない」
「む、無責任だ！」
「そうだ、あんまりにも勝手すぎる！」
と、誰もが文句を口にする。無理もない話ではあるが、自業自得でもある。テロ組織に所属して、トップが壊滅して、それで福利厚生に文句を言うのは筋違いだろう。
「ただ……迷っているなら、自分と同じだ。相談には乗る。ただ……忠告はしよう」
自らの迷いを直視した彼は、曇りなき眼で問うた。
迷いを抱かぬ、迷子以下の愚か者たちへ。
「君たちは、どうするつもりだ？」

その、何気ない質問には、しかしとんでもない重さが含まれていた。
「仮に、私を殺したとして、仮に、仮面の男に勝ったとして、仮に、ここからいなくなったとして」
それは、自分と彼らが本質的に同じものであることを示していた。
つまり、気づいているか、気づいていないかでしかない。
「その後、どうするつもりだ」
その言葉に、誰もが言葉を失う。
そう、どうするつもりだというのだろうか。目の前の彼らは、魔法使いも含めて、誰も答えを持たない。
「もう一度聞く。その後、どうするつもりだ」
「そ、曹操の後を継ぐ！」
その言葉は、余りにも軽かった。言っている本人をして、余りにも無価値だ。
「そ、そうだ！　幹部がみんな死んじまっても、俺たちは英雄派だ！」
「彼の後を継ぐ！　誰が仮面の男の部下になんてなるもんか！」
「ああ、お前になんて従うもんか！」
その言葉を受けても、ジークフリートは揺るがない。もっと言えば、怒っている彼らの方が自信がなさそうだ。
彼らには何もないのだ。一瞬燃え上がる何かはあっても、燃え続けるほどの何かが。
「そんなものはない」
厳しく、ジークフリートは言い切った。
「曹操の遺志を継ぐ、と言ったな。具体的に何をするつもりだ？　そもそも、曹操から何か聞かされているのか？」
もう、誰も何も言えなかった。そう、曹操は彼らに何をしろ、アレをしろ。そう言ってきた。それによって、確かな力を付けてきた。
だが、それを用いて何をするか。それに関しては誰も教えてくれなかった。
無理もない話である。そんなものは最初からなかったのだから。
「少なくとも、私にはなかった。明確な目標など、目的など、なにもなかった。曹操にだってなかったさ。彼は何も言ってくれなかったし、

誰も彼に聞かなかったからな」

ある意味、同レベルの人間が集まってできた、温い組織だったのだろう。

まあ、仕方がないと言えば仕方がない。それが普通というものだ。彼らに共通するものは力だけであり、それ以外の何もかもがまとまりに欠けていた。

思えば、最初からそう仕組まれていたのだろう。力をもてあまし、何かができるはずだと鼻息荒くしていた子供を、ひとまとめにして愚かなままにしていた。権力者たちが都合よく使いつぶすために。

曹操が目覚めていれば、或いは変わっていたかもしれない。しかし、所詮は『もしかしたらそうだった』かもしれない程度の、悲しい妄想に過ぎない。

もはや、曹操は墓の下だ。それを保証する最強の槍は、己の中に確かにある。

その、最強のなんと空しいことか。

これが一体、どれだけ曹操の人生を幸せにしたのだろうか。

これがあったというのに、英雄の血を継いでいたというのに、結局彼は何もできずに謀略に飲まれた。

「もう一度聞く。曹操は君たちに何を残した。君たちはこれからどうするつもりだ」

再びの質問に、誰も回答はなかった。沈黙が場を支配する。

それは、熱狂と陶酔に満ちた青春、つまりは子供じみた自分にとって都合のいい理想の、その終わりが彼らに等しく訪れていた。

「……少なくとも私は、仮面の男の部下だ。彼と共に戦うつもりであり、つまりは神器の根幹となるシステムを奪取するつもりだ。その結果がどうなろうとも」

目の前の彼らへ語るその眼には、何かが灯されていた。暗く、深く、よどんだ、しかし信念と呼ぶべきものが存在していた。

余りにも熱量が違うが、それでも彼の眼には仮面の男と同じものが燃えていた。

「曹操を裏切ってからよくよく考えたんだが……そうだな、うん。私

は……怒ってもいいんじゃないだろうか？」

仕方がない。その言葉が全てだ。彼の境遇はそれで片付けるしかない。

「教義のために命を懸けて戦うエクソシスト。それはまあ素晴らしいのだろうが……思い返してみれば、そんなものになりたいと思ったことは一度もない」

なんで自分だけが、なんてことはない。自分と同じ目に会った子供は多く知っているし、その中で死んだ者がほとんどだ。

「実験はつらかった、訓練は苦しかった、戦闘は恐ろしかった。……まあ、自分だけではないが……なんであんな目に会わなきゃいけなかったんだろうな」

この場の面々は知っている。決して幸福とはいいがたい、ジークフリートの過去を。

「聖杯を使えば、寿命も一気に回復するし……魔剣の呪いも問題ない。結果的にだが、自分の問題は全て解決してしまった」

このまま、仮面の男にいろいろ頼めば、或いは彼ならジークフリートをこれ以上酷使することなく、平穏な人生を与えてくれるのかもしれない。

だが、過去は消えず、怨恨は断てず、理由はなくならない。

「別に、仮面の男ほどに聖書の神話が憎いわけじゃない。世話になった人がいないわけでもない。しかし、それはそれとして……怒っていけないわけでもない」

どんな理由があったにせよ、自分で選んだわけでも望んだわけでもない。であれば、あの境遇に対して怒ってもいいのではないのだろうか。

テロリストの理屈であるということは、よくわかっている。しかし、それも『仕方がない』ことなのではないのだろうか。

明確に加害者がいて、明確に責任者がいる。であるならば、自分は明確に被害者だ。

「怒ってもいいだろうし、戦ってもいいだろう。その結果が、どうなったとしても」

それも仕方がないことだ。なに、問題はないだろう。
彼らに主の威光があるならば、仮面の男の悪など退けるはずなのだから。
「私は、怒るべき相手にそれをぶつける。彼らには、それを受け止めてもらう」
「だけど……」
「そうだ……」
「でもさ……」
不満があるのだろう、英雄派の面々は彼に反発を示した。
もちろんそれには、明確な意思などない。精々、不平不満という程度のものだ。
「神器がなくなったら、どうすればいいんですか？」
「そうだ、せっかく使える様になったのに……」
「アンタはいいよ。まだ、魔剣があるんだから……でも」
もう、代替案はない。彼らには縋るものがもうない。
だが、神器さえなくなってしまったら。もはや彼らには何も残っていない。
確かに、ジークフリートはこの場の面々の中で、一番不幸な相手だ。
差別されただとか、冷遇されただとか、そんな生ぬるい環境にあったわけではない。
そんな彼に、何を言っても意味はないだろう。だが、それでも言わずにはいられない。
この場から去って、新しい何かを見つけられるほど、彼らは強くなどない。
「仮面の男は、待ってなどくれない。戦うならば、今しかない。後で何を言っても、遅すぎるだろう」
一つ一つの言葉を、区切るように話す。
それは、自分に言い聞かせるようだった。
「だが、戦わないのならば、それは遅いということではないのだろう。私は聖書の神話と戦うつもりだが、負けるつもりも死ぬつもりもない。帰ってきたら……この場に残った面々と相談をするつもりだ。

もちろん、君たちが望むのならば、だが」
　ジークフリートは、彼らが誰と戦うのか、とは特定しなかった。それはつまり、仮面の男とも聖書の神話とも、戦うべきではないと示していた。
「……もう一度言う。仮面の男は待ってくれない。奴は……歴史そのものだ。奴がしようとしていることは、この星の歴史に一つの区切りを作ろうとしていることだ。奴の行為は失敗しようが成功しようが、間違いなく歴史に刻まれるものとなるだろう。それを阻むならば……相応の覚悟をもって挑むことだ」
　拾えた命を、潔く手放した彼の様に。苦痛にも敗北にも、死にすらも屈しない覚悟が必要なのだろう。
「なんか、向こう暑苦しいっすね」
　と、魔法使いたちはどこ吹く風である。所詮ははみ出し者の寄せ集め、実力はそこそこのものがあるのだろうが、しかし彼らもまた大義を持っていなかった。それでも別に問題がなかったのは、結局彼らはそれで満足してしまうからだろう。
「紫炎の姐さん、顔色悪いっすよ？」
「そりゃあねえ……」
　ヴァルブルガは、恐怖で凍えていた。聖書の神話と真っ向から戦うことが恐ろしいのではない。それが問題にならないほど、仮面の男が恐ろしいのだ。
　まるで負ける気がしない。錯覚に過ぎないのかもしれないが、彼はどこまでも恐ろしい。彼が聖書の神話と真っ向からぶつかって、それで苦戦するという、つまり聖書の神話が善戦する可能性さえかすんでいる。
　あれは、本当にどうにもならないものだ。
　とはいえ、実入りは十分である。実際、味方には景気よく色々振る舞う性分らしい。
　手付金代わりに与えられたアグレアス一つとっても、彼女の陣営にとっては百年遊べる額の収入になるだろう。
「まあ、朗報もあるわ。お兄ちゃん、三目ちゃんが盗んだこのアグレア

ス、私たちにくれるってね」
「マジッすか!?」
「太っ腹ですね！」
　実際のところ、書面を交わしたわけでもない口約束だが、態々反故にはしないだろう。よくよく考えれば、売るにしても使うにしても、伝手なりノウハウが必要なはずだ。もっと言えば、他にほしいものがあればあの男はあっさり盗んでくるだろう。
　物に執着しない辺り、強盗らしからぬものがある。或いは、もっと無茶な要求をこちらに通すためなのかもしれないが。
「まあ、派手にぶっ壊れちゃってるけどね。どうせ上辺だけで内部は大丈夫でしょ」
　覇龍の激突に関してはそうなのだが、実際には旧魔王派が壊している。それでも重要な施設は生きていると思われる。それに、修復を含めて得られるものは多いだろう。
「まあ、覚悟しときなさいね……あれはおっかないわよ」
「ああ、そうだぞ」

　ぞわり、と背中に突如として現れた、顔のない男。嬉しそうな声色で、ヴァルブルガの肩をつかんでいた。
　ひい、と悲鳴を上げることも逃げることもできない。ゆっくりと振り向いたヴァルブルガの眼前には焼けた顔の男がいた。
「ヴァルブルガ……お前が自分を正しく理解してくれていていいよ。そういうのって大事だよな……互いの信頼関係ってやつは……誤解がない方がいい」
「お、おに、おに……」
　その、顔のない男の背後には二天龍が出現していた。その脇に顔のない男の、その配下の面々が勢ぞろいしている。
　しかし、完全復活したドライグやアルビオンに驚く魔法使いたちや神器使い達とは違い、ジークフリートとヴァルブルガは顔のない男をみて硬直していた。

「さあて……ヴァルブルガ……エンジョイ&エキサイティングの精神で、大暴れする準備はできたかな？」
「わ、わ、わたし、私ね、おにいちゃん、お兄ちゃん?!」
「ヴァルブルガ、笑え、媚びを売れよ。お兄ちゃんは君のへつらい笑う顔が好きだな」
「はっはっは……お、お兄ちゃん、大好きぃ」
「ああ、自分も大好きだぞ！」
性的なモノを一切含まない、親愛を示すハグをする顔のない男。それを無抵抗に受け入れるヴァルブルガだが、その顔は引きつった笑いが張り付いていた。
もう、どうあがいても絶対に逃げられない。自分に安息の地などどこにもないのだと、彼女は魂で理解していた。
「さてと、テロリストの諸君……犯罪は好きかな？」
二天龍という暴力を背景に、道化師は愉快に語る。
「さあ、強盗の時間だ。みんなでお弁当をもって税金泥棒に行こう！」
覚悟はできているか？
覚悟ができていないならば諦めろ。
覚悟ができているならば、その覚悟は壊されるのだと理解しろ。
この男は、もう誰にも止められない。自分で止まらない限り。

「少し寒いかもしれんが……辛抱してくれ。他だと腐っちまいそうでな」

顔のない男の保有する世界の一つ、氷の支配する雪山の世界。その中にある建造物に、ヴァーリの遺体は丁重に安置されていた。

その遺体に語り掛ける顔のない男は、どこか活力が欠けていた。おそらく、ヴァーリへ向けていた感情を、自分なりに清算しようと区切りをつけているのだろう。

「必ず戻ってきて、懇ろに弔うよ」

そんな彼を、背後から見守るのは彼の共犯者と保護されている面々、そして二天龍だった。それなりに広い建造物は、二頭のドラゴンでも首を突っ込むぐらいのスペースはあった。

というか、当たり前ではあるのだが寒いので、二天龍に全員がへばりついている。なぜ仮面の男が平気そうなのかわからないが、一応厚着をしているからだろうと思うことにしておく。そもそも気にするだけ無駄である。

言おうとして、しかし口に出せない泣き言を、しかし二天龍は察していた。

「とりあえず……三つ目、と呼ぶが。三つ目よ、まだ予定は済んでいないのだろう？」

「そうだ、そうしていつまでも途方に暮れているな」

完全復活を果たした二天龍は、己の肉体を生み出した男にやさしく語り掛ける。

彼の心中を察しているからだろう、ドラゴンらしからぬ穏やかさがあった。

それを受けてなのか、顔のない男は別れの挨拶を今度こそ済ませた。

「……ヴァーリ、これは約束だ。自分はこれからあらゆるものを敵に回すが、誰もを歯牙にもかけず、鎧袖一触する。あらゆるものを根こそぎ奪い、蹂躙し、凌辱する。何物を恐れず、何物にも怯えず、今ま

での様に笑って蛮行と悪行を行う。君が止められなかった以上、もう誰にも止められないと証明して見せる」

照れを隠しているのか、恥ずかしいのか。顔のない男はヴァーリに背を向けて、二天龍に向き合って、最後に言い残した。

「ありがとう、君が白龍皇でよかった」

顔のない男は、自分の手を握りしめた。

彼が暖かいと言った、彼の命を奪った手を。

その言葉の意味は、分かり切っている。

「感謝されるとは思っても見なかったし、称賛されるとも思わなかったな……生憎、生まれてこの方、他人に好かれるようなことなんざ、一つもしたことがなかったからな……」

さて、と雰囲気を切り替えた。

悪のオーラが吹き上がる。その眼には、確かな感情が燃え上がっていた。

「さてと、昼飯を食いに行くとするか」

ヴァルブルガから回収した、最強の空間系神器、上位神滅具『絶霧』を用いて空間に穴を開ける、仮面をかぶった仮面の男。

もはや、彼の道を阻むものはどこにもなかった。

少し、時間は遡る。

「もう……どこからどう突っ込んでいいのかわからねーが……」

かろうじて、アザゼルだけが口を開いた。彼にほれ込んだソーナをして、ファルビウムの語る犯行計画の概要がおかしかったのだから、他の面々がどれだけ絶句したのか言うまでもない。

流石は聖書の神話の、唯一残った初期からのトップであると言えよう。

問題は、それでも全然、さっぱりこの状況を好転させることができないということだったのだが。

「お前らの頭はどうなってんだ?!」

「ええ？　普通だと思うけど」
と、全く参考にならない回答が返ってきた。なんというか、これでもかというぐらい信ぴょう性がない。
ファルビウムがざっと語った内容は、普通の人間や普通の悪魔、或いはおよそ全ての知的生命体が思いつくような作戦ではなかった。
「なんていうか……皆頭が固くなりすぎだよ。こういう時って、シンプルに考えてみれば案外すんなり正解に到達するものだよ？」
「済まんが……もう何がなんだかわからない」
天才と言われるアジュカをして、完全に白旗を上げていた。
これから起きる出来事を、順序良く説明されただけだというのに、どうしてファルビウムと仮面の男がその作戦を思いついたのかわからないのだ。
「じゃあ、もう一度説明するね」
優しく、どこか達観したような口調で、彼は仮面の男の作戦を説明し始めた。
「まず、ミカエルは他の天使に命令して天界を隅々まで再調査すること。煉獄も含めてね……で、リゼヴィムが言うには煉獄に有るらしいから、そこは特に重点的にね」
「ん、ああ。マミーが言ってたことが本当なら、あるはずだぜ、冥府と天界を繋ぐ通路はな」
なにせ、幼少の頃に母親からおとぎ話の様に聞かされただけの情報である。リゼヴィム以外には初代ルシファーさえ『絶対に知っているはずのない』情報だった。冥府と天界を繋ぐ通路の存在、はともかく、それをリゼヴィムが知っているということ。
それを利用した作戦とは考えにくいが、ともかくその存在が重要だった。
「まあ、なくても仮面の男が作ってくれてるはずだよ。冥府を巻き込むためにね」
「……それを我々が正式なルートでハーデスに通告、というか警告する。それだけで、本当にいいのですか？」
「うん、そうすればハーデスは確実に『英雄派』とやらを動かすね」

説明する内容を整理しているうちに得られた『長期間洗脳されていたらしき』旧魔王派からの情報。即ち禍の団という組織の存在と、そのスポンサー。

手っ取り早くいって、聖書の神話に多くの信徒や領地を奪われた神話が、聖書の神話内部の不穏因子や神器を持った人間を用いて、テロによるダメージを与えようとしている計画だった。

サーゼクスの語る理想と相反する、しかし正当な世界の反応。まったくもって、自業自得としか言い様のない現実である。

「とはいっても英雄派が肥え太るとハーデスも不都合だ。だから、彼は英雄派へ出撃を依頼するのをギリギリまで渋るだろう。そして、そのギリギリのタイミングで英雄派は仮面の男の拠点に攻め込む。彼は、そこで罠にかけて彼らを倒す」

「ってことはだ。つまりお前がそれに気づかなかったら、仮面の男は一気に劣勢だってことだな。この映像記録をビデオレターにするにしても、なんで直接言わなかった？」

「そりゃ、聖書の神話内部にまだ裏切り者が居るからさ。直で言って、もしもその情報がハーデスに流れたら、一気にご破算だ。それどころか、禍の団のスポンサー連中から完全に敵対視されるからね」

その説明に、誰もが息を呑む。確かに、ファルビウムだからこそ『映像記録を見る前』から作戦に気付くことができたが、しかし他の誰が『映像記録を実際に見て』あの犯行計画を想像できるだろうか。

「彼はそのスパイも利用する算段だろうね。僕らの口から直接いうよりも、自分が送り込んでいる、或いは既に手の内に引き入れた内通者を通して得られる情報は信頼性が高い。加えて、空間跳躍能力を用いる仮面の男が攻め込むと予告したとなれば……天界をひっくり返して捜索するのは当たり前だ」

つまり、たった一つの情報を隠すことで、ハーデスと英雄派を誘導しようという考えだ。その、たった一つの情報が『仮面の男はハーデスを利用するつもり』であるというだけで。

「だから、何も不自然じゃない。僕らが馬鹿正直に報告するのが、少し不思議というだけでね」

「で、その足でこっちに攻め込んでくると……」
　少し、見込みが甘い気がする。神滅具の性能はよくわかっているが、旧魔王派からもたらされた情報が確かなら、英雄派を自称する輩はそれなりの戦力が整っている。特に絶霧の所持者は、来歴が確かならば歴代最強の空間使いかもしれない。
　どんな罠があるのかわからないが、そう首尾よく倒せるものだろうか。
「僕は、絶霧のことも、仮面の男の能力も良くわからない。でも、確かなことはある。仮面の男には絶対に勝てる算段があるということと……仮面の男は絶対に成功させなければならないということだ」
　そこにはある種の信頼さえ臭わせている。仮面の男という存在に、頼もしささえ覚えているようだった。彼の心中は、下手をすれば仮面の男よりも読みにくく、仮面の男でさえ読み切れないのかもしれない。
「じゃあ、推理をはじめようか。まず、仮面の男は何が一番の狙いだと思う？」
「分かんねーよ」
　いきなり匙を投げたアザゼル。それには全員が頷いていた。ソーナでさえ、もはや思考を停止して講義を聞くことに集中している。
　仮面の男も、ファルビウムも、もはや理解できぬ怪物にしか思えなかった。
「それが駄目なんだよ……彼は頭が良い。頭が良いから、無駄なことをするけど必要なことは怠らない。その前提で考えてみよう？」
　しかし、誰も言葉が出ない。一番も何も、複数の勢力を敵に回しすぎている。それで目標も何もあったものではない。なにより、仮面の男が実際に喋っている映像を見て、更に彼のことが分からなくなっていた。
「じゃあ、もっと簡単に、主観的に考えてみようよ。ソーナちゃん、僕らが仮面の男と戦うには何が必要かな？」
「絶霧です。それが無ければ、逃げる彼を捕まえることはできません」
「それだ、他のことなんて全部失敗してもいいんだよ」

その発言を聞いて、誰もが知っていて、誰もが悩んでいて、その所在を知って愕然とした上位神滅具『絶霧』。それさえあれば、仮面の男と対等に渡り合うことも不可能ではない、というのに敵対勢力の中でも幹部格が保有しているこの現実。

しかし、それは仮面の男も同じだったと気付く。彼にしても、最大の脅威はそれだったのだ。言われてみればやはり当たり前のことである。

「彼のやりたいこと、彼のできること、彼のしなければならないこと。それらをごっちゃにするから訳の分からないことになる。彼がしなければならないのは、絶霧の確保だ。やりたいことがいくらあるにしても、これができなければ全ては灰燼に帰する。それが彼にわかっていないわけがない」

直接的な戦闘能力以上に汎用性の高い空間使い。自らがその最高峰であるからこそ、同等の存在を警戒するのは当たり前である。

「だから、彼はそこを軸に考えたはずだ。彼が事前にどの程度『絶霧の所持者』について知っていたのかはわからないし、彼にだって絶霧の能力が自分の能力にどの程度有効なのかはわからなかっただろう。だけど、彼の空間に侵入できるとすれば……絶霧の所持者かあるいは……」

「オーディンだな」

流石に、ここまで語れば誰でも推理は可能である。老雄バアルは、鋭いまなざしでファルビウムに問い、それに無言で頷くファルビウム。

ここから先は、ある程度まではファルビウムが話さずとも理解してくれるだろう。彼らは決して愚かではないのだから。

「主神クラスならば、流石に対抗は可能だろう。とはいえ、まさか主神やそれに匹敵するものを仮面の男にぶつける理由が、彼らにはまだない。あるのは我々だけか」

「故に、我らにそれを確保させるわけにはいかない。そのために彼は動いているのか」

「加えて、彼自身が絶霧を得てしまえば、もう誰にもどうにもできなく

なるぞ」
「僕ちゃんの能力も、どこにあるのかわからねー隔離空間には触れようがないもんニャー」
「主神クラスの空間能力者が、最強の空間系神器で隔離空間を構築する……悪夢ですね。もはやオーディンでさえ侵入は不可能になる」
「二天龍の抑止力も要らねーな。獅子王を魔獣創造と聖杯で増やしたように、絶霧を魔獣創造と聖杯で増殖させちまえば、最強の空間能力を持った魔獣を大量生産できる」
「……どうしよう」
誰もが、事前に分かるであろう可能性を正視して絶句する。言われてみれば当たり前だが、彼の個性が強烈すぎて色々目が曇っていたようだ。
「とはいえ、相手が空間使いなら捕捉は困難を極める。それは彼自身が証明している通りだ。かと言って、早すぎる段階で他の神話の関係者を拉致するのは危険すぎる。そこで彼は既にケンカをしている陣営、悪魔の中から旧魔王派のカテレアを拉致し、いろいろ情報を抜き出した。旧魔王派は英雄派と組んでいたから、絶霧の所持者の情報も知っている。彼は『確認できた』情報を元に作戦を構築した」
つまりは、アグレアスの奪取を始めとする一連の犯行は、全てそこに到達するための要素の一つに過ぎない。やりたいかどうかはともかく、ファルビウムの語る通りやるべきことはそれだけなのだ。絶霧の確保に失敗すれば、もはやどうにもならなくなる。
「つまり、彼はゲオルクを探すのではなく、ゲオルクに見つけてもらうことを選んだ。誘い込んで、罠にはめる。それだけのこと。彼が指定した時間、彼の指定する場所から、彼の隔離空間へ、ゲオルクの陣営に攻め込んでもらう。それならば、侵入経路の出口側か入り口側に、必ずゲオルクはいるからね」
一旦見つけてしまえば、何のこともない。相手が同等の空間使いならば、仮面の男も追いかければいいだけの話なのだから。
「とはいえ、いくら英雄派が若手の集まりとはいえ『何時、何処から、此処に攻め込んでください』と言っても向こうが攻め込んでくるわけ

がない。そんな作戦に引っかかるのは仮面の男ぐらいだろね」
　確かに、仮面の男なら罠と知って大喜びで虎口に飛び込むだろう。例えそこに虎の子供がいないと知っていても。
　とはいえ、それは仮面の男がおかしいのであって、英雄派が自分のことを賢いと思っているならば、そんな阿呆な真似はしないだろう。
「まず、ある程度彼らに勝機があると錯覚してもらう必要がある。加えて、彼らに孤立してもらう必要もある。さらに言えば、彼らが動かざるを得ない理由も必要になる。つまり、同数以上の神滅具を彼らが集め、且つ彼らの協力者を排除し、その上英雄派の生命線を断つと思わせる必要がある」
「話を通したヴァーリを敵に引き入れさせ、旧魔王派を排除し、神器の根幹システムを攻撃するってことか！」
「それは結論を急ぎすぎさ、アザゼル。とにかく、彼は英雄派に攻め込んできてもらう必要があったが、余りにも戦力を整えすぎると自陣が危ないし罠を脱せられる可能性がある。それどころか、僕らを含めて他の陣営にゲオルク君がつかまったり殺される可能性もあるしね。そこで、彼は旧魔王派を排除しようと思った。旧魔王派は英雄派よりも平均水準が高いし、発言権も上だったらしい。英雄派が独自で動くには邪魔だし、そもそも英雄派と合同で攻めてくる可能性だってある。だから排除する必要があった」
　アザゼルの発言を、ファルビウムは一つ一つ説明し直していく。
「自分の持っている赤龍帝の籠手と対になっている白龍皇の光翼の所持者、ヴァーリ君とも極力自然に出会う必要があった。ヴァーリ君に会いに行くのではなく、ヴァーリ君が会いに来るのではなく、アザゼルが命令する形で来てもらうのが望ましい。そうなれば、疑われることなくヴァーリ君を堕天使から離脱させて、英雄派とヴァーリ君を接触させることができるからね」
「そこまで……！」
　歯を食いしばるアザゼル。確かに理路整然としているが、アグレアスの奪取が余りにも鮮やかすぎて不覚にも周囲が見えなくなっていたようだ。

いや、ファルビウムでさえここまで話が進んで確信が持てたのだ、いくらなんでも無理が過ぎるだろう。

「だから、アグレアスを盗むと旧魔王派に宣言した。彼らはまだテロリストじゃないし、政治的にも色々ごたごたしていた時期だからね。僕らも下手に手が出せなかった。堕天使を巻き込んだのもヴァーリ君と接触するためだし、まあ、それさえ成功すれば旧魔王派の殲滅に失敗しても、少し無駄な手間をかけてトップの二人を殺せばいいだけだしね」

「だから、ああもあっさり旧魔王派と堕天使の精鋭を解放したのか！元より堕天使の精鋭など眼中になく、旧魔王派も我らに突き出せば拘束せざるを得ず排除したことに変わりはない！」

バアルは憤怒で円卓を叩いた。絶霧が目的であるとわかってしまえば、こんな分かりやすい話はない。

今更ながら、情報というものの価値を思い知った老雄は、不甲斐なさで荒々しく魔力を吹き上がらせた。

「そうだね、あとはハーデスを動かせばいい。悪魔、堕天使、と被害を与えれば天界に攻め込むのは自然だし、彼がいつ知ったのかはわからないが『冥府と天界を繋ぐ経路』の情報があればハーデスを巻き込むのもたやすい」

「……何もかもが目くらまし……すべては脅威足りうる絶霧の確保。そのための計画というわけですか」

ミカエルは、沈痛な面持ちでそう〆た。

これでは、天界で迎え撃っても一切意味がない。追い込んでも逃げられておしまいだ。

いや、そもそも攻め込んでくるのかさえ怪しかった。実際、攻め込む必要など一切ないのだから。

「それも違う、彼は全部終わらせるつもりだ」

やや気だるげに、しかし確信をもってファルビウムは言い切った。

再び、空気が緊張を帯びる。まだ、仮面の男の犯行計画は完了していないのだ。

「今言ったのは、あくまでも彼が『しなければならないこと』でしかな

い。彼が『やりたいこと』は、まだ説明もしていない」
「二天龍の復活か……」
「それもある。だが……彼の狙いはまだある」
それは、ファルビウムの最も恐れていたこと。
あるいは、全ての神話世界を根こそぎ揺るがしかねない、最悪の状況だった。
「朝飯が絶霧を始めとする英雄派ならば、晩飯というのは僕らのことだろう。であれば、昼飯は……」
「冥府か?!」
サーゼクスは、もうどう驚いていいのかさえ分からない。
つまり、本命であるはずの絶霧。本来捕捉することさえ難しい最強クラスの空間使いを捕まえる『ついで』にどれだけのことをするつもりなのか。
「禍の団のトップが、曲がりなりにもオーフィスである以上、それに対する力も必要だ。それができるのは、あるいはできると思われるのは……」
「サマエルか、そうなんだな!?」
「ああ、彼は英雄派から奪う十字架にサマエルを奉げて、神の呪いを我が物とするつもりだ」
アザゼルの言葉を、ファルビウムは良く通る声で肯定する。
議会は、静謐に満たされる。
正に、沈痛と言うしかない。最強の龍殺しは、オーフィスやその上のグレートレッドにさえ通用しうる代物だった。
この世の全てのドラゴンを絶滅させうる、神の呪いを受けた『冥府に封印』されている最悪の厄災。それを、彼が得てしまえば……。
「ま、サマエルを得ることはともかく、グレートレッドやオーフィスに関しては特に手を出さないと思うよ。どうやら、彼は思ったよりも善良らしいからね」

「全部だ」
顔のない男は、一同を前にそう言い切った。
「冥府の全部、価値のあるものすべてを盗み尽くす。強奪する。強盗として」
心底愉快そうに、彼は宣言する。
彼の発する空気に、軽い調子だった魔法使いたちさえ呼吸を忘れていた。
「死神の服をはぎ取り、鎌さえぶんどり、住んでいる家さえ奪い尽くす」
彼に対して敵対心、警戒心をあらわにしていた英雄派の残党も、もはや恐怖しか感じていなかった。
「連中には、明日から無一文で過ごしてもらう。亡者に交じって、途方に暮れてもらう。凍えてもらう、失ってもらう、絶望してもらう、未来永劫罰を受けてもらう」
ヴァルブルガも、ジークフリートも、まさかそんなことまで考えているとは思ってもいなかった。故に、明らかになっていく犯行計画に歯の根が合わない。
既に、これから伺うと予告状も送っている。既にして、なんの問題もない。あとは、景気よく花火を打ち上げるだけだ。
「未来ある英雄をそそのかして、自分の世界に侵入させたんだ。自分の懐は痛めたくないが、利益は欲しい。そんな馬鹿な話はないと、彼に教えてやろう」
人間の身勝手な悪意が、むき出しでそこに有った。
「何もかもを失う哀しみを味合わせ、生まれてきたことを後悔させてやる」

人の上に立つ、というものには多くの魅力がある。少なくとも、多くの者が単純に『他人の上に立ちたい』という動機で上を目指すケースは少なくない。

しかし、実際にその当人にその資質があるのかと言えば、極めて稀であろう。特に、その当人が求めるだけの資質を持っているのかと言えば、それは否であろう。

カリスマ、という人を従える魅力が存在する。これは明確に数値化できないが、それでも規模の差はあれども、社会性の動物である人間の能力として存在する。

これが欲しい、という者も少なからずいる。誰かから強烈に崇拝されたい、あるいは崇拝している人物と同等になりたい。羨望こそある意味ではカリスマの本質はそこなのかもしれないが、これも欲して得られるものではないだろう。

もっと言えば必要か、必須か、絶対条件か、というわけでもない。人を従えるモノは魅力だけにとどまらない。端的に言って、上に立つ者に求められるものは『他人から認められる』ことだけである。

冠をかぶろうが、玉座にふんぞり返ろうが、誰の血を継ごうが、認められなければ『王』にはなれない。

逆を言えば、魅力のあふれる人間ではなくとも、明確な目的意識を持ち他者へ己の考えを伝え、且つ個人としてそれなりの実力を持ち、自らを律することで配下への規範となる人物ならば。

彼は、自らよりも優秀な人間や、自らよりも強大な存在さえ従えることができるだろう。

仮に、全く尊敬する要素がなく、悲しいほど貧弱だったとしよう。さりとて『抗う気が失せるほどの権力』と、『排除しなければならないほどの有能さ』があれば、上に立つことはできる。もちろん、ただ業務を行う機械として求められているだけなのだが。

では、仮面の男はどうだろうか。魅力は間違いなくある。個人としての武力もある。集団に示せるだけのヴィジョンも、そこに至るまで

必要な手順、してはならない禁止事項、想定外の事態が発生した場合の軌道修正。全てが行える。優秀すぎるほどに。

それが彼の限界でもある。それは彼自身がよくわかっていることだ。彼は究極的には他人を従える『必要性』がなく、且つ他人を『従えたい』と思っていない

彼は『やりたい』と思ったことが自分一人でできないということがほぼない。故に彼が必要としているものは『目的を共有する仲間』ではない。むしろ、彼にとっては『目的を共有する仲間』は足かせでしかない。

彼が生まれ持った転生特典、及び勝ち取った優勝特典が、それぞれ非常に便利で汎用性が高く、本人がそれをほぼ完全に『支配下』に置いている。能力に振り回されることなく、ただ手段や道具として扱えている。

だからこそ、彼が仲間に与えている仕事は、実際にはする必要さえない仕事が多い。聖杯の能力である蘇生も上位互換として扱えるし、魔獣創造のモンスターも野生のモンスターを捕獲し洗脳してしまえば替えは効く。獅子王に関しては言うまでもない。

それが彼の限界でもある。彼は有能で強力だが、彼は自分よりも有能な相手を管理も支配もできない。気質が覇王であるがゆえに、対等な相手や格上の相手を認めることができないのだ。

『真』の『王』は、常に孤独。故に共存も共栄も不可能である。

それは、彼自身がよく知る、彼自身がそう振る舞おうとしている『悪の王』の性。

「か、勘弁してください！」

魔法使いの一人が、ひれ伏しながらそう叫んだ。眼には涙が浮かび、膝は笑い、顔は引きつり、声は揺れている。

誰もが彼の発言を冗談だと思わなかった。誰もが彼の狂気を疑わなかった。彼が本気でそれを実行しようということは分かり切っていた。

ただ、その計画を実行できるほど、魔法使いも英雄たちも、肝は据

わっていなかった。
「なんだ、君たちはテロリストだろう？　テロしようよ、テロ」
その言葉には、遊びに誘う程度の気軽さしかないが、それでもその程度の気分で戦争を吹っ掛けようとしているのだと、誰もが理解していた。
そう、これはもう完全に犯行声明だとかそういう問題ではない。宣戦布告である。一柱の神が支配する世界への、真正面きっての戦争である。
彼らは犯罪者にはなれても、戦士にも兵士にもなれない。或いはまだその心構えができていない。その成長を望んでいない。
そして、目の前の顔のない男では個人を成長させることができても、集団を支配できても、集団全体を指導することができない。
「……無理っす！　イヤ、ほんっとに無理です！」
「ふむ……ヴァルブルガ？」
「は、はいぃ?!」
「お前ら、テロリストなんだろ？　好きなリズムはテロリズムなんだろ？」
「う、うん！　お兄ちゃん！　私戦争大好き！」
「そうか……じゃあヴァルブルガの部下であるお前らは、テロリストじゃないのか？　テトリスなのか？」
「そうです！　テトリスなんです！　テロリストなんかじゃないんです！」
「テトリスが何だか知ってるのか？　まあ、ここにも有ったが……まあいい。流石に妹分の部下を拷問するとなると……面白くなりすぎるな。んで？　我が弟分ジークフリート、そこにいるそいつらはなんだ？　テロリストか？　テトリスか？　それとも、お前の部下ですらない部外者か？」
「……彼らに直接聞いてください」
「そうだな、うん。んで？　お前らは一緒に来るか？　冥府に攻め込んだ後、天界へ攻め込むか？　聖書のオールスターがお出迎えしてくれるグルメツアーだぞ？　これを逃す手はないと思うんだがな」

顔のない男は、焼けた顔で尋ねる。その背後の二天龍が、わざとらしいほどに鼻息を荒くし、英雄派たちに熱風の吐息を浴びせた。

それは、一種の演出でしかない。或いは、復活したばかりで上機嫌な、天龍の悪戯心なのかもしれない。

それが不要なほどに、過剰な演出に見えるほどに。

顔のない男は、圧倒的な威圧感をもって目の前の『英雄』に問う。

「どうだ？　一緒に遊ぼうぜ？」

逃げることはできず、だれにも頼ることはできず、ましてや戦うことなどできはしない。しかし、この男は待ってくれない。予定が押しているのだ、このまま黙れば沈黙を肯定と受け取りかねない。

「お、俺たちは……」

彼らが真に英雄ならば、このような悪漢の勧誘に乗るなどあり得ない。一気呵成に雄たけびを上げ、及ばぬと知りながら戦いを挑むだろう。

彼らが真に英雄ならば、或いは二天龍に勝利し、仮面の男さえも下すだろう。裏切り者であるジークフリートも当然討ち果たすはずだ。

そんな、英雄らしい行動が脳裏に浮かんでも、実行には移せない。

そんな英雄らしい行為を行うには、彼らには気骨が欠けすぎていた。無理もない話である。完全復活した二天龍はシヴァやインドラに匹敵し、且つその二頭が完全に一人の男へ従っているのである。それは水戸黄門が可愛く見えるほどの圧倒的な暴力の裏付けであり、つまりは彼らよりも遥かに格上である。

死ぬかもしれないが戦う、或いは死ぬとわかり切っていても戦う。それが、今の彼らには不可能だった。それほどに、彼らの実力差は歴然としていた。

「……無理です」

「そうか……こんなもんか、お前らは……」

親に買ってもらった、好きなロボットの玩具。遊んでいたらあっさりと壊れてしまって、それで一気に冷めた。そんな声色だった。

「で？　お前はジークフリートのなんだ？　敵か？」

「違います……」

もう、そう答えることしか彼らにはできない。おそらくだが、後に前言撤回しようものなら『弟の敵は自分の玩具だ』とか言い出すに違いない。もう、逃げ場はどこにもないのだから。

「じゃあヴァルブルガとジークフリートはどうする？」

「行く。冥府だろうと、何処だろうとお供するさ、三つ目殿」

「お兄ちゃんと一緒に冥府に行けるなんてぇ～～、ヴァルブルガ超感激！」

二人とも、もはや全てを諦めている。もうどうせ、負けっこないのだからと、疲れるだけでピンチになどならないのだからと。

「よし、いいだろう。まあ、元々最悪レオナルドとの二人で行くつもりだったし、６人でも問題ないな」

「まあ、僕はどこへでもついていきますよ」

「レオナルド君、大変ね……」

「いやまあ、私も一緒だけどさ」

如何に神滅具所持者のみの編成とはいえ、六人で一つの世界を攻め落とす。それも天界を攻め落とす景気づけとして。

どう考えても不可能だが、それは仮面の男が冥界で黄金風船を暴れさせる前のことでしかない。

二天龍の武具を壊したとはいえ、六つの神滅具が揃っている。シヴァやインドラがいるならいざ知らず、主神クラスが一柱程度ならば問題にもならないだろう。

「んじゃあドライグ、打ち合わせ通りアルビオンと一緒に数千年ぶりの飯を食っててくれ。酒も古今東西のを大人買いしてきたから、たっぷり飲んでな。流石に天界ではお前らに頼るしかない。二天龍の大暴れには期待してるぜ」

「ふむ……そういうことなら、しばし待とう。数千年待ったのだしな」

「ああ、そのしばらくの間英気を養うか」

と、二天龍の前に大量の酒樽が並んだ。おそらく買い付けてきたワインやビールの類だろう。アジュカやサーゼクス、リゼヴィムと戦うためには、もはや彼らの助力なしにはあり得ない。

「しかし、なぜビーフシチューばかりなんだ……」

「いや、美味そうなにおいがするが」
「ドラゴンが日本の料理を食べると言ったら、そりゃあビーフシチューと相場が決まっているのさ。酔っぱらってもヴァレリーに治してもらえるから、好きだけ食べて飲んでくれ。こっちはお弁当だからサンドイッチとおにぎりだ。紅茶と緑茶、どっちもあるから好きな方を好きだけ食べたり飲んだりしてくれ。ちなみに……全部自分たちの手作りだ。素人だから見た目は少し悪いけど……でも材料はいいのを使ってるし、ちゃんと分量を量りながら調理した。味見も済ませてある。ああ、でもアレルギーとか大丈夫か？　ヴァレリーに言えばすぐ治せる。なんでもかんでも治すのはどうかと思うが……美味しいものが食べられないのはつらいよな」
「……そういえば、朝食を食べていなかったなヴァルブルガ。いただこうか」
「え、ええそうね！　あ、アレルギーとかないから」
「よし、じゃあパパッと攻め込むか」
ぱん、と顔のない男は仮面をかぶった。いつも戦闘中にかぶる、ウサギを模した白塗りの、三つ穴の有るフルフェイスのマスクだった。
それはつまり、これから戦うことを意味している。いや、正しく言えば略奪なのだろうが。

「あの、ルネさん……」
違法研究所の実験体だった面々が、物怖じしつつもルネに歩み寄った。ドラゴンはなんとも優しそうだが、やはり恐ろしい。大口を開けて、酒やら料理やらを丸呑みしている。そんな彼らに加えて、全く知らない魔法使いやら英雄やらもやってきた。
基本的に、神器の実験体たちは他者を恐れている。その最たる例が顔のない男なのだが、それでも他を克服したというわけではない。
「本当に、行くんですか？」
「行く」
ルネは、少なくとも英雄ではない。英雄になりたいと思っているわ

けでもないし、おそらく英雄にはなれないだろう。
ただ、最強の武器を持っているだけの、それしか価値のない少女だ。
そんな彼女が、どうして死地に身を投げ出すのか、理解できるものではない。
「私は、終わらせて来るんだ。『英雄』の必要ない世界を作る、ってほどじゃないけど。英雄が減ったらな、って思ってる。だから、もう……コレも私で終わりなんだ」
手にした神滅具、獅子王の戦斧。それを握りしめて、彼女は答えていた。

「ヴァレリー……」
「はい」
保護されている混血吸血鬼たちは、己たちの実質の後ろ盾であるヴァレリーに問う。これから行う行為は、文字通り八つ当たりに近い。
絶霧によって隔離空間は盤石なものとなり、もはやオーディンであっても侵入も到達も不可能になってしまった。二天龍の復活を誇示してしまえば、もはや攻め込む輩は激減するだろう。
もう、戦う意味はない。少なくとも、ヴァレリーにはない。
「まだ、戦うのかい？　戦うなとは言えないけど……」
「私は、戦います。自分の為に」
己の中の幽世の聖杯、その気配を彼女は濃密に感じていた。まるで、聖書の神がこれからの戦いを望んでいるかのような錯覚さえ覚える。
「今の私の夢は、ルネや貴方達と一緒に脅かされることなく生きることなんです。そのためには、これは必要なことなんです。でも……」
彼女の眼は、憂いを隠しきれてはいなかった。
「私たちがこれから行うのは、『天罰』にも似た残酷な蹂躙です。その権利が私にあるとは思えません。その愚かな手段しかできない私は、無力さが恨めしくもあります」

「ねえ、ジークフリート……本当に行くの？」
　仮面の男から視線を外さずに、ヴァルブルガは問う。実際、仮面の男も怖いが神話と真っ向から戦うのも怖い。まあ、仮面の男の方がどう考えても怖いので、逃げるという選択肢はありえない。多分、自決しても蘇生させられると思う。
「ああ、いく。少なくとも、三つ目殿を裏切りたくはないし、自分の中の葛藤とも決着をつけたい」
　その眼には、静かな炎が燃えていた。しかしそれはあくまでも静かな火でしかない。ふとしたきっかけで、掻き消えてしまうような火だった。
「反抗、などというものには収まらないだろう。それこそ、徹底的な『破壊』になると思う。自分がどこまでそこに付き合えるのかはわからないが、付いていかなければきっと後悔する」
「私はもう後悔しまくりでめそめそしてるわぁん……こんなことなら十字架と『契約』なんてしなきゃよかったわぁ」
　保身のためとはいえ、あの圧倒的な恐怖から身を隠すすべはない。少なくとも、今この時点で仮面の男は完全に無敵だった。

「……さて、聖書の根幹システムの奪取ですか……今更ながら遠くまで来ましたね」
「どうなるんだろうな、宇宙の法則が乱れるのかもしれんね」
　レオナルドと仮面の男は、話をしている彼らを眺めながら最終的な打ち合わせ、あるいはこの行動によって引き起こされる事態について話をしていた。
　ある意味では、この会話こそが顔のない男にとって実際の行動以上に価値のあるものなのかもしれない。そう思うほどに、彼は楽しそうだった。
「ただ……少しわからないこともありますね。神話というのはただの物語だと思っていましたが……実際に神話は起きたことであり、神も

また実在するということですよね」
「ああ、神器もその証明の一つだ」
「……では、人間はどこから来たのでしょうか？」
本来ならどうでもいいはずの疑問が、彼の口から飛び出た。レオナルドの知る人類の起源は進化論であり、つまりアフリカで誕生した人類が地球上へ生息範囲を広げていったというものだった。
だが、神が実在し、アダムとイヴが実在したならば。他の神話も独自で人間を生み出したということなのだろうか。
「おお、おもしろい疑問だな。一丁家探ししていろいろ調べてみるか？　他の神話にお伺いするのもいいな」
「普通に聞くという選択肢はないんですか……まあいいですけど。どうなんでしょうね、全ての神が死に絶えた世界というモノは」
もしもそうなったとしても、仮面の男曰く次元の狭間にグレートレッドがいる限りは大丈夫らしい。あくまでも、この次元の狭間限定らしいのだが。あと始球空間も。
「地球が砕ける云々になったら、その時はさすがに可哀想ですから、皆を助けてあげましょうね」
「皆ってのは、地球の生命体全部か？　まあ、今の自分たちなら無理じゃないかもな」
「そういうことですよ『生存』するのは僕らや一組ずつの番だけ、なんてのは御免です。みんなで助かった方がいいでしょ」
「そうか？　男と女で一人っきり、『原初』のカップルなんて結構男の子的にロマンがあると思うけどな」
「貴方が人類の始祖……怖い世界になりそうですね」
「いや、本気でおっかないこと言ってんなよ……そろそろ行こうぜ？
本命は天界なんだからさ」
神器違法研究所の元実験体、ルネ。
「通り道だからと言って、冥府を滅ぼすのはどうかと思うんですけど……うう」
混血吸血鬼にして聖杯の所持者、ヴァレリー。

「さあ、出陣です。貴方と一緒ならどこにも行きます」
元エクソシストにして元禍の団所属、ジークフリート。
「お、お兄ちゃん？　私はいつでもオッケーだよ?!」
恐怖に支配された魔女、ヴァルブルガ。
「そうですね、三つ目さん」
紅顔の少年、レオナルド。
「ああ……」
そんな彼らと共に、この男は全てを終わらせる戦いに赴こうとしていた。

「【ついてこれる奴だけ付いて来い！】」

転生者、顔のない男。
今彼を呼ぶ名前は、何処にもない。

「ってえことでだ、レオナルド、ヴァレリー、ルネ。【迂回路はなさそうだッ！　ならば往く道は一つッ！】【手を繋ごう！】……？」
ノリノリだった仮面の男は、普段とは立ち位置が違うことに驚いていた。
レオナルドは自分の正面に立ち、必然自分はルネとヴァレリー、両方と手をつないでいた。
ルネが、仮面の男とヴァレリーで手をつなぐことを許していた。
「三つ目さん、嬉しいのは分かりますが。さあ、やりましょう」
「さあ、三つ目様。私たちにできることを最後までやり遂げましょう」
「クソ三つ目……こっちは嫌々繋いでるんだ。さっさと終わらせろ」
仮面の男に名前はなく、この場の面々は所詮犯罪者でしかない。
しかし、名前はなくとも実体はある。
【繋いだ手だけが、紡ぐモノ】か、ずいぶん遠回りをしてきたが……ここには友情と勝利と努力があるな……【…感情的になるな…まだ何かを成し遂げたわけじゃない。なぜこんなことを思い出してる。バカめ】ああ、うん。感無量だ。歌が歌いたいな……みんなで歌を」

「何言ってやがる、歌を歌ってる場合か？　それより、赤龍帝の籠手じゃなくて絶霧だけど、上手く行くのかよ」
「誰に口を聞いている？　なに、上手く行くさ……【この程度の奇跡、安いもの】さあ、いくぞ！　まあ、呪文がアクエリオンで出来上がりが勇者王ってのもけったいな話だけどな」

手をつなぎあい、チャクラでつながり、時間で共有し、言葉を交わしてきた。
決して対等ではないだろう。それでも、きっと、一人に何もかもを任せたりはしない。
だからこそ、一人ではない。

「月は夜の空にありながら、昼の光で輝く。人は大いなる夢の海、その波のひとつひとつこそ個々人の夢。月を開け、夢のかよひじを見つけろ！」

ヴァレリーが祈る。

「人が生まれで決まるなら、夢などいらない。夢をつかむことで、人は生まれを乗り越えられる。それでこそ人、それでこそ夢!!」

ルネが叫ぶ。

「理想を求め空ばかり見ていると、地上の花を見失う事もある。空は見えても足下は見えず……またその逆もある」

レオナルドが唱えた。

「両の手を叩き合わせたその間に何がある？右手と左手、善と悪、男と女、陰と陽……その狭間に何がある!?」

そして、仮面の男が吠えた。
レオナルドの影が沸騰し、広がり、４人の影をつなげていく。そこから湧き出る肉塊が４人と、その近くで様子をうかがっていたヴァルブルガとジークフリートさえも飲み込んでいく。
肉はやがて巨大な人の形となり、その影を世界に落とした。
その肉を、黄金の装甲が覆っていき、更にその上から天狗らしきシルエットが上塗りされていく。そして、更にその上からは霧の様な靄が固形化し、外装を覆っていた。

それは、人類の心の形。それは、この場の四人が手をつなぎ心を繋げた証拠。
ヒトは一人では何もできない。どれだけの能力を持とうとも、どれだけの奇跡を得ようとも、どれだけの狂気があったとしても。ヒトが人である限り、ヒトは『つながり』を求め続ける。
魔獣創造が巨人を模し、黄金の獅子がその外骨格となり、絶霧が更に上から結界を構築し、それらを聖杯がつなげる。
武装を輪廻眼が誂え、チャクラが四人を一つにし、ここに幻想は現実となって出現する。

「「「唱えよ、創聖合体！」」」

それは余りにも勇ましかった。
漆黒の翼を背負い、獅子の頭を胸に据え、数多の超兵器を内蔵した最強の戦士。
その名は……。

『人類神話！　勇者王！　降臨！』

コックピット、そういうしかない巨人の内部で、仮面の男は猛りを

隠さずに空間跳躍の準備を始めていた。
「聖杯による再生、蘇生システム、良好です。対死神即死攻撃防御は万全です」
「魔獣創造と他の神滅具の接続も問題ありません。ここから、全ての機能を万全に操作できます」
「レグルスも充実してる。やっちまえって！」
内部に引き込まれたジークフリートとヴァルブルガは、もう言葉もなかった。
神滅具を四つ、担い手ごととりこんで一つの形に変える。その発想が、まずありえなかった。もしかしたら、黄金風船さえもこの形に達するまでの下準備に過ぎなかったのかもしれない。
「さあ……冥府の王ハーデス……今、全部奪いに行ってやる！【待っていたぜ、この瞬間を！】」

勇者王誕生！―完璧絶叫ヴァージョン―　4

『【ばァきィく・ん】【お・ひ・さ・し・ぶ・り・で・す・　ね　……と】どう？　曹操君と感動のご対面は？　まあ、鉄砲玉が予定通りに大失敗ってことなんだからそれでいいんだろうけれども、こっちはそうもいかない。いやあ、まいったなあ……冥府にはあんまり被害とか与えてなかったんだけどなぁ……泣きたくなっちゃうな……昔ドンキーコングの四コマ漫画で海やら山やらを進むドンキーが、クレムリン軍団以外に襲われることで自分が嫌われてるんじゃないかって思ってるシーン有ったけど、子供心に『縄張り荒らしたからじゃね』と内心突っ込んでたんだが……まさか何のかかわりもない神話の神様から神滅具所持者をけしかけられるなんて……【う～～ううう　あんまりだ…　ＨＥＥＥＥＹＹＹＹ　あァァァんまりだァァァァ　ＡＨＹＹ　ＡＨＹＹＹ　ＡＨＹ　ＷＨＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨＨ!!　おおおおおおれェェェェェのォォォォォうでェェェェェがァァァァ～～～!!】まあ、いや、実際にはそんなに怒ってないけれども。いやあ、ちょうど欲しかった聖槍と十字架と絶霧をセットでくれるなんて、気が利いてるなと思ったほどですよ。【これで今夜も……くつろいで熟睡できるな】それはそれとして、黒幕気取ってふんぞり返って、成果だけはごっそりいただく。そういうのって、あんまり好きじゃないっていうかなんていうか？　まあ、リスクマネジメントかもしれないが、雇うならもっとプロ意識の強い奴を選ぶべきだったな。殺さずに口説き落としたヴァルブルガとジークフリートがあっさりゲロッたよ。【犯人はお前だ】ハーデス、お前が全部悪いんだ。ヘラクレスとジャンヌが串刺しにされて燃やされて、ゲオルクがそんな二人と団子三兄弟になってこんがりしたのも、曹操が過酷な環境下で長時間の戦闘を行い、栄養補給と水分の接種を怠り、体調不良で熱中症になって、適切な治療を受けられるどころか過剰な拷問を受けて最終的にこんなことになっているのも……お前が悪いんだ！　まあ、自分の計画通りに動いてくれたから、命だけは勘弁してやるよ。それ以外の全部は、お前からはぎ取ってやる。これは宣戦布告じゃな

い、犯行予告だ。そう……今からそっちに攻め込む！　今からな！』

曹操、ヘラクレス、ジャンヌ、ゲオルク。彼らの『首から下』と一緒に送られて来た画像付きの手紙。それはハーデスをして己の不覚を悔やむ失態を認識させていた。

まさか、自分の拠点を罠にして、いつ来るかもわからない同等の武器の所持者を待ち構えていたなど、どうして想像ができようか。

とはいえ、売られたケンカは買うしかない。確かに黄金風船を始めとする神滅具の併用は脅威だが、それで逃げるぐらいなら最初から手を出したりはしない。

「神滅具など何するものぞ……真の神の力を、奴らに教えてやれ！」

戦力となる死神たちに警戒態勢、戦闘態勢の指示を出せば、そこは一つの世界を支配する神の威光。誰が逆らうことなく、ハーデスの居城を中心に陣形が組まれていく。

とはいえ、最強の空間使いに、陣形などどれほどの価値があるのか。そう内心毒づきつつも、彼は骨の五体に力を入れる。

「我は冥府の王。定命の輩が歯向かおうなどとは片腹痛い！」

「ハーデス様！　侵入者です！」

「……そうか、人数は？　いや、頭数はいか程か？　千か、万か」

「いえ……一体です！」

報告に来た最上級死神の発言は、ハーデスにとって最悪と言っても過言ではなかった。

千だろうと万だろうと、際限なくモンスターを大量生産できる仮面の男。彼が一体で乗り込んできたということは、つまりその一体でこの世界を蹂躙しつくせるという確信があるからに他ならない。

とはいえ、それはそれでありがたくもある。戦力を集中させ、早期に撃破する。相手の能力がわからない以上搦め手など警戒のしようがないし、その一体に大きな顔をされては面目は丸つぶれである。

もとより、仮面の男が冥府で暴れる可能性を排除するために、ハーデスは英雄派を送り込んだのだ。それが失敗に終わっても、やるべきことは変わらない。

「よいか、これは我らの威信がかかった一戦と知れ！　全戦力に通達

せよ、粉骨砕身の覚悟でことに望めとな！」
「ハッ！」
『ブロゥクン……マグナぁあああああム！』
直後、ハーデスの居城の天井が打ち破られ、反応する間もなく玉座から立ち上がったばかりのハーデスと、その命令を受けた最上級死神はその下敷きとなった。
流石に、単純な打撃では主神クラスが命を落とすことなどあり得ない。しかし、圧倒的な重量によって叩き潰されたハーデスは、骨しかない体の、その骨が砕かれつくされていた。
「いやふぅ……絶望ってさ……こういうのを言うんだと思うわけさ」
数十メートルの大きさを誇るガオガイガーだが、それでも大きさほどには遅くない。しかし、流石に陰に潜むなどの隠密能力に長けた死神が、そうそう大振りに後れを取るわけもない。
ガオガイガーの巨大な腕の一撃も、彼らは軽やかに回避して立ち回る。しかし、本来あらゆる命を絶つ死神の鎌も、その装甲にキズを付けることさえできずにいた。
「ま、こんだけガッチガチに防御固めとけば無理もねぇ。所詮即死なんざ状態異常の一つでしかない。ここまで対策立てとけば、まあ……ぷふぅ！　勝ち目なんてねーぜ」
「言うけどさ……こっちの攻撃も当たらないだろ」
直接巨人を操作しているルネは、苛立たし気に問う。確かにこちらは無敵だ、このまま攻撃を受け続けていても、全く脅威ではないだろう。だが、こちらの攻撃が当たっていないこともまた事実。
向こうだって嫌だろうが、こちらだって面倒になってくる。加えて、仮面の男たちにしてみれば、此処で戦うのは一種の前座に過ぎないのだから。
「まあ、焦るなよルネ。大事なのは盛り上がりだ。いきなりマジで

やったら、ホラ……潰えちまうだろ、希望ってやつが」
そう言って、巨人の視界とリンクしている正面の映像を指さした。
そこの先には、ひときわ目立つ建物が見下ろせている。
「あそこを狙え、できるだけ大振りで、できるだけ分かりやすくな」
「……ああ、拠点を攻撃して、相手の方から防御させるんですね？　ひどすぎる……」
「そこかしこで性格の悪さが輝きますね」
「そ、体を張って命を懸けて、無駄な抵抗をしてもらおうか」
比類なき悪意が、攻撃目標を設定する。それに対して態々反対するほどの理由を持ち合わせていないルネは、あっさりと賛同して、巨人に搭載されている超兵器を起動させる。
「輪廻眼……修羅道！」
ルネの声に合わせて、巨人は大きく右手を振りかぶった。同時に勢いよく上腕部と拳が回転を始め、余りにもわかりやすく攻撃が始まったのだと死神たちに教えていた。
そして、その目標がハーデスの居城であることを察するに、時間は必要なかった。
この上なく露骨に、振りかぶった拳の『投球フォーム』は冥府に存在する数少ない建物を狙っていたのだから。
「ルネ、外部マイクを使え」
「いいけど、なんで自分でやらないんだ？」
「叫ぶなら、お前が一番いい声だ。頼むぞ」
「……分かったよ……『ブロークン・マグナム』だよね」
「いや『ブロゥクン……マグナぁあああああム！』だ」
「……なんだよそのこだわりは！　いいさ、やってやる！」
回転している腕に、覚悟を決めた死神たちがとりつこうとする。しかしそれは余りにも無謀だった。回転する掘削機に、小動物が群がるがごとく、一切合切は全て粉砕されるのみ。
攻撃態勢に入っている腕ではなく、その肩を狙う者もいたが、関節部さえ彼らの刃は届かない。

『ブロゥクン』

皮肉にも、その一撃は処刑そのもの。逃れえぬ死となって振り下ろされる鉄槌に他ならない。

『マグナぁあああああム！』

ついに、発射される破壊の鉄拳。己の総大将にその無礼な拳を触れさせまいと、死神たちは陣形を汲んで押しとどめんとして……脆くもはかなく、吹き飛ばされていく。

そして、へばりついて押し戻そうとしていた最上級死神も、軌道を変えることすらできずに城壁もろともぶっ飛ばされていた。

「ルネ……ナァイス！　今白眼で確認したが、敵のラスボスに命中したぞ！　ゲームクリアだな！　ここから先は、残敵処理だ！　つまりここからが本番だな！　一切ダメージを受けてないが、第二形態だ！　変身するわけじゃないが、全員ぶっ潰せ！」

「待ってたよ！」

仮面の男の指示に従って、やけくそ気味のルネは超兵器を解禁する。元よりこの巨人は、冥府を襲撃するためだけに能力を調整されている。であれば、小さい敵を虱つぶす兵器も持っていて当然だ。

「輪廻眼、天道！」

射出された後、戻ってきた右腕にとがった金属製の工作機械が取り付けられる。

それは絶霧でかたどられた、空間圧縮兵器に重力攻撃を加えたものであった。

『ガトリング、ドライバぁあああああああああああ！』

一瞬、逃げ水のように突起の周囲が揺らめいた。直後、その一点に向けて世界が縮小していく。

例えるなら、大嵐だろうか。実際には超小型のブラックホールであ

り、本来抗えぬ死であるべき死神たちも、重力の楔の前には無力だった。

運よく有効範囲内から逃れていた死神たちは見た。黒い星が、同胞たちを飲み込んでいくその様を。

それは文字通りの意味で、世界が崩壊していくその縮図に過ぎない。

自分がまだ戦えるのは、ただ幸運だったからであり、戦えたとしてもなにも結果は変わらないという事実を認識せざるを得なかった。

「おのれがぁあ!!!」

掃除機で吸い上げられる塵のように、或いは渦に飲み込まれる木の葉のように、死神たちは飲み込まれて消えていく。

「あっはっは！　みろよ、みんなもう諦めモードだ、冥府の死神が総お通夜だぜ？　ゲームマスターじゃあるまいし、殴れるところにいる神様なんざこんなもんよ！」

まさに、ロンギヌス。神を大量に殺戮していく機械として機能する巨人は、特に面白くもなさそうに、世界を縮めて、破壊していく。

それをただの客として見守るヴァルブルガとジークフリートは、もう自分の存在が完全に無駄なのではないか、という事実に気付いていた。実際、完全にお客様扱いである。

「よし、皆でお弁当タイムだ。あとはあの連中がこっちのお口に飛び込んでくるまで、のんびりおにぎりとかサンドイッチとか食べてようぜ。自分、まずはルネが作ったの食べよっと！　ツナマヨだな……うん、美味しい！　ルネの味がする！」

「しねーよ！　ああもう！　ヴァレリーの作った分、お前が食うな！　レオナルド、ヴァレリー！　私たちで食べきるぞ！」

「ルネさん、自動操縦に切り替えて貴女が食べるにしても、ヴァレリーさんが一番沢山サンドイッチとか作ってましたから、三人じゃ食べきれませんよ」

「ごめんなさい、私張り切っちゃって……」

「泣かないでよ、ヴァレリー……このキモいのが悪いんだ！　ジークフリート、ヴァルブルガ！　協力してくれ！　こいつには自分の作っ

たもの以外喰わせないぞ！」
「む？　いや、え？　ああ……分かった。どれが仮面の男の作った料理だ？」
「ええ？　うん？　分かったわよ……お、お兄ちゃん？　私はお兄ちゃんが作ったのも食べるわよ?!」
　まさか、協力というのが弁当を消費することだとは思っていなかった二人。しかし、こんな些細なことでも仮面の男は機嫌を損ねかねないので、二人は慌ててランチボックスの中身を食べ始めた。
　美味しいが、外では冥府らしい阿鼻叫喚の地獄絵図が展開されているので、味など分からなかった。
「うん、自分で作った料理も、みんなで食べると美味しいな。やっぱりみんなでピクニックは最高だな！」
「ねえルネ……ピクニックってこういうのなの？」
「違うから！　こいつが馬鹿なこと言ってるだけだから！」
「そうですよ、三つ目さん。ピクニックっていうのは、前二人でしたじゃないですか。こう、海岸線沿いの、交通量の少ない道路を……のんびり歩いた後、昼寝したりお弁当を食べたり、適当に釣りをしたりしたじゃないですか」
「え、なに……そんな楽しいことしてたの、こいつと一緒に」
「ええ、夜まで待って、天体観測もしましたよ……」
「ううう……なんでそんな楽しいイベントに私たちや他の方を誘ってくれなかったんですか」
「だって、その当時は僕と三つ目さんの二人だけでしたし……」

『なに、このサンドイッチの中身……イチゴ？　お弁当なのに？』
『こっちはチョコだ……いや、美味しいが』
『おかかもいけるな……でも塩が最高だな！』
『僕にはよくわかりませんが、サンドイッチと言ったらカツですね』
『ルネ……どう、美味しい？』
『うん、美味しいよ。でも、まあ……私が作ったのはやっぱり不格好だ

よね……』

内部から聞こえてくる、和やかな会話。それを聞きながらも、死神たちは必死の抵抗を続けていた。

どうあがいても、装甲の一層までしか破壊できない。というよりも、そもそも死神たちは大規模な破壊というモノがあまり得意ではない。もちろん常人に比べれば圧倒的に得意だが、その程度でしかないのだ。

即死攻撃、余りにもわかりやすく強力なその能力は、通じなかった場合余りにも無力である。

「どうする……あの木偶には、我らの鎌は無意味だぞ！」

「しかし、このまま放置するというわけにも……」

一旦大きく距離をった死神たちは、相談を始める。幸い、相手の攻撃はどれもが大振りで、ある程度距離を維持すれば遠距離攻撃も回避することはたやすい。とはいえ、相手は蹂躙を続けているので、静観などできないのだが。

「……弟君に救援を頼むべきか？」

それは、最悪の選択肢だが、同時に最善の選択肢でもある。ゼウスとポセイドン、語るまでもなくギリシャ神話の主神とそれと同格の神である。彼らが参加を率いて救援に来れば、少なくともこのまま座して死を待つよりは状況はましになる。

問題は、ハーデスがどうなっているのかわからないため、その判断を下せるものが居ないということだろう。

あの弟たちは、原典の時点で既に大問題なのだ。季節を問わずに夜空を見上げれば、彼の浮気の歴史が事細やかに記されていることからも明らかだろう。

「それはできん……我等で何とか、殺せぬまでも、退けなければ！」

「せめて、弱点でもあれば」

古今東西、神話の怪物というモノはなにがしかの弱点を抱えているものである。ことさらに、不死身とされるならば頓智めいた弱点があるものだ。

その最たる例こそ、今彼らの前に立ちふさがっているネメアの大獅

子であろう。彼は元よりギリシャ神話の怪物で、あらゆる刃物が通らぬ毛皮をしているとされていた。そこでヘラクレスは彼を素手で絞殺したのである。インド神話でも『神とアスラにも、人と獣にも、昼と夜にも、家の中と外にも、地上でも空中でも、そしてどんな武器にも殺されない体』を手に入れたヒラニヤカシプを、『昼でも夜でもない夕方に、家の中でも外でもない玄関で、神でもアスラでも人でも獣でもない獣人の姿で、地上でも空中でもない膝の上で、素手で引き裂いて殺した』ナラシンハもいる。

逆に、背中を刺されたジークフリート、踵を射抜かれたアキレウスも存在する。

他にも、指輪物語では『人間の男では勝てない』人間の成れの果てを女が殺したり、マクベスでは女の股から産まれたものには負けないと予言されていたが、帝王切開で生まれた男に負けている。

無敵の英雄や不死身の怪物を倒すには、その弱点を探らなければ話にならないのだ。

問題は、その辺りの事前情報を死神たちは一切知らず、加えて怪物の外装甲の一部であるレグルスの能力が『あらゆる刃を通さない』である時点で、どうあがいても鎌以外に攻撃手段のない死神では対処できないという点だった。

「なあ……思うんだが……」

死神の一人が、恐る恐る指を刺した。

虎口に入らずんば虎児を得ず、という故事が脳内をめぐりつつも、巨人の象徴たる胸のライオンを指さした。

「あそこが露骨に弱点じゃないか？」

単なるデザインでしかないのかもしれないが、ライオンは大口を開けていたのである。

「そうかもしれんが、罠かもしれん」

「しかし、もはや他に打つ手はないぞ」

今この場には冥府の全戦力が集まっているが、裏を返せばこれ以上待っても援軍などあり得ないということだった。

加えて、ハーデスが倒れた今、もはや指揮系統は滅茶苦茶である。

このままでは、あの巨人にすりつぶされてしまう。
そうなれば、面目以前に物理的に冥府はおしまいだ。
「次の大技の後、仕掛けるぞ！」
その言葉に、誰もが頷くしかなかった。

『おい、ルネ……ここいらで一発、遠距離攻撃でぶっ飛ばせ！　逃げても無駄だってな！』
『分かったよ……万華鏡写輪眼……天照、炎遁・加具土命……』

そして、こちらを見つけたのは向こうも同じらしい。黒い炎が弓矢のような形を造り、そのままこちらに標準を合わせている。

『ジェイ、クォース!!』

放たれたのは、黒い炎の巨大な鳥だった。フェニックスなどという生易しい者とはわけが違う、圧倒的な熱量は死神をして恐ろしいものであり、何よりも速度が今までとは段違いだった。
羽ばたきながらこちらへ接近してくるそれを見て、死神たちは機能を理解する。
アレは、追尾機能が付いているのだと。
であれば、一塊になるなどあり得ない。皆が目配せをすると、一斉に四散した。
しかし、そのうちの数人がまとめて呑まれる。黒い火の鳥は余りにも巨大で少々離れていても、人間よりも少し大きい程度の死神をまとめて焼くことはたやすかった。
しかし、それでも全員ではない。背後から追尾してくる火の鳥にひるむことなく、死神たちは虎口ならぬ獅子の口へ飛び込んでいく。
一人、また一人と焼かれる中、遂に一人が突入に成功した。
狭い咥内を抜けようとすると、比較するに薄い壁が存在した。
一切減速なく、死神は裂帛の気合をもって鎌を振り、そして、それを破った。

「むっ！」

即座に反応したのは、コクピット内で最も戦闘経験が豊富なジークフリートだった。魔剣を手に、突入してきた死神へ斬りかかる。

「邪魔をするな！」

とはいえ、流石にここまで来て引くほど死神の覚悟は軽くない。己が切り捨てられようとも、仮面の男の息の根を止める。その気勢は、もはやだれにも止められない。

「【振出しに戻る～～～】」

しかし、止める必要さえないのが仮面の男である。もはや世に並ぶもののない最強の空間使いは、一瞥すると同時に『ゴール』した死神を『スタート』へ空間跳躍させる。

迎撃する必要も、抵抗する暇もない。霧に包まれた死神は、それに気づく間もなく姿を消した。

そんな彼へ斬りかかっていたジークフリートは勢い余って壁にぶつかり……余りの無敵っぷりに呆れていた。

「ジークフリート、もっと甘えていいんだぞ？【お前たちに冒険させないために散がいる】お前には後で働いてもらうんだから、あんまり気張るな」

「頼もしいですね」

一方その頃、スタート地点に戻された死神は、元居た場所を見て愕然としていた。

そこには、もはやハーデスの率いた精強なる死神の軍勢は存在しない。

自分だけが、無力に浮いているだけだった。

「……く」

その背後から、黒い鳥が襲い掛かる。もはや、彼には抵抗する気力さえ残っていない。

『これが『ボウケンイエロー作戦』だ。いやあ、蹴散らしがいのない世界だったよ』

「くそぉおおおおおおお」

最後の一人が飲み込まれ、この死の世界は仮面の男に占領されていた。

もはや、二天龍を抜きにしても、神滅具の過半を集めたこの男の障害は存在しない。

超越者リゼヴィムを含めた聖書の神話を除いては。それも、はかなく消える希望でしかない。

勇者王誕生！―完璧絶叫ヴァージョン―　5

原始人を文明人が、本気で蹂躙すればこうなる。そんな光景が冥府に広がっていた。

戦力差は余りにも大きく、慈悲も許容もない。強いて言えば、彼らは死んでいても、蘇生させられるという意味では、まあ慈悲があるのかもしれない。

「よし、ディメンションプライヤーズの要領で、景気よく強奪を始めるぞ。絶霧と魔獣創造と聖杯でできた大量生産型の空間跳躍獣で、ガンガン運び出せ！　極力壊すなよ？　こんだけ量があれば多少は金になるし……後でハーデスに買い取らせればいい」

「盗んだものを盗んだ相手に高く売りつけるとか……発想が完全にマフィアですね。でも、これだけ全部を根こそぎ奪ったら、ハーデスはお金を用意できないのでは？」

「やだなあ、レオナルド。世の中には家族に借金をするという手段があるんだぜ？　家族は困った時ほど助け合うモノだからな」

「借金ですか……凄いですね、奪えるものが無くなるまで奪っておいて、借金までさせるなんて……まだ下があったんですねぇ」

「なに、生きてさえいれば何度でもやり直せるさ。マイナスからの再スタート、それもまた人生。神様なんだし、寿命も長いだろうから問題はねーさ。いつかは返済もできる」

と、魔獣創造の生み出した大量のモンスターたちが、冥府の動産やら不動産やらを飲み込んでいる。おそらく、始球空間へと口内がつながっているのだろうが、それにしてもやっていることが雑に見える。

「戦争は変わったな……」

「これもうただのいじめの様な気がしますわん」

ジークフリートとヴァルブルガは、ようやく人類の進歩と発展を実感していた。

つまりは、伝説の武器やら最強の魔剣やら、そんなものにこだわっている時点で三流ということであろう。進歩しないということは、ひたすらおいていかれるということである。

「弓矢」「馬車」「火薬」「航空機」「核」人類は戦争を進歩させ続けてきた。その結果が、目の前にある。

発想の問題だ。手元にある材料を如何に組み立てるのか、それが仮面の男とそれ以外の全てで異なっていることなのだろう。

「……最強の魔剣と最強の聖槍か。こうなると、何もかもが空しい。曹操はこの光景を見なくて幸せだったのかもしれない」

「私はもっと気分が沈みますわん……これ、もう戦闘ですらないですわ……」

こんなことを思いつき、実行に移し、成果を出せる。それこそが、仮面の男の能力なのだろう。

ジークフリートはともかく、ヴァルブルガは神滅具の使い手としてそこそこの経験がある。その上で断言しよう、神滅具の使い手が合同で何かを作り上げるどころか、一体化するなど普通では考えられない。それこそ、心の底からそうするべきだと思っていなければ不可能な芸当だ。

つまり、心の底から相手を信じていなければできないのだろう。もしかしたら、単に彼らが他に縋るものを見つけていないだけなのかもしれないが。

「さて……ほどなく全部が奪い終わるが……最後の一つは流石にこの面子でいかないとな」

と、仮面の男は魔獣創造のモンスターを一体口寄せし、六人全員で乗り込んだ。

やや揺れるが、どのみちこれから行く場所を思えばモンスターの頭上も大して危険ではない。

「……本格的なＳＦではな、まあ……異文明同士の戦争なんて起こらない。なにせまあ、地球上でさえ文明間での科学技術の格差は大きいし、それはそのまま軍事技術の差になる。つまり、実際に全くの異文明と衝突するならば……百年程度の差であっても、圧倒的な差になる。つまり戦争にならない。一方的にボコボコにされるか、或いはその前に降参するか、そもそも片方を文明と認めず蹂躙するかだ」

そして、ある意味誰よりも危険な男は、一人語りを始めていた。

それはヴァルブルガとジークフリートが初めて目にする、仮面の男の、寂しげな一面でもある。

「宇宙戦艦ヤマトでも、ガラミスは最初の一手で宇宙から爆撃して一方的に滅ぼしたからな。あれ、イスカンダルから技術の供与が無かったら詰みなわけだし。インディペンデンス・デイみたいに地上の眼と鼻の先にまで宇宙船が下りてきてくれないと、宇宙人と戦えるわけがないんだ。なにせほら、アルマゲドンでもそうだけど、今の人類にとっちゃ隕石を落とされるだけでもてんやわんやなわけだし。今回のだってそうだ……ただのいじめだな。そこに主人公性というモノはない。実際、どうなんだろうな……自分はこれが好きで、やっている間はとても興奮する。準備なんて最高に楽しい。でも、終わった後の虚無感は何ともな……実際、どうなんだろうな……自分以外の俺ツエー連中は、こういうのをどう処理してるんだろうな。自分はまだいい、自分には一応寿命があるからな。でも、そういうのを設定されてない連中は、そういうのをどう処理して長く生きるんだか」

それは、哀愁であり同情だった。世間の全てが自分に及ばない、自分が願った通りに事が進んでしまうことを嘆き、同じ境遇の人間を憐れんでいた。

「グレートレッドやオーフィスはまだいい。あの連中は最初から人間じゃないからな。精神的にも神様で、色々超越していらっしゃるんだろうさ。……そういうモノにあこがれること自体、おこがましいんだろうな。……オーバーロードってネット小説では、主人公の精神がどんどん人間離れしていくんだが……まあ、異世界転生だろうがなんだろうが、結局同じっちゃあ同じだな。原形をとどめなくなっていくのさ……肉体的にも精神的にもな。それって、もう完全に『初期設定』の意味がないんじゃないか？　肉体が全くの他人で、精神も全く別物で、それって『自分』になんの価値もなくて、全くの他人じゃないと成功できないってことだよな。ご都合主義がないとなにもできないってことだよな」

自虐的な発言が、彼の口からするすると溢れて止まらない。

「なんていうかな、まあ異世界に転移して『人間を殺すな』とか『モン

スターが可愛そう』だとか、実際に居てそんなこと言うやつも、小説内のキャラクターでも、まあウザったいだろうな。でもまあ、リアルでもある。そうだな……小説にはリアルが必要だ、だがそのリアルは……読者が望む範囲でのリアルであるべきだ。創作物ならばな」

周囲の温度がどんどん下がっていく。冥府の最下層に封印された、サマエルに接近しているからだろう。周囲は既に氷で覆われている。

「まあ、近代のヒーローモノの元祖であるアベンジャーズだのジャスティスリーグだのでも、割と切り込んでいたりもするな。ヒーローが全能でない以上、どうしても起きてしまう被害や失敗、犠牲や損失。民衆や政府との距離感。それらは、本来はあり得ないことだが、ヒーローが実在したならば『起きて当然』のリアルなわけだ。とはいえ、対象年齢を考えれば描写は加減するべきだが」

それとは無関係に、何処までも仮面の男の纏う空気が冷えていく。

「そう、対象ってのは大事だ。プリキュアでも初代ではブラックとホワイトが洗脳されて殴り合うんだが……それを見た子供が泣いてな。まあ、泣くな。納得だ。で、それ以降はそういうのがなくなるんだ。まあ、偽物と戦うってのはあるんだが。ラノベっていうか、小説家になろうでも、似たような傾向はある。主人公は最強じゃなきゃダメだとか、他はダメな奴で足手まといじゃなきゃダメだとか……まあ、それは些細なことだ。他のジャンルでもあることだからな。ただ……ラノベで設定とかはどうでもいいんだよ。エロゲーでもそうだけど、ぶっちゃけ設定ってのは物語の為にあるんであって、設定のために物語があるんじゃない。ラノベの設定なんてのは、どうでもいいんだよ。可愛い女の子と主人公がイチャイチャすれば、それでいいんだよ。少なくとも、設定にばっかこだわっても、面白い作品にはならないと思うしな。【鏡に「中の世界」なんてありませんよ……ファンタジーやメルヘンじゃあないんですから】そう、物語の世界なんてないのさ、ファンタジーやメルヘンじゃないんだから」

それは、ただの自問自答でしかない。分かり切っている事実を、受け入れがたい現実を羅列しているに過ぎない。

「ラノベの世界なんてないのさ、作者が文章を書いて、挿絵を誰かが描

いてるんだ。アニメになっても、動いているように見えるだけで、実際には声優さんが声を吹き込んだりアニメーターがセル画やら何やらを描いてるのさ。そんなもんに、中の世界なんてものはない。だから、その作品に対して一々むきになるなんてのは、まあオタクとしては無粋なんだろうさ。とはいえ宗教的な立場の人が苦言を呈するのは、真摯に受け取るべきだとは思うけどな。商業作品で、宗教的なタブーにべたべた触るのは、あんまりよろしいことじゃない。だけど、そうじゃないなら……買わなきゃいい、読まなきゃいい、観なきゃいい。それだけの話だ」

一瞬だけ、膨れ上がる怒り。それが周囲を圧し、熱し、凍らせた。

ヴァルブルガは露骨におびえるが、他は何とか持ちこたえる。

「そうだ、登場人物に怒ったって仕方がない。だって、作者がそう書いているだけなんだからな。少なくとも、顔を真っ赤にするのは、まあいただけない。でもなぁ、それは創作世界だからなのであって……現実世界でそんなことされたらたまったもんじゃないよな。親にろくな説明もせず、ただごまかして、鉄火場に庶民うまれのガキを、未成年を死地に飛び込ませる。それがまるで『頼れる大人面』していやがる。どんな厚い面してやがったら、したり顔で『次世代を頼む』とかいうんだろうな。いや、お前全然次世代守れてないからな。ほとんど次世代に任せっきりだったからな。【貴方に重圧をかけているわけではありません。そこは勘違いされないようにお願いします】【世界の崩壊を止める責務をただ一人に負わせるなど、本来は正気の沙汰ではないのです】【それはまさしく、絶望的な所業に他ならず。狂っていなければ耐えられない】」

怒りは消える。熱も消える。

魔獣はなおも空を飛ぶ。

「この世界は、現実だ。だからこそ、期待もするのさ。自分が主人公を放棄しても、誰かが自分に代わって世界を救ってくれるって。自分が悪に走っても、誰かが止めてくれるって。偶々偶然、ふらっと現れた子供に頼らなくても、世界は平和に続いていくって、そう信じさせてほしかったよ……。【英雄でないわたしに世界なんて守れやしない】

そうだ、結局自分は英雄にはなれない【来い、来てみろ、偽物ども。俺を殺していいのは本物の英雄だけだ】【本当に……終わりだぞ……ヒーローが助けに来なければ、ガキは死ぬ】まあ、期待外れだったわけだが。ヴァーリ以外の全員が、自分を倒すことよりも保身を選んで、結果みじめに消えていく。それだけの話だ」

それは、あっさりと逃げることを選ぶヴァルブルガには分からない苦悩だった。

それは、自分の命を粗末に扱うことで逃避していたジークフリートにもわからないことだった。

それは、なにか大切なものの為に戦うルネにもわからないことだった。

それは、そもそも戦わないレオナルドにもヴァレリーにもわからないことだった。

「もうすぐ……自分はサマエルを手に入れる。そうなれば、もう、誰も……誰も、自分を止められなくなるぞ。それとも、都合よく、世界が全部ぶっ壊れるようなことが起きて、そのあとで救いが訪れちゃったりするのか？」

望んでいないぐらい、何もかもが都合よく進んでしまう、主人公の苦悩というモノは。

「ハイスクールＤ×Ｄっていうラノベがあった」

この男は、本当に意味が分からない。

「その主人公は、最強の兵になりたいとか言ってたよ……。笑えるだろ？　一年もたたずにそれを達成しちまったんだ」

仮に、この男の抱えている鬱屈としたものをすべて理解できる誰かが居たとして。それで、この男の様に振る舞えるとは思えない。

「上級悪魔になるとかいう夢も、まあ、そのままの流れで叶っちまった」

この、よくわからないことで悩んで、よくわからないことで悔やんでいる男は、なぜかくもいびつな精神性になったのか。

「ハーレムを作るにしても、まあ、すぐ叶う。収入だって、そこそこあるだろう」

気味が悪い。おぞましい。それでいて、強烈に惹かれるものがある。

「もう、叶えたい夢はほとんど叶って、そこから先の一万年間、何をするんだろうな」

これだけ支離滅裂なのに、何かが中心を貫いている。

「魔王になる？　傀儡で傀儡の、名ばかりの神輿になるのか？　正直、あんな強いだけの奴に政治が務まるとは思えない。学校の先生か？　一年もたたずに最強になったやつが、何を誰に教えるんだ？」

信念を持った行動方針が存在している。

「自分は、これからどうすればいいんだ？　原作知識も品切れだ、っていうか、もう知識も何も必要ない。リゼヴィムを殺せば、好きなだけ強力なモンスターを作りまくってばら撒けばなんでも壊せる」

それゆえに苦しみ、それゆえに憤る。それゆえに、嘆く。

「できると分かり切っていて、やる意味が何処にあるんだ？」

利益よりも興奮を求める男は、称賛よりも満足を求める男は。

「何もかもが思い通りなのに、なんでちっとも楽しくない」

後悔と自嘲と孤独にさいなまれる、愚かな男は。

「遠足は楽しい。遠足前はもっと楽しい。でも、終わった後の虚無感はどうすればいいんだ」

ここにきて、途方に暮れていた。

「……三つ目さん」

それでも、少年は声をかけた。

「そんなことを言うなら、もう少し時間をかけてやるべきだったのでは？　どうして一日で一切合切を解決しようとしたんですか？」

「そうしないと、無理だからだ」

その答えは、余りにも理性と知性に満ちていた。

理論と推理、客観と主観の入り混じった、正しい予測による断言だった。

「今までは聖書の陣営だけを敵にしていた。それゆえに他の勢力からは潰し合いを期待されて、静観されていた。だが、絶霧やら聖槍を確保してしまえば、英雄派と交戦すれば、禍の団と戦えば、どうあって

も敵対関係になる。ヘイトコントロールってのは大事だぜ。いいか、何処まで行っても、自分が死んだらこの組織はおしまいだ。故に物事は相手がこちらを甘く見ているすきに、相手がローリスクローリターンの判断をしているうちに終わらせなければならない。故に、一日で済ませる。相手を追い込んだら、即潰さなければならない。団結し、結託し、こちらを叩こうとする前に」

理路整然としている、狂気の計画の内容。

つまりは、一日で三つの勢力を壊滅させるのは、そうしなければならない理由があるからに他ならない。

「だからこその電撃戦だ。混乱している最中で、判断をするための情報を集め終わる前にことを済ませる必要がある。故に、すべてを速やかに、一日で終わらせる。こちらの陣営を、誰にも手が出せなくなるまで肥え太らせる必要がある」

心情的には失敗を望み、しかし論理的には成功のための最善を尽くす。矛盾しているが、それでも彼は不遇なる彼らの為に成功を必要としている。

「だから、サマエルだ。ここまで豪快に盗み出せば、流石に隠しようもないからな。領収書を書いてもいいぐらいだ」

「なるほど……派手に盗むのは、そのためでもあると……」

「ああ、原作ではなんでか適当に壊して回ったらそこで飽きたみたいに帰ったが、そんな無駄なことをする必要もないしな。っていうかさ、なんで別の宗教の世界である冥府にサマエルなんて大事なもん封じてるんだろうな。さっぱりわかんねえ」

はあ、とため息をつくと魔獣が静止する。

どうやら、冥府の最奥に到着したらしい。

「ヴァルブルガ……一応、自分が赤龍帝の籠手を外した以上、此処にドラゴンはいない。だが、相手は封じられるほどのドラゴンだ。警戒しておけよ？」

「うへえ……絶霧に変更したのはそれも狙いだったの？」

「馬鹿言うな、都合がいいからだ。偶々だよ」

軽やかに、氷に閉ざされた大地に身を躍らせる仮面の男。それに続

く形で、ヴァルブルガも飛び降りる。
その眼下には、最強のドラゴンキラーが眠りについていた。
人類に知恵をもたらした、楽園の蛇。その命は、十字架に奉げられようとしている。

「冥府が、壊滅したらしい」
重苦しい雰囲気の中、三陣営のトップたちは天界でその一報を聞いた。
冥府へ放たれた使い魔は、跳梁跋扈する魔獣と遺体安置所の様に並べられた死神の映像を送ってきた。
それはつまり、主神クラスをもあっさりと蹴散らしたことを意味している。
「まあ、こうなるとは思っていたよ。彼は動かせる人数が少ないからね、勝負を仕掛けるなら拙速を選ぶさ。それにギリシャは主神格が多いし、ぱぱっと攻め落とさないと泥沼になる。それは流石に彼らも嫌がるだろうさ」
と、文字通り昼飯程度の時間で冥府は壊滅した。おそらく、仮面の男は消耗さえしていないだろう。
その辺りが、魔獣創造と幽世の聖杯のコンボの恐ろしいところだ。彼らは時間さえあればいくらでも、強力な戦力を、ノーコストでひりだせる。恐ろしいほどの無敵っぷりだ。それに絶霧の神出鬼没さが加われば、もう誰にもどうにもできなくなる。
それこそ、態々予告した上で攻め込んできてくれなければ。
「……じゃあ、バアルのおじいちゃん。予定通りに頼むね、こんなこと貴方にしか頼めないからさ」
「ああ、任せておけ」
初代バアルには、覚悟を込めた炎が目にともっていた。
それは七二柱のトップであった男にふさわしい、決して魔王に劣ら

ない気迫が込められていた。
それを見て、彼の子孫であるサーゼクスは己の拳を握りしめていた。
どうして、ここまでになったのかがわからない。自分はできる限りを尽くしてきたのに、なぜこうなったのかわからないのだ。
一体、どこでどう間違ったからこんなことをさせる羽目になったのだろうか。

「初代バアルには隠居した上級悪魔を全員引き連れて、二天龍に特攻させて玉砕してもらう」

文字通り、悪魔の知恵であろう。仮にこれで冥界が救われるとしても、それで何が残るというのだろうか。
仇敵の覚悟に、ミカエルもアザゼルもなんとも言えない顔をしていた。
そう、すべては終わる。旧世代は、ようやく生きることを終えようとしていたのだ。

Ｇｌｏｒｉｏｕｓ　Ｂｒｅａｋ　Ｃｌａｔｔａｎｏｉａ

チャクラとは、元々人体の部位を意味している。修行によってその部位を解放し、境地を得るとされている。

しかし、仮面の男の『チャクラ』とはエネルギーの一種である。元をただせば星の力、或いは生命のエネルギーであり、精神と肉体、自然のエネルギーそれぞれやそれを合わせたものである。

チャクラとは力、それを用いて術と成す忍術もまた力。それを操る者にも相応の力と、心が求められている。

仮面の男には力がある、それは事実だ。それを心底嫌っている、それも事実だ。繋がりを求めている、それも事実だ。それを得られない、それも事実だ。それを捨てたのは彼自身、それも事実だ。

事実はもう一つある。彼の中には明確に答えがあるということだ。人々の幸福と救済には、時間と余裕が必要であり、その為にこそ個人と集団の力が必要であると。

その時間と余裕とは、一世代では足りえぬものでもあるし、それでも諦めるべきではないのだと。

正しいやり方とは苦難を伴うモノであり、同時に確実なモノでもなく、何よりも美しいモノでもない。

だが、それでも彼はそうあるべきだと思っていたし、その醜さを愛していた。

だから、彼は一人ではない。彼が英雄墓場と名付けた箱庭は、彼の手を離れても彼の思想を受け取った彼の妹たちが引き継いでいく。

極端な理想論でも現実離れした夢想論でも現実を見ない感情論でもない。個人に負担を強いることもないし、弱者に成長を押し付けることもない。

だから、彼の思想は優しくも正しいのだ。

そして、その方法は間違っている。それも真実だ。

仮面の男一行は、蘇生を済ませたレグルスの背に乗っていた。
レグルスは駆けている。冥府と煉獄を繋げる通路、そして煉獄と天界を繋ぐ通路を。
「ルネ、一応聞くんだが……レグルスはやる気十分か？」
「ああ、やる気満々さ」
レグルスは二天龍ほどではないが、象よりは大きい黄金の獣だった。その背中には、六人が乗り込んでも尚余りあるほどの広さがある。
「聖書の神話と戦って負けた二天龍と違って、ネメアの大獅子はヘラクレスに倒された。レグルスにしてみれば、負けたヘラクレスに毛皮を利用されても文句はないし名誉さえ感じてるらしい。だけど、戦っていない別の神話の主神に魂を利用されたことには納得がいかないんだってさ」
ヴァレリーやレオナルドにしてみれば、こんな巨大な生物を素手で絞殺したという本当のヘラクレスに対して畏敬の念というか、あの墓場で無残に殺された現代のヘラクレスとの落差が追いついていなかった。
まあ、魂だけ継いでもそんなものなのかもしれないが。英雄とはそんな単純なものではないのだろう。仮に、英雄と呼ばれるだけの存在であろう仮面の男の、その魂と力と血を継いでも、同じことができるようになるとは思えない。
「だから、文句を言ってやるんだって」
「そりゃ結構だ……レグルスの代わりに宝珠へぶち込んだヘラクレスの魂もなじんでるみたいだしな」
「三つ目さんは本当に、なんていうか骨までしゃぶりますよね」
「ジャンヌの魂も爆弾に変えてバンザイアタックさせるかね。まあ無理だけど」
今、ルネの持つ黄金の斧にはレグルスの魂ではなく、ヘラクレスの魂を仕込んである。もとより、どちらも同じ神話の存在である。又、

今回は宝珠を傷つけないように抜き出したので、再利用もたやすかったらしい。
「私は、クソ三つ目と違って、これしか取り柄がないからね。でもまあ、これはこれでいいのさ」
手にした黄金の斧。それは相変わらず強い力を持っている。
「私には、これでいいよ。レグルスも一緒だしね」
「仲が良くて大変結構だ……妬けるね」
茶化すような口調のわりに、仮面の男の声色は穏やかだった。
「もうすぐ、通路を抜ける。覚悟はできてるか？」
「覚悟というか……どうなんですか、勝算のほどは」
途中参加のジークフリートは、当然最後まで戦う所存である。彼としても、聖書の神話と戦うだけの理由があるのだろう。だが、いかにして勝つとか、そういう話になると全く聞かされていない。
「ドライグとアルビオンを呼んで、一緒に天界で暴れて、お終い！」
実にシンプルな作戦である。そして、実際の所他の作戦など一切不要なのだろう。
かつて二天龍は聖書の神話と戦い、結果敗北した。だが、全盛期の聖書の神話をして、全面的に協力しなければ勝算はなかったのだ。
それが、衰退した今の聖書の神話と再び戦う。それで戦いになるわけがない。
「でもでも、お兄ちゃん。向こうには超越者がいるんでしょ？　それに魔王クラスだってたくさんいるって……」
「ああ、そうだな……だがなんの問題もない。それはファルビウム様の方がよくわかっている。自分を相手に数で押すなど愚策も愚策だ。魔王クラス何ぞ数の内にも入らない。いっちゃあなんだが、サーゼクスとアジュカの二人で向ってくるのが最善だ。まあ勝てるかどうかは微妙だがな。戦力を足し算で考えるな、掛け算でも考えるな。そもそも数値で見るな。数値でしか考えられない戦力など数の足しにもならん」
圧倒される。その言葉の意味を理解しようと思うよりも先に、納得してしまった。この男が二天龍を万全に扱う限り、負けなどあり得な

い。理屈よりも先に感情で理解してしまうのだ。そういうモノなのだと。

「真っ向勝負、力で来るだろう。それが最善だからだ」

「それでは勝てないのにか？」

「ああ、勝ち目があるのはそれだからな」

レグルスは駆ける。戦地に向けて。

その背に乗った仮面の男は、快適そうに揺られながら説明をつづけた。

「まず、搦め手は無謀だ。単純に自分たちには背後関係がないからな。政治的にも経済的にも切り離されている。それは組織力の欠如を意味しているが、こういう時はしがらみがなくていい。それは向こうも察している」

と、政治的であったり経済的な攻め手を無理と断じた。実際、そうした者とはとことん切り離されているのが仮面の男の陣営でもある。もちろん、ヴァルブルガにはそうしたしがらみがないわけでもないのだが、ヴァルブルガを仲間にするなど仮面の男とその一派にしか想定できないことだ。第一ヴァルブルガが組織と自分の保身を秤にかけて、どちらを取るかなど余りにも明らかだ。

「もちろん、組織力の欠如はそれなりに問題があるがな。今回だって賭けだった。今回自分に組織力があれば、情報を集めることだってもっと堅実にできたし、丁半博打なんてせずに済んだ。流石にこればっかりは魔獣創造の人海戦術でどうにかなるもんじゃない」

ちらり、と仮面の男は白眼でレオナルドを見た。戦闘能力の一切がない、若い芽を。

「まだ無理だ。自分の陣営に、自分以外で動かせる駒はない。そういうことに関しては、一定水準以上の駒が結構な数必要だ。これればっかりは……ノウハウだけじゃ足りない。コネとか、経験とか土地勘だな。分かるだろう？」

その言葉に、荒事に通じているヴァルブルガとジークフリートは否定をしなかった。

「では罠はどうか？　小細工だが、相手が全力でやればそれなりのも

のが仕上がるだろう。これから攻め込む先は相手のホームだし、おまけに時間だってある……だが」

レグルスの毛皮は堅牢で知られている。しかし、その俊足もまた伝説の魔獣にふさわしいものだった。

あっという間に、天界へ入っていく。

「見ろ、おかしいとは思わないか？　なんで誰も自分たちを迎え撃とうとしない？」

「そうですね」

冥府から天界へ抜ける通路。その存在は今一行が確認した通りであり、それは聖書の神話も察しているはずである。

「どう考えたって、天界で戦うのは愚策中の愚策だ。なにせ宗教的にも政治的にも、そもそも国家の大戦略的に考えても天界で戦えば、結果の是非を問わず聖書の神話は共倒れする。冥府で戦うのは論外として、冥府から煉獄への通路で戦うのも無理として、それなら煉獄で戦うのが最善だ。もしくは……」

「煉獄と天界の通路で挟撃する、ですね」

「ああ、封鎖ないし封印する。そうすれば労せずして勝利ができるだろう。少なくとも、圧倒的に優位に立ち回れる。それが戦術というモノだ」

トンネルを通過する場合の軍事における基本中の基本は、一度に全部隊を通さない、これに尽きる。トンネルの長さにもよるが、前後をふさぐないし崩落させるなど、さほどの火薬や手間が必要というわけでもない。その内部の兵士や兵器は死んだも同然である。

天界と煉獄を繋ぐ通路。これがどの程度の重要性を持っているのかはわからない。しかし、少なくとも天界そのものが壊れるよりは軽く済むだろう。

「では、なぜそうしなかった？　天界で戦うことこそ自分の思惑、それは火を見るより明らかだというのに」

天界で戦うということ、それも二天龍を相手に。それはつまり最低でも悪魔の超越者二人を戦わせるということであり、その余波は激しいだろう。連鎖的に天界が滅びるほどに。

少なくとも、時間制限が発生することは確実である。今この場の時間鎬に専念するとしても、二天龍を倒しきるには時間がかかるはずである。

「無理だからだ」

その答えは、余りにも短かった。

その言葉には、自信が満ち溢れていた。

「絶霧だけでも脅威だというのに、それを扱うのは未知の空間能力者であるこの自分。向こうの天才アジュカや老雄アザゼルにしても、いやだからこそそんな無謀は行わない。既知の中でも最強の空間兵器と全く未知の空間能力者。その組み合わせを相手に通路の封鎖なんぞする意味がない」

言われてみれば、その通りだった。空間使い、というモノの脅威はつい先ほども思い知ったばかりである。だからこそ仮面の男は同等の使い手かもしれないゲオルクを誘い込むために迂遠な策を用い、徹底的に打倒したのだ。

空間使いに対抗できるものは、同等以上の空間使いのみ。彼らを相手に罠をはっても無意味を通り越して無駄手間でしかない。この切迫した状況で、そんな出血にも等しい真似は許されないのだろう。

「だから、真っ向勝負だ。自分たちの狙いが天界での戦いである、それに相手は乗るしかない。なぜなら他の場所で待ち構えてもこっちは逃げればいいだけの話だ」

心底愉快そうに、相手の策を読む。或いは相手に押し付けた『選択肢』を謳う。

相手は賢いのだろう、相手は強いのだろう、相手は正しいのだろう。その全てが状況を最悪に変えていく。

いや、賢くて強くて正しいから、そうせざるを得ないのだ。

「ドライグとアルビオンを呼ばないで置いてあるのもそのためだ。アイツらは今次元の狭間にいる。ここで自分たちを殺せば、あの二頭は完全にフリーになる。そして、ドライグには自分が呼び出さなかったら報復を行うように頼んである。最悪だな、民間人がたくさん死ぬぞ」

そう、二天龍は最強の駒だ。彼らを移動中に呼んでいれば、或いは暗殺の可能性もあった。だが、それも無理。今ここで仮面の男を倒してしまえば二天龍が何処にいるのかわからない。その二天龍は仮面の男云々抜きにしても聖書の神話に恨みがありすぎる。

計画的に会戦ができるならまだいいが、無計画に大暴れされればそこが冥界でも滅亡は決まったようなものである。

「だから、暗殺もできない。だから真っ向勝負しかない。分かりやすいだろう？」

これは、おそらく、ではあるのだろうが。

ファルビウム・アスモデウスと仮面の男が行っている将棋の、その一面でしかないのだろう。

状況はこんなにも単純なのに、単純である理由は数多に張り巡らされている。

「だから連中にできることと言えば精々……」

レグルスは駆ける。戦場のにおいをかぎ取って。

舗装された道は、大きな建物へと直通している。

「自分が飛び込みたくなるような、とびっきりのＩＫＵＳＡＢＡを用意することぐらいさ」

大きな門をくぐると、そこは円形闘技場の中だった。奇妙なことに、客席はない。観戦用の窓もない。

しかし、対戦相手は石畳の上に立っていた。

「【さて……ダンジョンをもぐり……辿り着いたのは最下層　そこに巣くうのは完全無欠の弩級の化物……さぁおまちかねの……ラスボスだ】」

その、一人の男を前にして。レグルスは足を止めて、深く唸った。

その男から発せられる、圧倒的なオーラに警戒を示したのだ。

この男は、完全復活を遂げた己よりも強いのだと。

「君を、待っていた」
恐ろしいほどの、ため込んだ怒りを感じる。それ故に、彼から発せられる言葉はどこまでも真剣で、余裕がなかった。
「君と、こうして向き合い、戦うこの時を、待っていた」
普段見せる、優しさや笑顔がない。一切の迷いを捨てて、彼はここに立っている。
それが、心底恐ろしい。仮面の男は恐怖で笑った。認めていた、自分がどれだけの化け物の逆鱗に触れたのかを。
周囲の面々も、仮面の男の緊張を感じ取っていた。
ジークフリートは剣を握りしめる。魔剣グラムの、気位の高い魔剣の興奮を感じ取れる。魔帝剣は、最強の怪物を前に高揚していた。
ヴァルブルガは悪魔を倒すための聖遺物の、その使命感を感じ取っていた。アレは、倒さなければならないものなのだと。
「ここに至るまでに、此処で戦うために、どれだけのものを諦めたのかわからない」
ルネ、ヴァレリー、レオナルドは信じていた。もう、それしかない。
この男に、すべてを賭ける。
この男の才覚に、運命力に、すべてをゆだねる。
これまでそうしてきたように、これからもそうであるように。

「君と、戦う」

「望むところだ」

仮面の男から、魔王と同種のモノが吹き上がる。
覇気に色があり、覇王色と呼ばれるものがあるのならば、正にこの色なのだろう。
濃淡の違いはあれども、臭いが違えども。
それでも、色は全く同じだった。
他人を従え、他人を虐げ、他人を支配し、他人を愛し、他人を許し、他人を裁く。

何物にも従わず、何物にも傅かず、何物にも怯えない。
頂点に君臨する者のみが持つ、王の風格。

「強盗として、お前の国の全てをいただきに来た！」

王としての格の差は、明らかに向こうが勝っている。だからこそ、打倒する。

これは、壁だ。試練だ。障害だ。決別だ。

分かり切っていたことだ。こうなるということは。

「お前の国は滅ぶ。お前のせいで！」

ちがう。仮面の男は心の中でそうつぶやいた。

「お前が無能なせいで！」

ちがう。自分が主人公を放棄したからだ。

「お前が魔王をしているせいで！」

ちがう。自分が聖書の神話を滅ぼそうとしたからだ。

「自分は、お前の国を滅ぼすぞ！　無駄に頑張って恥を晒せ！　最強なだけの役立たず！」

それもちがう。これは、結果ではあるのだが、仮面の男の行為は聖書の神話を救うことになる。

それを、ファルビウムに指摘されることが、今からすでに恐ろしかった。

「……我々は、滅びない。我らは、決してあきらめない！」

目の前のサーゼクスと戦う以上に、ファルビウムに称賛されることが恐ろしかった。

そう、いざ戦闘が始まる段になってさえ、仮面の男はファルビウムと戦っていた。サーゼクスなど『戦略的』に眼中にないともいえる。

サーゼクスを気にかけているのは一種の感傷であり、彼が『したいこと』ではあっても『しなければならない』ことではない。

彼が戦うべき相手は、やはりファルビウムだった。それは、彼の三

つある眼が、全て白く染まったことで明らかになる。
「そうか……そうくるか……完全に想定外だぞ、ファルビウム・アスモデウス」
歓声が上がった。いや、戦場の雄たけび、と言ってもいいだろう。
仮面の男の、その侵入してきた門が閉じ、サーゼクスの背後と、左右の側面、三つの門が全て開いた。
そこから現れたのは、大軍だった。
余りにも、余りにも数が多すぎる。
「三つ目さん」
仮面の男の脇に座っていたレオナルドが話しかけた。押し寄せる大軍を前に、静かに語り掛けていた。
【彼を知り己を知れば百戦殆うからず】孫氏の言葉です」
「兵法の基本だな」
「ええ、貴方は敵を知っている。それはいままで証明してきたとおりです」
そう、数が多すぎる。ここは天界、天使が多いのは当たり前だ。武装している人間、エクソシストが多いのも自然だ。だが、悪魔が多すぎる。堕天使がやや少なく見えるし、彼らの信者も少ない。それは普通だ。
悪魔が、多すぎる。絶滅危惧種の悪魔が、これだけの兵力を動員できるわけがない。
「であるなら、この状況が想定できなかった貴方は、自分を知らないのかもしれません」
「そうだな」
仮面の男は、自分の下面を握りつぶさんばかりに両手でつかんでいた。
身をよじり、悶えている。
生贄を前に、脳内で絵を描いている。
食い散らかしてくれ、と目の前に出された料理を前に、何から食べていいのか迷っている。
「そうか、そうか、うん……その心意気やあっぱれ、と言うべきか」

感情が定まらない。襲い掛かる軍勢は殺意を込めて一丸となり、一気呵成に押し寄せてきている。それを前に、仮面の男は感動と興奮と狂乱と称賛がないまぜになっていた。

「姥捨て山か、アルヌスの丘か。いいだろう、生贄ども。いいだろう、捨て駒ども。いいだろう死兵ども。いいだろう、くたばりぞこない共。その覚悟にこちらも……いや、違う！　ちがうな、違いすぎるな！【なんだ、あの小僧やれば出来る子だったのじゃあないか】全部か、オールベットか！　一族郎党先祖代々、生き腐っていた輩を一斉処分か！　口減らしか！　ああ、阿呆だ！　大馬鹿だ！　倫理観もなにもあったもんじゃない！　いいなあ、正に悪魔の発想だ！　なにを差し出すつもりかは分からないが、いいだろう！　使い捨ての玩具を差し出されたならば、包装を破って箱を食い破って中身を地面にたたきつけて踏みつぶしてかみちぎって燃やして埋めてやらなきゃな！　バイキング形式だ、迷う迷う！　こいつら全部、皆皆、全員死にに来たのか！　レミングスの大移動か！　破れかぶれここに極まれり！　お前たちのウォール・マリア奪還作戦、受けてたつ！　一人一人念入りに、思い思いの趣向を込めて！【蹂躙と虐殺をはじめましょう。抗いなさい、全力で】ああ、ならば……ならば！　遊び半分で戦うのは失礼千万！　特別待遇だ！【忍法封印今破る！】」

仮面の男の、目まぐるしく模様を変える三つの眼が怪しく光る。その恐ろしさで、決死の覚悟も鈍りそうになる。

仮面の男は、狂気の命じるままにレグルスの背に魔法陣、らしき文字の円を描いた。

白い煙がレグルスとその背に乗った面々を一瞬だけ包み隠し、直後暴風と怒号がコロッセオ全体を揺るがした。

威勢が消えたコロッセオの中で、堕天使の総督にして唯一生存した勢力のトップ、アザゼルはかつての緊張を思い出していた。そして、全員に死闘の始まりを告げる。

「勢力で上回ろうが勝ちと高を括るなよ」

戦場は主無き天界の、急造コロッセオ。

「最期を迎えるのは我々かもしれんのだ」

迎え撃つは、想像しうる限りの『聖書』の力。天使、悪魔、堕天使、エクソシスト、信者。地球という星の、最も版図を広げし最強の神話の全身全霊の武力。

「あの男は、神話を滅ぼす力を持っているんだ！」

攻め込むは、僅か『九名』。

「待ちくたびれたぞ」

「さあ、最後の大暴れだ」

ーオオオオオオン！

神滅具より解き放たれし、三頭の伝説の魔獣。

赤龍帝、ドライグ。白龍皇、アルビオン。ネメアの大獅子。

「……この戦い、必ず勝つ。答えを得るために」

「ええ、そうね……生き残るためにも」

人類最強の槍を持つ不運の剣士、ジークフリート。

最強の龍殺しを得た不運の魔女、ヴァルブルガ。

「同情はしないよ……戦場にいるなら、無関係じゃない」

「そうね。私も卑しい犯罪者として、最後まで戦います」

英雄を否定する少女、ルネ。

犯行を受け入れる少女、ヴァレリー。

「今こそ己に課した戒めを解き放ち、倫理観の枷を打ち壊し、戦闘では

使うまいと思っていた幻覚と精神操作を解禁する……そう、ここから先は遊び十割で行く！」

率いるは、比類なき悪意、伝説の犯罪者、幻惑の道化師。

「加減してくださいよ……貴方が遊んだら、暴れるよりひどくなる」

そして、それを支える少年レオナルド。

これより始まるは、第二次二天龍戦争。

誰が生き残り、誰が死んでも、時代は変わる。

「さあ、晩飯の時間だ！」

ミカエルやアザゼル、バアルはその存在を知っている。知っている以上に恐れている。

かつて聖書の神話と対立し、封じることに成功した二天龍という世界最高水準の怪物の存在を。

赤いドラゴンは己の力を何倍にも高め、自在に透過し、決して消えぬ炎を吐いた。

白いドラゴンは他者の力を限りなく縮め、あらゆるものを反射し、無に帰す毒を持っていた。

聖書の神話に、彼らほどの個体は存在しない。全能の神さえ、力という一点ではこの二頭に、一頭ずつでさえ及ばないだろう。まして、魔王では。

「ここから先は、遊び十割で行く！」

それを使役するのは、傲慢不遜なるドラゴンが自ら認めた主。もはや世界の全てを敵に回した、邪悪の体現者。

その彼が、悪の全てを聖書の軍勢に向けていた。

「お前達の望み通り、遊び潰してやるからありがたく思え。綺麗に散れよ【閃光のように！】」

彼は普段、遊び半分、本気半分で立ち回る。そんな彼が、本気十割で戦ったのはヴァーリ・ルシファー一人だろう。白龍皇である彼を相手にした時の仮面の男は、一切の悪と卑と策を捨てていた。【負い目の無さが勝ちを呼ぶ】結果彼は勝利をつかんだが、それは天才であっても未熟だったヴァーリに通じるものであり、目の前の軍勢に通じうるものではない。

そんな彼が遊び十割で戦う。それはつまり、戦いですらないということだろう。終われば空しい一人遊びに他ならない。

「……水戸黄門かってんだ。まったく……でかいこと言いやがって」

神滅具に封じられて久しいアルビオンとドライグ。忘れていたわけではなかったが、それでも麻痺していた恐怖が、アザゼルの背筋を走る。しかし、彼には確認しなければならないことがある。

例え直後に灰になったとしても、一人の仮親として問わねばならないことがある。

頂点に君臨し続ける堕天使の総督は、良く通る声でドラゴンの羽音の響くコロッセオの内部で仮面の男に尋ねた。

「おい、三つ目……ヴァーリはどうした」

直後、仮面の男はひるんだ。

柔らかい部分を突かれて、熱狂は沈静化していた。

それは、彼にとってもアザゼルにとっても、辛い問いかけだったのだろう。

本来神器を抜かれるということは死ぬということである。それだけ神器は人間と密接につながっているということなのだろう。だが、それなりに強力な神や魔がその気になれば、所有者を殺さずに神滅具を抜き取ることはできる。

態々そんなことをする理由がないというだけのことで、聖書の主神が生み出したモノを他の神話の主神格が運用できないということはないのだろう。

その力を仮面の男が持っていないとも思えないし、実際に赤龍帝の籠手を失っている仮面の男は生きている。というよりも、死んでも聖杯で蘇生は可能なはずだった。

ヴァーリが死んでいなければならないということはないが、死んでいないならばこの戦場にいない理由がない。

仮面の男は考えないようにしていたことを、一番言われるであろう男から言われてためらった。すらすらと出てくる言葉が、くるくる回る舌が、全く動かない。

隣に彼がいてくれたら、という未練がぬぐえない。どうしても、寂しかった。

「奴は、ルシファーを全うした」

仮面の男は、驚いて顔を見上げた。自分に代わって、返事をした声の主を仰ぎ見た。

「媚びることなく、引くことなく、醜態をさらすこともなかった。最強の白龍皇は、俺が嫉妬するほど見事な最期を遂げたぞ」

そこには、最強のドラゴンがいた。白い龍は、誇らしげに応えた。誰よりもヴァーリの傍にいた彼は、何一つ恥じるモノはないとばかりに胸を張って応えていた。

「ああ、そうだ……実に見事なルシファーだった。初代に見劣ることなき、気高い男だった」

赤い龍も、彼を称えた。死ぬ必要もないのに、生きてしたいこともあったであろう、できたこともあったであろう、死を選んだ男を称賛していた。

もっと強くなれる、もっとすごくなれる、それを分かっていても、未熟なまま敗北を認めて勝者に命を差し出した。そんな男を認めていた。

そんな二天龍の言葉が、仮面の男の背中を押す。あるいは、二天龍に称賛されたヴァーリが、彼へ向けて送った言葉が勇気を与えてくれた。

「ヴァーリは自分と戦い、負けて、死んだ。自分が殺した」

【お前が赤龍帝でよかった】

「奴の首級は、自分にとって宝だ。お前達と違ってな」

本気十割の闘志で、仮面の男は応じた。

それを受けて、アザゼルは一瞬うつむき、しかし強くにらむ。

「そうか……これでも俺はアイツの親代わりでな……敵は討たせてもらう！」

「口だけだな……その気もないくせに！」

アザゼルの虚言に、再び仮面の男の悪意に火が点いた。

憎悪と共に、仮面の男は軍勢の中でひときわ目立つアザゼルを指さして叫んだ。

「アルビオン、ドライグ！」

それを受けて、ドライグとアルビオンはにやりと笑ってアザゼルへその顔を向けた。

この男がドラゴンを使って何をするかなど、余りにも明白である。

「『かえんほうしゃ』だ！」

両ドラゴンは、まるで鏡写しの様に同時に動いた。大きく鼻の穴を広げて大きく息を吸い込み、長い首をそらせながら勢いをつけて、何の虚飾も何の小細工もなく。

世界を滅ぼすほどの炎のブレスを噴き出した。

神滅具の禁手、あるいは覇龍。そのどちらでもない、完全なる二天龍の同時ブレス。

それは当然、魔王でも神でも防ぎきれるものではない。

ましてや、堕天使の信者やエクソシストが対処できるものではない。

本来ありえざる、二天龍の完全なる共同攻撃。ヴァーリの遺志と仮面の男の誠実さが生んだこの『奇跡の破壊』。

それはシヴァとインドラが手を組んだに等しく、或いは凌駕している。

であるならば、アザゼルが死ぬのは必然として、アザゼルの周囲が焼かれるのも必然として、軍勢の壊滅を意味している。

であるならば。

「アジュカ、フォローを頼む」
「ああ、任せろ」
それと渡り合える、同等の存在が二人必要であろう。
真紅の魔王が、漆黒に染まる。バアルから継承した滅びの魔力、それそのものとなった彼は、悪魔の頂点たる魔王の規格を遥かに超えた大出力で滅びの球体を星の様に作り出し、アザゼルたちの前に出現させ壁とした。
圧倒的な熱量を誇る、ドラゴンのブレス。その前に立ちふさがるは、圧倒的な滅却力を持つ滅びの星。
それが、拮抗できるはずもない。
『ぐうううう！』
なにせ、防ぐはサーゼクス一人、攻めるはアルビオンとドライグの二頭。総じて同等存在ならば、二対一で打ち勝てるわけがない。
しかし、既にアジュカも全力を尽くしていた。
放射されている炎のブレスが、滅びの星に全て飲み込まれるということはない。文字通りの飛び火でも、一般の戦力では壊滅的だろう。
「やはり、そう簡単には曲げられないな……！」
未だかつて味わったことのない、全力を出して尚圧倒されるという初経験。それは彼にとって新鮮な刺激だったが、それとは別に苦悶の表情を浮かべていた。
今彼は、二天龍のブレスの軌道を制御して、全てサーゼクスの滅びの星に向かうように調整していた。本来彼の能力は相手の力を完全に制御する覇軍の方程式という超越者にふさわしいものだが、相手が同等同格、まして二人係では軌道を変えるのが精いっぱいで減衰させる余裕などなかった。
この場で最強戦力たる四騎の規格外。彼らが押し合いへし合いの戦いで、一方が圧倒的に不利なのには、それなりの理由がある。もしも、仮面の男の読み通りサーゼクスとアジュカの二人だけならば、こんなことには成らなかった。
サーゼクスが滅びの魔力で壁を作るのは当然として、アジュカは『自分に当たらない軌道』へ変化させてしまえばいいのだ。要するに

拡散させて密度を下げればいい話なのだが、それを今この場で実践することはできない。

今聖書の神話が戦っている場所は神話にとって最も重要な拠点である天界であり、聖書の軍勢が集結したのは聖書の神話を守るためなのだが、サーゼクスとアジュカが守っているのは今この場にいる軍勢なのだ。

「足手まといがいっぱいで大変だな……ええ、最強の魔王、超越者様！　お前らだけ強くてどうする？　どうしようもねーだろうが！」

仮面の男の悪に応えるように、ドライグは二つのことをした。一つは倍加、自らの力を増大させること。もう一つは譲渡、その力をアルビオンに分け与えることだった。

本来なら、昔ならば、アルビオンはそれを受け入れなかっただろう。だが、今は違う。アルビオンは笑ってそれを受け入れて、己の火力を向上させた。

それは、ダムの決壊にも似ていた。せき止めていた壁が、水圧に負けて破壊されるように、亀裂が走っていく。

アジュカも軌道を変化させ切ることができず、ドラゴンの炎が飛散し軍勢に着弾しようとしていた。

「寝ぼけるな！」

飛散してきたドラゴンブレス、それを迎え撃ち軍勢を守ったのはもう一人の超越者だった。

リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。最も正当なる魔王の後継者は、この場でその名と血にふさわしい声を発した。

「何するものぞ、二天龍！　一度は我らに封じられた分際が、耄碌したか！」

彼にサーゼクスやアジュカほどの基本スペックはない。そんなことは彼が一番分かっている。

そんな彼が、魔王一人分という等身大の実力で、二天龍の暴威に立ち向かう。

「リゼヴィム様に続けぇ！」

その声に悪魔たちは奮起する。次いで飛び出したのは、老雄七二柱筆頭初代バアル。

一族を引き連れて飛翔した彼は、踏ん張っていた子孫の背後に回り自らも魔力を注いだ。

サーゼクスの力はアジュカやリゼヴィムのものとは違い、質や量が違うだけでバアルの滅びの魔力に他ならない。

初代ルシファーの十倍の魔力を持つサーゼクス一人で滅ぼしきれぬならば、本家分家バアルの血族の全てをもって迎え撃つだけの話だった。

長らく実戦を離れ、且つ全員が魔王級ということもない。しかし、冥界で最高の発言力を持つ最も尊い血を保ってきたバアルが、総力を結集して滅ぼしきれぬものなど存在するわけがない。

『初代様!?』

「のぼせるな、若造！　貴様一人で神話を守り切れるものか！」

「魔王様やバアルに後れを取るな！」

次いで、ディハウザーを筆頭としたベリアル達が二天龍のブレスそのものへ攻撃を開始する。ベリアルの魔力は『無価値』。相手の特殊な能力を封じるという強力なものだが、格上を封殺できるほどではない。だが、ドライグの倍加を減衰させることができないということはないだろう。

バアルの総力によってサーゼクスの滅びの魔力の壁は補修され勢いを増し、二天龍のブレスは勢いを失って最初の威力に近づいていく。

それは、劣勢が優勢に切り替わったことを意味していた。

『押し込むぞ、アジュカ！』

「ああ、滅ぼせサーゼクス！』

サーゼクスを主体とした滅びの星は、最初はゆっくりと、しかし速度を増して二天龍へ接近していく。

それはもはや壁ではない、もはや二天龍を滅ぼしつくすほどの決定打に他ならない。

「神威！　黄泉平坂！　絶霧！」

それを転移させ回避せんと、仮面の男は三つの眼を輪廻写輪眼に変えて、全力で迎え撃つ。しかし、主神クラスさえも凌駕する空間能力も、サーゼクスが一族のサポートを得て放った攻撃を止めることさえできない。

神威の渦も、黄泉平坂の窓も、絶霧の壁も、全て飲み込まれて滅ぼされていく。

そう、バアルの魔力は『世界さえも滅ぼす』滅びの魔力。空間使いがどうにかできるものではないのだ。

二天龍はブレスを収めた。もはや息が続かなかったのであろうが、それでは止められないと理解したのであろう。

「ここは任せろ！」

「久方ぶりなのでな、少し体を温める！」

分かり切っていた『それ』を確認したうえで、どうにかしようとした仮面の男を制して、二天龍は羽ばたきその塊に体当たりを仕掛ける。

「踏ん張れよ、相棒！」

「そちらこそ！」

ドラゴンこそ、最強の生物である。

世界を滅ぼすバアルの魔力に、最強の二頭は己が体をたたきつけた。

生まれ変わったばかりの、新しい肉体。最強の生物の堅牢な装甲が、同等の相手の力に触れて傷を負っていく。

その激痛さえも、二頭にとっては懐かしい。

そう、人間とふれあい、人間に力を貸し、自分の体を失って以降ふぬけていた二天龍。しかし、その本質は戦いを好むドラゴンのそれである。

宿主から伝達される痛みではなく、己自身の体の苦痛、損傷。それがとても嬉しかった。

星は、今度こそ砕け散った。
サーゼクスはともかく、他のバアルにしても全力を維持できなかったのであろう。
何よりも、世界を滅ぼすバアルの魔力も二天龍を滅ぼしきれなかったのだが。

「はっはっは！　痛い、痛いぞ！」
「泣き言か、相棒！」

二天龍は、痛々しいほどに傷を負っていた。鱗ははがれ、肉は抉られ、骨が露出し、血があふれていた。しかし、健在だった。強大な生命力を持つドラゴンは、こんなものでは怯みもしなかった。
「ヴァレリー！」
「はい！」
なによりも、優秀な回復役が存在する。幽世の聖杯を持っているヴァレリーは、二頭のドラゴンの傷を癒し始めた。
そして、彼女は理解する。ドラゴンの中にあふれている、圧倒的な生命力を。ヴァレリーが力を消費することさえない。彼女はきっかけを与えるだけで、二天龍は自分の治癒力で完全に復活していた。
しかし、それは倒せない、ということではなかった。聖書の神話の軍勢は、二天龍と同等である超越者二人の、その力を理解していた。
戦力はこちらが上。ならば、勝てない道理はない。コロッセオという強大な結界が維持できているうちに、勝利することも不可能ではない。
そんな、希望を抱いて士気を上げていた。勝ち目のない絶望的な戦況よりも、勝算の有る戦いの方が士気が高い道理である。
「力比べではこちらが不利か……バフは無価値にされ、向こうは数で力の差を埋めて凌駕してくる……」
「やっぱそうするよな……聖杯がある以上、二天龍を滅ぼしつくすことは不可能に近い。聖杯と魔獣創造を何とかしないことには……どうにもならねぇ」

アザゼルは苦悶の表情を浮かべていた。以前の、第一次二天龍戦争では、サーゼクスとアジュカがいなかった。今回はあの二人という、同格の存在を軸に戦いを組み立てられる。リゼヴィムの存在も、士気の上では大きかった。

だが、それでも顔色がさえないのは、勝ち目が見えてこないからだろう。拮抗状態ではどうあがいても負けである。

その証拠に、仮面の男は眼で笑っていた。力で負ける、というのなら悪で勝てばいい。元より空間使いにとって力押しなど無数に存在する手段の一つに過ぎない。

ほのかに抱いたであろう希望を、真正面から上回る。

聖杯をどうにかすれば、二天龍を倒すことはできる。二天龍をどうにかできれば、仮面の男もどうにかできる。

「なるほどなー、このままゴリゴリ滅びの魔力を当てまくって、疲弊させようって算段か【なるほど完璧な作戦っスねーーーっ　不可能だという点に目をつぶればよぉ～】少し考えれば、分かることだろうに！

深く読めば、諦められるだろうに！　お前達、主人公にでもなったつもりか!?　正義にでもなったつもりか?!　憎しみを乗り越え、怨嗟を振り切り、恐怖を拭い、主人公と一緒に戦う勝ち組にでもなったつもりか?!【所詮は我々に捻じ伏せられるだけの哀れな存在！　その思い上がり、後悔させてやろう!!】」

空間使いは、過程を必要としない。軌道を必要としない。

自分というＡ地点から、敵というＢ地点へ攻撃する場合にＡ―Ｂの通過する軌道が必要となる。光や重力でさえ、距離を隔てたものへ影響を与えるには時間を必要とする。しかし、距離という空間そのものを支配する空間使いにその常識は通用しない。

「地爆天星！」

霧で空間に窓を造り、その中に手を突っ込んで自分の両手だけを空間移動させた仮面の男。彼は軍勢のはるか上空に黒い小さな球を生み出して、その手を引っ込めた。

直後、強大な引力が黒い球を中心に発生する。流石に、堅牢なコロッセオはその程度ではびくともしない。

また、悪魔にしても堕天使にしても天使にしても、飛行能力を持っている彼らは頭上への引力に対抗が可能だった。要するに、下に向けて飛べばいいだけの話なのだから。

しかし、人間は違う。翼を持たないヒトは、エクソシストも堕天使の信者たちも、思想や宗派を問わず空に向かって落ちていく。

『あの黒い球を滅ぼせば！』

「まて、サーゼクス！」

攻撃の仕組みを理解したサーゼクスは、引力の中心を攻撃しようとする。しかし、攻撃の意図を理解したアジュカはそれを止めた。

確かにサーゼクスが、或いは他の誰でも術の中心となっている球体を破壊すれば、それで引力は止まる。だが、それは結果としてより状況を悪化させることに他ならない。

大量の人命が失われる愚行に他ならない。

悲鳴と共に、大量の人間が空に吸い込まれていく中、堕天使や天使は己の信者たちを救出しようと飛翔していく。しかし、そんな天使達こそが霧に吸い込まれていく。仮面の男の眼は、単純に視力が高い。遠くを見ることができ、視野が広く、動くものをとらえることができる。

その能力を持って、天使や堕天使を片っ端から『球体の直近』へ転移させていく。

流石に、引力の中心に移動してしまえば抗えるものではない。無理に力を発揮しようにも、あとからあとから他が落ちてきて体勢を整えることさえできはしない。

「お前さんの滅びの魔力も、重力は滅ぼせないだろう？　あと仲間も滅ぼせない。お前には何も救えない！」

既に、サーゼクスは黒い球体を攻撃できなかった。仮面の男の言う通り、固められた戦力たち友軍を滅ぼすことになるからだ。もう諦めるしかない、悔しいがサーゼクスの力は攻撃の為の力であって救済のための力ではないのだから。

そして、球体の引力もある程度の大きさになった時点で収まってしまった。もう、あの黒い球を破壊する意味がない。

「【お前に見せて刻んでやろう……歌では何も救えない世界の真理を……】【何もかも、壊れてしまえ……世界も、奇跡も、オレの想い出もッ!!】【お前の歌で救えるものか、誰も救えるものかよ!】【世の中、拳でどうにかなることって簡単な問題ばかりだ……自分にできるのが些細なことばかりで、ホントに悔しい】サーゼクス・グレモリー!バアルの魔力を継ごうとルシファーの冠をかぶろうと! お前は、グレモリーは! 何も守れない!」

自らの手で証明されていく現実はどこまでも残酷で、捻じれて屈折していく祈りは望んだ回答には至らない。

答えを求めて、狂いむせぶ。天界という光に満ちた世界で、魔王へ叫ぶ。

仮面の男は、矛盾していた。どうにもならない、どうにもできない現実に嗚咽していた。

そんな彼を、見下ろしていた。最強のエクソシスト、デュリオ・ジェズアルド。

彼は察していた。仮面の男が自分の行為で傷ついているのだと。悪を成さずにはいられないが、悪がまかり通る現実を否定したがっているのだと。

戦場での死もまた救いであるというのなら、神器の雷で彼を焼くのも仕方がないことなのかもしれない。

なによりも、その無力さは彼も味わっていた。気象、天候を操作する彼の神器は、そもそも根本的に精密な動作ができない。落下している大量の人間を、傷つけないように救助することなどできるわけがない。

「彼を殺すことが、今できることだというのなら……」

「させると思うか?」

最強のエクソシスト、その隣には最強の魔剣士が浮遊していた。

その浮遊がなにがしかの能力なのかはわからないが、ともあれ魔剣士は飛べるはずもないのに浮いていた。

そして、その間合いは余りにもジークフリートに利していた。

「……よく、僕をこの戦場で見つけることができたね、ジークフリー

ト」
「なんのことはない。最初から私は……お前と戦うつもりだった。お前しか探していなかった」
　風を操れるデュリオが、引力にとらわれるなど考えていなかった。故に、仮面の男に頼んでまで得た『眼』で、ジークフリートは魔王とも並ぶであろうエクソシストの最高戦力を抑えていた。
「お前は確かに強い。だが、それもこの間合いなら話は別だ……そして、お前を抑えることができたなら、役目を果たしているともいえる」
「戦うつもりはないと？」
「ああ、大火力であるお前を止めれば、嫌がらせには十分すぎる。それで十分聖書の神話は蹂躙されて滅亡する」
「それはできないな……」
「だから、させないと言っているんだ」
　流石に、デュリオもこの間合いで、首に魔剣を突きつけられた状況で反撃など考えない。ここでうかつなことをすれば、今のジークフリートは『ああ、仕方がない』程度で首を落とすだろう。
　死ぬのは仕方がないが、今自分が死ねばもっと人が死ぬ。
　その程度には、デュリオもこの戦場がわかっている。
「お前は見ていろ。このまま、この戦場を」
「……君は、こんなことがしたいのかい？」
「して当然だとは思わないのか？」
「ああ、そうだね。確かに君にはそれだけの理由がある。でも、君はそこまで積極的にこんなことをしたいと思っていたのかい？」
　デュリオの揺さぶり、或いは心配するが故の問い。
　それは、迷う者にはことさらに有効だった。
「思っていない。だが、正直爽快でもある」
　裏を返せば、迷いを受け入れた者には無意味でしかない。
　そんな分かり切っていることを言われたところで、何か行動指針に変化が生じるわけもなし。
「デュリオ……昔は君を羨んだ時期もあった。妬んでいたよ。だが、今は哀れだ。君は何も変えられない」

デュリオには、戦う理由がある。少なくとも、自分の頭上で停止している肉の塊と化した同胞を救わなければならず、そのためには仮面の男を止める必要があった。

そして、それは彼に限らない。

グラムに劣らない破壊の斬撃がジークフリートを精密無比にとらえて、デュリオを傷つけない軌道で迫ってくる。

その技の使い手に見当がついた二人は、あえてもがくこともなく距離を取った。そして、石畳の地面に着地する。

「……久しいな、ジークフリート」

「そこをどいてもらうぞ」

ヴァスコ・ストラーダとエヴァルド・クリスタルディ。教会が誇る重鎮であり、現役の戦力である。

共に聖剣を携えた二人は、一切の甘えを捨ててジークフリートを叩く所存だった。

実際の所、ジークフリートが生きていても死んでいても、大して戦局に意味はないのかもしれない。

ジークフリートを突破しても、何の意味もないのかもしれない。それでも二人は戦うことを諦めなかった。

「おや、これは豪勢なことだ……しかし、お二人とも……貴方方も何も変わらない。貴方方が今まで何も変化させることができなかったように、今もこの世界の命運を左右することはできない」

「その、通りだっ！」

あらかじめ打ち合わせでもしていたのだろう。レグルスに騎乗したルネとヴァルブルガは、ジークフリートの窮地に救援へ駆けつけた。あるいは、彼女自身が最初からヴァスコとエヴァルドを相手取るつもりだったのかもしれない。

「お前らは、もうおしまいだ！　私たちを倒したって、何も変わらない！」

「そういうことねぇん……イヤホント、超ラッキーだわ私」

ある意味では、仮面の男と同種の怒りを燃やすルネ。黄金の斧は猛り、黄金の獅子もまた吠えていた。

それに付き従うヴァルブルガも、横目で仮面の男を見て安堵していた。アレの味方は神経をすり減らすが、その一方で生存は確約されている。おそらくだが、自分のような人間は彼にとって嫌われる存在だ。自分が彼の怒りに触れながらも生存が許されているのは、あの罠を仕掛けるにあたって最適だと判断したからであろう。

つまりは、幸運だった。ただ運が良かっただけで拾った命、見逃された命でしかない。

勝ち戦にしかない彼女は、理解していた。あの男こそ、如何なる戦場であろうと無理やり勝ち戦に変える怪物なのだと。

「無駄に死にに来たんだ……覚悟はできてるんだろうな！」

皮肉にも、彼女が一番仮面の男と思考が一致していた。

「場所を変えよう、デュリオ」

そう提案したのは、デュリオを的に絞っているジークフリートだった。余りにも彼にとって都合がよすぎる発言ではあるが、しかしそれはデュリオにとっても好都合だった。言いたくはないが、広範囲を攻撃する彼の神滅具は、周囲に味方がいると使いにくいのだ。

ましてや、周囲の味方が人間であれば急激な気象の変化で体調を崩しかねない。自分の能力の危険性を知っている彼は、大恩ある二人を気遣って頷いた。

「ああ、少し距離を作ろう。すみませんが、失礼します」

最強ランクの若き戦士たちは離脱し、残ったのは老雄と若い女性。そして伝説の猛獣である。

ヴァスコ・ストラーダとエヴァルド・クリスタルディは当然、ルネの事情を知っている。隣にいる魔女に関しても、噂程度ではあるが知っている。

魔女の方はどうにもならないが、ルネの方に関しては思うところもある。それ以上に、説得の余地があった。

上手くすれば、切り崩せる。また、悲しい境遇の彼女へ力不足を嘆く思いもある。

両雄は、まず語り掛けてみた。

「君が、ルネだな。君は、我々を恨んでいるのか？」

もろもろの事情は置いておくにしても、エクソシストと悪魔の戦いによって彼女の故郷が壊滅したのは事実だ。言いたくはないが彼女をさらった悪魔にしても、エクソシストとの交戦が無ければ、彼女とその家族はともかく故郷を吹き飛ばすということはなかっただろう。

逆恨みと言えば逆恨みだが、彼女の境遇を思えば同情の余地はあるし、正直他の理由も思い浮かばない。

彼女自身も分かっているようだが、彼女がここにいる必要性は全くない。レグルスが復活している以上彼女の斧も以前ほどの力はないであろうし、二天龍が復活している以上彼女の戦力など誤差に等し

い。
　最強のエクソシストであるデュリオを知る二人は、彼女がそこまで強い筈がないと見切っていた。
「憎い？　どうして」
　しかし、その質問は余りにも的外れだった。
「悪魔は憎い、ってこともない。私は私なりに納得するために研究所の遺族を殺した。けど、悪魔って種族全体が憎いわけでもない。エクソシストだって同じだよ……ま、思うところは少しあるけど、少なくとも恨んじゃいない」
　犯罪者と警察が家の中でもみ合って、家が荒らされた。それに近い心境だろう。もう少し穏やかに済ませられなかったのか、とは思うが流石に理不尽が過ぎる。
「私を守ろうとした、ってわけじゃないけど、悪魔と戦ってたんでしょ？　別に……恨みはない」
「では、なぜ君はここにいる」
　その問いは、彼らにとっての核心だった。
　今こうして対峙して、ルネの両目が尋常ならざる模様を描いていることは明らか。であれば、改造か何かで脅されているのか、或いは洗脳されている可能性が大きかった。
　前者であれ後者であれ、会話から齟齬を見出すことはありえた。
　極力戦いたくはない。もちろん、最悪戦うことはあるのだが、それは最後の手段だった。
「君にここで戦う理由はないはずだ」
　その、鋭い指摘に、ヴァルブルガはため息をついた。無駄な会話にしか思えないのだ、この少女の後ろにいるのは仮面の男。彼の弁舌の巧みさや圧力のかけかたは、この場にいる男性二人ではどうにかできるものではない。
　純粋に殴り合うならともかく、この二人に説得する、という力があるように思えないのだ。特に、仮面の男に比べれば。
「ここは天界だ。ここで戦う意味は知っているだろう」
「なぜ君は戦う。君がエクソシストや主、天使を憎んでいないならば、

戦う理由はないはずだ」

ルネは、眼を閉じてその言葉を聞いていた。黙って、話を聞き続けていた。

「……仮面の男に何を言われてここにいるのかはわからない。しかし、この死地に、戦う理由のない者は、いるべきではない」

確かに、そうなのかもしれない。居る必要はないのかもしれない。

ルネは、その言葉を認めて、しかし怒りを燃やした。

「戦う理由か……確かに、私がここで戦う理由はないのかもしれない。ここにいる必要はないのかもしれない」

怒りが吹き上がってくる。相手の言葉の正当性を認めてなお、怒りがあふれて止まらない。

「で？」

仮面の男から借りている眼は、怒りに染まって威圧感を出していた。

「今ここで、今アンタたちが戦う理由はなんだ？」

仮面の男は言っていた。勝つ為ならば、少数精鋭に絞るのだと。もしも敵が多いならば、それは相手が降参と隷属の為に戦うつもりなのだと。

その理由、意味を知っているルネは、目の前の二人が腹立たしくてならない。

「教えてくれよ。さぞご立派なんだろ？」

虚言は許さない。はぐらかしも、決して通じない。

仮面の男と接してきたルネは、確かなモノを獲得していた。

「天界を、主を、教えを守るためだ」

「そうだろうさ……で？　全員殉教の覚悟なんだ？　ふざけやがって！」

ルネがここにいる理由はないのかもしれない。しかし、彼らが戦う理由は悲しすぎるモノだった。ここで死ぬためである。悪魔の戦力が多すぎると面子がたたないため、人数合わせのために戦っているのである。

この戦場、このコロッセオの内部で戦う聖書の神話の軍勢は、全員

死ぬことが前提だった。例外と言えば、サーゼクスとアジュカぐらいであろう。それが証拠に、ミカエルをはじめとして天使は主要なモノが一人としていない。

死んで困るモノは、この戦場にいてはならないのだ。ある意味では、全員死ぬためにいるのだから。

「……私も、ここに居たのかもしれない」

それが、彼女の怒りの源泉だった。

「あの日、もしもエクソシストが勝っていたら、私は教会に引き取られていたんだろう？」

老雄は、その言葉に全く反論できなかった。

ただの事実として、獅子王の戦斧は十分強力な武器である。それを持っている彼女が今後も人外に狙われることは確実であるし、或いは強大過ぎる力で自分の体に悪影響を与えるかもしれない。

そんな彼女を野放しにはできない。たとえ彼女の家族が健在だろうと、故郷が無事だろうと、エクソシストが悪魔を撃退すれば彼女は教会に保護されて戦力として鍛えられていただろう。

それは間違った情報ではなく、それは誤った憶測ではなく、それは洗脳された非現実ではなく。

デュリオを始めとして、良くある話だった。

「悪魔から私を守るために保護する、それは当たり前だ。検査する、それも必要なんだろうさ。場合によっては神器の練習をする、それは状況に依るんだろうね」

そう、教会は神器の使い手を戦力にしている。あるいは、資質を持つ孤児を戦力として鍛えている。

「で、私が教会の為に戦う理由は何だろうね？」

仕方がない。まあ、仕方がない。

しょうがない。まあ、しょうがない。

どんな理由があるにしても、教会は実際にそうしているし、責任ある立場の二人もそれを変えることはできなかった。

「今ここで、アンタたちは悪魔やら堕天使やらと一緒に戦っている。それはなんでだ！」

実のところ、誰も納得などしていない。少なくとも、エクソシストの殆どは天界を守るために戦うことは当然として、堕天使や悪魔と共闘することなど欠片も納得していない。

悪魔と戦うために己を鍛え、悪魔と戦う際に友人を失い、或いは最初の理由で悪魔が敵だったのかもしれない。堕天使だって、大差ないだろう。

なのに、『教え』の聖地を守るために彼らと轡を並べる。これで、どう、納得しろというのだ。

「御心のままに、とかほざくんなら！　それはクソ三つ目以下だ！」

彼女に、戦う理由ができていた。

「お前ら、むかつくんだよ！」

レグルスが吠える。斧を握る手に力が込められる。

「やむをえんか！」

「仕方ない！」

もう、戦うしかない。老雄は聖剣を手に猛獣と少女を迎え撃つ。

確かな研鑽と経験に裏打ちされた戦闘能力は、復活したばかりの猛獣と特別な眼によって強化されているルネを押し返した。

とはいえ、ルネにケガはなく、レグルスもまた無傷だった。共に、聖剣に匹敵する守りがある故であろう。

「流石にやるね」

「では、これはどうかしらん!?」

ヴァルブルガの魔法が、四方八方から襲い掛かる。それは神滅具を用いたものではないが、元より彼女は神器使いではない。であれば、その魔法の実力も確かなモノであり、必然人間の一人や二人は消し炭にできる。

だが、それも二人は危うげなく切り払っていた。

普段の彼女なら旗色の悪さで逃げ出すところだが、彼女が逃げた場合追いかけてくるのは仮面の男である。どう考えても、目の前の二人よりも仮面の男の方が怖い。

「あらあらまあまあ、で、も！　無駄ですわん！　お二人では、レグルスは倒せない！」

そう、完全復活を遂げたレグルスの毛皮は、一切の刃物を寄せ付けない。彼のヘラクレスでさえ、この獅子は絞殺すしかなかったという。

如何に二人の聖剣が最強クラスであったとしても、如何に二人が熟練であったとしても。流石にヘラクレスにできなかったことが、二人係とはいえできるとは思えない。

「ふむ……では、殴るだけだ」

2メートルという体格に、満載された筋肉。若々しさを保ったデュランダルの使い手ヴァスコ・ストラーダはデュランダルを一旦異空間にしまうと、そのまま素手で殴りかかった。

やばい。そう直感した二人の女性を背に乗せたまま、レグルスは雄々しく吠えて迎え撃つ。

老齢も老齢ながら、ヴァスコ・ストラーダは圧倒的な速度でレグルスの懐へ飛び込み、己拳で一撃を入れる。長年にわたって鍛え上げた彼の拳には、聖なる波動が宿り聖剣ならぬ聖拳としての力が備わっていた。

とはいえ、そこは完全復活を遂げたレグルス。刃物ではない単純な打撃は無効化できないが、単純にレグルスは屈強である。そもそもヘラクレスをして絞殺せざるを得なかったこの怪物が、一度殴られたぐらいで打倒されるわけがない。

勇猛果敢に飛び込んできた『若造』に、魔獣はためらいなく爪を振るう。

その頭上から、エヴァルド・クリスタルディが斬りかかった。まさか拳で殴りかかるわけにもいかず、必然聖剣でありレグルスに効果はない。しかし、その背に乗った二人には十分すぎるほどの必殺である。

鍛え抜かれた剣術は、聖剣の威光を十分に制御し二人を両断せんとした。

それを、ルネは仮面の男から借り受けた眼で見切る。それが空間跳躍や時間移動であるならともかく、ただの体術であるなら見切れない道理はない。

「そう簡単に死ねるか！」
高速移動も、所詮は人間技の範疇。聖剣の一撃も英雄の斧ならば受け止めることは可能である。
「ルネちゃん、ナイス！」
そして、ヴァルブルガは一拍遅れて反応し、魔法を放って吹き飛ばした。確かに今のルネとヴァルブルガは、一撃で死ぬ脆い命でしかない。しかし、それは相手も同じことだ。人間同士が戦う以上、一発で十分なのである。
ヴァスコ・ストラーダもレグルスと数合打ち合い、離脱する。流石にヘラクレスほど屈強ではないのだろう。
故に、エヴァルド・クリスタルディも距離をとる。そう簡単に彼女たちは倒せないらしい。とはいえ、実際の所彼女たちを倒しても、レグルスはそうやすやすと倒せないし、レグルスを倒しても仮面の男にたどり着けるわけでもない。
やはり、この戦いに戦術的な意味はない。しかし、少なくともルネにとっては意味があった。
「いけるいける……こりゃ楽だわ。レグルスは目の前の二人でも倒せないし、ご自慢の体術も写輪眼で見切れる。聖剣も斧と魔法で蹴散らせる。後はのんびり時間を稼げばいい」
ヴァルブルガは上機嫌だった。実際の所、仮面の男の作戦は彼女好みである。相手の勝ちの目をとことん潰し、じわじわいたぶる。もう自陣は勝ったも同然であり、蹂躙を楽しむ余裕さえある。
本来格上の両雄も、彼女自身も借りている眼のおかげもあって、余裕で対処できた。
「勝ち馬ってサイコーね、ルネちゃん。時代遅れのおじいちゃんたちには、このままお迎えが来るでしょうしね。っていうか、天国で死ねるなんて召される手間が省けてるわね」
「ふん……調子に乗るな、魔女」
八七歳の老人は、軽薄に笑う魔女を軽蔑していた。
確かに、目の前の二人には特別な眼があり、体術を見切ってきているのかもしれない。しかし、その程度なら対処のしようはいくらでも

ある。
　所詮は後付けの力、安易な力。なるほど、便利で簡単に強くなれるのかもしれない。しかし、それは真の力ではない。
　例えどれほど強力な力でも、それを使いこなすには膨大な年月を要する。多くの血と汗を流して、力は己自身のモノになるのだ。
　便利な力、安易な力、簡単な力。それに頼れば、必ずどこかにボロが出る。そのほころびを突けば、たやすく崩すことができるだろう。
「そのような力は、仮初だ。偽物の力でしかない」
「三つ目に力を与えられて、暴走する。それがお前たちの限界だ」
　全くの正論である。確かにルネもヴァルブルガも、特にルネは仮面の男から力を与えられていて、それを我が物顔で使っている。調子に乗っている。
　それは決して反論の余地はない。
　その言葉を受けて、ルネは更に怒りを燃やした。
「ふざけるな！」
　憎悪に燃える目で両雄を睨みつけながら、ルネは上空に浮かぶ人間の塊を指さした。
　それは堕天使の信者や、両雄の弟子であり配下のエクソシストが材料となっている。
「私の力が偽物だって？　アンタらの力が本物だって?!　じゃああそこで丸め込まれてる連中は何なんだよ！」
　そこに、自分がいたのかもしれない。自分と同じ境遇の誰かがいるのかもしれない。そう思うと、ルネは腹立たしくてまらない。
「アンタらは強いんだろ！　さっきジークフリートとどっか行った奴も強いんだろ?!　で、他の連中は何なんだよ！」
　英雄と呼ばれるものが居る。彼らは懸絶した力を持ち、他を凌駕し、怪物を打倒し、万軍を打ち破るのだろう。目の前の二人がそうであるように、英雄とは本物の力を持っているのだろう。
　少なくとも、英雄墓場に誘い込まれた自称英雄どもとは違い、仮面の男からもそれなりに認められる程度には英雄なのだろう。
　だが、英雄が英雄足るということは、他が著しく劣っていることを

意味している。
　目の前の二人は、結局後進を一人か二人、育てるのがやっとだったのだろう。
「あそこにいる連中はどうなんだ！　ええ！　あの連中は修行が足りないのか、信仰心が足りないのか！　そんな連中、どうして戦場に連れてきた！」
　彼らにはやる気があるのだろう。彼らには本物の力があるのだろう。
　少なくとも、ルネと比べて熱意が劣るとか、鍛錬が足りないということはない。戦う理由だって、きっとあるはずだ。にもかかわらず、この差はなんだというのだろうか。
　決まっている。彼らが弱いからだ。英雄と比べるに、遥かに劣る存在でしかないからだ。
　本物であるだけで、彼らは強者ではないのだから。強さが、足りなすぎるのだ。
「答えろ！」
　両雄は、答える術を持たない。
　結局のところ、目の前の二人が英雄であると言っても、所詮は個人として強いか、或いは相応の精神を持っているだけなのだろう。
　アジュカ・ベルゼブブやアザゼルの様に、悪魔の駒や人工神器といった『誰でも簡単に強くなれる』武器や道具を作ったわけでもないし、仮面の男の様に『誰でも簡単に強くなれる』眼を他者に与えられるわけでもない。
　仕方がないと言えば仕方がない。彼ら二人にそんな能力はないのだから。強いが強いだけ、本当に強いが本当に強いだけ。
　真実の強さを持っているが、強いだけが取り柄の男にできることなど、身を守ることと目の前の敵を倒すことだけだ。
【そう、便利だ。『強い』なんかよりも、よほど価値があるとは思わないか？】全くその通りだ、クソ三つ目！　誰も助けられない強さを誇られたら、こんなに腹が立つんだな！　自分だけ強くて、自分だけ助かって、自分だけ戦って、それで訳のわかんねー

自慢されたらこんなにむかつくんだな！」

本物の力。それがルネに宿ることはないのだろう。少なくとも、目の前の二人ほどに己自身の力を得るということはないのだろう。

だが、それでいい。それでいいのだ。本物の力何ぞ、何の役にも立たないのだと改めて理解したのだから。

「私が力を求めたのは、復讐をするためだ！　だけど、復讐をするために生きようと思ったんじゃない！　生きるために、清算するために復讐をしようと思ったんだ！　復讐に人生を奉げるつもりなんてない！　なんでむかつく奴をぶっ殺すために、何年も何年も修行しなくちゃいけないんだ！」

それは、比較的安易に復讐を完遂できたが故の、恵まれた復讐者であるが故の傲慢なのかもしれない。

だとしても、彼女からしてみれば目の前の二人の自慢が腹立たしい。悪魔を倒すことが目的ならば、その手段が偽物だろうが本物だろうがどうでもいいはずだ。

そして、本物の力を得ても失敗すればそれまでだ。

「私は悪党に拾われた！　気まぐれでも偶然でも、私はアイツに目を付けられた！　もしかしたら、アンタたちに救われていたかもしれない！　でも、今はこう思ってる。お前らに救ってもらわなくてよかったってな！」

強大な神滅具を扱うための、過酷な特訓。単純に斧を操るための、体術の試練。教会の戦士としての、礼拝。それは、きっと多くの同じ境遇の戦士との共同生活なのだろう。

そして、その果てに待っているのは悪魔や堕天使との融和である。

こんなバカな話があってたまるか。

「私の『兄貴』はクソだが、お前たちはクソ以下だ！　信じるモノを貫けない、成したいことも成せない、誰かの大切な人が死んでも、祈れだとか許せとかしか言えない！」

少なくとも、ただの事実として。仮面の男はそれなりに戦えるであろう魔法使いたちも神器所持者たちも置いてきた。彼らは命を捨てて戦いたくないと言って、それを仮面の男は許した。実際、戦力的に

は不要なので遊び感覚で誘っただけなのだろうが、それでも彼らの死にたくないという意思を尊重した。

「お前らは、『私と同じ』誰かを戦場に駆り立てた！　奴らの最初の『戦う理由』とは何の関係もない、国やら教えやらの為に戦わせた！　死ぬと決まり切っているのに！」

――ちなみに、エクソシストになったら、きっと楽しい日々だぜ？

君が復讐したい相手とはなんの関係もない、この世で悪行をしている無関係な悪魔と戦う日々だ。君と同じ境遇のだれかを生み出さないためにとか言って、正義の味方に仕立て上げられるぞ。その上、上層部の意向で悪魔と戦うことを禁止させられたり、悪魔を救う任務を課せられたりする。きっと不満を感じても、君よりも強くて、君と違って辛い目に遭っていないだれかや、或いは君の痛みを分かってくれる誰かに諭されて、丸め込まれて、憎悪を悪だとされて、間違っているとされて、捨てさせられるぞ。一生もやもやしたまま、平和で争いのない世界を生きることになる。それを君が許容するなら、それもありだ。

「私だって同じだ！　私がここにいるのは、兄貴がここにいるからだ！　私と同じ境遇の人や、ヴァレリーと同じ境遇の人のために戦う！　お前らの言う戦う理由はそれだ。だけどな、そんなことはどうでもいいだろうが！　勝算があるし偽物でも戦えるだけの力は持たされてる！　戦える力もないのに命がけで戦わせるなら、せめてそいつの本当の動機で戦わせてやれ！」

復讐を成し遂げた少女が、斧を片手になお戦う理由。それは新しい家族のために。

微力であることは分かっている。それでも、何かしてやりたい。それだけの話だ。

デュリオがそうであるように、彼女もまたしがらみで戦っている。違いがあるとすれば、生き残る確率や勝算だろう。

仮面の男は悪だ。目の前の二人は善だ。おそらく、仮面の男は目の

前の二人よりも間違っているのだろう。
それがどうしたというのだ。その正しさの果てが、この茶番である。
「私は『強盗』だ！　私は、私の為に！　お前らをぶちのめして目当てのものをいただく！　お前らは、おとなしくぶちのめされろ！」
どうして、こうなったのだろうか。両雄は、無力感に襲われていた。英雄であると称えられ、英雄であると認められ、英雄であるだけの実力を持つ二人は、目の前の少女に反論の余地を持たない。
世間のことになんのためらいも持たない恥知らずは少女に実り豊かな人生を与え。
正しい筈の両雄は己を信じる者たちに、満足のいく死さえ与えられない。
今日ここで戦うエクソシストたちは、この上なく不運だろう。なにせ、最初からいてもいなくても勝敗に影響はなく、そもそも最初から負けると決まり切っていて、挙句戦う相手は悪魔でも堕天使でもなく、憎んでいた彼らと一緒に協力して戦っている。
そして、死んでも誰かに仇を討ってもらうことは望めず、信じていた組織は仮面の男に従属する。
それが、神の教えを信じて戦ってきた両雄の、最後の戦いである。
そしてそれは、聖書の神話がひたすら繰り返してきた略奪の歴史、その一端に過ぎない。

Ｇｌｏｒｉｏｕｓ　Ｂｒｅａｋ　烈槍・ガングニール

神滅具、煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）。気象操作という聞くだに強力な能力を持ち、実際に聖槍に次ぐ二番目に強い神滅具とされている。

広範囲攻撃を基本とし、非常に高い汎用性と殲滅力を持つ。しかし、その所有者であるデュリオがそれを操るにふさわしい気性を持っているかと言えば別の話だった。

根本的に優しい彼は、広い範囲の敵を薙ぎ払う、ということに興味がない。いや、嫌がっている。

だからというわけではないのだろうが、彼は応用技として虹色の希望（スペランツァ・ボッラ・ディ・サポネ）というモノを操る。

この術にかかったものは、自分にとって大切なものを思い出す。それは我を見失っているモノや、凶行にかられたものにはこの上なく有効で、戦意を喪失させることができる。

鎮圧には優れた効果を持つコレは、当然攻撃力をまったく持たない。

「……なんだ、幻か」

白けた空気で、あっさりとジークフリートはそれを振り払った。その結果を意外に思わなかったデュリオは、残念そうながらも驚きはしなかった。

彼自身が一番分かっているのだ、こんなものでは何も止められないと。

「こんなくだらない冗談で、私の心を変えることができると思ったのか？」

「くだらない冗談、は酷いな」

「それじゃあ、気休めか？　昔こんなことがあったな、そんなことを思い出したぐらいで、変わるものがあるとでも？」

こんな言い方はどうかと思うが、そもそもジークフリートに幸せな

過去などない。細やかな救いこそあったものの、それも幸福とはいいがたかった。

もしも幸福な過去があったならば、態々禍の団などに所属しなかっただろうに。

そして、そもそも。この術を受けたものが戦う理由が、術によって思い出した過去と何の矛盾もなかったならば、何の意味もない。

デュリオ自身がよく知るように、その程度なのだろう。昔の思い出を掘り返したぐらいで止まるものなど、最初から大したものではないのだ。

「馬鹿にするな。私の過去は私のものだ。それに気やすく触って、ただで済むと思うなよ」

覚悟と信念。その萌芽が宿った今のジークフリートは、決して止まらない。

それはある意味では、この戦場に集った者全員がもつ最低水準の代物である。

大切なものを思い出そうが、大切なものを守るために戦うなら、戦いは止まらない。

「第一、君自身はどうなんだ。この術にかかって、それで戦いを放棄するのか？」

「それは、できないな。僕がここにいるのは、僕にとって大切なものがあるからだ」

「……なら、こんな技自体編み出すべきではないし、実戦で使うべきでもない。幻覚を生み出すぐらいなら、もう少しやりようがあると思うけどね」

呆れてしまった。自分自身にさえ効果がない代物を、実戦で使うなどバカげている。弱めの電気で感電させる方が、よほど有用で使い勝手がいいだろうに。

「どうにも君は、嫌々戦っている。戦いに対してネガティブすぎる」

「戦いを楽しいと思うよりはマシだろう？」

言い方は悪いが、戦うことを心底喜んでいる人種には、この術はなんの意図があるのかさえ読み取れないだろう。そういう手合いと戦

うことを、彼は最初から排除している。
　というよりも、そもそもエクソシストは悪魔や堕天使、吸血鬼と戦うことが仕事なのである。彼らの戦意を喪失させたところで、できることは苦しませずに殺すことだけだ。
　ジークフリートからすれば、一体どういう状況で誰に対して使う技なのか、理解に苦しむところである。
「それを他人に押し付けるなと言っているんだ。それは他人の戦う理由を侮辱するに等しい」
「耳が痛いね」
　昔のことを思い出して、戦いを放棄する。それは最初から大した理由ではないということであり、信念も覚悟もない者にしか意味を持たない。
「だけど、君だってこの戦いを楽しんでいるわけじゃないだろう？」
「ああ、だが……なかなかどうして、戦いを止めようとは思えない」
　ジークフリートは、自分でも不思議な心境に至っていた。戦意はあるが憎悪はなく、闘志はあるが熱狂はない。
　ただ、真剣に戦うという意思があった。
「なら聞かせてほしい。君は一体、何のために戦うんだ？」
　デュリオにはない能力だが、交渉によって相手と落としどころを見つけて、不要な争いを避けることはできる。もちろん、それによって導き出される結果が戦争によって失われる命と比べて、多いのか少ないのかは場合による。
　しかし、デュリオは少ない望みを託していた。
　デュリオはジークフリートを知っている。その境遇を知っている。もしも一つ違えば、自分は彼の様になっていたのかもしれない。
　それは選択肢があったわけではないし、天から授かったものの違いでしかないのかもしれない。
　だからこそ、お互いに思うところがある。互いに恵まれた境遇だったわけではないし、互いに望んで今の場所にいるわけでもない。そして、剣を向け合ってはいるが、別に相手を憎んでいるわけでもない。
「自分の為だ」

恥じることなどない、とばかりにジークフリートは断言した。
その返答が余りにも意外だったのか、デュリオは呆気にとられた。
彼の戦う理由からすれば、戦う思想からすれば、余りにも相違がありすぎた。

「自分の尊厳の為に戦って、何が悪い！」

その戸惑いを軽蔑ととらえたのか、ジークフリートは叫んだ。
悔しい、そう思って何がいけないのだろうか。

「あんなことをした組織に、反旗を翻して何が悪い！」

デュリオは、悲しげにうつむいた。
結局、そこなのだろう。
戦士養成機関、などという名目の実験施設は、彼に対して過酷な日々だけを与えた。
その後も、教会は彼に戦うことを強いてきた。誰も彼が戦うことを止めなかった、彼には他の選択肢などなかった。そして、それを嫌がった彼が組織を抜けた。ある意味当たり前の話である。
「デュリオ、君は高潔だ。君が自分よりも不運で、戦うことはおろか生きることさえできない子供たちのために戦うというのなら、好きにすればいい。だが、私を止めるな。私は私のために戦う。私に苦痛を与え、戦いを与え、義務を与え、権利を奪い、選択を奪い、寿命を奪った天界陣営に仇を成す！　それが私の戦いだ」
自分が大切で、何が悪い。自分自身が大事で何が悪い。自分を傷つけた者に怒って何が悪い。
「だが、こんなことは間違っている。この戦いの先に、何がある？」
「この戦いが起きなかったとして、私に何がある！」
何も、ないのだろう。
元よりジークフリートに自尊心などなかった。そんなものが育つ余地がなかった。

自暴自棄になったとしても、ある程度は仕方がなかったのだろう。
「……その結果、多くの人が苦しむことになるんだ。そんなのは、間違ってる」
「そうか、間違っているか……。そうか、私は間違っていると君は言うんだね」
悲しいことだが、そうやって戦い続ければ、何時まで経っても戦いは終わらない。憎しみは連鎖し、哀しみは延焼する。どこかで断ち切らなければ、限りなく戦争は続いていく。
どこかで、断ち切らなければならない。それが今ということなのだ。今この時代こそ好機に他ならない。今ここで争いの連鎖を断ち切れば、永遠とは言わぬまでも長期間にわたって戦争は止まるだろう。
その間、子供たちがデュリオやジークフリートの様に戦うための過酷な試練から遠ざけられるならば。
今ここで踏みとどまり食いしばることにも、意味はあるのではないのだろうか。
「ならば、君は何を根拠に自分が正しいと言い切れる」
それを、犯罪者は切り捨てる。国家の理屈を個人は切り捨てる。
「そんなに戦いたくないなら、君たちが折れればいいだろう。戦う前から全面降伏すればいい。こちらが戦うことを放棄しないなら、君たちが戦うことを放棄すればいい。こちらが何を要求しても、この場で失われる命の総量に比べればたいしたものじゃない。人命が尊いというのなら、君達がそうするべきだ」
できもしないことを押し付けてくるデュリオに、ジークフリートはそのまま返す。本質的な矛盾を、国家に属する者へ問いただす。
「なぜ全てを差し出さず、こちらに全てを諦めろと言い切れるんだ」
「……そうか、譲れないんだね」
「ああそうだ。君が守りたい誰かの為に戦うように、私は自分を守るために戦う！」

自分の為に戦う。自分というモノを持っていなかった魔剣士は、ここに己を見出していた。そして、それは彼個人だけではない。彼が保護する形になった、英雄派の末端たちにも言えることである。

「悲しいね……」

「なら戦わなければいい。一々感傷を口にするな」

「それは、君もじゃないか？」

デュリオの周囲に風が巻き起こる。おそらく、近づくだけでも呼吸が困難になるであろう気圧差が発生し、周囲に真空さえ発生させていた。

彼の忌む、他者を傷つける力。無差別に、無慈悲に。大量に破壊し、大勢を殺傷する力。

天罰の具現が、周囲を満たしていく。

「ああそうだね。少なくとも、君と戦う理由は、君を殺すためじゃない」

ジークフリートは、魔帝剣グラムを脇に構えた。

普段ならありえないほどに、しかし真の力を発揮しつつあるグラムは持ち主に応えていた。或いは認めていた。

自暴自棄の果てにある自殺とは程遠い、戦う意思が魔剣を高めていく。

「君を守るためだ。君は、死んじゃいけない。この戦いで、君は死んじゃいけない。たとえどれだけ辛かったとしても、生きなければならない」

共に、人間一人を殺すには過剰すぎる力を持っている。

共に、人間一人が背負うには過剰すぎる力を持っている。

共に、人間一人として向かい合っている。

「君は、生き残るべきだ。君の守りたい者の為に」

「……そう思っているのなら、何故？　他の人に向ける優しさがあるのなら……剣を取るべきじゃない」

醜い矛盾なのだろう。迷っているだけの、半端な覚悟なのだろう。

だが、それをジークフリートは肯定していた。そうしたいなら、そうするべきなのだ。

「それはこちらのセリフだ。君だって、私を殺すつもりなんてないだろう？　だが、私はともかく、君には私を殺す義務があるはずだ」

共に、この戦場では主役ではない。この戦場では、二天龍と仮面の男、そして二人の超越者こそが主役に他ならない。彼らが長時間戦うということは、つまり脆くなっている天界が滅ぶということであり、それは聖書の神話の滅亡を意味している。

それゆえに、仮面の男に属するジークフリートは戦い続けるだけで勝利を拾える。しかし聖書の神話に属するデュリオは敵戦力を打倒しなければならないのだ。

つまり、こうした無駄な会話もジークフリートにとっては利益であり、デュリオにとっては浪費なのである。

「……君は、心底僕らが憎いわけじゃないんだね？」

「ああ、その通りだ。だが戦う。どこまでやるべきかは迷っているのかもしれないが、戦うこと自体は迷っていない」

ジークフリートは踏み込み、デュリオは舞い上がった。

単純な事実として、デュリオは距離をとればとるほど優位であり、ジークフリートは距離を詰めれば詰めるほど有利となる。

故にデュリオは空へ舞い、ジークフリートから大きく距離を取った。

少なくとも、ジークフリートに与えられた聖槍は最強だが、流石に戦闘でいきなり扱える代物ではない。

仮面の男は元々空間使いであったので、空間系最強である絶霧もあっさりと使いこなせるのであろう。だが流石に、多くの機能を持つであろう聖槍をジークフリートは使いこなせない。

また、最強の聖槍とは言ってもデュリオの持つ煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）も二番目に強い神滅具だ。格の差で押し切れる相手でもない。

故に、最強の魔剣で挑むことにした。

本来多くの悪影響を担い手に与えるグラムが、なぜか今は非常に馴染んでいた。

「ならば、僕もそれに倣おう。君を殺さずに拘束し、そのまま次に進

む」

冷気、それもまた天候の一種である。周囲に誰もいないことを確認したデュリオは周囲の気温を急速に下げ始めた。

それは人間でしかないジークフリートには耐えられるものではない。体を氷漬けにするまでもなく、聖槍を持っているだけだった曹操が熱中症で倒れたように、魔剣グラムをもっているだけのジークフリートも寒さで動けなくなる。

それがモノの道理であり、必然というモノである。

「……そうか、それができるといいね」

魔剣を一振り。それだけで、煌天雷獄が支配していた大気は切り払われた。

もとより、本腰を入れて凍結させようとしていたわけではない。だからこそ、一薙ぎで消し飛ばせたのかもしれない。しかし、それでもデュリオの知るジークフリートはここまで強い男ではなかった。

彼の戦闘スタイルは、複数の魔剣を神器である『龍の手』で多数持ち、同時に扱うというモノだった。おそらく、接近戦ではデュリオを遥かに圧倒していただろう。

だが、彼は神器さえ発動させていなかった。それで、ここまでできる理由がわからない。

「私も君も、このグラムのことを勘違いしていた。他の剣と一緒に使うとか、龍の手で強化するとか、そんなことをする必要はなかったんだ。元々、グラムにはそれだけのスペックがあった」

二人は、つい先ほど近くにいた聖剣の担い手を思い出していた。

そう、神器を用いず、ただ鍛錬と信仰によって圧倒的な戦闘能力を持つ二人を。

「最初から、こうすればよかったんだ……グラムは気位が高いからね」

「そうか……グラムは本当の意味で君を認めたのか」

友人の成長が、デュリオには少しうれしかった。

この状況でそれは祝福できることではないが、デュリオには友人が自分の命を捨てることをやめていたのだと理解できた。

「僕に君は救えなかった。僕は平和が嬉しかったが、君には生きる場

所を失うものだったからね。僕にできることと言えば、美味しい食事を作ることぐらい。その程度じゃあ、君には届かないとわかっていたしね」

仮面の男に救われたのか、或いはただのきっかけだったのか。それはデュリオには分からない。しかし、仮面の男にささやかながら感謝しつつ、改めて向き合う。

目の前の彼は、手抜きをして勝てる相手ではない。しかも、自分は手加減が苦手だった。

「悲しいな……所詮最強と言われてもこんなもの。嫌になるよ……」

「ああ、全くだよ。最強の魔剣も、正直今更空しいだけだね」

誰も、教えてくれなかった。戦い方を教えてくれて、神器の使い方を教えてくれて、悪魔と戦ってきた。

教会は、二人を戦士としてしか扱わなかった。彼らに己を救う方法など、誰も授けてくれなかった。誰かを諭し、争わずにことを収める方法など、誰も教えてくれなかった。

仕方がないと言えば、仕方がない。

しかし、それを二人は呪っていた。

「だがデュリオ、分かったこともある。私は、禍の団で英雄派を名乗る派閥に所属し、更にそこから三つ目殿の一派に移った。まあ……うん、正直もしかしたら最初から三つ目殿の思惑通りだったのかもしれないが……」

ジークフリートの顔が苦悶に歪んだ。

思い返すだけでも寒気が走る。

器量の差、というモノが視認できるほどの衝撃だった。強いとか弱いとか、優しいとか厳しいとか。そういうレベルではない。

もしかしたら、曹操たちがあそこで奮い立って戦っていれば多少抵抗できたのかもしれない。しかし、曹操たちは完全に心が折れていた。それはジークフリートも同様である。

そして、ジークフリートは恐怖したのだ。その後、安堵した。

教会を裏切るときも、悪魔と戦ってきたときも、いずれもあそこまで明確にむごたらしい死を、辱めを確信したことはない。

「どうやら、力の有無とは別次元の所に人間の本来の力はあるらしい」
仮に、仮面の男の首がそこに転がっていたとしよう。それでも、ジークフリートは勝てる気がしない。目の力だとか、そういう問題ではない。単に彼の本来の恐ろしさは、力の総量だとか能力の幅とは別次元にあるのだ。
感じ、考え、思い、成す。その基本が、従っていただけのジークフリートやデュリオとは違いすぎた。
「君も私も、大差ないのだろうさ。彼から見れば、さぞ矮小に違いない」
彼が脅威に感じたのは絶霧を持っていたゲオルクぐらいだが、実際の所あっさり倒すことができた。
おそらく、サーゼクス・ルシファーさえ敵として認識していないのだろう。
彼が戦っているのは、徹頭徹尾ファルビム・アスモデウスだけだった。
「世界を変える力、人を変える力。それが我々にはなかった」
「そうだね……そして、もう遅い」
ジークフリートには変わる機会がある。だがデュリオにはおそらくないのだろう。
それが双方には悲しかった。
そして、それを振り払うように戦いが始まる。
なんの意味も持たない戦いが。しかし、双方にとって譲れない戦いがあった。
少なくともジークフリートは示すつもりだった。自分と同じ境遇のモノを代表して、天界に不満を示す。
才能ある強者を使いつぶしてきた天界に、行動を伴って異議を唱える。それが彼の戦う理由だった。

「……アスモデウス陛下」
「ファルビウムでいいよ～～」

グレイフィア・ルキフグスはメイド服姿でセラフォルーをねじ伏せていた。放っておくとろくなことにならないからだが、元々彼女は戦闘に参加する予定ではない。

というのも、ファルビウムが断固たる態度で止めたからだ。仮にグレイフィアを戦場に出して仮面の男にむごたらしく殺されれば、サーゼクスが自分を抑えられるとは思えなかったし、そうなればアジュカに負担がかかりすぎる。

理屈は分かる。しかし、戦力であるはずの自分が戦場に赴けないことは非常に申し訳なかった。

例え、敗北するとわかり切っている戦場でも。

しかし、今現在はなんとか優勢を保てている。グレイフィアの中に「もしかしたら」という希望が湧いてきていた。

「ファルビウム……本当に、勝てないのですか？」

「そうだよ！　なんかいけそうじゃん！」

「……ああ、やっぱりそう思うんだね～～」

芸術家気質というべきか、或いは演出家というべきか。彼は劣勢を演じて希望という芽が出ることを待っているだけだ。それを潰すのが楽しいのであろうと察しは付く。

確かに、サーゼクスの滅びの魔力は空間使いにとっても鬼門だ。世界を滅ぼす力は、空間の壁さえもたやすく崩す。そういう意味では、サーゼクスは確かに仮面の男と戦えば勝ち目はある。

問題は、戦う気があるかどうかなのだ。

「そもそもさ、そもそもが間違っているんだよ。勝算なんて、あっちゃダメなのさ」

仮面の男が、どこまでこちらの誘いに乗るのか。それは正直未知数だ。だが、負けるかもしれないと判断した時点で、彼が矜持を捨てる可能性もある。

そうなれば、即戦争は終了である。

「彼がコロッセオを出れば、それでもうおしまいだよ。そうだろ？」

女性悪魔の中でも屈指の実力者である二人は、それを思い出して口を閉ざした。

そう、コロッセオの内部は非常に堅牢に作られている。世界最強クラスの四騎が真正面から戦ってもしばらく持つ程度には。

だが、コロッセオの外は違う。流石に普段よりは丈夫だろうが、それでもサーゼクスが暴れまわれば天界が持たない。

「彼が二天龍と一緒に逃げ回りながら立ち回れば、もうこっちは降参するしかない。というか最初から彼がこっちの誘いに乗ってくれているから戦争になっているだけなのさ。天界に乗り込まれた時点で、もう負けてるんだよ」

もしかしたら負けるかもしれない、と思うより先に殺すことができればいいのかもしれない。ただ、それは余りにも儚い希望だった。

おそらく、彼はそれを待っているのだろう。

もしかしたら、このまま勝てるのかもしれない。そう思って、自分に襲い掛かってくるその時を。

「……でもさ、こっちの戦力は悪魔だけでも二天龍より上じゃん。このまま勝てないの？」

「じゃあ言い方を変えようか。いいかい、今この状況は二天龍が『神滅具』を装備しているってことなんだよ」

ぞわり、と二人の魔王クラスはファルビウムの言葉の意味を理解した。

ただの人間が使ってさえ、神話世界を崩壊させかねないと認識された神滅具。それを、元から主神よりも強い二天龍が装備する。それは、超越者の領域さえも超越していた。

「三つ目君は、おそらくサポートに徹するはずだ。そうなったら、対応できるのはアジュカぐらいだろうね。っていうか、他の全部がアジュカじゃなきゃ対応は不可能だ」

コロッセオの内部映像を見て、ファルビウムは自分の計画が仮面の男に通じていると再確認した。

元々賢しいとは思っていたので、意外でもない。ただ、彼はさぞ心中穏やかではないのだろう。なぜならば、この計画には彼にとって力づくで奪えないものがあって、はじめて成立するのだから。

まさか、ソーナが自分に惚れているとは、天地がひっくり返っても

想像できまい。
「あのさ、ファルビウム君。まさかとは思うんだけどさ」
グレイフィアに未だ押さえつけられながらも、セラフォルーは尋ねた。聞かねばならない気がしたのだ、今この時点で。
「まさか、まだ隠していることとかないよね？」

「え?!」

本当に意外そうに、ファルビウムは驚いていた。
確かに、言う意味もないので言っていなかったが、もう一つだけ仮面の男がしそうなことはある。というか、現時点で大半のエクソシストや堕天使の信者を丸め込んだ地爆天星の存在が、彼の今後を示していた。
ファルビウムは、あれを見て「ああ、やっぱり」と一人納得していたのだ。
まさか、このタイミングでセラフォルーが察するとは思っていなかったが。

「さて、大ピンチだな～～」

仮面の男は戦況を見守っていた。人間の戦士はほとんど全員が空中で封印されているが、一部の実力者は難を逃れて戦闘を続けている。

当たり前と言えば当たり前だが、サーゼクスとアジュカ、及び上級悪魔達が中心となって二天龍と戦っている。

天使たちはトップが天界の維持という替えの利かない任に就いているため、今一まとまりに欠けている。エクソシストを救助しようとして巻き込まれて封印されているものが多かったのも一因だろう。

堕天使は元々戦力が少なかったので、やはり精彩を欠いている。

仮面の男陣営は、やや押され気味と言ったところだろうか。威装・須佐能乎で二天龍を装甲で覆い、更に絶霧と瞳術を併用したカウンターを用いているが、流石に防げる攻撃と防げない攻撃があり、更に言えば単純に量が多いので対処の限界を超えている。

「とはいえ……タイミングを間違えないようにしないと色々不味いしな。テンポが悪くなると対戦相手からの反応がなくなってしまう」

ドライグの頭に乗った仮面の男は、威装・須佐能乎の装甲内部でタイミングを計っていた。

この戦いの終わりは既に設定されている。故に、そこに至るまでにどれほどの阿鼻叫喚を生み出せるか、というのが仮面の男の器量の見せどころである。

もちろん、そんなことを気にしていて、しかも評価するのは仮面の男一人なのだろうが。

「そろそろだ、とは思うけれども……」

そんな仮面の男を背後から見守るレオナルドとヴァレリーは、これだけの戦力を相手に演出することしか考えていない自分たちの頭目に呆れさえ感じていた。

まあ、実際そうなのだろう。今のところは極めてまっとうに戦っているだけである。この場にいないルネのことは心配だが、いざとなれ

ば口寄せで召喚すればいいだけの話なので、命を案じてもいない。
「下手をしたらこのままずるずる行きそうで怖いな～～」
ある意味では、この戦いには最初から時間制限が存在していた。それは天界という極めて脆い世界で、世界最強クラスが真正面から激突するということである。当たり前だがこのまま続けばあっさり世界は滅ぶだろう。
もう一つ、仮面の男とファルビウムの間で交わされた取り決め、の様なものが存在していた。仮面の男の読みでは、その条件が満たされた場合天界の状況によらず、向こうは降参するだろう。そうなったらこちらも矛を収めざるを得ない。
つまり、向こうの設定した敗北条件を満たす前に、できるだけ演出した蹂躙をしなければならない、と仮面の男は思っていた。
「……ん？」
三つの眼を白く染めた仮面の男は、ドライグの頭部に乗り込んだ自分へ向かってくる影をとらえていた。
それは剣を構えた転生悪魔であり、サーゼクスの眷属悪魔であり、冥界屈指の剣士とされる沖田総司だった。
とはいっても、自称ジャンヌダルクや自称ヘラクレスの様に魂を継いでいるわけではなく、自称曹操や自称ゲオルクの様に血を継いでいるだけでもない。幕末の時代に転生悪魔になった、新選組一番隊組長ご本人である。
「奴さえ討ち取れば！」
彼が逸ったのも、決して責められることではないだろう。彼もまた黄金風船事件で黄金のアンチモンスターを相手に奮戦するハメになった一人であり、同時にサーゼクスの苦悩を近くで見てきた一人である。
もはや遠くなってしまった聖書陣営の勝利条件である魔獣創造と幽世の聖杯の確保も、まとめて行える状況でもある。
確かに仮面の男は恐ろしいが、賭けるには十分すぎる。
なにせ、勝てばすべて解決する。まだ、間に合う。まだ、そこまで傷は大きくない。

仮面の男と目が合った。笑っている。嘲笑している。
元より接近戦に特化した剣士が、彼へ間合いを詰めようとするのは当然であり、それを遠ざけようとするのも当然だった。
「ルシファー眷属か……お前らも謎だよな。リゼヴィムに対抗するために、神器使いを一人も入れていないっていうけど、そもそもリゼヴィム本人がそこまで強くないじゃん。サーゼクス一人で倒せるじゃん。しかもリゼヴィムが出てきた後も、神器使いがメイン戦力のD×Dに一人も派遣されてなかったじゃん。意味ねーだろ、魔王じゃないんだからお前らが戦えよ」
虫を払うように、仮面の男は霧で壁を作った。
言うまでもないが、モノが空間を操る絶霧の壁である。故にサーゼクスの様に空間を削り取るタイプの能力を持たなければ突破は困難である。また、絶霧自体が上位神滅具であるがゆえに、神滅具の禁手をもってしてもたやすくはない。
しからば、サーゼクスの騎士たる彼はどうするのか。剣でもって切り払うのみである。
「この沖田総司はサーゼクス・ルシファーの騎士……であれば、この程度！」
特別な剣を用いるのではなく、特別な能力を用いるのでもなく、ただ剣士としての技量で破壊できないはずの霧の壁を切り裂いた。
その合間を通って、騎士の駒二つで強化された速力でドライグの頭部を目指す。
とはいえ、流石に彼が空間跳躍能力を持っているわけでもない。仮面の男の三つの眼から逃れることはできない。
仮面の男の豊富な技の数々が、彼の進路を遮った。
「修羅道！」
口寄せされたミサイルやビームさえ切り払う。
「天照！」
視点から燃え上がる黒い炎に包まれるが、即座に自分の切り裂いて逃れる。
「神羅天征！」

全方位への不可視の斥力。それは流石に回避も対処も不可能だったが、空中で踏ん張って無理やり耐える。

近づかなければならない。近づいて仮面の男を斬り殺し、魔獣創造の少年と幽世の聖杯の少女を確保しなければならない。そうしなければ、これから起こる悲劇を回避できない。

「ドライグ、かえんほうしゃ」

その眼前に、対処できるはずもない遥か格上の炎のブレスが迫っていた。

なんのこともない。ドライグの頭上に乗っている仮面の男に近づくということは、ドライグの顔に近づくということなのだ。

多くの妖怪を内包し、華奢でさえある見た目よりは頑丈な沖田も、流石に世界最強クラスの至近放射には耐えられるわけがない。

「そうじぃいいいいいい！」

その炎の前に、同じく炎を操る男が飛び出した。

サーゼクスの戦車、スルト・セカンド。沖田が斥力で押されている間に追いついた彼は、北欧神話の炎の巨人に由来する炎を発して壁になった。

非常に高い火力を持つ彼だが、生憎持久力は高くない。しかも、彼のオリジナルよりも目の前のドライグは格上なのだ。彼がどう頑張ったところで、相殺することなどできるわけもない。しかし、一瞬持ちこたえることならば不可能でもない。

「いっけえええええええ！」

全てを理解した沖田は、返事もせずに炎の衝突から離脱した。

その炎が壁となって視界をふさいでいたからか、仮面の男はほとんど無防備で沖田のすぐ近くで平然としていた。

突き込まんとした沖田の真下で、スルト・セカンドが自らの炎ごと吹き飛ばされていたが、それを振り返る余裕もない。

「まあ、言っても仕方がないことなんだが……ＮＡＲＵＴＯって、ニンジャマンガなんだよね」

仮面の男の三つある眼、そのうちの一つに文字が浮かんでいた。

一、という漢数字である。

それが何を意味するのか、彼にはわからない。もはや、彼には退路も防御もないのだから。

必ず、殺す。この男を殺さなければならない。この男のせいで、研究所の職員、その親族遺族というほとんど関係のない悪魔が大勢死んだ。

彼らを見捨てざるを得なかった沖田は、必殺の覚悟で彼に突っ込む。

「んで……やっぱニンジャと言ったら分身の術だよな」

仮面の男の中から、もう一人の仮面の男が出現した。いや、一人ではない。四人という結構な数だった。

至近となった沖田は、間合いの内側に現れたそれを切り払おうともしなかった。

「幻など、無意味だ！」

沖田に斬りかかる、四体の分身。それらは六道眼の地獄道という、極めてリアルな幻術を作り出す能力である。しかし、それはあくまでも幻覚でしかない上に、人間ではない者には、余り効果が望めなかった。

「我らの無念……思い知れ！」

沖田は仮面の男の分身、その向こうにいる本物の仮面の男だけを見ていた。

そして、攻撃を受けた、という認識を得る前に絶命していた。

「知るか」

幻の仮面の男、彼らが持っていた錫杖らしき武器による斬撃。それは実際に沖田を攻撃していたかのように、実際の破壊と重なっていた。

「生き永らえたくせに同志と最後まで戦わなかった奴が、偉そうな口を叩くんじゃねえよ。コハエースの沖田に謝れ」

再度の天照で、サーゼクスの騎士はあっさりと灰も残さずに燃え尽きていた。

「さてと、もういい塩梅みたいだし……巻きで行くか」
四つの分身は数を幾百にも増し、そのまま高速で動き二天龍の周囲を包囲している悪魔たちの集団の中へ突っ込んでいく。
別に全員がそれを幻覚だと認識したわけでもないだろう。だが、二天龍へ放たれ続けている魔力攻撃が素通りしていくところを見て、得意としている精神攻撃の類だと誰もが理解していた。なにせ、仮面の男が数百もいるわけがないのだから。
「……！　不味い、サーゼクス！　アレは……！」
アジュカだけは、それを理解していた。何がどうなっているのか、どういう意図があるのか、しっかりと把握していた。
しかし、サーゼクスはそれを聞く余裕がなかった。沖田とスルト・セカンドがほぼ同時に殺されたところを見ていた彼は、視界に映る限りの仮面の男の幻影を滅ぼした。実体の存在しない幻影さえも滅ぼすとは流石だった。圧倒的な滅びの魔力も、彼は繊細に操り味方に当てることなく幻影だけを滅ぼしていた。
『どういう原理かわからないが、全て消すまでだ』
最高火力であるサーゼクスは、二天龍へ攻撃しつつ片手間でそれを行っていた。
信頼していた眷属が目の前で死んだ。その喪失感は大きいが、彼は踏みとどまっていた。まだ、戦わなければならない。まだ、何も終わっていないのだから。
「サーゼクス！」
そんな彼へ、アジュカは再度叫んだ。
まだ何の解決もしていないことを、彼は知っていたのだ。いや、認識していたというべきだろう。確かに戦場に散っていた数十もの幻影は滅ぼされた。もう一度幻影が出ても対処すればいい。サーゼクスにはそれができる。
だが、そもそも根本的に、サーゼクスは勘違いをしていたのだ。
「さ、サーゼクスさま……」

マグレガー・メイザース。サーゼクスの僧侶である彼は魔法使いであり、彼の後方で支援を行っていた。その彼の体から、手が生えていた。

正しく言うと、彼の背後から手が貫いていて、その内部のモノを力任せに掴んで摘出していた。言うまでもなく、マグレガーの心臓である。彼の目の前には、初めて見るであろう自分の心臓がわずかに脈打ち血を流していた。

「【貴様のハートを鷲掴み！】【みんなのハートをキャッチだよ!!】トランスフォーマーの実写映画で、こんな攻撃をオプティマスがしてたんだよな。してみたかったんだよ、一回ぐらい」

ぐしゃりと、マグレガーに視力が残っていたならば、自分の心臓が目の前で握りつぶされるところを見ることができただろう。

もちろん、それは決して素晴らしいものではないのだが。

「【無いものを在るものとし、在るものを無いものとすることで敵を惑わし、ファミリーの実態をつかませないまやかしの幻影】サーゼクス……知っていたはずだぞ。自分は精神攻撃も得意だとな。そして精神を操るということは、五感を操るということ、だけじゃない。相手の虚をつくことが本質だ。お前は手品師が道具だけで観客を欺くと思っていたのか？」

サーゼクスには、目の前の光景が信じられなかった。確かに目の前の仮面の男は幻覚なのだ。実体が存在しているようには見えない。如何に仮面の男が優れた幻覚能力を持っていたとしても、格上であるはずのサーゼクスをごまかせるはずがない。いや、それ以前に仮面の男はいつ、マグレガーの背後に回り込んだというのだ？

仮面の男の姿は消えて、更にマグレガーも放り捨てられたかのように落下していく。支えを失った、死体の彼に手を伸ばして、しかしサーゼクスはやめた。今自分が触っても、彼を消してしまうだけだった。

「いよいよ真骨頂というわけか！」

ファルビウムの予測通り、アジュカだけは状況を全て理解していた。

周囲を見渡すと、仮面の男が再び幻影として現れている。流石に上級悪魔だけあって、過半がそれを幻覚だと見破っている。堕天使や天使もこの戦場にいるだけに同様だ。だが、その中に攻撃力を持った幻影が存在している。

「……幻の中に、本物がいるぞ！」

「どれだ、見分けがつかないぞ！」

「やめろ、うかつに攻撃するな！」

それは、天界だというのに恐慌だった。

戦場に散らばった多くの仮面の男。彼は時折実際に悪魔達や堕天使たちを攻撃して見せて、実体があるのだと反撃を誘っている。

しかし、幻影に通常の攻撃をしても空振りをするだけである。嫌、空振りをするだけなら問題はない。だが、此処は密集している戦場なのだ。魔力や光で攻撃すれば、それは必然味方に当たる。

実体を持つ幻影と、そうではない幻影は全く見分けがつかない。実際に攻撃を受けた悪魔が死力を尽くして反撃しても、空振りして周囲の親族を吹き飛ばすだけである。

何とも皮肉なことに、或いは狙い通りなことに、仮面の男の分身が殺す量よりも圧倒的にフレンドリーファイアで同士討ちが起きていく。

『アジュカ、どういうことだ』

「いいか、サーゼクス。アレは全部幻影だ、実体など何一つない。本物は相変わらずドライグの頭上だ」

切迫した様子のアジュカは、それ以上に焦燥しているサーゼクスへ説明を始めた。

その説明がまったく無意味だとわかった上で。

「アレに実体があるように見えるのは、実体がある『不可視の分身』を数体重ねているだけだ！」

理屈は単純である。この戦場では極めて程度の低い六道眼の幻覚で『実体の存在しない眼に見える分身』を大量に生み出す。

それとは何の関係もなく、輪廻眼による輪墓・辺獄を用いて『攻撃力がある不可視の分身』を放ち、見えている幻影と重ねて攻撃してい

るだけなのだ。
　一度攻撃を放ったように見える幻影を攻撃しても意味がないのは、単に実体のある分身がそこを離れているだけのことなのだ。
「おそらく空間系に属する能力だ。お前の滅びの魔力でもなければ、不可視の分身に攻撃を当てることはできない」
『それなら、場所を教えてくれれば！』
「どうやってだ？」
　見えている幻影の中に、実体のある分身が紛れているだけなら、そもそも聞く必要もない。サーゼクスならば全て滅ぼすことができる。しかし、見えない分身となれば話は別だ。アジュカが見えるだけの移動している分身を、サーゼクスが正確に攻撃できるわけがない。
　そして、アジュカが対処するにも無理がある。なぜならば、そんな些細なこととはなんの関係もなく……。
「我らを忘れるな！」
「いい加減邪魔だ！」
　この戦場で最高火力を誇る二天龍の攻撃は続いている。
　なんのことはない、仮面の男はただかく乱を行っているだけなのだ。
　結束すれば二天龍を押し返せるというのならば、それをかき乱してしまえばいい。
　不可視の分身をアジュカが対処した場合、二天龍への対処がおろそかになる。つまり、サーゼクスもアジュカも仮面の男の分身を無視するしかない。どう考えても、仮面の男の分身やそれを狙っての同士討ちよりも、二天龍のブレスの方が大量に死ぬ。
　そう、この期に及んで、仮面の男は嫌がらせに徹しているだけなのだ。大量に人が死ぬ嫌がらせを、もっと大量に人が死ぬドラゴンのブレスの援護として。
「見捨てろ、サーゼクス。元より、最初からそのつもりだったはずだ」
　滅びの魔力でできた体が、小刻みに震えていた。確かにこのままではもっと大勢が死ぬ。極めて予定通りに。しかし、実際にそうなって、平静を保てという方が無理だ。

「冷静になれ、覚悟は皆出来ている筈だ」
「【じじいは…決して逆上するなと言った……しかし……それは…無理ってもんだッ！　こんなことを見せられて頭に来ねえヤツはいねぇッ！】ってか？」
　仮面の男の幻影が、サーゼクスの前に出現した。
「怒っちゃだめだぜ、サーゼクス陛下。さあ、痛みに耐えるんだ。これは試練、新しい時代に進むための試練なんだ！　さあ、忍ぶんだ。君は確かに眷属を失ったが、すべてを失ったわけじゃない【失ったものばかり数えるな!!　無いものは無い!!　確認せい!!　お前にまだ残っているのもは何じゃ!!!】まだまだ、沢山失うんだぞ？　楽しい時間はまだ始まったばかりだ！」
　無言で、或いは言葉を発する理性も失って、サーゼクスは仮面の男の幻影を殴った。滅びの魔力の塊が放った拳、その威力は当然仮面の男の幻影を跡形もなく滅ぼしつくした。
　その上で、大暴れを続けているドライグの、その頭部に高速の滅びの魔力を放った。
　確かに仮面の男の空間系能力は多彩であるし、不可視の分身もサーゼクスには認識できない。しかしアジュカが本体であると保証したドライグの頭部の仮面の男は本物である。加えて、ドライグと仮面の男を覆う威装・須佐能乎の装甲も流石にドライグの鱗ほど硬くはない。
　つまり、当たれば死ぬ。
　仮面の男の空間系能力の壁よりも、サーゼクスの滅びの魔力の方が強いのは何度も確かめた事実だ。

「天手力」

　だから、仮面の男は受けなかった。なんのこともない、空間系能力の本来の使い方は壁を作るとかではない。距離を操ることだ。
　サーゼクスの放った滅びの魔力を防ぐことができず、その滅びの魔力だけを移動させることもできないならば、自分たちだけを移動させ

てしまえばいいだけの話だ。
ドライグから譲渡されて力を増している仮面の男は、瞬時に数体の悪魔と己たちの場所を入れ替えた。
ドライグ、仮面の男、レオナルド、ヴァレリー。彼らの居た広大な空間には、通常状態のサーゼクスと同じ、真紅の髪をした老齢の悪魔達が現れていた。
それを見たサーゼクスは、何とか滅びの魔力を静止させる。不用意に周囲のモノを滅ぼすことを嫌ったサーゼクスが、コントロールに才能の多くを費やしたが故の、高精度の離れ業だった。
「サーゼクスッ！」
殺さずに済んだ。そう安堵したサーゼクスの体に、何かがぶつかった、気がした。
今しがたドライグ達の居た場所に転移してしまったグレモリーの先祖たち、彼らとはまた別のグレモリーの血族が彼の体に衝突して、サーゼクスの体によって滅ぼされて絶命していた。
アジュカが叫んだのはその予兆を感じたからであり、当然間に合わなかった。
本気を出したサーゼクスの体は、触れるだけですべてを滅ぼす危険な姿。不用意に触れてしまえば、サーゼクスさえ意識せずに大切な人さえ滅ぼしてしまう。
そして、それを彼が認識した一瞬のうちに、サーゼクスが攻撃しかけていたグレモリーの先祖たちが『ついさっきまでそこにいたドライグ達』を狙っていた攻撃を受けて跡形も残らず吹き飛ばされていた。
サーゼクスは確かに放った魔力を御せたが、誰もが皆それをできたわけではない。その余裕があったわけでもない。
「サーゼクスッ！」
呆然としていたサーゼクスに、アジュカは更に叱咤する。そう、ドライグ達はさっきまでいた場所から既に場所を入れ替えていたのだから。
つまり、ありていに言ってサーゼクスとアジュカはドライグに背後を取られていた。

「よそ見とは余裕だな」

サーゼクスの滅びの魔力でできた肉体、それさえも燃やし尽くすであろうドライグのブレス。それが彼に直撃していた。

「同感だ！」

また、アジュカとサーゼクスがもたついている間に、アルビオンもまた大暴れをしていた。

どんどんどんどん、数が減っていく。投入された兵力は想定通りに消費されていく。

それが予定通りだったとしても、サーゼクスが耐えられるわけもない。

心のどこかで、何とかなるかもしれない。そう思っていたサーゼクスは、現実とドライグの炎に焼かれていた。

「いやあ、頼もしい仲間がいっぱいでうらやましいな。さあ、どんどん燃やそうぜ」

そして、仮面の男も目の前の光景に中てられていた。

こうなってしかるべきだという、現実に。

輪の力。というものはあるのか。ある、としか言えなかった。

グレイフィア・ルキフグスは、それを認めざるを得なかった。目の前の光景は、正にそれだった。圧倒的に総力で勝っているはずの三勢力の連合軍は、圧倒的に数で劣っているはずの仮面の男の面々に後れを取っていた。

それは、彼らにこそ輪の力が存在し、三陣営にそれがないことを示していた。『数』など無意味とばかりに行われている蹂躙劇は、いっそ滑稽なほどに圧倒的だった。

冥界最強であるはずのサーゼクスの眷属は何もできぬままに引き裂かれ、燃やされ、蹴散らされ、殺されていく。仮に自分があの場にいても、サーゼクスを挑発する材料にしかならなかっただろう。

なぜこうなっているのか？　理由は多々あるが単純な話だ。三陣営はそもそも、この状況に対応できていない。想定していないし、対応もできていない。

瞬間移動を繰り返す、一撃で軍勢を燃やし尽くす相手と戦うことを想定しておらず、且つそもそもこの数で戦うことを前提としていないのだ。

「指揮系統、ないもんねぇ……」

と、ファルビウムは目の前の光景を酷薄に切り捨てていた。

「サーゼクスは勘違いをしていたよ。軍隊の解体なんかするからこうなるんだ……彼は努力を称賛するくせに、非常時への対処を怠りに怠っていたからね……」

「かつての、先代ルシファーの時代ならばここまで劣勢ではありませんでしたか？」

「……それは無意味な仮定だけど、まあ、そうだね。ただ強い奴をそろえただけの即席の軍隊じゃあ軍隊になりえない。軍隊に必要なのは個性を切り捨てた画一化と完成された秩序だ。彼はそれをあまり好

んでいなかったけど、そうじゃなきゃ意味がないんだよ……」

仮に、数百人の素人に棒を持たせて戦わせたとしよう。とりあえず大声を出して、目標に向かって突撃させたとしよう。それなりに、成果はある。或いは計算された陣地に、簡単に使える様になる武器を渡した女子供を配置する。まあ、それなりには戦えるだろう。

だが、崩れると脆い。訓練を積んでいない、或いは十分ではない兵隊は、崩れだすと一気に壊乱する。皆が武器を放り出して逃げる、とまではいかなくとも、何をしていいのかわからずにパニックを起こすのだ。

「確かに、軍隊の維持には費用が発生する。国軍を作るにしても、権力が集中していない今のままでは派閥が生まれ、まとまった行動はとれないだろう。そもそも、戦力になるモノが貴族出身者ばかりでは、まとまった数をそろえることができない」

常備軍の維持。それはとても国家に負担をかける。

普段はただ訓練をしているばかりで、国家に対して直接的な利益を与えるわけではなく、むしろ多くの損害を与える。また、単純に武力が生まれることで、サーゼクス達が実際にやったようにクーデターの懸念も生まれる。

だが、それでも多くの国では常備軍が存在している。なぜか。

そうしないと、よその国から攻め込まれて、そのまま壊滅するからである。

今まさに、三陣営がそうであるように。

「レーティングゲームなんて、子供だましだよね。隣の仲間が死んでも、それでも戦うの軍隊だ。昨日まで同じ釜の飯を食って、少し前まで一緒に頑張ってきて、そんな戦友があっさり死ぬのが戦場だ。サーゼクスは、その辺りがわかっていない。いや、分かろうとしていなかった」

実際に、仲間が目の前で死ぬ。そのことに耐えきれず、暴走することだってあるだろう。たとえ訓練をしていたとしても、雄々しく叫んで突撃することだってある。その結果、自分を含めてもっとたくさん死ぬ。そして、軍隊が負けて、国家は壊滅する。

まさに、今目の前ので行われているように。
兵士として求められる人材は無能な怠け者。自分では何も考えず、ただ上から命じられるままに動きそのまま死ぬ。間違っても、大声で叫んで周囲に当たり散らしたり、命令を無視するような者ではない。
言い方は悪いが、軍隊ではそうした強い輪の力をもつ者は邪魔でしかない。
「まあ、仕方がない。仕方がないから仕方がない。で、こうなる。うんうん、まあ、こうなるよね」
先代ルシファーの時代に、悪魔の駒はなかった。超越者である二人も、神器もなかった。だが、魔王ルシファーという絶対的な統治者が存在し、且つ彼に従う多くの上級悪魔が多数存在していた。
なによりも、三陣営は殺し合い研究しあい、練度が高かった。軍隊が存在していた。
軍隊の強み、あるいは集団の強みは、単純に組織の目的を複数の個人が共有して成果の為に分担ができるということである。
トップが全体の勝利のために思考を巡らせ、適切な指示を出す。それを受け取った将官がそれを下へ下へと命じていき……末端の兵士はその意思通りに動かなければならない。
だが、今この戦場にそれはあるのだろうか。各々が個々の判断で勝手に動いているだけだ。それはつまり、皆が自分の都合しか考えずに好き勝手に動いているだけだ。それでは戦争などできるわけもない。
隣で親が死のうが、後ろで兄弟が倒れていようが、見捨てて進まなければならない。なぜならば、戦場とは死ぬのが当たり前だからだ。それに慣れなければ、慣れていなければ戦えない。
その為に、多くの訓練を積む。その為に、実戦経験を積む。戦力に被害が出ないように戦うのは当たり前だが、どう気を使ったところで戦力が減るのも当たり前なのだ。
完成された軍隊とは、誰が死んでも指揮系統が混乱しない軍隊を言うのである。
「ただでさえクーデター政権だったというのに、新魔王派内部でさえ序列を作って自分に権力を集め、国軍というくくりに多くの悪魔を割

く。嫌だったんだろうね……まあ、暴君にならずとも独裁者だ」

それは、彼の好まないところだろう。皮肉にも、彼には独裁政権を持たずとも国家を運営できるだけの力があった。故に、独裁制を布かずとも彼は魔王として長年君臨できたのである。

「そりゃそうだよね、自分の先祖であるバアルのおじいちゃんとケンカしてまで魔王に権力を集中させたくはないし、既存の悪魔の貴族の枠組みを壊してまで、平等な社会制度を作ろうとも思わなかった。まあ、それなりにメリットはあった。ただ、リスクもあった。その結果がこれだ……」

「懐かしい、光景です」

自分の家族、自分の仲間、自分の親戚、自分の友人。それらすべてを裏切って、彼女は旧魔王派の出身ながら『ここ』にいる。

その意味では、この結末もふさわしいモノなのだろう。

恋に狂って全てを裏切った女と、それを受け入れた男を美談として扱う国には、ふさわしい結末。或いは相応の末路なのだろう。

今日まで幸せだったことが間違いなのであり、これから訪れるろくでもない未来こそが彼女にはふさわしい。その息子にも、因果は巡ってきた。それが悲しいだけで。

そして、もっと言えば。これは旧魔王派が長年味わい続けてきた辛酸、あるいは彼女たちの神話が蹴散らしてきた他の神話が味わってきた苦しみの入り口に過ぎない。

要するに、勝者であるがゆえに他者へ押し付けてきたものが、負けるので回ってくるというだけで。

「ミリキャス……許してください。私は、これを責める資格がありません」

「……馬鹿馬鹿しい」

ドライグの頭部に座る、或いはへたり込んでいるヴァレリーとレオナルドは、仮面の男の背中だけを見ていた。

戦闘中のドライグは、当然頭を目まぐるしく動かしている。にもかかわらず、三人は全く揺れを感じていなかった。おそらく、仮面の男が絶霧を用いていろいろしているのだろう。

「そりゃあ、まあ、こうなるだろうさ」

仮面の男の目の前には、凄惨な光景が浮かび上がっている。

鮮明で精彩で、鮮血と戦火に満ちた世界だった。こうなるとわかり切っている、卵を落としたら割れたような話だった。

こんな虐殺の、何が楽しいのか。仮面の男には全く理解できない。

アリの巣穴に熱湯を注ぐような、努力をしたという達成感さえ得られないモノだった。

「瞬間移動を繰り返して、一撃で体を吹き飛ばしてくる相手。そんなのを相手にするなんて、事前に想定できるわけもないし、する意味もない。歩兵に爆撃機の相手をさせる様なものだ。まさか竹槍で爆撃機を撃墜させるつもりだったのか。まあ、悪魔ならできるだろうが……そういう揚げ足取りをしても仕方がない。ＮＡＲＵＴＯでも最終決戦では一般の上忍は棒立ちするぐらいしか役柄もなかったし、回ってきた仕事も無理やり作ったようなものだしな。ま、作者が無理やり結束の力を演出するためにそういう状況を作らない限り、役に立つわけがない。そもそも主人公が際限なく強くなっていく漫画では当然だ。読者はそういう展開を好むし、作者だって一旦パターン化すればそれを崩したがらないからな。ただ、それが作中で主人公が語る理想と矛盾すれば、展開でごまかすしかなくなる。世の中才能が全て、前節の武器を持っている奴が強い、偶々偶然凄いものに選ばれないと無理、周りの皆も努力しているけど俺が一番必死だから俺が勝つ……そんなことを真面目に言い切って読者から人気が出るのか？　というか、編集はＯＫを出すのか？　それは一般受けしてメディアミックスとかが望めるのか？　ゴールデンタイムにアニメ化できるのか？　そんな主人公が活躍する漫画の展開を考え続けることはできるのか？　無理とは言わないさ、まあ、できる作者はできる。ただ、それは王道ではないし、難易度も高い。できる作者は尊敬するが、万人にそれを期待することは酷が過ぎる。ただ……やっぱり矛盾する。

みんなの力が必要だと言っても、インフレが進むということは『他よりも優れ続ける』ことを意味しているし、『他が役に立たなくなっていく』ことになる。努力を美化しようにも、努力をリアルに描いてもそれは結局他の面々と合わせたら意味がない。他が努力していないなら、敵としては魅力がないからな。ただ……どうなんだろうな、主人公はそこまで考えているのかな？　人間から悪魔に生まれ変わって、そこから上級悪魔に多くの課題を命じられ、その最中で出世のために実績を積み重ねて、実力を得るために努力に専念する暇なんて無くて、それでようやく中級悪魔試験に望んだら……主人公君にあっさり蹴散らされる他の受験生の悲哀を。そして、ぬくぬくと親元で過ごし、学校に通い、テスト勉強をして、女の子とイチャイチャして、女の子にセクハラしたらパワーアップして……出世の秘訣を聞かれたら『伝説の化け物と戦って勝つこと』だそうだ……そりゃあまあ、そんな主人公を下級悪魔にしとくのは設定的にも無理があるし、そりゃあ出世ぐらいさせてやらないと示しも付かない。でも、それって努力とか友情とか関係ないだろ。勝利だけだろ」

寂しそうに、仮面の男はそうつぶやいていた。独白していた。或いは二人に、もしくは二頭にそう言っていた。

分かり切っていたことだ。自らの持つ多くの能力は、結局のところこうやって使うのが一番利率がいい。

空間跳躍能力も、幻覚や洗脳も、こうやって使うのが一番いい。

仲間割れを誘い、結束を乱し、混沌を生み出し……内部から破壊していく。

何とも便利で、何とも卑怯で、何とも効率的だった。

「【やはりこの旅は単なるセンチメンタルジャーニーなどではなかった。見えてきた旅の目的、企画者の意図。そうか、３０年の年月を幻影の彼方に押し込め、敗北を糊塗しようとする貪婪なる虚妄。お前は敗北を認めない、混沌を認めない。自らが作った律と法の中に全てを押し込め更なる支配と継続を望んでいる。神と名乗って。だが未だ嘗て真の神は名乗った事など無いのだ。神は欲しない。神は示さない。神は語らない。たとえそれが〝愛〟であっても。いいだろう。

旅の終着点は近いらしい。そこにどんな邪悪な罠が潜んでいようとも乗り合わせた舟を降りる奴はいない。だが心せよ。お前が相手にするのはカオスを体現するあの男、キリコ・キュービィなのだ!!」

突如、天才役者が大根役者を演じる。

それは道化師の有様、笑われ、蔑まれ、憐れまれる苦行の姿。

さあ、笑え、笑え、笑え。

こうすれば満足なのだろう、天の意思よ。こうすれば満足なのだろう、こうやれば満たされるのだろう、こうすれば暇が潰れるのだろう。

「【死にかけた神が呼んでいる。全宇宙を敵にしても、我が元に来るべし。我は与えん、無限なる力を。我は伝えん、三千年の愉悦を。神なる者の壮大なる誘惑、人たる者の壮絶なる決意。今、クエントに最後の戦いが始まる。全てを得るか、地獄に堕ちるか】」

ちがう、ちがう、ちがう!

違うのだ、違うのだ、違うのだ!

違いすぎる、違いすぎる、違いすぎる!

「……全部、自分が悪い。もしも、自分の頭上に操り人形の糸が存在し、全能なる転生神がそれを手繰っていたとしても。それでも、馬鹿な自分は糸を確かめようとしなかった。仰ぎ見ようとは思わなかった。進行方向だって確認していなかった。ただ、努力している自分を慰めようと、自分に酔いしれて全てを自分から捨てただけだ……であれば、自分が目指した場所はここでなければならない。相手が誰だったとしても、自分が目指した場所はここだったということになる。只の、テロリスト、いや、それ以下だな……主義もなく、主張もなく、衝動ですらない。ただの癇癪に周囲を巻き込んで……踏み台転生者だな……早く、オリ主に退治してほしいもんだ……全く」

こみあげてくる何か、その名前を彼は知っている。知っているからこそ、それを認めることはできない。

「自分は、こんなことがしたかったのか」

既に、此処に立つ彼はかつての、そうかつての主人公にあこがれていただけの少年ではないのだから。

「それとも、これをする相手が禍の団だけだったら違ったのか」

ここで投げ出すことはできない。それは、彼の悪として生きることを選んだが故の信念に反する。

「政府へのテロは悪い暴力、テロへの攻撃は正義の制裁なのか」

悪として生きると、享楽に殉ずると決めたのだ。今は湿るべきではない、熱狂しなければならない。己の悪事が万事順調の折、後悔に浸る。そんな悪など存在してはならないし、少なくとも自らにそれを許してはならない。

「ふぅ」

一息、仮面の男は眼を閉じた。そして、その上で覇気を発しながら足元のドライグとアルビオン、それからレグルスに叫ぶ。

ここからである。まだ、地獄の蓋に手をかけただけ。ここから蓋を開いて彼らを放り込まなければならない。彼らもそれを望んで此処にいるはずだ。

「ドライグ、アルビオン、レグルス！　ここからギアを上げる！　より相手の尊厳を蹂躙する！　それはお前達野生の獣ですら行わない、悪戯を凌駕する罪悪だ！　人格を、人生を、真実を蹂躙する！　まだ、まだ足りない！　自分の中の悪は決して屈さない！　もっと、もっとだ！　想像の及ぶ限り、現実へと創造する！」

その言葉に、三頭の怪物は応じる。

決して、彼の信頼を裏切らぬとばかりに、誇りを込めて三頭は咆哮する。

彼らを前にした軍勢は、再びひるんだ。単純な巨体に、単純な力。単純な暴力に、単純な強靭さ。

使命感も覚悟も、この規格外の化け物の前には無力。

唯一抗しうる二人の超越者も、先ほどの直撃から体勢を整えていない。

誰かが命じてくれれば、その命令に従うことで恐怖を塗りつぶせる、ごまかせる、抗うことができる。しかし、彼らはそれがない。

仲間との連携に練度を必要とするならば、絆を深めて緻密な連携が

可能になるならば。
軍隊として機能するためにも、当然の如く訓練は必要となる。
散発的な抵抗など、天龍の鱗の前には無力である。
一人の老いた悪魔が、歯を食いしばる。先日まで死んだように生きてきた体に、活を入れる。まだ、自分は死んでいない。まだ、自分にはできることがある。
勝機がないことなど最初から分かっていた。自分の実力など最初から分かり切っている。誰かの様に歴史に名を刻むことはできない。それでも自分には人生があった。だからこそ最後まで通すべきものがある。
そう、自分には……！

「『別天神』！」

その、老人の前に霧がかかる。そこには小さな穴が開き、その向こうには怨敵の瞳が浮かんでいた。
あるいは、その穴を通じて彼を攻撃できたかもしれない。この老人が、魔王クラスの実力を備えていたならばはじけたかもしれない。もしくは、精神攻撃に対する高い耐性を与えるナニカがあれば、まだ望みはあったのかもしれない。
しかし、老人は使命感に燃え上がった。
そう、まだ自分にはできることがある。
この戦場にいるモノは、死ぬためにここにいる。そして、自分たちは死ななければならない。この戦場にいない領民や子孫のために。
であるならば！
〝自分の周りの悪魔を攻撃しろ！〟
そう、周囲の味方を攻撃しなければならない！
「なんだ、どうした?!」
老いた悪魔の周辺で、困惑の声が上がる。
「なんたることだ、三つ目め……！　姿を偽って我等悪魔を攻撃し始めたぞ！」

アジュカが見切ったことを、他の誰かも論理的に、或いは説明はできないモノの納得して対処を始めていた。

よくわからないが、相手には一方的にこちらを攻撃してくる能力がある。

なれば、無視するしかない。この分身の攻撃は、いずれも大規模な破壊を伴うものではない。要するに、ドラゴンのブレスを防がせないためのかく乱だ。

であれば、少々の被害は、殺戮は、もう無視するしかない。

そう思い始めた矢先だった。悪魔が、他の悪魔を殺していた。洗脳されているのかと思い攻撃したところ、その悪魔は姿を消した。幻覚である。

つまりは、彼は先ほどまで己自身の姿を模した幻覚を周囲にはなっていたが、今は自分以外の悪魔や堕天使を模しているのだ。

仲間同士で攻撃しあい、更に混乱を深めようとしてくる仮面の男の卑劣極まる作戦。そんなものに引っかかるほど上級悪魔は愚かではない。事前にそういう能力があると知っていればなおさらに、見え透いた作戦に引っかかるわけがない。

ただ、それは相手も分かっているということだった。

「落ち着け！　これは先ほどまでの分身と変わらない！　我らはただ……！」

「ああ、悪魔を殺せばいいのだ」

比較的冷静な悪魔が、背中から魔力で攻撃された。

衆目を集め、冷静になるように指示していた悪魔だけに、皆が驚愕と共に攻撃した悪魔を見た。

彼は、今自分が攻撃した悪魔の親戚筋に当たる男のはずだった。

幻影のはずだ、とは思いながらも反射的に攻撃してしまう。そして、それは命中しその悪魔を倒した。

もしも、これが仮面の男の変装ならばどれだけいいか。

楽観しようと努めながらも、誰もがそれを理解していた。そう、今の魔力攻撃は、彼が得意としていたモノなのだから。

「おのれ……ここにきて、洗脳を始めたか！」

虚があり、実がある。虚がある故に実が生き、実がある故に虚は意味を持つ。

彼らは理解するのだ、味方に化けた敵と敵に操られた味方。それに合わせて規格外の二天龍と闘わなければならないのだと。

そんなこと、できるわけがない。

「戦え、戦わせろ！　これが戦いであるものか！」